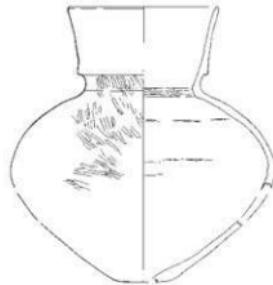


開辟大滝遺跡  
五社遺跡  
五社条里遺跡  
水牧遺跡  
下川原遺跡

発掘調査報告

－北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅲ－



2012年

財団法人富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所



# 序

北陸新幹線は、日本海沿いに上越市、富山市、金沢市、福井市等の主要都市を経由し、東京と大阪を結ぶ路線として計画され、現在、金沢市までの建設が進められています。その建設に先立ち、当事務所では、平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平成18年度、平成19年度、平成21年度に調査を実施した開辟大滝遺跡、五社遺跡、五社条里遺跡、水牧遺跡、下川原遺跡の成果をまとめたものです。

この五遺跡は、小矢部川右岸の扇状地扇端部から左岸の丘陵裾部にかけて、小矢部市を横断するように点在しています。発掘調査の結果、弥生時代から近世に至る時代の生活の様子が明らかになりました。五社遺跡では飛鳥時代の掘立柱建物や竪穴建物などの集落跡がみつかりました。また、水牧遺跡では7世紀後半にさかのほる竪穴建物がみつかり、この頃には、水牧地区に人々が住んでいたことがわかりました。丘陵裾部の下川原遺跡では弥生時代と古代の建物が確認されました。

こうした発掘調査の成果が、文字の記録として現れるこのない人々の生活をひもとく一助となり、地域の歴史と文化財の理解に役立てば幸いです。

本書をまとめるにあたり、ご協力とご指導を頂きました関係機関および関係諸氏に厚く感謝申し上げます。

平成24年2月

財団法人富山県文化振興財團  
埋蔵文化財調査事務所  
所長 岸本雅敏

# 例　言

- 1 本書は富山県小矢部市五社地内に所在する開跡大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡、同水牧地内に所在する水牧遺跡、同野端地内に所在する下川原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構からの委託を受けて、財團法人富山県文化振興財団が行った。
- 3 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間	開跡大滝遺跡　平成21(2009)年7月14日～9月17日
	五社遺跡　平成21(2009)年7月7日～11月20日
	五社条里遺跡　平成21(2009)年4月27日～6月23日
	水牧遺跡　平成21(2009)年6月3日～9月4日
	下川原遺跡　平成18(2006)年5月24日～8月4日
	平成19(2007)年10月1日～10月31日
整理期間	平成22(2010)年4月1日～平成24(2012)年2月10日
- 4 本書の編集は島田亮仁が担当し、本文執筆は青山晃・島田亮仁・細辻真澄が担当した。執筆分担は文末に記した。
- 5 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)  
小矢部市教育委員会、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター

# 凡 例

- 1 本文・挿図で扱った遺構・遺物は、一覧に掲載している。
- 2 本書で示す方位は全て真北である。
- 3 挿図の縮尺は下記を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。  
遺構 建物：1/100、竪穴建物：1/40・1/80、溝：1/40、土坑：1/40  
遺物 土器・陶磁器：1/4・1/8、木製品：1/3・1/4・1/8、石製品：1/2・1/3、金属製品：1/1～1/3、  
土製品：1/3～1/4
- 4 遺構の略号は以下のとおりである。  
S B：掘立柱建物 S I：竪穴建物 S K：土坑 S P：柱穴  
S D：溝・自然流路 S X：その他
- 5 遺構番号は、調査時の番号とは別に、報告書に収録した遺構のみに付け直した。  
遺跡毎、遺構の種類別に遺構番号を付けている。
- 6 遺物番号は、遺跡毎、種類毎に付けている。  
本文・挿図・一覧表・写真図版の遺物番号は全て一致する。
- 7 遺跡の略号は、市町村番号に遺跡名を統合、開館大滝遺跡は「09KO」、五社遺跡は「09G  
-地区名」、五社条里遺跡は「09GJ」、水牧遺跡は「09M-地区名」、下川原遺跡は「09  
SG-地区名」とし、遺物の注記には略号を用いた。
- 8 本書に記載される図面・記述の凡例については、必要に応じてその都度、本文中に示した。
- 9 土層・遺構埋土の色については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研  
究所色票監修『新版標準土色帖』を参照した。
- 10 遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下の文献を参考にした。  
掘立柱建物：奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』
- 11 遺物のうち、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲、輸入陶磁器、瀬戸美濃、中世土師器に関する用  
語は以下の文献を参考にした。  
弥生土器：岡本淳一郎 2006『砺波平野北部の古墳出現期土器』『下老子笠川遺跡発掘調査報告  
-能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告V-』財團法人富山県文化振興財團  
須恵器・土師器：田辺昭三 1966『陶邑古窯址群I』平安学園考古クラブ研究論集第10号  
田嶋明人 1988『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム 北陸の古代土器研  
究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会  
珠洲：吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館  
輸入陶磁器：山本信夫 2000『太宰府市の文化財第49集 太宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』  
太宰府市教育委員会  
上田秀夫 1982『14～16世紀の青磁碗の型式分類について』『貿易陶磁研究No.2』  
日本貿易陶磁研究会  
瀬戸美濃：藤澤良祐他 2005『施釉陶器生産技術の伝播』『全国シンポジウム 中世窯業の様相  
-生産技術の展開と編年』中央大学文学部日本史学研究会  
中世土師器：越前慎子 1996『梅原胡麻堂遺跡出土中世土師皿の編年』『梅原胡麻堂遺跡発掘調  
査報告-東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告II-』財團法人富山県文  
化振興財團  
伊万里：大橋康二 1988『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社

12 遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。

- ①遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
- ②遺構の規模・法量はm単位で、遺物の規模・法量はcm単位でそれぞれ示す。( )内は現存する規模・法量を示す。
- ③重量はg単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。
- ④胎土色調・釉色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』・財団法人日本規格協会「標準色票 光沢版」を使用し、釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお、陶磁器のうち複数の色がみられる場合は最も多く使用されている色を記し、その他は特記事項に記す。
- ⑤出土地点の層位は調査時のものとし、層序の項で統一したもの旧称を用いた。

# 目 次

第Ⅰ章 調査の経過 .....	1
1 調査に至る経緯 .....	1
3 整理作業の経過と方法 .....	7
2 発掘作業の経過と方法 .....	4
4 普及活動 .....	8
第Ⅱ章 位置と環境 .....	9
1 地理的環境 .....	9
2 歴史的環境 .....	9
第Ⅲ章 開跡大滝遺跡 .....	15
1 概要 .....	15
3 造構 .....	16
5 総括 .....	17
2 層序 .....	15
4 遺物 .....	17
第Ⅳ章 五社遺跡 .....	24
1 概要 .....	24
3 造構 .....	26
5 総括 .....	36
2 層序 .....	24
4 遺物 .....	32
第Ⅴ章 五社条里遺跡 .....	71
1 概要 .....	71
3 造構 .....	72
5 総括 .....	78
2 層序 .....	71
4 遺物 .....	77
第Ⅵ章 水牧遺跡 .....	88
1 概要 .....	88
3 造構 .....	89
5 総括 .....	98
2 層序 .....	88
4 遺物 .....	94
第Ⅶ章 下川原遺跡 .....	124
1 概要 .....	124
3 造構 .....	124
5 総括 .....	136
2 層序 .....	124
4 遺物 .....	128
第Ⅷ章 自然科学分析 .....	172
1 下川原遺跡・五社遺跡における放射性炭素年代 (AMS) .....	173
2 下川原遺跡出土須恵器の産地問題 .....	176
3 水牧遺跡出土須恵器の産地問題 .....	179
4 開跡大滝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡出土木製品の樹種同定 .....	181
5 五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡出土石製造物の石材鑑定 .....	186
6 開跡大滝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡出土漆器の塗膜分析 .....	190
7 五社遺跡における自然科学分析 .....	195
8 五社条里遺跡における自然科学分析 .....	213
9 水牧遺跡における自然科学分析 .....	220

## 挿図目次

- 第1図 調査位置図  
第2図 北陸新幹線関連埋蔵文化財位置図  
第3図 開墾大淹遺跡発掘調査位置図  
第4図 五社遺跡・五社条里遺跡発掘調査位置図  
第5図 開墾大淹遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡  
　　調査区区割図  
第6図 水牧遺跡・下川原遺跡調査区区割図  
第7図 地形図  
第8図 周辺の遺跡  
第9図 開墾大淹遺跡層序模式図  
第10図 開墾大淹遺跡主要遺構全体図  
第11図 開墾大淹遺跡 中近世遺構全体図(1)  
第12図 開墾大淹遺跡 中近世遺構全体図(2)  
第13図 開墾大淹遺跡 中近世遺構実測図  
　　SK1 SK2 SD1～SD3  
第14図 開墾大淹遺跡 中近世遺構実測図 SD4  
第15図 開墾大淹遺跡 遺物実測図  
　　(土器・陶磁器・木製品)  
　　SD1 SD3 SD4 包含層  
第16図 五社遺跡層序模式図  
第17図 五社遺跡飛鳥時代の建物配置図  
第18図 五社遺跡主要遺構変遷図  
第19図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構全体図(1)  
第20図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構全体図(2)  
第21図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図 SB1  
第22図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図 SB2  
第23図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図 SB3  
第24図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図 SI1  
第25図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図  
　　SK1～SK12  
第26図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図  
　　SK13～SK21 SD1  
第27図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図  
　　SX1 SX2  
第28図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図  
　　土器群  
第29図 五社遺跡 平安時代遺構全体図  
第30図 五社遺跡 平安時代遺構実測図  
　　SK22～SK33 SD2～SD4  
第31図 五社遺跡 平安時代遺構実測図  
　　SD2 遺物出土状況  
第32図 五社遺跡 中近世遺構全体図(1)  
第33図 五社遺跡 中近世遺構全体図(2)  
第34図 五社遺跡 中近世遺構全体図(3)  
第35図 五社遺跡 中近世遺構実測図 SD5  
第36図 五社遺跡 中近世遺構実測図 SD6～SD9  
第37図 五社遺跡 遺物実測図(土器・土製品) SI1  
第38図 五社遺跡 遺物実測図(土器)  
　　SK7 SK8 SK9 SK14 SK18  
　　SK19 SK20 SK21  
第39図 五社遺跡 遺物実測図(土器)  
　　SX1 土器群 包含層  
第40図 五社遺跡 遺物実測図(土器・土製品)  
　　SK22 SK30 SK33 SD2 包含層  
第41図 五社遺跡 遺物実測図  
　　(土器・陶磁器・土製品) SD6 包含層  
第42図 五社遺跡 遺物実測図(木製品)  
　　SD5 SD6 SD9 包含層  
第43図 五社遺跡 遺物実測図(石製品・金属製品)  
　　SI1 SD2 包含層  
第44図 五社条里遺跡層序模式図  
第45図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(1)  
第46図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(2)  
第47図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(3)  
第48図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(4)  
第49図 五社条里遺跡 近世遺構実測図  
　　SK1～SK4 SD1～SD8  
第50図 五社条里遺跡 近世遺構実測図  
　　SD9～SD46  
第51図 五社条里遺跡 遺物実測図  
　　(土器・陶磁器・石製品・金属製品)  
　　SK3 SD5 SD13 SD24 SD46 包含層  
第52図 水牧遺跡層序模式図  
第53図 水牧遺跡古代建物変遷図

第54図	水牧遺跡	古代遺構全体図(1)	S D 4 ~ S D 10
第55図	水牧遺跡	古代遺構全体図(2)	第82図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) S I 1
第56図	水牧遺跡	古代遺構全体図(3)	第83図 下川原遺跡 遺物実測図(土器・土製品)
第57図	水牧遺跡	古代遺構実測図 S I 1 S I 2	S K 4 S K 5 S D 3 包含層
第58図	水牧遺跡	古代遺構実測図 S I 3 S I 4	第84図 下川原遺跡 遺物実測図(土器・土製品)
第59図	水牧遺跡	古代遺構実測図 S I 5 S K 1 ~ S K 8 S D 1 ~ S D 5	包含層
第60図	水牧遺跡	中近世遺構全体図(1)	第85図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第61図	水牧遺跡	中近世遺構全体図(2)	第86図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第62図	水牧遺跡	中近世遺構全体図(3)	第87図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第63図	水牧遺跡	中近世遺構全体図(4)	第88図 下川原遺跡 遺物実測図(土器・土製品)
第64図	水牧遺跡	中近世遺構実測図 S K 9 ~ S K 15 S D 6 ~ S D 9	包含層
第65図	水牧遺跡	中近世遺構実測図 S D 10 ~ S D 20 S X 1	第89図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) S D 9 S D 10
第66図	水牧遺跡	遺物実測図(土器・土製品) S I 1 ~ S I 4	第90図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) S D 10
第67図	水牧遺跡	遺物実測図(土器・土製品) S I 5 S K 1 S K 4 S D 2 包含層	第91図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) S D 10
第68図	水牧遺跡	遺物実測図(土器) 包含層	第92図 下川原遺跡 遺物実測図(土器・土製品)
第69図	水牧遺跡	遺物実測図(土器・土製品) 包含層	S D 10 包含層
第70図	水牧遺跡	遺物実測図 (土器・陶磁器・木製品) S K 9 S K 10 S K 11 S K 12 S D 8 S D 11 S D 13 S D 14 S D 15 S D 16 S X 1 包含層	第93図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第71図	水牧遺跡	遺物実測図(木製品・石製品) S D 13 包含層	第94図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第72図	水牧遺跡	遺物実測図(石製品・金屬製品) S I 1 S D 13 S D 15 包含層	第95図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第73図	下川原遺跡	層序模式図	第96図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第74図	下川原遺跡	周辺遺跡	第97図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第75図	下川原遺跡B地区	弥生時代・古代時代遺構全体図	第98図 下川原遺跡 遺物実測図(土器) 包含層
第76図	下川原遺跡B地区	弥生時代遺構実測図 S I 1	第99図 下川原遺跡 遺物実測図(土器・土製品)
第77図	下川原遺跡B地区	弥生時代・古墳時代 遺構実測図 S K 1 ~ S K 7 S D 1 ~ S D 3	包含層
第78図	下川原遺跡A地区	古代遺構全体図(1)	第100図 下川原遺跡 遺物実測図(石製品) S D 9 S D 10 包含層
第79図	下川原遺跡A地区	古代遺構全体図(2)	第101図 下川原遺跡出土須恵器(6, 7世紀代)の両分布図
第80図	下川原遺跡A地区	古代遺構実測図 S B 1	第102図 下川原遺跡出土須恵器(8, 9世紀代)の両分布図
第81図	下川原遺跡A地区	古代遺構実測図	第103図 水牧遺跡出土須恵器の両分布図

## 写真図版目次

- 図版1 五社遺跡遠景 下川原遺跡B地区遠景
- 図版2 五社遺跡 S I I 出土遺物
- 図版3 航空写真
- 図版4 航空写真
- 図版5 開墾大淹遺跡（中世） 全景
- 図版6 開墾大淹遺跡（中世） 全景 溝  
S D 1 S D 3 S D 4
- 図版7 開墾大淹遺跡（中世）  
土器・陶磁器・木製品 S D 1 S D 3  
S D 4 包含層
- 図版8 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代）  
C地区遠景 C地区全景
- 図版9 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代） 建物群  
S B 1 S B 2 S I I
- 図版10 五社遺跡（飛鳥時代） 掘立柱建物 柱穴  
S B 1 S P 3 ~ 6
- 図版11 五社遺跡（飛鳥時代） 掘立柱建物 柱穴  
S B 2 S P 17 S P 18 S P 21 S P 22
- 図版12 五社遺跡（飛鳥時代）  
掘立柱建物 堪穴建物 S B 3 S I I
- 図版13 五社遺跡（飛鳥時代） 堪穴建物 S I I
- 図版14 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代）  
土坑 四地状遺構 環状溝遺構  
S K 14 S K 18 S K 19 S K 20  
S K 21 S X 1 S X 2
- 図版15 五社遺跡（平安時代） B地区遠景  
B地区全景 土坑 溝 S K 30 S D 2
- 図版16 五社遺跡（中世） A地区遠景  
自然流路 S D 5
- 図版17 五社遺跡（飛鳥時代） 土器  
S I I S K 8 S K 14
- 図版18 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代） 土器  
S K 18 ~ S K 21 土器群
- 図版19 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代・平安時代）  
土器・土製品 S I I S K 33 土器群 包含層
- 図版20 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代） 土器  
S K 7 S K 9 S X 1 土器群 包含層
- 図版21 五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代・平安時代）  
土器 S K 22 S K 30 S D 2 土器群 包含層
- 図版22 五社遺跡（平安時代） 土器・土製品  
S D 2
- 図版23 五社遺跡（平安時代） 土器 包含層
- 図版24 五社遺跡（平安時代） 土器・土製品 包含層
- 図版25 五社遺跡（中世） 土器・陶磁器・木製品  
S D 5 S D 6 包含層
- 図版26 五社遺跡（中世） 木製品  
S D 6 S D 9 包含層
- 図版27 五社遺跡（飛鳥時代～近世）  
石製品・金属製品 S I I S D 2 包含層
- 図版28 五社条里遺跡（近世） 遠景 全景  
溝群 溝 S D 9
- 図版29 五社条里遺跡（中世） 土器・陶磁器  
S K 3 S D 24 包含層
- 図版30 五社条里遺跡（中世） 石製品・金属製品  
S D 13 S D 46 包含層
- 図版31 水牧遺跡（古代・中世） A地区全景  
土坑 溝 S K 1 S D 1 S D 2 S D 8 ~ S D 12
- 図版32 水牧遺跡（古代・中世） B地区全景
- 図版33 水牧遺跡（古代） 堪穴建物 S I I S I 2
- 図版34 水牧遺跡（古代） 堪穴建物 S I 3
- 図版35 水牧遺跡（中世） 土坑 溝水溜め状遺構  
S K 9 S D 13 S D 14 S D 20 S X 1
- 図版36 水牧遺跡（古代・中世） C地区遠景  
C地区全景
- 図版37 水牧遺跡（古代） 堪穴建物 S I 4
- 図版38 水牧遺跡（古代） 堪穴建物 溝 S I 5 S D 5
- 図版39 水牧遺跡（中世） C地区東側ブロック土坑  
溝 S K 5 S D 16 ~ S D 19
- 図版40 水牧遺跡（古墳時代・古代・中世） 土器  
S I 4 S K 12 包含層
- 図版41 水牧遺跡（古代） 土器 S I 1 ~ S I 3
- 図版42 水牧遺跡（古代） 土器 S I 3 S I 4
- 図版43 水牧遺跡（古代） 土器・土製品  
S I 4 S I 5 S K 1

図版44	水牧遺跡（古墳時代・古代）	土器・土製品	国版66	下川原遺跡（古墳時代・古代）	土器 包含層
	S K 4	S D 2			
図版45	水牧遺跡（古代）	土器 包含層	国版67	下川原遺跡（古墳時代）	土器 包含層
図版46	水牧遺跡（古代）	土器 包含層	国版68	下川原遺跡（古墳時代）	土器 包含層
図版47	水牧遺跡（古代）	土器 包含層	国版69	下川原遺跡（弥生時代・古墳時代・古代）	
図版48	水牧遺跡（古代）	土器 包含層			土器・土製品 包含層
図版49	水牧遺跡（古代）	土器・土製品 包含層	国版70	下川原遺跡（古代）	土器 S D 9 S D 10 包含層
図版50	水牧遺跡（中近世）	土器・陶磁器 S K 11 S D 8 S D 11 S D 13~S D 15 S X 1 包含層	国版71	下川原遺跡（古代）	土器 包含層
図版51	水牧遺跡（中近世）	木製品 S K 9 S K 10 S D 13 S D 14 S D 16	国版72	下川原遺跡（古代）	土器 包含層
図版52	水牧遺跡（中近世）	木製品 包含層	国版73	下川原遺跡（古代）	土器 S D 9
図版53	水牧遺跡（古墳時代～近世）	石製品・金属製品 S I 1 S D 13 S D 15 包含層	国版74	下川原遺跡（古代）	土器 S D 10
図版54	水牧遺跡（中近世～近代）	金属製品 包含層	国版75	下川原遺跡（古墳時代・古代）	土器 S D 10
図版55	下川原遺跡（弥生時代・古墳時代） B地区遠景 B地区全景		国版76	下川原遺跡（古代）	土器 S D 10
図版56	下川原遺跡（弥生時代・古墳時代） 豊穴建物 土坑 溝 S I 1 S K 4 S D 1		国版77	下川原遺跡（古代）	土器 S D 10
図版57	下川原遺跡（古代） A地区遠景 A地区全景		国版78	下川原遺跡（古代）	土器・土製品 S D 10
図版58	下川原遺跡（古代） 据立柱建物 柱穴 自然流路 S B 1 S P 9 S D 9 S D 10		国版79	下川原遺跡（古代）	土器 包含層
図版59	下川原遺跡（弥生時代・古墳時代） 豊穴建物 S I 1 包含層		国版80	下川原遺跡（古代）	土器 包含層
図版60	下川原遺跡（古墳時代）	土器 包含層	国版81	下川原遺跡（古代）	土器 包含層
図版61	下川原遺跡（弥生時代）	土器 S I 1	国版82	下川原遺跡（古代）	土器 包含層
図版62	下川原遺跡（弥生時代）	土器・土製品 S I 1 S K 4 S K 5 S D 3	国版83	下川原遺跡（古墳時代）	土器 包含層
図版63	下川原遺跡（弥生時代）	土器 包含層	国版84	下川原遺跡（古墳時代）	土器 包含層
図版64	下川原遺跡（弥生時代）	土器 包含層	国版85	下川原遺跡（古墳時代・古代）	土器
図版65	下川原遺跡（弥生時代・古墳時代）	土器 包含層			包含層

## 表目次

- 第1表 既往の調査一覧  
第2表 調査体制・調査一覧  
第3表 整理体制一覧  
第4表 周辺遺跡一覧  
第5表 開薛大淹遺跡 中近世 土坑一覧  
第6表 開薛大淹遺跡 中近世 溝・自然流路一覧  
第7表 開薛大淹遺跡 土器・陶磁器一覧  
第8表 開薛大淹遺跡 木製品一覧  
第9表 五社遺跡 飛鳥時代 挖立柱建物一覧  
第10表 五社遺跡 飛鳥時代 堅穴建物一覧  
第11表 五社遺跡 飛鳥時代 柱穴一覧  
第12表 五社遺跡 古墳時代～古代 土坑一覧  
第13表 五社遺跡 飛鳥時代～中近世  
　　溝・自然流路一覧  
第14表 五社遺跡 古墳時代 その他の遺構  
第15表 五社遺跡  
　　土器・陶磁器・土製品一覧（1）～（2）  
第16表 五社遺跡 木製品一覧  
第17表 五社遺跡 石製品一覧  
第18表 五社遺跡 金属製品一覧  
第19表 五社条里遺跡 近世 土坑一覧  
第20表 五社条里遺跡 近世～近代 溝一覧  
第21表 五社条里遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧  
第22表 五社条里遺跡 石製品一覧  
第23表 五社条里遺跡 金属製品一覧  
第24表 水牧遺跡 古代 堅穴建物一覧  
第25表 水牧遺跡 古代～中近世 土坑一覧  
第26表 水牧遺跡 古代～中近世 溝・自然流路一覧  
第27表 水牧遺跡 中世 その他の遺構一覧  
第28表 水牧遺跡  
　　土器・陶磁器・土製品一覧（1）～（2）  
第29表 水牧遺跡 木製品一覧  
第30表 水牧遺跡 石製品一覧  
第31表 水牧遺跡 金属製品一覧  
第32表 下川原遺跡 古代 挖立柱建物一覧  
第33表 下川原遺跡 弥生時代 堅穴建物一覧  
第34表 下川原遺跡 弥生時代～古代 柱穴一覧  
第35表 下川原遺跡 弥生時代 土坑一覧  
第36表 下川原遺跡 弥生時代～古代  
　　溝・自然流路一覧  
第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧（1）～（4）  
第38表 下川原遺跡 石製品一覧  
第39表 自然科学分析一覧  
第40表 測定結果  
第41表 参考値  
第42表 下川原遺跡出土須恵器螢光X線分析データ  
第43表 水牧遺跡出土須恵器螢光X線分析データ  
第44表 遺跡別集計結果  
第45表 樹種同定結果一覧  
第46表 石製造物の石材鑑定結果  
第47表 器種毎の岩石種の集計表  
第48表 各漆器の塗膜分析試料とその詳細  
第49表 各塗膜試料の塗膜層の分析結果  
第50表 生漆の赤外吸収位置とその強度  
第51表 各漆器試料と塗膜分析結果  
第52表 五社遺跡分析試料一覧  
第53表 五社遺跡花粉分析結果（1）～（3）  
第54表 五社遺跡植物珪酸体含量（1）～（3）  
第55表 五社遺跡種実遺体分析結果  
第56表 五社遺跡リン酸分析結果  
第57表 五社条里遺跡花粉分析結果  
第58表 五社条里遺跡植物珪酸体含量（1）～（2）  
第59表 水牧遺跡花粉分析結果  
第60表 水牧遺跡植物珪酸体含量

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 1 調査に至る経緯

### (1) 調査の契機

北陸新幹線は、長野市から日本海沿いに上越市、富山市、金沢市、福井市等の主要都市を経由して、東京と大阪を結ぶ路線である。昭和48（1973）年に整備計画が決定し、全国新幹線鉄道整備法のもと建設工事が進められている。平成13（2001）年には上越・富山間が、平成17（2005）年には富山・金沢間及び福井駅部の建設工事がそれぞれ着工しており、平成26（2014）年度までの完成が予定されている。

北陸新幹線の富山県内における駅・ルートの概要は昭和60（1985）年に日本鉄道建設公団（現独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構：以下、鉄道・運輸機構）から富山県教育委員会（以下、県教委）に示され、路線予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて、日本鉄道建設公団北陸新幹線第二建設局（現鉄道・運輸機構）・県教委・富山県埋蔵文化財センター（以下、県センター）により協議が行われた。その結果、埋蔵文化財の分布状況を把握するために、路線敷の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。

昭和60（1985）年、県教委と県センターは路線敷全長63.9kmのうち約38kmについて分布調査を行い、周知の包蔵地を含め県東部で16箇所、県西部で11箇所の埋蔵文化財包蔵地を確認した。新幹線整備計画の決定以降、順次地元への用地交渉等が進められており、用地内遺跡の包蔵地確認調査の要望が鉄道・運輸機構から県教委に出された。両者の協議の結果、包蔵地確認調査を財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所（以下、財団）に依頼することとなった。

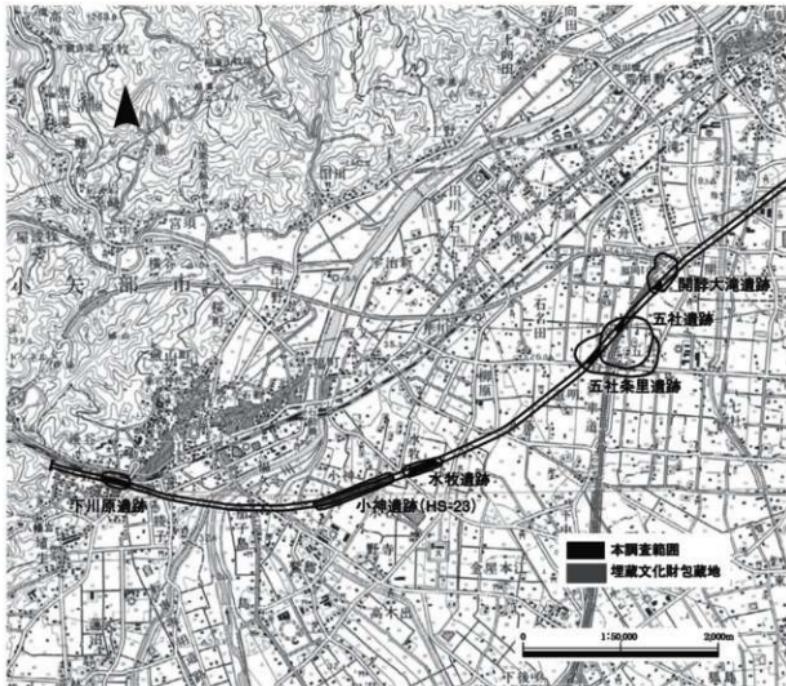
平成8（1996）年、鉄道・運輸機構、県教委の委託を受けて、財団は小矢部市下川原遺跡において包蔵地確認調査を実施した。この結果、古墳時代と古代の遺構・遺物を確認し、本調査を必要とする面積は、約3,200m<sup>2</sup>と確定した。平成19（2007）年には、小矢部市下川原遺跡において包蔵地確認調査を実施した。この結果、弥生時代の遺構・遺物を確認し、本調査を必要とする面積は、500m<sup>2</sup>と確定した。平成20（2008）年には、高岡市と小矢部市にまたがる開跡大滝遺跡、小矢部市五社遺跡・五社条里遺跡において包蔵地確認調査を実施したところ、各遺跡から遺構・遺物が確認された。また、H S-22についても遺構・遺物が確認されたことにより、水牧遺跡と命名した。開跡大滝遺跡では中世後半の遺構を確認し、本調査を必要とする面積は、2,210m<sup>2</sup>と確定した。五社遺跡では古代後期の遺構・遺物を確認し、本調査を必要とする面積は、4,450m<sup>2</sup>と確定した。五社条里遺跡では古代～中世とみられる遺構を確認し、本調査を必要とする面積は、5,840m<sup>2</sup>と確定した。水牧遺跡では古代の遺構・遺物を確認し、本調査を必要とする面積は、4,910m<sup>2</sup>と確定した。

包蔵地確認調査の結果を受けて、鉄道・運輸機構から範囲が確定している包蔵地について本調査



第1図 調査位置図

の要望が出された。協議の結果、平成18（2006）年度から財団が小矢部市域における北陸新幹線関連の本調査を受託することとなった。平成18（2006）年度には、下川原遺跡（A地区）において、平成19（2007）年度には、下川原遺跡（B地区）において、平成21（2009）年度には、開鶴大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡においてそれぞれ本調査を実施した。



第2図 北陸新幹線関連埋蔵文化財包蔵地位置図（1:50,000）

## （2）既往の調査

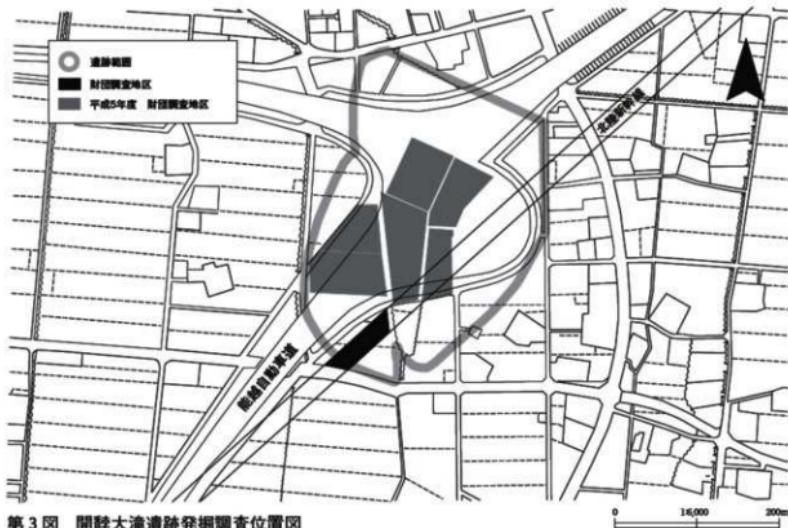
本書に収録した五遺跡の既往の調査は以下のとおりである。

遺跡名	分布調査		試掘調査		本調査					
	年度	調査主体	文献	年度	調査主体	文献	年度	調査主体	調査面積(m <sup>2</sup> ) (調査対象面積)	文献
開鶴大滝	S60	県教委・県センター	H120 財団	113.4 (2,040)	8 H21	財団	2,157 (2,157)	9		
	H 3	県センター	H 4 財団	4,660 (78,400)	2 H 5	財団	28,063 (20,744)	4		
五社	S60	県教委・県センター	H120 財団	154.5 (4,500)	8 H21	財団	4,132 (4,132)	9		
	H 2	県センター・小矢部市教委	H 2 小矢部市教委	2,977 (67,000)	1 H 4 ~ H 6	財団	51,299 (31,099)	3		
五社条里	S60	県教委・県センター	H120 財団	197 (5,400)	8 H21	財団	5,338 (5,338)	9		
	S60	県教委・県センター	H20 財団	414 (7,200)	8 H21	財団	4,539 (4,539)	9		
水牧	S60	県教委・県センター	H20 財団	414 (7,200)	8 H21	財団	4,539 (4,539)	9		
	S60	県教委・県センター	H 8 財団	773 (12,000)	5 H18	財団	1,244 (2,485)	6		
下川原	S60	県教委・県センター	H 8 財団	773 (12,000)	5 H19	財団	547 (547)	7		

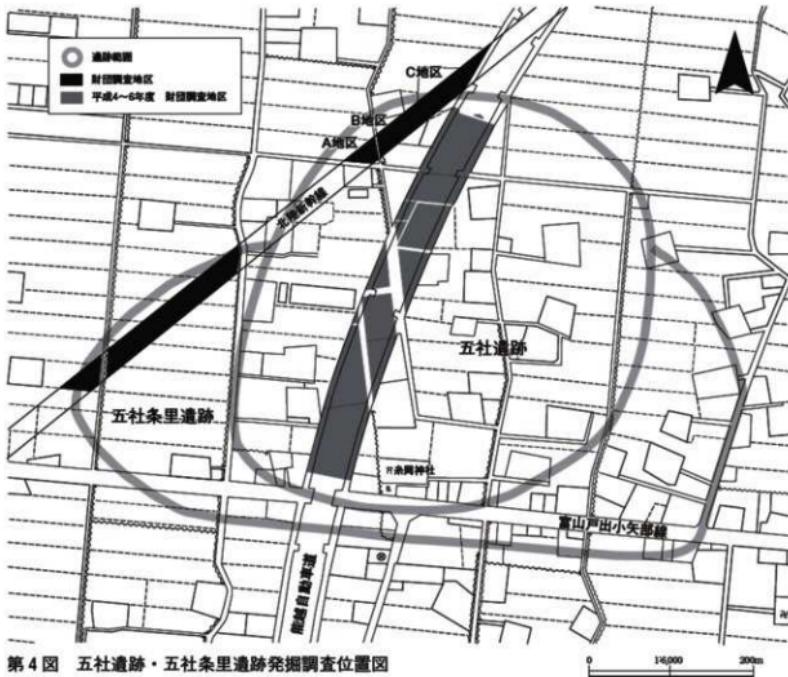
第1表 既往の調査一覧

### 文献

- 1 小矢部市埋蔵文化財委員会 1991 「小矢部市埋蔵文化財調査報告書第20号 水無自動車道関連調査試掘調査報告－五社遺跡、石名田木舟遺跡、地崎遺跡－」
- 2 財団法人富山県文化振興財団 1993 「北陸自動車道関連埋蔵文化財包蔵地調査報告－小矢部市－福岡町間－」
- 3 財団法人富山県文化振興財団 1996 「五社遺跡調査報告書」
- 4 財団法人富山県文化振興財団 2000 「開鶴大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告」
- 5 財団法人富山県文化振興財団 1997 「埋蔵文化財調査概要」－平成8年度－
- 6 財団法人富山県文化振興財団 2000 「埋蔵文化財年報」－平成10年度－
- 7 財団法人富山県文化振興財団 2006 「埋蔵文化財年報」－平成19年度－
- 8 財団法人富山県文化振興財団 2009 「北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告」 上梅之瀬跡・木幡全広・中馬草遺跡・北代・一万歩遺跡・呂家富田町遺跡・小竹  
貝塚・H S -04・白石遺跡・愛宕遺跡・安土遺跡・櫛田遺跡・本木坪I遺跡・下野II遺跡・江尻II遺跡・開鶴大滝遺跡・五社条里遺跡・H S -22(木戸)遺跡・H S -23(木戸)遺跡
- 9 財団法人富山県文化振興財団 2010 「埋蔵文化財年報」－平成21年度－



第3図 開跡大滝遺跡発掘調査位置図



第4図 五社遺跡・五社条里遺跡発掘調査位置図

## 2 発掘作業の経過と方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定には、日本測地系による国家座標を用いた。開辟大滝遺跡では+76050-21800をX0Y0の起点とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。同じく五社遺跡・五社条里遺跡では+75400-22600を、水牧遺跡では+74200-24200を、下川原遺跡A地区（平成18年度調査）では+74210-27410を、下川原遺跡B地区（平成19年度調査）では+74150-27250を、それぞれX0Y0の起点とした。グリッドは2×2 mの方眼を基本とし、グリッド名は北東角のX軸・Y軸の座標で呼称した。調査区については調査期間が複数年度にわたるケースもあり、道路や水路、現況水田の畦畔などによって分割した。五社遺跡については西からA・B・Cの3地区に、水牧遺跡では東からA・B・Cの3地区に、下川原遺跡については調査が2ヶ年にまたがり、調査地が離れているため平成18年度調査をA地区に、平成19年度調査をB地区とした。

遺跡名・地区名	日本測地系	世界測地系
開辟大滝遺跡	+ 76050 - 21800	+ 76396.6375 - 21530.2574
五社遺跡	+ 75400 - 22600	+ 75746.6378 - 22330.2176
五社条里遺跡		
水牧遺跡	+ 74200 - 24200	+ 74546.6588 - 23930.1129
下川原遺跡A地区	+ 74210 - 27410	+ 74556.6917 - 27140.0361
下川原遺跡B地区	+ 74150 - 27250	+ 74496.6900 - 26980.0359

発掘調査は表土・耕作土・無遺物層の除去、遺物包含層の発掘、遺構確認面の精査・遺構の検出、遺構の発掘、遺構の記録、写真撮影、空中写真測量、測量補足作業の順序で実施した。

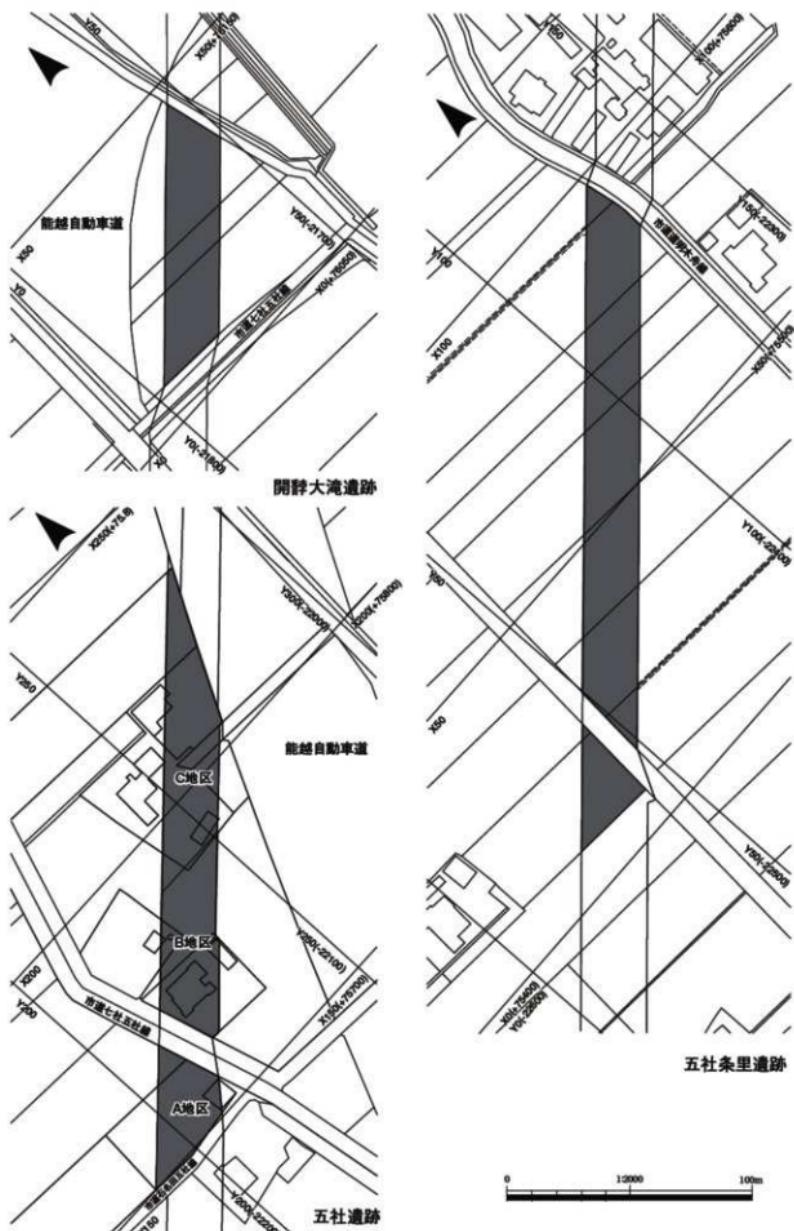
表土・耕作土・無遺物層の除去は、人力掘削による調査の事前準備として、調査員立ち会いのもと、包蔵地確認調査の結果を踏まえ、基本層序を確認しながら、工事請負業者が重機により行った。又場所によっては、近代以降の擾乱や無遺物層の除去も行った。

遺物包含層の発掘はスコップ等を用い、人力で掘削した。堆土搬出にはベルトコンベヤーを使用し、調査区外の路線敷内もしくは隣接地に集積した。

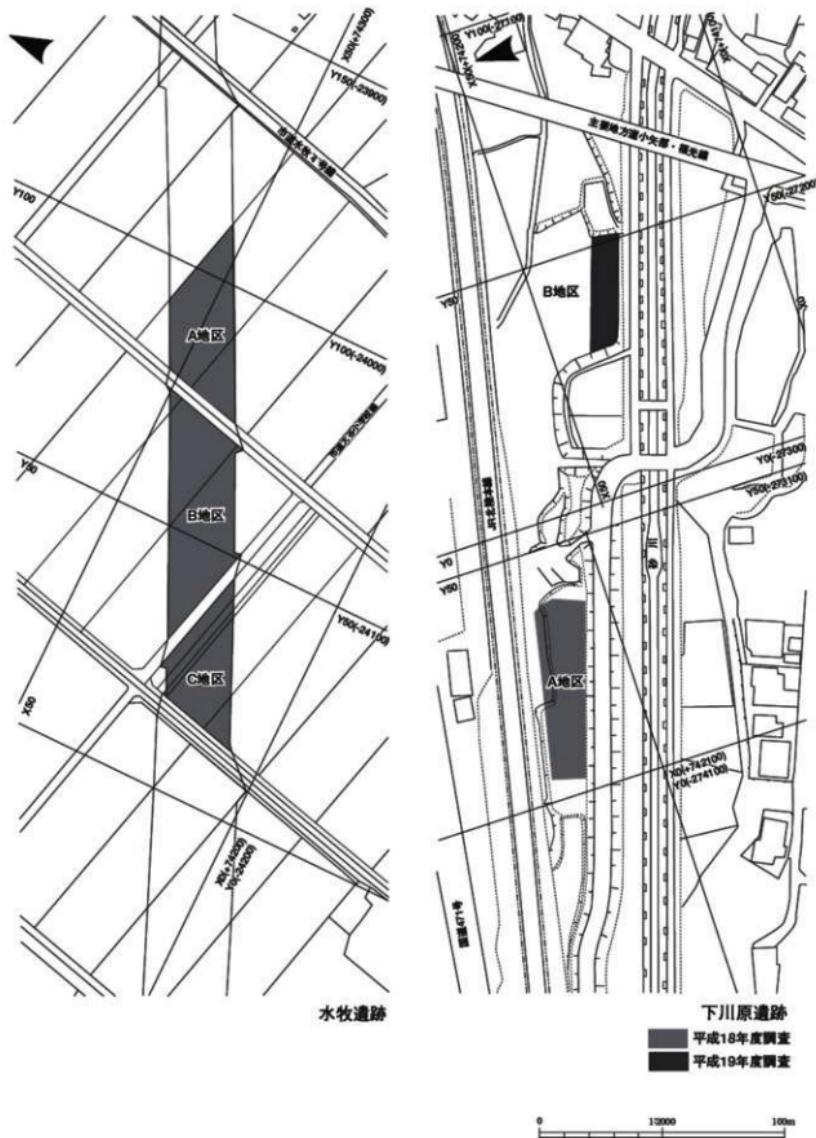
遺構確認面の精査・遺構の検出は、遺構確認面まで掘削した段階でジョレンやねじり鎌で精査し、検出した遺構は石灰によるマーキングを行い、平板を用いて遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが、各地区ごとに遺構の種類にかかわらず通し番号とした。

遺構の掘削は小さい土坑は長軸に沿って半截、大きい遺構は十字またはそれ以上に、溝は適宜に間隔をあけてセクションベルトを残し、移植ごてなどで発掘した。

遺構の記録は、断面図を20分の1の縮尺で実測し、遺構によっては10分の1の遺物出土状況図や平面図を作成した。各遺構の断面はデジタルカメラで撮影した。また、遺物出土状況や個別の遺構写真、ブロック写真はプロニー判（6×7）カメラを、調査区の全景写真については4×5カメラをそれぞれ併用した。また調査区全域にまたがる遺構平面図の作成には、空中写真測量を利用した。空中写真測量には、広域の対象地についてはヘリコプター（実機）を使用、小域な対象地についてはラジコンヘリコプターをそれぞれ使用した。



第5図 開跡大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡調査区区割図



第6図 水牧遺跡・下川原遺跡調査区区割図

実施年度		調査事業担当						
平成18 (2006)年度	総括	所長	岸本 雅敏	総務	チーフ 浅地 正代	調査統括	調査第二課長 宮田 進一	
		主査・副所長	山本 正敏		主任 岩田 栄紀	調査員	文化財保護主事 織江 真澄	
		副所長・総務課長	加藤豊治郎				文化財保護主事 織江 真理	
平成19 (2007)年度	総括	所長	岸本 雅敏	総務	チーフ 浅地 正代	調査統括	調査第二課長 河西 健二	
		主査・副所長	山本 正敏		主任 岩田 栄紀	調査員	主任 青山 見	
		副所長・総務課長	加藤豊治郎				文化財保護主事 朝田 要	
平成21 (2008)年度	総括	所長	岸本 雅敏	総務	課長 竹中 憲一	調査統括	調査第一課長 久々 忠義	
		副所長	池野 正男		チーフ 浅地 正代		主任 木下 保明	
							主任 越前 信子	
道路	地区	検出面	年度	期間	延べ日数	面積	担当者	検出遺構
開辟大溝		中近世	平成21 (2009)	H21.7.14~9.17	47日	2,157m <sup>2</sup>	久々 忠義 木下 保明 越前 信子 島田 光仁	土坑、溝、 自然流路
五社	A	中近世		H21.7.7~9.14	49日	932m <sup>2</sup>	久々 忠義 島田 光仁	土器、須恵器、中世土器、越中瀬戸、伊万里、唐津、陶器、木製品
	B	平安 中近世	平成21 (2009)	H21.9.16~10.20	21日	1,397m <sup>2</sup>	久々 忠義 島田 光仁	土坑、溝、 谷
	C	古墳 飛鳥		H21.9.7~11.20	50日	1,803m <sup>2</sup>	久々 忠義 木下 保明 越前 信子 島田 光仁	土器、須恵器、中世土器、越中瀬戸、近世陶磁器、木製品、金属製品
五社条里		近世	平成21 (2009)	H21.4.27~6.23	38日	5,338m <sup>2</sup>	久々 忠義 島田 光仁	土坑、溝
水牧	A	中世 古代		H21.6.3~7.27	38日	1,447m <sup>2</sup>	久々 忠義 島田 光仁	土坑、溝
	B	中世 古代	平成21 (2009)	H21.6.5~7.23	34日	1,998m <sup>2</sup>	久々 忠義 島田 光仁	土坑、溝
	C	中世 古代		H21.6.9~9.4	63日	1,094m <sup>2</sup>	久々 忠義 島田 光仁	土坑、溝
下川原	A	古代上層	平成18 (2006)	H18.5.24~6.21	21日	1,244m <sup>2</sup>	織江 真澄 織江 真理	堅穴住居、 土坑、溝
		古代下層		H18.6.22~8.4	31日	1,244m <sup>2</sup>		
	B	弥生 古墳	平成19 (2007)	H19.10.1~10.31	23日	547m <sup>2</sup>	青山 見 朝田 要	堅穴住居、 土坑、溝

第2表 調査体制・調査一覧

### 3 整理の経過と方法

出土遺物は調査年度内に洗浄・注記・分類を行った。遺物の洗浄・バインダー処理は現場において行った。土器・陶磁器の注記・接合・復元・色塗りは室内整理作業員が行った。木製品・金属製品・石製品はメモ写真を撮影し、それぞれの整理台帳を作成した。

報告書刊行に向けての本格的な室内整理作業は、平成22年から開始しているが、先行して下川原遺跡の土器の接合・復元・実測の一部作業を平成21年度の終わり頃から実施している。平成22年度は開辟大溝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡の土器・陶磁器の接合・復元・実測を進め一方で、遺構・遺物観察表等の作成、原稿執筆、遺物写真撮影、自然科学分析、遺構図面編纂を行った。平成23年度は原稿執筆、編集、校正、印刷を行い、報告書刊行後に遺物・資料を富山県に移管した。

遺物の実測は、土器・陶磁器を調査員及び室内整理作業員が行った。木製品・金属製品・石製品の実測は業者に委託した。遺物実測図、遺構実測図、写真は各台帳を作成して整理し、パソコンコン

ピューターを使用してデータ入力を行った。遺物の写真撮影は業者委託し、デジタルカメラで撮影された。自然科学分析は、専門の業者に委託し、結果報告を掲載した。図面編纂は報告書掲載用の全体図や挿図作成を目的とし、業者委託した。

実施年度	平成22(2010)年度					平成23(2011)年度				
	総括	所長	岸本 雅敏	副所長	池野 正男	総括	所長	岸本 雅敏	副所長	池野 正男
整理体制	総務	課長	竹中 憲一	課長	竹中 憲一	総務	課長	竹中 憲一	主任	江本 裕一
	チーフ	浅地 正代	チーフ	浅地 正代	チーフ	浅地 正代	チーフ	浅地 正代	主任	島田美佐子
	整理統括	調査第一課長	久々 忠義	整理統括	調査第一課長	久々 忠義	調査課長	島田美佐子	調査課チーフ	越前 慎子
	担当	主任	島田 亮仁	担当	主任	島田 亮仁	主任	島田 亮仁	主任	島田 亮仁

第3表 整理体制一覧

#### 4 普及活動

当財団では、発掘調査の成果を地元の方々に公開するために、調査期間中に現地説明会を開催した。現地説明会は、平成21年8月22日(土)の10:00~12:00までの2時間、水牧遺跡において実施した。当日は晴天にも恵まれ、地元住人を中心に約70名の見学者が訪れた。B地区の古代の堅穴住居をメインとした集落を会場とした。はじめに発掘調査の概要について配布資料を用いて解説し、その後調査区内に設定した見学ルートに従って解説を行った。また、出土遺物についても現地で展示し、解説を行った。その他に、9月4日(金)には地元の大谷小学校の6年生の生徒72名が水牧遺跡を訪れ、古代の堅穴住居を中心とした集落を見学した。また、11月8日(日)には、若林公民館で開催された公民館まつりにおいて出土品が展示された。

(島田亮仁)

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 1 地理的環境

小矢部市は、富山県の西部に位置し、三方を低山地に囲まれている。小矢部市北部は稲葉山（347m）を最高点とする低山地があり、北東に進むにつれて低くなり、西山丘陵へと連なっている。西側は石動断層線と天田峠を通る国道8号線とに限られた地域で、著しく浸食されやすい砂岩質で構成されており、浸食谷が発達している。南側は医王山（939m）の北側を占める蟹谷丘陵地域である。これらの丘陵は石川県との境を成しており、俱利伽羅峠や砂子坂峠などの浸食谷の源流部に形成された峠は、古来より越中と加賀との交通の要衝とされてきた。東側には広大な砺波平野が広がっている。

砺波平野は、小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地と沖積平野で構成されており、「散居村」地域として、優美な景観を今に残している。小矢部川は庄川扇状地の発達によって、流路は西側の山地縁辺に押しやられており、丘陵裾を蛇行しながら富山湾に注いでいる。一帯は古くから小矢部川や庄川が幾度となく流路を変え、洪水や氾濫を受けてきたことが知られている。標高20~30mの扇端部一帯は湧水地帯として知られ、また、標高10~15mの末端部は網目状に小矢部川や庄川の支流となる大小河川の浸食によって複雑な微地形が発達している。

### 2 歴史的環境

本書で取り扱った小矢部市域の遺跡とその周辺では、旧石器時代から近世までの各時代の遺跡が認められる。旧石器から縄文時代までは、主に小矢部川左岸の台地上に遺跡が展開し、弥生時代から古墳時代は勾配の急な扇状地を避けて、沖積低地に広がる。古代になると右岸の扇状地などにも進出するようになる。

#### —旧石器時代—

小矢部川左岸の台地上に埴生上野遺跡（70）や日の宮・道林寺遺跡（77）があり、石器などの遺物が確認されている。遺構出土や出土状況が分かるようなものではなく、詳細は不明である。

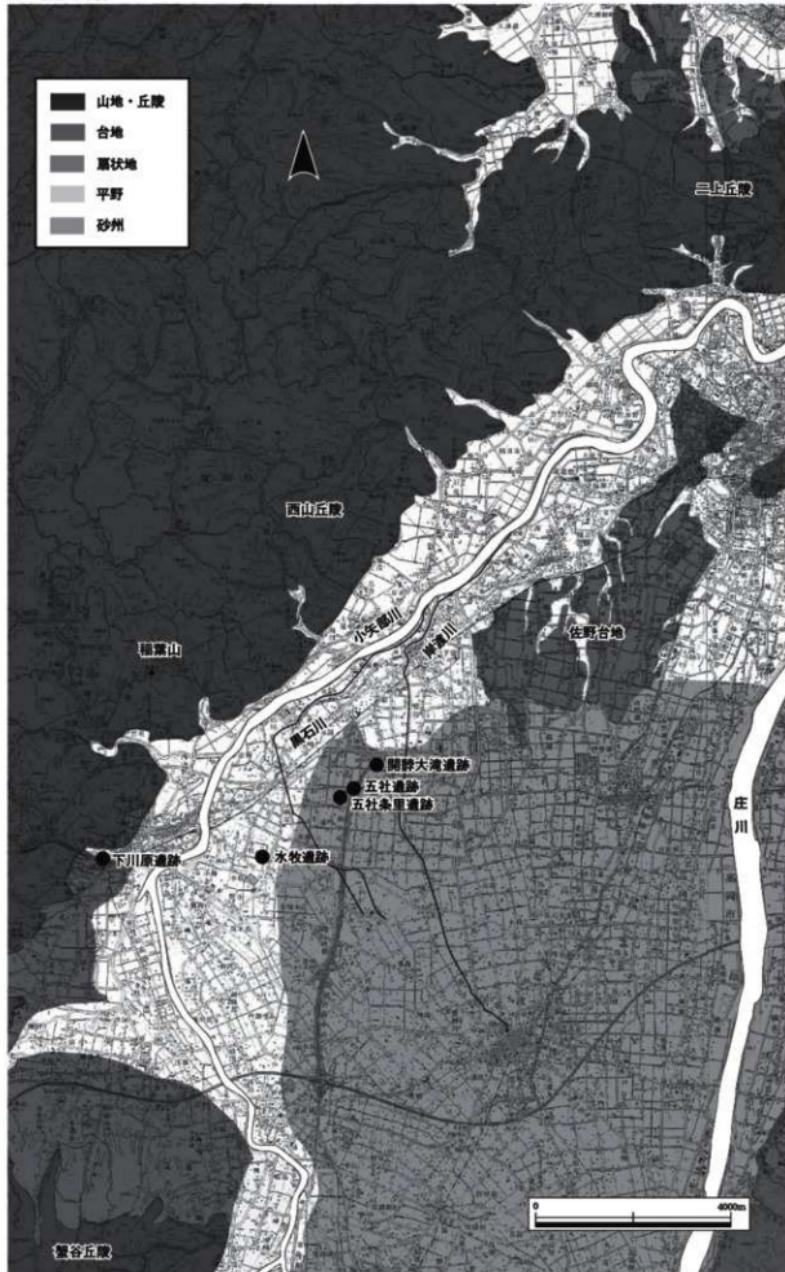
#### —縄文時代—

小矢部川左岸には上野A遺跡（40）があり、前期の地床炉と貯蔵穴を伴う堅穴住居が確認されている。また、縄文時代の遺跡として著名な桜町遺跡（54）がある。桜町遺跡は小矢部川と子撫川の合流地点から丘陵地帯の河岸段丘上に広がる大規模な遺跡である。現在までの調査で、縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが判明している。縄文時代の草創期から晚期までの出土遺物があり、縄文時代中期の層から高床式の建物の柱材や壁材などの有機質の遺物が出土している。また、多くの自然遺物も確認されており、なかにはシダ植物の一種である「コゴミ」も出土している。

#### —弥生時代—

小矢部川左岸では埴生条里遺跡（61）や平田・藤森遺跡（80）などの弥生時代終末期の遺構が確認されているが、集落の内容が分かっている遺跡は少ない。また、桜町遺跡（54）では弥生時代前期・中期の土器が出土しているが、住居など詳細は不明である。

# 1 地理的環境



第7図 地形図 (1:100,000)

### －古墳時代－

子撫川より北側の小矢部川左岸の丘陵裾沿いには加茂横穴墓群（31）、下向田古墳群（34）、上野古墳群（39）などの古墳や横穴墓が分布している。また、子撫川より南側には砺波地域では古墳分布密度の高い一群が存在しており、県内最大級の前方後円墳を有する関野古墳群（75）や県内の古墳では珍しい埴輪を伴う若宮古墳（69）、短甲や鉄刀・盾などの豊富な武器や武具が副葬されていた谷内古墳群21号墳（68）など有力者の古墳が築かれている。集落遺跡では北反戦遺跡（62）、日の宮・道林寺遺跡（77）などがあり、北反戦遺跡では中期の堅穴住居から土器と共に勾玉や管玉などが出土している。また、日の宮・道林寺遺跡では堅穴住居が5棟確認されている。

### －古代－

小矢部川左岸の桜町遺跡（54）や小矢部川右岸の石名田木舟遺跡（7）がある。桜町遺跡は6世紀末から8世紀前半の建物が40棟以上確認されており、遺物には土師器や須恵器の他に円面鏡や和同開珎などが出土している。また、古代北陸道の遺構が検出されており、律令期の中心的な施設の存在が推定されている。石名田木舟遺跡は7世紀後半～9世紀後半の遺構が確認されており、7世紀後半～8世紀初めと考えられる瓦塔や阿弥陀三尊像などの仏具関連の遺物が出土している。

### －中世－

古代以降の莊園支配を背景に交通と戦略の要所として山城や城館が築造された。開辟大滝遺跡（1）や五社遺跡（2）の近隣には木舟城跡（6）やその城下町である石名田木舟遺跡（7）がある。木舟城は寿永三年（1184年）に石黒氏が築城したといわれており、その後戦国時代には上杉氏・佐々氏・前田氏の居城となり、天正十三年（1585年）の白山大地震により崩壊したと伝えられている城である。石名田木舟遺跡はその周辺に成立した城下町と考えられており、15世紀末～16世紀後半にかけての遺構や遺物が確認されている。

### －近世以降－

五社遺跡周辺では現在の散居村の景観が成立する時期で、地崎遺跡（10）などがある。いずれの遺跡も、建物跡が確認されているが散在的である。灌漑施設の充実により生産域である水田や畠などの耕作地の開発が本格化し、米の生産量については加賀百万石を支えた一要因となるほど豊かになった。

(島田亮仁)

### 引用・参考文献

1. 小矢部市 1971 「小矢部市史」
2. 福野町教育委員会 1992 「福野町上野八遺跡 発掘調査概要」
3. 小矢部市教育委員会 1983 「富山県小矢部市桜町遺跡」
4. 小矢部市教育委員会 1987 「富山県小矢部市桜町遺跡一個入住宅の建築に伴う中出地区的の調査」
5. 小矢部市教育委員会 1984 「富山県小矢部市桜町遺跡一城山都市下水路新設工事に伴う産田地区的の調査－ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第15冊」
6. 小矢部市教育委員会 2003 「富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 弥生・古墳・古代・中世編Ⅰ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第51冊」
7. 小矢部市教育委員会 2004 「富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 織文遺構編Ⅰ 弥生・古墳・古代・中世編Ⅱ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第53冊」
8. 小矢部市教育委員会 2005 「富山県小矢部市桜町遺跡発掘調査報告書 織文遺構編Ⅱ 弥生・古墳・古代・中世編Ⅲ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第55冊」
9. 小矢部市教育委員会 2002 「平成13年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第50冊」
10. 小矢部市教育委員会 1989 「北反戦遺跡－条里遺構の発掘調査概要－ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第25冊」

11. 小矢部市教育委員会 1990 「北戦道路・一条里構造の発掘調査概要Ⅱ－ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第30冊」
12. 小矢部市教育委員会 1991 「北戦道路・古墳時代集落の発掘調査概要－ 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第31冊」
13. 小矢部市教育委員会 1993 「平成4年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第37冊」
14. 小矢部市教育委員会 小矢部市古墳発掘調査団 1988 「谷内16号墳 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第23冊」
15. 小矢部市教育委員会 1992 「谷内21号墳 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第35冊」
16. 小矢部市教育委員会 2003 「平成14年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第52冊」
17. 小矢部市教育委員会 小矢部市古墳発掘調査団 1987 「開野古墳群 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第19冊」
18. 富山県埋蔵文化財センター 1978 「日の宮遺跡発掘調査報告」
19. 小矢部市教育委員会 1987 「追林寺遺跡 小矢部市埋蔵文化財発掘調査報告書第22冊」
20. 富山県教育委員会 1978 「富山県小矢部市竹鳥島遺跡発掘調査概報」
21. 福岡町教育委員会 1997 「富山県福岡町石名木舟道跡発掘調査報告書－県指定史跡木舟城跡築地－」
22. 財団法人富山県文化振興財団 2002 「石名木舟道跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ－」
23. 財団法人富山県文化振興財団 2000 「開野大通り跡、地崎跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ－」
24. 財団法人富山県文化振興財団 1998 「五社遺跡発掘調査報告－能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ－」
25. 福岡町教育委員会 2002 「木舟城跡発掘調査報告－純四稚認調査報告－」
26. 福岡町 1969 「福岡町」
27. 財団法人富山県文化振興財団 2009 「北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(9) 上梅沢遺跡、水橋金広、中馬場遺跡、北代一万多遺跡、呂羽富田町遺跡、小竹貝塚、H.S.-04、白石遺跡、愛宕遺跡、安吉遺跡、棚田遺跡、本江大坪I遺跡、下佐野遺跡、H.S.-18(謝詔)遺跡、江南遺跡、H.S.-19(歳野町東)遺跡、H.S.-20(歳野町)遺跡、小竹B遺跡、H.S.-21(駒方南)遺跡、下老子篠川遺跡、江尻遺跡、開幹大瀬遺跡、五社条里遺跡、H.S.-22(水牧)遺跡、H.S.-23遺跡」
28. 財団法人富山県文化振興財団 2010 「埋蔵文化財年報」－平成21年度－
29. 財団法人富山県文化振興財団 1997 「埋蔵文化財調査概要」－平成8年度－
30. 財団法人富山県文化振興財団 2007 「埋蔵文化財年報」－平成18年度－
31. 財団法人富山県文化振興財団 2008 「北陸新幹線関係埋蔵文化財包蔵地調査報告(8) 水橋上野子坂遺跡、水橋金広中馬場遺跡、新堰西遺跡、呂羽富田町遺跡、北代・シャクドジ遺跡、小竹貝塚、下老子篠川遺跡、江尻遺跡、開幹大瀬遺跡、下川原遺跡」
32. 財団法人富山県文化振興財団 2008 「埋蔵文化財年報」－平成19年度－
33. 財団法人富山県文化振興財団 2009 「埋蔵文化財年報」－平成20年度－
34. 富山県埋蔵文化財センター 1997 「民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要 木舟北遺跡」
35. 福岡町教育委員会 2002 「富山県福岡町賀島地区に係る埋蔵文化財包蔵地試掘調査報告」



第8図 周辺の遺跡 (1:50,000)

第4表 周辺遺跡一覧

# 第Ⅲ章 開辟大滝遺跡

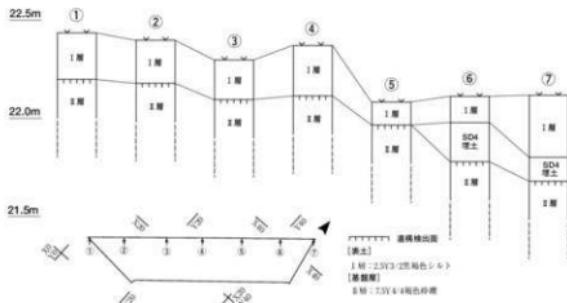
## 1 概要

開辟大滝遺跡は、能越自動車道建設に先立つ調査において、 $25,163\text{m}^2$ に及ぶ広大な面積を発掘し、16世紀の後半の木舟城に関する城下集落が検出された<sup>注1</sup>。掘立柱建物54棟、柵12条、井戸32基、道路2条、土坑、溝などが確認されており、町屋のほぼ全容が明らかになっている。遺物には日常生活で使われた土器・陶磁器などの他に、鍛冶滓、坩堝、炉壁、羽口、小札、鉄鎌などが出土している。南北方向に延びる道路と道路に挟まれた町屋が検出されており、町屋内では鍛冶滓や坩堝などの鍛冶関連の遺物が出土していることから、鍛物師、鍛冶師などの職人の存在が推察されている。近世では畠の畝や、溝、土坑などの耕作に伴う遺構が確認されている。また、大きな地震の痕跡である噴砂が確認されており、江戸時代の安政5年（1858年）に起きた飛越地震の可能性が指摘されている。

今回の調査地は能越自動車道の東側にあたり、調査面積は $2,157\text{m}^2$ である。遺構には土坑、溝があるものの散在的である。これらの遺構は中世（概ね16世紀～18世紀）の所産である。溝には東西方向に延びるものが多く、生産域として開発された耕作地に伴う近世以降の水路と考えられる。調査区東寄りには能越自動車道関連調査のE・F地区から延びる自然流路SD5001のつづきとみられるSD4があり、越前、瀬戸美濃、伊万里、漆器が出土している。掘立柱建物や井戸などの集落遺跡に伴う遺構は確認できていない。のことより、今回の調査区は、遺跡の縁辺部に相当すると考えられ、近世以降の耕作に伴う溝が確認された。

## 2 層序

層序は大きくI層、II層で、I層が表土、耕作土であり、II層は基盤の砂礫層である。包含層の存在は確認されず、おそらくは、後世の削平を受けて、残存しなかったとみられる。遺構は基盤層であるII層の上面で検出した。全体に表土直下ということで、遺構の残りは必ずしも良好ではない。I層は黒褐色シルトを基調としている耕作土で、 $0.1\sim0.3\text{m}$ の厚さがある。II層はいわゆる扇状地砂礫とよばれる砂礫層で、調査区全体に広がっている。検出面の高低をみると東に向かって緩く傾斜しており、SD4へつづく。標高は $22.1\sim22.4\text{m}$ を測る。



第9図 開辟大滝遺跡 層序模式図

### 3 遺構

検出された遺構には、土坑、溝がある。遺構の多くが調査区の東側に分布している。遺構の時期は概ね中近世（概ね16世紀～18世紀）に帰属すると考えられる。

#### A 土坑

##### 1号土坑（SK1, 第13図）

調査区の北東に位置する不整形の土坑である。長さ2.60m, 現存幅1.20m, 深さ0.08mを測る。埋土は黄灰色シルトを基調とし、基盤層の円礫が混じる。切り合いでSD1に切られている。出土遺物は認められない。

##### 2号土坑（SK2, 第13図）

調査区の中央の南端に位置する長梢円形の土坑である。現存長径8.00m, 短径2.00m, 深さ0.11mを測り、南側は調査区外へ広がる。埋土は黄灰色シルトを基調とし、基盤層の円礫が40%程度混じる。出土遺物は伊万里、陶器がある。

#### B 溝

##### 1号溝（SD1, 第13・15図, 図版6・7）

調査区の東に位置する溝である。南北方向に直線的に延びており、SD4とはほぼ並行に走っている。幅0.90～2.50m, 深さ0.24mを測り、北端と南端は調査区外へ延びる。埋土は黒褐色～灰黄色シルトを基調とし、基盤層の円礫が混じる。溝には部分的（主に北側）に壁面の崩落を防ぐために、樹皮の残った自然木を使用した杭と土留めの横材が残存していた。埋土は淘汰が悪く、時間をかけて少しづつ堆積したと考えられる。これらのことから、SD1は水田や畠などの農耕に利用された用水路もしくは区画溝の可能性があり、放棄された後に土砂が徐々に堆積したとみられる。切り合いでSK1を切る。出土遺物は伊万里（1～4）、陶器がある。これらは概ね17世紀後半～18世紀の所産である。

##### 2号溝（SD2, 第13図）

調査区の西南に位置し、SD3に直交する直線的な溝である。幅0.90m, 深さ0.14mを測る。埋土は灰黄色シルトを基調としている。出土遺物は認められない。

##### 3号溝（SD3, 第13・15図, 図版6・7）

調査区の中央からやや西寄りに位置する溝で、南北方向にわずかに蛇行して延びている。SD1までの距離は北端付近で21.50～22.00mの間隔がある。幅0.90m, 深さ0.17mを測る。埋土は灰黄色シルトを基調とし、基盤層の円礫が混じる。埋土はやや淘汰が悪く、時間をかけて堆積したと考えられる。SD1と同様に農耕に利用された用水路もしくは区画溝の可能性がある。出土遺物は伊万里（5）、下駄（1）、ガラス片がある。17世紀後半～18世紀のものか。

##### 4号溝（SD4, 第14・15図, 図版6・7）

調査区の東に位置する浅く幅広の自然流路で、南北方向に直線的に延びている。現存幅25.00m, 深さ0.30mを測り、北端と南端は調査区外へ延びる。埋土は上位が黒褐色～灰黄色シルトを基調とし、下位は灰黄色砂質シルト～砂である。埋土は下位ほど淘汰が良好なため、水流による堆積とみなされる。これらのことから、SD4はある程度水流があり、水田や畠などの農耕に利用されていた用水路の可能性がある。また、能越自動車道関連調査でE地区からF地区まで南北の方向に近世まで流れていたSD5001のつづきと考えられる。出土遺物は越前、瀬戸美濃（6）、伊万里、漆器（2）がある。

## 4 遺物

遺物には土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、中国製青磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津、伊万里、内野山、瓦質土器、木製品があるが、出土量は極めて少ない。図示したのは土器・陶磁器が10点、木製品が2点である。遺物の帰属時期の主体は近世（17世紀後半～18世紀）である。

### （1）土器・陶磁器（第15図、図版7）

1～6は造構出土の遺物である。1～4は1号溝（SD1）出土の伊万里である。1・2は丸碗で、内湾しながら立ち上がる体部を有する。1の外面には一重網目模様が、2には植物文がそれぞれ描かれている。3は筒型碗で、外面に矢羽文が描かれている。4は皿の底部で、内面見込みには植物文が描かれている。17世紀後半～18世紀の所産である。5は3号溝（SD3）出土の伊万里の丸碗で、小破片である。外面にコンニャク印判による植物文と思われる文様が施される。17世紀後半～18世紀のものである。6は4号溝（SD4）出土の瀬戸美濃の天目茶碗である。直線的な体部に、口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面に鉄釉がかかる。藤澤編年の後期IVか。7～10は包含層出土の遺物である。7は瀬戸美濃の天目茶碗で、口縁部の端部は欠損している。内外面に発色の良くない鉄釉がかかる。8は内野山の皿で、底部には削り出しによる四角形の高台を有する。内面には銅緑釉がかかり、蛇の目釉剥がれが施される。9は伊万里の丸碗で、体部外面にはコンニャク印判による團鶴が配されている。10は越中瀬戸の擂鉢の口縁部破片で、端部の縁帯が短く折れて三角形を呈している。内外面に銹釉がかかる。

### （2）木製品（第15図、図版6・7）

1は3号溝（SD3）出土の下駄の歯である。方形を呈し、下端は潰れた状態で、砂粒が付着している。樹種はアスナロである。2は4号溝（SD4）出土の完形に近い漆器皿で、底部外面は摩滅している。体部は内湾気味に大きく開き、端部は丸くおさめる。外面黒漆で、内面見込みには赤漆で扇文が配されている。炭粉漆下地で、樹種はブナ属である。1は3号溝（SD3）出土の下駄の歯である。方形を呈し、下端は潰れた状態で、砂粒が付着している。樹種はアスナロである。

## 5 総括

調査地の現況は水田であり、造構は表土（耕作土）直下で検出した。遺物包含層の分布は認められず、造構は基盤層である礫層を掘り込むように築かれている。検出された主な造構は、土坑2、溝3、自然流路1があり、掘立柱建物などの集落に直接関連する造構は確認されなかった。また、造構の分布密度も低い。調査区の東側には南北方向に流れるSD4は、位置や規模、堆積状況などから、能越自動車道建設に先立つ調査（以下、既往の調査）でSD5001として報告されている自然流路のつづきと考えられる。また、SD3とSD2は互いに直交する溝で、直線的に延びていることから農業関連の区画溝と考えられる。造構の帰属時期は遺物の出土量が極めて少なく、造構出土の遺物にいたってはほとんど無いため時期決定の根拠に乏しいが、概ね16世紀～18世紀の所産と考えられる。なお、本調査区では、地震による液状化現象などの痕跡は確認されなかった。

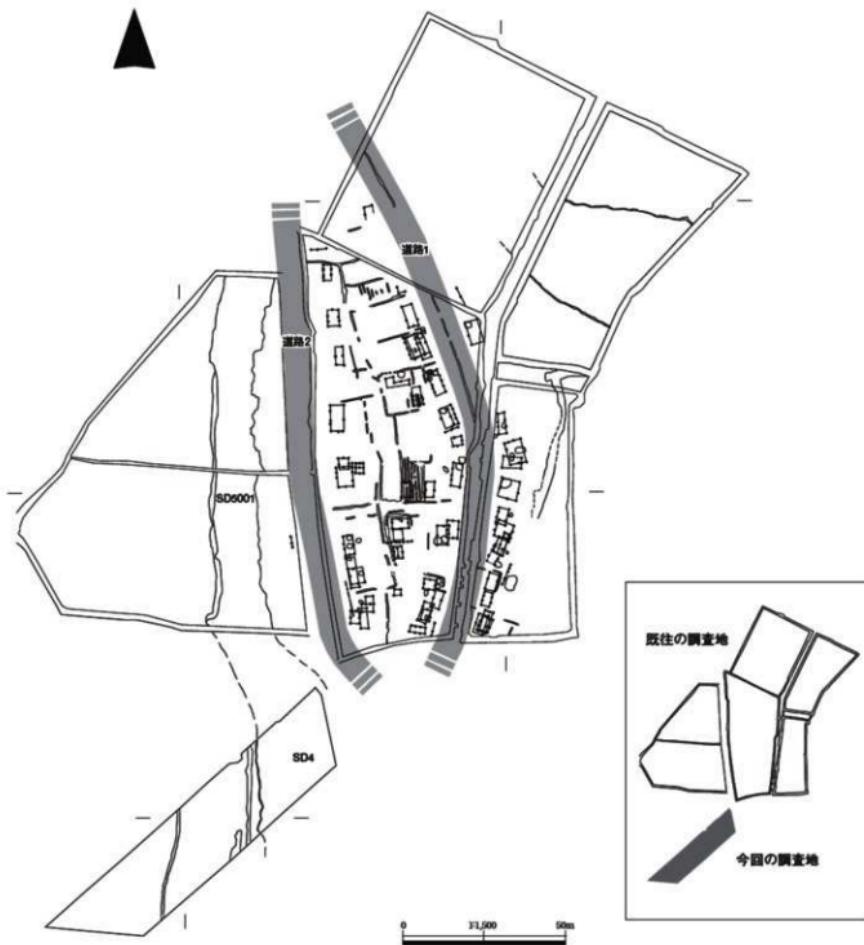
今回の調査では、建物や井戸などの集落造構が確認されなかったが、造構の分布状況を把握するために第10図に主要造構全体図を示しておく。既往の調査では、木舟城の城下町として道路に沿った町並みが形成されていたことが判明している。存続期間は16世紀中頃～16世紀末を中心とし、木舟城が

天正13年11月（西暦1587年1月18日）の大地震により、城が崩壊するまで存続していたとみられる。その後、木舟城は再建されなかったため、町屋であった場所は耕作地として利用されたことが推定されている。全体図を見ると、本調査地は遺跡の南側の縁辺部にあたり、町屋の範囲外であることが判明した。

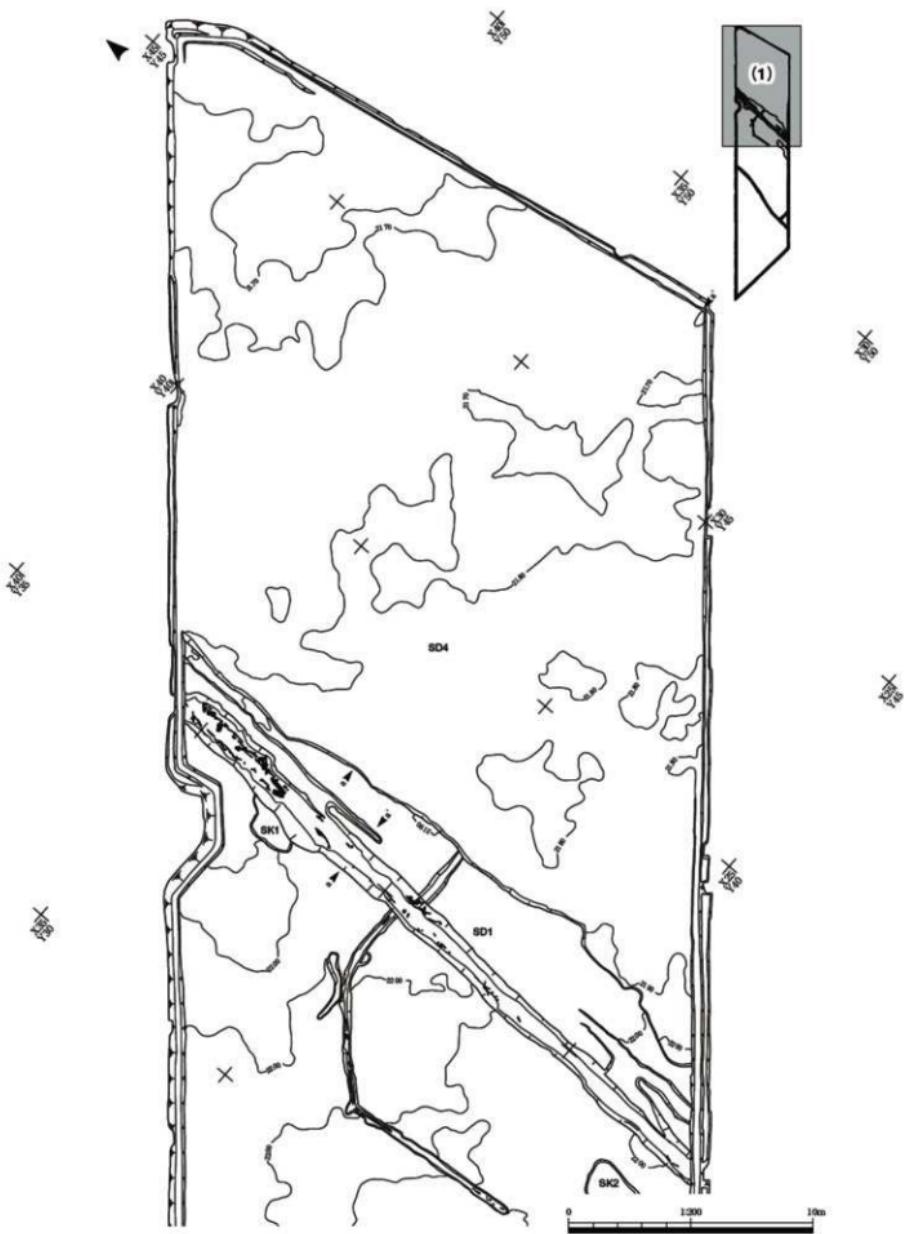
（島田亮仁）

### 注

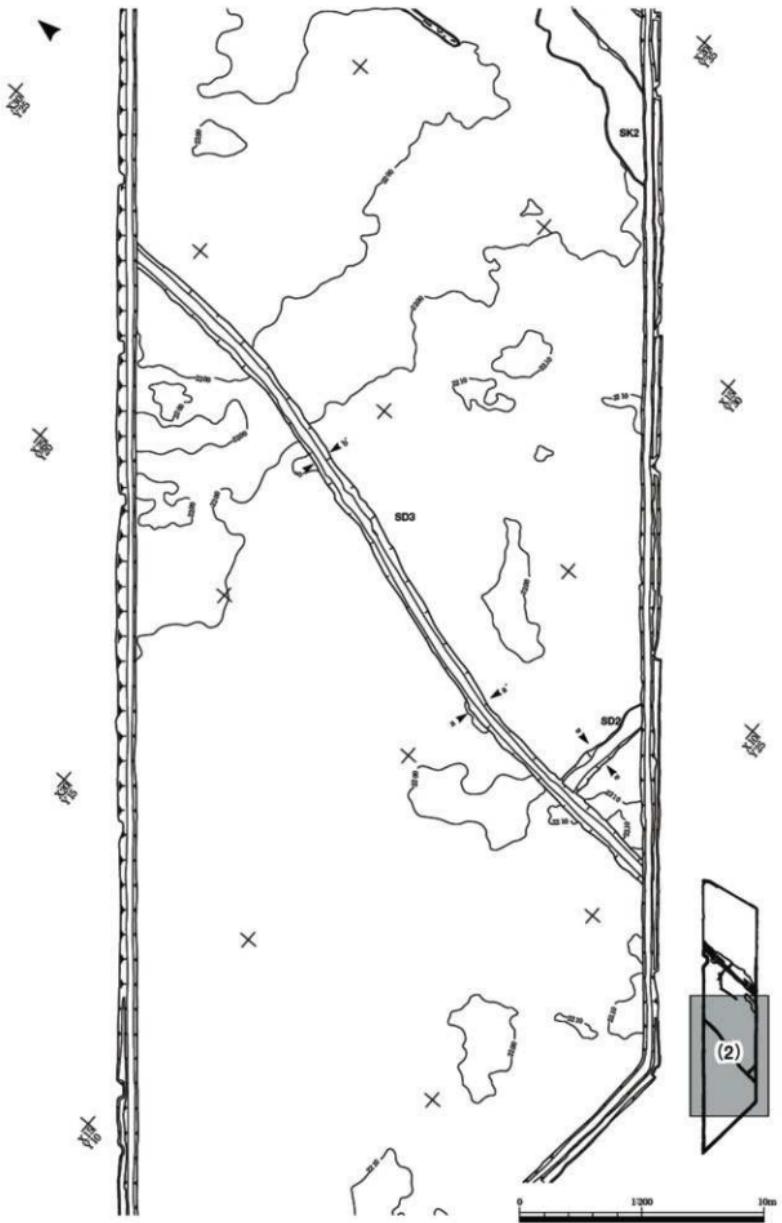
注1 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所2000『開辟大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』



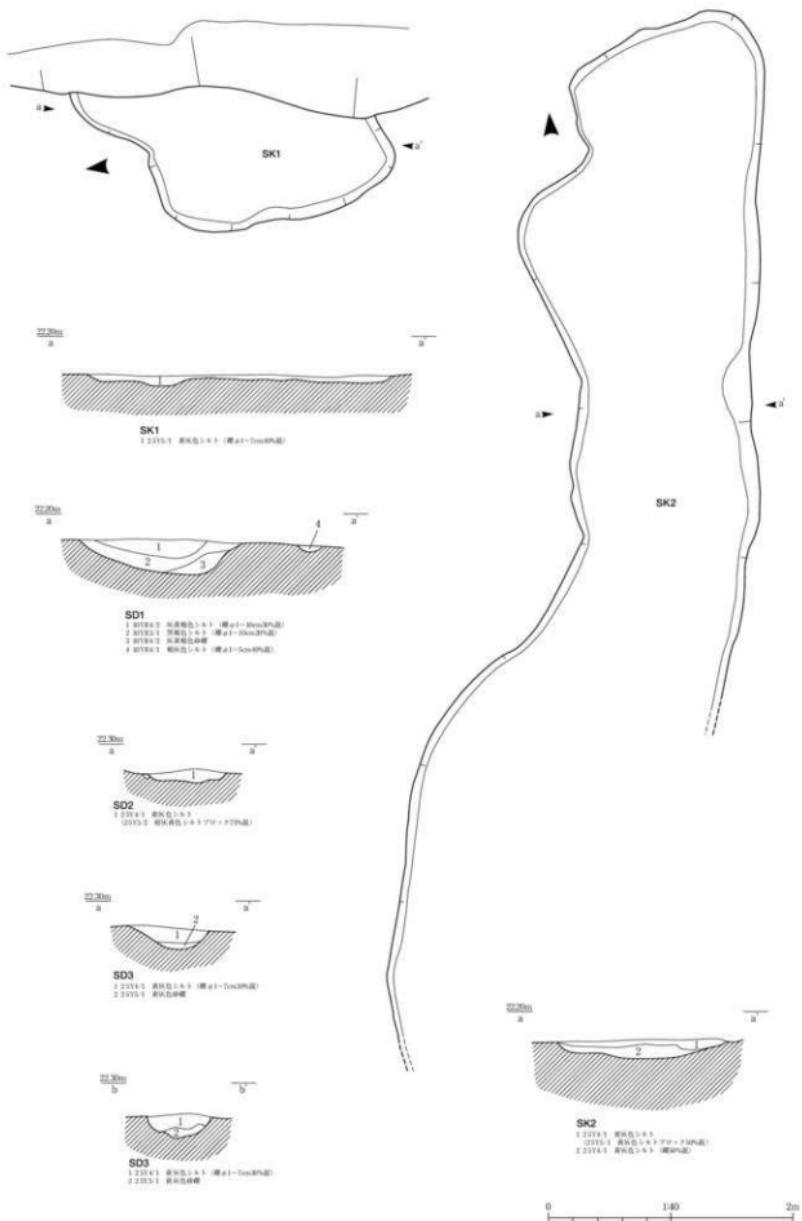
第10図 開辟大滝遺跡主要遺構全体図



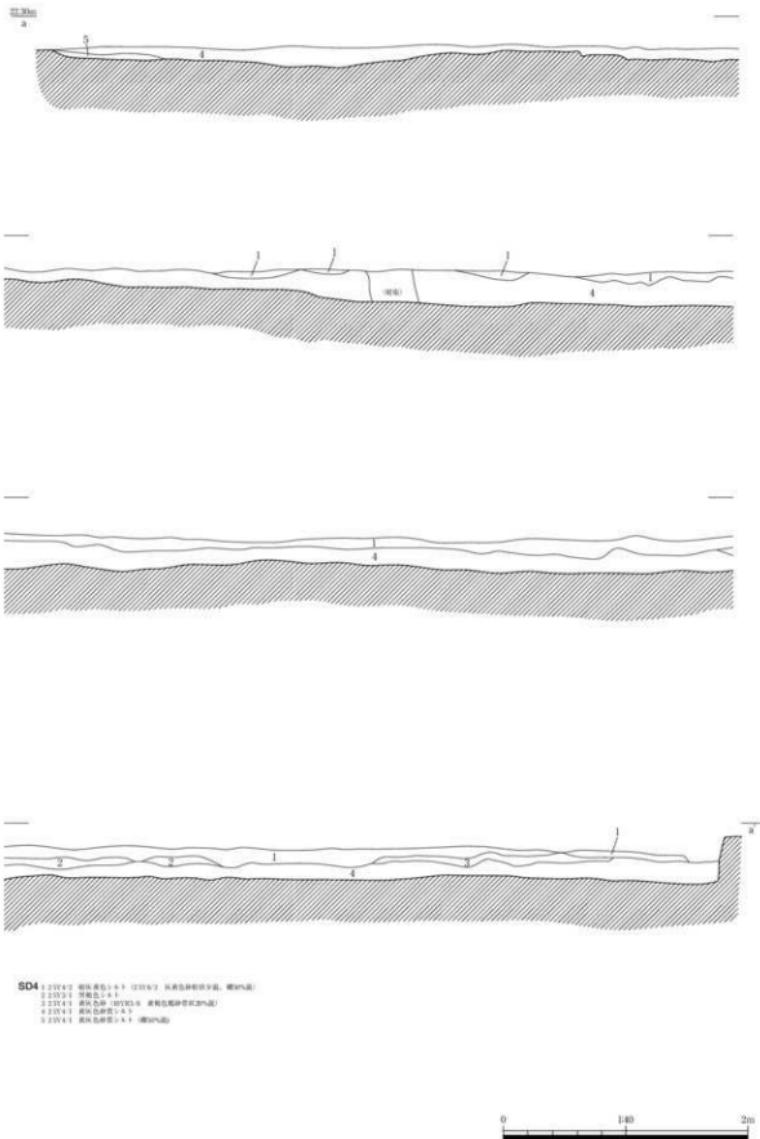
第11図 開跡大滝遺跡 中近世遺構全体図(1)



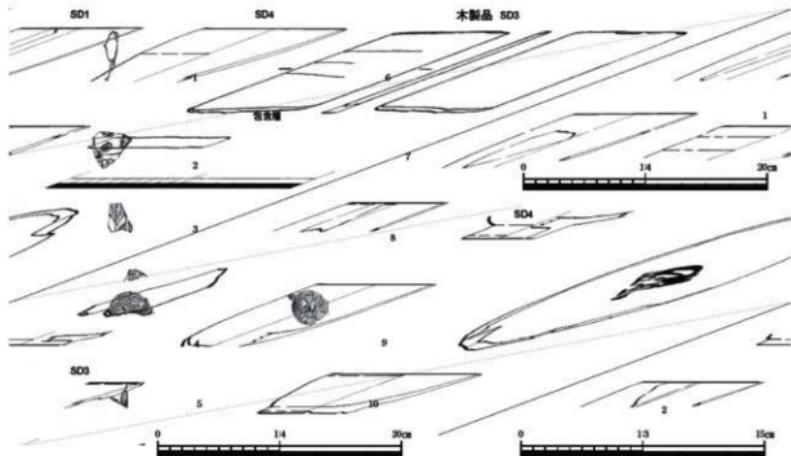
第12図 開辟大滙遺跡 中近世遺構全体図(2)



第13図 開辟大溝遺跡 中近世遺構実測図  
SK 1・SK 2・SD 1～SD 3



第14図 開跡大滝遺跡 中近世遺構実測図  
 SD 4



第15図 開跡大滝遺跡 遺物実測図（土器・陶磁器 1/4, 木製品 1 1/4, 2 1/3）

土器・陶磁器 SD1(1~4) SD3(5) SD4(6) 包含層  
木製品 SD3(1) SD4(2)

第5表 開跡大滝遺跡 中近世 土坑一覧

遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	辨図	写真図版
			長径	短径	深さ				
SK 1	SK10	不整	2.60	(1.20)	0.06		<SD1	13	
SK 2	SK 6	椭円	8.00	2.00	0.11	伊万里・陶器		13	

\*規模の( )付は現存数値を示す。

第6表 開跡大滝遺跡 中近世 溝・自然流路一覧

遺構	旧遺構番号	遺構種類	規模(m)		出土遺物	特記	辨図	写真図版
			幅	深さ				
SD 1	SD 2	溝	(0.90~2.50)	0.24	伊万里・陶器	>SK 1	13	6
SD 2	SD 7	溝	0.90	0.14		SD 3と直交する	13	
SD 3	SD 8	溝	0.90	0.17	伊万里・下駄、ガラス片	SD 2と直交する	13	6
SD 4	SD 1	自然流路	(25.00)	0.30	越前・瀬戸美濃・伊万里・漆器	<SD 9	14	6

\*規模の( )付は現存数値を示す。

第7表 開跡大滝遺跡 土器・陶磁器一覧

辨図	遺物	写真図版	遺構	出土地点	種類	器形	法量(cm)		時期	詳細時期	胎土色	釉色	触色	備考
							口径	底周						
1	SD 1	X25Y35	伊万里	丸窓	9.9	(4.2)	近世	17C後半~18C	2.5YR/1	灰白色	10YR/1	灰白色	一重輪目模様	
2	SD 1	X28Y35	伊万里	丸窓	(3.0)		近世	17C後半~18C	N7/	灰白色	10YR/1	灰白色	植物文	
3	SD 1	X28Y38	伊万里	筒形窓	7.8	(2.4)	近世	17C後半~18C	NW/	灰白色	10YR/1	灰白色	矢羽文	
4	SD 1	X33Y36	伊万里	窓	(1.1)	(7.1)	近世		NB/	灰白色	6GY	灰白色	植物文	
5	SD 3	X12Y22	伊万里	丸窓	10.0	(1.2)	近世	17C後半~18C	7.5YR/1	灰白色	10YR/1	灰白色	コニカ+四時文 植物文?	
6	SD 4	X40Y45	瀬戸美濃	天日系碗	11.9	(1.3)	中世	15C後半?	2.5YR/1	灰白色	2.5YR/1	黒褐色	赤物 指輪?	
7		X29Y36	瀬戸美濃	天日茶碗	(1.4)		中世	15C後半?	2.5YR/1	灰白色	10YR/2	灰青褐色	赤物 大業?	
8		X33Y31号	内野山	窓	(1.5)	(5.6)	近世	17C後半~18C	10YR/2	にい・黄褐色	10YR/5	黄褐色		
9		X36Y401号	伊万里	丸窓	6.6	(1.6)	近世	17C後半~18C	10YR/1	灰白色	10YR/1	灰白色	コンニャク印模模様	
10		X32Y361号	中瀬口	縦縫	(1.7)		近世	16C末~17C	5YR/6	褐色	7.5YR/4	にい・褐色	植物	

\*法量の( )付は現存数値を示す。

第8表 開跡大滝遺跡 木製品一覧

辨図	遺物	写真図版	遺構	種類	器形	法量(cm)	法量(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
15	1	7	SD 3	下駄(舟)	アヌナロ	9.8	6.6	0.9	底面に砂付着	
	2	7	SD 4	漆器皿	ブナ桶	器高 2.4	口径 8.9	0.6	漆塗膜分析No.1	

## 第IV章 五社遺跡

### 1 概要

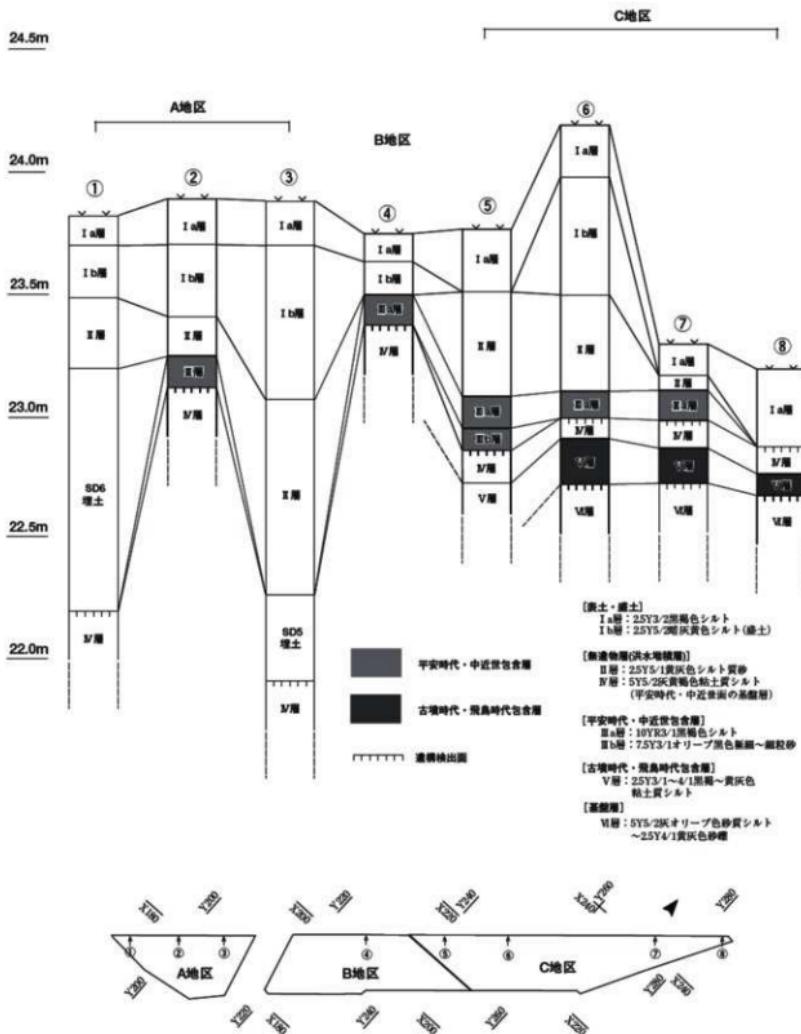
五社遺跡の能越自動車道建設に先立つ調査では、延べ面積で51,000m<sup>2</sup>の発掘調査を実施し、古墳時代、古代前期、古代後期、中世・近世以降の遺構が確認されている<sup>注1</sup>。古墳時代では堅穴建物4棟、土坑、溝が検出され、堅穴建物（5世紀中頃）では地床炉とカマドの両方を併せ持つ構造のものが確認されており、県内はもとより北陸地方における最古段階のカマドを有する堅穴建物として貴重な資料となっている。古代前期では掘立柱建物12棟、道路状遺構、土坑、溝、畠跡が確認されている。出土遺物には土師器や須恵器などがあり、時期は9世紀後半～10世紀初めの所産である。古代後期（10世紀末～11世紀）では掘立柱建物25棟、土坑、溝、畠跡が確認されている。掘立柱建物は溝で区画された内側にあり、畠跡が伴うものもある。柱穴が小規模で、配置も不揃いなため、古代的建物から中世的建物への変革期として位置づけられる。遺物には土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、綠釉陶器などが出土している。中世では掘立柱建物48棟、井戸5基、土坑、溝などの集落跡が検出されている。建物は12世紀後半に出現し、14世紀には減少し、15世紀代にはみられなくなる。出土遺物には中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、中国陶磁などがある。

今回の調査地は能越自動車道の西側で、調査面積は4,132m<sup>2</sup>である。主な時期は古墳時代・飛鳥時代、平安時代、中近世である。古墳時代・飛鳥時代の遺構には掘立柱建物3棟、堅穴建物1棟、土坑、溝が確認されているが、集落を構成する掘立柱建物や堅穴建物は飛鳥時代の所産である。遺構は西寄りのC地区に分布し、掘立柱建物は全て側柱建物で、概ね3間×4間、柱穴の大きさは直径0.3～0.6mの規模である。また、床面積がいずれも30m<sup>2</sup>とほぼ同じような規格となっている。堅穴建物は直径が約7.0mの規模を有している。これらの建物遺構は7世紀前葉～中葉が主体であると考えられる。遺物には土師器、須恵器、支脚などが出土している。平安時代の遺構は、B地区を中心に土坑、溝があるが、全体として分布は散在的である。建物に連する遺構は確認されず、区画溝とみられる溝（SD2）からは、土師器や須恵器、製塙土器、土錘などが出土している。中近世の遺構は土坑、溝、自然流路があるが、分布は希薄で、集落を構成する建物遺構は確認されていない。出土遺物には中世土師器、珠洲、越中瀬戸、伊万里、唐津などがある。

### 2 層序

層序はI層からVI層まであり、B地区とC地区で比較的良好な遺物包含層が確認されている。I層が表土、盛土であり、Ia層（表土）で黒褐色シルト、Ib層（盛土）で暗灰色シルトを基調としている。II層は洪水砂で黄灰色シルト質砂である。淘汰が良好で、無遺物層である。III層は平安時代、中近世の遺物包含層で、B地区とC地区を中心に分布している。IIIa層は黒褐色シルト、IIIb層はオリーブ黒色極細～細粒砂を基調としている。遺物の多くはIIIa層から出土しており、IIIb層は漸移層である。層厚はIIIa層で0.1～0.13mである。IV層は淘汰の良い洪水堆積物で黄褐色粘土質シルトを基調としており、IV層上面が平安時代、中近世面の遺構検出面となる。V層は古墳時代・飛鳥時代の遺物包含層で、C地区でその広がりが確認されている。B地区に向かって勾配が急となり、落ち込ん

でいる。黒褐色～黄灰色粘土質シルトを基調としており、0.08～0.19mの厚さがある。遺構は起伏に乏しく、概ね水平堆積している範囲に分布している。VI層は基盤層で、灰オリーブ色砂質シルトから黄灰色砂礫を基調としている。このIV層上面が古墳時代・飛鳥時代の遺構検出面である。



第16図 五社遺跡 層序模式図

### 3 遺構

遺構は古墳時代・飛鳥時代と平安時代、中近世の3時期が確認された。古墳時代（5世紀後葉～6世紀前葉）の遺構には土坑が確認されているが、分布は希薄である。飛鳥時代（7世紀前葉～中葉）の遺構には掘立柱建物3棟、竪穴建物1棟、土坑、溝などがC地区を中心に確認されている。掘立柱建物と竪穴建物は互いに重複することなく一定の間隔を置いて築かれている。土坑や溝はやや散在して分布している。また、調査区の西端では土器が集中する地点が確認されている。平安時代の遺構は土坑や溝が確認されている。主にB地区の東側に分布しており、それ以外では確認されていない。溝からは須恵器杯、土師器の他に製塙土器、土鍤などが出土している。中近世では土坑や溝が確認されている。B地区的西側からA地区にかけて遺構の広がりが確認されたが、分布密度は小さい。なお、飛鳥時代の掘立柱建物の柱穴には検出面から深さ約0.1mで南北方向に最大0.4m程度水平にずれが生じており、これは後世の地震によるものと考えられる。このような、地震に起因する横ずれは過去の調査でも確認されており、能越自動車道建設に伴う調査でS B45・S E8058などに顕著に表れている<sup>注2</sup>。それの規模は最大で南北方向におよそ1.5mに及んでおり、地震の規模の大きさが窺える。

#### （1）古墳時代・飛鳥時代

##### A 掘立柱建物

###### 1号掘立柱建物（S B 1, 第21図, 図版10）

C地区の中央やや西寄りに位置し、調査区外に広がる可能性がある。確認できる規模は2間×3間の側柱建物である。現存桁行4.20m、梁行5.70mである。現存面積は23.94m<sup>2</sup>である。主軸はN-17°-Eである。柱穴の平面形は円形で、規模は径0.27～0.50m、深さは0.21～0.35mである。埋土は黒褐色シルト質細粒砂から黒色シルト質極細～細粒砂を基調とし、下位ほど水分に富む。全ての柱穴で検出面から深さ約0.1mで南北方向に最大0.3m程度の横ずれが確認された。出土遺物はS P 2・S P 3から土師器甕の小片がある。

###### 2号掘立柱建物（S B 2, 第22図, 図版11）

C地区のはば中央に位置する。規模は3間×4間の南北棟側柱建物である。桁行6.10m、梁行5.00mである。面積は30.50m<sup>2</sup>である。主軸はN-42°-Eである。柱穴の平面形は円～楕円形で、規模は径0.26～0.60m、深さは0.17～0.54mである。埋土は黒褐色シルト質細粒砂から黒色シルト質極細～細粒砂を基調とし、下位ほど水分に富む。柱穴ごとにややばらつきがあるものの全ての柱穴で検出面から深さ約0.1mで、南北方向に最大0.4m程度の横ずれが確認された。出土遺物はS P 15・S P 16から土師器甕の小片がある。

###### 3号掘立柱建物（S B 3, 第23図, 図版12）

C地区的中央やや東寄りに位置し、調査区外に広がる。規模は3間×4間の南北棟側柱建物である。桁行6.20m、梁行4.80mである。面積は29.76m<sup>2</sup>である。主軸はN-45°-Eである。柱穴の平面形は円形で、規模は径0.28～0.49m、深さは0.06～0.33mである。埋土は黒褐色シルト質細粒砂から黒色シルト質極細～細粒砂を基調とし、下位ほど水分に富む。柱穴で検出面から深さ約0.1mで南北方向に最大0.1m程度の横ずれが確認された。出土遺物はS P 28・S P 31から土師器甕の小片がある。

##### B 竪穴建物

###### 1号竪穴建物（S I 1, 第24・37・43図, 図版12・13・18・19）

C地区のはば中央に位置する。規模は長径7.38m、短径7.14m、深さ0.21mを測る。床面積は

52.69m<sup>2</sup>で、平面形は隅丸方形を呈す。主軸はN-35°-Wである。埋土は黒褐色シルト質細粒砂から黒色シルト質細～細粒砂を基調とし炭化物を含んでいる。壁溝は南壁と西壁の一部に残存している。南壁やや西寄りに楕円形に焼土や炭化物が集中している範囲（長径0.90m、短径0.64m、深さ0.05m）が確認された。この位置にカマドが設置されていたと考えられ、焼土や炭化物に混じって支脚（9）が出土している。また、カマド周辺の床面直上から現地性の高い土師器の壺や瓶などが出土している。柱穴は4基（S P35～S P38）あり、規模は長径0.52～1.12m、深さは0.07～0.11mである。埋土は黒褐色シルト質細粒砂から黒色シルト質細～細粒砂を基調としている。出土遺物には土師器の碗（1～3）・瓶（4～6）・壺（7・8）、支脚（9～10）、敲石？（1）があり、これらの遺物はカマド周辺から多く出土している。この時期の集落遺跡で須恵器と土師器がセットで出土することは県内では少なく、土師器編年に寄与するような良好な資料も少ない。底部外面に広葉樹の葉脈が押しつけられた痕跡をとどめる碗（1）がやや古相を示していると考えるとするならば、出土した遺物の帰属時期は7世紀前葉～中葉という年代観が示される。また、堅穴建物の径が約7m、床面積が約50m<sup>2</sup>の規模は掘立柱建物であるSB2やSB3を上回り、大型の堅穴建物といふことがいえる。このような大型の堅穴建物の類例としては小杉町流通業務団地内遺跡群No7遺跡の古墳時代の第1号住居跡などがある<sup>注3</sup>。

### C 土坑

#### 1号土坑（SK1、第25図）

C地区の東端に位置する円形の土坑で、長径0.18m、短径0.18m、深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細～中粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

#### 2号土坑（SK2、第25図）

C地区の東端に位置する楕円形の土坑で、長径0.63m、短径0.60m、深さ0.12mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細～中粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

#### 3号土坑（SK3、第25図）

C地区的東側に位置する楕円形の土坑で、長径0.25m、短径0.20m、深さ0.06mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細～中粒砂を基調とする。周囲1m四方内には同様な土坑が3基分布する。出土遺物は土師器壺の小片がある。

#### 4号土坑（SK4、第25図）

C地区的中央の北端に位置する楕円形の土坑で、長径0.52m、短径0.29m、深さ0.06mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細～中粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

#### 5号土坑（SK5、第25図）

C地区的中央の北端に位置する楕円形の土坑で、長径0.44m、短径0.28m、深さ0.08mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細～中粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

#### 6号土坑（SK6、第25図）

C地区的中央の北端に位置する楕円形の土坑で、長径0.34m、短径0.25m、深さ0.08mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細～中粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。4号土坑、5号土坑、6号土坑と南側に1基の合計4基の土坑がほぼ一列に等間隔で並んでいる。柵列とも考えられなくもないが、遺構の性格は不明である。

#### 7号土坑（SK7、第25・38図、図版20）

C地区的東側のSX1から2.3～2.4mほど南側に位置している大型の土坑である。楕円形の土坑で、

長径5.92m、短径2.02m、深さ0.14mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。南側の落ち際から土師器の壺(11)が出土している。5世紀後半~6世紀前半のものか。

8号土坑 (SK 8, 第25・38図、図版17)

C地区の中央のS I 1に近接する楕円形の土坑で、長径1.93m、短径1.33m、深さ0.12mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物には土師器の壺(12)、黒色土器が出土している。7世紀のものか。

9号土坑 (SK 9, 第25・38図、図版20)

C地区の中央のS B 02に近接する楕円形の土坑で、長径1.30m、短径0.56m、深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物には土師器の高杯(13)がある。5世紀後半~6世紀前半のものか。

10号土坑 (SK 10, 第25図)

C地区の西側のS B 1に近接する楕円形の土坑で、長径1.41m、短径0.97m、深さ0.03mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

11号土坑 (SK 11, 第25図)

C地区の西側に位置する円形の土坑で、長径0.46m、短径0.32m、深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

12号土坑 (SK 12, 第25図)

C地区の西側に位置する円形の土坑で、長径0.27m、短径0.22m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

13号土坑 (SK 13, 第26図)

C地区の中央のS X 1に近接する楕円形の土坑で、長径2.40m、短径0.94m、深さ0.13mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

14号土坑 (SK 14, 第26・38図、図版14・17)

C地区のS B 2に近接する楕円形の土坑で、長径0.75m、短径0.53m、深さ0.10mを測る。埋土は灰色極細~細粒砂質シルトを基調とする。出土遺物は土師器の壺(14)があり、6世紀のものか。

15号土坑 (SK 15, 第26図)

C地区の西側のS B 01に近接する楕円形の土坑で、長径2.05m、短径1.50m、深さ0.10mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

16号土坑 (SK 16, 第26図)

C地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径0.96m、短径0.83m、深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

17号土坑 (SK 17, 第26図)

C地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径0.60m、短径0.52m、深さ0.07mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

18号土坑 (SK 18, 第26・38図、図版14・18)

C地区的東側のS X 1内のSK 19と近接する円形の土坑で、長径0.48m、短径0.46m、深さ0.28mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。土師器の壺(15)が横向き(口縁部は南側)に据えられた状態で出土している。土器内堆積物についてリン酸分析を実施したところ、比較サンプル(地山)と同程度の含量であった。6世紀のものか。

19号土坑（SK19，第26·38图，图版14·18）

C地区の東側のS X 1内に位置する円形の土坑で、長径0.70m、短径0.64m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。土師器の甌(16)が横向き(口縁部は南側)に据えられた状態で出土している。6世紀のものか。SK18とSK19出土の甌と甌は、当初、甌とその上に掛けあってあった甌と共に倒れて埋没したとも考えられたが、SI 1出土の甌や甌のように潰れずに出土している点や、掘り方が確認されたことなどから、何らかの意図があって個別に埋設された蓋然性が高いと考えた。なお、土器内堆積物についてリン酸分析を実施したところ、比較サンプル(地山)と同程度の含量であった。

20号土坑（S K20，第26·38图，图版14·18）

C 地区の東側の S X 1 内に位置する楕円形の、長径 0.54m、短径 0.40m、深さ 0.28m を測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器の壺(17)と瓶(18)があり、壺(17)が正位に据えた状態で、瓶がその北側に横向き(口縁部は北側)に据えられた状態で出土した。土器内堆積物についてリン酸分析を実施したところ、比較サンプル(地山)と同程度の含量であった。6世紀のものか。

### 21号土坑（S K21, 第26・38図, 図版14・18）

C地区の東側のS-X1内に位置する円形の土坑で、直径0.40m、深さ0.10mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。土師器の壺(19)が横向きに据えられた状態で出土している。土器内堆積物についてリン酸分析を実施したところ、比較サンプル(地山)と同程度の含量であった。6世紀のものか。

D 滅

1号溝（SD1、第26図）

C地区の西側に位置する溝で、南北方向に延びており、南側は調査区外へ広がっている。幅0.65m、深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は確認されていない。

## E その他の遺構

1号凹地状遺構（S X 1, 第27・39図, 図版14・20）

C地区の東側に位置する落ち込み状の遺構である。平面形は不整形で、長径6.65m、短径6.60m、深さ0.13mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器の瓶(20)と甕(21)がある。建物関連の遺構とするには、プランが明瞭でないこと、出土遺物も破片が多く散在的であること、炭化物や焼土などが集中する地点が確認されていないこと、低湿地的な環境であったことなどから根拠に乏しい。実際、花粉分析からはガマ属、オモダカ属が、種実遺体分析ではホタルイ属などの水湿地性植物が検出されており、埋没時においても低湿地のような環境であったことが推定される。埋土中の炭化物をAMSで年代測定を実施したところ、 $1600 \pm 30$ yrBPであり、1辺をみると483~533calADの範囲となる結果を得た。このためSX1は古墳時代中期から後期頃の遺構で、窪地が徐々に埋没したと考えられる。

### 2号環状溝遺構（S X 2, 第27図, 図版14）

C地区東側のSX1の東側に接して位置する、溝が環状に巡る遺構である。溝の幅0.50~1.00m、深さ0.13m、環状溝遺構の径は3.81m、内径2.70mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細~中粒砂を基調とする。出土遺物は土器師壺の小片がある。このように、環状に巡る溝は建物に付随するものが多いが、小規模なため詳細は不明である。このような、小規模な環状に巡る溝の類例として、県内

では江上A遺跡の弥生時代後期のS D06がある。自然科学分析を実施し、ホタルイ属やイボクサの種実遺体や、サジオモダカ属の花粉化石が確認されている。これらの分類群は溝や水田などに生育する水湿地性植物である。特にホタルイ属は多量に検出されていることから、溝にはホタルイ属が生育できるような湿润な環境が推定される。また、埋土についてリン酸分析を実施したところ、比較サンプル（地山）と同程度の含量であった。

## （2）平安時代

### A 土坑

22号土坑（SK22, 第30・40図, 図版21）

B地区の東寄りに位置する円形の土坑で、SD2を切る。長径0.92m, 短径0.78m, 深さ0.12mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は製塙土器（36）がある。

23号土坑（SK23, 第30図）

B地区の中央に位置する梢円形の土坑で、長径0.73m, 短径0.50m, 深さ0.20mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。人頭大の礫が底辺から出土している。出土遺物は土師器、製塙土器の小片がある。

24号土坑（SK24, 第30図）

B地区の中央に位置する梢円形の土坑で、長径0.69m, 短径0.40m, 深さ0.18mの土坑を測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器の小片がある。

25号土坑（SK25, 第30図）

B地区の東寄りに位置する不整形の土坑で、SD2を切る。長径4.49m, 短径1.87m, 深さ0.07mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器の小片がある。

26号土坑（SK26, 第30図）

B地区の中央に位置する梢円形の土坑で、長径0.65m, 短径0.46m, 深さ0.16mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器、製塙土器の小片がある。

27号土坑（SK27, 第30図）

B地区の中央に位置する梢円形の土坑で、SK28を切る。長径0.68m, 短径0.48m, 深さ0.04mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器の小片がある。

28号土坑（SK28, 第30図）

B地区の中央に位置する円形の土坑で、SK27に切られる。長径0.32m, 短径0.24m, 深さ0.33mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器、製塙土器がある。

29号土坑（SK29, 第30図）

B地区の中央に位置する円形の土坑で、長径0.36m, 短径0.34m, 深さ0.32mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器がある。

30号土坑（SK30, 第30・40図, 図版15・21）

B地区の中央に位置する梢円形の土坑で、長径0.79m, 短径0.50m, 深さ0.15mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器（37）、製塙土器がある。

31号土坑（SK31, 第30図）

B地区の中央に位置する円形の土坑で、長径0.28m, 短径0.25m, 深さ0.34mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は製塙土器の小片がある。

## 32号土坑（S K32, 第30図）

B地区の中央に位置する円形の土坑で、長径0.28m, 短径0.28m, 深さ0.09mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は須恵器の小片がある。

## 33号土坑（S K33, 第30・41図, 図版19）

B地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径1.78m, 短径0.62m, 深さ0.08mを測る。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とし、炭化物が混じる。出土遺物は土師器（38）が潰れた状態で確認されており、他に碗（39）や製塙土器がある。これらの帰属時期は10世紀～11世紀である。

## B 溝

## 2号溝（S D 2, 第30・40・43図, 図版15・21・22・27）

B地区的東寄りに位置する溝で、南北方向に直線的に延びる。南北の両端は調査区外へと広がっており、S K22やS K25に切られる溝である。幅2.25m, 深さ0.30mを測る。主軸は西へおよそ40°振る。埋土は黒色極細～細粒砂と黄褐色砂を基調とする。溝の断面図をみると、黒色極細～細粒砂（①～④）に切られるように黄褐色砂（⑤）が認められる。このため、黄褐色砂（⑤）によって埋もれたS D 2を再度掘削して築いたと考えられる。黄褐色砂中から遺物がほとんど出土していないが、黄褐色砂によって埋没してからさほど期間がたたないうちに構築されたと考えられる。なお、この黄褐色砂は淘汰が著しく良好であるため、洪水などによる短期間のうちに埋没したことが推定される。出土遺物は黒色極細～細粒砂中から土師器の碗皿類（43～53）、須恵器の皿（40）・壺（41）・甕（42）、黒色土器の碗（54）、製塙土器（55）、土錘（56～59）、板状金属製品（1）が確認されている。これらの遺物は概ね10世紀～11世紀の所産である。埋土（①層, ②層, ③層）について自然科学分析を実施したところ、植物珪酸体分析ではイネの穎（初）や葉部に由来するものが、花粉分析ではソバ属が、種実遺体分析ではイネやアワ近似種がそれぞれ検出された。

## 3号溝（S D 3, 第30図）

B地区的東端に位置する溝で、南北方向に延びる。S D 4との位置関係は互いに平行しており、南側は調査区外へ広がっている。幅0.34m, 深さ0.06mを測る。埋土は灰色シルト質極細～細粒砂を基調とする。出土遺物は確認されていない。

## 4号溝（S D 4, 第30図）

B地区的東端に位置し、S D 3と平行に延びる溝で、南側は調査区外へ広がっている。幅0.55m, 深さ0.06mを測る。埋土は灰色シルト質極細～細粒砂を基調とする。出土遺物は確認されていない。S D 3と共に、耕作に伴う小溝と考えられる。

## （3）中世

## A 溝・自然流路

## 5号溝（S D 5, 第35・42図, 図版16）

A地区の東側を流れている自然流路である。北西から南東方向に延びており、調査区外へ広がっている。幅15.35m, 深さ1.10mを測る。埋土は黒色～オリーブ黒シルト質粘土を基調とし、有機物を多く含む。下位ほど未分解の有機物に富み、上位ほど分解されている。発掘調査の時点で底面からの湧水が著しく、また、堆積状況をみても淘汰が良好であるため一定の水流があったと考えられる。出土遺物は土師器、円形板（1）がある。なお、埋土（②層, ④層, ⑤層, ⑥層）について自然科学分析を実施したところ、稻作や畑作を直接裏付けるような自然科学分析データは得られていない。

## 6号溝（SD 6, 第36・41・42図, 図版25・26）

A地区の西端に位置する溝で、自然流路とみられる。南北方向に延びており、調査区外へ広がっている。現存幅9.50m、深さ1.64mを測る。埋土は黒色～オリーブ黒シルト質粘土を基調とし、有機物を多く含む。出土遺物は土師器、須恵器、中世土師器、唐津の碗（96）、漆器椀（5）、折敷（2・3）、板材（4）、角材（6）がある。

## 7号溝（SD 7, 第36図）

B地区の西寄りに位置する不整形な溝で、北西から南東方向に延びて、調査区外へ広がっている。幅0.58m、深さ0.12mを測る。埋土はオリーブ黒色から灰色シルト質細～中粒砂を基調とする。堆積物は粒径が比較的均一であるため、水流による堆積とみなされる。出土遺物は確認されていない。

## 8号溝（SD 8, 第36図）

B地区の中央に位置する溝で、北西から南東方向に延びている。幅1.00m、深さ0.12mを測る。比較的幅広い溝であるが浅く、北西側の広がりは不明瞭である。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器がある。出土遺物は平安時代のものがほとんどである。SD 9との配置や規模、埋土などから中世の溝と判断した。

## 9号溝（SD 9, 第36図, 図版26）

B地区の中央に位置する溝で、北西から南東方向に延びている。幅0.64m、深さ0.06mを測る。北西側は浅くなりながら広がる。埋土は黒色極細～細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器、須恵器、珠洲、製塙土器、板材（7）がある。

## 4 遺物

出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器、中世土師器、珠洲、越前、越中瀬戸、唐津、伊万里、近世陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品など、古墳時代から近世に至る多様な遺物が出土しているが、主体となるのは古墳時代・飛鳥時代と平安時代のものである。古墳時代の遺物には土師器があり、器種では椀・高杯・壺・甕・瓶で構成されている。須恵器については、小破片数点が出土したに過ぎない。これらの遺物の帰属時期は、S X 1出土の炭化物についてC14年代測定を実施したところ、5世紀後葉～6世紀前葉の実年代が得られた。そのため、これらの古墳時代の土師器についても概ねこの時期と考えられる。飛鳥時代の遺物には、S I 1出土の一括性の高い土器群がある。器種には椀、甕、瓶で構成されており、支脚を伴う。須恵器は確認されていない。椀（1）の底面には製作時に広葉樹の葉脈を意図的に押しつけた痕跡が認められる。のことから、飛鳥時代でも古い時期（7世紀前葉～中葉）を示していると考えられる。平安時代の土器には土師器、須恵器があるが、須恵器の出土量は少ない。土師器の器種としては椀と皿、須恵器は皿・壺・甕で構成されている。その他には製塙土器、土錘などの土製品がある。帰属時期は10世紀～11世紀である。中世の遺物には中世土師器、珠洲、越前、越中瀬戸、唐津、伊万里、近世陶磁器、木製品、石製品、金属製品がある。出土量は少なく、遺構に伴うものはほとんどみられない。遺物の帰属時期は12世紀後半～19世紀である。

## （1）土器・陶磁器・土製品

## A 古墳時代・飛鳥時代（第37～39図, 図版17～21）

1～10は1号竪穴建物（S I 1）の一括出土資料である。1～3は椀で、2・3は内面に黒色処理

を施した黒色土器である。1は浅い体部から、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整が施され、外面には赤彩が施される。底部外面には製作時に広葉樹の葉脈を意図的に押しつけた痕跡が認められる。2は浅い体部から、口縁部は外反気味に立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面ミガキ調整で、底部外面にはヘラ状工具による線刻が施される。3はやや深みのある体部を有し、内外面ミガキ調整が施される。底部外面には「十」の線刻が描かれている。4～6は瓶である。4は長い胴部から口縁部にかけて「く」字状に緩く屈曲する。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸くおさめる。把手は付かない。内面縦方向のナデ調整、外面ハケメ調整が施され、内面には粘土紐接合痕がみられる。5は胴部が外傾しながら立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸くおさめる。胴部には把手の痕跡が確認できる。内面には丁寧なミガキ調整、外面の口縁部と胴部下位は丁寧なミガキ調整、胴部上位はハケメ調整が施される。6は胴部の下半部分の破片で、外傾しながら立ち上がる胴部を有する。内外面ハケメ調整で部分的にミガキ調整が施される。7・8は甕である。7は長めの胴部に、口縁部へは「く」字状に屈曲する。口縁部は外反気味で、端部は丸くおさめる。内外面ハケメ調整が施される。8も長い胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲する。短めの口縁部は外反気味で、端部は丸くおさめる。内外面ハケメ調整で、口縁部はヨコナデ調整が施される。9・10は支脚で、9は現存長14.0cm、断面は円形を呈し、先端に被熱痕と煤がみられる。10は破片のため全体を把握するには至らないが、推定断面は方形を呈する。これらの遺物は7世紀前葉～中葉に帰属すると考えられる。11は7号土坑（SK7）出土の土師器の椀である。体部は内湾気味に緩く立ち上がり、口縁部との境は小さく屈曲する。口縁部は短く外傾し、端部はつまみ上げ気味にまとめている。内面ナデ調整、口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面ケズリ調整が施される。5世紀後半～6世紀前半である。12は8号土坑（SK8）出土の土師器の甕である。長い胴部から、緩やかに外反する口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。全体に器壁が厚く、作りにもシャープさに欠ける。内外面粗いハケメ調整が施され、外面には煤が付着する。7世紀のものか。13は9号土坑（SK9）出土の土師器の高杯である。平坦な杯部から、緩やかに外傾しながら立ち上がる。内面ミガキ調整、外面ケズリ調整が施される。5世紀後半～6世紀後半である。14は14号土坑（SK14）出土の土師器の壺である。球形の胴部から口縁部にかけて「く」字状に強く屈曲し、外傾する長い口縁部を有する。端部は丸くおさめる。内面ナデ調整、外面は摩滅しているもののミガキ調整を基調としている。6世紀のものか。15は18号土坑（SK18）出土の土師器の甕である。長い胴部から口縁部へは「く」字状に緩く屈曲する。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面ナデ調整、外面ハケメ調整が施される。外面には煤が付着する。6世紀のものか。16は19号土坑（SK19）出土の土師器の瓶である。丸みのある胴部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部を丸くおさめる。内面ナデ調整、外面ハケメ調整が施されるが、全体に摩滅が著しい。6世紀のものか。17・18は20号土坑（SK20）出土の甕と瓶である。17は丸い底部から、内湾気味に立ち上がる胴部がつづく。肩はやや張り気味で、口縁部へは「く」字状に緩く屈曲する。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面ハケメ調整で、口縁部はヨコナデ調整が施される。18は器高のないタイプの瓶で、緩やかに内湾気味に立ち上がる胴部に、直立気味の口縁部を有する。口縁端部は内湾気味におさめる。内面ハケメ調整のちケズリ調整、外面ハケメ調整で一部ミガキ調整が施される。6世紀のものか。19は21号土坑（SK21）出土の土師器の甕である。球形に近い胴部から、口縁部へは「く」字状に屈曲する。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。内外面ハケメ調整が施され、器壁表面は著しく剥離している。6世紀のものか。20～21は1号凹地状遺構（SX1）出土の土師器

で、20は椀、21は壺である。20は口縁部がわずかに内湾気味に上がり、端部をつまみ上げ気味におさめる。内外面ナデ調整が施される。21は長い胴部に、口縁部へは「く」字状に屈曲する。内面ナデ調整で、下位はケズリ調整、外面ハケメ調整がそれぞれ施される。6世紀中頃のものか。22~27は土器群、28~35は包含層出土の土器である。22・23・25~27は壺である。22は球形に近い胴部から、口縁部へは「く」字状に屈曲する。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面ケズリ調整が施される。23は長い胴部に、口縁部は外反気味に立ち上がる。内面ケズリ調整のちナデ調整、外面ハケメ調整で、下位はケズリ調整が施される。25は土師器の壺で、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。26は小型の壺で、丸い底部から、内湾気味の胴部を有する。口縁部へは「く」字状屈曲して外反気味に立ち上がる。端部を丸くおさめる。外面ハケメ調整、下位はケズリ調整が施される。27は壺の胴部で、内外面粗いハケメ調整が施される。24は高杯で、下方に向かって開き気味の脚部に、脚裾部は広がる。外面ミガキ調整が施される。28は壺で、肩の張らない胴部から口縁部へは「く」字状に緩く屈曲する。口縁部の途中で折れ曲がり有段状を呈する。内面ハケメ調整、外面ハケメ調整のち不定方向のナデ調整が施される。29は椀で、平坦な底部から、内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁部はやや外反し、端部をつまみ出し気味におさめる。30は壺とみられる口縁部の破片で、外反気味に立ち上がる。端部は丸くおさめる。内外面ケズリ調整が施される。31は壺や瓶などの把手部分で、断面は楕円形を呈する。32は小型の壺で、平坦な底部から、球形に近い胴部を有する。口縁部へは「く」字状に強く屈曲し、やや長い外傾する口縁部へづく。口縁端部は小さくつまみ出す。外面ハケメ調整が施される。33~35は高杯の脚部である。33は脚裾部が開き、外面にミガキ調整が施される。34は摩滅のため調整不明である。35は柱状気味の脚部に、脚裾部はあまり広がらない。外面ミガキ調整が施される。

#### B 平安時代（第40・41図、図版19・21~24）

36は22号土坑（S K22）出土の製塙土器である。平底タイプの製塙土器と思われる個体で、外傾しながら立ち上がる体部を有する。内外面は粗いナデ調整で、粘土紐接合痕がみられる。37は30号土坑（S K30）出土の土師器の椀Aである。回転糸切りによる切り離しの底部から、体部は外傾しながら立ち上がる。口縁部とは緩やかに屈曲し、口縁部はやや外反する。端部は丸くおさめる。器壁は薄く仕上げており、法量は口径12.4cm、器高4.0cmである。10世紀~11世紀のものである。38・39は33号土坑（S K30）出土の土師器の椀である。38は高い高台に、やや厚みのある底部を有する。体部は直線的に外傾し、口縁端部を丸くおさめる。39は回転糸切りによる切り離しの底部から、体部は外傾しながら立ち上がる。口縁部は内湾気味で、端部を丸くおさめる。10世紀~11世紀のものである。40~59は2号溝（S D 2）出土の土器である。40~42は須恵器、43~53は土師器で、54は黒色土器である。40は皿Bで、高台は三角形を呈する。高台見込みには回転糸切り痕がみられる。41は瓶で、平坦な底部から屈曲して、直線的な胴部へづく。42は壺の胴部で、口縁部へは「く」字状に屈曲する。内面同心円状の当て具痕調整、外面粗いタタキ調整が施される。43~48は椀Aである。回転糸切りの平坦な底部から、屈曲して内湾気味に立ち上がる体部を有する。43の口縁部はやや外反気味で、端部を丸くおさめる。49~51は椀Bで、「ハ」字状の高い高台を有している。平坦な底部から、体部へは内湾気味に緩やかに立ち上がる。高台見込みには回転糸切り痕がみられる。49の法量は口径が16.3cm、器壁は薄く仕上げている。52は皿Bとみられる個体である。高い高台を有するが、内外面摩滅が著しい。53は皿Bである。53は高台が欠損している。回転糸切りが残る厚みのある底部から緩やかに体部へづく。口縁部は外反気味で、端部を丸くおさめる。54は黒色土器の椀Bで、高台は三角形を呈し、

ややシャープに作られている。高台見込みには回転糸切り痕がみられ、内面はミガキ調整が施される。55は製塙土器で、平坦な底部から、屈曲して直立気味に立ち上がる体部へとづく。内外面粗いナデ調整で、粘土紐接合痕がみられる。56~59は土錘で、樽形を呈する。重量は56で58.43gを量る。これらの遺物の帰属時期は10世紀~11世紀である。60~95は包含層出土の土器である。60は須恵器の皿Bで、平坦な底部から内湾気味に屈曲し体部へとづく。高台は三角に近い形を呈している。61~71は土師器で、72~77は黒色土器である。61~69は椀で、64~68は椀A、69は椀Bである。口縁部が内湾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめるタイプ(61~64)と体部から口縁部にかけて屈曲するタイプ(62~63)がある。65~68は回転糸切り痕がみられる底部である。69は深みのあるタイプで、高台は高く「ハ」字状を呈する。法量は口径14.7cmである。被熱しており器壁表面が剥離している。70~71は皿である。70は皿Bの底部で、高台がやや高く、三角形を呈する。71は外反気味の口縁部に端部を丸くおさめる。72~77は黒色土器の椀である。72は口縁端部を小さくつまみ出す。内面のミガキ調整は丁寧に施されている。73~77は底部で、高台が三角形のタイプ(73・76・77)、「ハ」字状に高いタイプ(74)、四角形のタイプ(75)がある。また、74・75・77は高台見込みに回転糸切り痕がみられる。78~83は製塙土器である。78~80は口縁部、81は体部、82・83は底部で、いずれも平底で、体部は直線的に外傾し、外反気味の口縁部を有するタイプとみられる。84~95は土錘で、樽形を呈する。重量は50~60gのものが多い。

### C 中近世（第41図、図版25）

96は6号溝（SD 6）出土の唐津の碗である。白化粧土にハケメ文様が施された口縁部の破片である。17世紀後半~18世紀とみられる。97~103は包含層出土の土器・陶磁器である。97は越前の擂鉢で、平坦な底部から、体部へは屈曲して外傾する。鉗目は8条一単位である。98は中世土師器の皿で、いわゆるロクロ土師器である。回転糸切りの底部から、やや屈曲して外傾する体部へとづく。口縁部はわずかに外反し、端部は外方へ小さくつまみ出す。99は越中瀬戸の鉄釉碗で、底部は削り出し高台で露胎である。100は唐津の碗で、陶胎染付で、底部と高台部分に鉄絵による2条の線が巡る。101は京焼風唐津の碗の底部破片で、褐釉がかかる。102は唐津の擂鉢で、内外面に鉄釉がかかる。103は伊万里の皿で、削り出し高台を有する。内面見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。内面には染め付けによる圈線が巡り、二重斜格子文が配されている。

#### (2) 木製品（第42図、図版25・26）

本製品は漆器椀2点、折敷3点、栓1点、円形板1点、板材3点、角材1点、棒材2点を図示しており、概ね、中近世の所産と考えられる。1~7は遺構出土、8~13は包含層出土の木製品である。1は中近世の溝である5号溝（SD 5）出土の円形板で、約1/3程度残存している。裏面は炭化している。桶や曲物の底板と考えられ、樹種はスギである。2~6は中近世の溝である6号溝（SD 6）出土の木製品で、2・3は折敷、4は板材、5は漆器椀、6は角材である。2には釘跡が2箇所みられる。5は内外面黒漆で、炭粉漆下地である。樹種は2~4でスギ、6でモクレン属、5でケヤキである。7は9号溝（SD 9）出土の板材で、下端は斜め方向の切形を呈する。樹種はスギである。8~15は包含層出土の木製品である。8は内外面黒漆の漆器椀で炭粉漆下地である。樹種はケヤキである。9は栓で、下端が切形の円錐形を呈する。樹種はスギである。10は折敷で、約1/3程度残存している。表面には黒漆が残存している。樹種はヒノキである。11は板材で、下端は切形を呈する。樹種はスギである。12・13は棒材で、樹種はスギである。

## (3) 石製品 (第43図、図版27)

石製品には敲石？、砥石の2種類4点を図示している。1・2は遺構出土、3・4は包含層出土のものである。1は飛鳥時代の1号堅穴建物（S I 1）出土の敲石とみられるもので、丸い下端に敲打痕がある。また、表面には散点的に鉛滓粒が付着している。石材は砂岩である。2は平安時代の2号溝（S D 2）出土の砥石で、4面を砥面として使用している。石材は凝灰質砂岩である。3・4は砥石で、3は部分的であるが4面、4は2面を砥面として使用している。石材は3で流紋岩、4で緑色凝灰岩である。

## (4) 金属製品 (第43図、図版27)

金属製品には銅鏡、蓋状金属製品、馬鍤、金属片の4種類4点を示した。1はS D 2出土の金属片である。2は銅鏡で熙寧元寶である。3は蓋状を呈しており、天井部に紐を有している。紐の幅は2～3mmで、帯状のものを「匂」状に作り出している。材質は真鍮製とみられる。全体が半球形を呈しているため、同じような半球形を組み合わせて、鈴のようなものであった可能性も考えられる。4は馬鍤で、長さ19.2cm、幅2.7cmを測る。

## 5 総括

今回の調査では古墳時代・飛鳥時代、平安時代、中近世の遺構がそれぞれ確認された。能越自動車道建設に先立つ調査（以下、既往の調査）では、古墳時代（5世紀中頃）、古代前期、古代後期、中世、近世の遺構が確認されている。このうち、今回検出された遺構の時期と整合するのは古代後期（平安時代）、中近世である。新たに確認された遺構の時期としては古墳時代（5世紀末～6世紀前半）、飛鳥時代（7世紀前葉～中葉）がある。飛鳥時代では掘立柱建物や堅穴建物などの建物遺構が検出されており、五社遺跡における古墳時代と古代前期の間の時期に集落が成立していたことが確認された。第18図には今回の調査地と既往の調査地を組み合わせた主要遺構変遷図を示した。以下に時期ごとに記述していく。

古墳時代（5世紀末～6世紀前半）の遺構は、C地区に分布するが密度は希薄である。主な遺構には土坑（S K 7・S K 14・S K 18～S K 21）、凹地状遺構（S X 1）、環状溝遺構（S X 2）が検出されているが、明確な建物遺構は確認されていない。土坑にはS K 18～S K 21のように甕や瓶を埋設したもののが見受けられた。S X 2は小規模な環状に巡る溝で建物に関連する遺構とも考えられるが不明な点が多い遺構である。埋設土器（S K 18～S K 21）と何らかの関係があるのかもしれない。S X 1は凹地状遺構で埋没時において低湿地のような環境であり、徐々に埋没したと推定される。底面の炭化物から483～533calADの年代が得られている。古墳時代の遺構は、性格がよく分からぬるものが多く、現時点では評価しづらいが、既往の調査では、5世紀中頃の住居群が確認されている。ここでは、時期差があるもののそれらにつづく遺構群としてとらえておく。

飛鳥時代（7世紀前葉～中葉）の遺構は、古墳時代の遺構と同一検出面で確認されている。C地区に分布し、古墳時代の遺構分布域と重複している。掘立柱建物（S B 1～S B 3）、堅穴建物（S I 1）、土坑（S K 1～S K 6・S K 8～S K 13・S K 15～S K 17）、溝（S D 1）があり、西側は谷地形となっている。掘立柱建物と堅穴建物は主軸の方位の違いから大きく2群に分類できる（第17図）。S B 2・S B 3・S I 1（A群）とS B 1（B群）とのグループである。まずA群だが、S I 1から一括性の高い土器群が出土しており、帰属時期は7世紀前葉～中葉と推定される。このことから、主軸方位が

同様なSB2・SB3も同じような時期と考えられる。SB1の時期は遺構からの出土遺物がほとんどなく、遺構相互の切り合いも存在しないため不明である。しかし、既往の調査で古代前期の掘立柱建物の中に、SB1と同じような主軸方位を有するものが見受けられることから、根拠としては非常に曖昧であるのだが、ここでは便宜的にA群→B群という変遷案を提示しておく。ただし、SB1・SB2・SB3の3棟の掘立柱建物の柱穴の形態や規模において明確な違いは認められず、埋土も類似していることから、短期間で変遷した可能性も考えられる。なお、SI1を含むA群の7世紀代の類例について、県内で土器を出土する遺構の事例や資料が少なく、更に、須恵器を伴わないか少量の場合が多い。このため、7世紀前葉～中葉という年代観については今後の調査の進展やデータの蓄積に伴って、再度詳細に検討すべき課題である。なお、古墳時代～飛鳥時代の包含層であるIV層からは、花粉分析結果からイネ属の花粉が若干含まれていることが判明している。のことから、生産基盤が農業であり、近隣で稲作が行われていた可能性が示唆された。

平安時代（10世紀～11世紀）の遺構は、B地区の中央から東寄りに分布している。検出された主な遺構は、土坑（SK22～SK33）、溝（SD2～SD4）があり、明確な建物関連の遺構は確認されていない。しかしながら、中央北端に土坑群が分布していることから、調査区外に掘立柱建物などの建物が存在していた可能性がある。SD2は直線的に構築された区画溝であり、小溝であるSD3・4は耕作に伴うものと考えられる。SD2の埋土について自然科学分析を実施したところ、植物珪酸体分析ではイネの穎（穀）や葉部に由来するものが、花粉分析ではソバ属が、種実遺体分析ではイネやアワ近似種がそれぞれ検出された。この結果から、SD2の近隣や遺跡周辺では稲作や畑作が行わっていたと考えられる。このSD2は既往の調査のSD301からつづくとみられ、このSD301を境に東側からは建物遺構は確認されなくなる。このことから、SD2は居住域と生産域を区画していた役割があったと推定される。岡本氏は建物群を区画する溝が大きく4時期に区分され、溝間は1町（約109m）になるため条里地割りを示していると推定している<sup>注4</sup>。今回、検出されたSD2は西におよそ45°程度の主軸を持つ2期の地割りに近いと考えられる。

中近世の遺構にはA地区とB地区の西側半分に分布している。遺構には土坑・溝（SD7～SD9）、自然流路（SD5・SD6）があり、建物などは確認されていない。A地区には自然流路が流れおり、B地区のSD7より東側の谷とした一連の自然地形ととらえられ、中近世の集落の縁辺部に相当すると考えられる。稲作や畑作を直接裏付けるような遺構や自然科学分析データは得られていないが、既往の調査や史料などから、耕作地として利用されていたと推定される。

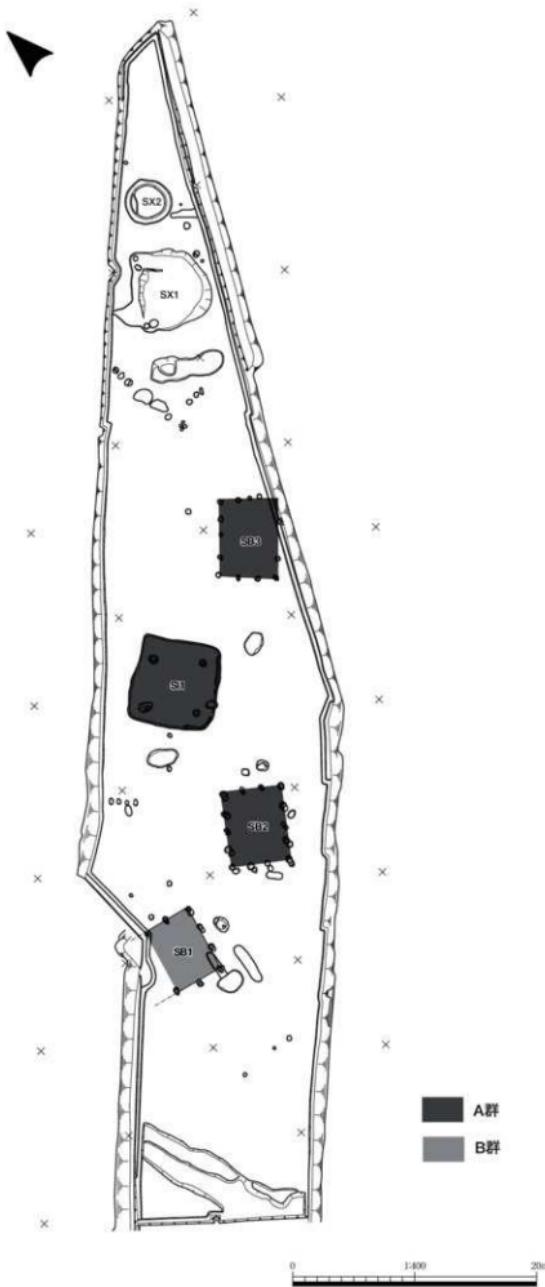
なお、飛鳥時代の掘立柱建物の柱穴にみられた地震の痕跡は、横ずれ現象が南北方向に最大約0.4mの規模で確認されたが、噴砂などの液状化現象はみられなかった。この、地震の時期については飛鳥時代以降としか判断できず、詳細時期の特定には至っていない。既往の調査では、横ずれが確認されているのは古代末以降と中世前半以降の2面である。また、近隣の開辟大溝遺跡でも、地震による痕跡が発掘されており、天正地震（1586）と飛越地震（1858）の2つの地震が大きく関わっていた可能性が推定されている<sup>注5</sup>。今回、確認された地震の痕跡が天正地震（1586）なのか、飛越地震（1858）なのか、それとも全く別の地震なのかは不明であるが、人々の生活が一変するような大きな地震が起きていたことは確かなことである。

（島田亮仁）

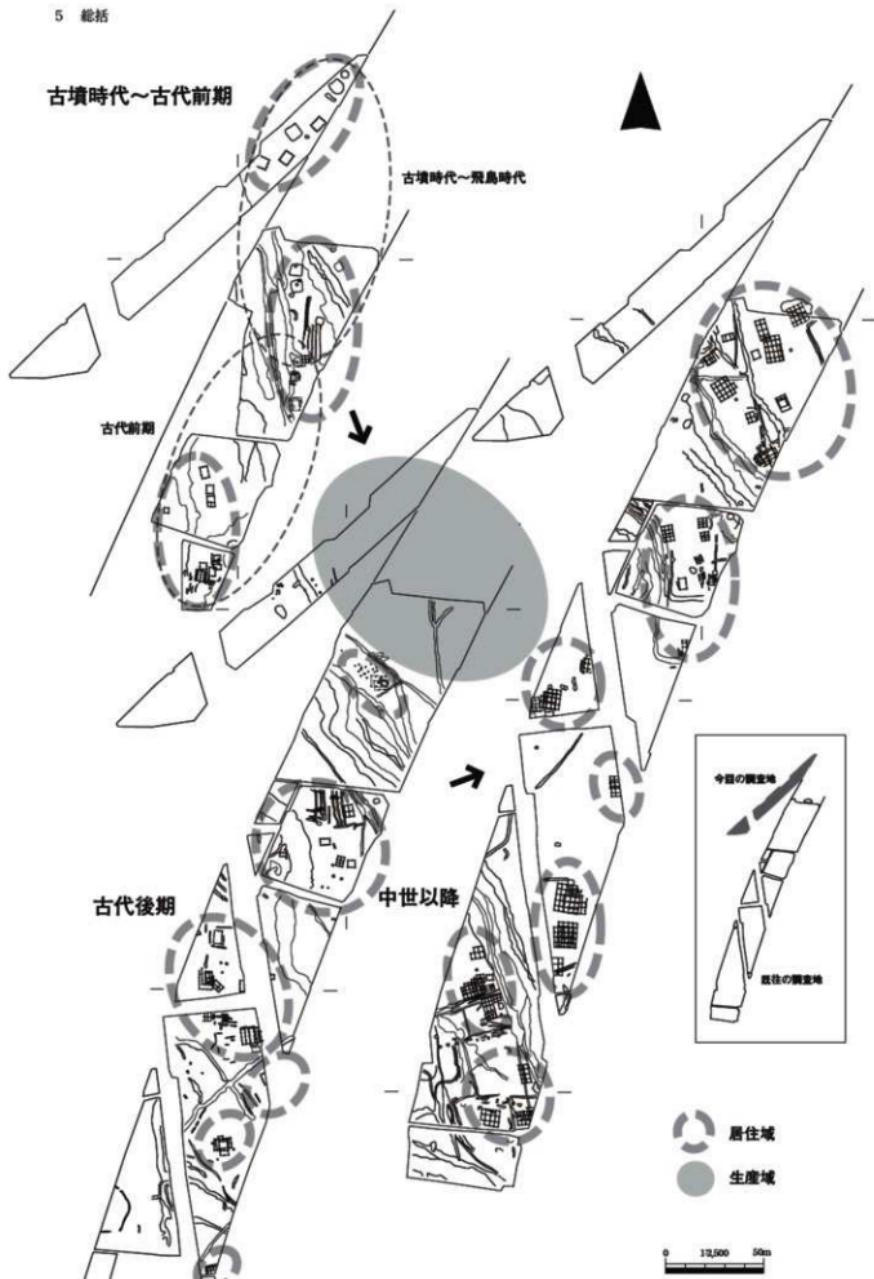
## 注

注1 財団法人富山県文化振興財团蔵文化財調査事務所 2000 「開軒大溝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告」

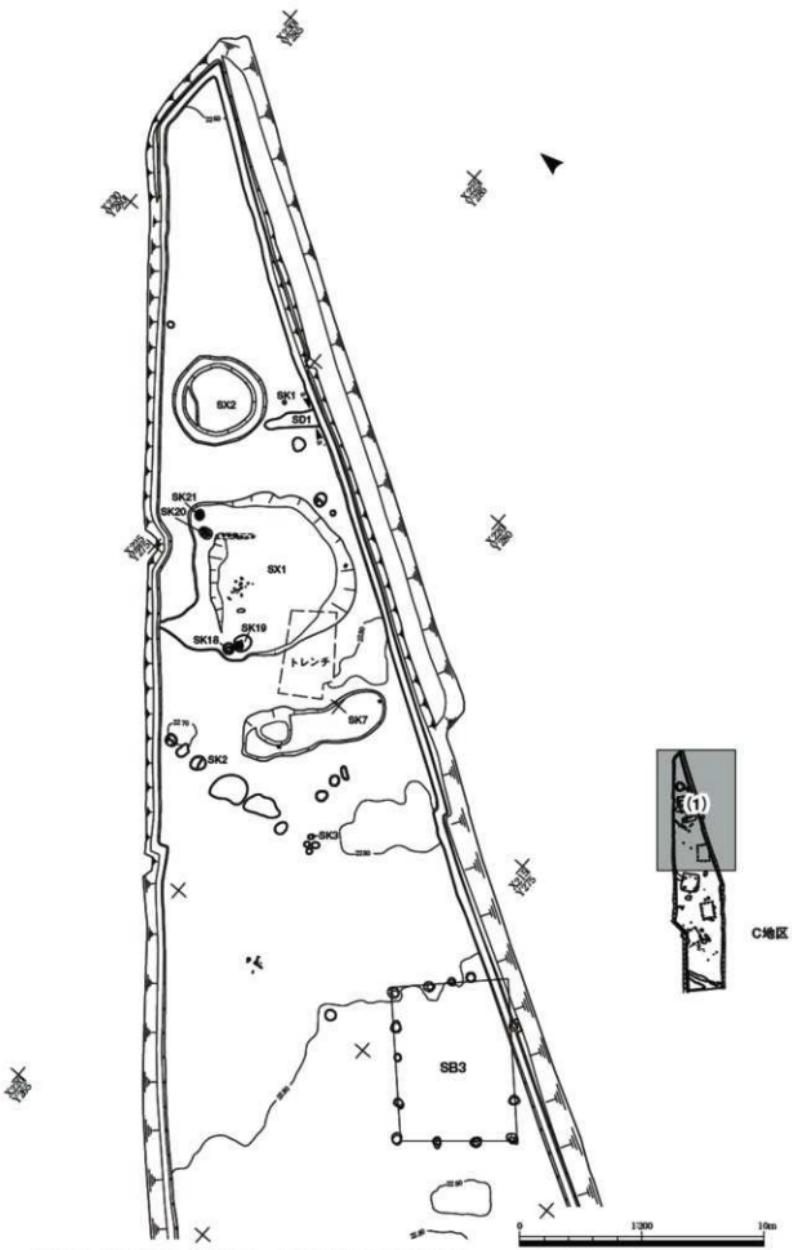
- 注2 河西種二 1993 「五社遺跡調査で思ったこと」『經就文化財年報（4）』財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 注3 富山県教育委員会 1982 「小杉町流通業務田地内道路群 第3・4次緊急発掘調査概要」
- 注4 岡本淳一郎 1998 「五社遺跡古代後期の集落構造について」『五社遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所
- 注5 寒川 旭 2000 「閇静大泥道路で検出された波状化現象の痕跡」『閇静大泥道路・地崎遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所



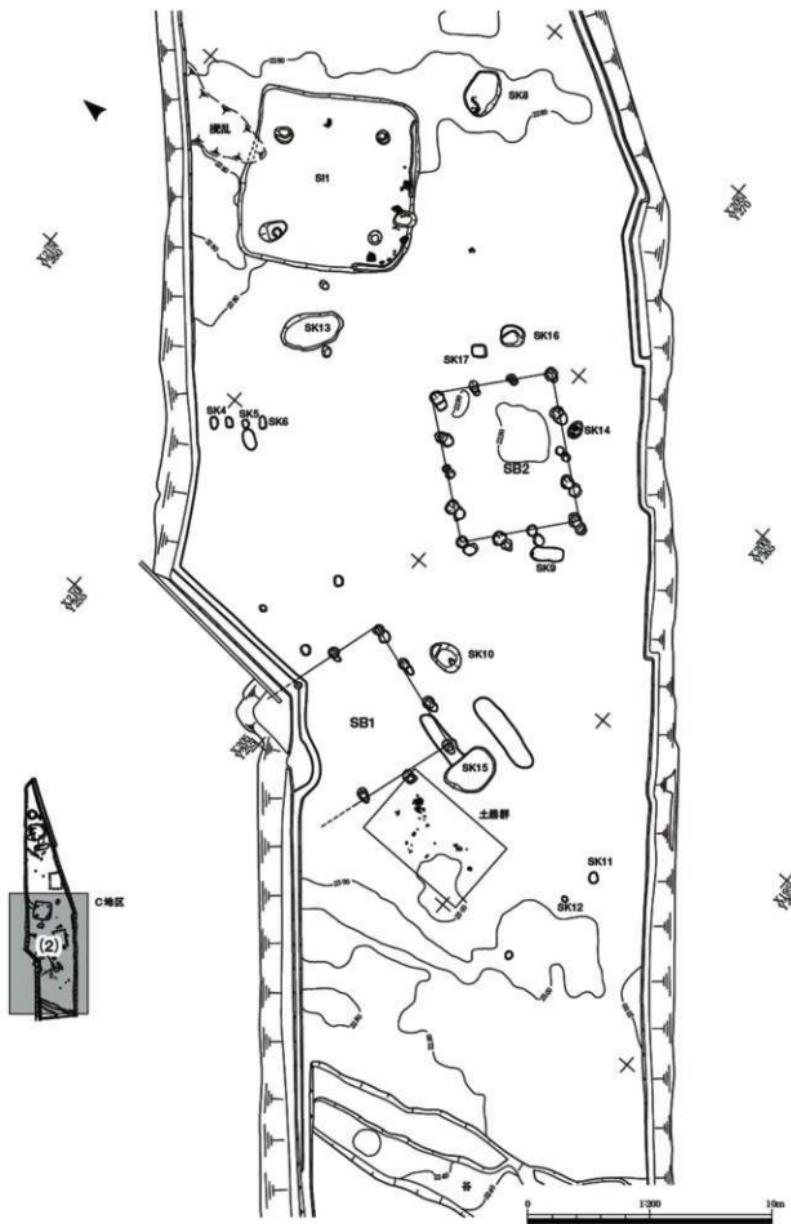
第17図 五社遺跡飛鳥時代の建物配置図



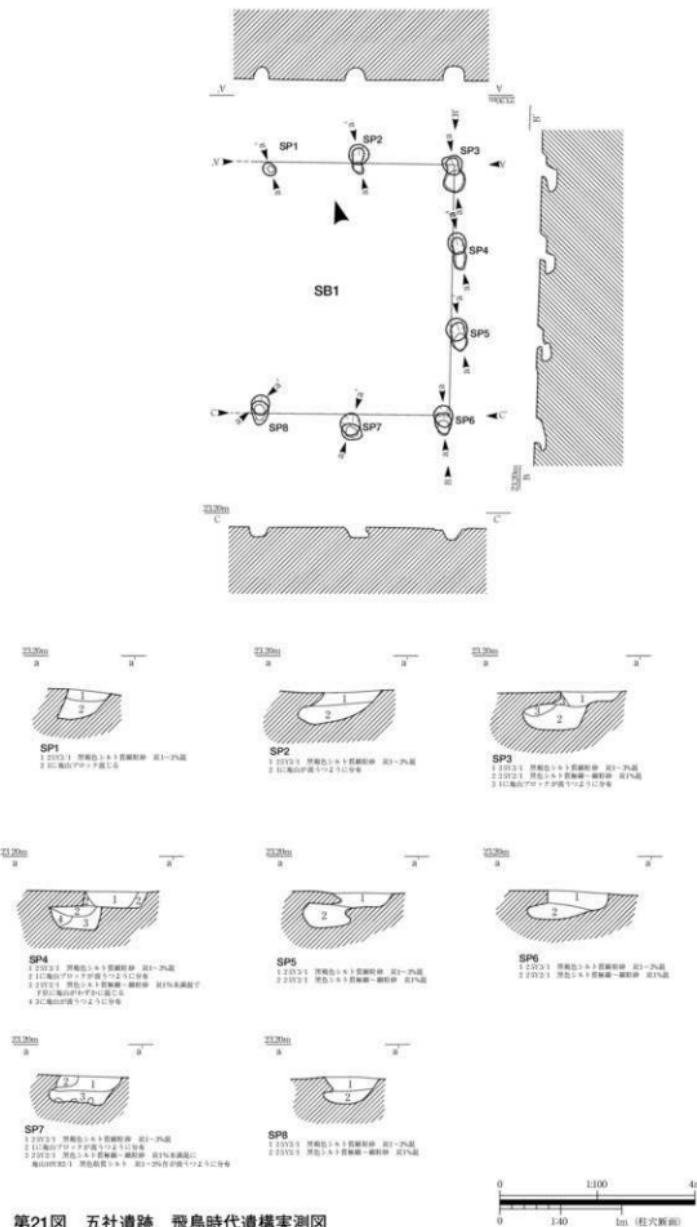
第18図 五社遺跡主要構造変遷図



第19図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構全体図(1)

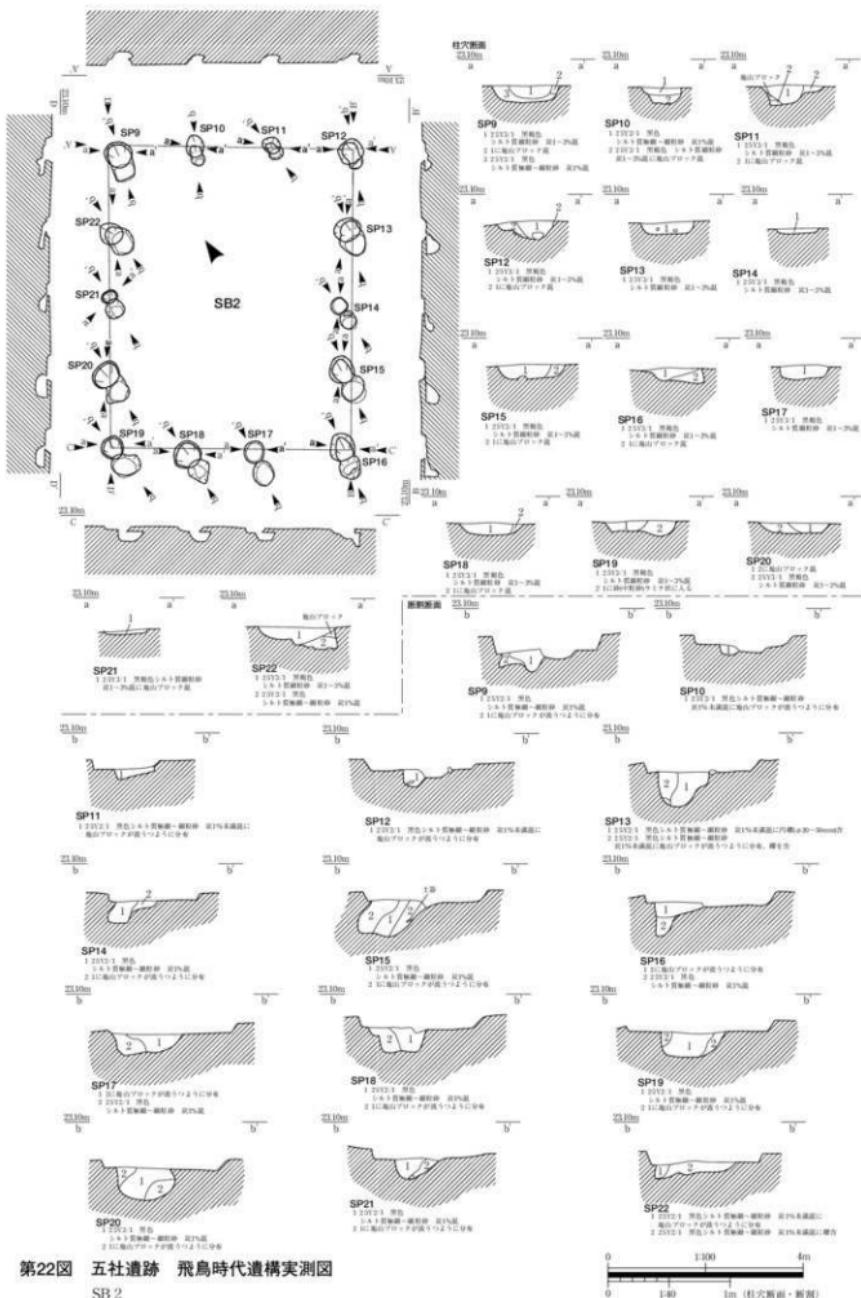


第20図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構全体図(2)



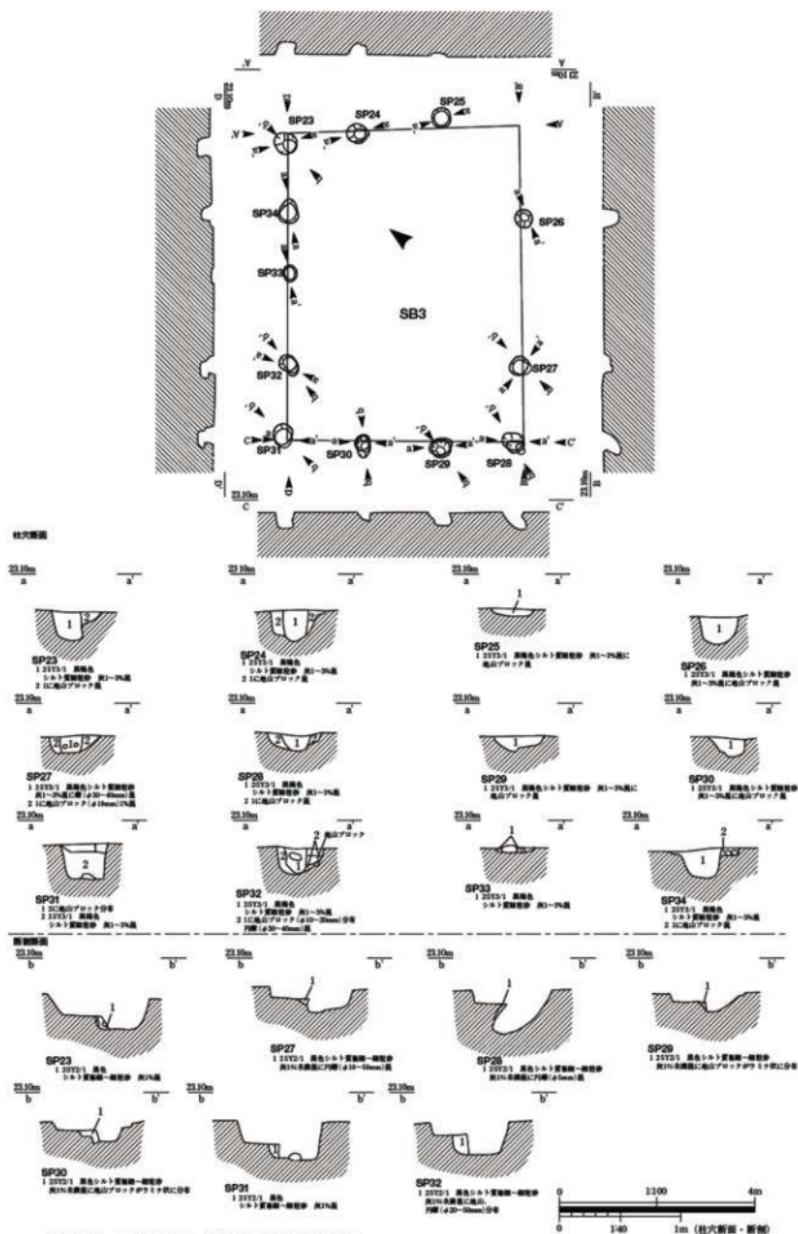
第21図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図

SB 1



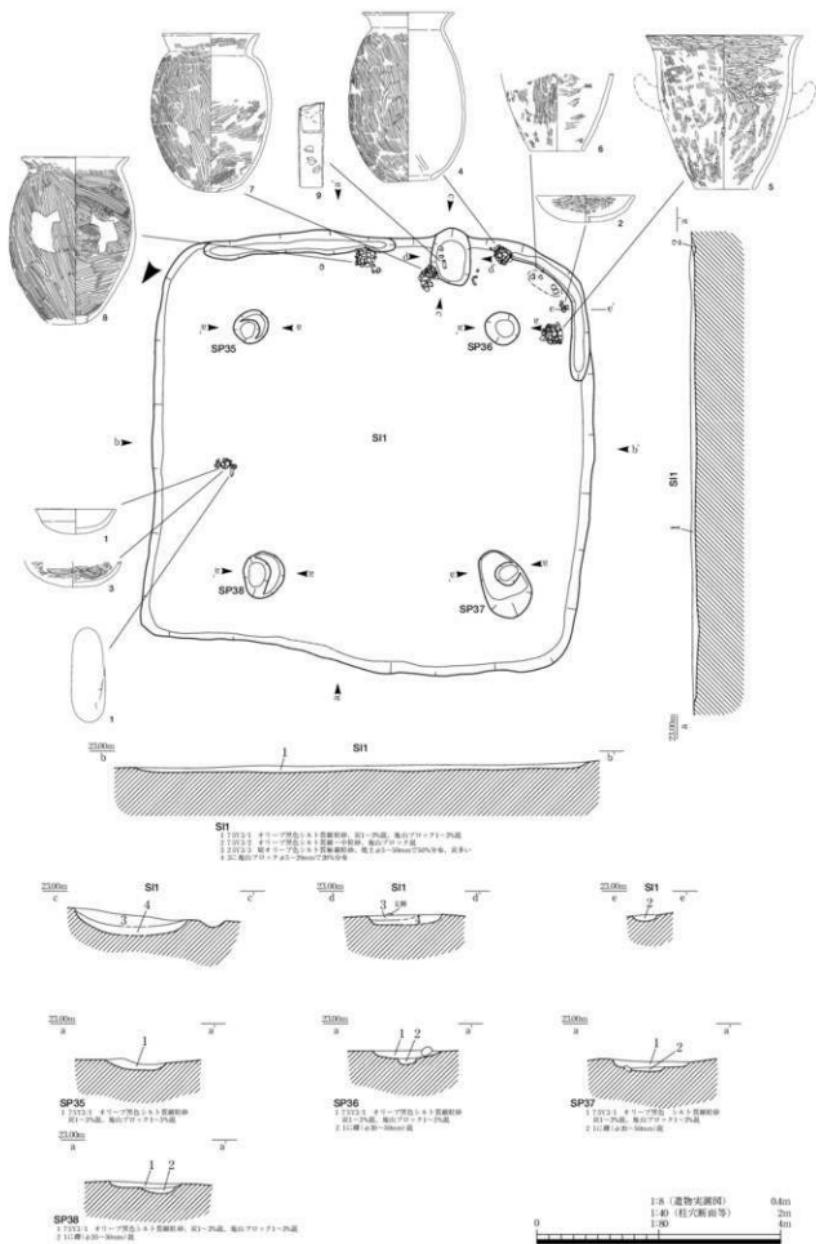
第22図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図

SB 2



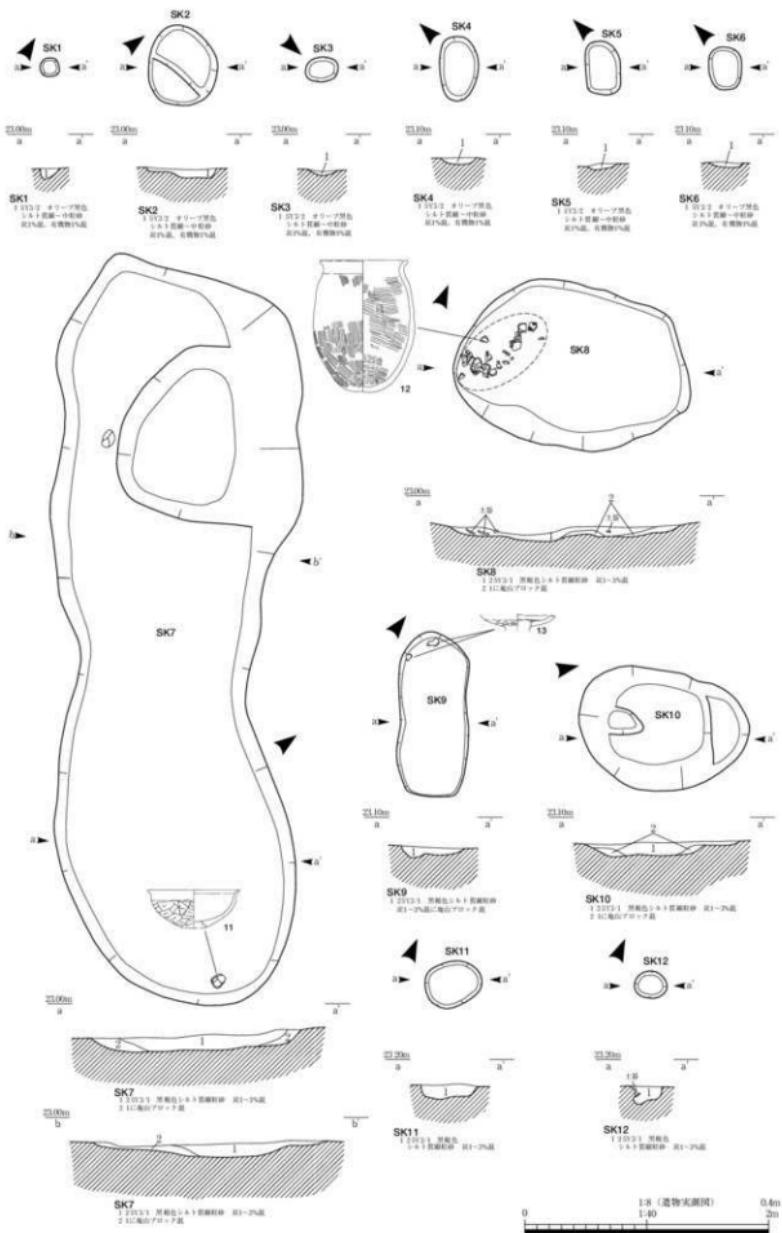
第23図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図

SB 3



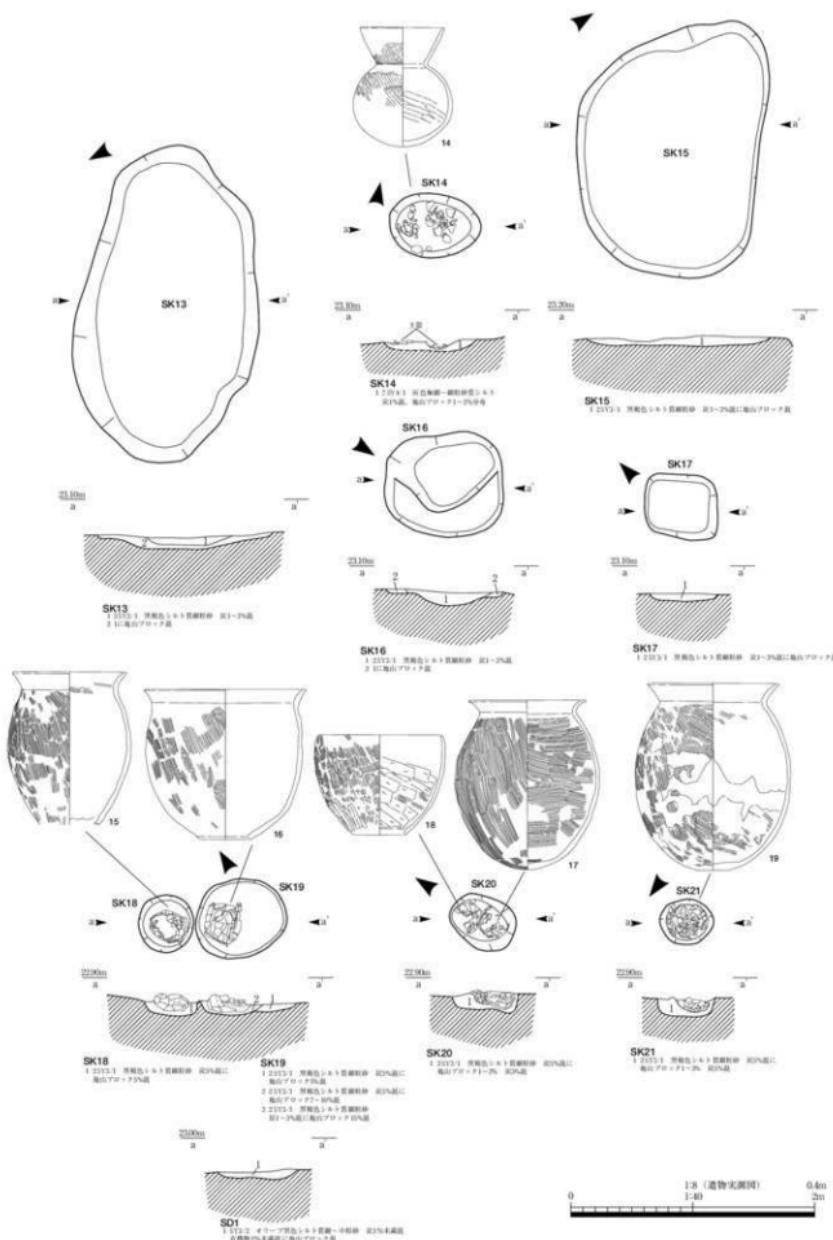
第24図 五社遺跡 飛鳥時代遺構実測図

SI 1



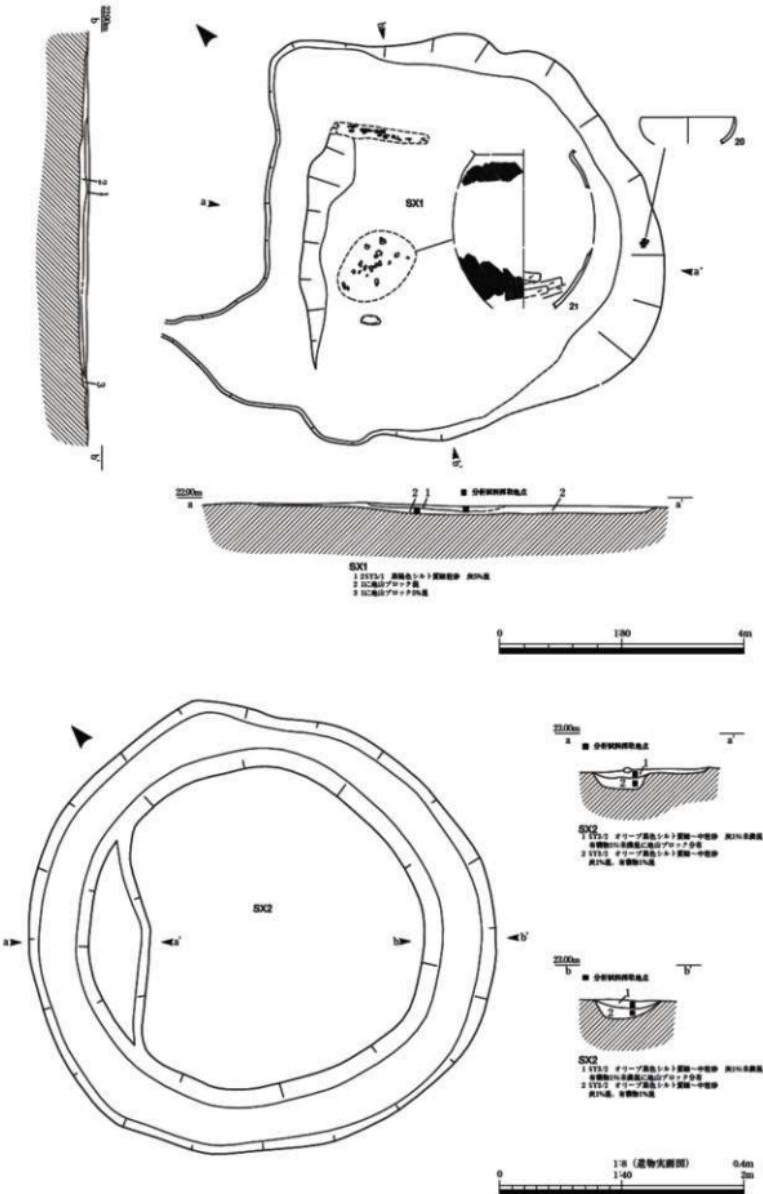
第25図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図

SK 1 ~ SK12

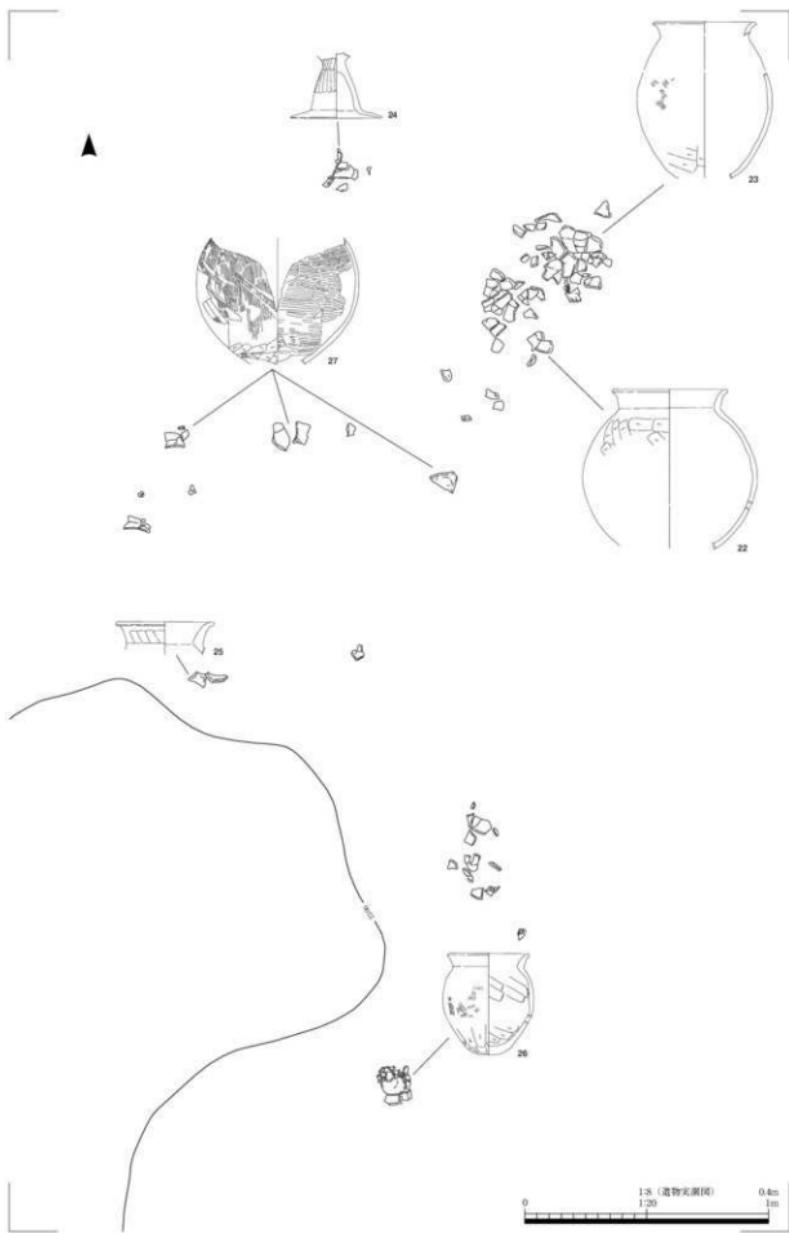


第26図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図

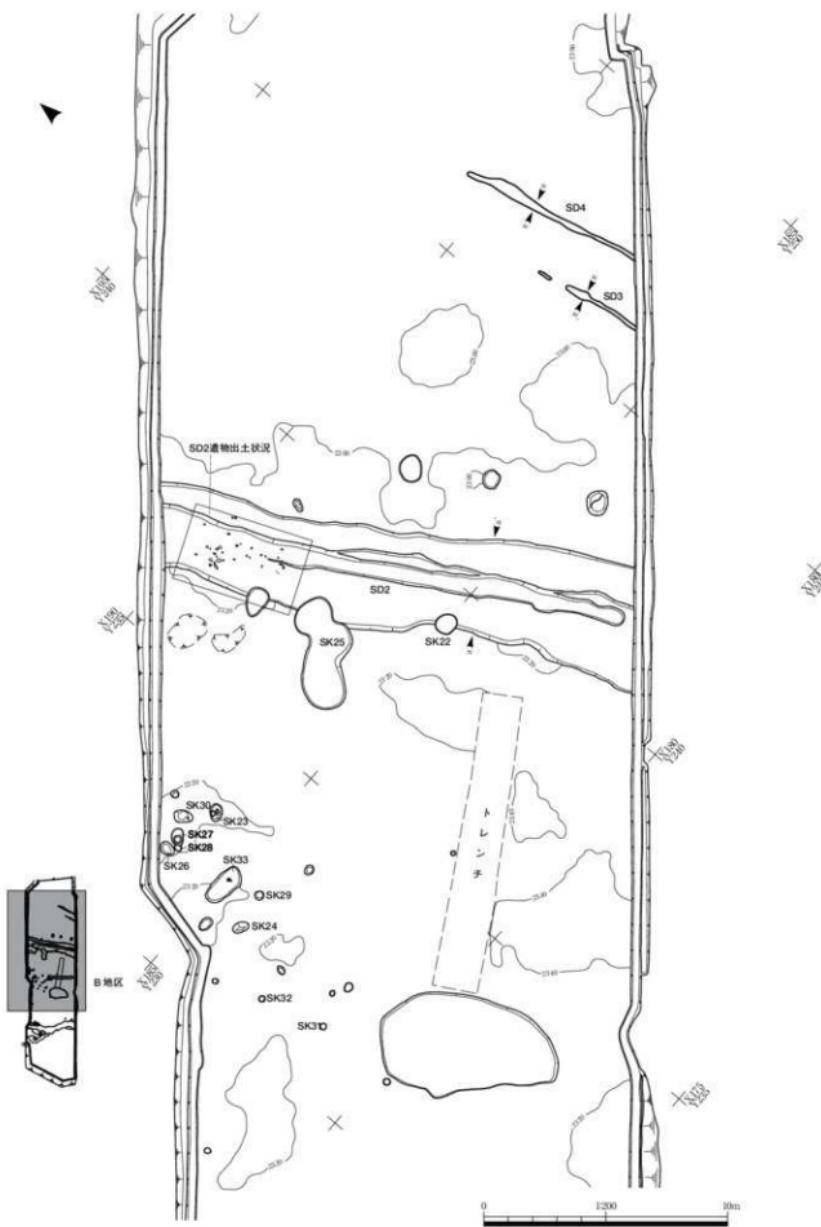
SK13～SK21 SD 1



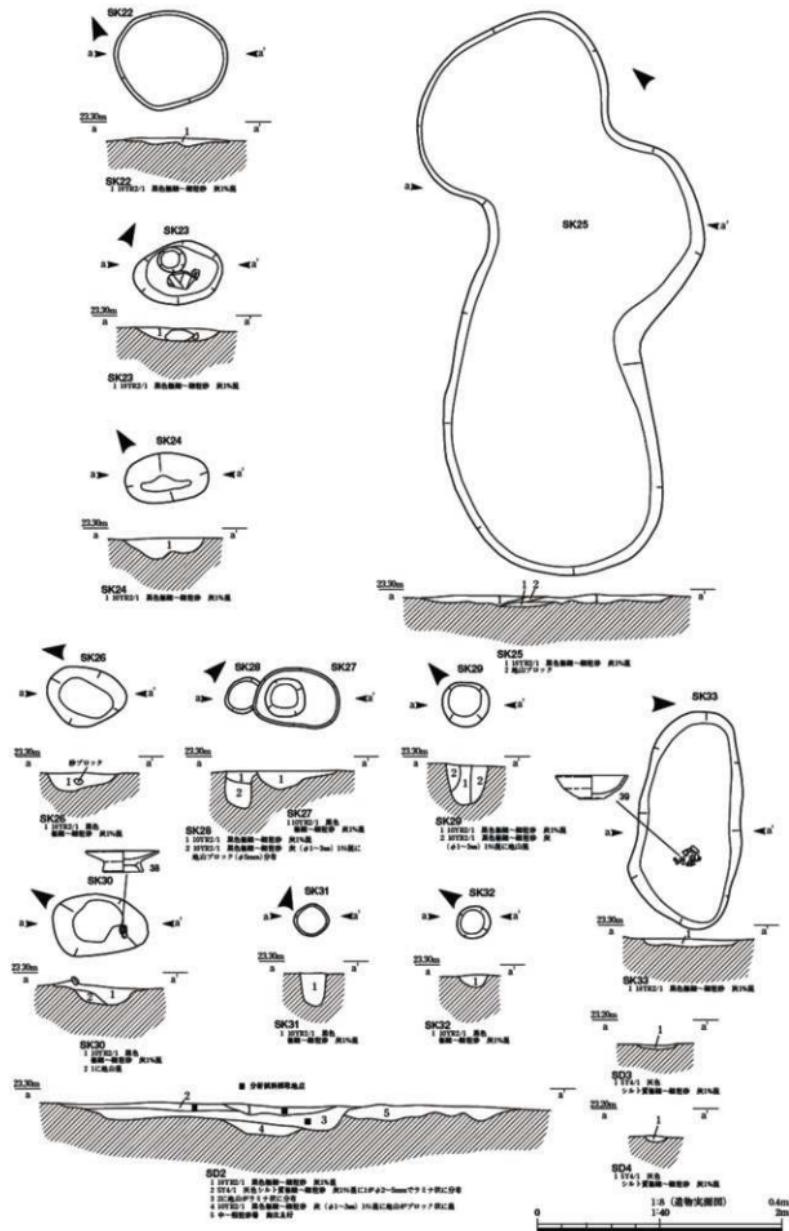
第27図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図  
SX1・SX2



第28図 五社遺跡 古墳時代・飛鳥時代遺構実測図  
土器群

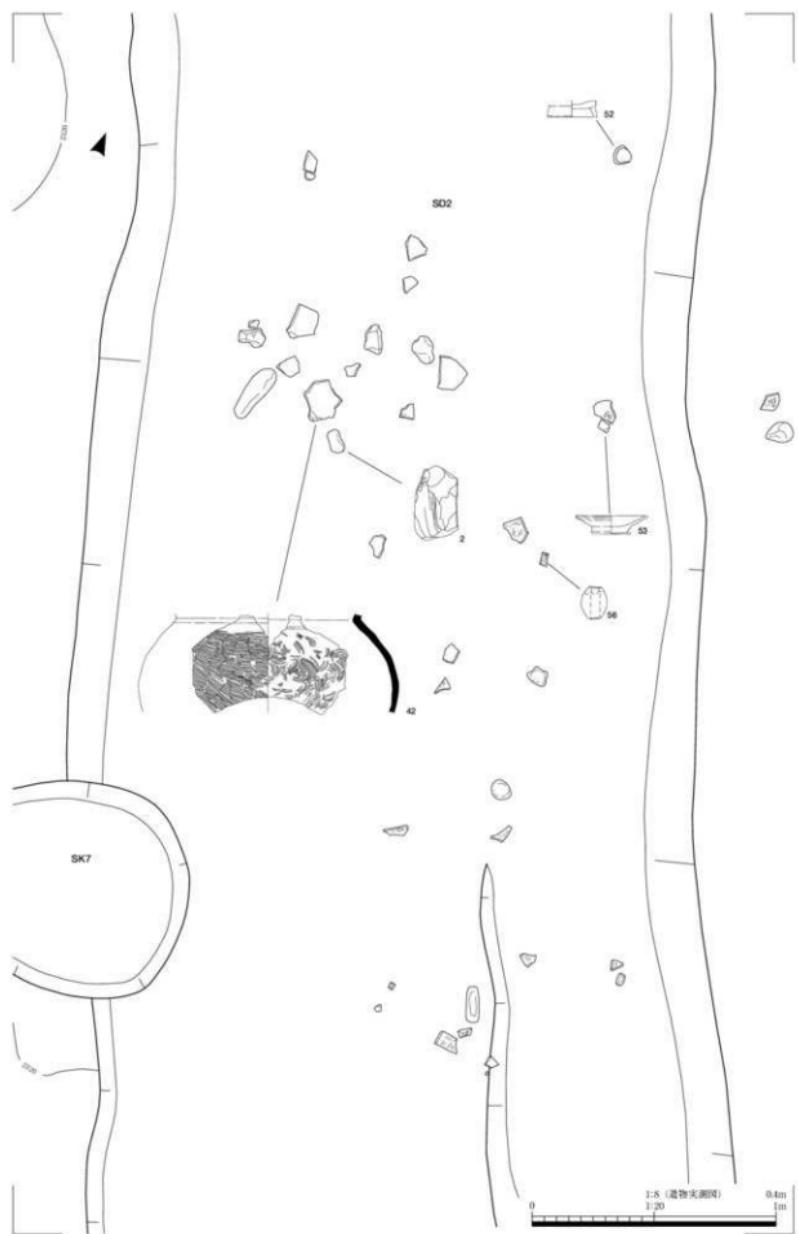


第29図 五社遺跡 平安時代遺構全体図



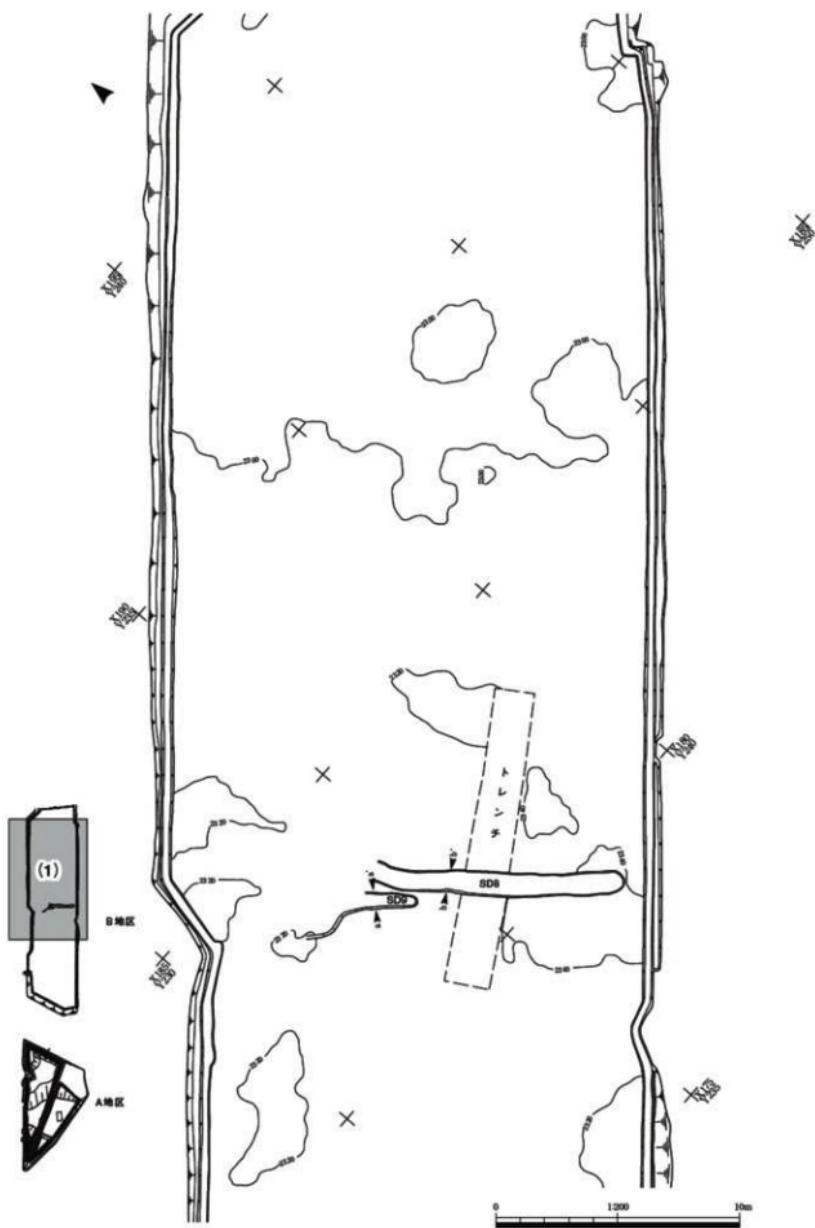
第30図 五社遺跡 平安時代遺構実測図

SK22~SK33 SD 2 ~SD 4

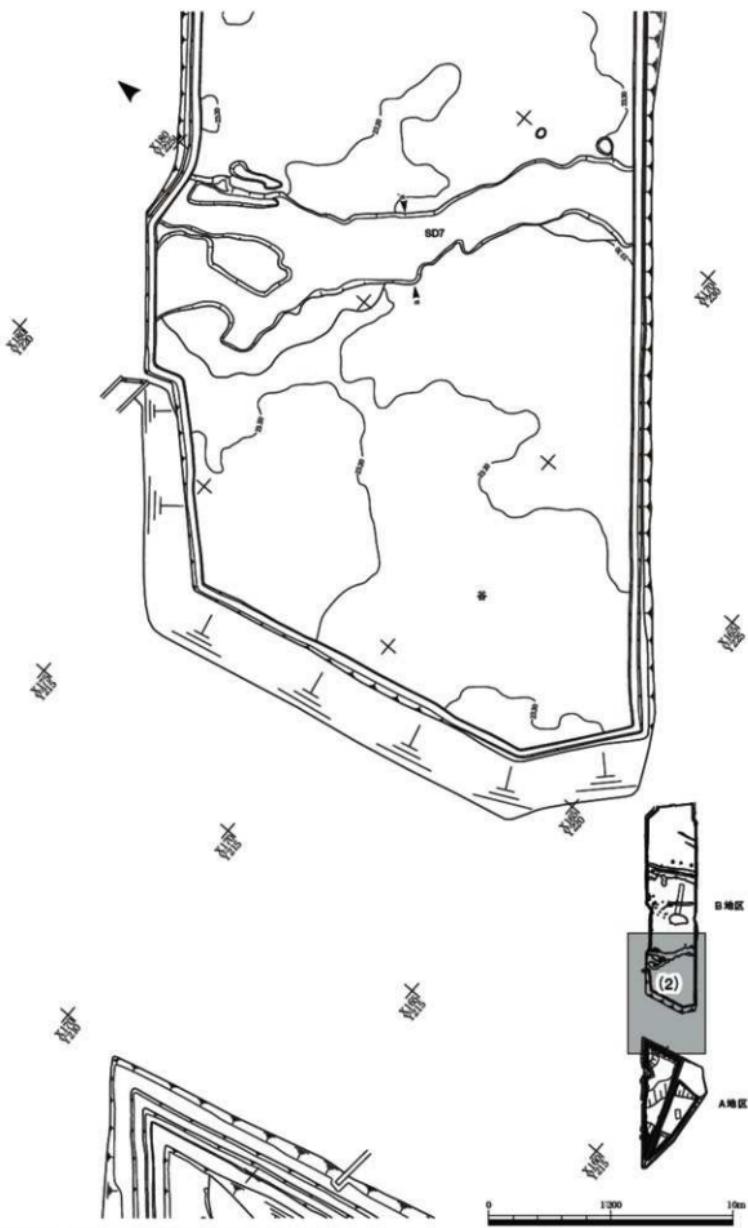


第31図 五社遺跡 平安時代遺構実測図

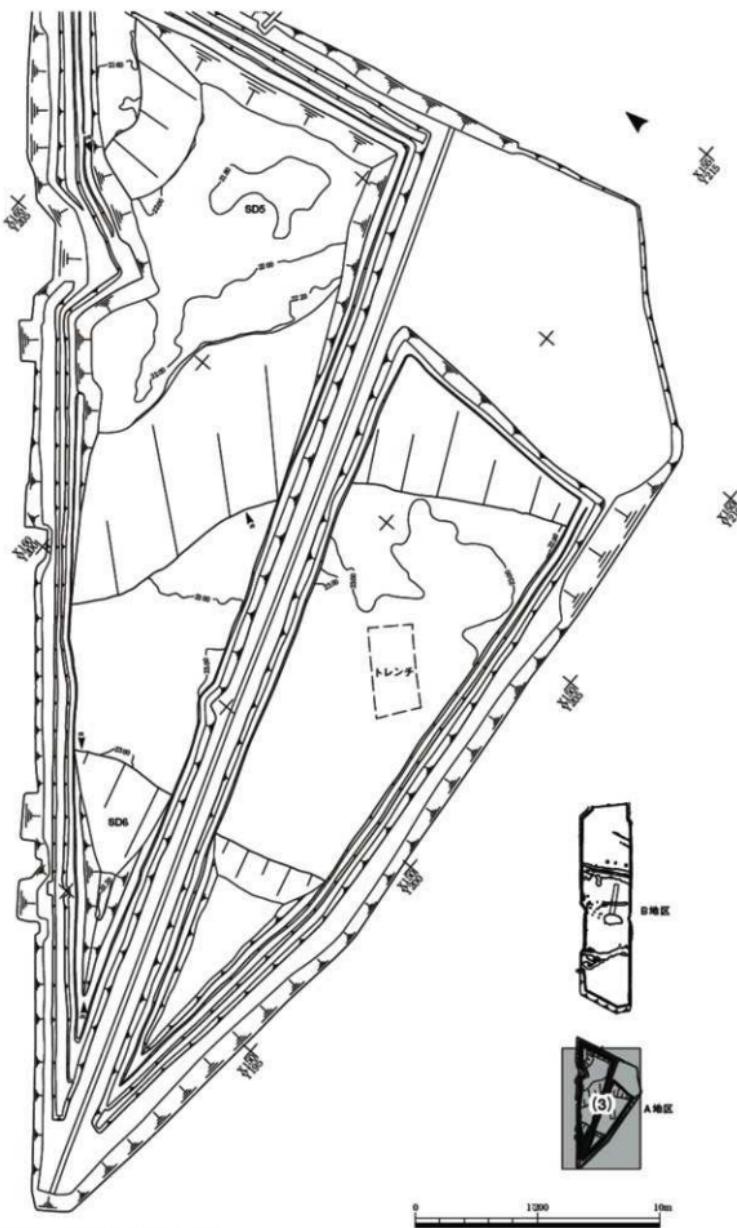
SD 2 遺物出土状況



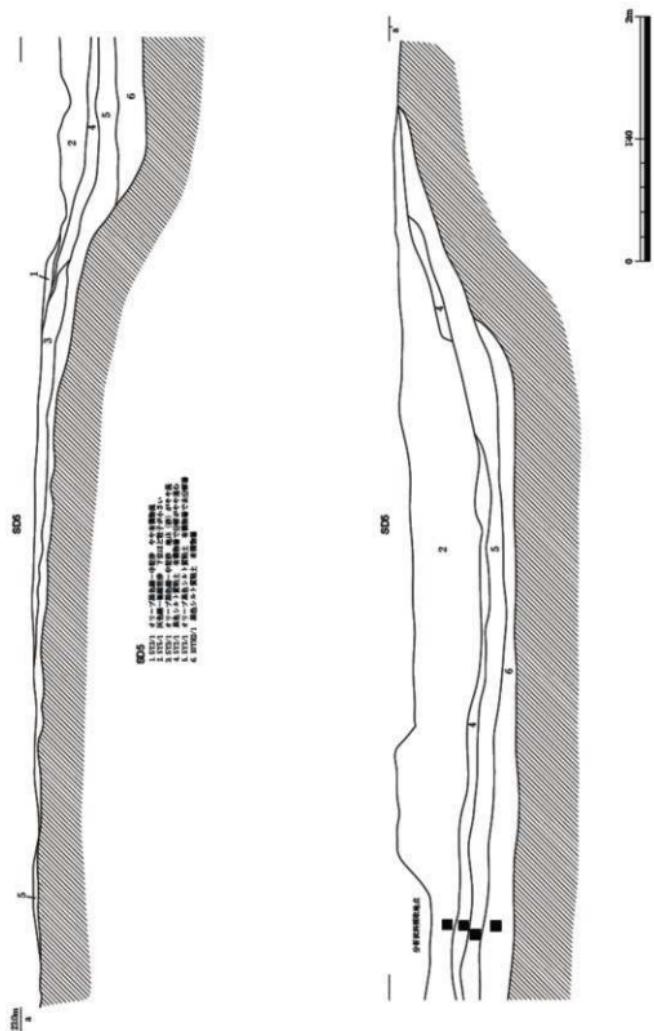
第32図 五社遺跡 中世遺構全体図(1)



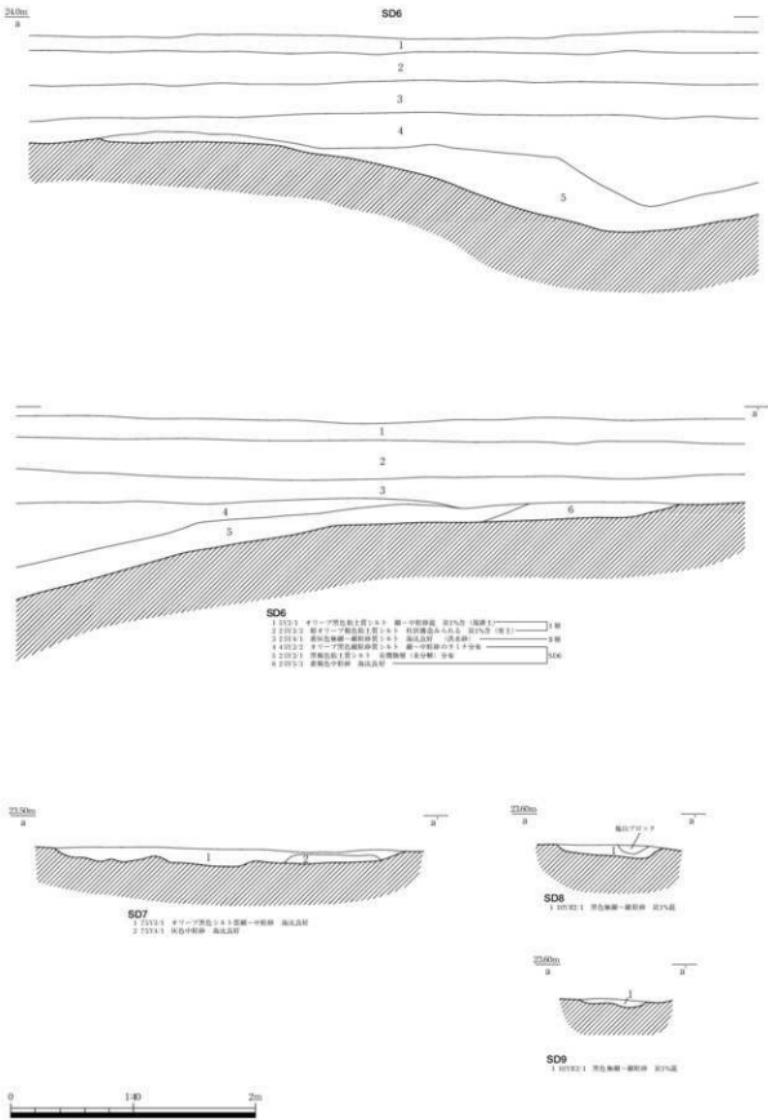
第33図 五社遺跡 中近世造構全体図(2)



第34図 五社遺跡 中近世遺構全体図(3)

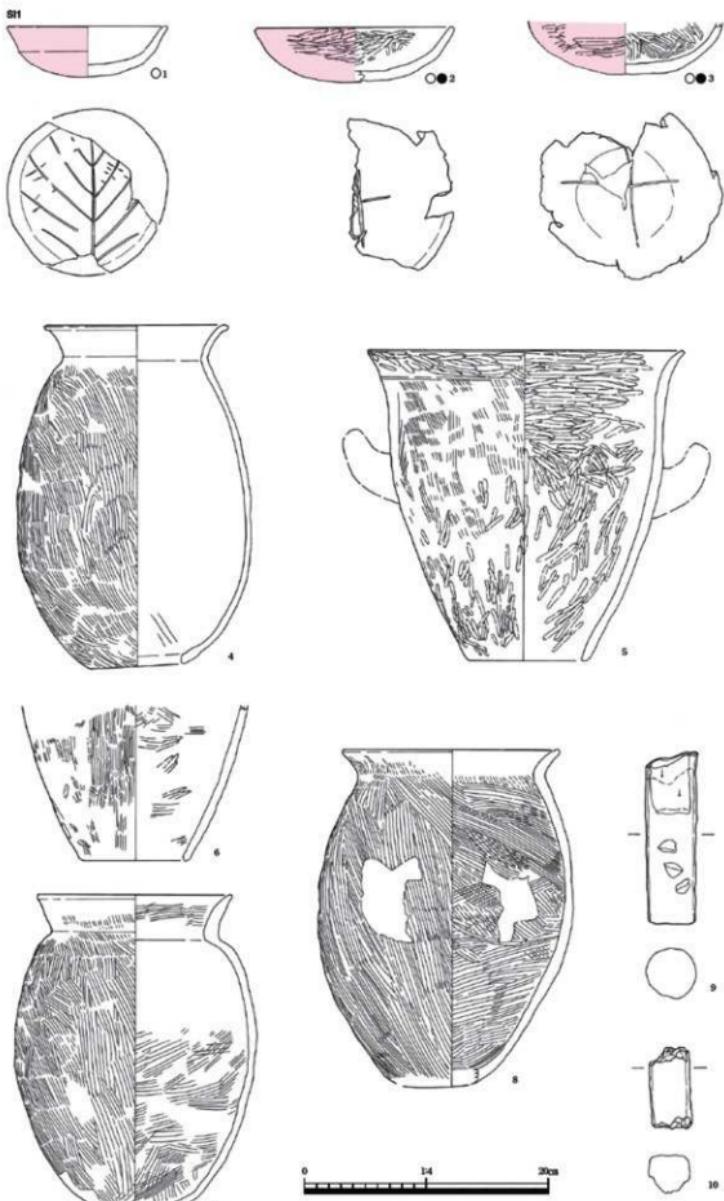


第35図 五社遺跡 中近世遺構実測図  
SD 5

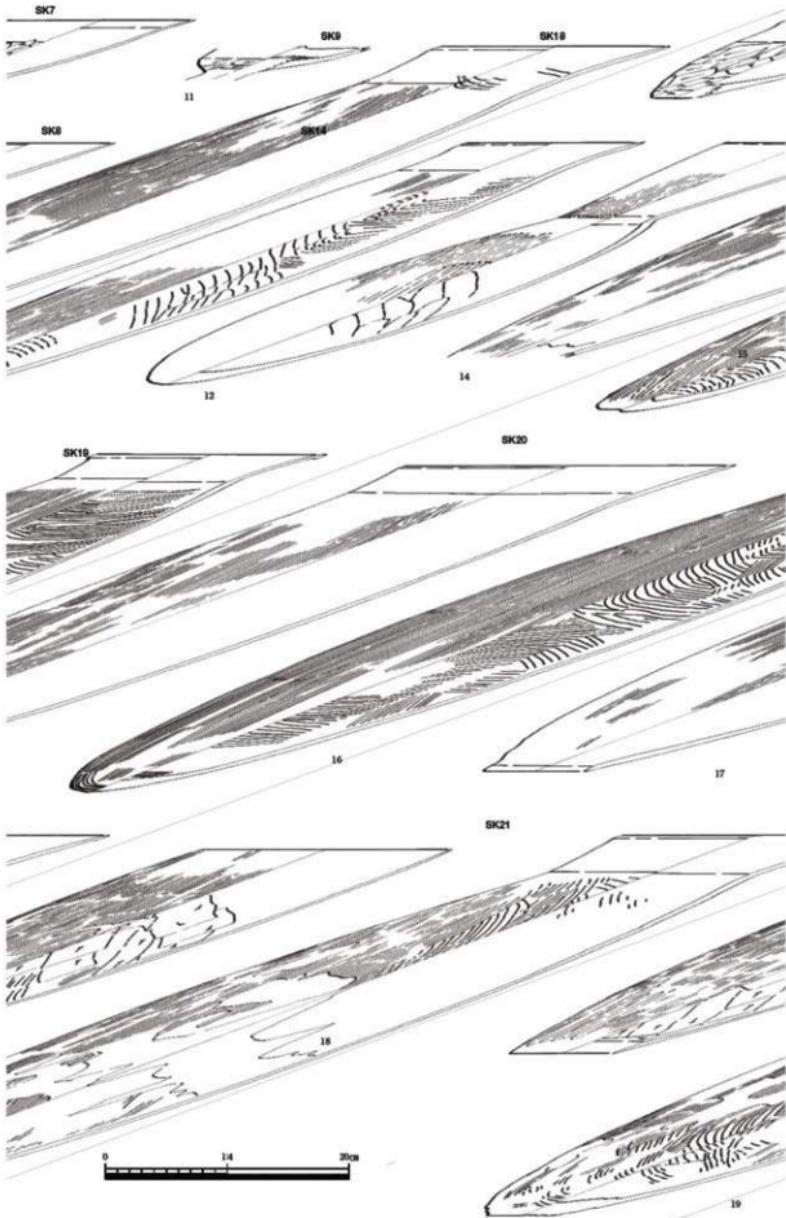


第36図 五社遺跡 中近世遺構実測図

SD 6 ~ SD 9

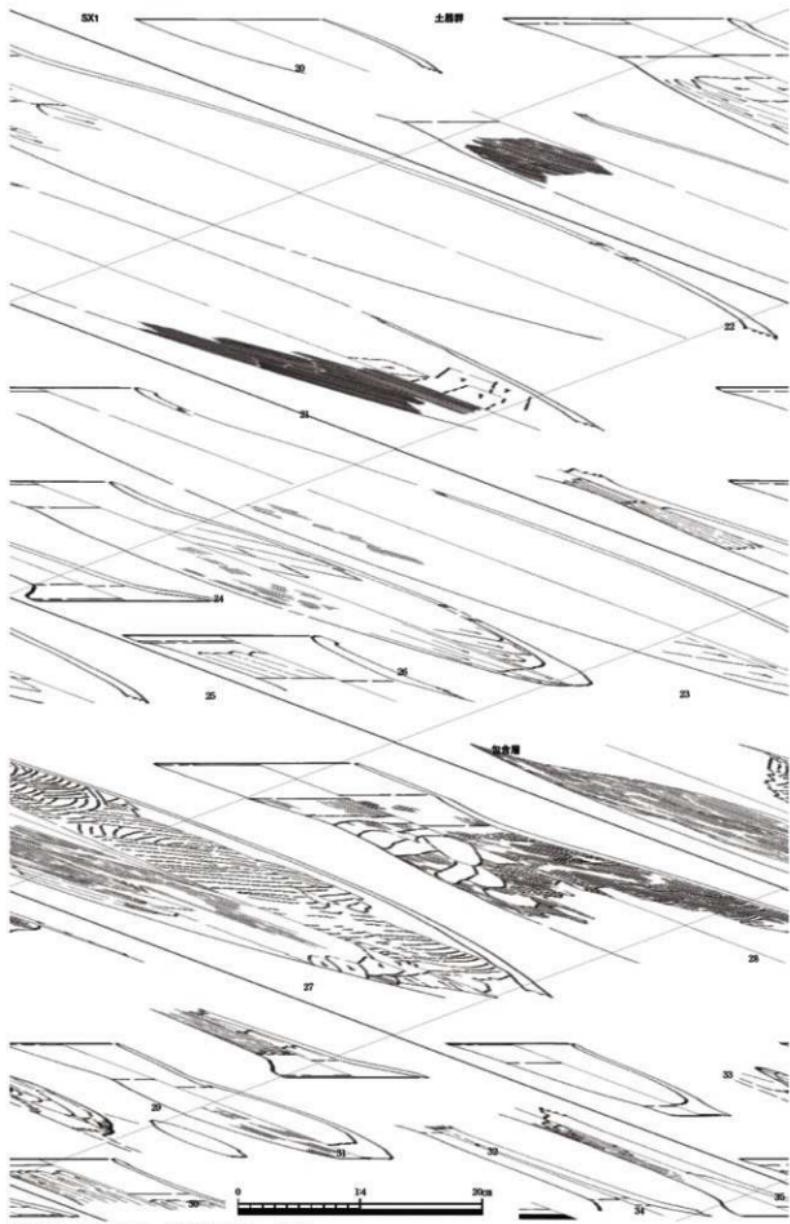


第37図 五社遺跡 遺物実測図 (1/4)  
SI 1 (1~10)



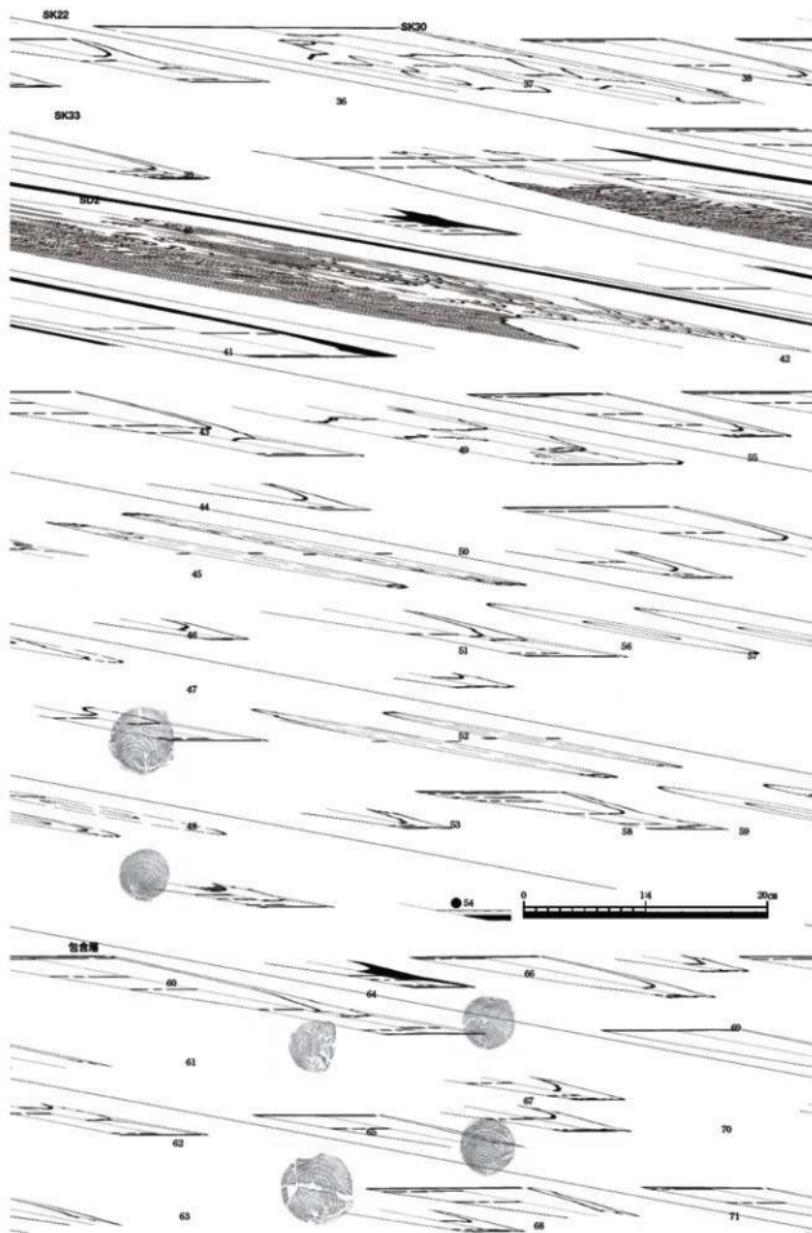
第38図 五社遺跡 遺物実測図 (1/4)

SK 7 (11) SK 8 (12) SK 9 (13) SK14(14) SK18(15) SK19(16) SK20(17・18) SK21(19)

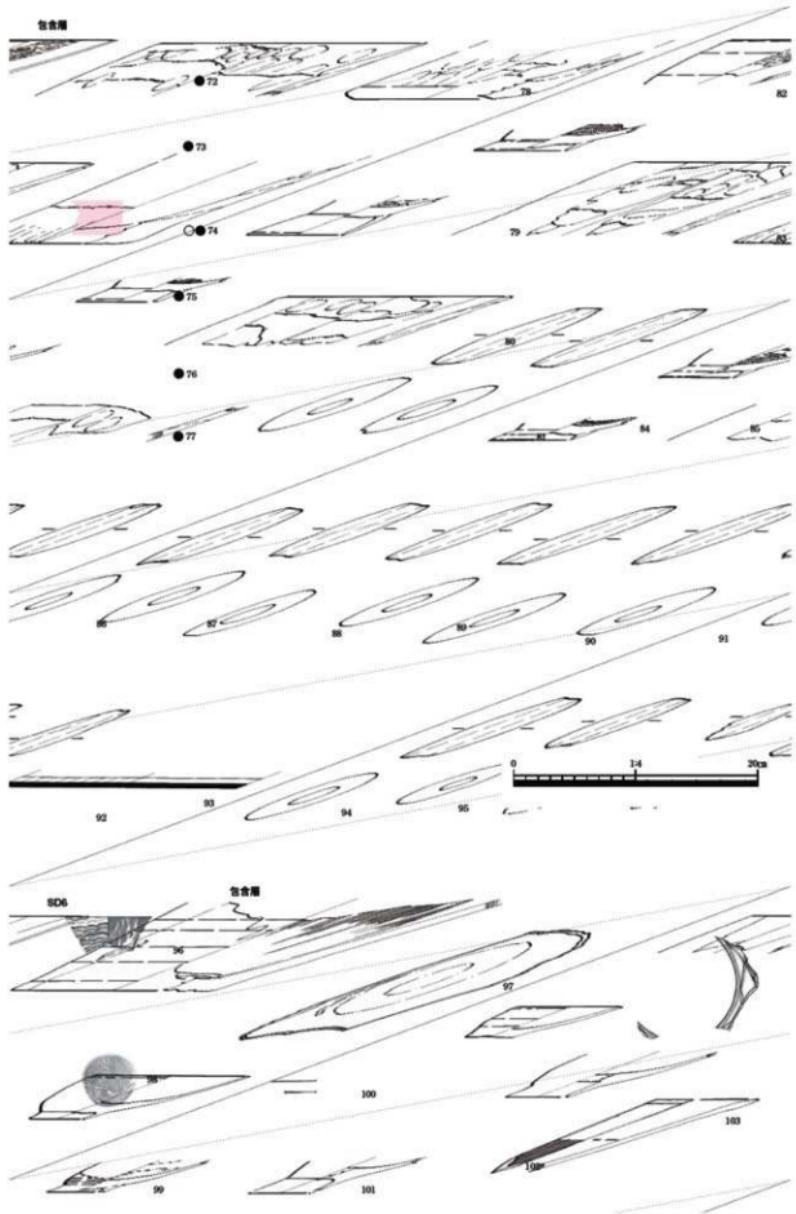


第39図 五社遺跡 遺物実測図 (1/4)

SX 1 (20・21) 土器群(22~27) 包含層

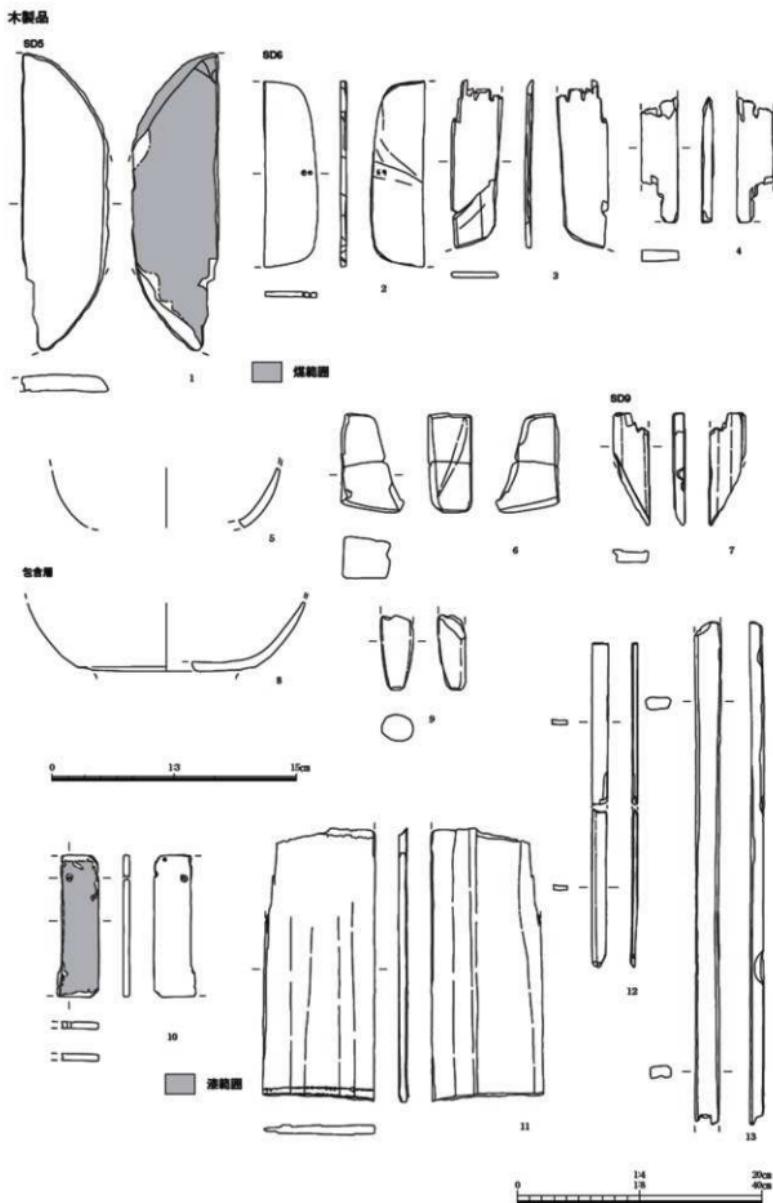


第40図 五社遺跡 遺物実測図 (1/4)  
SK22(36) SK30(37·38) SK33(39) SD 2 (40~59) 包含層



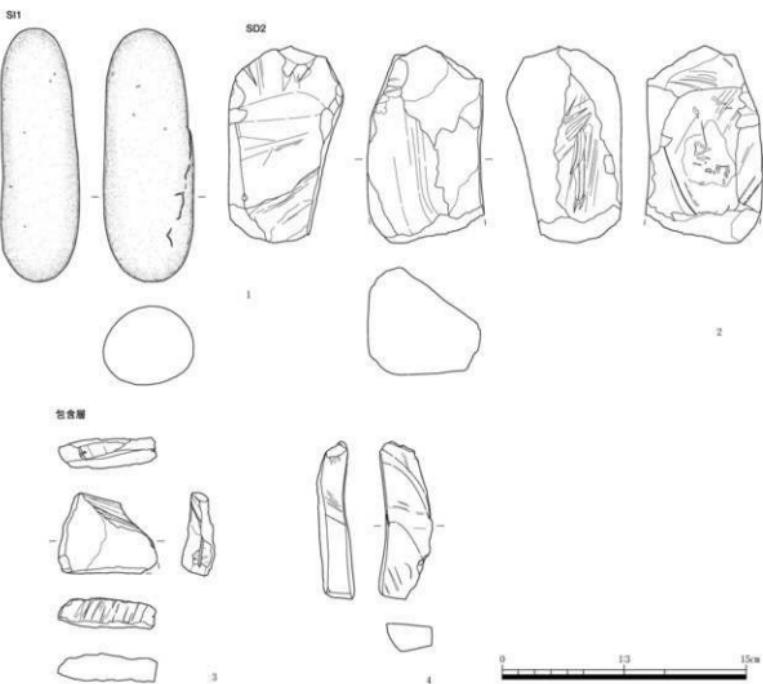
第41図 五社遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD 6 (96) 包含層

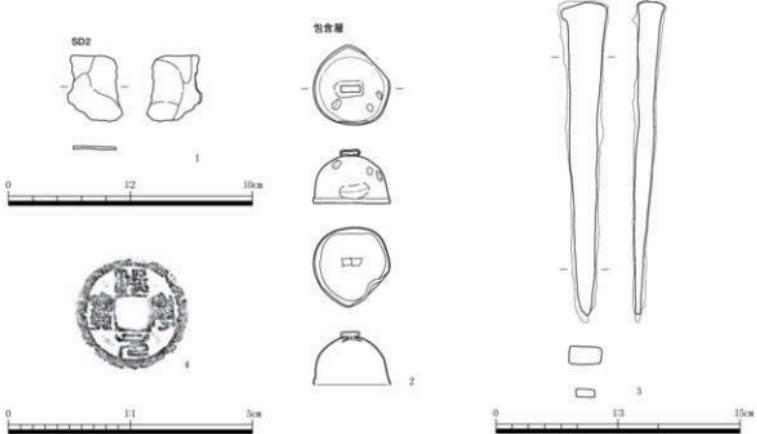


第42図 五社遺跡 遺物実測図 (5・8・9 1/3, 1~4・6・7・10・11 1/4, 12・13 1/8)  
SD5(1) SD6(2~6) SD9(7) 包含層

## 石製品



## 金属製品



第43図 五社遺跡 遺物実測図 (石製品 1~4 1/3, 金属製品 4 1/1, 1~2 1/2, 3 1/3)  
石製品 SI1 (1) SD2 (2) 包含層  
金属製品 SD2 (1) 包含層

第9表 五社遺跡 飛鳥時代 捜立柱建物一覧

建物	種別	幅行(m)	梁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )	棟方位	柱穴規格・径(m)	柱穴規格・深さ(m)	柱間距離最短(m)	柱間距離適正(m)	出土遺物	辨図	写真図版	
SB1	東西桿・側柱	(2間)	(4.2)	3間	5.7	23.94	N-17°-E	0.26-0.60	0.07-0.11	1.7-1.8	1.8-2.0	土師器(SP2・SP3)	21 10
SB2	東西桿・側柱	3間	6.1	4間	5.0	30.50	N-42°-E	0.27-0.27	0.21-0.50	1.4-1.8	1.3-1.7	土師器(SP15-SP16)	22 11
SB3	東西桿・側柱	3間	6.2	4間	4.8	29.76	N-45°-E	0.28-0.47	0.33-0.49	1.4-1.7	1.2-1.8	土師器(SP28-SP31)	23 12

※規格の( )付は現存値を示す。

第10表 五社遺跡 飛鳥時代 穫穴建物一覧

造構	旧遺構番号	平面形	規模(m・m')			出土遺物	特記	辨図	写真図版
			長径	短径	深さ				
SI1	SI71	隅丸方	7.38	7.14	0.21	52.69	土師器、支脚、蔽石?	柱穴(SP35-SP38)を伴う。	24 12・13

第11表 五社遺跡 飛鳥時代 柱穴一覧

建物	造構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	辨図	写真図版
				長径	短径	深さ				
SB1	SP1	C-SP61	円	0.30	0.27	0.25			21	
	SP2	C-SP50	円	0.45	0.44	0.25	土師器		21	
	SP3	C-SP47	円	0.43	0.41	0.35	土師器		21	10
	SP4	C-SP48	円	0.47	0.40	0.34			21	10
	SP5	C-SP49	円	0.50	0.46	0.28			21	10
	SP6	C-SP70	円	0.48	0.40	0.24			21	10
	SP7	C-SP59	円	0.49	0.44	0.22			21	
	SP8	C-SP60	円	0.43	0.40	0.21			21	
SB2	SP9	C-SP38	円	0.56	0.56	0.25			22	
	SP10	C-SP37	円	0.46	0.36	0.17			22	
	SP11	C-SP36	円	0.37	0.33	0.18			22	
	SP12	C-SP35	円	0.50	0.48	0.19			22	
	SP13	C-SP62	円	0.56	0.46	0.28			22	
	SP14	C-SP63	円	0.33	0.32	0.24			22	
	SP15	C-SP64	円	0.56	0.53	0.54	土師器		22	
	SP16	C-SP65	円	0.55	0.52	0.35	土師器		22	
	SP17	C-SP66	円	0.45	0.40	0.23			22	11
	SP18	C-SP67	円	0.60	0.54	0.27			22	11
SB3	SP19	C-SP42	椭円	0.48	0.47	0.27			22	
	SP20	C-SP41	椭円	0.60	0.48	0.31			22	
	SP21	C-SP40	円	0.35	0.26	0.23			22	11
	SP22	C-SP39	円	0.50	0.44	0.28			22	11
	SP23	C-SP86	円	0.46	0.40	0.30			23	
	SP24	C-SP87	円	0.38	0.38	0.27			23	
	SP25	C-SP89	円	0.40	0.40	0.09			23	
	SP26	C-SP90	円	0.39	0.35	0.22			23	
	SP27	C-SP27	円	0.40	0.32	0.13			23	
	SP28	C-SP83	円	0.43	0.35	0.33	土師器		23	
SI1	SP29	C-SP82	円	0.47	0.36	0.15			23	
	SP30	C-SP81	円	0.33	0.28	0.19			23	
	SP31	C-SP80	円	0.41	0.38	0.30	土師器		23	
	SP32	C-SP26	椭円	0.34	0.32	0.27			23	
	SP33	C-SP84	円	0.34	0.28	0.06			23	
	SP34	C-SP85	円	0.49	0.41	0.25			23	
	SP35	C-SP72	椭円	0.56	0.52	0.07			24	
SP36	C-SP73	椭円	0.55	0.53	0.11			24		
	SP37	C-SP74	椭円	1.12	0.76	0.10			24	
	SP38	C-SP75	椭円	0.78	0.66	0.10			24	

第12表 古墳時代～古代 土坑一覧

遺構	旧遺構番号	平面形	法量(m)			出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真図版
			長径	短径	深さ						
SK 1	C-SK04	円	0.18	0.18	0.07	土師器	古代	7C		25	
SK 2	C-SK14	椭円	0.63	0.60	0.12	土師器	古墳	5C後半～6C前半		25	
SK 3	C-SK18	椭円	0.25	0.20	0.06	土師器	古代	7C		25	
SK 4	C-SK28	椭円	0.52	0.29	0.06	土師器	古代	7C		25	
SK 5	C-SK29	椭円	0.44	0.28	0.08	土師器	古代	7C		25	
SK 6	C-SK30	椭円	0.34	0.25	0.08	土師器	古代	7C		25	
SK 7	C-SK 2	椭円	592	2.02	0.14	土師器	古代	7C		25	
SK 8	C-SK10	椭円	1.93	1.33	0.12	土師器, 黒色土器	古代	7C?		25	
SK 9	C-SK43	椭円	1.30	0.56	0.09	土師器	古墳	5C後半～6C前半		25	
SK10	C-SK51	椭円	1.41	0.97	0.03	土師器	古代	7C		25	
SK11	C-SK52	椭円	0.46	0.32	0.08		古代	7C		25	
SK12	C-SK53	円	0.27	0.22	0.15		古代	7C		25	
SK13	C-SK57	椭円	2.40	0.94	0.13	土師器	古代	7C		26	
SK14	C-SK91	椭円	0.75	0.53	0.10		古墳?	6C?		26	14
SK15	C-SK68	椭円	2.05	1.50	0.10		古代	7C		26	
SK16	C-SK33	椭円	0.96	0.83	0.15		古代	7C		26	
SK17	C-SK34	椭円	0.60	0.52	0.07		古代	7C		26	
SK18	C-SK76	椭円	0.48	0.46	0.28	土師器	古墳?	6C?	リン酸分析	26	14
SK19	C-SK77	椭円	0.70	0.64	0.18	土師器	古墳?	6C?	リン酸分析	26	14
SK20	C-SK78	椭円	0.54	0.40	0.28	土師器	古墳?	6C?	リン酸分析	26	14
SK21	C-SK79	円	0.40	0.40	0.10	土師器	古墳?	6C?	リン酸分析	26	14
SK22	B-SK 2	円	0.92	0.28	0.12	製塙土器	古代	9C～10C?	<SD2	30	
SK23	B-SK12	椭円	0.73	0.50	0.20	土師器, 製塙土器	古代	9C～10C		30	
SK24	B-SK14	椭円	0.69	0.40	0.18	土師器	古代	9C～10C		30	
SK25	B-SK 6	不整	4.49	1.87	0.07	土師器, 須恵器, 製塙土器	古代	9C～10C	>SD2	30	
SK26	B-SK16	椭円	0.65	0.46	0.16	土師器, 製塙土器	古代	9C～10C		30	
SK27	B-SK17	椭円	0.68	0.48	0.04	土師器	古代	9C～10C	>SK28	30	
SK28	B-SK18	椭円	0.32	0.24	0.33	土師器, 製塙土器	古代	9C～10C	<SK27	30	
SK29	B-SK22	円	0.36	0.34	0.32	土師器, 須恵器, 製塙土器	古代	9C～10C		30	
SK30	B-SK19	椭円	0.79	0.50	0.15	土師器, 製塙土器	古代	9C～10C		30	15
SK31	B-SK27	円	0.28	0.25	0.34	製塙土器	古代	9C～10C?		30	
SK32	B-SK23	円	0.28	0.28	0.09	須恵器	古代	9C～10C		30	
SK33	B-SK20	椭円	1.78	0.62	0.08	土師器, 製塙土器	古代	9C～10C		30	

第13表 五社遺跡 飛鳥時代～中近世 溝・自然流路一覧

遺構	旧遺構番号	遺構種類	法量(m)			出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真図版
			幅	深さ							
SD 1	C-SD 5	溝	0.65	0.09			飛鳥時代			26	
SD 2	B-SD 1	溝	2.25	0.30		土師器, 須恵器, 黒色土器, 上器, 上鍼, 製塙土器, 板状金銅製品	古代	10C～11C	<SK22・SK25, 花粉分析, 植物珪酸体分析	30・31	15
SD 3	B-SD33-A・B	溝	0.34	0.06						30	
SD 4	B-SD34	溝	0.55	0.06						30	
SD 5	A-SD 1	自然流路	15.35	1.10		土師器, 木製品	中近世		花粉分析, 植物珪酸体分析	35	16
SD 6	A-SD 2	自然流路	9.50	1.64		土師器, 須恵器, 中近世土師器, 唐津, 銅器, 折敷, 板材, 角材	中近世			36	
SD 7	B-SD35	溝	0.58	0.12						36	
SD 8	B-SD10	溝	1.00	0.12		土師器, 須恵器, 製塙土器	中近世		埋土やSD9との位置関係からSD9と近い時期が考えられる	36	
SD 9	B-SD30	溝	0.64	0.06		土師器, 須恵器, 珠陶, 製塙土器, 板材	中近世	V期?		36	

第14表 五社遺跡 古墳時代 その他の遺構

遺構	旧遺構番号	遺構種類	平面形	法量(m)			出土遺物	時期	詳細時期	特記事項	挿図	写真図版
				長径	短径	深さ						
SX 1	SX 1	凹地状遺構	不整	6.65	6.6	0.13	土師器	古墳時代	5C後半～6C前半	AMS, 花粉分析, 植物珪酸体分析, 植実同定	27	14
SX 2	SX 3	環状溝遺構	環状	3.81	内径 2.70	0.13	土師器	古墳時代?	5C後半～6C前半?	花粉分析, 植物珪酸体分析, 植実同定, リン酸分析	27	14

第15表 五社遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

件目	写真 番号	通鑑	出土地点	種類	部材	法線(cm)			形態	詳細な時期	新土色調	新土色	釉色調	釉色	備考	
						上径	底径	厚度								
37	1	19	SI 1	5a 7	土師器	純	13.0	4.1	楕円時代	T C 前期～中期	2.5Y7/2	灰黒色			外側赤彩 底面に要無痕あり	
	2	19	SI 1	5a 10	黑色土器	純	16.0	4.4	楕円時代	T C 後～中期	10Y R 5/4	(こい) 黄褐色			外側赤彩	
	3	19	SI 1	5a 10	黑色土器	純	14.2	2.0	楕円時代	T C 後～中期	10Y R 5/3	(こい) 黄褐色			外側赤彩	
	4	17	SI 1	5a 4	土師器	瓶	14.6	27.9	7.6	楕円時代	T C 前期～中期	2.5Y7/2	灰黒色			
	5	17	SI 1	5a 6	土師器	瓶	25.5	25.5	9.4	楕円時代	T C 前期～中期	10Y R 5/3	(こい) 黄褐色			
	6	17	SI 1	5a 5・6	土師器	瓶	12.8	8.4		楕円時代	T C 前期～中期	10Y R 5/3	(こい) 黄褐色			
	7	17	SI 1	5a 2	土師器	瓶	10.6	26.0		楕円時代	T C 前期～中期	10Y R 4/2	灰黒色			
	8	19	SI 1	5a 1	土師器	瓶	17.8	27.0		楕円時代	T C 前期～中期	10Y R 4/3	(こい) 黄褐色			
	9	19	SI 1	5a 9	土師器	支輪	15.5	14.0	4.0	楕円時代	10Y R 6/3				一部褐斑	底付着
	10	19	SI 1	5a 9	土師器	支輪	16.6	2.35		楕円時代	10Y R 6/2					
38	11	20	SK 7	5a 1	土師器	純	17.0	9.6	(3.4)	古墳時代	D C 後～6 C 前	10Y R 7/3	(こい) 黄褐色			
	12	17	SK 8	5a 1	土師器	瓶	14.4	22.0	4.3	古墳時代	C ?	10Y R 5/2	灰黒色			
	13	20	SK 8	5a 1・2	土師器	高杯		(2.8)		古墳時代	D C 後～6 C 前	2.5Y9/3	淡褐色			
	14	17	SK 14	5a 1	土師器	瓶	13.8	18.7		古墳時代	C ?	2.5Y7/2	灰黒色			
	15	18	SK 18	5a 1	土師器	瓶	18.5	25.2		古墳時代	C ?	2.5Y 5/6	暗褐色			
	16	18	SK 19	5a 1	土師器	瓶	26.6	25.0	8.3	古墳時代	C ?	2.5Y9/1	灰白色			
	17	18	SK 20	5a 1	土師器	瓶	18.8	27.6		古墳時代	C ?	7.5YR 6/8	橙色			
	18	18	SK 20	5a 1	土師器	瓶	20.4	16.8	8.4	古墳時代	C ?	2.5YR 7/4	(7.4) 橙色			
	19	18	SK 21	X225Y296V 周	土師器	瓶	21.7	39.1	4.8	古墳時代	C ?	2.5YR 6/8	橙色			底付着の灰白色 外側剥離なし
	20	20	SK 3	5a 1	土師器	純	15.8	(4.3)		古墳時代	A C 中幅	7.5YR 2/4	(こい) 橙色			
39	21	20	SK 1	5a 2	土師器	瓶	(26.0)			古墳時代	A C ?	2.5Y7/2	灰黒色			外側付着
	22	20	土器群	土器群	土器	18.8	(25.7)		古墳時代	A C	10Y R 4/2	(こい) 黄褐色			外側に保たる付着	
	23	20	土器群	土器群	高杯	16.2	(25.7)		古墳時代	A C	10Y R 4/2	(こい) 黄褐色				
	24	18	土器群	土器群	高杯	(19.8)	14.8		古墳時代	A C	7.5YR 7/4	(こい) 橙色				
	25	22	土器群	土器群	瓶	16.0	(5.4)		古墳時代	A C	2.5YR 2/2	灰白色			口縁外に灰白色	
	26	19	土器群	土器群	瓶	13.2	16.6	4.0	古墳時代	A C	2.5Y7/2	灰黒色			外側に灰白色 底面中付着はテリ脱	
	27	21	土器群	土器群	瓶	(27.0)			古墳時代	A C	2.5Y 6/2	灰黒色			外側に灰白色 (一部ガーリック)	
	28	18	X219Y220V 周	土器群	瓶	(17.0)	(16.3)		古墳時代	A C ?	7.5YR 6/6	橙色			底付着の灰白色	
	29	21	X202Y198V 周	土器群	瓶	20.3	5.9	4.9	古墳時代	A C	10Y R 2/1	灰白色				
	30	21	V 周	土器群	瓶	12.8	(4.0)		古墳時代	A C	2.5Y6/2	灰黒色				
40	31	21	X215Y266V 周	土器群	把手				古墳時代		10Y R 6/4	(こい) 黄褐色				
	32	18	X202Y264V 周	土器群	瓶	9.5	9.4	4.0	古墳時代		2.5YR 6/6	橙色				
	33	22	X201Y255・256V 周	土器群	高杯	(5.6)			古墳時代		7.5YR 6/4	(こい) 橙色				
	34	21	X197Y227V 周	土器群	高杯	(7.3)	(7.6)		古墳時代		10Y R 5/3	(こい) 黄褐色				
	35	21	X212Y265V 周	土器群	高杯	(8.9)	9.5		古墳時代		10Y R 5/3	(こい) 黄褐色				
	36	21	SK 22	粗土器	粗土器	(24.3)	(6.3)		平安時代		7.5YR 5/4	(こい) 橙色			一次燒熱	
	37	22	SK 20	土器群	瓶A	11.4	4.8	4.35	平安時代	10C - 11C	2.5YR 6/6	粉紅			底付着	
	38	21	SK 30	5a 1	土器群	瓶B	11.7	3.5		平安時代	10C - 11C	10Y R 2/2	灰白色			
	39	19	SK 30	5a 1 X (25Y260裏周)	土器群	瓶A	12.45	4.0	4.95	平安時代	10C - 11C	7.5YR 6/3	(こい) 橙色			
	40	21	SD 2	X 065V	環狀器	瓶B	(2.1)			平安時代	10C - 11C	N/6	灰色			
41	41	21	SD 2	X 185Y241	環狀器	瓶	(7.6)	12.3		平安時代	10C - 11C	N/7	灰白色			
	42	21	SD 2	S 16	地豆器	瓶	(16.0)			平安時代	10C - 11C	N/a	灰色			
	43	22	SD 2	X 190Y226	土師器	瓶A	11.3	3.4		平安時代	10C - 11C	5YR 6/6	粉紅			
	44	22	SD 2	X 182Y281	土師器	瓶A	(2.1)	4.0		平安時代	10C - 11C	10Y R 7/2	(こい) 黄褐色			
	45	22	SD 2	X 182Y281	土師器	瓶A	(2.3)	4.1		平安時代	10C - 11C	2.5YR 7/4	(こい) 黄褐色			
	46	22	SD 2	X 190Y226	土師器	瓶A	(1.6)	3.2		平安時代	10C - 11C	5YR 7/3	(こい) 黄褐色			
	47	22	SD 2	X 189 - 190Y226裏周	土師器	瓶A	(1.15)	5.1		平安時代	10C - 11C	7.5YR 6/4	(こい) 黄褐色			
	48	22	SD 2	X 190Y228	土師器	瓶A	(1.5)	4.1		平安時代	10C - 11C	5YR 5/4	(こい) 黄褐色			
	49	22	SD 2	X 187 - 229	土師器	瓶A	26.3	5.2	8.06	平安時代	10C - 11C	10Y R 6/4	(こい) 黄褐色			
	50	22	SD 2	X 188 - 197Y229 - 240裏周	土師器	瓶B	14.0	4.0		平安時代	10C - 11C	5YR 6/4	(こい) 黄褐色			
51	51	22	SD 2	X 187Y241	土師器	瓶B	(3.8)			平安時代	10C - 11C	10Y R 7/4	(こい) 黄褐色			
	52	22	SD 2	S 16	環狀器	瓶B	(2.7)			平安時代	10C - 11C	10Y R 8/1	灰白色			
	53	22	SD 2	S 11	土師器	瓶B	11.7	3.1	(5.4)	平安時代	10C - 11C	7.5YR 7/3	(こい) 橙色			
	54	22	SD 2	X 187Y229	黑色土器	瓶A	(1.9)		6.2	平安時代	10C - 11C	2.5Y7/3	浅黑色			
	55	22	SD 2	X 186Y241	粗土器		(4.2)	13.3		平安時代		5YR 4/6	赤褐色			二次燒熱

第15表 五社遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(2)

回復遺跡	位置	出土場所	種類	器種	直徑(cm)		司割	評価時期	紅土色調	紅土色	相色調	相色	備考	
					口径	最高	底径	高台径						
56 22	Sd2	5c5	土製品	土鉢	3.2	4.0	4.0	1.4	平安時代	2.5Y R 6/6	褐色		無型 重量6.43g	
57 22	Sd2	X-367Y241	土製品	土鉢	3.2	4.0	4.0	1.25	平安時代	7.5Y R 2/1	灰白色		無型 重量6.36g	
58 22	Sd2	X-368Y239	土製品	土鉢	3.2	4.0	4.0	1.6	平安時代	10YR 6/3	にぶ・青褐色		無型 重量6.86g	
59 22	Sd2	X-368Y238	土製品	土鉢	3.2	4.0	4.0	1.3	平安時代	10YR 5/3	にぶ・青褐色		無型? 重量14.86g	
60 23	X-365Y232	御殿跡	地盤	B	2.1	3.0	3.0	1.0	平安時代	3WC - 11C	3W	褐色		
61 23	X-367Y237	御殿跡	地盤	C	12.0	12.0	12.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	3.5Y R 7/3	にぶ・褐色		
62 23	X-367Y235	御殿跡	地盤	C	10.5	12.0	12.0	0.5	平安時代	3WC - 11C	3.5Y R 5/4	にぶ・褐色		
63 23	X-367Y232	御殿跡	地盤	C	9.8	12.0	12.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	3.5Y R 5/4	にぶ・褐色		
64 23	X-362Y237	御殿跡	地盤	A	11.3	12.5	11.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	3.5Y R 6/4	にぶ・褐色		
65 23	X-367Y236	御殿跡	地盤	C	12.0	12.0	12.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 7/2	灰白色		
66 23	X-367Y240	御殿跡	地盤	A	11.2	14.5	14.5	0.0	平安時代	3WC - 11C	5YR 6/4	にぶ・褐色		
67 23	X-367Y240	御殿跡	地盤	A	11.8	13.0	13.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	10YR 8/2	灰白色		
68 23	X-367Y239	御殿跡	地盤	A	11.7	13.1	13.1	0.0	平安時代	3WC - 11C	3.5Y R 6/4	にぶ・褐色		
69 19	X-364Y232	御殿跡	地盤	B	14.7	16.3	16.3	0.6	平安時代	3WC - 11C	5YR 6/6	褐色	二次鉄熱	
70 23	X-367Y240	御殿跡	地盤	B	12.5	13.0	13.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	10YR 7/4	にぶ・青褐色		
71 23	X-367Y240	御殿跡	地盤	B	13.6	13.3	13.3	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 7/3	にぶ・褐色		
72 23	X-367Y239	黒土上部	陶器	C	13.8	13.6	13.6	0.6	平安時代	3WC - 11C	3.5Y R 7/2	にぶ・褐色		
73 23	X-368Y239	黒土上部	陶器	B	2.1	7.8	7.8	0.0	平安時代	3WC - 11C	5YR 6/4	にぶ・褐色		
74 23	X-367Y232	黒土上部	陶器	B	3.2	8.2	8.2	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 7/2	灰白色	外削赤印	
75 23	X-367Y235	黒土上部	陶器	B	2.0	6.8	6.8	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 7/2	灰白色		
76 23	X-367Y240	黒土上部	陶器	B	2.7	6.3	6.3	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 7/2	灰白色		
77 23	X-367Y240	黒土上部	陶器	D	1.8	6.5	6.5	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 7/1	灰白色		
78 24	X-367Y232	製塗土器	地盤	B	21.6	34.4	34.4	0.0	平安時代	3WC - 11C	5YR 6/4	にぶ・褐色	二次鉄熱	
79 24	X-364-186Y240	製塗土器	地盤	B	20.2	36.0	36.0	0.0	平安時代	5YR 5/4	にぶ・赤褐色	二次鉄熱でチラチラ みられた		
80 24	X-361Y231	製塗土器	地盤	A	28.1	41.1	41.1	0.0	平安時代	5YR 4/6	赤褐色	二次鉄熱		
81 24	X-364Y230	製塗土器	地盤	A	22.9	41.1	41.1	0.0	平安時代	2.5Y R 7/2	灰白色	二次鉄熱		
82 24	X-367Y240	製塗土器	地盤	A	31.9	46.0	46.0	0.0	平安時代	3WC - 11C	2.5Y R 6/3	にぶ・褐色	二次質地差しい	
83 24	X-363Y233	製塗土器	地盤	A	36.7	45.2	45.2	0.0	平安時代	3WC R 6/1	灰白色			
84 24	X-366Y240	土製品	土鉢	C	4.0	4.4	4.4	1.2	平安時代	2.5Y R 5/6	明赤褐色		無型 重量6.37g	
85 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.7	5.7	5.7	1.7	平安時代	5YR 5/6	明赤褐色		無型 重量51.88g	
86 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.6	5.9	5.9	1.2	平安時代	2.5Y R 6/0	明赤褐色		無型 重量53.53g	
87 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.3	4.0	4.0	1.3	平安時代	5YR 7/6	明黄褐色		無型 重量55.68g	
88 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.6	2.6	1.6	0.0	平安時代	2.5Y R 5/3	にぶ・赤褐色		無型 重量47.29g	
89 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.7	4.0	1.4	0.0	平安時代	5YR 6/4	にぶ・褐色		無型 重量60.12g	
90 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.8	2.6	1.2	0.0	平安時代	2.5Y R 6/6	褐色		無型 重量53.53g	
91 24	X-377Y222	土製品	土鉢	C	4.3	4.2	1.2	0.0	平安時代	10YR 7/4	にぶ・青褐色		無型 重量58.79g	
92 24	X-367Y233	土製品	土鉢	C	3.9	3.6	1.30	0.0	平安時代	2.5Y R 6/6	褐色		無型 重量55.64g	
93 24	X-367Y234	土製品	土鉢	C	4.0	3.4	1.1	0.0	平安時代	10YR 5/3	にぶ・青褐色		無型 重量57.52g	
94 24	X-364Y230	土製品	土鉢	C	3.9	2.6	1.2	0.0	平安時代	2.5Y R 6/4	にぶ・褐色		無型 重量51.78g	
95 24	X-361Y229	土製品	土鉢	C	3.7	2.6	1.3	0.0	平安時代	5YR 7/8	褐色		無型? 塵成者いい 重量25.30g	
96 25	Sd6	X-355Y195	漆漆	碗	9.7	13.1	13.1	0.0	近世	17C後半~18C	2.5Y R 3/4	漆赤褐色	漆碗	17C後半~18C
97 25	X-367Y225	漆漆	漆漆	碗	17.5	16.6	16.6	0.0	中世		2.5Y R 6/2	灰白色		内削厚付着
98 25	X-367Y226	漆漆	漆漆	碗	8.4	2.5	4.0	0.0	中世	12C後半	10YR 6/3	にぶ・青褐色		
99 25	X-367Y230	漆漆	漆漆	碗	2.6	4.8	4.8	0.0	近世	16C末~17C	10YR 6/2	にぶ・青褐色	漆碗	2.5Y R 3/3
100 25	X-360Y250	漆漆	漆漆	碗	13.0	5.0	5.0	0.0	近世	17C後半~18C	2.5Y R 6/1	灰白色	漆碗	17C後半~18C
101 25	X-374Y229	漆漆	漆漆	碗	12.9	5.1	5.1	0.0	近世	17C後半~18C	2.5Y R 6/1	灰白色	漆碗	2.5Y R 7/3
102 25	X-367Y230	漆漆	漆漆	碗	16.0	5.0	5.0	0.0	近世	18C~19C	2.5Y R 6/4	にぶ・青褐色	漆碗	2.5Y R 7/1
103 25	X-367Y250	漆漆	漆漆	碗	12.8	3.1	4.5	0.0	近世	18C後半	10YR 6/1	灰白色	漆碗	2.5Y YK 1

※法線の( )付は複数個数を示す。

第16表 五社遺跡 木製品一覧

排列	遺物	写真図版	通構	出土地点	種類	材質	法量(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
42	1	25	SD 5	X21Y211	円形板	スギ	24.3	7.1	1.4	
	2	25	SD 6	X155Y195	折敷	スギ	15.2	4.4	0.4	
	3	25	SD 6	X155Y195	折敷	スギ	13.7	4.2	0.45	
	4	26	SD 6	X155Y195	板材	スギ	10.3	3.0	0.9	
	5	25	SD 6	X155Y195	漆器柄	ケヤキ	器高 3.7	口径14.0	0.5	漆塗模分析No.2
	6	26	SD 6	X155Y195	角材	モクレン属	8.3	5.2	3.45	
	7	26	SD 9	X175Y228	板材	スギ	9.2	3.0	1.0	
	8	26		X195Y154Ⅲ層	漆器柄	ケヤキ	器高 4.2	口径17.0	0.35	漆塗模分析No.3
	9	26		X181Y228Ⅲ層	栓	スギ	4.5	2.0	1.6	一方尖刃。他方は欠損
	10	26		X204Y254 I層	折敷	ヒノキ	11.7	3.4	0.56	内面黒漆、小孔3ヶ所
	11	26		X153Y193Ⅲ層	板材	スギ	22.4	9.2	0.8	
	12	26		X195Y223V層	棒材	スギ	53.6	2.7	0.8	他1点(接合不可が同一)
	13	26		X197Y252V層	棒材	スギ	82.3	4.3	2.3	一端欠損

第17表 五社遺跡 石製品一覧

排列	遺物	写真図版	通構	出土地点	種類	材質	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重さ	
43	1	27	SI 1	No.1	礫石?	砂岩	15.6	5.5	4.8	650.0	
	2	27	SD 2	No.18	砾石	凝灰質砂岩	12.0	6.9	6.5	800.0	
	3	27		X178Y229Ⅲ層	砾石	流紋岩	6.1	4.9	1.9	37.9	
	4	27		X197Y255 I層	砾石	凝灰岩(褐色)	9.7	3.3	1.7	74.7	

第18表 五社遺跡 金属製品一覧

排列	遺物	写真図版	通構	出土地点	種類	材質	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重さ	
43	1	27	SD 2	X188Y238	金屬片	真鍮製?	2.5	2.0	0.1	4.46	
	2	27		X160Y205	臺状	真鍮製?	3.0	2.2	0.1	4.89	
	3	27		X242Y189Ⅲ層	馬頭	鉄	20.0	3.0	1.0	188.37	
	4	27		試掘トレンチ1	鉄	銅	径23.5			2.05	無寒元寶

# 第V章 五社条里遺跡

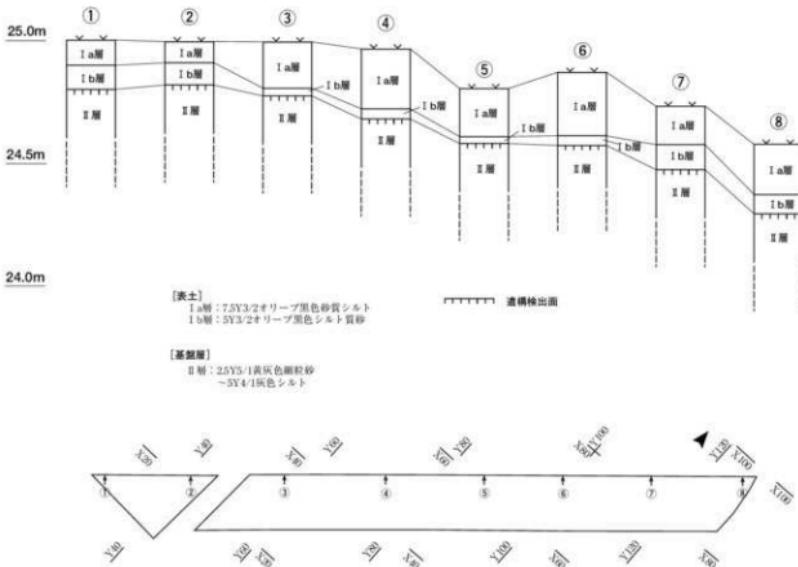
## 1 概要

五社条里遺跡は、五社遺跡に隣接する条里遺跡で、古代当時の土地利用の痕跡をとどめている。金田氏によるとやや不明瞭しながらも西に約6°偏する条里区画を推定している<sup>注1</sup>。岡本氏は、五社遺跡の発掘調査結果から古代後期の直線的な溝が条里地割である可能性が高いことを指摘し、さらに、各時期の建物もこの溝に主軸を合わせた条里村落を想定している<sup>注2</sup>。

今回の調査地は能越自動車道の西側に位置し、調査面積は5,338m<sup>2</sup>である。検出された造構は、近世以降の土坑や溝である。造構はやや東側寄りに分布しており、造構密度はさほど高くない。特徴的なのは、耕作に伴う小溝群が調査区中央からやや東寄りで集中的に確認されていることである。しかし、小溝群は近世を過ることはなく、古代に開発された条里遺構との関連性は低いと考えられる。また、集落に関連する造構については今回の調査からは確認されなかった。遺物には土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、唐津、伊万里、銅錢などが出土している。

## 2 層序

基本層序はI層からII層まであり、明確な包含層は確認されていない。I層が表土、耕作土で、II層は基盤層である。I層はオリーブ黒色砂質シルト～シルト質砂を基調と、II層は黄灰色細粒砂～灰色シルトを基調としている。造構検出は基盤層の上面で実施した。



第44図 五社条里遺跡 層序模式図

### 3 遺構

検出された遺構は、土坑、溝があり、報告するのは土坑4基、溝46条である。遺構の多くが調査区の東側に分布している。特に小溝群（SD 9～SD 24）については、方位や幅、深さがほぼ同一規模で間隔も規則的（1.1～1.2m）である。また、SD 9～17に直交するSD 30は西に9°振る。これら的小溝群は耕作に伴う溝と考えられる。遺構の時期は、出土遺物から概ね近世に帰属する。

#### A 土坑

##### 1号土坑（SK 1, 第49図）

調査区中央の東寄りに位置する楕円形の土坑である。長径2.00m、短径1.68m、深さ0.06mを測る。埋土は灰色シルト質細粒砂を基調とし、基盤層に比べて淘汰がやや良好であるため洪水などでもたらされた堆植物と考えられる。切り合いで小溝であるSD 24を切る。出土遺物は認められない。

##### 2号土坑（SK 2, 第49図）

調査区中央の南端に位置する隅丸方形になるとみられる土坑で、南側は調査区外に広がる。現存長径2.42m、現存短径2.55m、深さ0.21mを測る。埋土は灰色シルト質細粒砂を基調としている。確認された土坑の中では規模・深さなどにおいて規模が大きい。出土遺物は陶器がある。

##### 3号土坑（SK 3, 第49図）

調査区中央の西寄りに位置する円形の土坑である。長径0.73m、短径0.64m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は越中瀬戸の播鉢（1）がある。

##### 4号土坑（SK 4, 第49・51図、図版29）

調査区中央の西寄りに位置する不整形の土坑である。長径1.70m、短径0.90m、深さ0.08mを測る。埋土は灰色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は陶器がある。

#### B 溝

##### 1号溝（SD 1, 第49図）

調査区の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ3.90m、幅0.62m、深さ0.14mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は越中瀬戸、陶器がある。

##### 2号溝（SD 2, 第49図）

調査区の東端に位置する不整形な溝で、南北方向に延びている。長さ1.50m、幅0.60m、深さ0.08mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は陶器がある。

##### 3号溝（SD 3, 第49図）

調査区の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ1.60m、幅0.22m、深さ0.04mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は中世土師器の皿がある。

##### 4号溝（SD 4, 第49図）

調査区の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長6.50m、幅2.45m、深さ0.25mを測る。SD 5とSD 7に直交するように切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としており、淘汰が良好なため水流による堆積とみなされる。出土遺物は須恵器、越中瀬戸、唐津、伊万里、陶器がある。

##### 5号溝（SD 5, 第49図）

調査区の東端に位置する溝である。東西方向に直線的に延び、X83 Y120付近で直角に曲がり、東側に続く。主軸は9°程度西に傾く。現存長は南北方向で14.20m、東西方向で16.10m、幅0.80～1.60

m、深さ0.24mを測る。SD4とSD6を切る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としており、淘汰が良好なため水流による堆積とみなされる。また、SD4付近から東側には、溝の壁面の崩落を防ぐために、樹皮の残った自然木を使用した杭と土留めの横材が遺存していた。出土遺物は中国製白磁、中国製青磁、越中瀬戸、唐津、伊万里、陶器、磁器、棒状石製品（1）、ガラス瓶がある。

#### 6号溝（SD6、第49図）

調査区の東端に位置する、不整形な溝である。現存長4.50m、現存幅0.90m、深さ0.35mを測る。SD5に切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は土師器、越中瀬戸、内野山、伊万里がある。

#### 7号溝（SD7、第49図）

調査区の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ4.10m、幅0.47～1.10m、深さ0.13mを測る。SD4をほぼ直交するように切る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は唐津、陶器がある。

#### 8号溝（SD8、第49図）

調査区の東側に位置する、東西方向に延びる溝である。現存長7.90m、幅0.65m、深さ0.11mを測る。西側は調査区外へ延びる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は珠洲がある。

#### 9号溝（SD9、第50図、図版28）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。Aで現存長2.00m、Bで現存長18.15m、幅0.32～0.38m、深さ0.02～0.10mを測る。SD30とほぼ直交するように切られ、南北方向の規模のやや異なる新しい溝にも切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は須恵器、唐津？がある。

#### 10号溝（SD10、第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。Aで長さ17.32m、幅0.35m、深さ0.04mを測る。SD30にほぼ直交するように切られ、南北方向の規格のやや異なる新しい溝にも切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 11号溝（SD11、第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。Aで現存長11.55m、Bで現存長13.20m、幅0.24～0.61m、深さ0.04～0.06mを測る。SD30とほぼ直交するように切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 12号溝（SD12、第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ16.61m、幅0.42m、深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は伊万里、陶器がある。

#### 13号溝（SD13、第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。Aで現存長3.40m、Bで現存長13.95m、幅0.30m、深さ0.04mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は銅鏡（1）がある。

#### 14号溝（SD14、第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長20.35m、幅0.48m、

深さ0.05mを測る。S D30とS D28にはほぼ直交するように切られ、南北方向の規模のやや異なる新しい溝にも切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 15号溝（S D15, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長5.60m, 幅0.38m, 深さ0.06mを測る。西端は南北方向の規模のやや異なる新しい溝に切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 16号溝（S D16, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長20.70m, 幅0.38m, 深さ0.09mを測る。S D30とS D28にはほぼ直交するように切られ、南北方向の規模のやや異なる新しい溝にも切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 17号溝（S D17, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長21.13m, 幅0.48m, 深さ0.07mを測る。S D30とS D28にはほぼ直交するように切られ、南北方向の規模のやや異なる新しい溝にも切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 18号溝（S D18, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ2.70m, 幅0.26m, 深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 19号溝（S D19, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ2.80m, 幅0.24m, 深さ0.03mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 20号溝（S D20, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長2.50m, 幅0.30m, 深さ0.05mを測る。西側は攪乱によって途切れています。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 21号溝（S D21, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ2.60m, 幅0.38m, 深さ0.06mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 22号溝（S D22, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長1.20m, 幅0.36m, 深さ0.06mを測る。西端を南北方向の規模のやや異なる新しい溝にも切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 23号溝（S D23, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ7.20m, 幅0.44m, 深さ0.07mを測る。S D28にはほぼ直交するように切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は越中瀬戸がある。

#### 24号溝（S D24, 第50図, 図版29）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長11.70m, 幅0.46m, 深さ0.06mを測る。西端はSK 1に切られ、南北方向の規模がやや異なる新しい溝にも切られる。東側は調査区外へ延びる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は中世土師

器の皿・越中瀬戸の匣鉢？（2）がある。

25号溝（S D25, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ3.60m, 幅0.48m, 深さ0.06mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

26号溝（S D26, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。長さ1.60m, 幅0.24m, 深さ0.03mを測る。S D31とほぼ直交するように切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

27号溝（S D27, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。現存長6.00m, 幅0.25m, 深さ0.06mを測る。S D31とほぼ直交するように切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

28号溝（S D28, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。現存長7.40m, 幅0.46m, 深さ0.07mを測る。S D14・S D16・S D17・S D23とほぼ直交して切り, S D29も切る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

29号溝（S D29, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。現存長7.50m, 幅0.29m, 深さ0.04mを測る。南端はS D28に切られる。S D9・S D13をほぼ直交するように切り, S D11に切られる。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

30号溝（S D30, 第50図）

調査区の中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。長さ12.00m, 幅0.40m, 深さ0.04mを測る。S D9～S D11・S D14・S D16・S D17とは直交するように切る。S D32とは平行に走る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

31号溝（S D31, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。長さ2.50m, 幅0.32m, 深さ0.04mを測る。S D26・S D27とほぼ直交するように切る。S D30とは主軸方位が同一である。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

32号溝（S D32, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びて、北側は調査区外に延びる。現存長11.40m, 幅0.52m, 深さ0.07mを測る。S D30とは主軸方位が同一である。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

33号溝（S D33, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。長さ3.10m, 幅0.45m, 深さ0.07mを測る。S D32とは方位が同一である。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

34号溝（S D34, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。長さ1.20m, 幅0.38m, 深さ0.07mを測る。S D32とは主軸方位が同一である。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調として

いる。出土遺物は認められない。

#### 35号溝（S D35, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に直線的に延びている。長さ3.80m, 幅0.40m, 深さ0.05mを測る。S D32とは主軸方位が同一である。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 36号溝（S D36, 第50図）

調査区中央の東端に位置する溝で、南北方向に延びている。長さ1.70m, 幅0.44m, 深さ0.08mを測る。S D30とS D32に挟まれている。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 37号溝（S D37, 第50図）

調査区中央の東寄りに位置する溝で、南北方向に延びている。長さ5.10m, 幅0.59m, 深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 38号溝（S D38, 第50図）

調査区中央の東寄りに位置する溝で、南北方向に延びている。長さ1.20m, 幅0.34m, 深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 39号溝（S D39, 第50図）

調査区中央の東寄りに位置する溝で、南北方向に延びている。長さ2.40m, 幅0.46m, 深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は越中瀬戸、陶器がある。

#### 40号溝（S D40, 第50図）

調査区中央に位置する溝で、南北方向に延びている。長さ1.90m, 幅0.43m, 深さ0.08mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 41号溝（S D41, 第50図）

調査区中央に位置する溝で、南北方向に延びている。長さ2.50m, 幅0.48m, 深さ0.09mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は唐津がある。

#### 42号溝（S D42, 第50図）

調査区中央に位置する溝で、南北方向に延びている。長さ1.70m, 幅0.40m, 深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は認められない。

#### 43号溝（S D43, 第50図）

調査区中央に位置する溝で、南北方向に延びている。長さ3.40m, 幅0.84m, 深さ0.09mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は陶器がある。

#### 44号溝（S D44, 第50図）

調査区中央に位置する溝で、南北方向に延びている。南側は擾乱によって破壊されている。現存長3.60m, 幅0.35m, 深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は中世土師器の皿がある。

#### 45号溝（S D45, 第50図）

調査区中央に位置する溝で、南北方向に延びている。長さ3.20m, 幅1.08m, 深さ0.04mを測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は越中瀬戸がある。

#### 46号溝（S D46, 第50図）

調査区中央の西寄りに位置する溝で、南北方向に延びている。長さ1.70m, 幅0.65m, 深さ0.14m

を測る。埋土はオリーブ黒色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は銅錢（2）がある。

#### 4 遺物

土器・陶磁器には土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、中国製白磁、中国製青磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津、伊万里、内野山、瓦質土器があるが、全体の出土量は少ない。図示したのは36点である。遺構出土の遺物は、越中瀬戸や銅錢など近世の時期に帰属するものが中心である。

##### （1）土器・陶磁器（第51図、図版29）

1・2は遺構出土で、3～36は包含層出土である。1は3号土坑（SK3）出土の越中瀬戸の擂鉢である。端部が三角状にやや肥厚し、鋸軸がかかる。16世紀末～17世紀の所産である。2は28号溝（SD28）出土の越中瀬戸で匣鉢とみられるものである。底部は糸切りによる切り離しで、体部は直立気味に立ち上がる。体部内外面には鋸軸がかかる。16世紀末～17世紀である。3～15は中世土師器の皿である。3～9は平底気味の底部から、口縁部は外傾する。端部はつまみ上げ気味におさめる。10～14は丸底もしくは丸底気味の底部から、口縁部は外反気味である。端部は水平もしくは上方につまみ出す。器壁は薄く仕上げる。14はやや法量が大きいものである。15は平坦な底部から、口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を面取る。16～21は珠洲である。16・17は甕の口縁部破片で、口縁部は短く、端部は円頭を呈する。18～21は擂鉢で、18・19は口縁端部が三角形を呈し、18の端面には波状文が巡る。擂目は18で一単位7条が確認され、19は一単位8条が確認される。20・21は底部破片で、内面は著しく摩滅している。22は中国製白磁の碗で、直線的な体部から大きな玉縁状の口縁端部を有する。23は龍泉窯系青磁の碗の破片で、体部外面に縞蓮弁文が施される。24は龍泉窯系青磁の盤とみられる個体で、内外面に施釉が施される。25・26は瀬戸美濃である。25は天目茶碗で、内外面に鉄軸がかかる。26は削り出し高台を有する内禿皿とみられるもので、灰釉が施される。27～31は越中瀬戸で、27・28は椀、29は丸皿、30は壺、31は匣鉢？である。27・28は削り出し高台の外面が露胎となる底部を有し、内面には鉄軸がかかる。29は高台が三角形を呈する削り出し高台から、体部はやや内湾しながら大きく開く。口縁部は外反気味で、端部は丸くおさめる。30は直立気味の短い口縁部を有し、内外面に鉄軸が施される。31は回転糸切りの底部に、内外面に鉄軸がかかる。32は唐津の陶胎染付の碗で、体部外面に鉄絵が描かれている。高台には砂目が残る。33・34は伊万里である。33は染め付けされた皿で、底部は削り出し高台を有し、砂目が残る。34は小杯で、外面に型押し整形による縞模様が施される。35は内野山の皿で、内外面に銅緑釉がかかる。内面見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。36は瓦質土器で、火鉢か。外面に菊花文が押印されている。

##### （2）石製品（第51図、図版30）

1はSD5出土の棒状石製品で、表面は丁寧に調整が施される。用途は不明である。石材は滑石である。

##### （3）金属製品（第51図、図版30）

1・2は遺構出土で、3・4・5～6は包含層出土の金属製品である。5～8は煙管で、5～7が雁首で、8が吸い口である。6には羅字に用いられた有機物（タケの一種）の管の一部が遺存している。7は火皿の部分が欠損している。1～4は銅錢で、1・2・4は寛永通寶で、3は元豊通寶である。1はSD13から、2はSD46からそれぞれ出土している。

## 5 総括

検出された遺構には、土坑、溝がある。表土（現耕作土）直下の遺構検出面ということで、多少なりとも遺構が後世の削平を受けていると考えられる。そうした中で、調査区の中央から東側を中心とし小溝群（S D 9～S D 24）で構成された遺構の広がりが確認された。小溝群は方位や規模がほぼ一様であり、規則性のあるまとまりとなっている。このうち、南北方向に延びる S D 30・S D 32・S D 28・S D 29があり、この溝に直交するように東西方向の溝群が走るという配置を呈している。溝の埋土は細粒砂を基調としており、比較的淘汰も良好である。このことは、埋土が水成による堆積環境下で埋没した結果であり、洪水などによってもたらされた可能性がある。この小溝群のうち、10条についてその理土を花粉分析と植物珪酸体分析を実施した。その結果、花粉分析からは、調査地および周辺で集約度の高い稻作が行われていた可能性が推定され、カキノキ属、ソバ属、キュウリ属、アズキ属などの果樹や野菜、雜穀類が遺跡周辺で栽培されていた可能性が指摘されている。遺跡内もしくは遺跡近隣でこれらの農作物が生産されていたことが示唆される。さて、これらの溝群の内、南北方向に延びる S D 30は軸方位にして西に 9°振る。帰属時期は出土遺物により近世以降であり、それを通ることは考えられない。古代の条里遺跡として区画が西に 6°偏するものが考えられているが、今回の調査からは、古代まで通る遺構は確認されず、古代の条里との関連性については不明である。また、鎌倉時代には旧福岡町を中心とした糸岡荘が、遺跡周辺にまで荘域としていたことが推定されている<sup>注3</sup>。五社遺跡の調査結果からも、12世紀から13世紀を主体とする中世集落が確認されており、糸岡荘内に展開した集落の一部であることが指摘されている<sup>注4</sup>。糸岡荘との関連性は、中世まで通る遺構の存在が確認されていないため、今後の課題となる。

(島田亮仁)

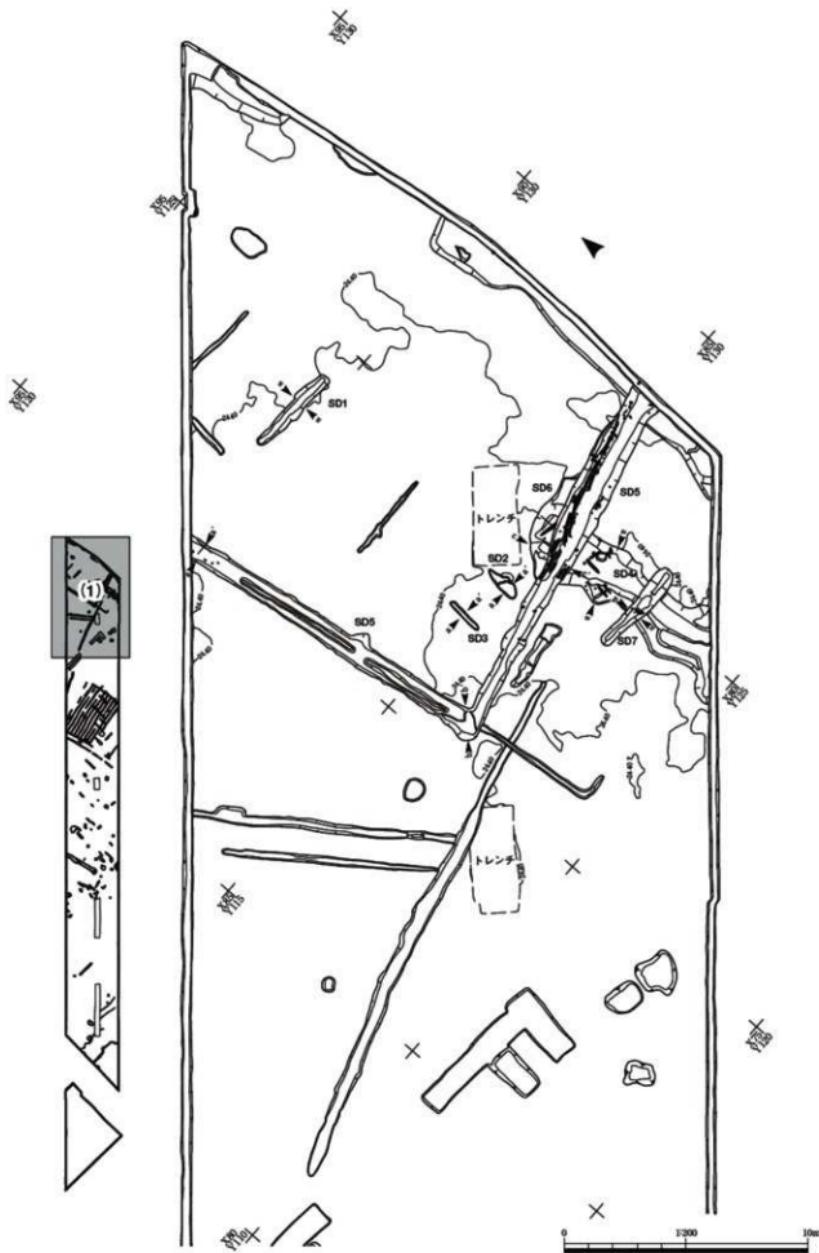
## 注

注1 金田章裕 1971 「条里制」「小矢部市史 上巻」小矢部市史編纂委員会

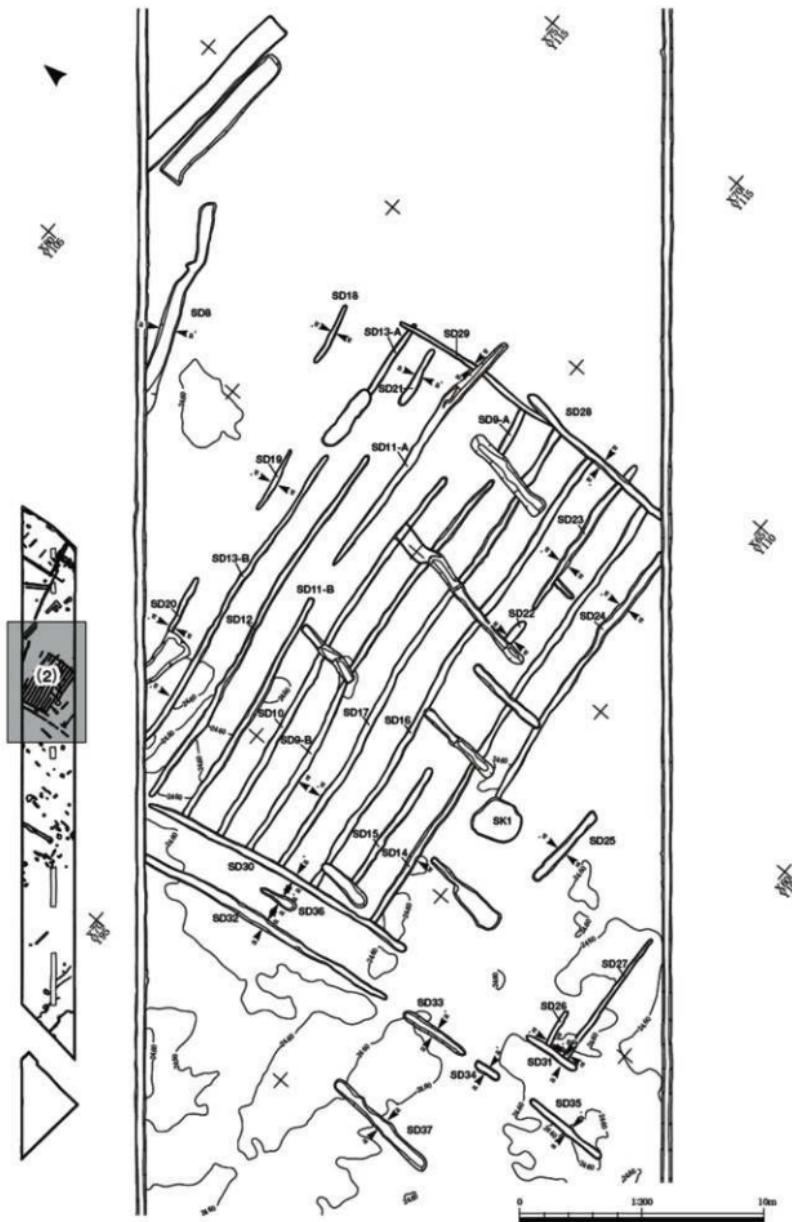
注2 岡本涼一郎 1998 「五社遺跡古代後期の集落構造について」「五社遺跡」財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所

注3 大山喬平他 1984 「第二節 莊園の様相」「富山県史 通史編Ⅱ 中世」富山県

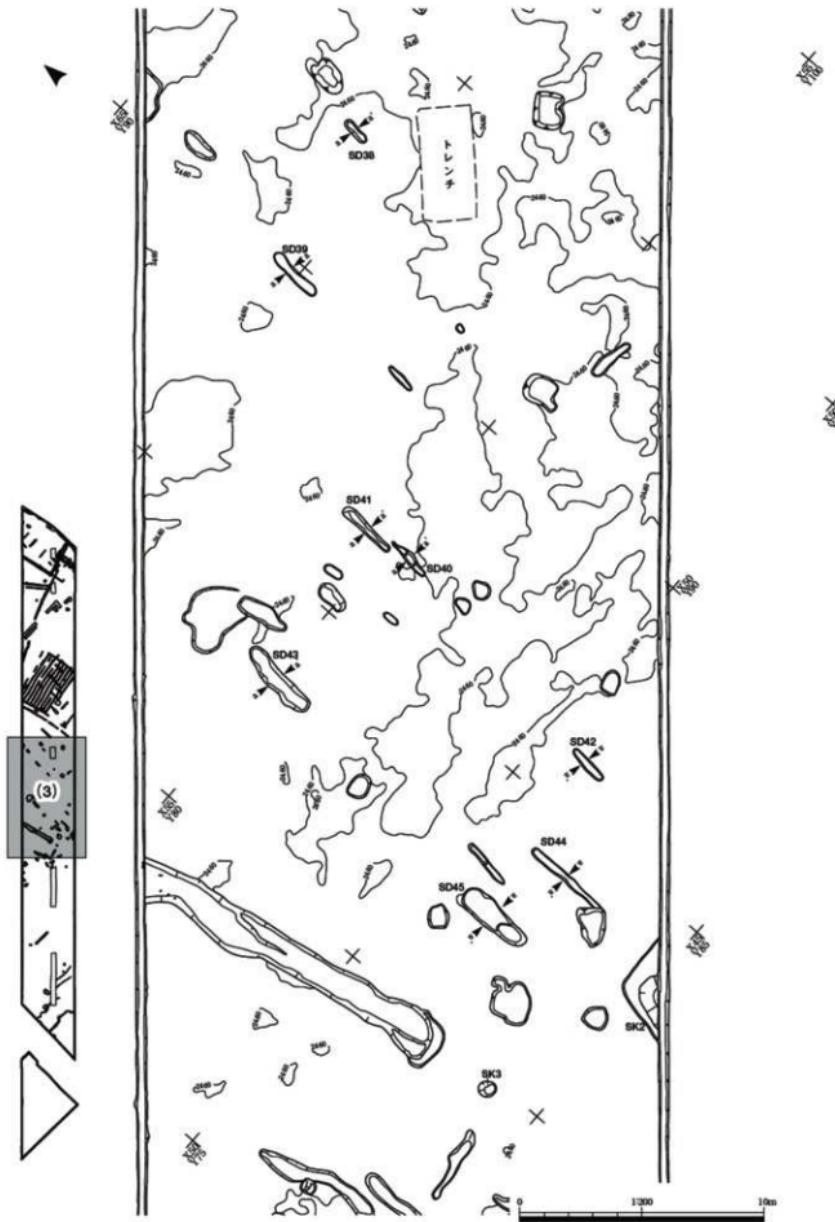
注4 山本正敏 1998 「五社遺跡中世集落の構造」「五社遺跡」財団法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所



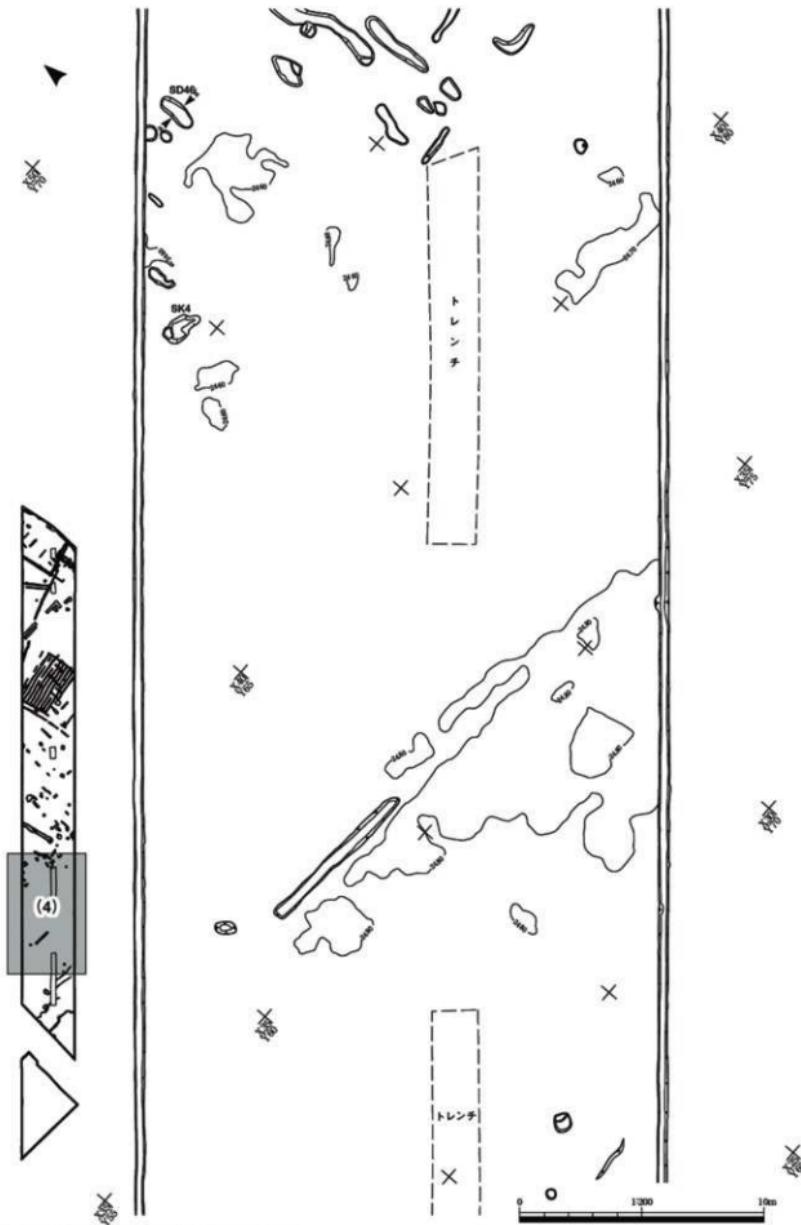
第45図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(1)



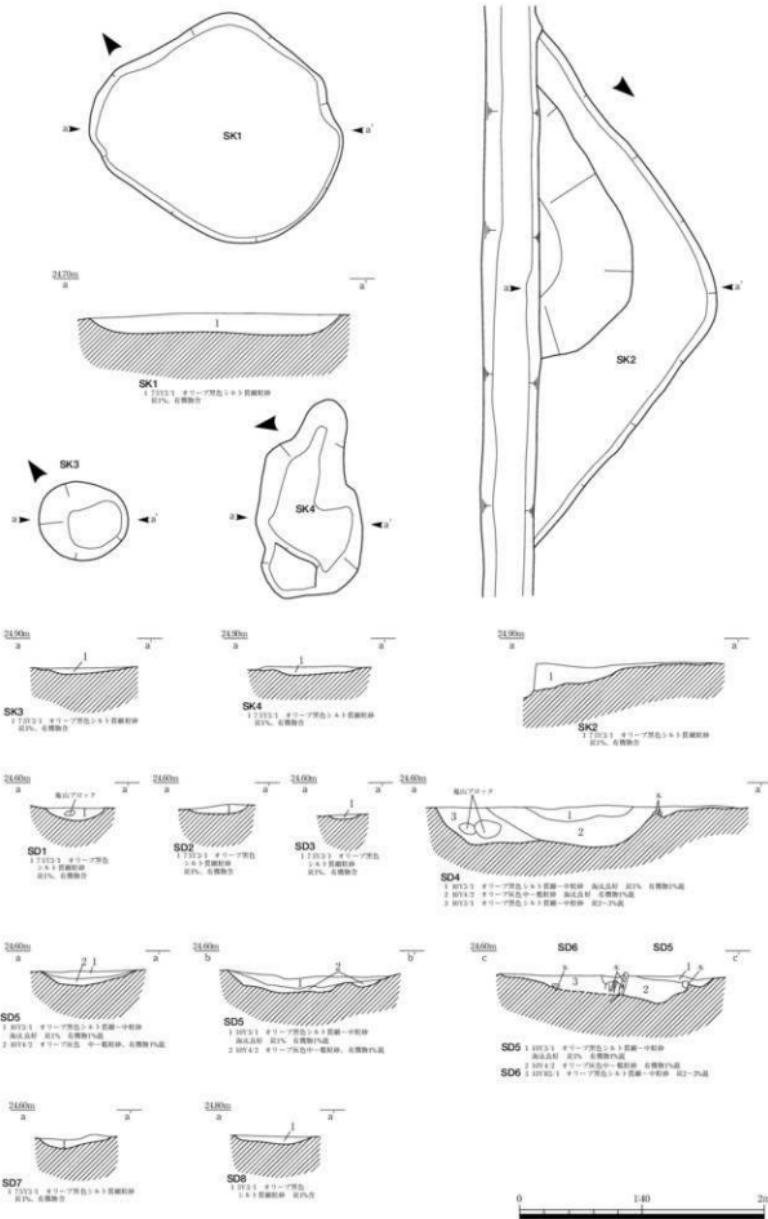
第46図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(2)



第47図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(3)

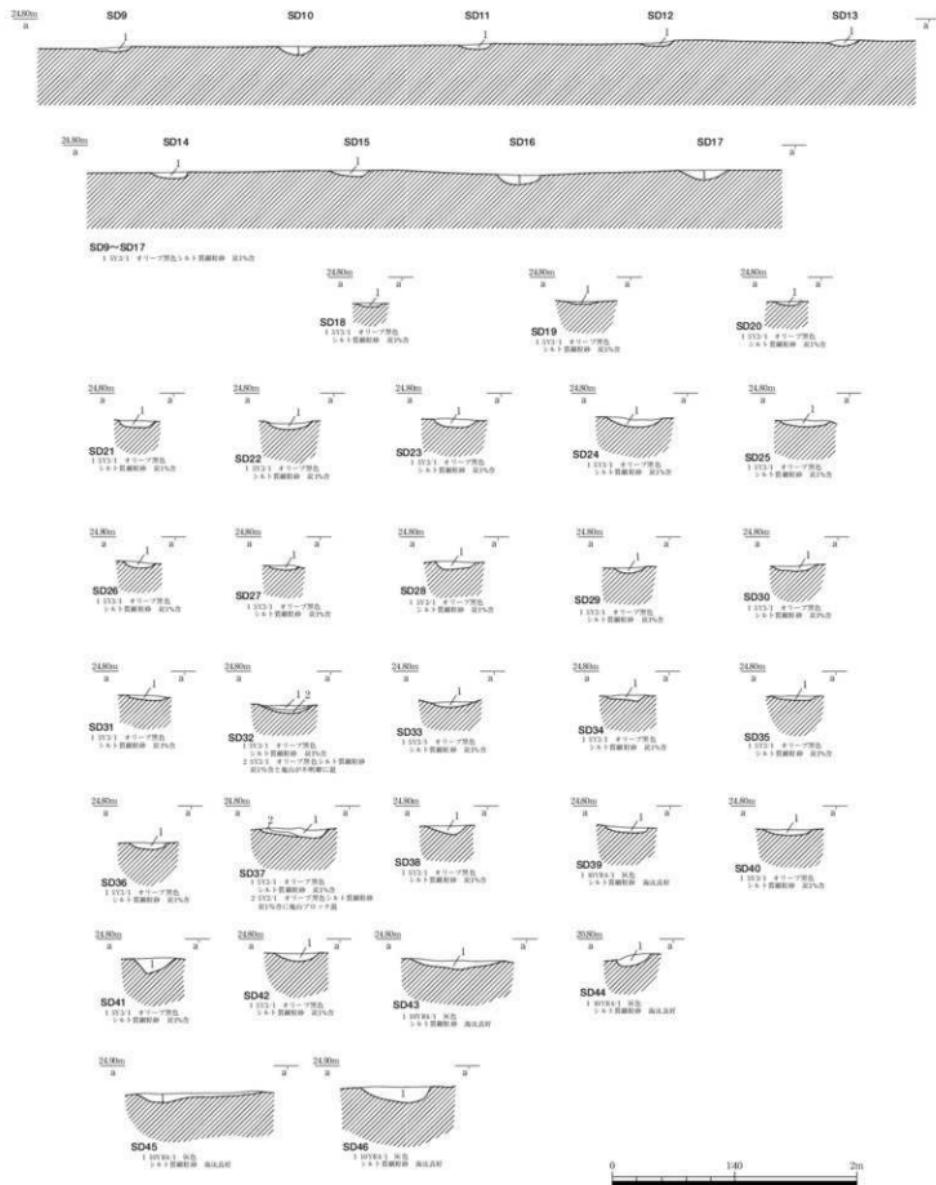


第48図 五社条里遺跡 近世遺構全体図(4)



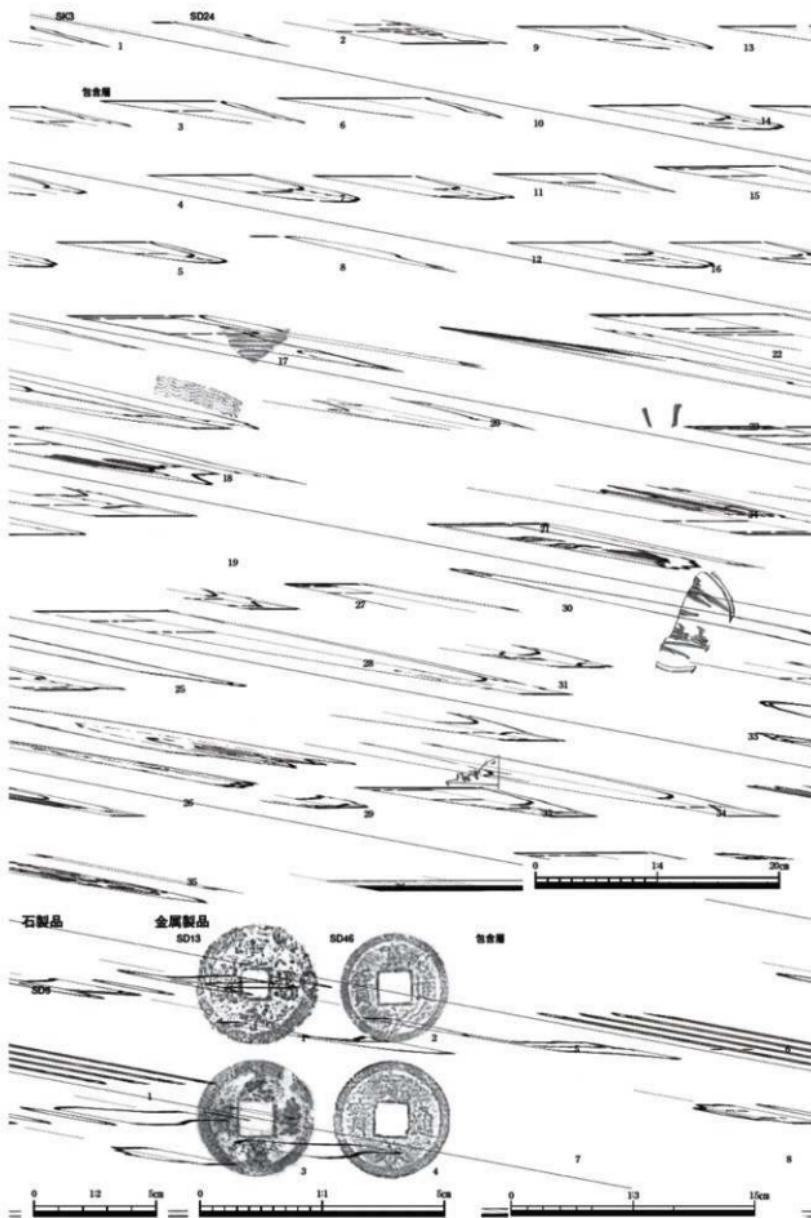
第49図 五社条里遺跡 近世遺構実構図

SK 1 ~ SK 4 SD 1 ~ SD 8



第50図 五社条里遺跡 近世遺構実測図

SD 9 ~ SD46



第51図 五社条里遺跡 遺物実測図 (土器・陶磁器 1/4, 石製品 1/2, 金屬製品 1~4 1/1, 5~8 1/3)

土器・陶磁器 SK3(1) SD24(2) 包含層

石製品 SD5(1)

金屬製品 SD13(1) SD46(2) 包含層

第19表 五社条里遺跡 近世 土坑一覧

遺構	旧遺構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	特記	挿図	写真 図版
			長辺	短辺	深さ				
SK 1	SK50	楕円	2.00	1.68	0.06			49	
SK 2	SK78	隅丸方?	(2.42)	(2.35)	0.21	磁器		49	
SK 3	SK80	円	0.73	0.64	0.08	越中瀬戸		49	
SK 4	SK96	不整	1.70	0.90	0.08	陶器		49	

※規模の( )付は現存数値を示す。

第20表 五社条里遺跡 近世～近代 溝一覧

遺構	旧遺構番号	規模(m)			出土遺物	時期	特記事項	挿図	写真 図版
		長さ	幅	深さ					
SD 1	SD 5	3.90	0.62	0.14	越中瀬戸、陶器	近世～近代		49	
SD 2	SD 8	1.50	0.60	0.08	陶器	近世～近代		49	
SD 3	SD 9	1.60	0.22	0.04	中世土師器	近世～近代		49	
SD 4	SD14	(6.50)	2.45	0.25	須恵器、越中瀬戸、唐津、伊万里、陶器	近世～近代	<SD 5・SD 7	49	
SD 5	SD12	(14.20) 20.00～ (16.10)	1.60	0.24	白磁、青磁、越中瀬戸、唐津、伊万里、陶器、ガラス瓶	近世～近代	>SD 4・SD 6 L字状に屈曲する区画溝	49	
SD 6	SD13	(4.50)	(0.90)	0.35	土師器、越中瀬戸、内野山、伊万里	近世～近代	<SD 5	49	
SD 7	SD17	4.10	0.47～ 1.10	0.13	唐津、陶器	近世～近代	>SD 4	49	
SD 8	SD22	(7.90)	0.65	0.11	珠洲	近世		49	
SD 9	SD29	A (2.00) 0.32～ B (18.15) 0.38	0.02～ 0.10		須恵器、唐津？	近世	<SD29・SD30	50	28
SD10	SD43	(17.32)	0.35	0.04		近世	<SD30	50	
SD11	SD27	A (11.55) 0.24～ B (13.20) 0.61	0.04～ 0.06			近世	<SD30、>SD29	50	
SD12	SD26	16.61	0.42	0.05	伊万里、陶器	近世		50	
SD13	SD40	A (3.40) B (13.95)	0.30	0.04	銅鏡	近世	<SD29	50	
SD14	SD35	(20.35)	0.48	0.05		近世	<SD29・SD30	50	
SD15	SD41	(5.60)	0.38	0.06		近世		50	
SD16	SD31	(20.70)	0.38	0.09		近世	<SD28・SD30	50	
SD17	SD30	(21.13)	0.48	0.07		近世	<SD28・SD30	50	
SD18	SD23	2.70	0.26	0.05		近世		50	
SD19	SD99	2.80	0.24	0.03		近世		50	
SD20	SD39	(2.50)	0.30	0.05		近世		50	
SD21	SD25	2.65	0.38	0.06		近世		50	
SD22	SD37	(1.20)	0.36	0.06		近世		50	
SD23	SD33	7.20	0.44	0.07	越中瀬戸	近世	<SD28	50	
SD24	SD36	(11.70)	0.46	0.06	中世土師器、越中瀬戸	近世	<SK 1	50	
SD25	SD46	3.60	0.48	0.06		近世		50	
SD26	SD48	(1.60)	0.24	0.03		近世	>SD31	50	
SD27	SD49	(6.00)	0.25	0.06		近世	>SD31	50	
SD28	SD32	(7.40)	0.46	0.07		近世	>SD14・SD16・SD17・ SD23・SD29	50	
SD29	SD100	(7.50)	0.29	0.04		近世	<SD11・SD28、>SD13	50	
SD30	SD62	12.20	0.40	0.04		近世	<SD9・SD10・SD11・ SD14・SD16・SD17	50	
SD31	SD47	2.50	0.32	0.04		近世	<SD26・SD27	50	
SD32	SD54	(11.40)	0.52	0.07		近世		50	
SD33	SD55	3.10	0.45	0.07		近世		50	
SD34	SD56	1.20	0.38	0.07		近世		50	
SD35	SD67	3.80	0.40	0.05		近世		50	
SD36	SD63	1.70	0.44	0.08		近世		50	
SD37	SD68	5.10	0.59	0.05		近世		50	
SD38	SD69	1.20	0.34	0.07		近世		50	
SD39	SD61	2.40	0.46	0.07	越中瀬戸、陶器	近世		50	
SD40	SD68	1.90	0.43	0.08		近世		50	
SD41	SD69	2.50	0.48	0.09	唐津	近世		50	
SD42	SD73	1.70	0.40	0.05		近世		50	
SD43	SD74	3.40	0.84	0.09	陶器	近世		50	
SD44	SD75	(3.60)	0.35	0.07	中世土師器	近世		50	
SD45	SD77	3.20	1.08	0.04	越中瀬戸	近世		50	
SD46	SD92	1.70	0.65	0.14	銅鏡	近世		50	

※規模の( )付は現存数値を示す。

第21表 五社条里遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧

件名	写真図版	遺構	出土地点	種類	材質	法量(cm)		備考	
						長さ	幅		
1 29	SK3	地中窓口	圓錐	(1.9)	鉄	16C 東~17C	2.5YR 1	灰白色	2.5YR 4/1 灰白色
2 29	SD04	地中窓口	直路?	(1.9)	鉄	16C 東~17C	2.5YR 2	灰黄色	3YR 4/3 に高い赤褐色
3 29	XG2Y93 I 帯	中井土窓口	直	(1.9)	鉄	14C 後半~15C	2.5YR 6/2	灰黃褐色	
4 29	X29Y118 I 帯	中井土窓口	直	8.8 (2.1)	鉄	14C 後半~15C	2.5Y7.3	浅黄色	
5 29	XG2Y100 I 帯	中井土窓口	直	8.8 (2.0)	鉄	14C 後半~15C	2.5Y5/2	黄褐色	1号縁部にテール 状付着
6 29	X30Y104 I 帯	中井土窓口	直	7.9 (1.6)	鉄	14C 後半~15C	2.5Y6.3	に高い黄色	内部に部分着
7 29	X30Y103 I 帯	中井土窓口	直	8.2 (1.8)	鉄	14C 後半~15C	2.5Y6.4	に高い黄色	内部に部分着
8 29	X-GV94	中井土窓口	直	8.1 (2.0)	鉄	14C 後半~15C	7.5Y R 6/4	に高い橙色	
9 29	X23Y111 I 帯	中井土窓口	直	8.9 (1.7)	鉄	15C 東~16C	2.5Y7.2	灰黄色	内部に埋付着
10 29	XG2Y123 I 帯	中井土窓口	直	9.8 (1.7)	鉄	15C 東~16C	2.5Y7.3	浅黄色	
11 29	X40Y99 I 帯	中井土窓口	直	8.9 (1.9)	鉄	15C 東~16C	2.5Y5/2	麻斑黄色	外側面に埋付着 1号縁部タール积 付着
12 29	X48Y80 I 帯	中井土窓口	直	7.8 (1.7)	鉄	15C 東~16C	2.5Y R 6/4	に高い橙色	
13 29	X30Y127 I 帯	中井土窓口	直	9.8 (1.6)	鉄	15C 東~16C	2.5Y6/2	灰黃褐色	
14 29	X30Y39 I 帯	中井土窓口	直	12.4 (1.5)	鉄	15C 東~16C	2.5Y6/2	灰黄色	
15 29	XG2Y102 I 帯	中井土窓口	直	10.5 (2.2)	鉄	15C 東~16C	2.5Y6.4	に高い青色	
16 29	X30Y99 I 帯	直窓	直	(2.0)	鉄	15C 東~16C	2.5Y R 3/1	オリーブ灰色	
17 29	X30Y115 I 帯	直窓	直	(4.5)	鉄	15C 東~16C	2.5Y R 1	灰色	
18 29	X30Y40 I 帯	直窓	直	(4.7)	鉄	15C 東~16C	2.5Y5/1	灰色	
19 29	X30Y125 I 帯	直窓	直	(3.7)	鉄	15C 東~16C	N7.1	灰白色	
20 29	X30Y141 I 帯	直窓	直	(9.2)	鉄	15C 東~16C	2.5Y5/1	灰黃色	
21 29	X37Y106	直窓	直	(4.1) 13.0	鉄	15C 東~16C	2.5Y6/1	灰色	
22 29	X30Y125 I 帯	中国製白瓶	直	16.0 (2.9)	陶	11C 後半~12C 前半	2.5Y7/3	灰白色	10YR 8/1 灰白色
23 29	X30Y90 I 帯	中国製白瓶	直	(2.6)	陶	13C 前半	10YR 8/1	灰白色	2.5G Y6/1 オリーブ灰色
24 29	X48Y80 I 帯	中国製白瓶	直	(2.4)	陶	8 中井	7.5Y R 6/2	に高い褐色	5G Y6/1 灰白色
25 29	X30Y77 I 帯	直口花瓶	直	11.1 (5.9)	陶	15C 大型窓	2.5Y2/1	灰白色	10YR 2/3 褐褐色
26 29	XG2Y106 I 帯	直口花瓶	直	(1.0)	陶	15C 大型窓	2.5YR 2	灰白色	5Y7/3 淡黄色
27 29	X12Y42 I 帯	地中窓口	直	(1.6)	陶	16C 東~17C	2.5Y6/2	灰黃色	内側に黒斑有り
28 29	X30Y79 田町木	地中窓口	直	(1.69)	陶	16C 東~17C	2.5YR 2	灰白色	5Y R 3/4 褐褐色
29 29	X30Y110 I 帯	地中窓口	丸頭	10.1 2.3	陶	16C 東~17C	2.5YR 2	灰オリーブ色	5.5YR 4/4 淡黄色 高台見込 に復行
30 29	X12Y104 I 帯	地中窓口	直	6.0 (2.25)	陶	16C 東~17C	2.5Y R 7/2	灰褐色	2.5Y R 3/2 褐褐色
31 29	X30Y61 I 帯	地中窓口	直路?	(2.2) 7.9	陶	16C 東~17C	10YR 2/3	に高い青褐色	5Y R 5/1 灰白色
32 29	X49-Y20-105-106	津津	直	6.0 (1.5)	陶	17C	2.5Y8/1	灰白色	10Y 2/1 灰白色 化粧土に透明 層と付着
33 29	X40Y70 I 帯	伊万里	直	(2.3)	陶	17C 前半	3Y7/1	灰白色	2.5G Y7/1 オリーブ灰 色
34 29	X30Y85 I 帯	伊万里	小柄	(2.5)	陶	17C ?	N8	灰白色	10YR 8/1 灰白色 透明釉
35 29	X23-Y78-Y107 I 帯	内野山	直	11.5 (2.5)	陶	17C 後半~18C 前半	2.5Y6/1	灰色	2.5Y 3/3 灰オリーブ色 網目模様
36 29	X33Y39 I 帯	瓦質土器	直	(3.2)	陶	15C ?	10Y5/1	灰色	

※法量の( )付は現存数値を示す。

第22表 五社条里遺跡 石製品一覧

持国	遺物	写真図版	番号	出土地点	種類	材質	法量(cm)		備考	
							長さ	幅		
51	1	30	SD5		棒状	滑石	2.90	0.60	0.50	1.45

第23表 五社条里遺跡 金属製品一覧

持国	遺物	写真図版	遺構	出土地点	種類	材質	法量(cm・g)			備考
							長さ	幅	厚さ	
1	30	SD13			鉄	鋼	径24.5			3.05 寛永通寶
2	30	SD46			鉄	鋼	径24.9			3.02 寛永通寶
3	30		耕土		鉄	鋼	径24.2			元豐通寶
4	30				鉄	鋼	径22.7			寛永通寶
5	30	X71Y110 I 帯	鍵管(雁首)		鉄	鋼	6.2	1.4	0.6	5.1
6	30	X75Y114 I 帯	鍵管(雁首)		鉄	鋼	4.4	1.4	0.9	3.9
7	30	X72Y115 I 帯	鍵管(雁首)		鉄	鋼	3.5	1.0	1.0	6.3
8	30	X60Y106 I 帯	鍵管(吸口)		鉄	鋼	7.0	1.0	1.0	6.0

# 第VI章 水牧遺跡

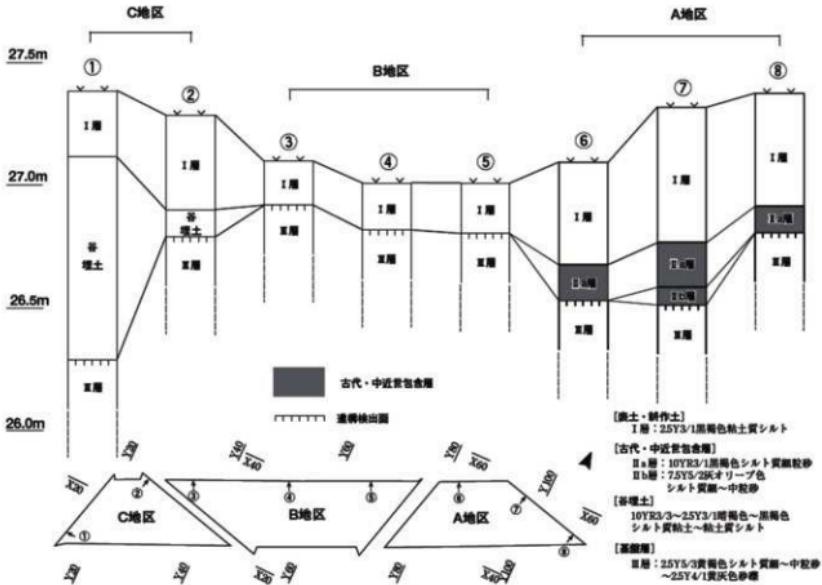
## 1 概要

水牧遺跡は北陸新幹線建設に先立って、新たに発見された集落遺跡である。遺跡名となった水牧の名前が歴史上に現れるのは、平安時代の終わり頃、源平盛衰記に砺波山の合戦で水牧出身の水巻四郎が源氏方の案内役をしたことが記されている<sup>注1</sup>。試掘調査では古代～中世の遺構が確認されている。

今回の調査地は五社遺跡から南西に約2.5km離れた小矢部川とその支流の黒石川の間の微高地上で、調査面積は4,539m<sup>2</sup>である。主な時期は古代と中世である。古代の遺構には竪穴建物5棟、土坑、溝がある。遺構はB地区からC地区に分布している。竪穴建物は一辺がおよそ2.4～3.9mであり、3棟にカマドが確認された。遺物には土師器、須恵器、製塙土器、支脚などがある。中世の遺構には土坑、溝、自然流路がある。全体として遺構の分布は散在的で、集落を構成する建物遺構は確認されていない。出土遺物には中世土師器、珠洲、中国製青磁、越中瀬戸などがある。

## 2 層序

層序はⅠ層からⅢ層まであり、Ⅰ層が表土・耕作土で、黒褐色粘土質シルトである。Ⅱ層は古代と中世の包含層で、A地区において確認されている。黒褐色シルト質細粒砂～灰オリーブ色シルト質細～中粒砂を基調としている。Ⅲ層は古代と中世の遺構の基盤層であり、上面で遺構が検出されている。つまり、各時期の遺構は同一検出面で確認されている。



第52図 水牧遺跡 層序模式図

### 3 遺構

遺構は古代と中世の2時期が確認されており、主体となるのは遺構・遺物ともに古代である。古代の遺構はA地区からC地区まで分布しており、堅穴建物5棟（B地区で3棟、C地区で2棟）、土坑、溝などが確認されている。全体に遺構の残存状況は悪く、分布密度も散在的であった。遺構の帰属時期は概ね7世紀後半と考えられる。中世の遺構は土坑や溝、自然流路などが確認されている。A地区からC地区にかけて遺構の広がりが確認されたが、分布密度は低い。建物遺構は確認されておらず、C地区に小規模な土坑の分布が認められる。また、C地区の西側には緩やかに落ち込む谷地形を呈しており、時期を問わず遺構は認められず、遺物もほとんど出土しない。

#### （1）古代

##### A 堅穴建物

###### 1号堅穴建物（S I 1、第57・66・72図、図版2・33・41・53）

B地区のはば中央に位置する。規模は長径3.40m、短径2.89m、深さ0.13mである。面積は9.82m<sup>2</sup>で、平面形は方形を呈する。東西棟で、主軸はN-80°-Wである。埋土は暗オリーブ褐色シルト質細粒砂からオリーブ褐色シルト質細～中粒砂を基調とし炭化物を多く含んでいる。カマドは東壁の中央からやや南側に設置されている。カマド袖部分の長さは0.5～0.6mで、袖部分の外幅は1.1m、内幅は0.3m、カマドの補強材として用いられた自然石が左袖に一つ残存している。煙道突出部分は長さ0.8m、幅0.8mの規模を有する。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調としており、炭化物や焼土塊が多く分布している。カマドの手前には、長径1.34m、短径0.6m、深さ0.12mの窪みがあり、埋土は炭化物が多く含まれていた。S I 2との重複関係をみると、S I 2より後に構築されている。また、中世の溝であるS D15に西端の上面を削られている。出土遺物は破片が多く、完形に近い個体は認められなかった。7世紀後半の土師器の壺（4～6）、須恵器の杯（1・2）・高杯（3）、鉄滓（1）がある。

###### 2号堅穴建物（S I 2、第57・66図、図版33・41）

B地区のはば中央に位置する。S I 1の構築時に東壁から南壁にかけて1/4程度破壊され、西側は調査区外へ広がっている。また、中世の溝であるS D15に上面の大部分が削られたことで残りは良好でない。規模は現存長径3.35m、短径2.60m、深さ0.11mである。現存面積は6.11m<sup>2</sup>で、平面形は方形を呈する。東西棟で、主軸はN-54°-Wである。埋土は暗オリーブ褐色シルト質細粒砂からオリーブ褐色シルト質細～中粒砂を基調とし炭化物を多く含んでいる。カマドなどの屋内施設は確認されていないが、S I 1に切られた付近に焼土や炭化物が多くみられた。S I 1との重複関係から、先に構築されている。出土遺物は破片が多い。7世紀後半の土師器の壺（8・9）、須恵器の瓶（7）がある。

###### 3号堅穴建物（S I 3、第58・66図、図版34・41・42）

B地区の東側に位置する。規模は長径2.45m、短径2.25m、深さ0.04mである。面積は5.51m<sup>2</sup>で、平面形は方形を呈する。主軸はN-25°-Wである。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とし炭化物を含んでいる。カマドは南壁の中央からやや西側に設置されている。カマド袖部分の長さは4.2mで、袖部分の外幅は1.0m、内幅は0.3mである。また、煙道突出部分は長さ0.5m、幅0.44mの規模を有する。埋土は黒褐色～灰黄褐色シルト質細粒砂を基調としており、焼土塊と炭化物によって充

墳されているような状況である。堅穴の南東の壁際に長径0.66m, 短径0.60m, 床面からの深さは0.08mの貯蔵穴とみられる土坑があり、そこから土器がまとまって集中している。当初は1～2個体分の土師器の壺と考えていたが、3個体以上の壺が確認された。出土遺物は7世紀後半の土師器の壺(10～13), 製塙土器(14), 支脚(15)がある。

#### 4号堅穴建物 (S I 4, 第58・66図, 図版37・40・42・43)

C地区の東側に位置し、北側は調査区外に広がる堅穴建物である。規模は現存長径3.90m, 現存短径3.32m, 深さ0.13mである。現存面積は12.95m<sup>2</sup>で、平面形は方形を呈する。主軸はN-20°-Wである。埋土は暗オリーブ色～灰オリーブ色シルト質極細～細粒砂を基調とし炭化物を多く含んでいる。堅穴の調査区北壁に人頭大の扁平な自然石が直立した状態で確認された。また、周囲には焼土塊が多数分布しており、この位置にカマドが設置され、自然石はカマドの補強材として用いられた袖石とみられる。カマドの手前には、現存長径2.38m, 短径1.11m, 深さ0.08mの窪みがあり、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、焼土塊や炭化物が多く含まれている。出土遺物は破片が多い。土師器には碗(18・19)・高杯(20)・壺(22～24)・瓶？(21)があり、須恵器には杯蓋(16)・高杯(17), その他に製塙土器(25・26)がある。7世紀後半に帰属する。

#### 5号堅穴建物 (S I 5, 第59・67図, 図版38・43)

C地区の東側に位置する。規模は長径2.62m, 短径2.40m, 深さ0.07mである。面積は6.29m<sup>2</sup>で、平面形は方形を呈する。主軸はN-22°-Wである。埋土は暗オリーブ色～灰オリーブ色シルト質極細～細粒砂を基調とし、炭化物を多く含んでいる。カマドなどの屋内施設は確認されていないが、堅穴の南東部に長径5.40m, 短径5.20m, 深さ0.14mの炭化物層が確認された。出土遺物は破片が多く、7世紀後半の土師器の壺(28・29), 須恵器の短頸壺(27), 製塙土器(30)がある。

### B 土坑

#### 1号土坑 (S K 1, 第59・67図, 図版31・43)

A地区の東端に位置する楕円形を呈するとみられる土坑で、東側はSD 1に切られ、北側は調査区外へ広がっている。現存長径0.98m, 現存短径0.80m, 深さ0.09mを測る。埋土は灰黄褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は7世紀の土師器の壺(31), 須恵器, 支脚(32・33)がある。

#### 2号土坑 (S K 2, 第59図)

B地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径1.70m, 短径0.95m, 深さ0.15mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器壺の小片がある。

#### 3号土坑 (S K 3, 第59図)

B地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径1.28m, 短径0.98m, 深さ0.09mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器, 須恵器がある。

#### 4号土坑 (S K 4, 第59・67図, 図版44)

B地区の中央に位置する楕円形の土坑で、長径1.54m, 短径1.10m, 深さ0.10mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。西側の一部が中近世の溝に切られる。出土遺物は7世紀の土師器の壺(35), 黒色土器の碗(34), 須恵器, 脚(36)がある。

#### 5号土坑 (S K 5, 第59図, 図版39)

B地区の西端に位置する楕円形の土坑で、長径0.98m, 短径0.77m, 深さ0.10mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器がある。

## 6号土坑（SK 6, 第59図, 図版39）

B地区の西端に位置する円形の土坑で、長径0.45m, 短径0.40m, 深さ0.03mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器がある。

## 7号土坑（SK 7, 第59図）

C地区の東端に位置する楕円形の土坑で、長径0.55m, 短径0.42m, 深さ0.26mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は土師器がある。

## 8号土坑（SK 8, 第59図）

C地区の東端に位置する楕円形の土坑で、現存長径0.50m, 短径0.48m, 深さ0.06mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調とする。南側を中世の溝（SD 17）に切られている。出土遺物は土師器がある。

## C 溝

## 1号溝（SD 1, 第59図）

A地区の東端に位置する溝で、南北方向に延びている。幅1.50m, 深さ0.19mを測る。埋土は黒色粘土質細～中粒砂を基調として、有機物を多く含む。溝の下位には有機物層が形成されている。SK 1や、SD 2を直交するように切る。出土遺物は土師器、須恵器がある。

## 2号溝（SD 2, 第59・67図, 図版44）

A地区の東端に位置する溝で、東西方向に延びている。幅0.63m, 深さ0.15mを測る。古代の溝であるSD 1や中世のSD 9・SD 11に切られる。埋土は黒色粘土質シルトを基調としている。出土遺物は土師器、須恵器、土錘（37）がある。

## 3号溝（SD 3, 第59図）

B地区の中央に位置し、北西方向に延びる不整形な溝である。幅0.81m, 深さ0.07mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は土師器がある。

## 4号溝（SD 4, 第59図）

B地区の中央に位置し、北西方向に延びる小溝である。幅0.30m, 深さ0.05mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は土師器がある。

## 5号溝（SD 5, 第59図, 図版38）

C地区的東端に位置する溝で、方形に巡る小溝で、北側は調査区外に延びている。幅0.18～0.85m, 深さ0.04mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調としている。方形に巡ることから区画を意識して構築されており、建物に関連する溝の可能性もある。現存する区画の長辺5.2m, 短辺3.9m, 面積は20.3m<sup>2</sup>で、区画内には柱穴などは確認されていない。出土遺物は認められない。

## (2) 中世

## A 土坑

## 9号土坑（SK 9, 第64・70図, 図版35・51）

B地区的中央に位置する不整形の土坑で、長径6.55m, 短径2.83m, 深さ0.16mを測る。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は土師器、須恵器、板材（1）がある。

## 10号土坑（SK 10, 第64・70図, 図版51）

B地区的東側に位置する円形の土坑で、長径0.20m, 短径0.17m, 深さ0.13mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は角材（2）がある。

## 11号土坑（S K11, 第64・70図, 図版50）

C地区の東側に位置する円形の土坑で、長径0.29m, 短径0.28m, 深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は13世紀～14世紀前半の中世土師器の皿（116）がある。

## 12号土坑（S K12, 第64・70図, 図版40）

C地区の東側に位置する円形の土坑で、長径0.26m, 短径0.24m, 深さ0.07mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は13世紀～14世紀前半の中世土師器の皿（117）がある。

## 13号土坑（S K13, 第64図）

C地区の東側に位置する円形の土坑で、長径0.36m, 短径0.25m, 深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は中世土師器の皿がある。

## 14号土坑（S K14, 第64図）

C地区の東側に位置する梢円形の土坑で、長径0.56m, 短径0.26m, 深さ0.16mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

## 15号土坑（S K15, 第64図）

C地区の東側に位置する梢円形の土坑で、長径0.68m, 短径0.32m, 深さ0.07mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調とする。出土遺物は認められない。

## B 溝

## 6号溝（S D 6, 第64図）

A地区の東端に位置する自然流路で、南北方向に延びている。西側以外の三方は調査区外へ延びている。現存幅4.40m, 深さ0.33mを測る。埋土はオリーブ黒色粘土質シルト～にぶい黄色砂礫を基調としている。S D 7と接しているが、先後関係は不明である。出土遺物は土師器、須恵器がある。

## 7号溝（S D 7, 第64図）

A地区の東端に位置する溝で、南北方向に延びている。南側はS D 16に接しており、北側は調査区外へ延びている。幅1.15m, 深さ0.06mを測る。埋土は黄褐色粗～極粗粒砂を基調としている。出土遺物は須恵器がある。

## 8号溝（S D 8, 第64・70図, 図版31・50）

A地区の東側に位置し、南北方向に直線的に延びる溝である。北側と南側は調査区外へ延びている幅1.22m, 深さ0.09mを測る。埋土はオリーブ黒色粘土質シルトを基調としている。古代の溝（S D 1）を切る。S D 8・S D 9・S D 10については規模の違いはあるが、軸方向がほぼ一致しており、区画を意識して構築された可能性がある。出土遺物は須恵器、珠洲の片口鉢（118）がある。

## 9号溝（S D 9, 第64図, 図版31）

A地区の東側に位置し、南北方向に直線的に延びる溝である。幅0.70m, 深さ0.06mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調としている。古代の溝（S D 2）を切り、近世の溝（S D 11）に切られる。出土遺物は土師器がある。

## 10号溝（S D 10, 第65図, 図版31）

A地区の東側に位置し、南北方向に直線的に延びる溝である。幅0.53m, 深さ0.04mを測る。埋土は黒色粘土質シルトを基調としている。S D 11に切られる。出土遺物は土師器がある。

## 11号溝（S D 11, 第65・71図, 図版31・50）

A地区の東側に位置し、北西方向に延びる溝で、緩やかに西寄りに曲がる。幅2.70m, 深さ0.20mを測る。埋土は黄褐色粗～極粗粒砂を基調としている。古代の溝（S D 2）、中近世（S D 9・S D

10) を切る。出土遺物は土師器、須恵器、越中瀬戸の皿（119）、伊万里、陶器がある。

12号溝（S D12、第65図、図版31）

A地区の中央に位置し、旧地形に沿ってやや弧状に走る溝である。北側と南側は調査区外へ延びる。幅1.30m、深さ0.21mを測る。埋土は黒色細粒砂質シルトを基調としている。出土遺物は土師器、須恵器がある。

13号溝（S D13、第65・70図、図版35・50・51・53）

B地区の中央に位置し、南北方向に延びる自然流路で、2分する形で中央に隆起がある。便宜的に、西側をA、東側をBとする。Aで幅2.36m、深さ0.22mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂を基調としている。Bで幅6.84m、深さ0.09mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調としている。重複関係からAがBより先行する。出土遺物は土師器、須恵器、中世土師器の皿（120・121）、珠洲の擂鉢（123）、中国製青磁の碗（122）、伊万里、唐津、棒材（3～6）、砥石？（1）、鉄滓（2）があり、14世紀後半～17世紀までの時期幅がある。

14号溝（S D14、第65・70図、図版35・50・51）

B地区的西端に位置し、南北方向に直線的に延びる溝である。X31 Y38付近で2条に分岐している。Aは幅1.60m、深さ0.08mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂を基調としている。Bは幅0.73m、深さ0.07mを測る。埋土はAと似ているが細粒砂が多く含まれている。S D20とは平行関係にあり、主軸がほぼ同じであるため、相互に区画を意識して構築された可能性がある。出土遺物は土師器、須恵器、珠洲の片口鉢（124）、製塙土器、支脚、棒材（7・8）がある。

15号溝（S D15、第65・70図、図版50・53）

B地区的中央に位置し、南北方向に延びる溝である。北側は調査区外へ延びている。幅2.35m、深さ0.07mを測る。埋土は灰オリーブ色シルト質細粒砂を基調としている。古代の堅穴建物であるS I 1とS I 2を横断するように構築されている。出土遺物は土師器、須恵器、中世土師器の皿（125）、鉄滓（3）がある。

16号溝（S D16、第65図、図版39・51）

B地区的東端とC地区の中央に位置し、L字状に延びる溝である。X18 Y28付近で西側に90°屈曲し、幅0.78～1.20m、深さ0.08～0.12mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細粒砂を基調としている。出土遺物は漆器椀（9）がある。

17号溝（S D17、第65図、図版39）

C地区中央の東寄りに位置し、東西方向に延びる溝で、X22 Y30付近で北西に屈曲する。幅0.42m、深さ0.11mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調としている。古代の堅穴建物であるS I 5やS D 5を切る。出土遺物は土師器がある。

18号溝（S D18、第65図、図版39）

C地区的中央の東寄りに位置し、北西方向に直線的に延びる溝である。東側は調査区外へ延びる。幅0.37m、深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調としている。S D19に対してほぼ平行に走っている。出土遺物は確認されていない。

19号溝（S D19、第65図、図版39）

C地区的中央の東寄りに位置し、北西方向に直線的に延びる溝である。東側は調査区外へ延びる。幅0.61m、深さ0.09mを測る。埋土は黒褐色シルト質細粒砂を基調としている。S D18とは平行関係にあり、西側はS D16と交わる。出土遺物は土師器がある。

## 20号溝（S D20, 第65図, 図版35）

B地区の東側に位置し、北西方向に直線的に延びる溝である。東側は調査区外へ延びる。幅1.30m, 深さ0.08mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。S D14とは平行関係にあり、区画を意識して構築された可能性がある。古代の土坑（SK 4）を切る。出土遺物は確認されていない。

## C その他の遺構

## 水溜め状遺構（S X 1, 第65・70図, 図版35・50）

B地区の東側に位置し、楕円形を呈する。S D13内に構築されている。長さ6.30m, 幅3.85m, 深さ0.52mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、有機質に富む。北端には礫層の隆起が確認されているが、人工的に積まれたものか、基盤層の疊なのかは不明である。出土遺物は土師器、須恵器、14世紀後半～15世紀の中世土師器の皿（126）がある。

## 4 遺物

遺物には土師器、須恵器、黑色土器、製塙土器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、中国製青磁、越中瀬戸、唐津、近世陶磁器、土製品、木製品、石製品、金属製品などの古墳時代から近世までのものが出土している。古墳時代、古代、中近世の出土遺物で全体量を概観した場合、古代の土器が最も多く出土している。古墳時代の遺物には土師器、須恵器、石製品があるが、出土量はわずかである。B地区的包含層から主に出土しており、器種は土師器、須恵器で杯や碗などの食膳具で構成されている。石製品には蛇紋岩製の紡錘車がある。これらの多くは、7世紀前半の所産とみられるが、当概期の遺構は確認されていない。古代の遺物には、土師器、須恵器、製塙土器、土製品がある。器種は土師器で碗、高杯、壺、壠、甌？があり、須恵器で杯蓋、杯、碗、高杯、壺、瓶類、甌など構成されている。竪穴建物（S I 1～S I 5）出土の土器・土製品は30点を示す。須恵器は出土量自体が少ないので、土師器が主体となっている。土師器の中でも、甌などの煮炊具が多い傾向にあり、帰属時期は7世紀後半である。その一方で、包含層出土の土器は8世紀後半～9世紀が中心であり、近隣に集落の存在が想定される。中近世の遺物には中世土師器、珠洲、中国製青磁、越中瀬戸、唐津、近世陶磁器、木製品、石製品、金属製品があるが、出土量は少ない。13世紀～17世紀までの土器・陶磁器が出土しているが、遺構出土のものは概ね14世紀後半～16世紀の時期が主体である。

## （1）土器・陶磁器・土製品

## A 古代（第66～69図、図版40～50・53）

1～6は1号竪穴建物（S I 1）出土の土器である。1～3は須恵器、4～6は土師器である。1は杯の口縁部で、口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめる。2は杯Bで、平坦な底部から緩やかに屈曲して体部は外傾する。高台断面は四角形で、内端が接地する。3は高杯の裾部の破片である。端部は短く折り曲げ、垂下させる。4～6は小型の甌である。4は肩の張らない胴部から口縁部へは緩やかに屈曲する。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。口縁部の内面はカキメ調整、体部外面にハケメ調整が施される。5は外反する口縁部を持ち、端部は水平方向にわずかにつまみ出す。外面は粗いハケメ調整である。6は胴部から、口縁部にかけて「く」字状に屈曲する。口縁部は上方へつまみ上げる。外面カキメ調整で、口縁部内外には煤が付着している。これらの遺物の帰属時期は7世紀後半である。7～9は2号竪穴建物（S I 2）出土の土器である。7は須恵器の瓶の胴部である。平坦な底部で、肩部は屈曲している。内外面ナデ調整で、外面の胴部下位はケズリ調整が施さ

れる。8・9は土師器の小型甕である。8は直立気味に立ち上がる胴部から、口縁部は短く外反する。内面ケズリ調整、外面ハケメ調整が施される。9は胴部から口縁部へは「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。内面はヨコナデ調整、外面ハケメ調整が施される。これらは7世紀後半の所産である。10~15は3号堅穴建物（S I 3）出土の土器である。10~13は土師器の甕である。10は口径が13.5cmと小型で、平坦な底部から緩やかに立ち上がり、肩の張らない胴部へつづく。胴部から口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾し、端部は面取る。内外面ナデ調整で、外面胴部下位にケズリ調整が施される。11は胴部と口縁部は緩やかに屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部は水平方向に引き出し、丸くおさめる。12は胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲し、口縁部はやや肥厚し外傾する。内外面ハケメ調整が施され、外面には煤が付着する。13は平坦気味な底部から胴部は緩やかに外傾しながら立ち上がる。口縁部はやや短く外反し、端部を丸くおさめる。欠損しているが胴部中位のやや低い位置に把手が付く。内外面ハケメ調整が施され、煤が付着する。14は製塩土器で、口縁部は外傾する。内外面ナデ調整で、粘土紐接合痕がみられる。15は完形の支脚で、円柱形を呈する。ハケメ調整のちナデ調整で、一部ミガキ調整が施される。これらの遺物は7世紀後半である。16~26は4号堅穴建物（S I 4）出土の土器である。16・17は須恵器で、18~24は土師器である。16は杯蓋で扁平な天井部に、口縁部にかえりを有する。天井部1/3は回転ヘラケズリが施される。17は高杯で、杯部は内湾気味で、口縁部は外反気味に立ち上がる。脚部は「ハ」字状に大きく開き、据鑓部は短く折り曲げ垂下させる。18・19は椀で、18は口縁部が内湾気味に立ち上がり、19は体部が外傾し、口縁部はわずかに外反気味となる。内外面ナデ調整が施される。20は高杯の脚部で、低い脚基部に「ハ」字状に開く脚裾部を有する。端部は丸くおさめる。杯部内面はミガキ調整で黒色処理が施される。脚部内面はハケメ調整、外面はミガキ調整で赤彩がみられる。21は瓶とみられる個体で、直線的に外傾する胴部から口縁部はやや外反気味となる。口縁端部は水平方向につまみ出す。内面は丁寧なハケメ調整、外面はミガキ調整である。22は甕で、平坦気味の底部から、肩の張らない胴部へつづく。口縁部へは「く」字状に屈曲し、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。内外面ハケメ調整が施される。23は小型の甕で、器形は22と類似する。胴部から口縁部へは「く」字状に小さく屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁部外面に煤が付着する。24は甕の底部で、丸い底部から内湾気味に立ち上がる胴部を有する。外面ハケメ調整で、煤が付着している。25・26は棒状脚付尖底タイプとみられる製塩土器で<sup>注2</sup>、筒状の胴部から、屈曲して外傾する長い口縁部へつづく。端部はそのまま面取るか、折り曲げ気味におさめる。内面ナデ調整、外面ハケメ調整のちナデ調整で粘土紐接合痕がみられる。これらの遺物は7世紀後半に帰属する。27~30は5号堅穴建物（S I 5）出土の土器である。27は須恵器の短頸甕で、口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部を外方へつまみ上げる。28・29は土師器の甕で、28は肩がやや張り、口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。内面ナデ調整、外面ハケメ調整が施される。29は胴部から口縁部にかけて「く」字状に緩く屈曲し、口縁部は外反気味に立ち上がる。内面ハケメ調整のちミガキ調整、外面ハケメ調整が施され、煤が付着する。30は棒状脚付尖底タイプとみられる製塩土器で、筒状の胴部から、屈曲して外傾する長い口縁部へつづく。内面ナデ調整、外面ハケメ調整のちナデ調整である。これらは7世紀後半のもの。31~33は1号土坑（SK 1）出土の土器である。31は甕で、胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲する。口縁部はやや外反気味で、端部を丸くおさめる。32・33は支脚で、円柱状を呈し、外面ハケメ調整が施される。これらは7世紀の所産か。34~36は4号土坑（SK 4）出土の土器である。34は黒色土器の椀で、内湾気味に立ち上がる口縁部に、端部を丸くおさめる。内外面ミガキ調整が施される。7世紀~8世紀のものである。35は甕の底部で、丸い底部から緩やか

に立ち上がる胴部を有する。内外面ハケメ調整である。36は支脚で、円柱形を呈し、外面ミガキ調整である。37は2号溝(S D 2)出土の土錐で、寸胴型を呈する<sup>注3</sup>。38~116は包含層出土の土器である。38~48は古墳時代の土器で、38~44が須恵器、45・46が土師器、47・48が黒色土器である<sup>注4</sup>。38は杯蓋で、天井部と口縁部の境は不明瞭で、口縁端部は短く下方につまみ出している。天井部には回転ヘラケズリ調整が施される。39~43は杯Hで、やや深みのある底部から、受部はやや上向きもしくは水平に外方向へのびる。口縁部は内傾し、短く立ち上がり、端部を丸くおさめる。44は椀で、脚部を有する可能性がある。体部は稜を持って屈曲し、口径が39で16cmと大型で、他は10~12cmを測る。口縁部は内傾し、端部はわずかにつまみ出す。体部の屈曲部分に1条、体部と口縁部との境に2条の沈線が巡る。45は平坦気味な底部から、緩やかに屈曲し外傾する体部へつづく。口縁部はやや外反し、端部はつまみ出し気味となる。内外面ハケメ調整が施される。46は丸底の底部から、体部は緩やかに立ち上がる。体部と口縁部との境は不明瞭で、口縁部はわずかに外反気味となる。外面ハケメ調整のちナデ調整が施される。47・48は深みのある体部を有するタイプで、口縁端部を丸くおさめる。内外面ミガキ調整が施される。49~115は古代の土器・土製品で、49~94は須恵器、95~112は土師器である。49~67は蓋である。49は扁平な天井部に口縁部にはかえりを持つ。天井部には回転ヘラケズリが施される。50~64は口縁端部を短く下方に垂下させる。天井部は扁平で、回転ヘラケズリが施される。擬宝珠状のつまみを有するものが多い。65~67は口縁端部を内側に巻き込むもしくは丸くおさめるタイプで、天井部は回転ヘラケズリが施される。68~83は杯Aである。平坦な底部から、屈曲して外傾する体部となる。口径が12cm前後のもので、器高の高いないタイプが多い。底部外面は回転ヘラ切りが施される。79~83は底部外面に線刻されており、79は「×」と識別できる。84~88は杯Bである。84はいわゆる稜椀で、口縁部と体部の境に稜を有するタイプである。高台は四角形を呈する。85~88は口縁部がわずかに外反し、端部をつまみ上げる。高台は四角形を呈し、接地面は水平である。86~88の底部外面に線刻されているが、全体が識別できる個体は無い。89~92・94は短頭壺である。89・90は小型のものである。89はやや肩の張る胴部に、短い口縁部が内傾する。90は平坦気味の小さな底部に肩の張る胴部を有する。体部下位はケズリ調整が施される。91・92はやや肩の張る胴部に、口縁部は垂直気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面タタキ調整が施される。94は胴部で、外面タタキ調整、内面下位に当て具痕調整がみられる。93は壺で、外傾する口縁部に端部はやや肥厚する。なお、須恵器の7・16・17・41・44・54・58・75・77・92の10点について胎土分析を実施している。このうち、7・54・58・92の4点は松永窯群・安居窯群などの製品の可能性が推定された。また、75・77の2点については、射水下条川右岸群・古沢・センガリ窯群などの製品の可能性が推定された。95・98~112は土師器で、96・97は黒色土器である。95は椀の口縁部で、端部を丸くおさめる。96・97は椀の口縁部破片で、口縁端部はつまみ上げ気味である。内面ミガキ調整が施される。98は壺とみられる個体で、外傾する体部を持つ。胴部外面はミガキ調整、把手部分はハケメ調整が施される。99~108は壺である。99は小型の壺で肩の張らない胴部から、口縁部にかけて「く」字状に緩く屈曲する。口縁部は短く外傾し、端部は上方に折り曲げ、受口状を呈する。内外面ナデ調整で、外面に煤が付着する。口径8.2cmを測る。100は胴部から口縁部にかけては「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部は上方へつまみ出す。内外面カキメ調整が施される。101は平坦な底部から、胴部へは屈曲して内湾気味に立ち上がる。内外面ナデ調整で、外面体部下位はケズリ調整が施される。102・103は胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部は断面が方形を呈し、上方へわずかにつまみ上げる。内面ハケメ調整、外面ハケメ調整のちカキメ調整が施される。

104は口縁端部が方形を呈し、面取る。105～107は胴部から口縁部は「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾する。口縁端部は内側と外側をわずかに引き出し、拡張気味となる。内外面カキメ調整で、107の外面中位ではケズリ調整が施される。102～107の口径は17～19cmである。108は大型の壺で、口縁端部の内側を上方に引き出す。内面ナデ調整、外面カキメ調整が施される。109～112は壠である。半球状の胴部から、緩く屈曲して大きく外傾する口縁部へつづく。口縁端部を丸くおさめるタイプ(109)、四角形を呈するタイプ(110・112)、わずかに内側をつまみ上げるタイプ(111)がある。内面カキメ調整もしくはハケメ調整、外面はカキメ調整で下半はケズリ調整が施される。113・114は棒状脚付尖底タイプとみられる製塙土器の口縁部破片で、外傾する長い口縁部を有する。内外面ナデ調整である。115は土錘の破片で、樽型である。

#### B 中近世（第70図、図版50）

116は11号土坑（SK11）出土の中世土師器の皿である。丸底の底部から体部は開きながら緩やかに立ち上がる。口縁部はわずかに内湾し、端部を面取る。13世紀～14世紀前半のもの。117は12号土坑（SK12）出土の中世土師器の皿である。平底気味の底部から、口縁部は内湾気味である。13世紀～14世紀前半。118は8号溝（SD8）出土の珠洲の片口鉢である。内湾する口縁部に端部は方形状を呈し、水平に面取る。片口は指1本により作出している。吉岡編年のI～II期に比定される。119は11号溝（SD11）出土の越中瀬戸の皿である。底部は削り出し高台で、高台は三角形を呈する。体部内外面には鉄軸がかかる。16世紀末～17世紀の所産である。120～123は13号溝（SD13）出土の土器である。120・121は中世土師器の皿で、120は丸底気味の底部から、口縁部は内湾気味に立ち上がる。121は深みのある丸底の底部から、口縁部は外傾する。端部は外反気味である。14世紀後半～15世紀である。122は龍泉窯系青磁の碗で、体部は緩く内湾し、口縁部は外反する。復元口径は13.8cmを測る。上田のD II類か。123は珠洲の擂鉢で、体部の破片である。外傾する体部に内面に6条一単位の鉢目がやや間隔を置いて施される。124は14号溝（SD14）出土の珠洲の片口鉢である。内湾しながら立ち上がる体部に、口縁部はわずかに直立気味となる。口縁端部は方形を呈し、片口は指2本程度で作出されている。吉岡編年のI～II期か。125は15号溝（SD15）出土の中世土師器の皿である。丸底気味の底部から、口縁部は外傾する。端部は外反気味におさめる。口縁部内面に煤が付着する。15世紀末～16世紀。126は1号水溜め状造構（SX1）出土の中世土師器の皿である。口縁部が内湾気味で、端部は面取る。127～138は包含層出土である。127・128は中世土師器の皿で、平底の底部から体部へは屈曲して広く外傾しながら立ち上がる。口縁部が内湾気味で、端部を丸くおさめる。129は瀬戸美濃の丸皿とみられるもので、底部は削り出し高台、内外面に灰釉がかかる。130～133は珠洲である。130・131は擂鉢で、内湾気味の口縁部に、端部は方形を呈する。131の口縁部内面には沈線状の凹線が巡る。132は壺の底部で、平坦な底部から胴部へは屈曲して強く外傾しながら立ち上がる。底部は静止糸切りによる切り離しである。133は壺の底部破片で、静止糸切りによる切り離しである。134～136は越中瀬戸である。134は丸皿で、底部は削り出し高台を有する。灰釉がかかり、内面は内禿である。135は碗の底部で、削り出し高台を有する。内外面に鉄軸がかかり、高台は露胎である。136は向付で、底部の高台は削り出している。高台部分は露胎で、底部内面と体部内外面には鉄軸がかかる。137・138は唐津で、137は皿、138は碗である。137は削り出し高台を有し、高台部分を除き内外面灰釉が施される。内面見込みには胎土目が4箇所残る。138は、陶胎染付で、高台部分と体部外面に鉄絵が描かれている。高台には砂目が残る。

## (2) 木製品 (第70・71図, 図版51・52)

1～9は遺構出土で、10～12は包含層出土の木製品である。1は9号土坑(S K 9)出土の板材で、下端の断面は三角状を呈する。樹種はスギである。2は10号土坑(S K 10)出土の角材で、破片である。樹種はヒノキである。3～6は13号溝(S D 13)出土の棒材で、3～5は側面に加工が施され、6の先端には抉りを入れる。樹種はいずれもスギである。7・8は14号溝(S D 14)出土の棒材で、8の下端は断面が三角状を呈する。樹種はスギである。9は16号溝(S D 16)出土の漆器皿で、内外面黒漆である。底部外面と口縁端部は欠損している。樹種はケヤキである。10・11は板材で、下端は切形を呈する。樹種はそれぞれスギである。12は二枚歯の連歛下駄で、樹種はスギである。

## (3) 石製品 (第71図, 図版53)

1は13号溝(S D 1 3)出土の砥石?で、半分程度欠損している。扁平な川原石の側面に掠った痕跡がみられる。石材は砂岩である。2～4は砥石で、2には紐を通す穴が穿たれている。2は4面、3は1面、4は4面の砥面がみられる。石材は2で凝灰岩、3で流紋岩、4で頁岩である。5は蛇紋岩製の鋸鍊車で、断面は台形を呈する。外面には圓線と斜格子鋸歯文が連続的に線刻されている。6は五輪塔の地輪で、風化が著しい。石材は凝灰質砂岩である。

## (4) 金属製品 (第72図, 図版53・54)

1～3は遺構出土の鉄滓で、1は1号竪穴建物(S I 1), 2は13号溝(S D 13), 3は15号溝(S D 15)出土である。1の重量は6.58gで、2は16.49g、3は40.46gを量る。4～9は包含層出土の金属製品である。4は棒状で頭部は方形を呈する。5は灰かきで、ヘラ状を呈する。長さ10.1cm、幅5.3cmを測る。6は馬銃で、長さ11.6cmを測る。7・8は煙管の雁首である。9は蹄鉄で、U字状を呈する。鉄を打つ穴は10箇所である。

## 5 総括

検出された遺構の時期は古代と中近世である。東側縁辺と西側縁辺では谷状地形を呈し、遺構はその間の標高が26.8～27.0mの微高地に立地する。

古代の遺構はA地区・B地区・C地区の全ての地区で確認されている。主な遺構は竪穴建物5棟、土坑、溝があるが、全体として遺構密度は希薄である。表土直下が検出面(中近世の遺構面も同一)であるため、後世の削平で消失した遺構があることも想定される。実際、調査をした時に検出面には圃場整備時に生じた重機のキャタピラーの痕跡が随所にみられた。竪穴建物を中心とする建物群は7世紀後半の時期が考えられるが、大きく2つの建物群が想定される。(第53図)一つはB地区に展開するA群(S I 1・S I 2・S I 3の3棟)ともう一つはC地区を中心とするB群(S I 4・S I 5の2棟)に分けることができる。また、建物の主軸方位を根拠に大きく二時期に分けることができそうである。まず、I期としてA群のS I 1とS I 2の2棟で構成されている。S I 1とS I 2は互いに重複関係にあることから先後関係ではS I 2→S I 1となる。2棟とも建物規模はほとんど変わらないと推定されることから、この場合、S I 2からS I 1への建て替えが想定される。次に、II期としてはA群のS I 3とB群のS I 4・S I 5の3棟で構成されている。S I 3はS I 1・S I 2から東側に15mほどに位置しており、S I 1・S I 2に比べてやや規模が小さい。S I 4・S I 5は互いに近接して構築されている。規模についてはS I 5に比べてS I 4の方が大きくなっている。この2棟の配置をみるとS I 4とS I 5は互いに近接しているため、上屋構造を考えた場合、同時期に存在

していた可能性は低いとみられる。しかし、この2棟には重複関係は確認されず、出土遺物や覆土についてもほとんど差違はない。このため、先後関係については根拠を示すことが出来ないが、短時期の建て替えが想定される。なお、主軸方位でⅠ期とⅡ期を分けたのだが、その先後関係の根拠として、出土遺物からと明確な時期差を判別することは困難である。ただ、A群のSI1とSI3からロクロ整形の小型甕が出土していることから、SI3の方がSI2より若干後出するのではないかと考えられたので、Ⅰ期がSI1・SI2、Ⅱ期がSI3・SI4・SI5とした。ただし、この変遷案は推定に推定を重ねたいわば便宜的なものであり、今後、周辺の調査の増加を待って再検討する必要性がある。なお、調査区外に延びるSD5は建物に付随する溝とも考えられる。もし、建物とした場合、SI5と同時併存していた可能性が考えられる。包含層から出土する土器の多くが8世紀後半～9世紀が中心であるため、近隣に集落の存在が想定される。また、出土遺物の中にはTK209（7世紀前半）型式の須恵器も出土していることから、遺跡周辺は、既に人々の活動の場として利用されていたことが窺える。水牧遺跡では自然科学分析を実施しており、SD1（古代）の最下層からソバ属の花粉が検出された。のことから、遺跡周辺ではソバ属の栽培が行われていたことが示唆された。また、SI3のカマドの埋土からイネの珪化組織片が多数検出された。のことより、イネの穀殼や稻藁が燃料として利用されていたことが推定された。なお、この水牧遺跡が立地する水牧地区周辺が歴史上に初めて現れるのは平安末期の砺波山合戦に関わる記述のところとされており、それ以前のことについては不明であった。今回の調査で古代（7世紀後半）の集落が確認されたことにより、少なくともこの頃には既に人々が住んでいたことが明らかとなった。

中近世の遺構も全ての地区で確認されている。主な遺構には土坑、溝、水溜め状遺構が確認されており、掘立柱建物などの建物遺構は確認されなかった。土坑にはB地区東端やC地区東側に小規模な土坑群がみられるが、掘立柱建物のように整然と並ぶことはなく、建物プランを把握するに至っていない。溝にはやや規模の大きいSD13があり、遺跡を大きく二分するように南東から北西方向に走っている。その一角に、発掘調査中から湧水する水溜め状の遺構があり、灌漑目的に利用されていたと考えられる。中近世の時期には集落の縁辺部になっていたと考えられ、生産域が広がっていたと考えられる。

(鳥田亮仁)

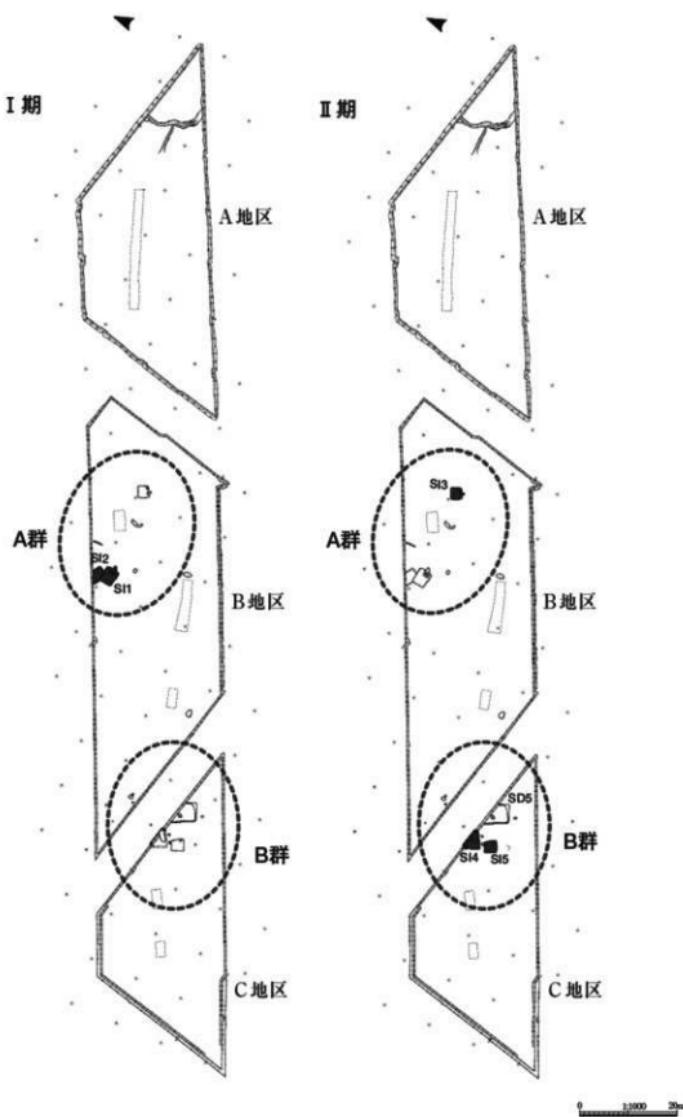
## 注

注1 水牧地区史 1978 水牧福寿会

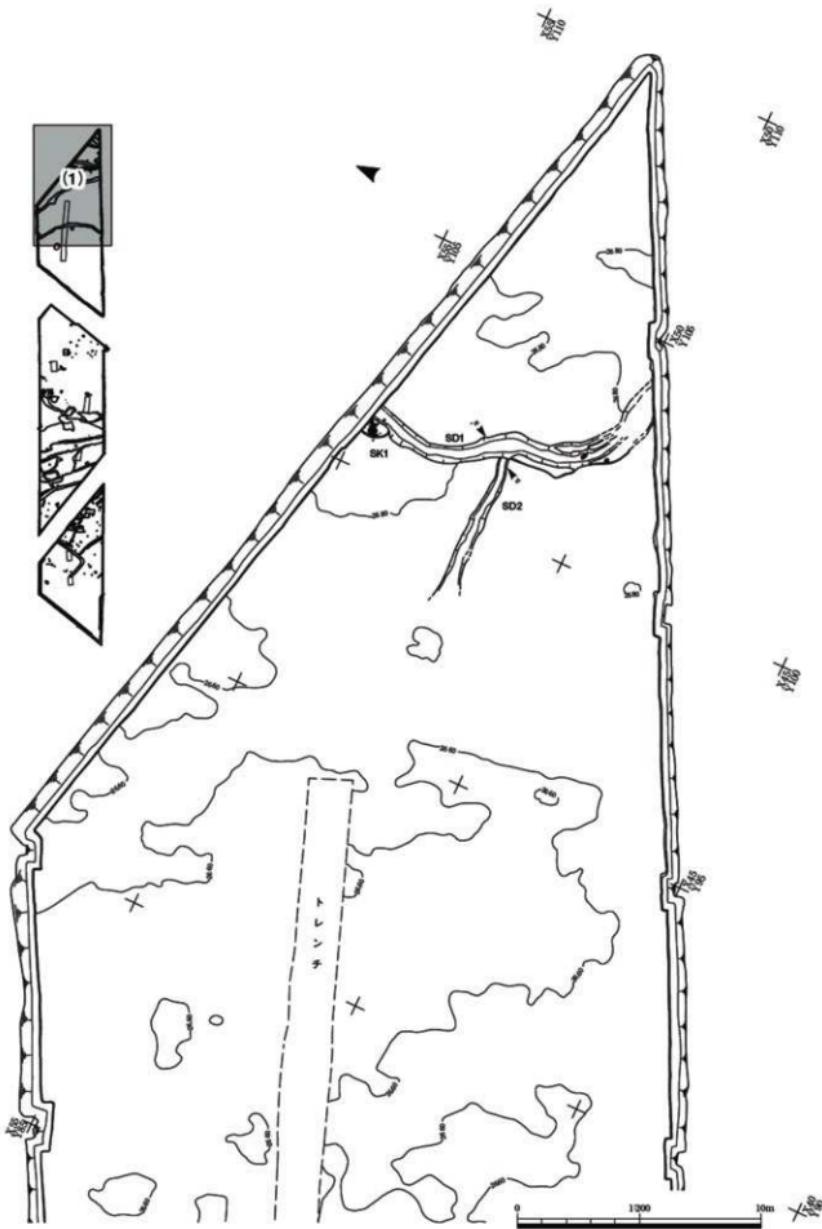
注2 製塙土器については岸本雅敏 1983 「富山県における土器製塙の成立と展開」「北陸の考古学」を参考にした。

注3 土鍤の分類については郷江真澄 2001 「任海宮田遺跡出土の土鍤について」「富山考古学研究第4号」に掲った。

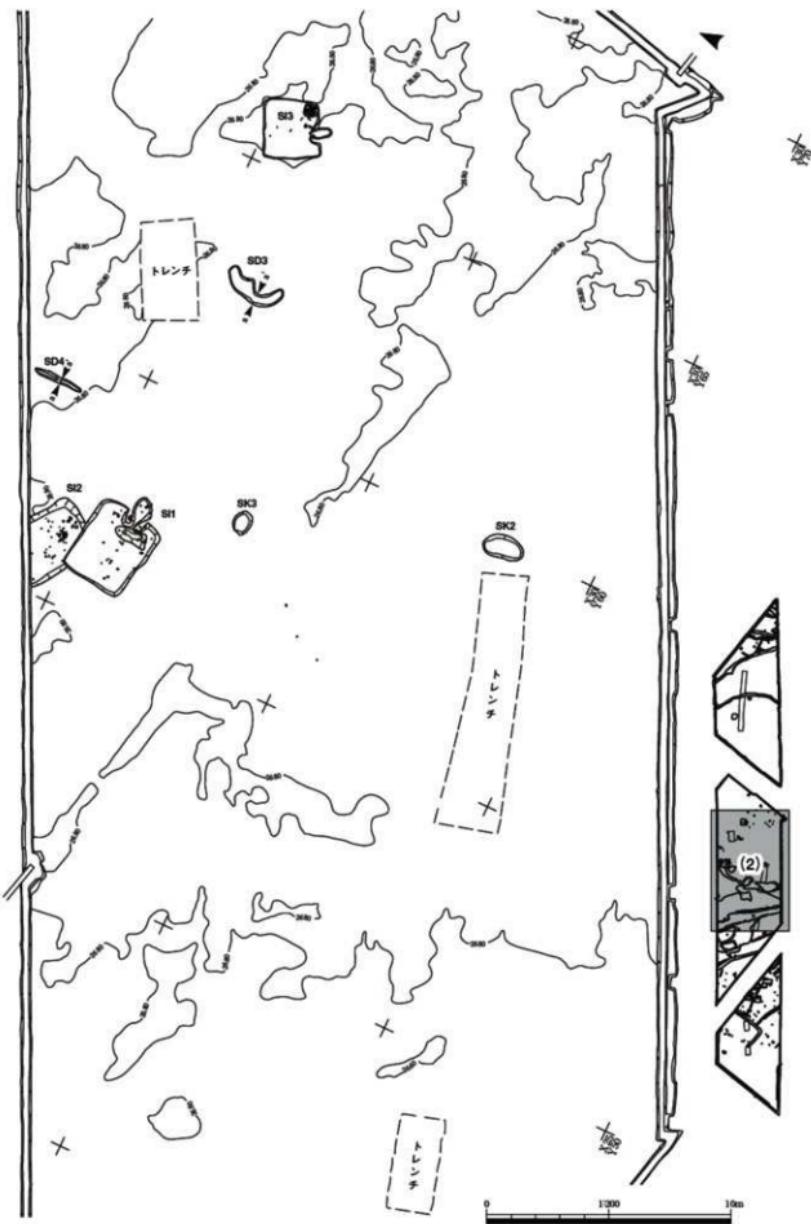
注4 古墳時代の須恵器の年代などについては、伊藤選氏から多くのご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。



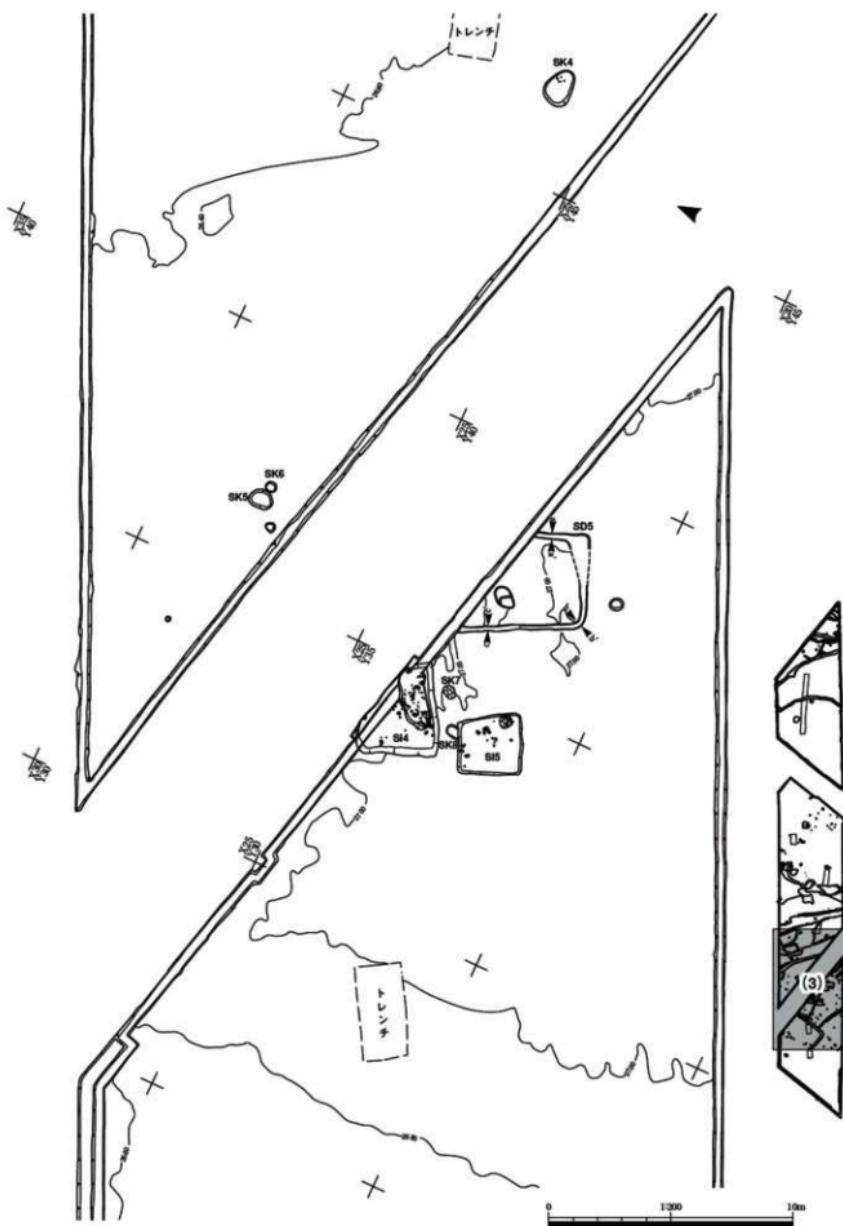
第53図 水牧遺跡 古代建物変遷図



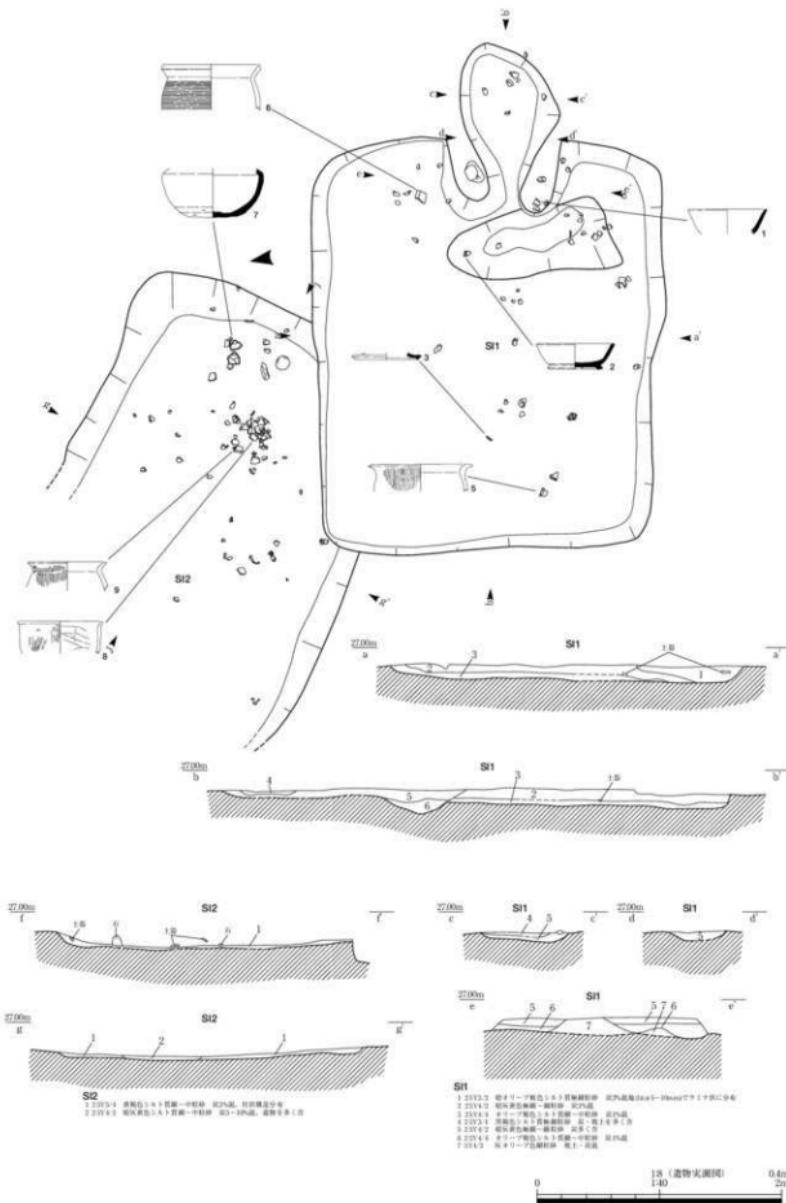
第54図 水牧遺跡 古代造構全体図(1)



第55図 水牧遺跡 古代遺構全体図(2)

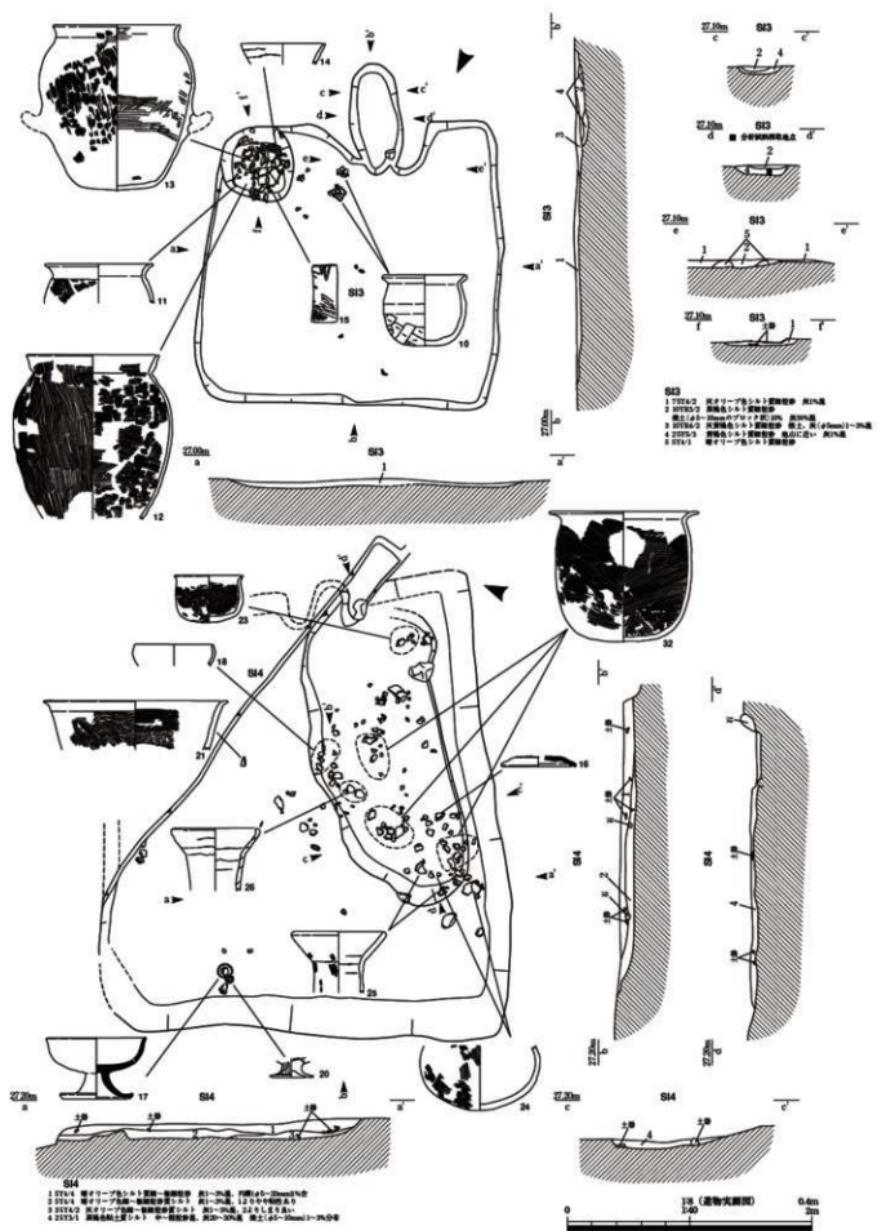


第56図 水牧遺跡 古代造構全体図(3)



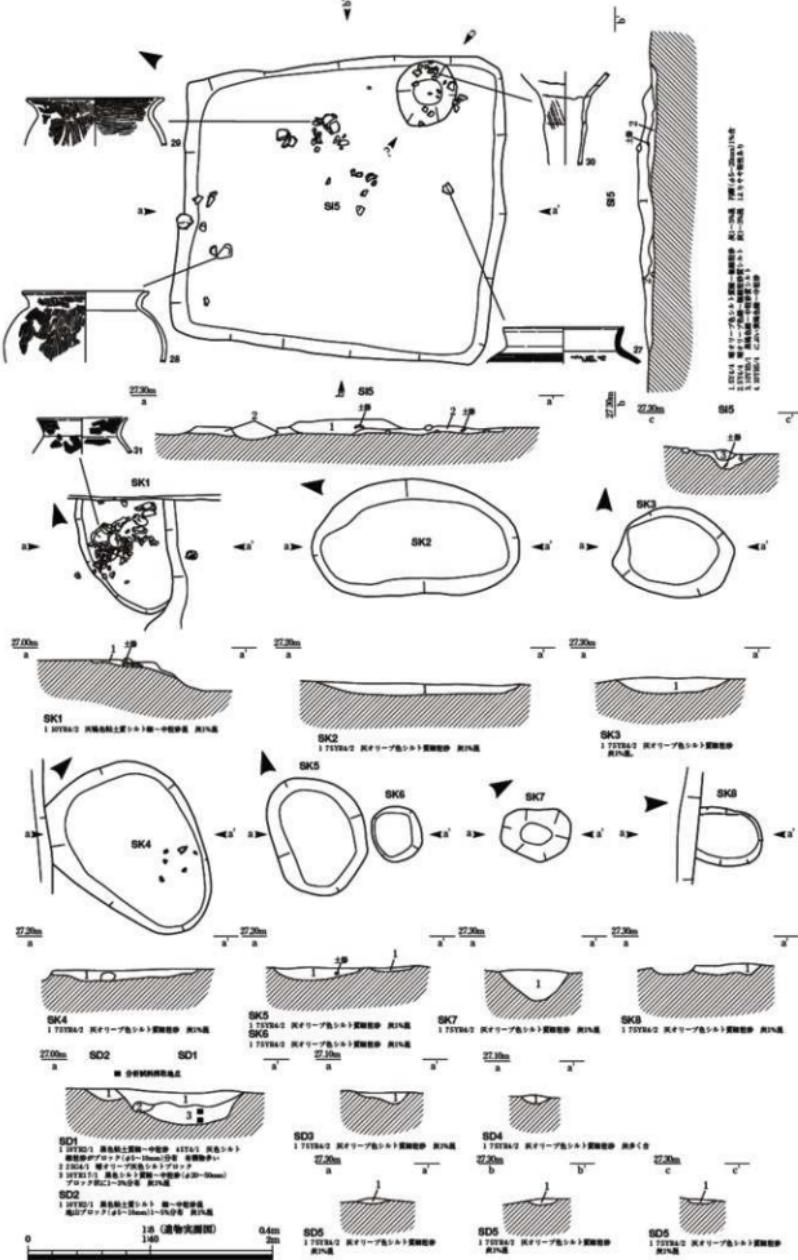
第57図 水牧遺跡 古代遺構実測図

SI 1 · SI 2

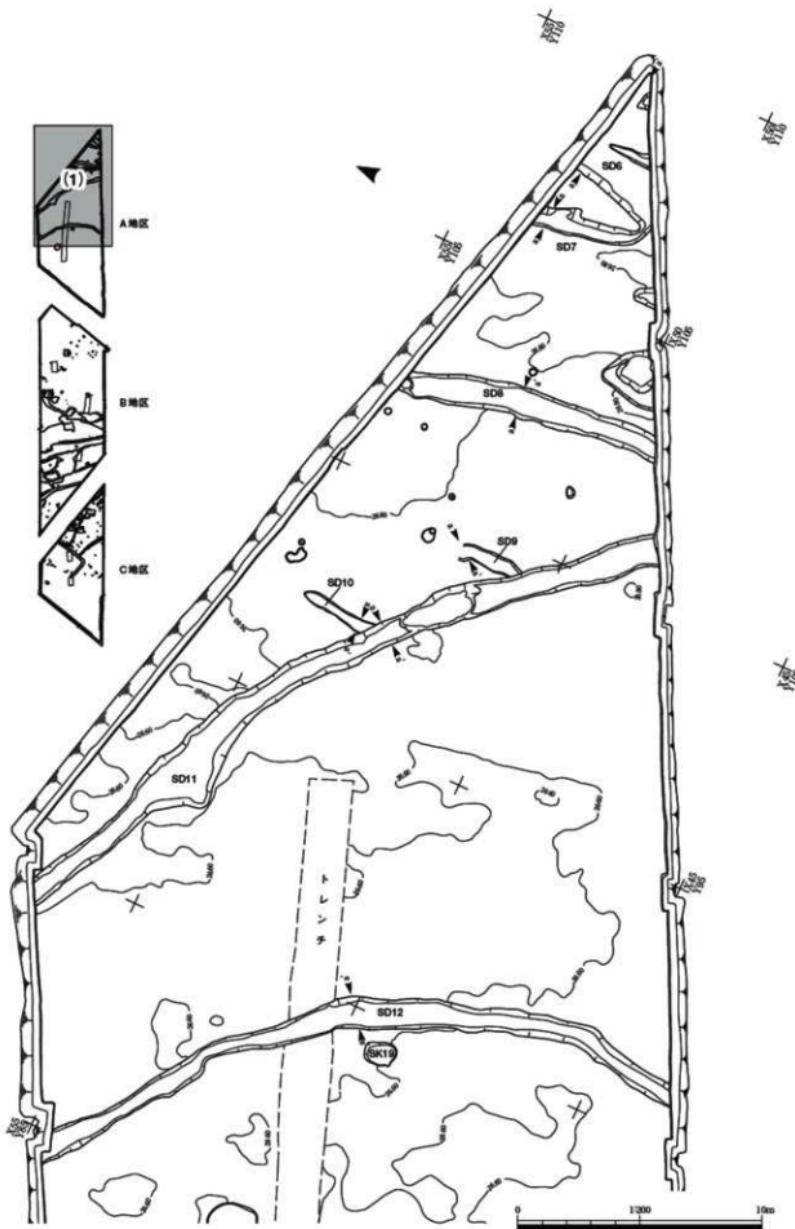


第58図 水牧遺跡 古代造構実測図

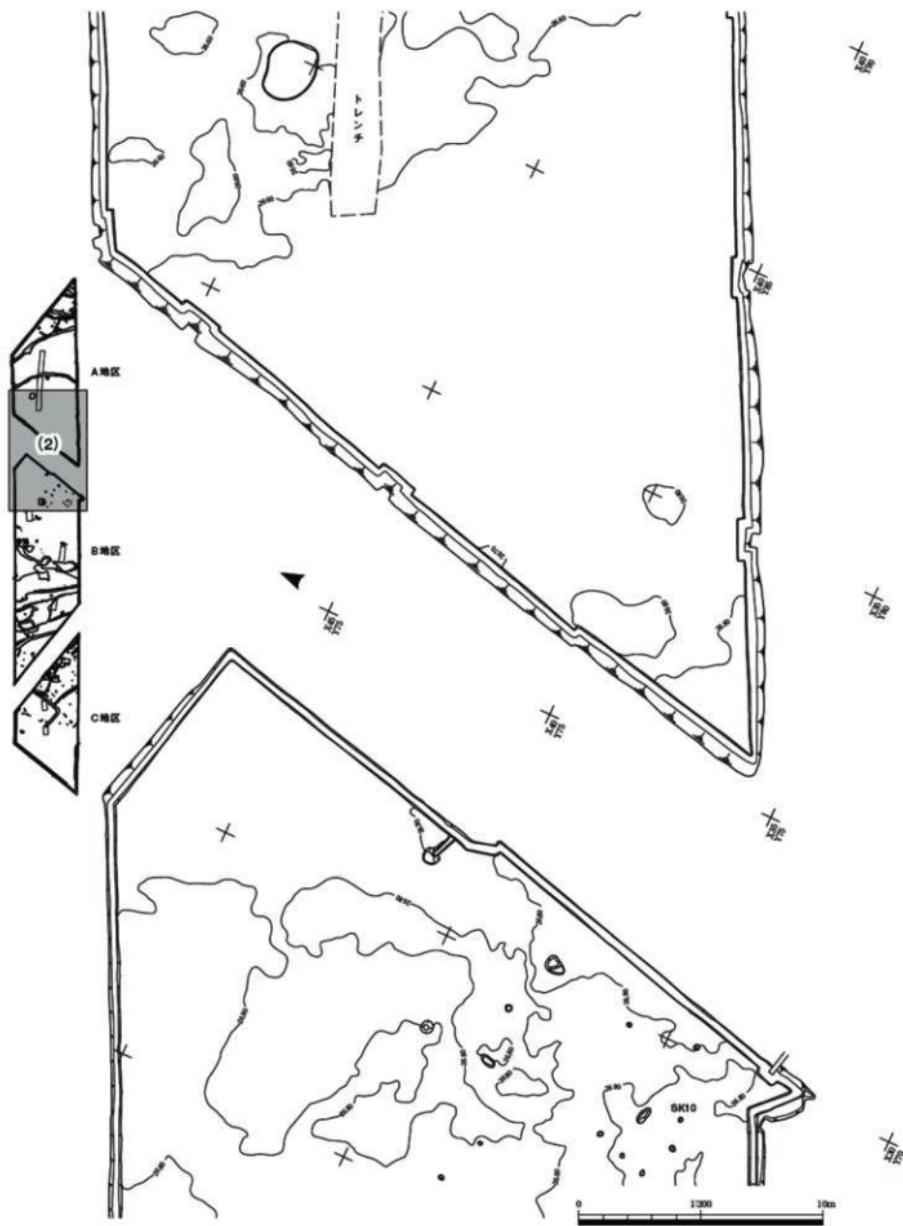
SI 3・SI 4



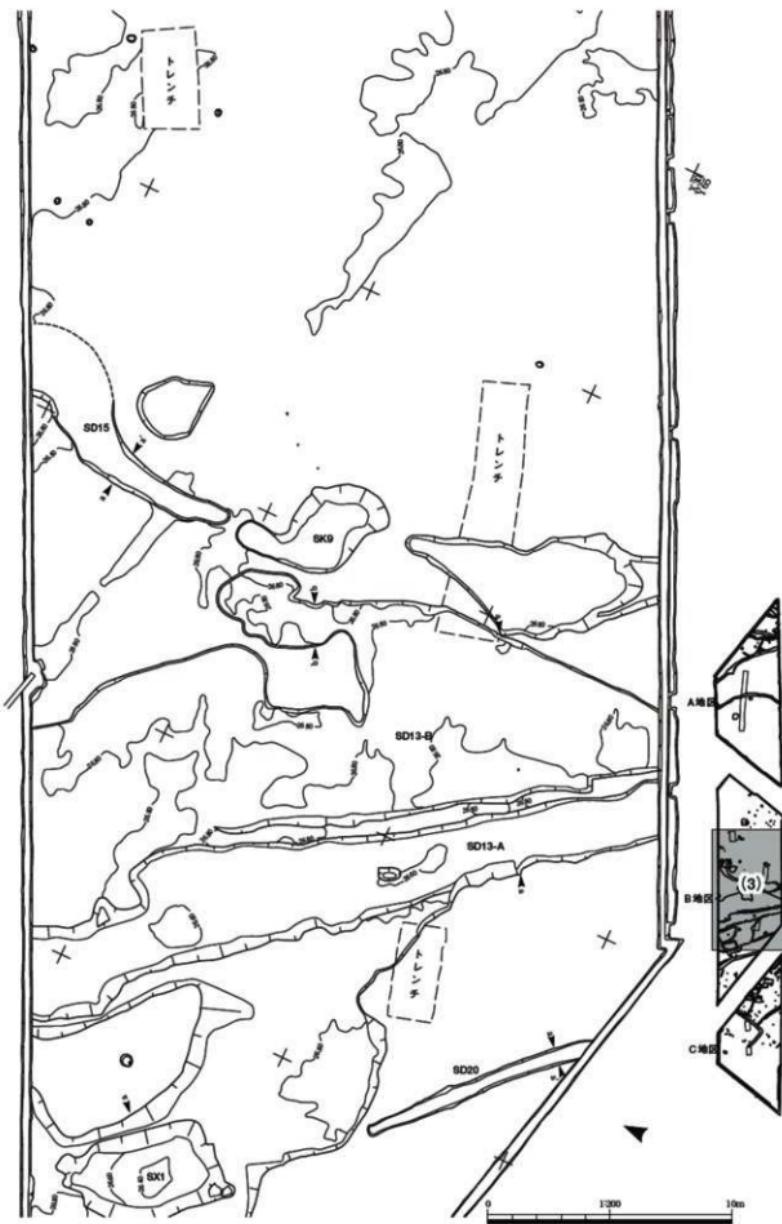
第59図 水牧遺跡 古代遺構実測図  
SI 5 SK 1～SK 8 SD 1～SD 5



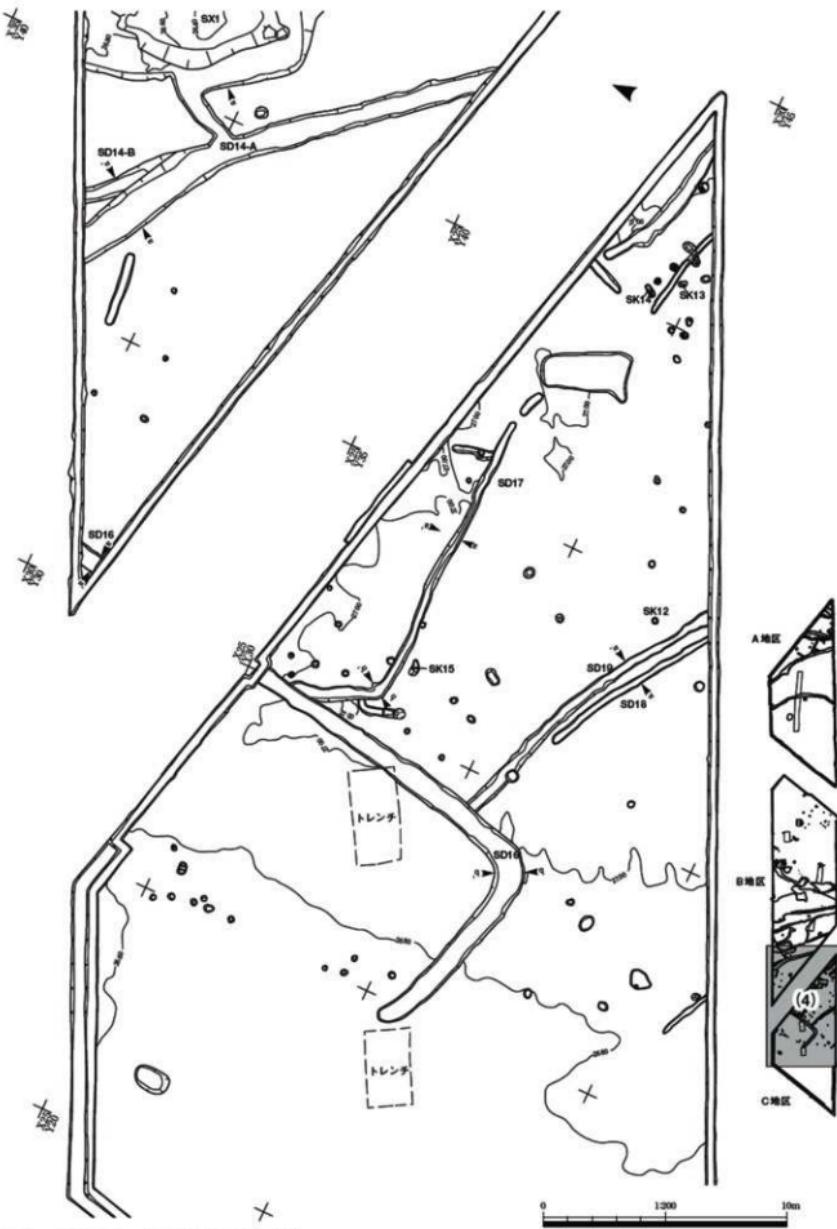
第60図 水牧遺跡 中近世遺構全体図(1)



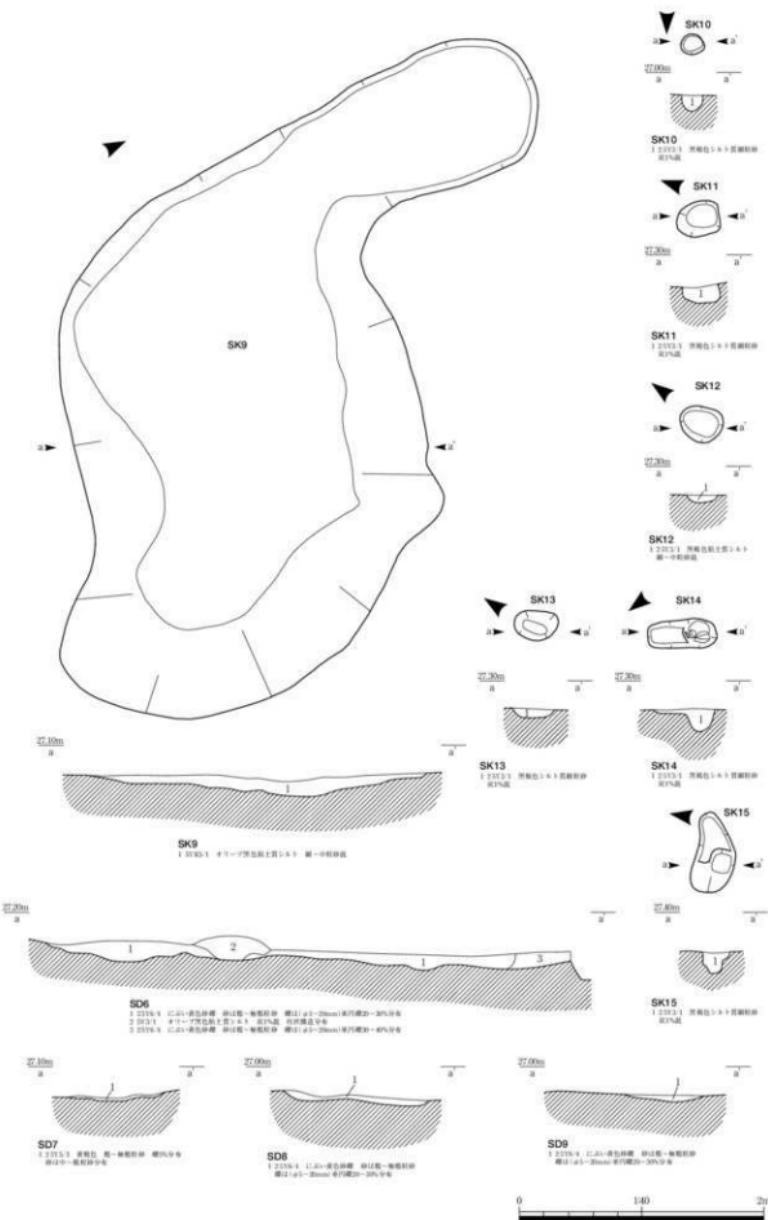
第61図 水牧遺跡 中近世遺構全体図(2)



第62図 水牧遺跡 中近世遺構全体図(3)

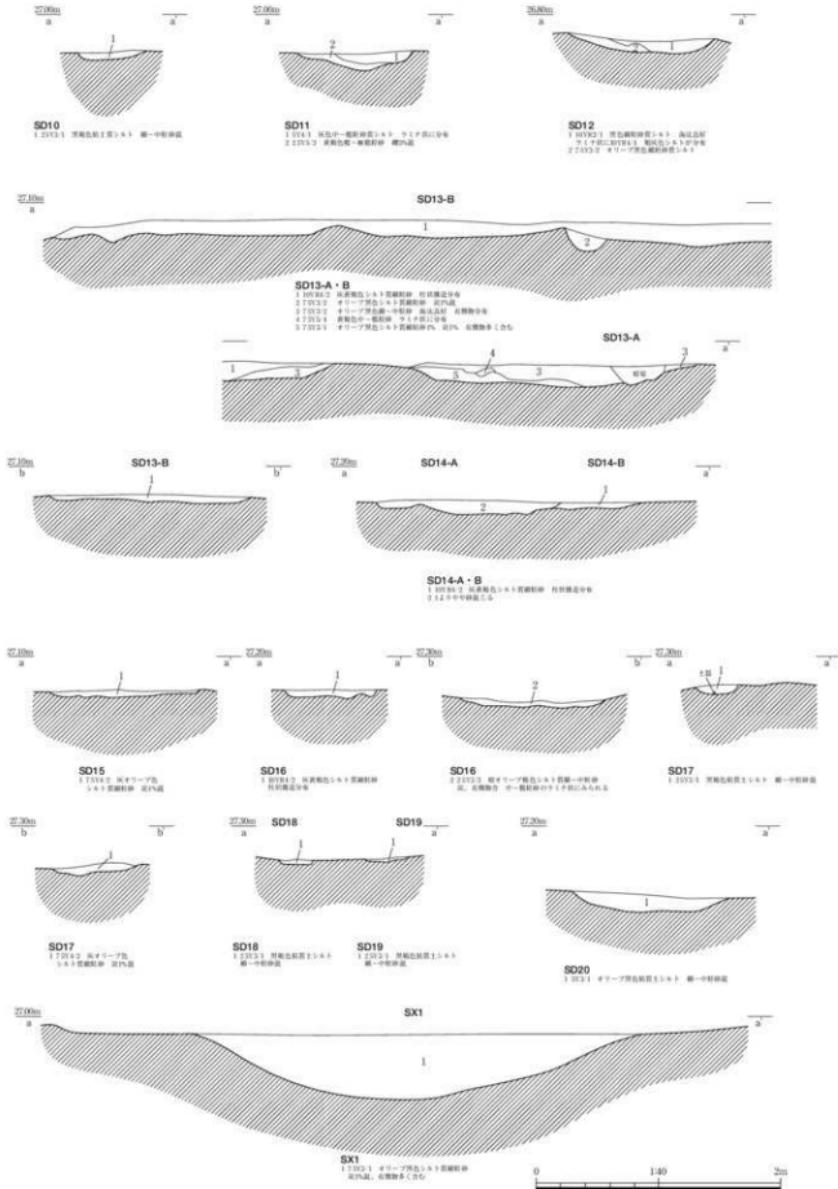


第63図 水牧遺跡 中近世遺構全体図(4)



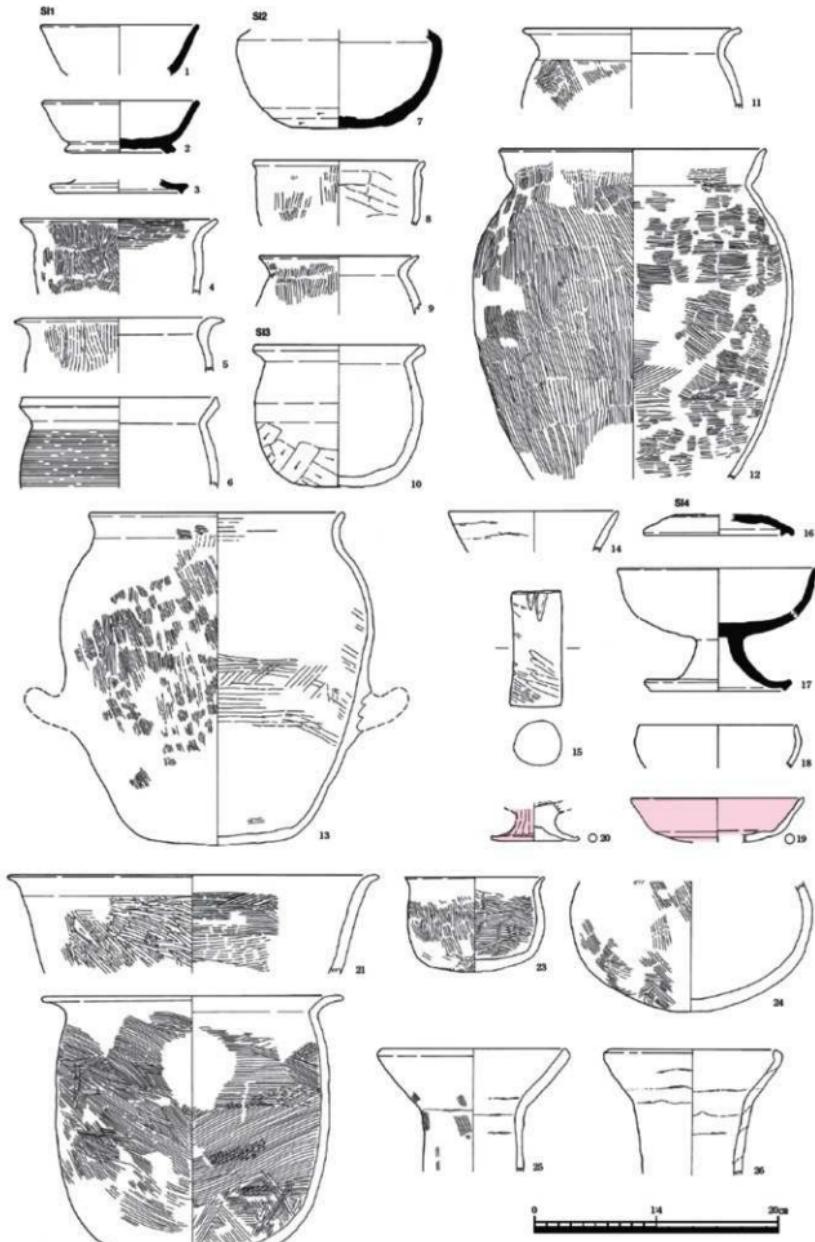
第64図 水牧遺跡 中近世遺構実測図

SK 9 ~ SK15 SD 6 ~ SD 9



第65図 水牧遺跡 中近世遺構実測図

SD10～SD20 SX 1



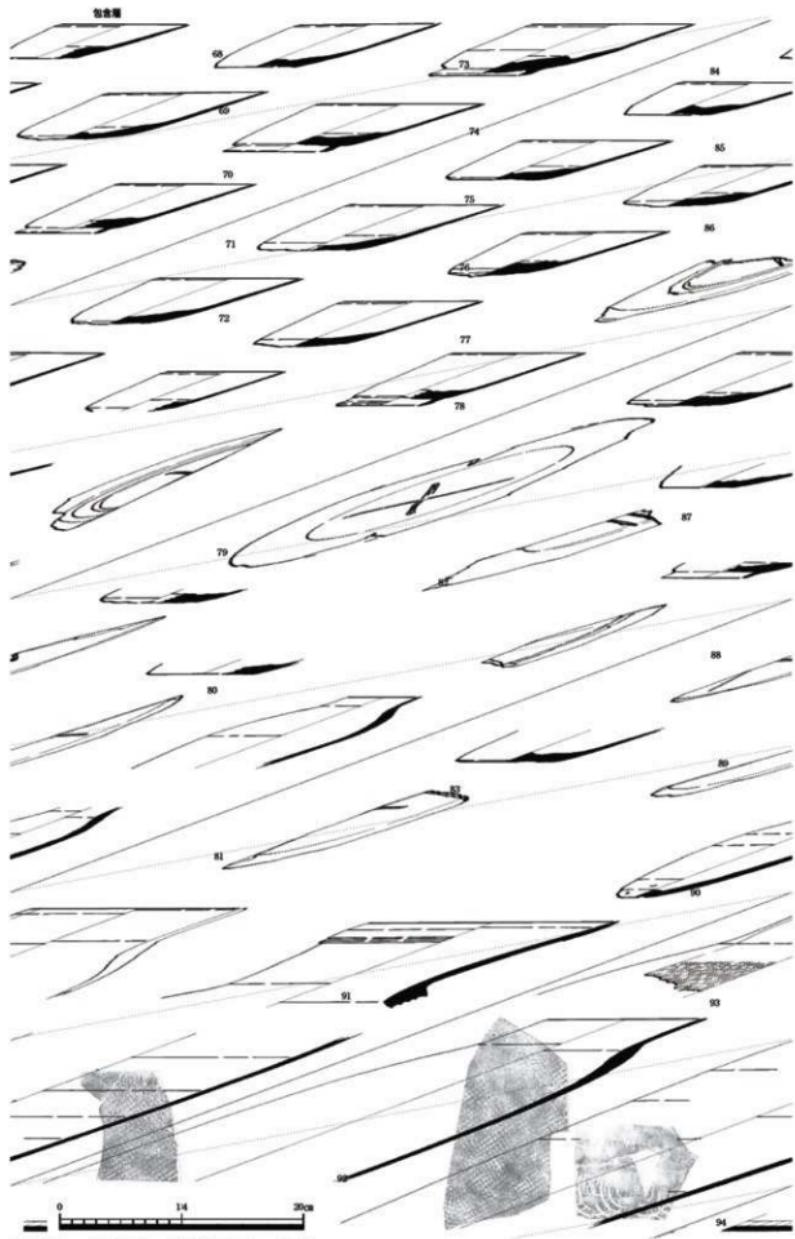
第66図 水牧遺跡 遺物実測図 (1/4)

SI1 (1~6) SI2 (7~9) SI3 (10~15) SI4 (16~26)



第67図 水牧遺跡 遺物実測図 (1/4)

SI 5 (27~30) SK 1 (31~33) SK 4 (34~36) SD 2 (37) 包含層



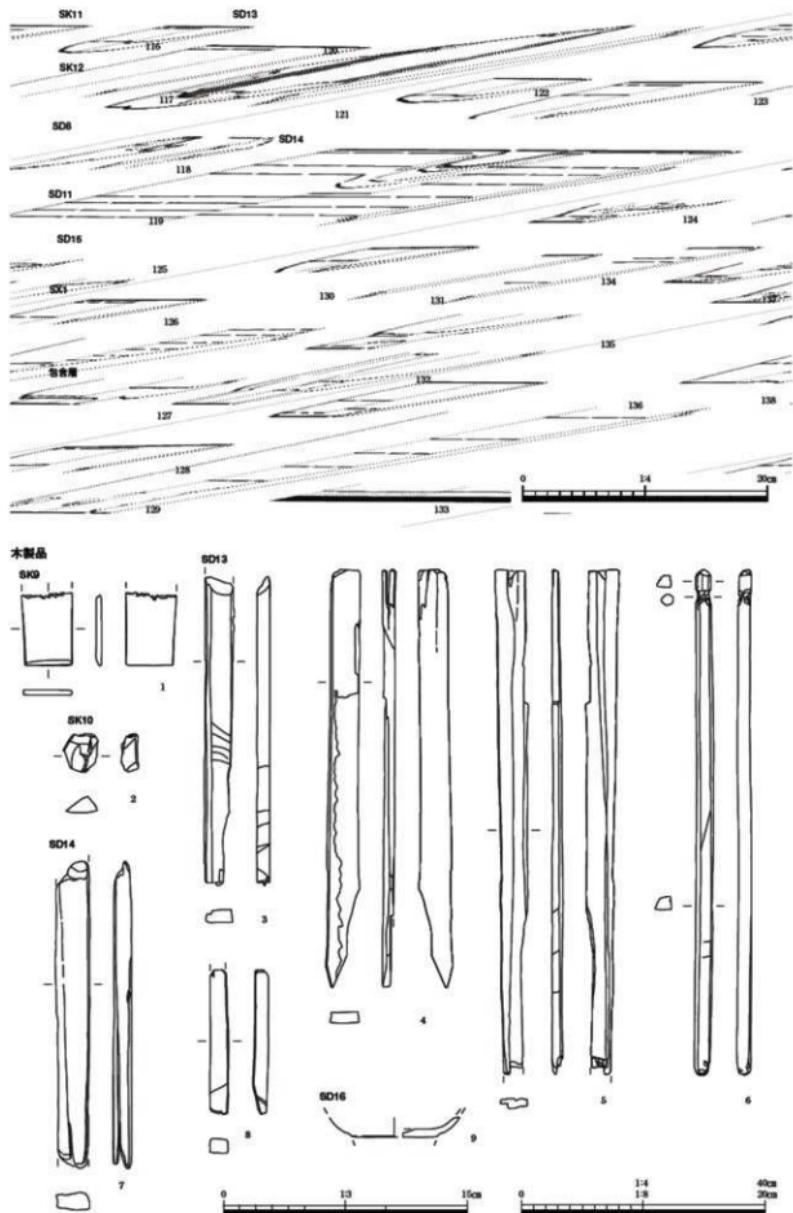
第68図 水牧遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層



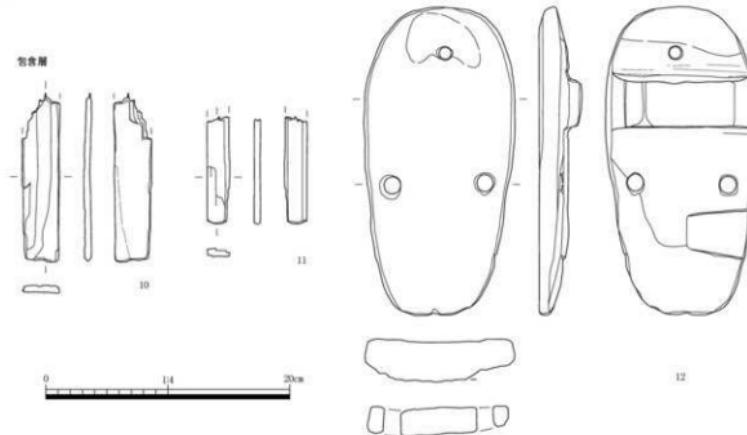
第69図 水牧遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層

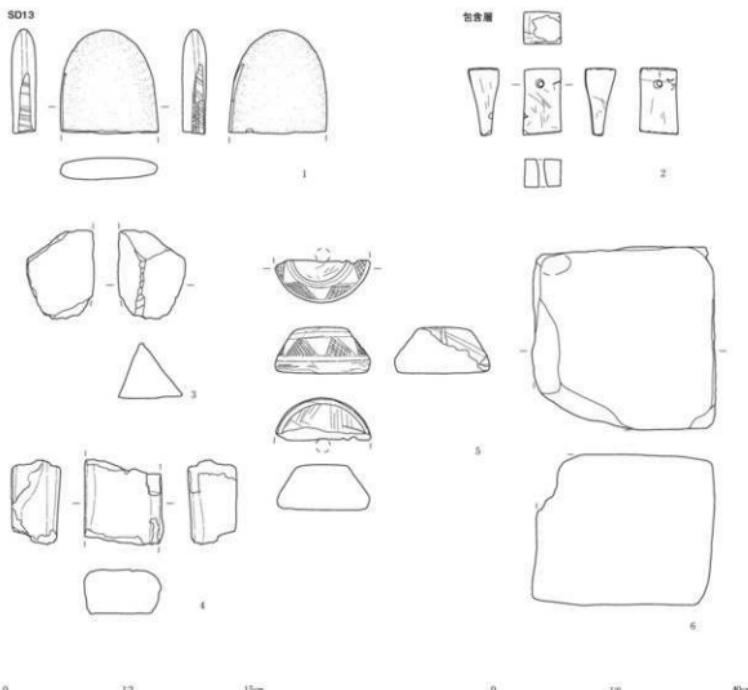


第70図 水牧遺跡 遺物実測図（土器・陶器116～138 1/4, 木製品9 1/3, 1～5・7・8 1/4, 6 1/8）  
土器・陶器 SK11(116) SK12(117) SD8(118) SD11(119) SD13(120～123) SD14(124) SD15(125)  
SK1(126) 包含層  
木製品 SK9(1) SK10(2) SD13(3～6) SD14(7・8) SD16(19)

## 木製品



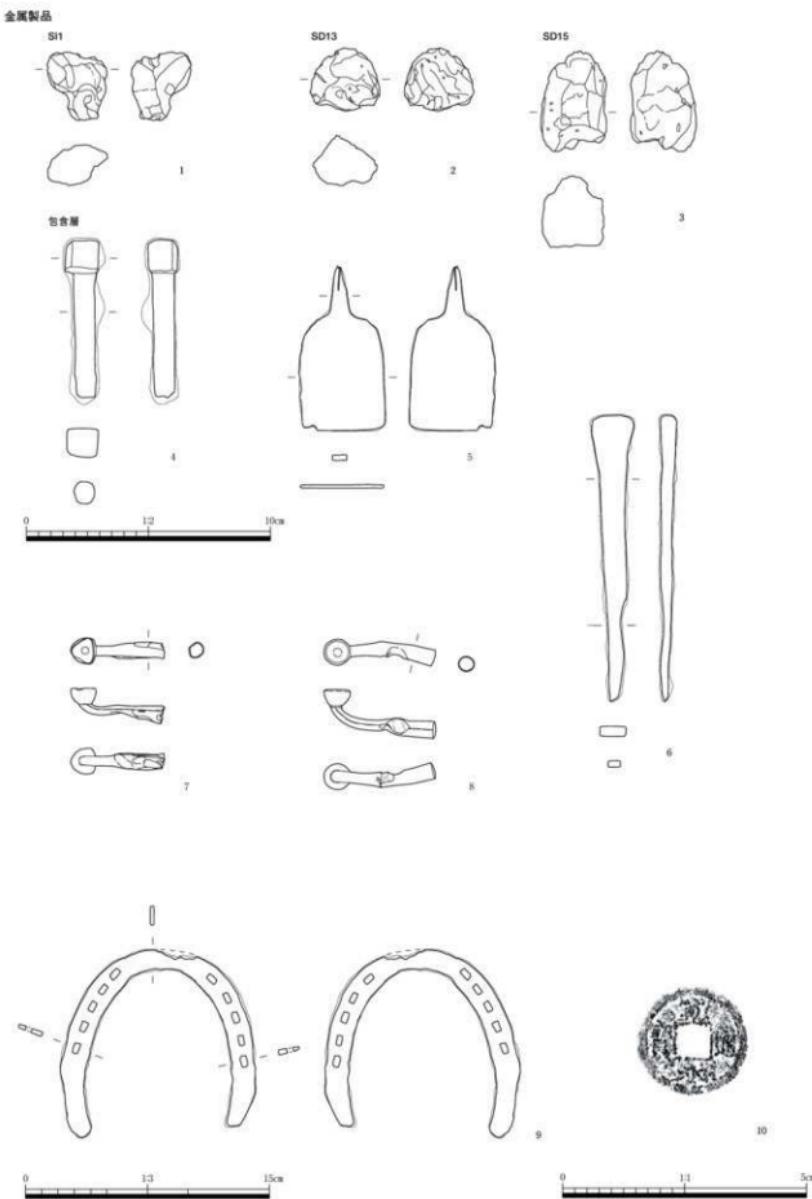
## 石製品



第71図 水牧遺跡 遺物実測図（木製品10~12 1/4, 石製品1~5 1/3, 6 1/8）

木製品 包含層

石製品 SD13(1) 包含層



第72図 水牧遺跡 遺物実測図 (金属製品10 1/1, 1~4 1/2, 5~9 1/3)  
SI1(1) SD13(2) SD15(3) 包含層

第24表 水牧遺跡 古代 積穴建物一覧

造構	旧造構番号	平面形	規模(m <sup>2</sup> )		出土遺物	詳細時期	特記	挿図	写真 図版	
			長径	短径						
SI1	B-SI48	方	3.40	2.89	0.13	9.82	土師器、須恵器、鉄滓	7C後半	<SD15,>SI2 西側3~6は中世の溝(SD15)によって削平を受けている	57 33
SI2	B-SI49	方	(3.35)	2.60	0.11	(6.11)	土師器、須恵器	7C後半	<SI1 - SD15 北側が調査区外に広がる上面を中世の溝(SD15)に、南側をSI1にそれぞれ削平されている	57 33
SI3	B-SI20	方	2.45	2.25	0.04	5.51	土師器、須恵器、支脚	7C後半	南面にカマドが彫え付けられている	58 34
SI4	C-SI50	方	(3.90)	(3.32)	0.13	(12.95)	土師器、須恵器、製塙土器	7C後半	北撫半分で調査区外に広がる積穴建物で、東壁際にカマドの補強材である袖石とみられる円盤石が検出された	58 37
SI5	C-SI75	方	2.62	2.40	0.07	(6.29)	土師器、須恵器	7C後半	<SD17 カマドの存在は不明である	59 38

※規模の( )付は現存数値を示す。

第25表 水牧遺跡 古代～中近世 土坑一覧

造構	旧造構番号	平面形	規模(m)		出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真 図版
			長径	短径						
SK1	A-SK17	椭円	(0.98)	0.80	0.09	土師器、須恵器、支脚	古代	7C後半?	<SD1	59 31
SK2	B-SK28	椭円	1.70	0.95	0.15	土師器	古代	7C後半?		59
SK3	A-SK19	椭円	1.28	0.98	0.09	土師器、須恵器	古代	7C後半?		59
SK4	B-SK44	椭円	1.54	1.10	0.10	土師器、須恵器、支脚	古代	7C後半?	<SD20	59
SK5	B-SK39	椭円	0.98	0.77	0.10	土師器	古代	7C後半?		59 39
SK6	B-SK40	円	0.45	0.40	0.03	土師器	古代	7C後半?		59
SK7	C-SK34	椭円	0.55	0.42	0.26	土師器	古代	7C後半?		59
SK8	C-SK3	椭円	(0.50)	0.48	0.06		古代	7C後半?	<SD17	59
SK9	B-SK27	不整	6.55	2.83	0.16	土師器、須恵器、板材	中近世			64 35
SK10	B-SK4	椭円	0.20	0.17	0.13	角鉢				64
SK11	B-SK 7	円	0.29	0.28	0.08	中世土師器				64
SK12	C-SK23	円	0.26	0.24	0.07	中世土師器	中世	13C?		64
SK13	C-SK 5	円	0.36	0.25	0.09					64
SK14	C-SK10	椭円	0.56	0.26	0.16					64
SK15	C-SK42	椭円	0.68	0.32	0.07					64

※規模の( )付は現存数値を示す。

第26表 水牧遺跡 古代～中近世 溝・自然流路一覧

造構	旧造構番号	造構種類	規模(m)		出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真 図版
			幅	深さ						
SD1	A-SD 6	溝	1.50	0.19	土師器、須恵器	古代	7C後半~8C?	<SD2 , >SD 8	59	31
SD2	A-SD 7	溝	0.63	0.15	土師器、須恵器、土埴	古代	7C後半~8C?	>SD 1 - SD 9 - SD11	59	31
SD3	B-SD21	溝	0.81	0.07	土師器	古代	7C後半~8C?		59	
SD4	B-SD30	溝	0.30	0.05	土師器	古代	7C後半~8C?		59	
SD5	C-SD26	溝	0.18~0.85	0.04		古代	7C後半~8C?	<SD17 方形に並ぶ溝で、建物に隣接する可能性がある	59	38
SD6	A-SX 1	自然流路	4.40	0.33	土師器、須恵器	近世				64
SD7	A-SD 2	溝	1.15	0.06	須恵器	近世				64
SD8	A-SD 5	溝	1.22	0.09	須恵器、珠	中世	12C後半~13C前半	>SD 1	64	31
SD9	A-SD12	溝	0.70	0.06	土師器	中世		>SD 2 , <SD11 SD8 , SD10と平行に走る溝で、区画溝と考えられる	64	31
SD10	A-SD15	溝	0.53	0.04	土師器	中世			65	31
SD11	A-SD16	溝	2.70	0.20	土師器、須恵器、越中瀬戸、伊万里、陶器	近世	16C末~17C	>SD07 - SD12 - SD15	65	31
SD12	A-SD18	溝	1.30	0.21	土師器、須恵器	中近世			65	31
SD13	B-SD46	自然流路	A1.36 A0.22 B6.84 B0.09		土師器、須恵器、青磁、伊万里、青磁、埴輪、瓦、砾石?, 鉄滓,	中近世	14C後半~17C		65	35
SD14	B-SD42	溝	A1.60 A0.08 B0.73 B0.07		土師器、須恵器、環甌、埴輪、支脚、製塙土器	中世		>SD13	65	35
SD15	B-SD25	溝	2.35	0.07		中世	14C後半~15C	>SI1 - SI2 古代の堅穴建物の上面を切る	65	
SD16	C-SD31	溝	0.78~1.20	0.80~0.12	漆器	中世		B地区からC地区に続く区画溝である C地区のX18Y29付近で西に屈曲する	65	39
SD17	C-SD32	溝	0.42	0.11	土師器	中世		<SI5 - SK8 - SD 5	65	39
SD18	C-SD52	溝	0.37	0.08		中世			65	39
SD19	C-SD51	溝	0.61	0.09	土師器	中世		>SD16	65	39
SD20	B-SD43	溝	1.30	0.08		中世			65	35

第27表 水牧遺跡 中世 その他の造構

造構	旧造構番号	造構種類	平面形	規模(m)		出土遺物	詳細時期	特記	挿図	写真 図版
				長径	深さ					
SX 1	B-SX50	水溜め状造構	楕円	6.30	3.85	0.52	土師器、須恵器、中世土師器	14C後半~15C	SD 13内に位置している	65 35

第28表 水牧遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

回収地點	文書類	遺物	所土地点	種類	形態	法線(cm)		時間	評議時間	新土色調	歴土色調	地色調	地色	備考
						上寸	中寸	底寸	高寸					
1 41 S13 No.4		須志部	杵	(12.8) 4.00	古代	7 C 後半	5Y6'1	灰色						
2 41 S13 No.3 X-42 Y-40 I 型		須志部	杵臼	12.5 4.3	9.0	古代	7 C 後半	20Y6'1	灰色					
3 41 S13 No.5		須志部	杵臼	(10.4) (1.1)	10.4	古代	7 C 後半	5Y5'1	灰色					
4 41 S13		土師器	甕	13.6 (6.2)	古代	7 C 後半	2,5Y6'2	灰褐色						馬前に復討者
5 41 S13 No.6		土師器	甕	15.9 (4.5)	古代	7 C 後半	7,5Y6'3	灰色						馬前に復討者
6 41 S13 No.2		土師器	甕	16.0 (7.5)	古代	7 C 後半?	2,5Y5'2	褐灰黑色						馬前面部分に復討者
7 41 S12 No.1 D[6]		須志部	甕	(8.6) 7.9	古代	7 C 後半	9Y7'1	灰白色						新土分類No.26
8 41 S12 No.2		土師器	甕	13.8 3.5	古代	7 C 後半	5Y7'4	灰白色						
9 41 S12 No.2		土師器	甕	12.9 (4.8)	古代	7 C 後半	2,5Y7'3	灰白色						馬前に復討者
10 41 S13 No.2		土師器	甕	13.6 (11.7) 7.4	古代	7 C 後半	10Y7'2	灰白色						馬面前に復討者
11 41 S13 No.1-2		土師器	甕	12.6 (6.5)	古代	7 C 後半	10Y7'2	灰白色						馬面前に復討者
12 42 S13 No.1-1		土師器	甕	21.6 (27.0)	古代	7 C 後半	10Y7'6	灰白色						馬面前に部分的に復討者
13 42 S13 No.1-1		土師器	甕	20.6 27.3 12.8	古代	7 C 後半	10Y7'6	灰白色						馬面前に復討者
14 41 S13 No.1-2		須志部	甕	13.8 (3.4)	古代	7 C 後半	10Y7'2	灰白色						
15 41 S13 No.4		土製品	支拂	9.5 3.9	古代	7 C 後半	10Y7'2	灰白色						
16 42 S14 No.1 A[6]		須志部	杵	11.1 (1.7)	古代	7 C 後半	5Y7'1	灰白色						新土分類No.28
17 40 S14 No.3		須志部	杵	16.2 10.1	10.9	古代	7 C 後半	No%	灰色					新土分類No.29
18 42 S14 No.39		土師器	桶	13.0 (3.5)	古代	7 C 後半	7,5Y6'6	灰白色						
19 42 S14		土師器	桶	14.0 (3.6) 4.0	古代	7 C 後半	10Y7'2	灰白色						赤彩
20 42 S14 No.6		土師器	桶	(2.6) 7.0	7.0	古代	7 C 後半	5Y7'4	赤彩					井戸内側、桶部前面付
21 42 S14 No.45		土師器	瓶?	29.5 (8.1)	古代	7 C 後半	2,5Y8'3	赤黄色						馬面前に復討者
22 42 S14 No.5 - 19 + 20 - 30 - 35		土師器	瓶?	22.1 21.45 5.1	古代	7 C 後半	7,5Y5'4	赤黄色						
23 40 S14 No.30		土師器	瓶	13.1 7.7	古代	7 C 後半	9T7'6	赤色						口縁部前面に復討者
24 43 S4 No.9 - 13 - 15 - 17		土師器	瓶	(10.6) 3.4	古代	7 C 後半	10Y7'2	灰白色						馬面前に復討者
25 43 S4 No.11-17		須志部	甕	14.7 (10.0)	古代	7 C 後半	7,5Y7'4	灰白色						
26 43 S4 No.17		須志部	甕	13.3 (10.4)	古代	7 C 後半	9T7'6	灰白色						
27 43 S5 No.5		須志部	短筒甕	28.6 (8.1)	古代	7 C 後半	2,5Y7'1	灰白色						
28 43 S5 No.11-12		土師器	甕	22.0 (11.8)	古代	7 C 後半	2,5Y7'2	灰白色						
29 43 S15 No.13		土師器	甕	22.4 (8.0)	古代	7 C 後半	10Y7'3	灰白色						
30 43 S5 No.2		須志部	甕	(15.5)	古代	7 C 後半	5Y7'6	赤色						
31 43 SK1		土師器	甕	14.4 (16.0)	古代	7 C	2,5Y6'4	灰白色						
32 43 SK1		土製品	支拂	(14.8) 5.1	古代	2,5Y7'3	灰白色							復討者
33 43 SK1		土製品	支拂	(15.9) 5.3	古代	2,5Y5'4	青褐色							
34 44 SK4		黑色土器	甕	13.6 (4.0)	古代	7 C - B	2,5Y7'3	灰白色						
35 44 SK4		土師器	甕	(8.4) 4.0	古代	7 C	10Y7'5	灰白色						馬面前に復討者
36 44 SK4		土製品	支拂	13.8 4.3	古代	2,5Y6'3	灰白色							
37 44 SD2		土製品	土拂	(7.3) 4.1 1.1	古代	2,5Y7'2	灰白色							黒土90.9g
38 44 SD3		須志部	杵	(16.0) 3.00	古代	7 C	7,5Y7'1	灰白色						
39 44 SX.1 X-31 Y-40 - 41		須志部	杵	16.0 (4.5)	古代	T K209?	No%	灰色						
40 44 X-31 Y-45		須志部	杵	16.0 4.3 6.8	古代	T K209	No%	灰色						
41 40 X-30 Y-31 墓		須志部	杵	16.7 3.9	古代	T K209 - T K227	5Y7'1	灰白色						新土分類No.27
42 44 X-31 Y-36 墓		須志部	杵	16.6 (3.0)	古代	T K209	10Y7'1	灰白色						
43 44 X-30 Y-41 墓		須志部	杵	(11.3) (3.4)	古代	T K209	No%	灰白色						
44 44 X-30 Y-30 墓		須志部	杵	11.7 (16.2)	古代	T K209	7,5Y5'1	灰白色						馬手付? 新土分類No.28
45 44 SD13 X-29 Y-46		土師器	甕	13.1 4.6 7.4	古代	7 C	10Y7'6	灰白色						
46 44 SD13 X-29 Y-46		土師器	甕	14.6 (5.0)	古代	7 C	2,5Y7'2	灰白色						
47 44 X-32 Y-31 - 32 墓		土師器	甕	10.5 (4.9)	古代	7 C	7,5Y7'3	灰白色						
48 44 X-33 Y-30 墓		土師器	甕	8.0 5.1	古代	7 C	2,5Y7'3	灰白色						
49 45 X-33 Y-23 墓		須志部	杵	11.8 1.5	古代	7 C 第3四手掘	5Y6'1	灰白色						
50 45 X-22 Y-85 墓		須志部	杵	13.3 2.8	古代	8 C	5Y6'1	灰白色						
51 45 X-40 Y-80 - 86 - 90 II 墓		須志部	杵	12.2 2.9	古代	8 C	10Y4'1	灰白色						
52 45 X-40 - 45 Y-79 - 82 II 墓		須志部	杵	13.6 (4.2)	古代	8 C	7,5Y5'1	灰白色						
53 45 X-39 Y-76 墓		須志部	杵	13.6 2.8	古代	8 C	No%	灰白色						
54 45 X-42 - 45 Y-79 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	15.9 3.0	古代	8 C	7,5Y6'1	灰白色						新土分類No.22
55 45 X-43 Y-65 墓		須志部	杵	12.2 2.6	古代	8 C	10Y6'1	灰白色						
56 45 X-42 - 45 Y-65 - 67 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	12.1 1.7	古代	8 C	10Y6'1	灰白色						馬頭?
57 45 X-43 - 45 Y-79 - 80 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	(12.4) (2.4)	古代	8 C	2,5Y6'1	灰白色						
58 45 X-30 Y-80 墓		須志部	杵	(12.4) 3.0	古代	8 C	5Y6'1	灰白色						新土分類No.21
59 45 X-42 Y-79 II 墓		須志部	杵	(13.6) (2.0)	古代	8 C	10Y6'1	灰白色						
60 45 X-44 - 45 Y-79 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	12.4 2.4	古代	8 C	2,5Y6'1	灰白色						
61 45 X-41 Y-85 墓		須志部	杵	12.0 3.1	古代	8 C	No%	灰色						
62 45 X-40 Y-82 - 85 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	13.4 3.2	古代	8 C	2,5Y7'2	灰白色						鍵成不良
63 45 X-40 Y-71 墓		須志部	杵	12.6 (1.6)	古代	9 C	7,5Y5'1	灰白色						
64 45 X-44 - 45 Y-80 - 84 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	(11.6) (1.1)	古代	9 C	10Y5'1	灰白色						
65 45 X-44 - 45 Y-79 II - Ⅱ 墓		須志部	杵	11.4 2.8	古代	9 C	7,5Y6'2	灰白色						
66 45 X-40 Y-82 墓		須志部	杵	(13.5) (2.5)	古代	9 C	5Y6'1	灰白色						
67 45 X-42 - 45 Y-74 - 75 - 78 - 82 II 墓		須志部	杵	(12.8) (2.6)	古代	9 C	20Y6'1	灰白色						

詳細箇所	行番	年月日	遺傳	出土地点	種類	器種	法寸( cm )		縫合	詳細な時期	船主色調	船主色	物色調	物色	参考
							上径	底径							
	58	46	X.25.Y.25.5 明	須也留	舟 A	10.6	2.7	6.1	古代	7 C 第2四半期	N6	灰色			
	59	46	X.48.Y.82.2 明	須也留	舟 A	11.9	2.7	6.9	古代	8 C ?	N5	灰色			
	20	46	X.45.Y.82.2 明	須也留	舟 A	12.5	3.2	8.7	古代	8 C 後半	20Y7-1	灰白色			
	71	46	X.42.-44.-45.Y.79.-80.-85	須也留	舟 A	12.8	3.7	9.0	古代	8 C 後半	5Y7-1	灰白色			
	72	46	X.45.-52.Y.80.-85.1 明	須也留	舟 A	12.0	3.7	8.8	古代	8 C 後半	7.5Y7-1	灰白色			
	73	46	X.28.-34.Y.42.-62.1 傷	須也留	舟 A	11.2	3.5	6.6	古代	7 C 第3四半期	5Y6-1	灰色			
	74	46	X.45.Y.90.9 明	須也留	舟 A	15.9	3.8	8.5	古代	8 C 後半	7.5Y7-1	灰白色	外側に縫合材		
	75	46	X.43.Y.28.2 傷	須也留	舟 A	11.8	3.4	8.0	古代	8 C 後半	5Y7-1	灰白色	11B型; 縫合材 船主 分割約2/3		
	76	46	X.50.Y.80.9 明	須也留	舟 A	11.4	3.6	7.8	古代	8 C 後半	7.5Y6-1	灰色			
	77	46	X.44.-45.Y.80.-85.1 傷	須也留	舟 A	11.5	2.7	7.4	古代	8 C 後半	7.5Y7-1	灰白色	船主分野約2/4		
	78	46	X.30.Y.40.1 傷	須也留	舟 A	9.6	3.0	7.1	古代	7 C 第3四半期	7.5Y6-1	灰色			
	79	47	X.29.Y.82.2 明	須也留	舟 A	12.0	4.1	9.2	古代	8 C 後半	20Y7-1	灰色	縫合「×」		
	80	47	X.45.Y.73.1 明	須也留	舟 A	11.6	2.7	7.4	古代	8 C 後半	7.5Y8-1	灰白色	縫合外側に縫合材		
	81	47	X.40.Y.79.2 明	須也留	舟 A	12.0	4.0	8.7	古代	8 C 後半	20Y7-1	灰色	縫合外側に縫合材「-」?		
	82	47	X.37.Y.70.1 明	須也留	舟 A	12.0	3.0	5.9	古代	7 C	2N	灰色	縫合外側に縫合材「-」?		
	83	47	X.45.Y.82.2 明	須也留	舟 A	11.2	3.8	8.8	古代	8 C 後半	7.5Y6-1	灰色			
	84	46	X.53.Y.84.2 明	須也留	舟 A	13.4	4.2	8.2	古代	7 C 第2四半期	N6	灰色	縫合		
	85	46	X.45.Y.79.2 明	須也留	舟 D	13.6	3.9	8.6	古代	8 C 後半	7.5Y6-1	灰色			
	86	47	X.32.Y.82.2 明	須也留	舟 E	11.4	4.0	(7.1)	古代	8 C 後半	5Y7-1	灰色	縫合		
	87	47	X.45.Y.28.2 明	須也留	舟 E	10.6	4.5	(7.6)	古代	8 C 後半	N7	灰白色	縫合「-」?		
	88	47	X.45.Y.70.1 傷	須也留	舟 F	11.3	3.0	(7.0)	古代	8 C 後半	2.5Y7-1	黃灰色			
	89	46	X.39.Y.83.2 傷	須也留	舟 F	13.8	3.8	(7.4)	古代	8 C 後半	10Y7-1	灰色			
	90	46	X.40.Y.70.1 傷	須也留	舟 F	12.7	3.6	(7.4)	古代	8 C 後半	N6	灰色			
	91	46	X.33.Y.54.1 傷	須也留	舟 F	17.3	3.4	(7.4)	古代	8 C 後半	2.5Y8-3	淡黄色			
	92	46	X.43.-45.Y.85.-87.1 傷	須也留	舟 F	12.8	(3.3)		古代	8 C 後半	N7-6	灰白色	船長タイプ 船主分野		
	93	48	X.56.Y.95.2 傷	須也留	舟 G	20.0	(7.0)		古代	7 C 第3四半期	5.5Y7-1	灰色			
	94	48	X.45.Y.91	須也留	舟 G	(16.0)			古代	8 C 後半	10Y6-1	灰色	船員タイプ		
	95	48	X.32.Y.100.1 - II 傷	十輪留	舟 G	12.9	(4.8)		古代	6 C	7.5Y7R5/4	灰白褐色			
	96	48	X.45.Y.90.2 傷	黒毛人	舟 G	15.8	(2.6)		古代	8 C	10Y7R3/2	灰白褐色			
	97	48	X.21.Y.41.1 - III 傷	黒毛人	舟 G	14.8	(3.6)		古代	8 C - 9 C 前	10Y7R4/4	灰白褐色			
	98	48	X.16.-20.Y.30. - 32 I 傷	十輪留	舟 G	(11.7)			古代	8 C ?	2.5Y7R3	淡黄色			
	99	48	X.41.Y.82.2 傷	十輪留	舟 G	8.2	(3.6)		古代	8 C	10Y7R1	灰白色	外側全的に縫合材		
	100	48	X.40.Y.78.2 傷	十輪留	舟 G	13.4	(3.4)		古代	8 C	5Y7R6-6	橙色	外側全的に縫合材		
	101	48	X.47.Y.86.2 傷	十輪留	舟 G	(4.6)	8.7		古代	8 C - 9 C 後	2.5Y7R6/6	橙色	船主赤切り 斜面模様の舟頭羅		
	102	48	X.47.Y.86.2 傷	十輪留	舟 G	19.0	(5.0)		古代	8 C	10Y7R6/2	灰白褐色			
	103	48	X.42.-43.Y.81.2 傷	十輪留	舟 G	17.5	(6.6)		古代	8 C	10Y7R6/2	灰白褐色			
	104	48	X.44.-45.Y.79. - 82 傷	十輪留	舟 G	18.2	(9.1)		古代	8 C	10Y7R6/4	灰白褐色			
	105	49	X.43.Y.80.2 傷	十輪留	舟 G	18.8	(8.0)		古代	8 C	10Y7R4/4	灰白褐色			
	106	49	X.43.-45.Y.81.2 傷	十輪留	舟 G	18.8	(9.2)		古代	8 C	10Y7R3/3	灰白褐色	外側全的に縫合材		
	107	49	X.43.-44.Y.81.2 傷	十輪留	舟 G	18.2	(11.6)		古代	8 C	10Y7R3/3	灰白褐色			
	108	49	X.48.Y.87.2 傷	十輪留	舟 G	27.8	(6.7)		古代	8 C	10Y7R4/4	灰白褐色			
	109	49	X.45.-48.Y.82.2 - 84.2 - 85.2 傷	十輪留	舟 G	29.8	(8.8)		古代	8 C	2.5Y7R4/2	灰白褐色	内側全的に縫合材		
	110	49	X.45.Y.79.2 傷	十輪留	舟 G	31.4	(10.8)		古代	8 C	2.5Y7R3	淡黄色	外側外側に縫合材		
	111	49	X.41.Y.86.2 傷	十輪留	舟 G	30.4	(14.8)		古代	8 C	2.5Y7.4	淡黄色	外側外側に縫合材		
	112	49	X.45.-47.-48.Y.80. - 82. E - V 型	十輪留	舟 G	37.2	(17.3)		古代	8 C	2.5Y7.8	淡黄色	外側外側に縫合材		
	113	49	SD14	駕籠人部	舟 G	15.1	(3.6)		古代	8 C	2.5Y7R4/2	灰白褐色			
	114	49	X.33.Y.57.1 傷	駕籠人部	舟 G	(3.5)			古代	8 C	2.5Y7R6/6	橙色			
	115	49	X.40.Y.57.1 傷	土偶頭	舟 G	6.0	3.4	1.2	古代	7.5Y2-1	灰白色		重M63.35g		
	116	50	SK11	中世土偶頭	舟 G	7.9	1.8	2.1	中世	13C - 14C 後半	2.5Y7-3	淡黄色			
	117	49	SK12	中世土偶頭	舟 G	8.3	1.9	0.5	中世	13C - 14C 後半	2.5Y6-2	淡黄色			
	118	50	SD8	溝頭	舟 G	(2.6)			中世	I - II 前	N6	灰色			
	119	50	SD11	X.33.Y.93	越中織紋	(1.6)			古世	16C 前 - 17C	5Y R5-6	明赤陶色			
	120	50	SD13	中世土偶頭	舟 G	7.3	2.1		中世	14C 後半 - 15C	2.5Y7-2	淡黄色			
	121	50	SD13	中世土偶頭	舟 G	10.9	(2.9)		中世	14C 後半 - 15C	2.5Y7-1	灰白色			
	122	50	SD13	X.34.Y.47	中國青釉	13.8	(4.1)		中世	14C 後半 - 15C	10Y7R1	灰白色	オーラー 東晉系 上田口型?		
	123	50	SD13	X.29.Y.48	溝頭	6.5			中世	10Y7R1	灰白色				
	124	50	SD14	溝頭	舟 G	33.0	(6.0)		中世	II - III	N4	灰色			
	125	50	SD15	X.40.Y.55	中世土偶頭	8.2	(1.9)		中世	15C 前 - 16C	10Y7R2/3	灰白褐色	(1)内側外側に縫合材		
	126	50	SN1	X.33.Y.40. - 41	中世土偶頭	9.4	(2.0)		中世	14C 後半 - 15C	10Y7R3/3	灰白褐色	(1)内側内側に縫合材		
	127	50	X.30.Y.57.2 傷	中世土偶頭	舟 G	9.8	(2.8)		中世	14C 後半 - 15C	2.5Y7.6	4	灰白褐色		
	128	50	X.19.Y.60.1 傷	中世土偶頭	舟 G	12.9	(2.2)		中世	15C 前 - 16C	10Y7R6/6	明赤陶色			
	129	50	X.31.Y.51.1 傷	越中織紋	舟 G	(1.0)			古世	大寒期	2.5Y8-2	灰白色	灰輪		
	130	50	X.25.Y.21.1 傷	溝頭	舟 G	(3.6)			古世	II - III	10Y5-1	灰色			
	131	50	X.32.Y.30.1 傷	溝頭	舟 G	(4.6)			古世	II - III	N4	灰色			
	132	50	X.30.Y.40.1 傷	溝頭	舟 G	(4.4)	8.0		古世	II - III	10Y5-1	灰色			
	133	50	X.20.-26.-25.Y.25. - 29. - 45 I 型	溝頭	舟 G	(9.6)	12.1		古世	N5/	灰色				
	134	50	X.30.Y.88	越中織紋	舟 G	(1.9)			古世	17C	10Y7R3/2	灰白褐色			
	135	50	X.36.Y.95.1 傷	越中織紋	舟 G	(2.6)			古世	17C	5Y6-1	灰色	黒輪		
	136	50	X.34.Y.81.1 傷	越中織紋	舟 G	(2.1)			古世	17C	5Y7R2/1	灰輪			
	137	50	X.23.Y.20.1 傷	溝頭	舟 G	(1.9)			古世	16C 前 - 17C 前半	10Y7R5/3	灰白褐色			
	138	50	X.44.Y.85.1 傷	溝頭	舟 G	(4.2)	(5.3)		古世	17C	5Y6-1	灰色	化粧土灰輪		

※該条の「  
」付は現存無を示す。

第29表 水牧遺跡 木製品一覧

辨別	遺物	写真図版	遺構	出土地点	種類	材質	法量(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
70	1	51	SK9		板材	スギ	6.0	4.1	0.5	
	2	51	SK10		角材	ヒノキ	3.1	2.8	1.3	
	3	51	SD13	X30Y42	棒材	スギ	25.2	2.4	1.0	
	4	51	SD13	X30Y42	棒材	スギ	34.2	2.8	0.9	下端尖る
	5	51	SD13	X30Y42	棒材	スギ	41.3	2.7	0.8	下端を削る
	6	51	SD13	X30Y42	棒材	スギ	82.8	3.1	2.6	上端に抉りあり
	7	51	SD14	X31Y38	棒材	スギ	25.1	2.85	1.4	
	8	51	SD14	X31Y38	棒材	スギ	11.9	1.5	1.5	
	9	51	SD16	X30Y29	漆塗柾	ケヤキ	器高1.25	1口径8.0	0.5	漆塗痕分析No.4
71	10	52		X53Y100Ⅱ層	板材	スギ	11.5	3.1	0.65	
	11	52		X46Y81Ⅰ層	板材	スギ	8.7	1.9	0.7	
	12	52		X18Y18Ⅰ層	下駄	スギ	25.2	12.3	3.5	

第30表 水牧遺跡 石製品一覧

辨別	遺物	写真図版	遺構	出土地点	種類	材質	法量(cm・g)			備考	
							長さ	幅	厚さ		
71	1	53	SD13	X27Y51	砾石?	砂岩	6.4	6.0	1.4	37.69	側面に研いだ痕跡あり
	2	53		X23Y35Ⅰ層	砾石	凝灰岩	4.1	2.4	2.0	24.96	
	3	53		X48Y90Ⅱ層	砾石	流紋岩	5.5	4.2	3.4	77.55	
	4	53		X55Y90Ⅱ層	砾石	頁岩	5.3	4.9	2.9	108.89	
	5	53		X41Y58Ⅰ層	鋸鋸車	蛇紋岩	3.9	1.9	1.7	14.55	側面に網目文
	6	53		X26Y53Ⅰ層	地輪	凝灰岩質砂岩	30.0	31.4	24.8	4020	

第31表 水牧遺跡 金属製品一覧

辨別	遺物	写真図版	遺構	出土地点	種類	材質	法量(cm・g)			備考	
							長さ	幅	厚さ		
72	1	53	SI1	D区	鉄滓		2.8	2.45	1.65	6.38	
	2	53	SD13		鉄滓		2.5	2.8	2.0	16.49	
	3	53	SD15	X40Y55	鉄滓		4.1	2.6	2.9	40.46	
	4	54		X32Y49	棒状	鉄	6.8	1.7	0.9	37.3	
	5	54		X40Y81Ⅰ層	範状	鉄	10.1	5.35	0.2	57.92	
	6	54		X25Y51Ⅰ層	馬繩	鉄	17.5	2.6	1.0	100.05	
	7	54		X32Y50Ⅰ層	鍔管(鷲首)	銅	5.7	1.5	0.95	5.66	
	8	54		X36Y46Ⅰ層	鍔管(鷲首)	銅	6.85	1.65	0.9	7.73	
	9	54		X25Y50Ⅰ層	蹄鉄	鉄	11.6	12.0	0.3	81.88	
	10	53	耕土		鉄	銅	径22.4			1.73	寛永通寶

# 第VII章 下川原遺跡

## 1 概要

下川原遺跡は、小矢部川の支流である砂川の左岸にあり、宝達丘陵から派生する段丘上に立地している。発掘調査は平成18年度と平成19年度の2ヶ年で行われており、便宜的に平成18年度をA地区、平成19年度をB地区として調査を実施している。調査区はJR北陸本線の南側にはほぼ平行して設定されており、試掘調査では弥生時代～古代の遺構・遺物が確認されている。

A地区はB地区的西側にあり、調査面積は1,244m<sup>2</sup>である。調査区の南側と東側は谷状の地形となり、標高はおよそ34.7～35.0mを測る。主な時期は古代であり、遺構には掘立柱建物1棟、土坑、溝が確認されている。掘立柱建物は調査区の東寄りで確認されているが、全体として遺構の密度は散在的であり、遺構数も少ない。遺物には土師器・須恵器などがあり、須恵器の杯の底部外面に「天平」と墨書きされているものが出土している。B地区はA地区から東へ100mほど離れた調査区で、調査面積は547m<sup>2</sup>である。調査区の南側半分ほどは後世の擾乱により遺構が破壊されて残存していない。標高はおよそ35.3mを測る。主な時代は弥生時代であり、遺構には竪穴建物1棟、土坑、溝がある。竪穴建物は半分ほど残存しており、2基の柱穴が確認されている。出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器などがある。

## 2 層序

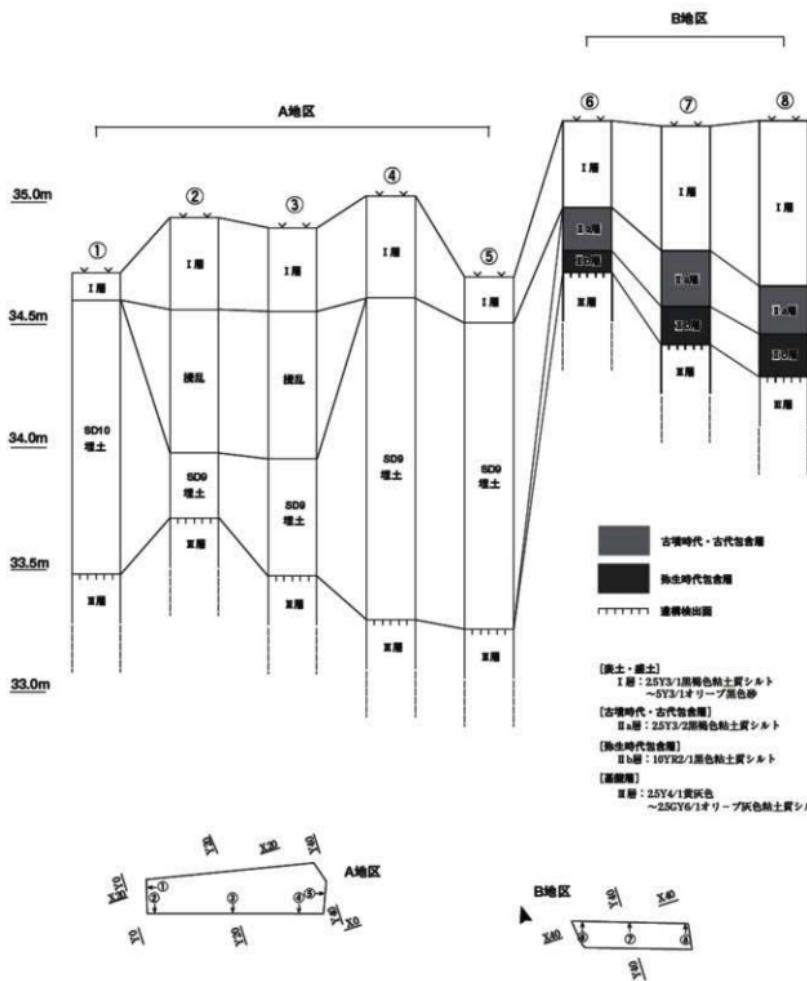
層序はI層からIII層まであり、A地区では遺物包含層であるII層がほとんど確認されていない。A地区ではI層が表土、盛土であり、黒褐色粘土質シルトで、盛土はオリーブ黒色砂を基調としている。I層の下には古代の包含層であるII層があり、黄灰色シルトを基調としている。III層は基盤層でオリーブ灰色砂質シルトを基調としている。遺構検出は主に基盤層であるIII層上面で実施されている。

B地区ではI層が表土、盛土であり、黒褐色砂である。II層は更にIIa層、IIb層に分かれており、IIa層が古墳時代・古代の包含層、IIb層が弥生時代の包含層となっている。黒褐色～黒色粘土質シルトを基調としている。III層は基盤層であり黄灰色砂質シルトを基調としている。遺構検出については基盤層であるIII層上面で実施した。

## 3 遺構

遺構は弥生時代・古墳時代・古代の所産のものが確認された。弥生時代・古墳時代の遺構はB地区に分布しており、竪穴建物1棟、土坑、溝などが確認されている。南側半分は後世の擾乱によって遺構は分布していない。帰属時期は土坑や溝の中に弥生中期や古墳時代のものが含まれているが、竪穴建物(SI1)は弥生時代終末期のものである。竪穴建物からは緑色凝灰岩の剥片が出土していることから、玉作に関係する建物の可能性がある。古代の遺構はA地区に分布しており、掘立柱建物1、土坑、溝が確認されている。古代の土器が、8世紀後半～9世紀に集中する傾向にあることから、SB1の帰属時期もこの頃と考えられる。A地区的南側から東側にかけて谷地形となっている。

(島田亮仁)



第73図 下川原遺跡 層序模式図

## (1) 弥生時代・古墳時代

## A 堪穴建物

## 1号堪穴建物 (S I 1, 第76・82図, 図版56・59・61・62)

B地区のほぼ中央に位置する。南側半分を擾乱により破壊されており、全体の規模は把握できないものの、堪穴部分の規模は現存径5.60m、深さ0.25mである。平面形は隅丸方形を呈すると推定される。主軸方向は東西方向で、埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とし、炭化物を含む。堪穴部分から外側に0.6~1.1mの間隔を開けて幅0.40m、深さ0.20mの周溝が巡る。周溝までの法量は現存径6.6mである。堪穴内には柱穴が2基 (S P 1~S P 2) 伴い、規模は長径0.28~0.62m、深さは0.12~0.16mである。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。その他に、S K 6・7などの土坑が堪穴北壁際で検出される。堪穴に関係するものと思われる。重複関係は、S D 2に切られ、S D 3を切る。出土遺物は弥生土器の壺 (1~6)・壺 (7~11)・高杯 (12~23)、緑色凝灰岩の剥片 (14点:重量15.92g) が出土している。底面付近から出土した遺物の多くは、堪穴部北側の周溝との間に分布する。

## B 土坑

## 1号土坑 (S K 1, 第77図)

B地区の中央西寄りに位置する円形の土坑で、長径0.31m、短径0.28m、深さ0.10mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は弥生土器がある。

## 2号土坑 (S K 2, 第77図)

B地区の中央東寄りに位置する楕円形の土坑で、南側は擾乱によって破壊されている。現存長2.4m、短径1.78m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は弥生土器がある。

## 3号土坑 (S K 3, 第77図)

B地区の中央西寄りに位置する土坑で、北側は調査区外へ広がる。現存長2.20m、短径1.00m、深さ0.23mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。S K 4と近接して位置している。出土遺物は弥生土器がある。

## 4号土坑 (S K 4, 第77・83図, 図版56・62)

B地区の中央西寄りに位置する楕円形と推定される土坑で、北側は調査区外へ広がる。現存長1.80m、短径1.80m、深さ0.37mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は弥生土器・土製品の玉 (24) がある。

## 5号土坑 (S K 5, 第77・83図, 図版62)

B地区の中央に位置する楕円形の土坑である。長径1.54m、短径0.80m、深さ0.55mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。出土遺物は弥生土器の壺 (25) がある。出土遺物から弥生時代中期とみられ、S I 1や他の遺構に比べて時期が古いとみられる。なお、S K 5出土の炭化材についてAMS年代測定を実施したところ、 $2190 \pm 20$ yrBPであり、暦年校正年代は1σ暦年231~199calBCであった。これは、最近の炭素同位体比を使った年代測定法の一連の成果から、弥生時代中期中葉頃に相当し、土器編年と概ね整合する。

## 6号土坑 (S K 6, 第77図)

B地区の中央に位置する楕円形の土坑である。長径1.02m、短径0.66m、深さ0.19mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。S I 1底面にて検出され、堪穴内の土坑と考えられる。出土遺物は弥生土器がある。

## 7号土坑（SK7, 第77図）

B地区の中央に位置する楕円形の土坑である。長径0.72m, 短径0.58m, 深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調とする。SI1底面にて検出され、堅穴内の土坑と考えられる。出土遺物は弥生土器がある。

## C 溝

## 1号溝（SD1, 第77図, 図版56）

B地区の東端に位置する溝で、東西方向に直線的に延びている。東側は調査区外へ延びており、西側は擾乱によって破壊されている。幅2.30m, 深さ1.14mを測る。埋土は黒色粘土質シルト～暗灰黄色粘土質シルトを基調としている。北側の壁面は傾斜が急であり、南側の壁面は傾斜が緩やかに構築されている。出土遺物は須恵器があり、古墳時代以降の遺構と考えられる。B地区で明確な弥生時代以外の遺構は、このSD1のみである。

## 2号溝（SD2, 第77図）

B地区の中央に位置する溝で、東西方向に延びている。北側は調査区外へ延びており、南側は擾乱によって破壊されている。幅0.28m, 深さ0.10mを測る。SI1と重複しているが、SI1を切るよう構築されている。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物は弥生土器がある。

## 3号溝（SD3, 第77・83図, 図版62）

B地区の中央に位置する溝で、東西方向に延びている。北側は調査区外へ延びており、南側は擾乱によって破壊されている。幅1.32m, 深さ0.42mを測る。SI1と重複しているが、SI1に切られる。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物は弥生時代中期とみられる甕？(26・27)・壺(28)・壺もしくは鉢(29)がある。

(青山晃)

## (2) 古代

## A 掘立柱建物

## 1号掘立柱建物（SB1, 第80図）

A地区の東側に位置している。規模は3間×2間の側柱建物である。桁行4.60m, 梁行4.00mであり、床面積は18.4m<sup>2</sup>である。主軸はN-10°-Wで南北棟である。柱穴の平面形は円～楕円形で、規模は長径0.25～0.8m, 深さは0.1～0.3mである。埋土は黒褐色粘土質シルトからオリーブ褐色シルトを基調としている。出土遺物はSP4・SP5から土師器の小片がある。

## B 溝

## 4号溝（SD4, 第81図）

A地区的東側に位置する溝で、北東方向に延びている。北側は調査区外へ延びており、南側は擾乱によって破壊されている。幅6.00m, 深さ0.15mを測る。埋土は黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物は土師器・須恵器がある。

## 5号溝（SD5, 第81図）

A地区的西側に位置する溝で、北東方向に延びている。南側は擾乱によって破壊されている。幅0.60m, 深さ0.10mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器・須恵器がある。

## 6号溝（SD6, 第81図）

A地区的西側に位置する溝で、北西方向に延びている。北側は調査区外へ延びており、南側は擾乱によって破壊されている。幅1.60m, 深さ0.15mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトを基調としている。出土遺物は土師器がある。

## 7号溝（SD 7, 第81図）

A地区の東側に位置する溝で、北東方向に延びている。幅0.50m、深さ0.15mを測る。埋土はオリーブ黒褐色粘土質シルトを基調としている。SD 4と重複しているが、切り合いは不明である。また、南側はSD 9に切られる。出土遺物は確認されていない。

## 8号溝（SD 8, 第81図）

A地区の東側に位置する溝で、南北方向に延びている。南側は擾乱によって破壊されている。幅0.60m、深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ褐色シルトを基調としている。出土遺物は確認されていない。

## 9号溝（SD 9, 第81図）

A地区の西側から東側へ蛇行して流れる自然流路である。幅10.00m、深さ2.40mを測る。埋土は灰色シルト～黒褐色粘土質シルトを基調としている。出土遺物は土師器の椀（176・177）、皿（178）・甕（179～181）・堀（182）、須恵器の蓋（167・168）・杯（169～171）・甕（172）・瓶類（173～175）、砾石（1）がある。

## 10号溝（SD 10, 第81図、図版70～72・74～78）

A地区の北側から南側へ流れる自然流路である。幅11.00m、深さ0.90mを測る。埋土は灰色シルト～オリーブ黒色粘土質シルトを基調としている。出土遺物は土師器の椀（211～215・218・219）、皿（216・217）・鉢（221）・甕（223～237）・堀（238～240）、黒色土器の椀（220）・鉢（222）、須恵器の蓋（183～187）・杯（188～203）・甕（205・206）・瓶類（204・207・208）・壺（209）・鉢（210）、羽口（241・242）がある。

(細辻真澄)

## 4 遺物

遺物には弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、墨書き土器、石製品などの弥生時代から中世までの多様なものが出土している。弥生時代の遺物は、SI 1が検出されているB地区からの出土量が多いものの、風化が著しく表面の調整が識別できない個体が大半を占めている。器種には、甕、壺、器台、高杯、台付鉢、蓋で構成されている。弥生時代終末期のものが主体だが、中期にさかのぼる個体も若干出土している。SI 1出土の弥生土器については、甕、壺、高杯を中心に23点を図示している。石製品の中で、石核や剥片などの玉作を関連付けるものが検出されたが、緑色凝灰岩の石核のみを図示した。古墳時代の遺物は、主に土師器、須恵器、黒色土器、カマド型土製品があるが、やはり遺存状態は良好でない。土師器の器種は、椀、甕、壺、高杯、器台などで構成されており、須恵器で杯蓋、杯、高杯、ハソウ、甕、提瓶などで構成されている。須恵器では胎土分析により、6世紀代の県内産のものは無く、柳田ウワノ1号窯や二つ梨殿様窯、遠くは陶邑窯に産地推定された個体も出土している。古代の遺物は、概ねSB 1が検出されているA地区的出土が多く、図示した遺物もA地区出土のものが主体である。土師器の器種には、椀、皿、高杯、甕、堀、甕などで構成されており、須恵器では、杯蓋、杯、瓶類、壺、甕で構成されている。杯Bの中には底部外面に「天平」と墨書きされた個体も出土している。古代の土器は、概ね8世紀後半～9世紀に集中する傾向にある。中近世の遺物は、遺構が確認されていないこともあり、出土量が極端に少ない。図示したのは中世土師器の5点で時期は12世紀前葉～中葉である。

## (1) 土器・土製品

## A 弥生時代・古墳時代（第82~88・90・95図、図版59~69・75・85）

1~68は弥生土器・土製品で、69~166・205・335は古墳時代の土器・土製品である<sup>注1</sup>。1~23は1号堅穴建物（S I 1）の一括出土遺物である。1~6は壺で、1は口縁部の途中で段を有する受口状口縁で、外面はヨコナデ調整が施される。2は口縁端部の断面が三角状に肥厚した付加状口縁で、外面には縦方向のハケメ調整が施される。3は口縁部が有段状を呈し、端部は短く立ち上がる。外面には縦方向のハケメ調整が施される。4は胴部が球状に近い形を呈し、口縁部はわずかに受口状口縁となる。外面はハケメ調整とみられるが表面剥離が著しい。5・6は平坦な底部で、外面は縦方向のハケメ調整が施され、煤が付着している。7~11は壺である。7は小型の短頸壺で、肩の張らない胴部から直立気味の口縁部を持つ。口径10.0cmである。8は有段口縁を有し、胴部はやや扁平を呈するタイプである。口縁部の内外面と胴部の外面には丁寧なミガキ調整が施される。9は胴部が球状に近い形状の壺で、肩部の上半には7条程度の櫛描直線文が巡り、下半には連続刺突文が施される。10は受口状口縁を有するタイプで、受口部の外面に刺突文が施される。内外面にナデ調整が施される。11は平坦な底部から、やや開きながら立ち上がる胴部を有する。外面には横方向のハケメ調整である。12~23は高杯である。12・13は杯部の破片で、12は浅く広い底部から、外反気味に立ち上がる口縁部を有する。内外面には丁寧なミガキ調整が施される。13は浅く広い底部から、稜を持って外反気味に立ち上がる口縁部を有する。14~23は脚部で、緩やかに外反しながら開くタイプである。18~21には円形の透孔があり、18で3箇所、19で4箇所、21で2箇所認められる。また、21では4条の平行沈線文が巡る。S I 1出土遺物は弥生時代後期~終末期であるが、S I 1の時期に伴う土器は弥生時代終末期である。24は4号土坑（S K 4）出土の土製の玉である。直径2.4cm、孔径は0.2cm、重量12.01gである。25は5号土坑（S K 5）出土の壺で、口縁部が大きく外反する。口縁端部の外面には刺突文が、口縁部の内面には綾杉状刺突文がそれぞれ施される。これらの遺物は弥生時代中期とみられる。26~29は3号土坑（S D 3）からの出土である。26・27は壺とみられる底部で、外面には粗いハケメ調整が施されている。28は短頸壺とみられる頸部で、筒状の頸部に3条の突帯を貼り付け、上位2条にのみ刻目が施される。29は壺もしくは鉢とみられる個体で、口縁端部はやや肥厚し斜格子状の文様が施される。弥生時代中期に帰属するとみられる。30~68は包含層出土である。30・31は口縁部の途中で段が付き、口縁部の長い有段口縁部を有するタイプである。外面は縦方向のハケメ調整で、内面は縦方向のケズリ調整である。30の肩部には刺突文が施される。30・31ともに、外面には煤が著しく付着する。32・33は口縁部の途中で段が付く受口状口縁を有し、口縁端部を面取る。33の口縁部には刺突文がみられる。34は肩部に刺突文が施された壺である。35は壺とみられる個体で、緩やかに外反した口縁部を持ち、端部に刻目文が施される。36は大型の壺で、有段口縁を有する。口径は27.0cmである。37・38は壺とみられる胴部で、内外面ともにハケメ調整で、外面に煤が付着している。39~42は壺の底部である。平坦もしくは小さな底部から、緩やかに内湾しながら胴部へと続く。43~56は壺である。43・44是有段口縁を有するタイプで、端部を面取る。43の外面には刺突文がみられる。45は付加状口縁のような壺とみられる個体で、口縁端部はやや肥厚し、三角状を呈する。46は口縁部が外反しながら立ち上がる短頸壺とみられる個体である。47は口縁部が緩やかに外反する小型の壺とみられる。48は小型の短頸壺もしくは無頸壺とみられる個体で、肩の張らない胴部から直立気味の口縁部を持つ。49は口縁部の途中に段が付く有段口縁を有するタイプである。50・51は短頸壺とみられる個体で口縁部が緩く外反しながら立ち上がる。52は壺とみられる個体で、緩やかに大きく外傾する

口縁部を有する。口縁端部に刺突文が施され、内面に円形浮文を5個2列で配している。外面はハケメ調整であるが摩滅が著しい。53は頸部の破片で、外面には斜格子文が巡る。54はやや扁平気味に膨らんだ胴部を有し、外面は横方向のミガキ調整が施される。55は平坦な底部から、わずかに内湾気味に立ち上がる。56は大型の短頸壺である。厚みのある底部から球状の胴部へ続く。口縁部へは球胴から屈曲して垂直に立ち上がり、やや外反気味に口縁端部に至る。調整は外面がやや縱方向のハケメ調整、内面は横方向のハケメ調整が施される。57は擬凹線台付鉢で、口縁部には3条の擬凹線が巡る。頸部には2個の小孔が並列に穿たれている。外面にミガキ調整、口縁部の内面から外面全体にかけて赤彩が施される。58は有紐蓋とみられる個体で、つまみは大きく窪み輪状になるタイプである。59は鉢などの把手とみられ、断面は円形を呈する。60~68は高杯である。60~64は有段高杯で、杯部の底部が平らで、そこから口縁部にかけて直線的に外傾または外反する。61は内外面ミガキ調整で、外面は摩滅気味である。62は杯部を内外面ミガキ調整、脚裾部を外面ミガキ調整、内面ナデ調整、脚基部に近い部分にはハケメ調整がそれぞれ施される。脚裾部には透孔が穿たれている。63は摩滅のため調整不明、64は内外面ミガキ調整が施される。65は鉢形高杯で、杯部が緩やかに内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部はやや面取る。内面は粗いナデ調整、外面はミガキ調整で、赤彩が施される。66~68は棒状脚で、66は透孔が穿たれている。

69~89・205・335は須恵器である<sup>注2</sup>。69~75が杯蓋で、69はやや丸みのある天井部から、口縁部を分ける後はやや鈍い。口縁端部は内傾し、弱い段を有する。天井部の3/4ほどに回転ヘラケズリが施され、「//」とヘラ状工具による線刻が施される。口径13.8cmである。70・71は天井部と口縁部の稜が鈍く、口縁端部はやや内傾気味である。72は天井部と口縁部との境には凹線が巡る。73・74は天井部と口縁部の境が不明瞭で、口縁端部はやや内傾気味である。75は丸い天井部に粗い回転ヘラケズリを施す。76~86は杯Hである。76・77はやや扁平気味な底部から、受部は外上方にのびる。立ち上がりはやや内傾気味で、端部を丸く収める。底部外面は約1/3程度の回転ヘラケズリを施す。78~97は丸い底部から、受部は水平にのびる。立ち上がりはやや内傾気味で、端部はやや内側に傾斜ぎみにおさめる。底部外面は約1/3程度の回転ヘラケズリを施す。78で口径9.6cmである。79は受部が水平にのび、立ち上がりはやや内傾気味で、端部は丸く収める。80~84は扁平で浅い底部から、受部はやや上向きもしくは水平に外方向へのびる。口縁部は内傾し、短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。85・86は口縁部を欠損しているが、やや扁平な底部から、受部は水平にのびる。87・88は高杯である。87は脚部に透孔を有する。88は杯部が扁平気味な底部から、水平方向に延びる受部を有する。89は鹿の頭部破片で、波状文が施される。205は甕の口縁部の破片で、沈線を挟んで2段に波状文が巡る。335は提瓶とみられる胴部側面の円盤状部分である。時期は69でT K47, 70・71・77・78・89でMT15, 79でMT15~TK10, 72・73・84・85でTK10, 74・75・80・81・86・87でTK10~MT85, 83でMT85, 76でMT85?, 88でTK209にそれぞれ比定される。なお、69・71・77・78・81・88の6点について、胎土分析による产地推定を実施した。その結果、6世紀代の須恵器は富山県内の产地にいずれも該当しないデータが得られた。69・77で陶邑窯、78・81は柳田ウワノ1号窯 or 陶邑窯、71は二つ梨殿様窯にそれぞれ产地推定された。なお、7世紀代の88は陶邑か射水下条川右岸窯群、射水東窯群、婦負窯群に产地が推定されている。

90~162は土師器で、90~115は椀である。90~93はやや丸い底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや内傾する。92・93は外面にケズリ調整が施される。94は平坦な底部から、内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁部との境界は不明瞭で口縁端部を丸くおさめる。95は口縁部はやや外傾し、

端部を鋭くつまみ出すようにおさめる。96は口縁部がやや内傾気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。内面ミガキ調整である。97は口縁端部をやや尖り気味におさめる。98・114は平坦な底部から外反気味に体部が立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味におさめる。114は内外面ミガキ調整で赤彩が施される。101は平坦な底部から、内湾気味の体部を有する。端部をやや丸くおさめる。外面にはミガキ調整が施される。99・100・102~113・115は黒色土器である。99はやや丸い底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや内傾する。100は内湾気味の体部から口縁部はやや垂直気味に立ち上がり、端部はやや丸くおさめる。外面にミガキ調整が施される。102~107は丸い底部から、口縁部は稜を持って外反気味に立ち上がる。口径は102~104で15~16cmである。108は内湾気味の深い体部から、口縁部は稜を持って外反気味に立ち上がる。109~111は弱い稜を持って外傾気味に立ち上がる口縁部を有する。112は底部の破片で、内面ミガキ調整が施される。113は深みのある小型の椀で、体部から口縁部は外反気味に短く立ち上がる。口径は9.6cmである。115は体部が緩やかに外反しながら立ち上がる。116~124は壺である。116は丸い底部から、卵形を呈する胴部を有する。胴部から口縁部へは「く」字状に屈曲し、やや長い口縁部へとづく。口径17.6cmである。外面ハケメ調整が施される。胴部外面には煤が付着する。117は肩の張らない胴部から、口縁部へは緩やかに「く」字状に屈曲する。口縁部は端部を外反気味におさめる。胴部外面はハケメ調整が施され、外面に煤が付着する。118は丸い胴部から、「く」字状に屈曲して口縁部となる。口縁部は外傾し、端部は丸くおさめる。119は胴部外面にハケメ調整、内面の上位ハケメ調整、下位ナデ調整が施される。120は肩の張らない胴部から、「く」字状に屈曲して外傾する口縁部となる。外面ハケメ調整である。121は緩やかに外反する口縁部を有し、端部を面取る。122はやや短い口縁部で、外面にナデ調整が施される。123・124は小型の壺で、短い口縁部を有する。125~133は壺である。125は「く」字状に屈曲する口縁部を持ち、端部は水平方向に鋭くつまみ出す。126は平坦で厚い底部から緩やかに立ち上がり、肩はほとんど張らない。口縁部は外傾し、端部を面取る。127は小さい平坦な底部から球形に近い胴部を有し、口縁部は外傾する。128は球形に近い胴部を有し、外反気味に短く立ち上がる口縁部を持つ。129は広卵形の胴部を持ち、外面ミガキ調整が施される。130は小さく平坦な底部から、内湾気味に立ち上がる胴部を有する。131は無頸壺で、球形の胴部から口縁端部は内傾気味に仕上げる。外面はハケメ調整が施される。132は大型の壺の口縁とみられる個体である。摩滅が著しいが、外面のハケメ調整がかろうじて確認される。内面に黒斑が認められる。133は底部の破片で、小さな厚い底部を有する。134~149・151~153は高杯で、151~153は黒色土器である。134は内湾気味に立ち上がる杯部で、内外面ミガキ調整が施される。135~138は大きく開く脚部の破片である。139は小型の高杯とみられる個体で、屈曲し外反してのびる杯部を有する。2個の孔が並列に穿たれている。140~142は大きく開く脚部の破片である。143・144は筒状を呈する脚部で、据部が外反するタイプである。145は杯部の破片である。146~148は柱状で脚据部は大きく広がるタイプである。149は直線的に外傾して立ち上がる口縁部で、端部を丸くおさめる。外面ミガキ調整が施される。151~153は平坦な底部から屈曲し、口縁部は外傾しながら立ち上がる。内面ミガキ調整が施される。150は蓋で、扁平な天井部から、緩やかに内湾しながら口縁部に至る。天井部にはボタン状のつまみを有する。天井部の外面は回転ヘラケズリ、内面ミガキ調整が施される。154~162は器台である。154~159は「ハ」字状に大きく開く脚部を有するタイプで、154で4箇所、155で3箇所、157で3箇所、159で3箇所の円形透孔がそれぞれ穿たれている。160~162は小型の器台で、160は脚部から屈曲して外傾しながら立ち上がる。外面ミガキ調整が施される。161は「ハ」字状に開く脚部を有する。162は外傾しながら立ち上がる受部を有する。163

～165は土製品である。163・164は円柱状を呈する支脚で、164は被熱が認められる。165はリング状の台と考えられる個体で、外面にハケメ調整が施される。166は竈形土製品で、脚部は「ハ」字状に踏ん張る。内外面には部分的に指頭圧痕や粘土組接合痕がみられる。

#### B 古代（第89～99図、図版70～89）

167～204・206～334・336～388は古代の土器・土製品である。167～182は9号溝（S D 9）出土の遺物である。167～175は須恵器である。167・168は杯蓋で、167は扁平な天井部から口縁端部は折り曲げ、垂下させる。天井部には擬宝珠状のつまみが付く。内面には墨痕が確認されることから、転用硯として使用されたと考えられる<sup>注3</sup>。168は扁平な天井部を持ち、欠損しているがつまみが付く。169は杯Aで、平坦な底部から、屈曲して外傾する口縁部へづく。口縁端部は丸くおさめる。170は杯Aの底部破片で、底部外面に墨書きされているが、文字の識別は困難である。171は深みのある杯Bで、平坦な底部から屈曲して、体部は外傾しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。高台は四角形を呈する。172・173は甕である。172は甕の肩部で、外面タタキ、内面同心円状の当て具痕がみられる。173は横瓶で、「く」字状に屈曲し、短い口縁部となる。口縁端部はわずかにつまみ上げる。174は長頸瓶の頸部である。175は平坦な底部をもつ双耳瓶とみられる個体である。176～182は土師器である。176・177は椀Aで、平坦な底部から、やや直線気味に立ち上がる体部を有する。口縁端部は丸くおさめる。底部外面には回転糸切り痕がみられる。176で口径14.8cmである。178は回転糸切りが残る皿Aで、体部が大きく外傾する。179～181は甕で、179は小型の甕で、口縁部は上方に折り曲げられ、受口状を呈する。外面に煤が付着する。180は底部の破片で、内外面ナデ調整が施される。181は口縁部が外傾し、端部は方形を呈する。182は壺で、胴部と口縁部の境はわずかに屈曲する。口縁部はやや受口状を呈し、端部は上方もしくは内側に内傾する。これらの遺物は8世紀から10世紀までの時期幅がある。183～204・206～242は10号溝（S D10）出土の遺物である。183～204・206～210は須恵器である。183～186は杯蓋である。扁平な天井部に、口縁端部は短く下方に屈曲し、垂下させる。天井部には回転ヘラケズリ調整が施され、183・185には擬宝珠状のつまみを有する。183の内面には「-」と線刻される。187は短頸甕の蓋で、平坦な天井部から、口縁部へ屈曲して垂下する。口縁端部はわずかに内傾ぎみとなる。天井部には擬宝珠状のつまみが付く。188～195は杯Aである。188～192は平坦な底部から、屈曲してやや外反気味に立ち上がる体部を有する。口縁端部はややつまみ上げ気味となる。底部は回転ヘラ切りのちナデ調整が施される。193は焼成が十分でなく、摩滅が著しい個体である。194・195は平坦な底部から、屈曲してやや外反気味に立ち上がる。口縁端部はややつまみ上げ気味となる。底部外面は194に「\*」、195に「-」とヘラ状工具で線刻されている。196～203は杯Bである。196はやや深みのある杯部を有するタイプで、平坦な底部から屈曲して、体部にかけて外傾しながら立ち上がる。高台の見込みには欠損しているものの、ヘラ状工具で「+」とみられる線刻と、「天平」と墨書きされている。この杯Bの時期が8世紀第3四半期頃のものであるので、年号と概ね一致する。土器に年号が記されている例は少なく、類例としては石川県金沢市畠田・寺中遺跡で須恵器の杯の底部外面に墨書きされた「天平二年」がある<sup>注4</sup>。この、畠田・寺中遺跡からは他に「津司」「津」などの港を管理する役所に関連する墨書き土器が出土している。197・198は平坦な底部に内端で接地する高台を貼り付ける。体部は外傾し、口縁部はわずかに外反気味で、端部を丸くおさめる。197の高台の見込みには、「+」と線刻されており、198では墨痕が確認されているため、硯に転用されたと考えられる。199～202の高台は水平もしくは内端で接地する。203は器高が低く、高台が「ハ」字状を呈するタイプである。204は横瓶とみられる個体で、胴部から口縁部へは「く」

字状に屈曲し、外反しながら立ち上がる。端部はやや面取る。外面はタタキ調整で一部にカキメ調整が残る。206は底部から胴部の破片で、外面タタキ調整、ナデ調整が施される。207は長頸瓶の頸部で、中位に沈線が一条巡る。208は瓶類で、口縁端部をやや面取る。209は短頸壺で、肩部には自然釉が厚くかかる。210は鉢で、直線的に外傾する体部を有する。端部は水平方向につまみ出し、三角状を呈する。なお、183・186・196については胎土分析による产地推定を実施しており、いずれも安居・岩木窯群、松永窯群、射水川左岸窯群、東端窯群に推定されている。211～219・221・223～240は土師器で、220・222は黒色土器である。211～219は楕Aで、213～217は回転糸切り痕がみられる底部から、体部が直線的に立ち上がる。211と212の底部には墨書きされているが、いずれも識別は困難である。218・219は口縁部がやや内湾気味に立ち上がる。219の口縁部には煤が付着する。216・217は皿Aで、回転糸切り痕がみられる底部から、体部が直線的に大きく広がる。216の体部外面と217の体部から底部にかけて墨書きされているが、いずれも識別は困難である。220は内黒の黒色土器で、回転糸切り痕がみられる底部を有し、口縁端部はややつまみ上げる。内面は丁寧なミガキ調整が施される。221は小型の鉢とみられる個体で、平坦な底部から内湾しながら立ち上がる体部を有する。口縁部は内傾し、端部を小さくつまみ上げる。222は黒色土器の鉢で、糸切りの残る平底から屈曲し、わずかに内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁部はやや外反し、端部を丁寧に面取る。口径27.2cmである。内面ミガキ調整で、体部下位ではケズリ調整である。また、外面は赤彩が施される。223～237は甕である。223は小型の甕で、肩の張らない胴部から、口縁部はやや外反しながら立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。224は肩の張らない胴部から、「く」字状に緩く屈曲する。口縁部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。内面ハケメ調整、外面カキメ調整で、部分的に縱方向にケズリ調整が施される。225・226は胴部から口縁部へは「く」字状に緩く屈曲し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。口縁端部はわずかに上方へ引きだす。227～229は肩の張らない胴部から、「く」字状に屈曲して口縁部へづく。口縁部はやや外傾し、端部は方形に近い形を呈する。230は大型の甕で、口縁部は外傾し、端部をわずかに上方へつまみ上げる。口径は29.0cmである。231は口縁部が外傾し、端部を面取る。内面ハケメ調整のちカキメ調整、外面カキメ調整が施される。232・233は胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲し、口縁端部を丸くおさめる。胴部外面カキメ調整で、胴部中位から下位はケズリ調整が施される。234は直線的な胴部から「く」字状に屈曲し、口縁部につづく。口縁部は外傾し、端部を方形に仕上げる。235は丸い底部から長い胴部を有する。口縁部はやや外反気味で、端部を面取る。内面ハケメ調整、外面ハケメ調整のち胴部上位ではカキメ調整、中位以下ではケズリ調整が施される。236は口縁端部が方形を呈する。外面ハケメ調整のちカキメ調整が施される。237は口径が31.3cmの大型品である。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を丸くおさめる。238～240は壠で、口縁端部では方形を呈するか、わずかに上方へつまみ上げる。胴部内外面カキメ調整が施されるものが多い。239は半球形に近い胴部を有する。241・242はフイゴの羽口である。243は著しく被熱しているため先端部に近いと考えられる。SD10の出土遺物は、6世紀から10世紀の時期幅があるが、図示したものの主体は8世紀から9世紀である。

243～334・336～405は包含層出土のものである。243～258は須恵器の杯蓋である。243はかえりを有するタイプで、口径は18.6cmである。244～254は扁平な天井部を有し、口縁端部を折り曲げ垂下させる。断面は方形や三角形などを呈する。天井部は回転ヘラケズリ調整が施され、244～246は擬宝珠状のつまみが付く。また、247・250にもつまみが付いていた痕跡が確認される。255は天井部が高い笠形を呈するタイプで、口縁端部は短く屈曲し、垂下させる。256は扁平な天井部に、口縁端部

は水平となる。天井部には「+」と墨書きされている。257は扁平な天井部に擬宝珠状のつまみが付く。258はつまみの部分の破片である。259~289は須恵器の杯Aである。259~260はやや先尖気味な底部から緩やかに屈曲し、直線的な体部へとつづく。口縁端部は丸くおさめる。261~269は平坦な底部から緩やかに屈曲し、直線的に立ち上がる体部へとつづく。口縁部は外反気味で、端部はわずかにつまみ出すか、丸くおさめる。270~277は底部から体部へは明瞭に屈曲し、直線的な体部へとつづく。口縁端部は丸くおさめる。278~280は底部の破片で、底部外面に回転ヘラ切り痕がみられる。281は回転糸切りによる平底から、わずかに内湾しながら立ち上がる体部を有する。口縁端部は丸くおさめる。282は深みのある体部を有し、口縁端部はわずかにつまみ上げる。283~289は墨書きか墨痕、漆痕?が確認できる個体で、全体が把握できるのは283のみで、それ以外は部分的にしか残存していない。286以外は、識別は困難である。286は漆痕が確認されており「+」か。290~308は杯Bである。290~301は平坦な底部から緩やかに屈曲し、体部は直線的もしくはわずかに内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反気味のものが多い。高台の多くは四角形を呈し、接地面が内端もしくは水平である。300の体部外面には2条の沈線が巡る。302・303は底部の破片で、高台は水平に接地する。304はヘラ状工具による「-」字状とみられる線刻が施され、更に墨書きされているが、識別は困難である。305は平坦な底部から、緩やかに屈曲し、内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁部は外反気味で、端部を丸くおさめる。高台見込みには「-」と線刻が施され、更に「||」と墨書きされている。306は底部の破片で、高台見込みには「丰」とみられる線刻が施されている。307は高台見込みに「-」と線刻されている。308は高台見込みに線刻の一部が確認できる。309~313・315~327は瓶類である。309・311は長頸瓶で、309は口縁端部を丸くおさめる。311は端部を水平気味に面取る。310は端部を水平に引き出し、わずかに上下に肥厚する。312は横瓶で口縁端部を内側へわずかにつまみ出す。313は広口壺で、外反気味の頸部に口縁端部はやや肥厚し、上方にわずかにつまみ上げる。外面には一条の沈線が巡る。315は有高台の長頸瓶で、肩は稜を持って屈曲する。316・317・319は長頸瓶の胴部から頸部の破片である。319は一条の沈線が巡る。318は双耳瓶で胴部外面に4条、320は双耳瓶とみられる胴部で、一条の突帯が巡る。321は双耳瓶の耳部の破片で、胴部には一条の沈線が巡る。322は長頸瓶で「ハ」字状に大きく開く高台の破片である。323は瓶類の底部から胴部の破片で、高台は欠損している。324・325は長頸瓶で、324は底部から体部の破片で、体部外面にはタタキ調整が施される。高台部分は欠損している。325は底部から体部の破片で、高台の断面は四角形を呈する。326・327は双耳瓶で、326は無高台で、外面はケズリ調整が施される。327は底部から胴部にかけての破片で、耳部の一部が残存している。328は器種不明の個体で、直線的にのびる胴部から、やや内傾気味に立ち上がる口縁部を有する。端部は肥厚し、丸くおさめる。329は平坦な底部から緩やかに立ち上がり、外傾する胴部へとつづく。肩部は稜を持って張り、天井部には一条の突帯が巡る。肩部の稜線と突帯との間には円形の孔が一箇所穿たれている。平瓶の一種とみられる。330は底部の破片で、外面に煤が付着している。331~334は横瓶である。331は横長の胴部から、「く」字状に屈曲しやや外傾気味の口縁部へとつづく。口縁端部はわずかに外方へつまみ出し、水平におさめている。外面タタキ調整の後、カキメ調整が施される。332は胴部の破片で、体部外面にはカキメ調整が施される。333・334は胴部側面の円盤状部分である。314・336~350は壺である。314は壺とみられる口縁部の破片である。336は胴部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲し、端部はやや三角状を呈する。337~339は口縁部の破片で、337の外面には波状文が巡る。340・341・346・347は肩部、342~345は胴部破片で、内面当て具痕調整、外面タタキ調整が施される。348は丸い底部に、やや肩部の張る胴部を

有する。349・350は頭部から口縁部の破片で、349の外面には波状文が巡る。351～398は土師器である。351～355は椀Aで、底部が回転糸切りによる切り離しである。351はやや深みのある直線的に延びる体部に、口縁端部を丸くおさめる。口径15.6cmである。356は椀Bで、高台見込み中央部は盛り上がる。357～362は内黒の黒色土器の椀である。357～360は椀Aで底部に糸切り痕がみられる。内面ミガキ調整で、外面は357のみケズリ調整が施される。361は法量の大きい椀Bで、高台は三角形を呈する。体部は直線的に外傾する。口径18.8cmである。362は高台見込みに回転糸切りがみられる椀Bで、高台は低く断面は四角形を呈する。363は高杯の脚で、柱状の脚部に据部は「ハ」字状に短く聞く。364～383は壺である。366・367は口径がおよそ12cm程度の小型の壺である。口縁端部が方形を呈するタイプ（366）、上方へつまみ上げるタイプ（367）がある。364・365・368～382は口径13～22cmの中型の壺である。口縁端部を上方へつまみ上げるタイプ（364・367・372・382）、上方へ短く屈曲した端部が直立するタイプ（365・381）、方形を呈するタイプ（369・376・377）、肥厚した端部をわずかに上方へつまみあげるタイプ（368・371・373・374・380）、端部を丸くおさめるタイプ（370・378・379）、端部を上方へつまみ出すタイプ（375）がある。383は底部で、中央部を穿孔している。内面ハケメ調整、外面ハケメ調整のちケズリ調整である。384～387は壠で、半球状の胴部を有する。口縁端部は、端部を短く折り曲げ上方につまみ上げるタイプ（384）、方形でわずかにつまみ上げるタイプ（385）、方形を呈するタイプ（386・387）がある。388は瓶の破片で、外傾する体部を有する。外面ハケメ調整で、内面ハケメ調整のちケズリ調整が施される。389～398は壠や瓶などの把手部分の破片である。断面は円形を呈する個体が多い。339は製塙土器で、直線的に外傾する体部に、口縁部をわずかに外反気味である。胎土には骨針が多く含まれる。400はフイゴ羽口で先端付近は被熱している。401～404は土錘で、樽形を呈している。405は被熱痕のある土塊状のもので種類は不明である。

#### C 中世（第99図、図版90）

406～410は包含層出土のもので、中世土師器の皿である。407は柱状の高台から、浅い体部を有する。口縁端部は丸くおさめる。底部は回転糸切りによる切り離しである。408～411は柱状気味の高台で、底部は回転糸切りによる切り離しである。いずれも、12世紀前半～12世紀中頃である。

#### (2) 石製品（第100図、図版90・91）

1は9号溝出土の砥石で、2・3は10号溝出土の砥石で、それぞれ4面が使われている。2の下半は使用により厚みを減し、細かい線状痕がみられる。中～仕上げ砥と思われる。石材は全て凝灰岩である。4・5は包含層出土の砥石で、方形を呈する。4は中央部が厚く残り、両端の厚みが減じている。石材は4で凝灰岩5は（凝灰岩質砂岩）両端が欠損しており、4面を砥面として使用し、やや細かい線状痕がみられる。6は磨製石斧で、表面は風化によって剥離している。石材は岩片混じりの凝灰岩である。7は緑色凝灰岩の石核で、裏面に自然面が残る。重量は501.77gを重る。この他に、剥片がB地区のS I 1から14点（重量25.92g）、包含層などから10点（重量42.34g）出土している。

（島田亮仁）

## 5 総括

下川原遺跡では弥生時代から古代にかけての造構・遺物が主に確認された。ここでは各時期の内容について周辺遺跡の様相（第73図）も含め、簡単にまとめておきたい。

### (1) 弥生時代

#### A 中期

土坑と溝を確認した。遺構・遺物ともに少なく、調査区が狭小であることも相俟って、遺跡の様相は不明瞭である。遺跡の所在する小矢部市域において、中期に該当する遺跡は少ない。埴生南遺跡では土坑・溝が検出され、土器・石器の他に銅鐸形土製品も出土している<sup>注5</sup>。建物は確認されていないが、玉未製品や石材の出土から玉作りが行われていた可能性が指摘されている。桜町遺跡では土器の出土が認められる。これらは下川原遺跡も含め、小矢部川左岸での活動を示すもので、周辺での調査の進展によっては、より具体的な内容が明らかになることが期待される。

#### B 後期～終末期

堅穴建物 S I 1 を確認した。浅い堅穴部の周りに周溝が巡り、從来の分類<sup>注6</sup>では「狹溝式堅穴建物」に該当する。攪乱により南側半分を失っているが、残存する堅穴部は東壁に対して北壁がやや長く、楕円形に近い平面形を呈すると考えられる。柱穴は長軸方向の中軸線上に 2箇所が確認され、2本柱となる可能性がある。堅穴部中央から有段口縁壺（8）が潰れた状態で出土している。堅穴の埋土は単層で埋没していることから、建物廃絶時に遭棄された可能性が高い。8は頭部が短く、有段となる口縁部は伸長する。下老子笹川遺跡の編年を参考にすれば、弥生時代終末期である下老子Ⅲ式の範疇に収まると考えられる。堅穴部と周溝の間、いわゆる周堤とされる箇所にも遺物の出土が多い。こちらは全形が不明な破片資料がほとんどである。櫛描文と連続刺突文を施した壺（9）、受口状口縁の甕（1）は堅穴部出土の土器よりも古い段階、弥生時代後期後半の下老子Ⅱ式が相当する。このことから堅穴建物は弥生時代終末期に廃絶したものと考えられ、古い段階のものが混ざる周堤帯の出土土器は建物構築時の混入と考えられる。包含層出土の土器についても後期後半から終末期までの時期幅が認められる。明確な遺構は終末期の堅穴建物のみであったが、周辺では後期後半ごろから土地利用が行われていたものと考えられる。

周辺では下川原遺跡の北側に位置する後谷条里遺跡で終末期の河跡が確認されている<sup>注7</sup>。下川原遺跡も含め、砂川北側に広がる段丘上で活動を示している。一方、砂川を挟んで対岸側には後期や終末期の散布地や集落が密に存在する。後期では埴生上野遺跡、終末期では大勢遺跡や谷内Ⅱ遺跡などが知られている。

このように小矢部川左岸の段丘上から丘陵裾部にかけては、後期から終末期に人々の活動が活発に行われ、下川原遺跡もその一翼を担っていたものと考えられる。特に今回の調査では堅穴建物が確認され、段丘の縁辺部に集落を形成していたことが分かり、集落立地の一形態を知ることが出来た。

### (2) 古墳時代

古墳時代の土器はほぼ包含層から出土し、遺構は古墳時代を時期の上限とする溝 S D 1 のみであった。土器は古墳時代全般のものが出土しているが、後期が中心になる。後期の段階では、椀類の食膳具の他に煮炊具も多く出土しており、集落としての利用もあったと思われる。

下川原遺跡の位置する段丘から北西側の丘陵上には後谷古墳群がある。その詳細な時期は明かでないが、下川原遺跡との関連も考えられよう。その他にも周辺では当該期の遺跡が多く知られる。砂川を挟んで対岸の丘陵地には谷内古墳群、閑野古墳群、若宮古墳などが造営され、それらを望む小矢部川左岸段丘上には北反畠遺跡や埴生南遺跡といった集落が形成されている。下川原遺跡も古墳群造営や周辺の開発に関わった集落の一つであったと考えられる。

### (3) 古代

掘立柱建物S B 1が確認された。その東と西側には自然流路があり、南側へ舌状に張り出した段丘先端部に建物が立地している。建物柱穴からの出土遺物は無く、時期は特定出来ない。近接する自然流路からは8~9世紀代まで遺物が出土し、それ以降の遺物は含まないことから、古代の段階で徐々に埋没していったものと考えられる。建物についても同様な時期幅の中で捉えておかざるを得ない。

特筆すべき遺物として「天平」の墨書き土器(196)がある。年号のみであるため、天平年間とそれに統く天平感宝から天平神護までの年号を略した可能性も含まれており、西暦729~767年までの時期幅を持つ。こうした年紀が記された墨書き土器の出土例は多くはない。全国的な墨書き・線刻土器の集成の中でも、年紀と判断できるのは40点に満たない<sup>注8</sup>。

近隣では年紀墨書きとして石川県金沢市畠田・寺中遺跡の「天平二年」がある。同遺跡はその立地や「津司」「津」の墨書き土器などから、港湾施設に関連する遺跡と考えられている。報告の中では、集落遺跡における出土例から年紀を記した墨書き土器は祭祀に関わるもので、畠田・寺中遺跡の例も天平二年の遣渤海使が帰国したことに関係する要応に際した墨書きである可能性が指摘されている<sup>注9</sup>。これを参考にすると、下川原遺跡出土の「天平」も祭祀行為に関係した可能性がある。一方、年紀墨書きでの諸例では年月日まで記される場合が多い<sup>注10</sup>。こうした相違点もあるので、その位置付けについては類例の増加を待って再度検討がなされる余地を残す。

周辺では古代の遺跡が多く分布する。遺跡の北には古代の散布地である後谷条里遺跡が隣接し、段丘上における土地利用の広がりを示している。砂川を挟んだ対岸には大勢町遺跡や八俵遺跡などの古代散布地がある。その他にも北反畠遺跡や埴生南遺跡など多数の遺跡が確認され、丘陵地には谷内窯跡群や松永窯跡群が営まれる。また、古代北陸道の推定路線は下川原遺跡の東側を通過している。古代においては遺跡数の増加と共に、平地や丘陵部へも分布が広がっていく。より活発となった開発行為に下川原遺跡も関わって存続していったものと考えられる。

(青山 見)

### 注

注1 90・97・99・100・150・151の土師器については、古代（8世紀代）まで下る可能性がある。

注2 瓢箪器の年代などについては、伊藤潔氏から多くのご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

注3 文字資料などについては繩糸真澄「2007『下川原遺跡出土文字資料について』『富山考古学研究第10号』」を参考にした。

注4 平川 南 2006 「『富山 畠田西遺跡群出土文字資料と古代鶴浜市』『畠田西遺跡群』」石川県教育委員会・財團法人石川県埋蔵文化財センター

注5 小矢部市教育委員会 1994 「平成5年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報」

小矢部市教育委員会 2005 「平成16年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報」

注6 岡本淳一郎 2006 「第X章考察 2 周溝をもつ建物の分類と系譜」「下老子篠川遺跡発掘調査報告」財團法人富山県文化振興財団

注7 小矢部市教育委員会 2001 「平成12年度小矢部市埋蔵文化財発掘調査概報」

注8 明治大学日本古代学研究所「サブユニット②支配・統治と文字使用 墨書き・刻書き土器データベース」「日本列島の文明化を突き明かす古代学の総合化研究」([http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj\\_bokusho.html](http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/obj_bokusho.html)) を参照した。

注9 前掲注4と同じ。

注10 都城を除き、古代の集落遺跡で年紀墨書き土器の出土事例として、千葉県上谷遺跡・鳴神山遺跡・北海道遺跡・福荷台遺跡が挙げられる。これらの遺跡では月あるいは日までの日付が記されている。年紀部分のみを示すと以下の通りになる。

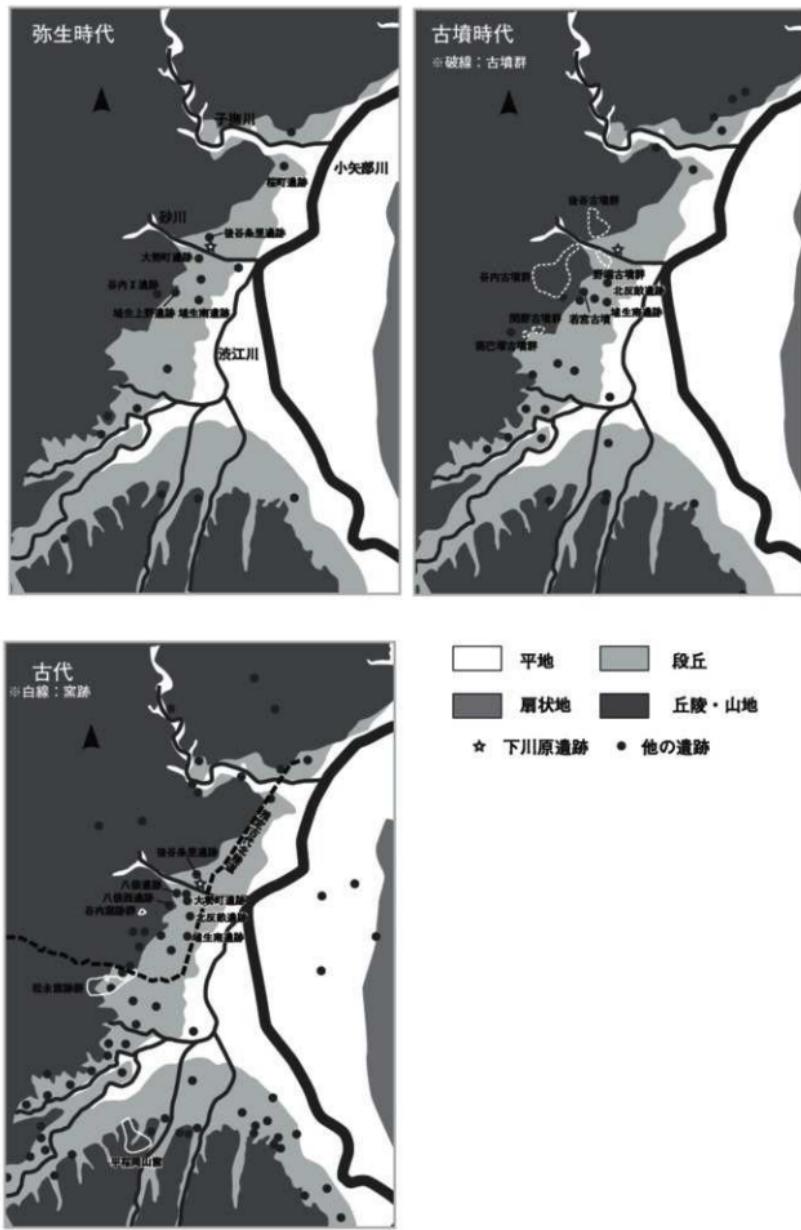
上谷遺跡：「延暦十年十一月七日」「延暦十年十月廿二日」「弘仁十二年二月」「承和二年十八日」、鳴神山遺跡：「弘仁九年廿」、北海道遺跡：「承和五年二月十日」、福荷台遺跡：「貞觀十七年十一月廿四日」

財團法人市原市文化財センター 2003 「市原市福荷台遺跡」

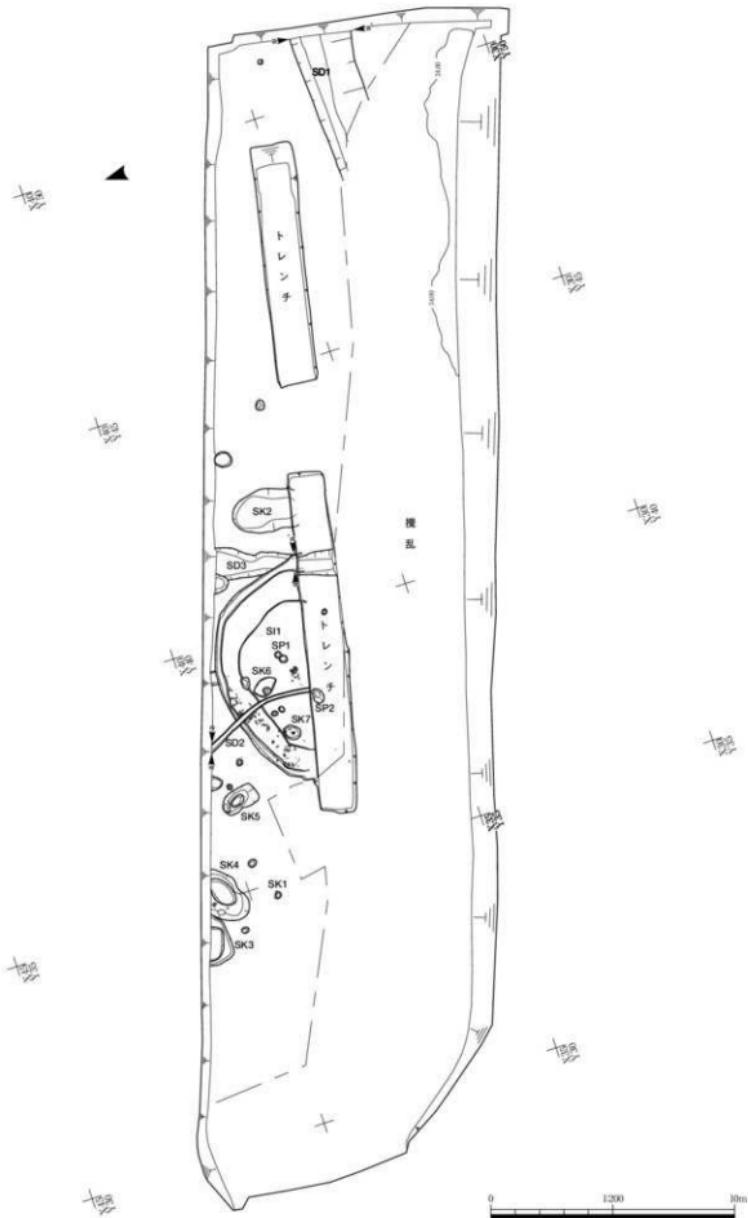
財團法人千葉県文化財センター 1999 「千葉県北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡」

財團法人千葉県文化財センター 1985 「八千代市北海道遺跡・壹田地区埋蔵文化財報告書2」

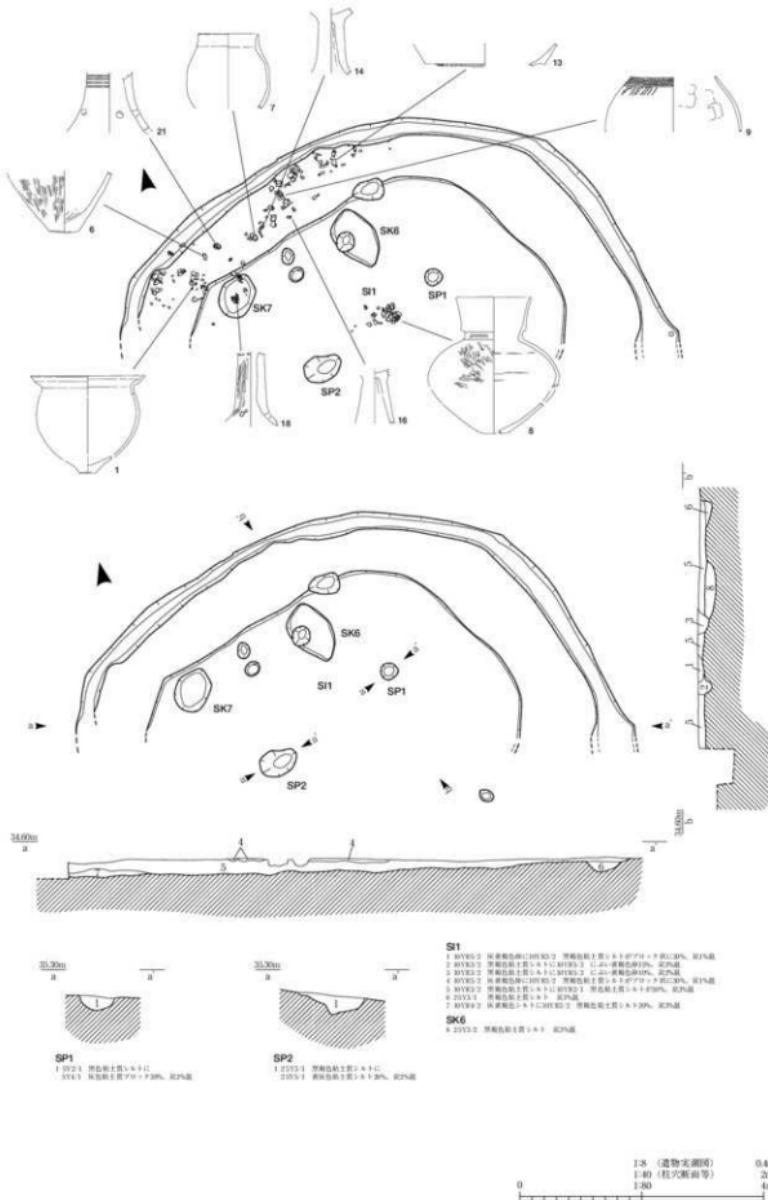
八千代市遺跡調査会 2001-2002~2005 「上谷遺跡（仮称）八千代市カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書2 第1・2・4・5分冊」



第74図 下川原遺跡の周辺遺跡

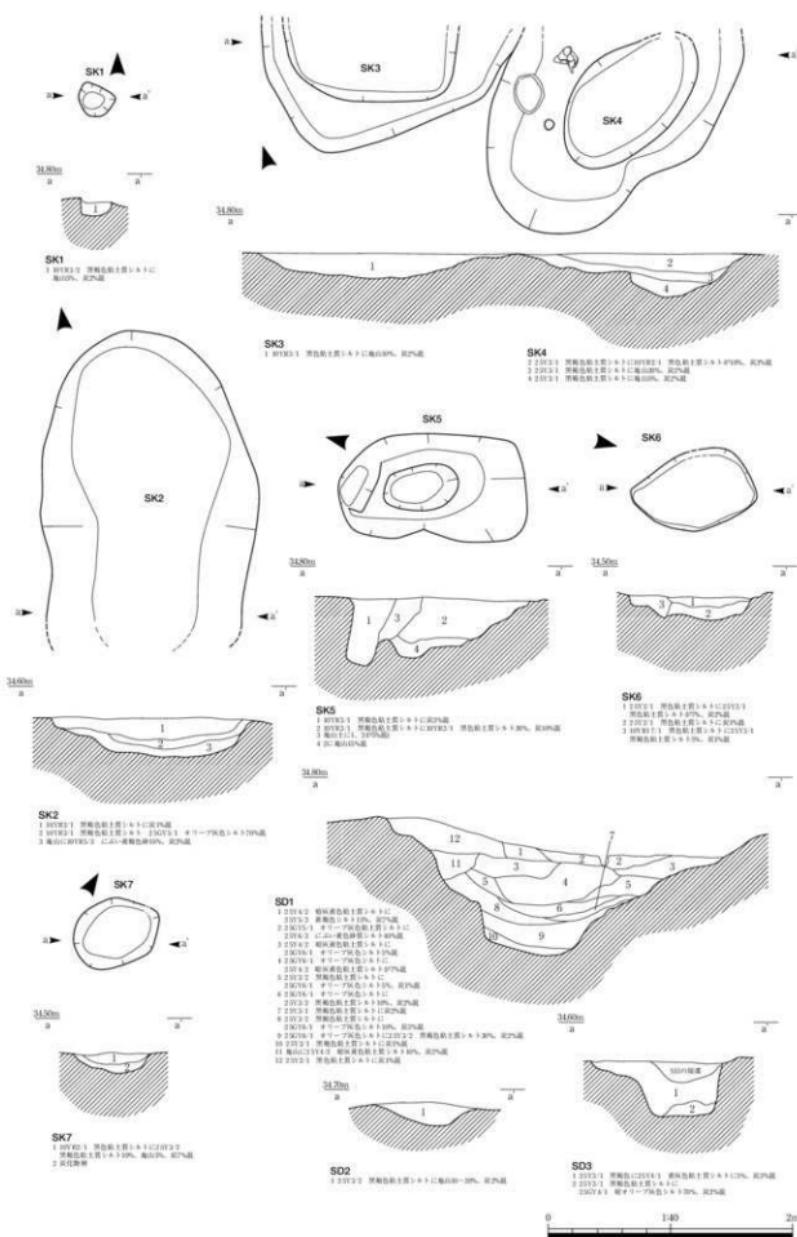


第75図 下川原遺跡B地区 弥生時代・古墳時代遺構全体図



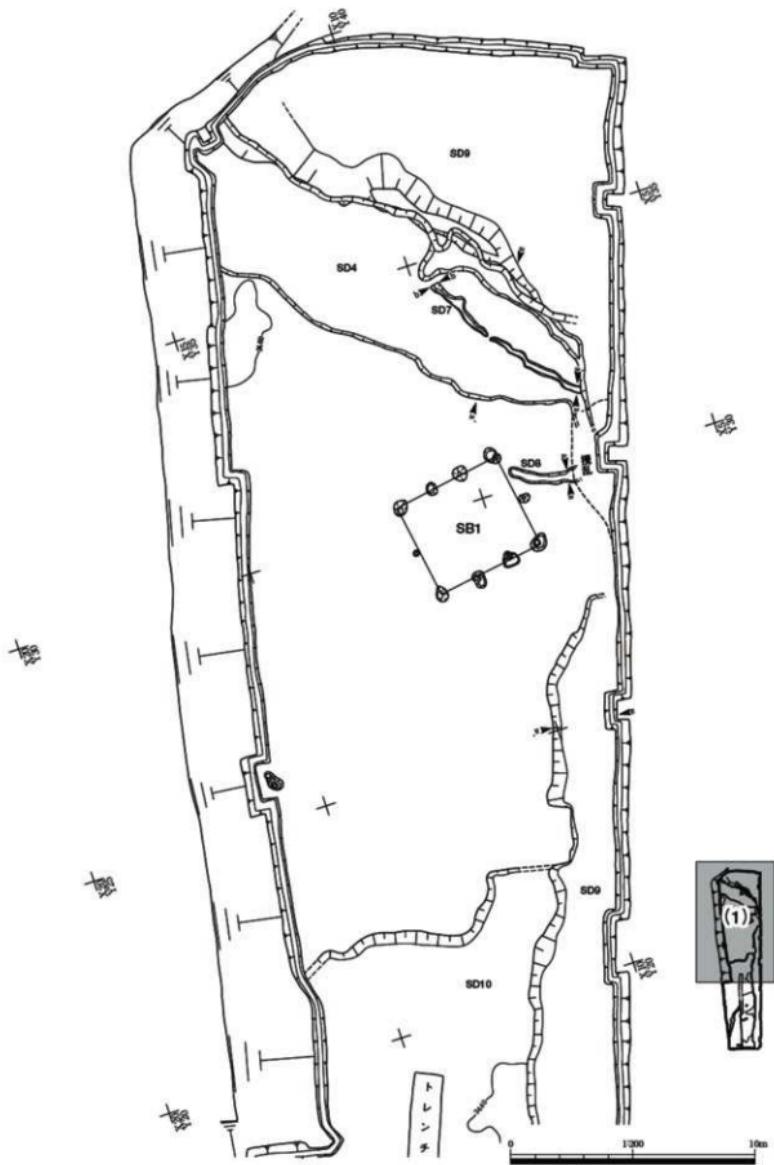
第76図 下川原遺跡B地区 弥生時代遺構実測図

SI 1

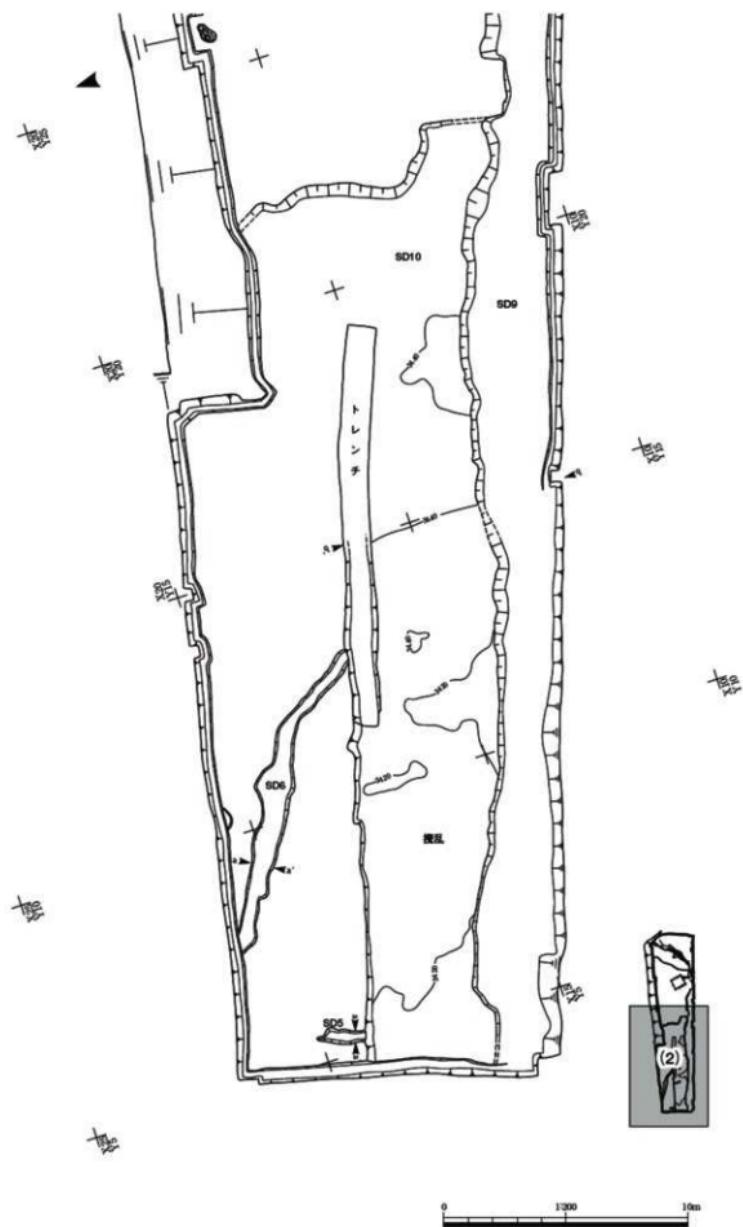


第77図 下川原遺跡B地区 弥生時代・古墳時代遺構実測図

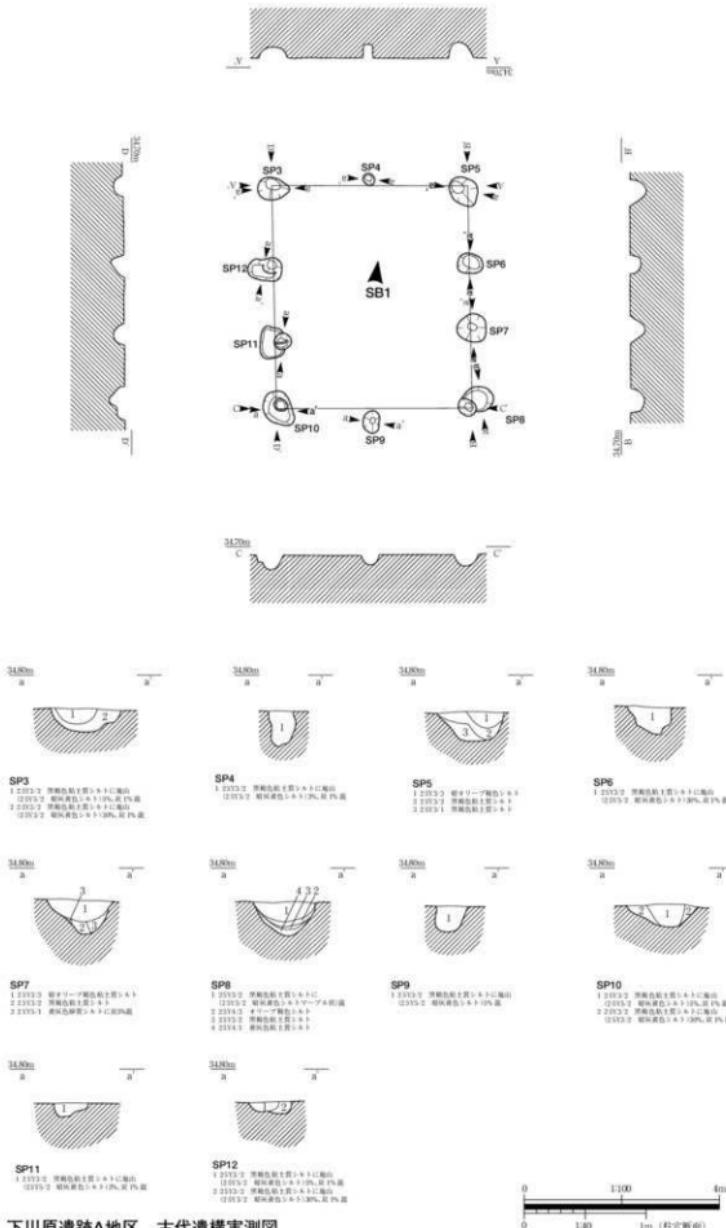
SK 1 ~ SK 7 SD 1 ~ SD 3



第78図 下川原遺跡A地区 古代遺構全体図(1)

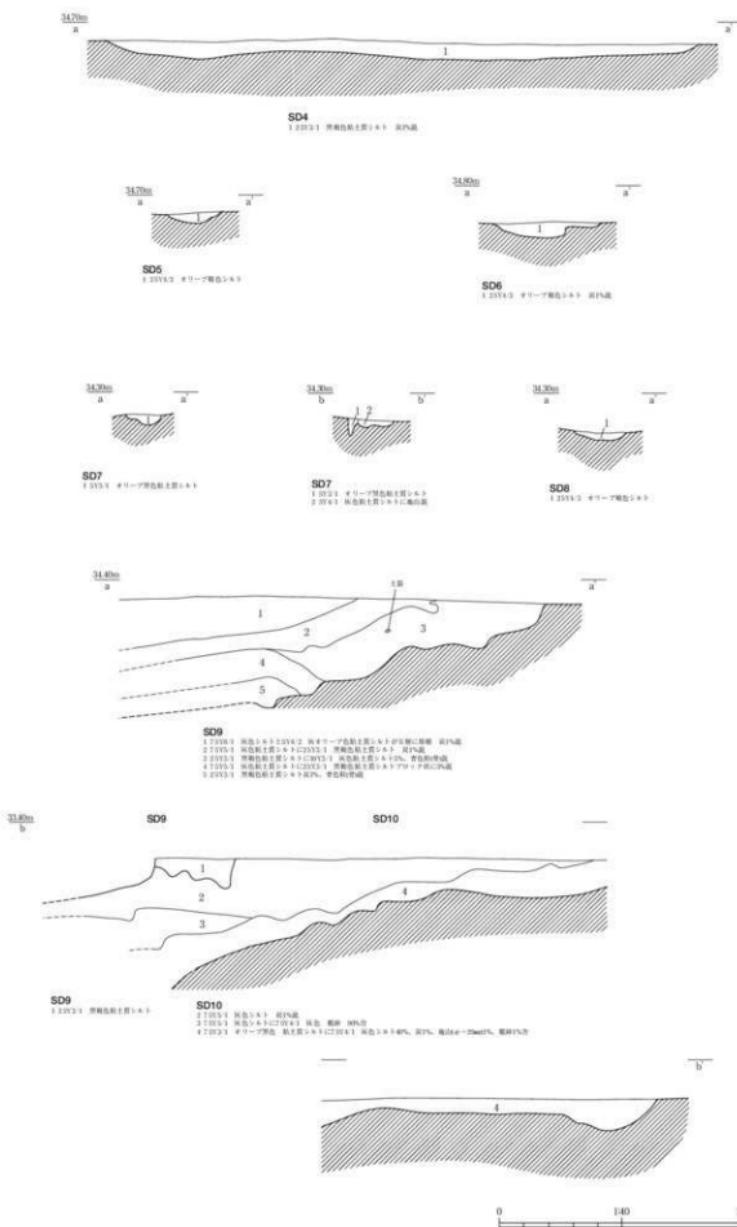


第79図 下川原遺跡A地区 古代遺構全体図(2)

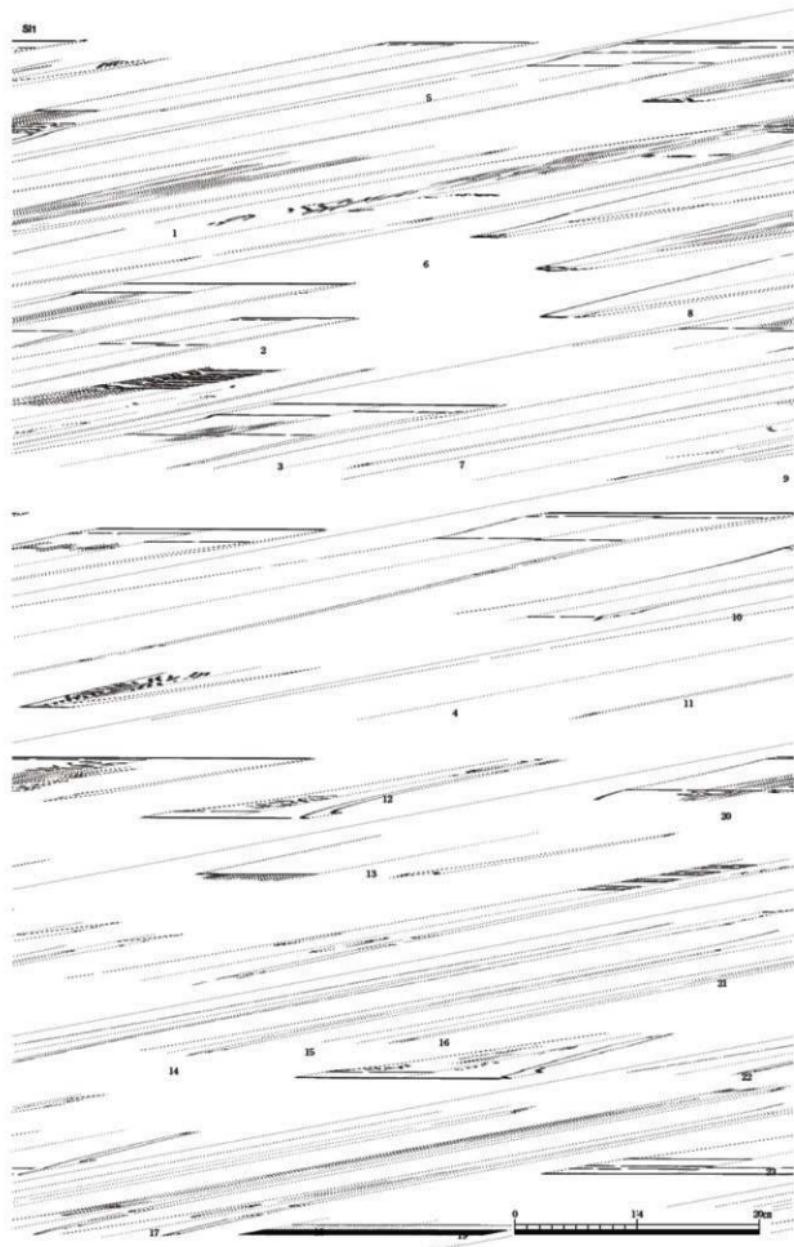


第80図 下川原遺跡A地区 古代構造実測図

SB 1

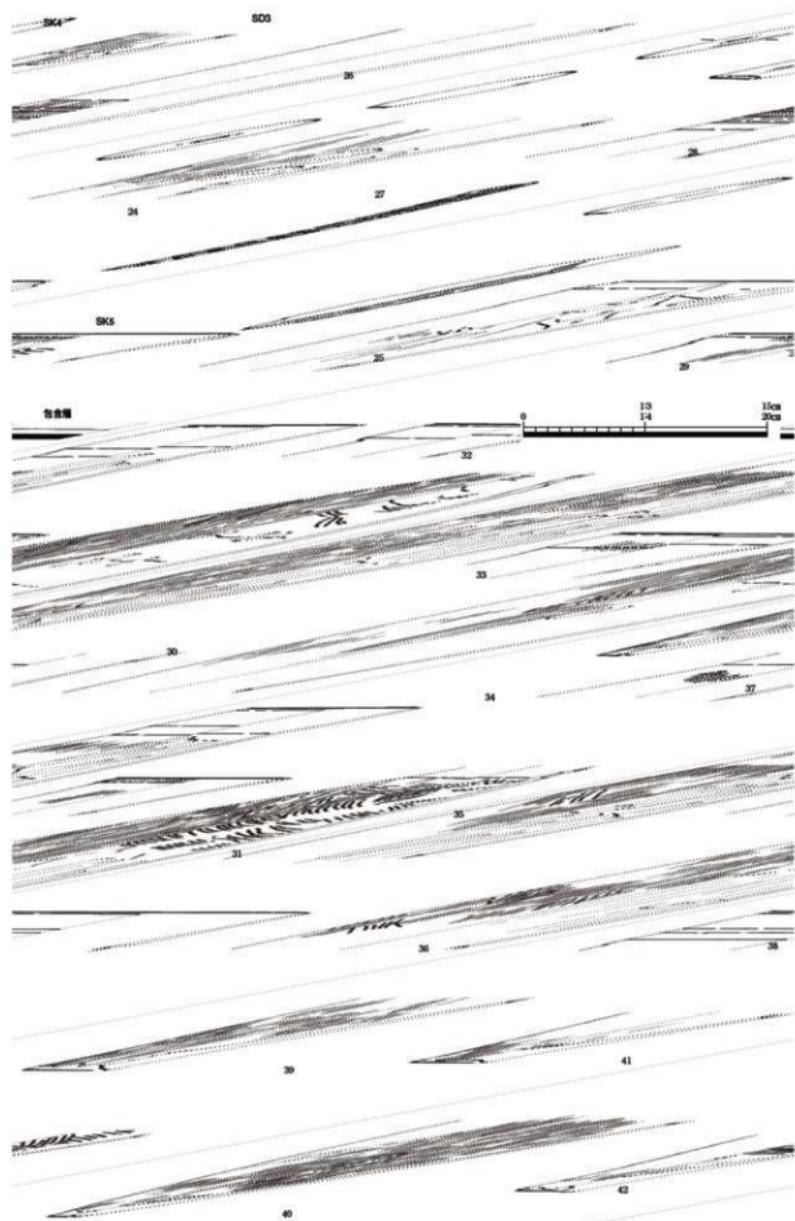


第81図 下川原遺跡A地区 古代遺構実測図  
SD 4 ~ SD10



第82図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

SI 1 (1~23)

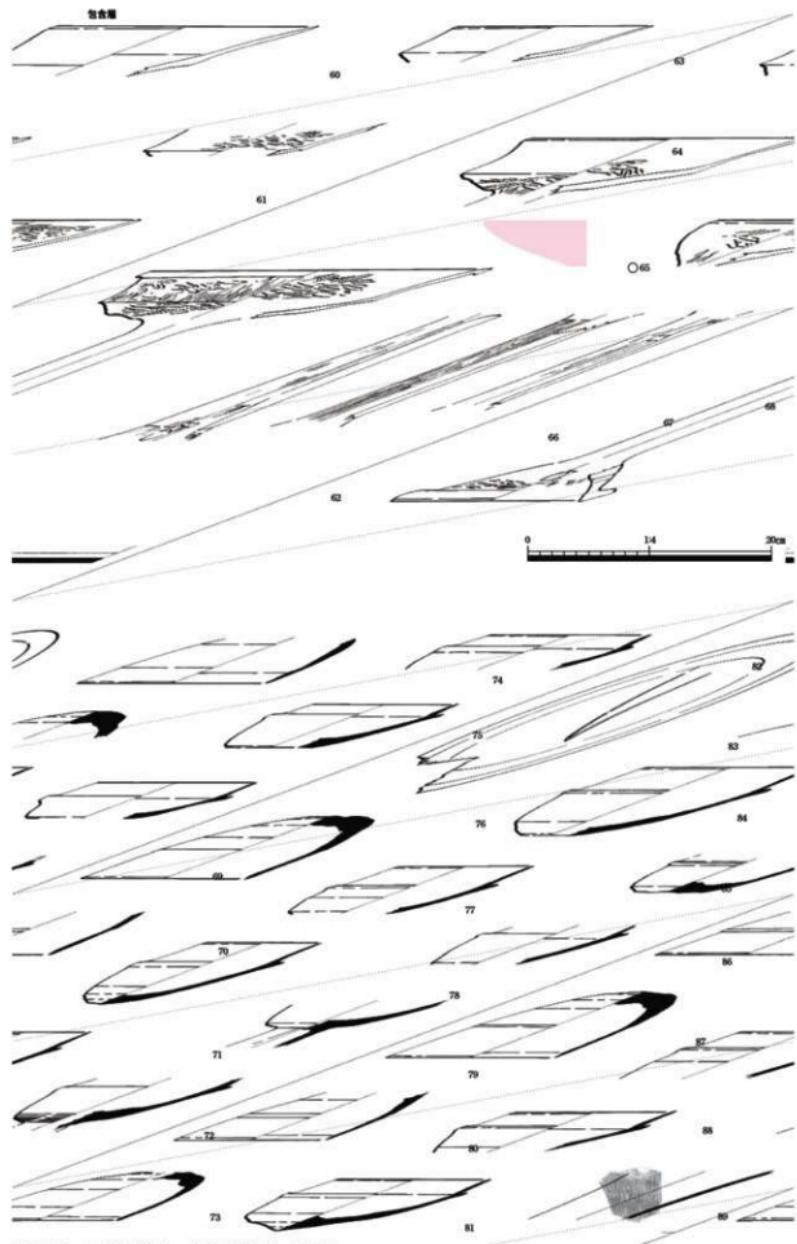


第83図 下川原遺跡 遺物実測図 (24 1/3, 26~42 1/4)  
SK 4 (24) SK 5 (25) SD 3 (26~29) 包含層



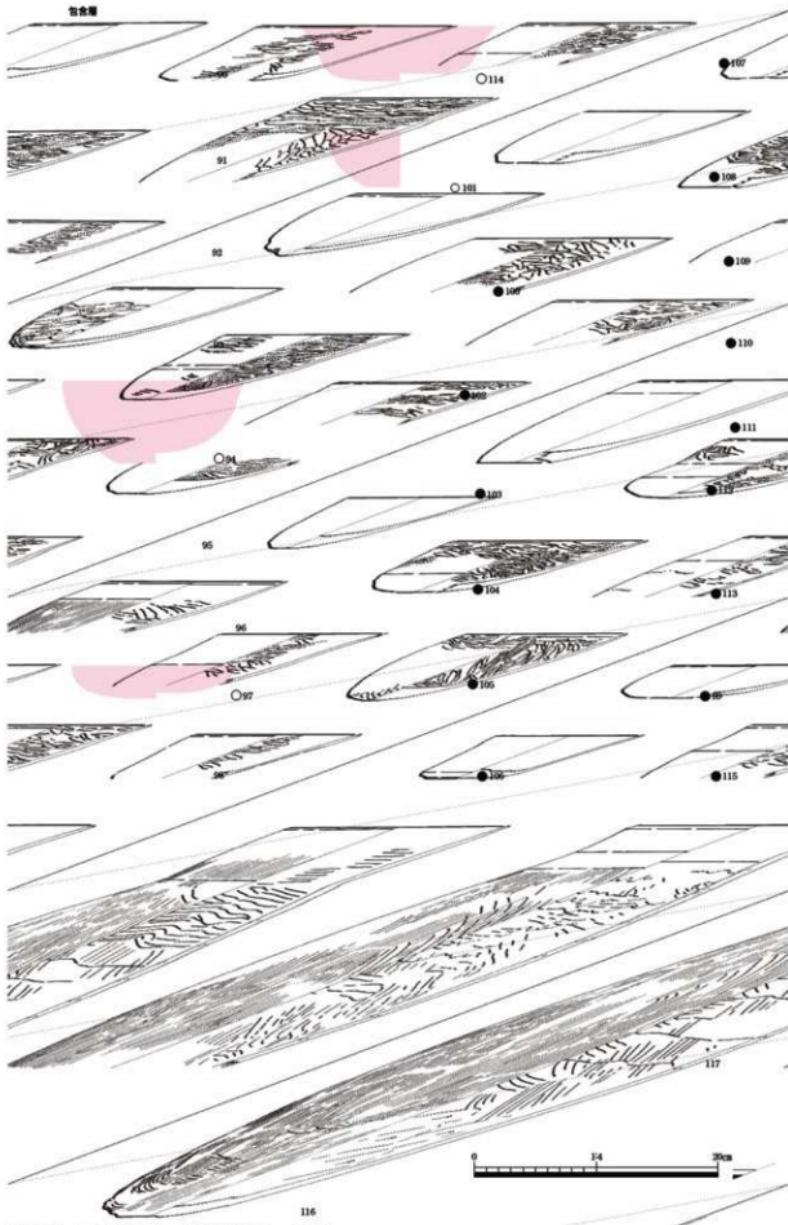
第84図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層



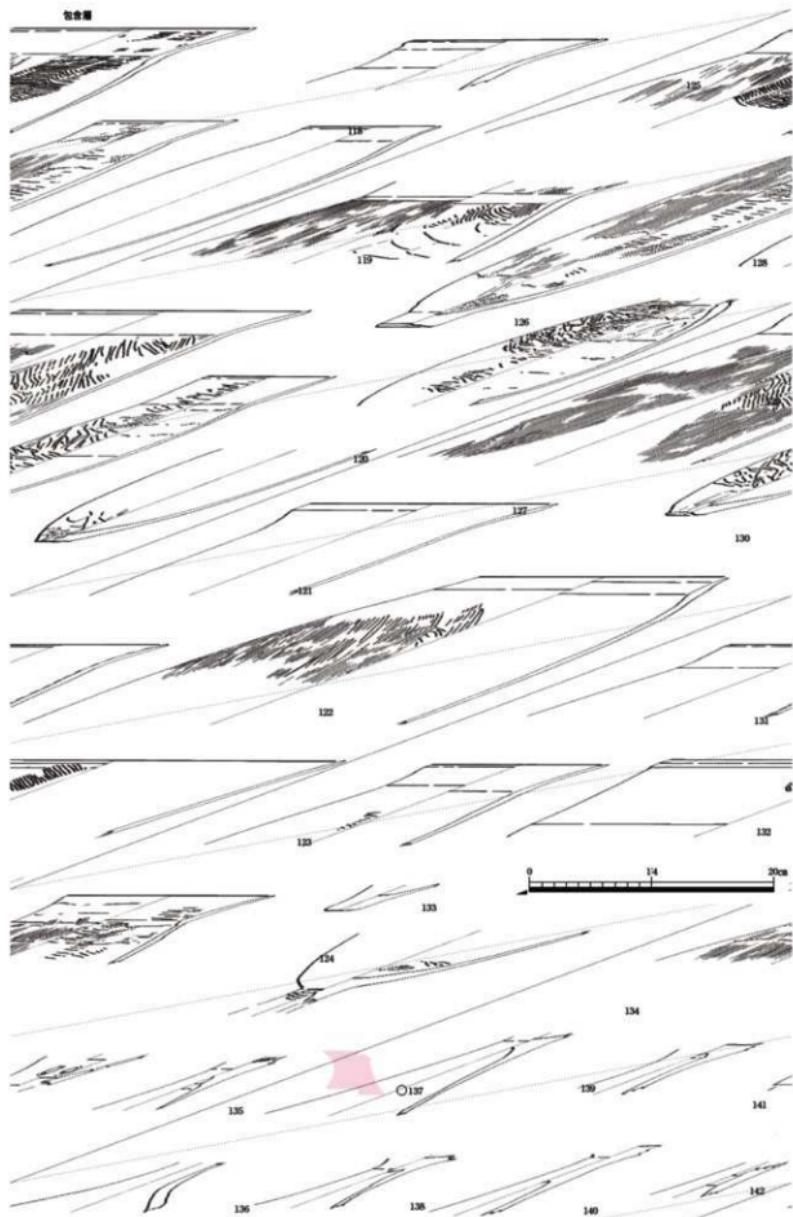
第85図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層

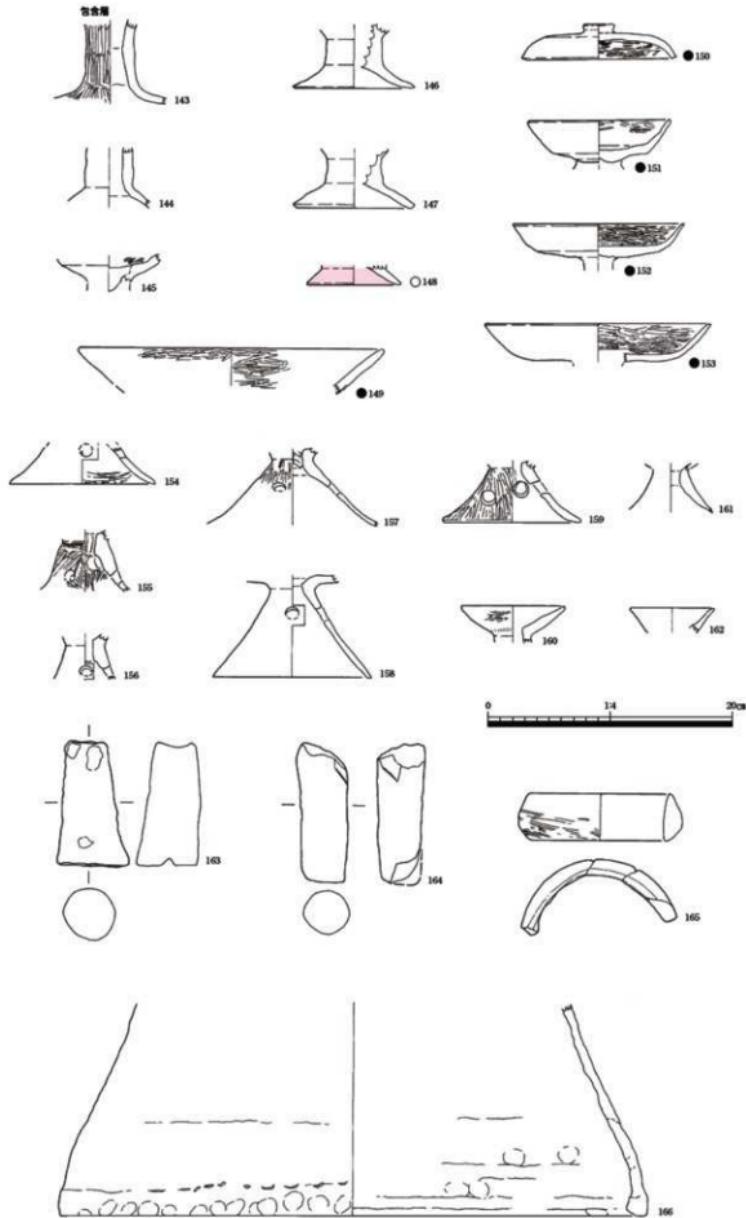


第86図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層

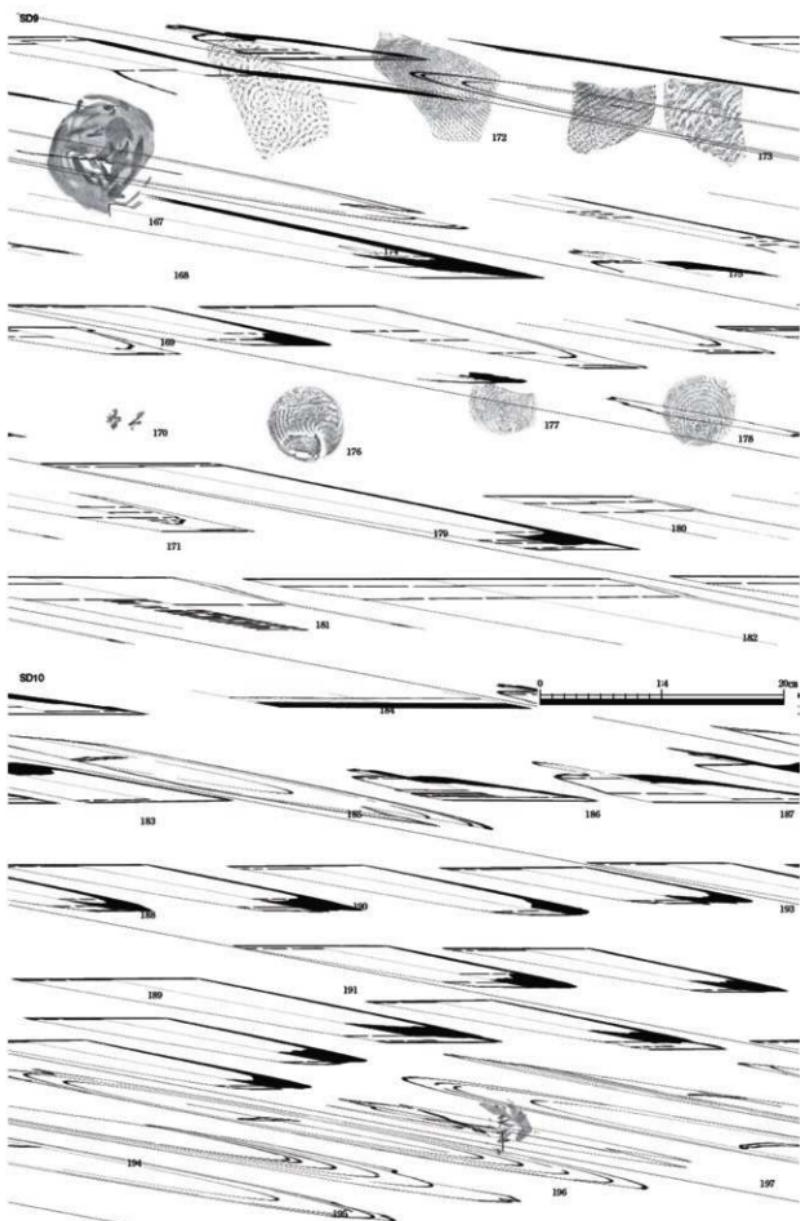


第87図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)  
包含層



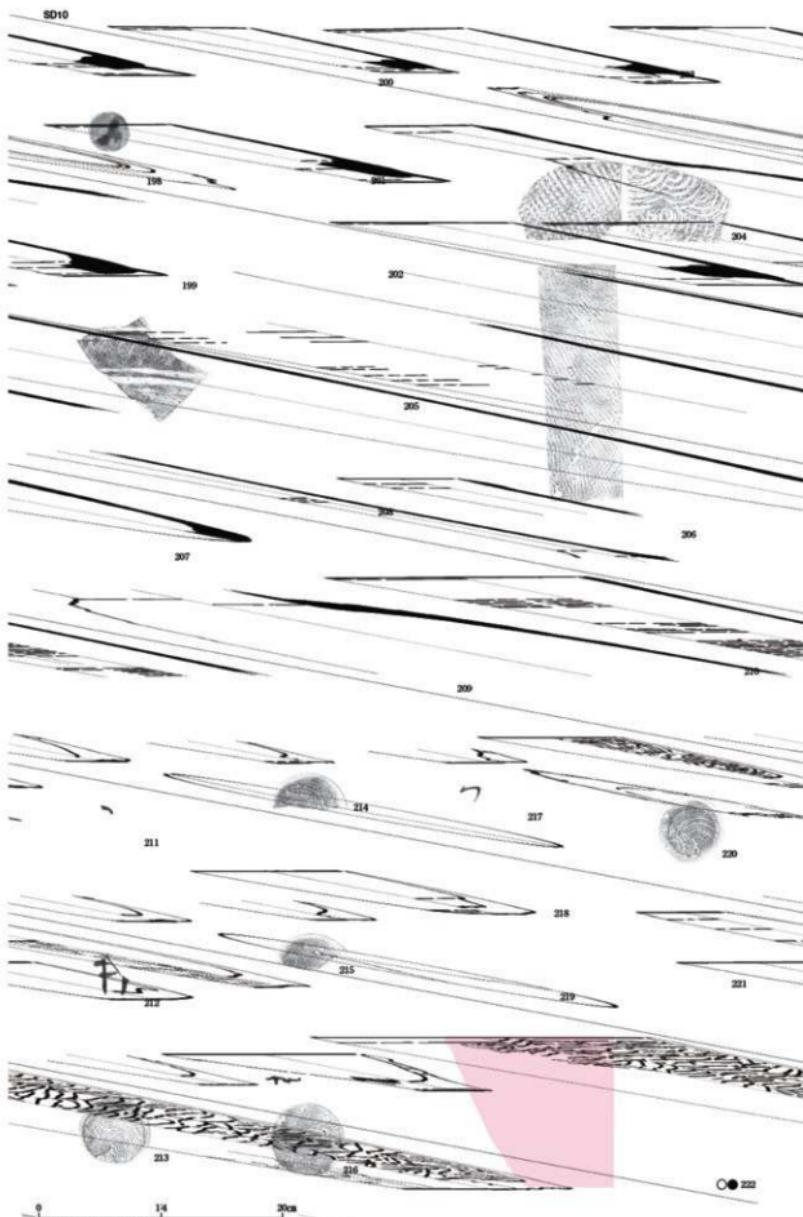
第88図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層



第89図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD 9(167~182) SD10(183~197)



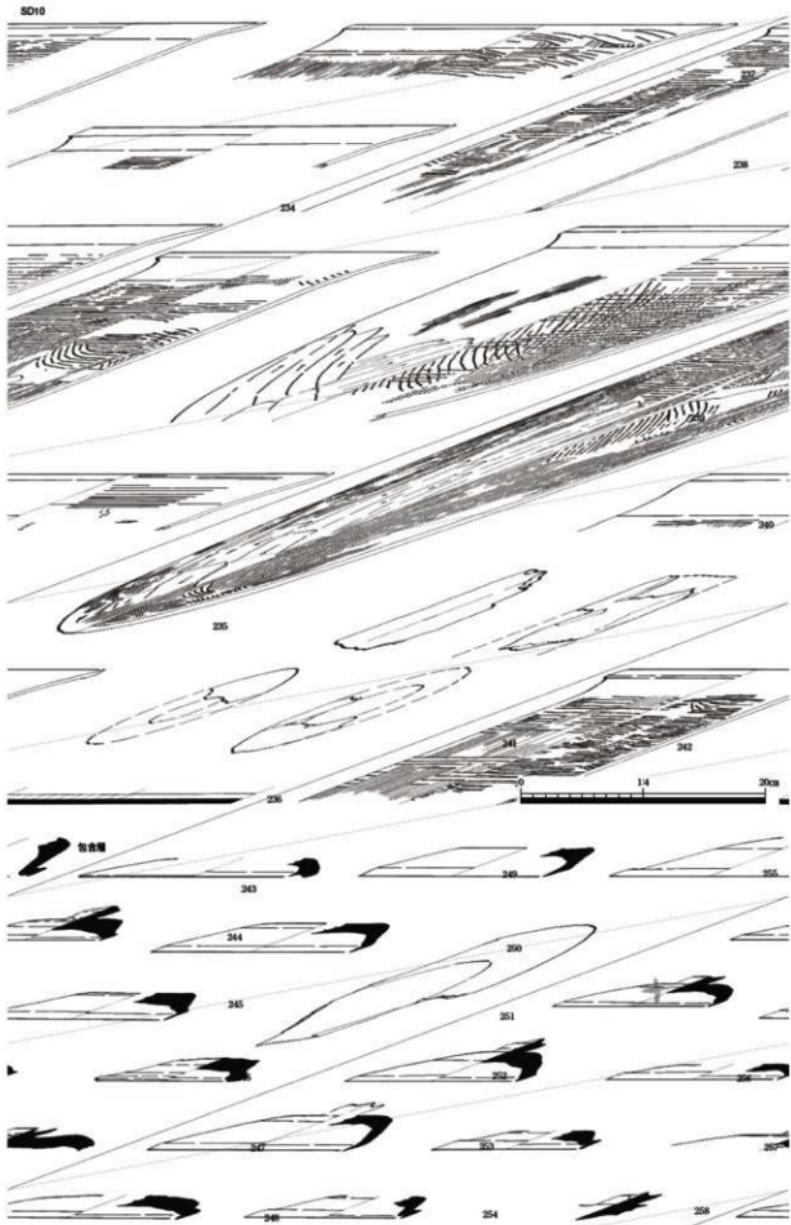
第90図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD10(198~222)



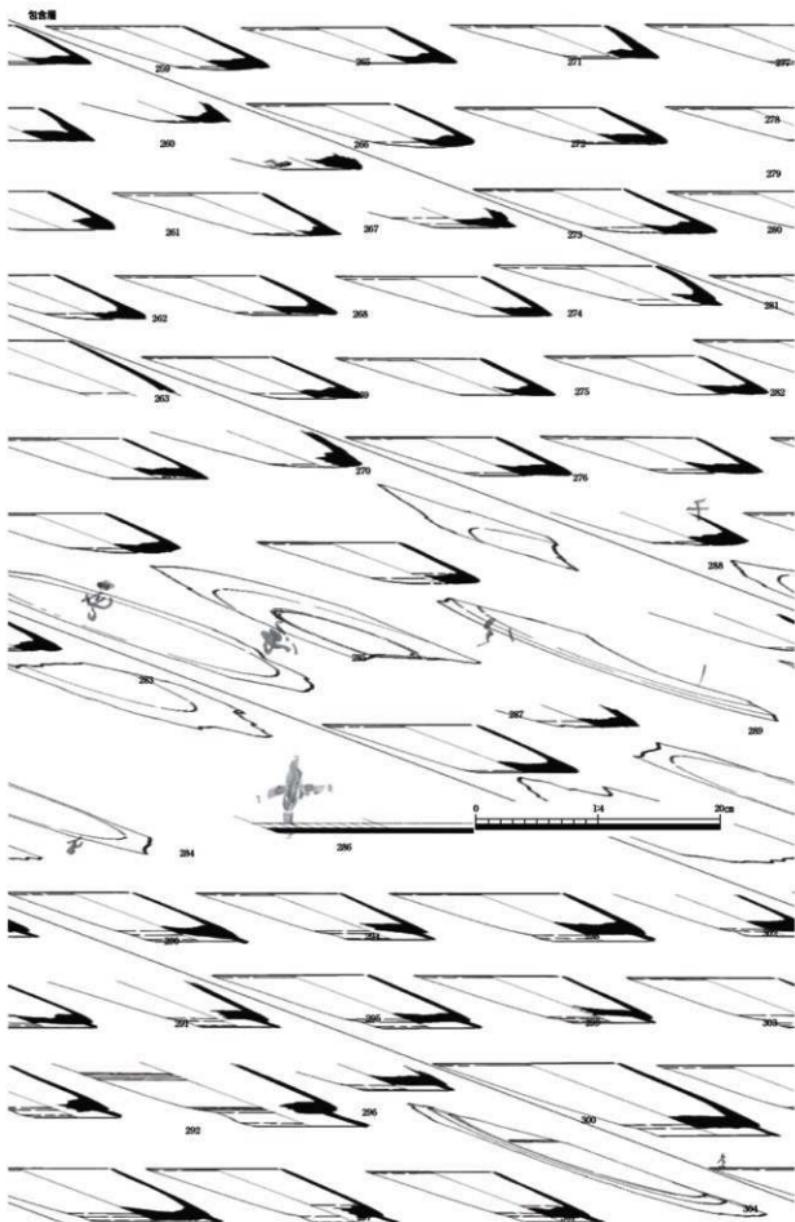
第91図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD10(223~233)



第92図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

SD10(234~242) 包含層



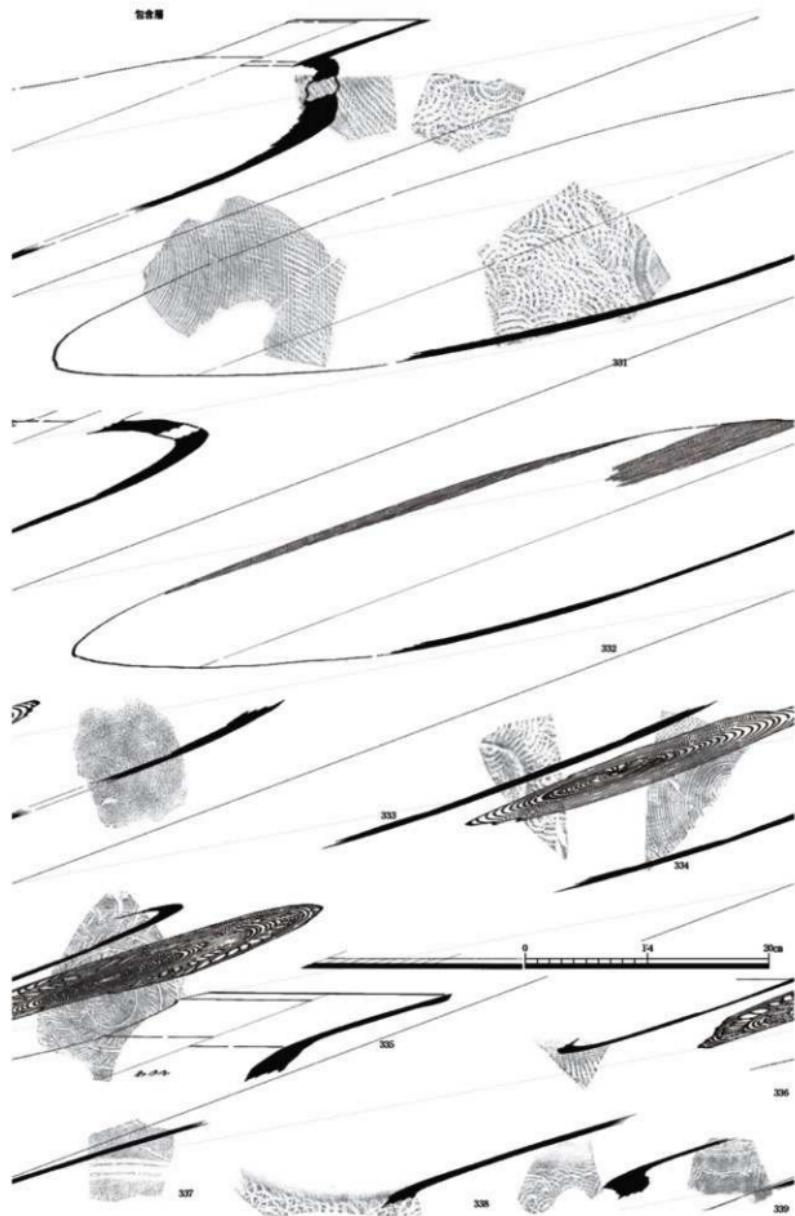
第93図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層

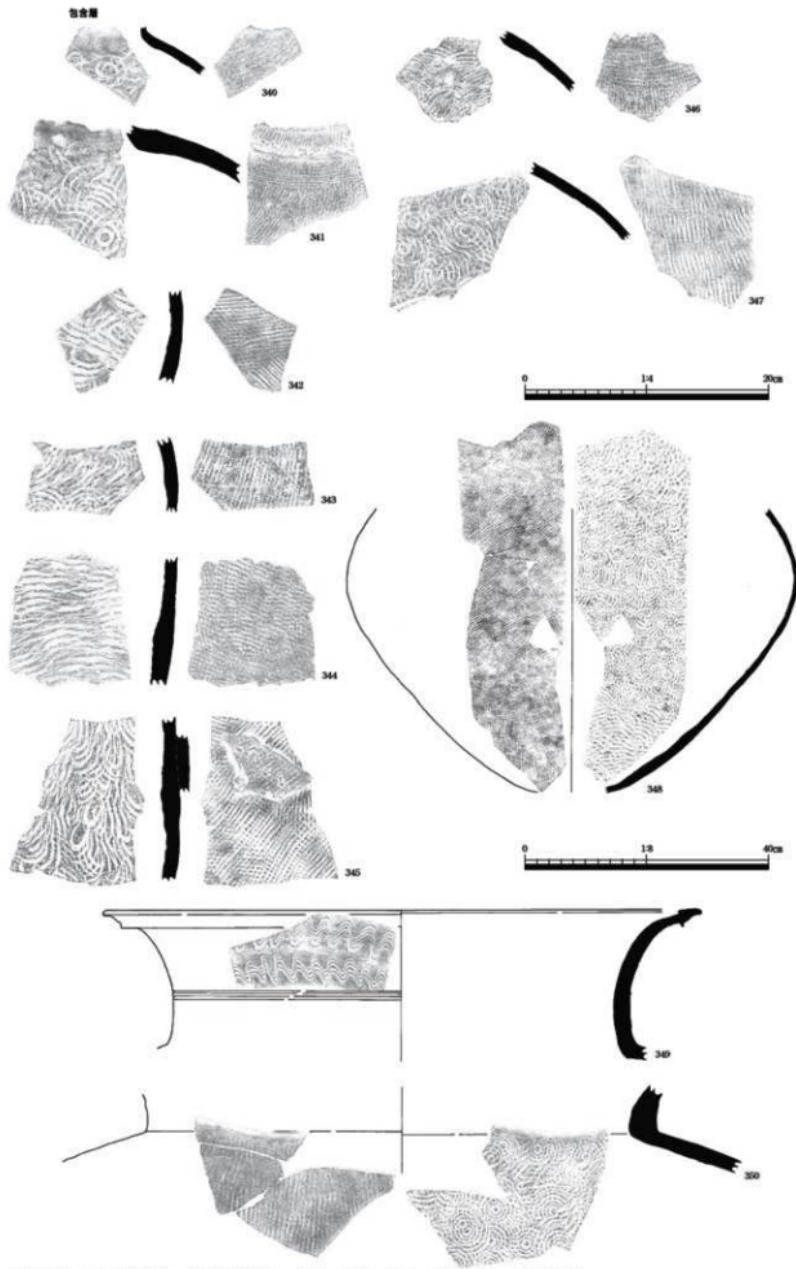


第94図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

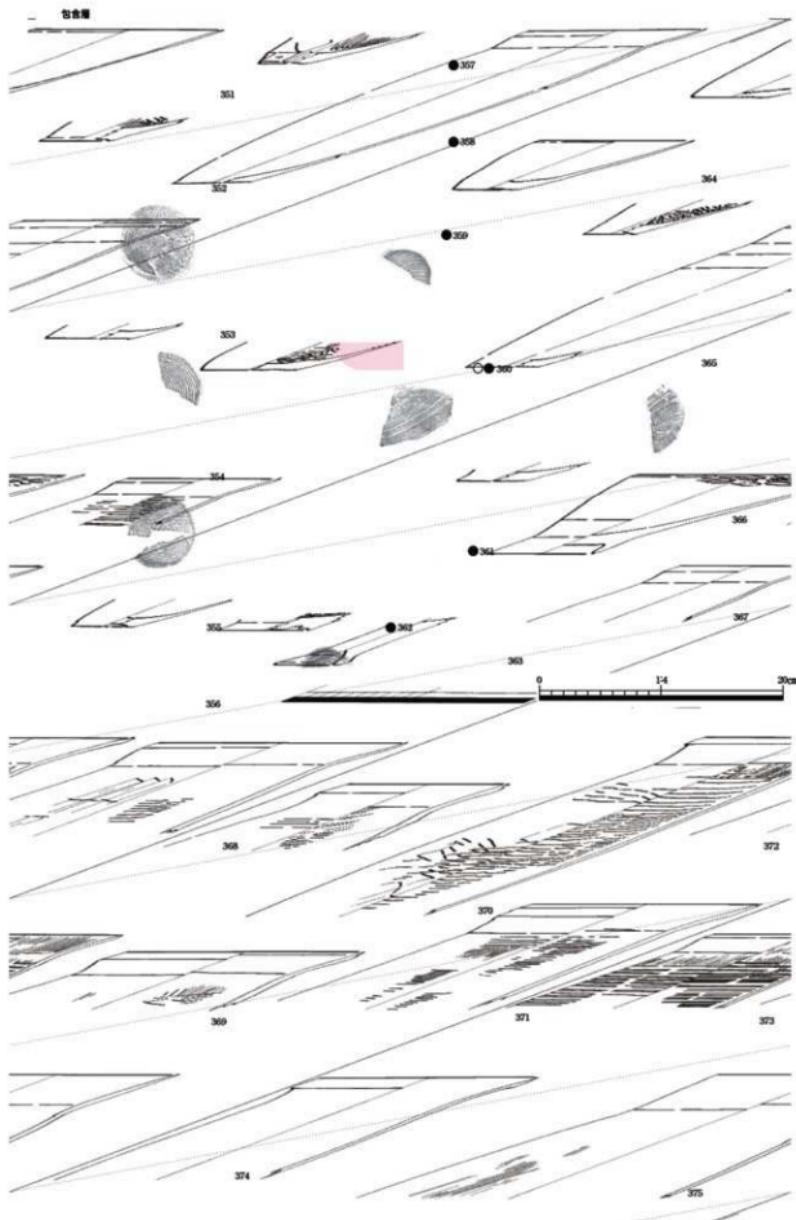
包含層



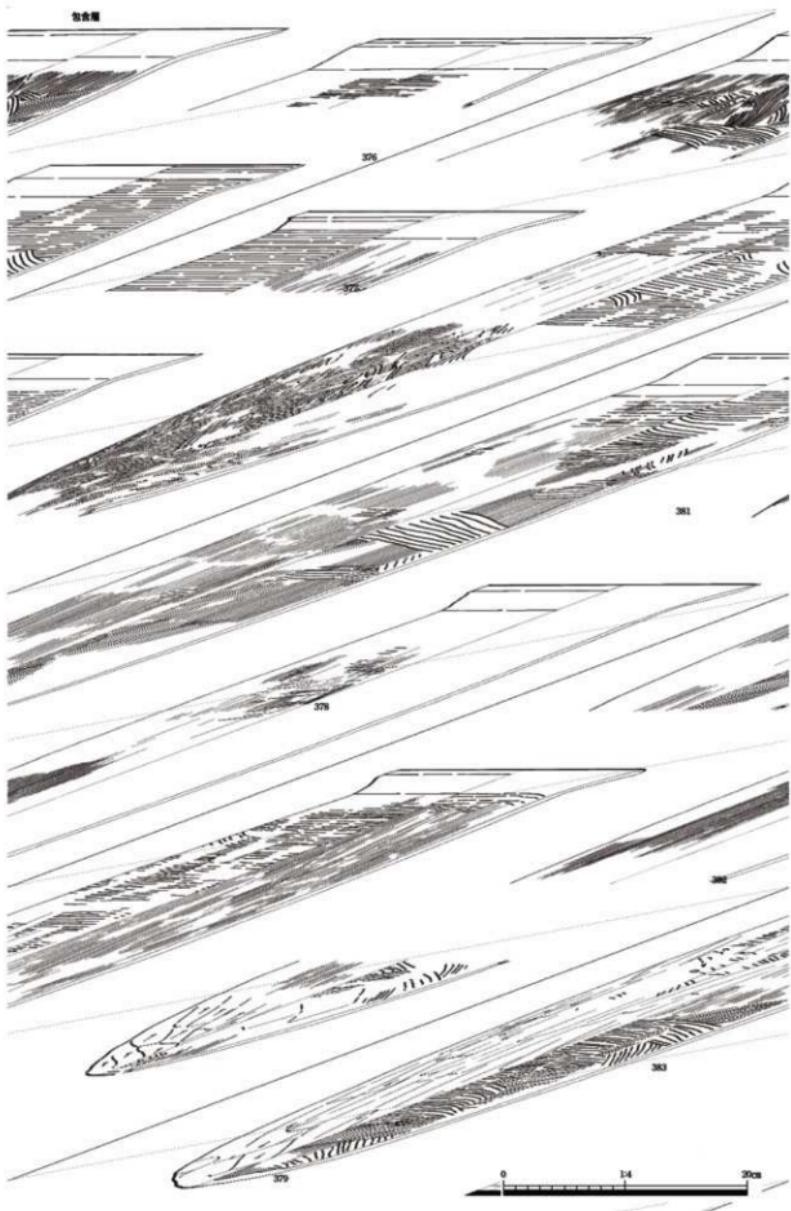
第95図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)  
包含層



第96図 下川原遺跡 遺物実測図 (340~347・349~350 1/4, 348 1/8)  
包含層



第97図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)  
包含層



第98図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層



第99図 下川原遺跡 遺物実測図 (1/4)

包含層

## 石製品



第100図 下川原遺跡 遺物実測図 (石製品 1/3)

SD9(1) SD10(2・3) 包含層

表32表 下川原遺跡 古代 挖立柱建物一覧

建物	棟別	桁行 (m)	梁行 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )	棟方位	柱穴幅・径 (m)	柱穴高さ・深さ (m)	柱間距離 (m)	柱間距離 (m)	出土遺物	挿図	写真 図版		
SB 1	南北棟・側柱	3間	4.6	2間	4.0	18.40	N-10°-W	0.25~0.80	0.10~0.30	1.3~1.7	1.9~2.2	土師器(SP 6・SP 7)	79	58

表33表 下川原遺跡 弥生時代 壁穴建物一覧

造構	旧造構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真 図版
			長径	短径	深さ						
SI 1	B-SI 7	隅丸方?	(5.60)	-	0.25	弥生土器、 緑色凝灰岩	弥生時代	終末期	圓溝を含む法量は現存長径6.60mである。 圓溝の深さは0.20mである。柱穴(SP 1・ SP 2)を伴う	75	56

※規模の( )付は現存数値を示す。

表34表 下川原遺跡 弥生時代～古代 柱穴一覧

建物	造構	旧造構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	特記	挿図	写真 図版
				長径	短径	深さ					
SI 1		SP 1	B-SK26	円	0.29	0.28	0.12		弥生時代		75
		SP 2	B-SK29	楕円	0.65	0.62	0.15		弥生時代		75
SB 1		SP 3	A-SP 6	楕円	0.65	0.50	0.20		古代		79
		SP 4	A-SP 7	円	0.25	0.25	0.30		古代		79
		SP 5	A-SP 8	楕円	0.70	0.55	0.25		古代		79
		SP 6	A-SP15	楕円	0.55	0.45	0.25	土師器	古代		79
		SP 7	A-SP14	円	0.60	0.60	0.30	土師器	古代		79
		SP 8	A-SP13	楕円	0.70	0.55	0.30		古代		79
		SP 9	A-SP12	楕円	0.50	0.35	0.25		古代		79
		SP 10	A-SP11	楕円	0.80	0.60	0.20		古代		79
		SP 11	A-SP16	円	0.35	0.35	0.10		古代		79
		SP 12	A-SP9	楕円	0.70	0.50	0.10		古代		79

表35表 下川原遺跡 弥生時代 土坑一覧

造構	旧造構番号	平面形	規模(m)			出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真 図版
			長径	短径	深さ						
SK 1	B-SK 3	円	0.31	0.28	0.10	弥生土器	弥生時代				76
SK 2	B-SK 9	楕円	(2.40)	1.78	0.32	弥生土器	弥生時代				76
SK 3	B-SK11	楕円	2.20	(1.00)	0.23	弥生土器	弥生時代				76
SK 4	B-SK12	楕円	(1.80)	1.80	0.37	弥生土器	弥生時代				76
SK 5	B-SK13	楕円	1.54	0.80	0.55	弥生土器	弥生時代	中期中葉	AMS年代測定		76
SK 6	B-SK21	楕円	1.02	0.66	0.19	弥生土器	弥生時代		S11底面で検出		76
SK 7	B-SK23	楕円	0.72	0.58	0.15	弥生土器	弥生時代		S11底面で検出		76

※規模の( )付は現存数値を示す。

表36表 下川原遺跡 弥生時代～古代 溝・自然流路一覧

造構	旧造構番号	造構種類	規模(m)			出土遺物	時期	詳細時期	特記	挿図	写真 図版
			幅	深さ							
SD 1	B-SD 1	溝	2.25	0.07		弥生土器、土師器、須恵器	古墳時代?				76
SD 2	B-SD10	溝	0.28	0.06		弥生土器	弥生時代		>S1 1		76
SD 3	B-SD 8	溝	1.32	0.42		弥生土器	弥生時代	中期	<S1 1		76
SD 4	A-SD 1	自然流路	6.00	0.15		土師器、須恵器	古代		>SD 9		80
SD 5	A-SD 2	自然流路	0.60	0.10		土師器、須恵器	古代				80
SD 6	A-SD 3	自然流路	1.60	0.15		土師器	古代				80
SD 7	A-SD23	自然流路	(0.50)	0.15			古代				80
SD 8	A-SD18	自然流路	0.60	0.05			古代				80
SD 9	A-SD21	自然流路	(10.0)	(2.40)		弥生土器、土師器、須恵器、砥石	古代		<SD 9		80
SD10	A-SD22	自然流路	(11.0)	(0.90)		土師器、須恵器、縄引口、砥石	古代				80

※規模の( )付は現存数値を示す。

第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧(1)

編目	遺物	出土地点	種類	法寸(cm)	幅	高さ	時期	詳細時期		胎土色	釉色	備考	
								(上)	(下)				
1	61 SI1 No.2	馬生土器	罐	16.8	16.6	2.8	後期	10YR 7/4	にじく黄褐色				
2	61 SI1 No.3	馬生土器	罐	19.5	16.0	2.8	後期	10YR 7/4	にじく黄褐色				
3	61 SI1 No.4	馬生土器	罐	18.6	16.0	2.8	後期	10YR 7/4	にじく黄褐色				
4	61 SI1 No.19+20	馬生土器	罐	21.5	16.6	2.8	後期	10YR 7/4	にじく黄褐色				
5	61 SI1 No.5	馬生土器	罐?	13.5	5.4		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色				
6	61 SI1 No.6	馬生土器	罐	10.2	4.8		後期	2.5YR 7/3	淡黃色				
7	61 SI1 No.14	馬生土器	直筒罐	10.0	12.3		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
8	59 SI1 No.38	馬生土器	有底盤	12.4	22.5	4.8	後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
9	61 SI1 No.21	馬生土器	罐	19.1	16.0	2.8	後期	10YR 7/3	淡黃色				
10	61 SI1	馬生土器	罐?	19.2	7.2		後期	7.0YR 7/3	淡褐色				
11	61 SI1	馬生土器	罐?	13.2	4.4		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
12	61 SI1	馬生土器	高杯	26.6	5.5		後期	10YR 7/3	淡黃色				
13	61 SI1 No.25	馬生土器	高杯	26.6	5.5		後期	10YR 7/3	淡黃色				
14	61 SI1 No.24+27	馬生土器	高杯	12.3	4.7		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
15	61 SI1	馬生土器	高杯	10.6	6.6		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
16	61 SI1 No.18	馬生土器	高杯	9.5	6.5		後期	2.5YR 7/2	褐色				
17	62 SI1	馬生土器	高杯	10.4	6.5		後期	10YR 7/4	にじく黄褐色				
18	62 SI1 No.12	馬生土器	高杯	12.2	6.5		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	円孔3箇所			
19	62 SI1	馬生土器	高杯	11.7	7.7		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	円孔4箇所			
20	62 SI1	馬生土器	高杯	4.8	14.0		後期	2.5YR 7/3	淡黃色	円孔あり			
21	62 SI1 No.7	馬生土器	高杯	9.8	6.5		後期	2.5YR 7/2	淡黃色	円孔2箇所			
22	62 SI1	馬生土器	高杯	3.65	28.0		後期	10YR 7/4	淡黃色	調査不確実			
23	62 SI1	馬生土器	高杯	3.5	22.4		後期	10YR 7/4	淡黃色	調査不確実			
24	62 SI4	馬生土器	高杯	2.2	10.0	0.2	早	10YR 7/4	淡黃色	調査不確実			
25	62 SD.5	馬生土器	罐	24.0	12.7	2.8	後期	10YR 7/2	にじく黄褐色	円孔1箇所			
26	62 SD.3	馬生土器	罐?	9.7	5.0		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色	調査不確実			
27	62 SD.3	馬生土器	罐?	16.5	6.5		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
28	62 SD.3	馬生土器	罐?	11.0	6.0		後期	10YR 7/2	淡褐色				
29	62 SD.3	馬生土器	罐?	16.4	7.2		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色	調査不確実			
30	59 A-SD.9 X-12 Y-16	馬生土器	罐?	14.1	18.2	2.6	後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	重付着			
31	62 A-X-17 Y-19 錐部	馬生土器	罐?	13.8	12.3		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	重付着			
32	B-X-36 Y-4 Ⅱ型	馬生土器	罐?	15.8	2.65		後期	7.5YR 7/4	にじく黄褐色				
33	B-X-27 Y-3 Ⅱ型	馬生土器	罐?	17.8	3.6		後期	10YR 7/2	淡褐色				
34	B-2 T-3 6.5-7.3 m	馬生土器	罐?	14.8	12.5		後期	7.5YR 7/2	にじく黄褐色				
35	B-X-13 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	罐?	27.0	6.0		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
36	B-X-12 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	罐?	17.9	7.0		後期	10YR 7/4	淡褐色	調査不確実			
37	A-SD.9 X-12 Y-16	馬生土器	罐?	11.6	6.0		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色	重付着			
38	X-21 Y-8 Ⅱ型	馬生土器	罐?	15.9	6.8		後期	7.5YR 7/4	にじく黄褐色				
39	B-X-41 Y-6 Ⅱ型	馬生土器	罐?	7.8	2.7		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	調査不確実			
40	A-SD.9 X-12 Y-20	馬生土器	罐?	14.0	6.5		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色	重付着			
41	A-X-16 Y-3 Ⅱ型	馬生土器	罐?	4.0	6.5		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色				
42	A-X-11 Y-11	馬生土器	罐?	14.8	3.7		後期	10YR 7/3	淡黃色				
43	A-X-12 Y-21 Ⅱ型	馬生土器	罐?	18.2	6.2		後期	2.5YR 7/2	淡褐色				
44	A-X-9 Y-20 Ⅱ型	馬生土器	罐?	15.8	3.0		後期	2.5YR 7/2	淡黃色				
45	B-X-40 Y-3 Ⅱ型	馬生土器	罐?	20.6	4.4		後期	10YR 7/4	にじく黄褐色	調査不確実			
46	A-X-11 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	罐?	13.6	5.8		後期	10YR 7/4	にじく黄褐色				
47	B-X-9 Y-7 Ⅱ型	馬生土器	罐?	14.4	5.5		後期	7.5YR 7/2	にじく黄褐色	調査不確実			
48	B-X-27 Y-4 Ⅱ型	馬生土器	罐?	15.0	9.6		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色				
49	B-X-9 Y-10 Ⅲ型	馬生土器	罐?	17.0	12.0		後期	7.5YR 6/4	にじく黄褐色				
50	B-X-24 Y-3 Ⅱ型	馬生土器	罐?	18.0	7.2		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色	調査不確実			
51	B-X-17 Y-11 Ⅱ型	馬生土器	罐?	27.4	15.2		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	中標			
52	B-X-37 Y-11 Ⅱ型	馬生土器	罐?	10.7	6.0		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	内削出しと舞の柱の単位化			
53	B-X-37 Y-10 Ⅱ型	馬生土器	罐?	10.7	6.0		後期	10YR 7/3	淡褐色				
54	A-SD.9 X-9 Y-34	馬生土器	罐?	6.7	6.7		後期	10YR 7/3	にじく黄褐色	赤鉄2.5YR 6/4 淡褐色			
55	B-X-17 Y-7 Ⅱ型	馬生土器	罐?	6.0	6.2		後期	10YR 7/3	淡褐色				
56	B-X-22 Y-7 Ⅱ型	馬生土器	罐?	13.2	45.6	3.4	後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
57	B-X-11 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	罐?	17.0	9.7		後期	7.5YR 7/2	にじく黄褐色	漆黒2.5YR 7/4 淡褐色 円孔2.8箇所			
58	B-X-27 T-3 Ⅱ型	馬生土器	罐?	9.7	7.5		後期	10YR 7/2	淡褐色				
59	B-X-38 Y-2 Ⅱ型	馬生土器	手				後期	5YR 7/2	褐色				
60	A-X-18 Y-22 Ⅱ型	馬生土器	高杯	21.3	4.0		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
61	B-X-2 T-3 Ⅱ型	馬生土器	高杯	22.8	4.7		後期	10YR 7/2	淡褐色				
62	B-X-2 T-3 Ⅱ型	馬生土器	高杯	27.4	19.0	15.8	後期	7.5YR 6/3	にじく黄褐色				
63	B-X-37 Y-10 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.8	2.4		後期	10YR 7/2	淡褐色				
64	A-X-25 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	高杯	10.7	2.7		後期	10YR 7/2	淡褐色				
65	B-X-25 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	高杯	16.5	3.0		後期	10YR 7/2	淡褐色				
66	B-X-25 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	高杯	10.7	2.7		後期	10YR 7/2	淡褐色				
67	A-SD.9 X-6 Y-36	馬生土器	高杯	9.7	7.5		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
68	A-X-16 Y-25 Ⅱ型	馬生土器	高杯	7.1	7.5		後期	10YR 7/2	にじく黄褐色				
69	A-X-16 Y-31 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.8	9.0		後期	7.5YR 7/2	褐色	調査不確実			
70	B-X-35 Y-5 Ⅱ型	馬生土器	高杯	14.4	3.0		後期	M/T 15	2.5YR 1	黒灰			
71	A-	馬生土器	高杯	13.8	3.3		後期	M/T 10	N7	淡褐色	胎土分離N7		
72	A-X-18 Y-21 Ⅱ型	馬生土器	高杯	12.4	3.6		後期	T K 10	2.5YR 7/1	淡褐色			
73	A-X-17 Y-22 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.2	3.9		後期	T K 10	10YR 3	褐色			
74	A-X-15 Y-10 Ⅱ型	馬生土器	高杯	10.4	3.7		後期	T K 10-M/T 10	N5	褐色			
75	A-X-14 Y-10 Ⅱ型	馬生土器	高杯	12.2	3.2		後期	T K 10-M/T 10	5YR 1	褐色			
76	A-X-12 Y-11 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.8	3.6		後期	T M/T 8	3.5YR 1	褐色			
77	B-X-20 Y-15 Ⅱ型	馬生土器	高杯	12.1	3.0		後期	T K 10	N5	褐色	胎土分離N3		
78	A-X-17 Y-13 Ⅱ型	馬生土器	高杯	9.6	2.0		後期	M/T 10	N7	褐色	胎土分離N4		
79	A-X-17 Y-13 Ⅱ型	馬生土器	高杯	10.8	3.8		後期	M/T 10-T K 10	N4	褐色	胎土分離「」胎土分離N12		
80	A-X-17 Y-13 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.0	3.2		後期	T K 10-M/T 10	2.5YR 6/1	淡褐色			
81	A-X-17 Y-22 Ⅱ型	馬生土器	高杯	12.6	4.1		後期	T K 10	2.5YR 7/1	淡褐色			
82	B-X-36 Y-22 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.0	3.2		後期	T K 10	N5	褐色	胎土分離N9		
83	A-X-14 Y-21 Ⅱ型	馬生土器	高杯	11.9	3.5		後期	T K 10	N5	褐色			
84	A-X-16 Y-11 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.0	3.9		後期	T K 10	N5	褐色			
85	B-X-14 Y-21 Ⅱ型	馬生土器	高杯	10.4	5.7		後期	T K 10	N8	褐色			
86	A-X-16 Y-7 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.2	3.2		後期	T K 10-M/T 10	N7	褐色			
87	B-X-16 Y-11 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.0	4.2		後期	T K 10-M/T 10	5YR 1	褐色	胎土分離N10		
88	A-X-16 Y-12 Ⅱ型	馬生土器	高杯	14.2	3.2		後期	T K 10	N5	褐色	胎土分離N10		
89	B-X-16 Y-11 Ⅱ型	馬生土器	高杯	13.6	3.0		後期	T K 10	N5	褐色	胎土分離N10		

第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧(2)

群別	遺物	写真	出土地点	種類	部位	法算(cm)			焼成	詳細時期	出土色調	出土色	備考
						上部	底部	周縁					
86	66	A-X-17Y300木漬	土師器	壺		14.0	10.0	5.0	古墳時代	6C?	3.5YR7.6	褐色	調査不明期
	67	B-X-30Y15木漬	土師器	壺		16.7	12.0	5.0	古墳時代	6C中頃	3.5YR7.6	褐色	褐色系
	68	A-SD9-X-30Y34	土師器	壺		16.4	8.05	7.6	古墳時代	7C?	30YR7.3	褐色	褐色系
	69	A-SD9-X-30Y34	土師器	壺		7.2	4.9	7.9	古墳時代	6C後~7C	3.5YR2.3	褐色	褐色系
	70	A-SD9-X-33Y17	土師器	壺		15.0	6.75	5.8	古墳時代	6C	2.5YR7.3	浅黄色	赤堀3.5YR7.4R6.5褐色
	71	A-X-11Y27木カラソン	土師器	壺		12.1	4.1	5.0	古墳時代	6C	7.5YR8.3	浅黄色	調査不明期
	72	A-SD9-X-17Y39	土師器	壺		14.6	(4.2)		古墳時代	6C中頃	3.5YR7.6	褐色	褐色系
	73	A-X-13Y30木カラソン	土師器	壺		13.8	(2.7)		古墳時代	6C?	10YR8.3	褐色	赤堀2.5YR6.6褐色
	74	A-X-16Y12木カラソン	土師器	壺		12.0	3.5	8.4	古墳時代	6C末~7C	30YR2.4	褐色	褐色系
	75	A-SD9-X-12Y16-17Wカラソン	土師器	壺		16.0	(4.4)		古墳時代	7C?	30YR7.3	褐色	赤堀2.5YR6.6褐色
	76	A-X-18Y23木カラソン	土師器	壺		11.7	4.6	5.2	古墳時代	6C?	10YR8.3	褐色	赤堀3.5YR7.4R6.5褐色
	77	B-X-30Y43木壺	土師器	壺		15.8	(4.4)		古墳時代	6C	30YR6.3	褐色	褐色系
	78	A-X-19Y7木カラソン	土師器	壺		15.0	5.2		古墳時代	6C中頃	30YR2.4	褐色	褐色系
	79	A-SD9-X-30Y48	土師器	壺		15.8	4.9		古墳時代	6C後半	30YR7.3	褐色	褐色系
	80	B-X-30Y35木壺	土師器	壺		15.8	4.2		古墳時代	6C後半	30YR7.3	褐色	褐色系
	81	B-X-30Y35木壺	土師器	壺		13.4	4.5		古墳時代	6C?	30YR7.3	褐色	褐色系
	82	B-X-40Y30木壺	土師器	壺		15.0	4.7		古墳時代	6C	30YR7.3	褐色	褐色系
	83	B-X-20Y43木壺	土師器	壺		13.9	(3.4)		古墳時代	6C	30YR7.3	褐色	褐色系
	84	B-2-T-3木壺	土師器	壺		14.8	5.6		古墳時代	6C中頃	30YR7.2	褐色	褐色系
	85	B-2-T-4木材	土師器	壺		14.2	(3.4)		古墳時代	6C	10YR8.3	褐色	赤堀3.5YR7.4R6.5褐色
	86	B-X-37Y43	土師器	壺		16.0	(3.60)		古墳時代	6C	30YR7.3	褐色	褐色系
	87	A-X-30Y35木カラソン	土師器	壺		15.8	(3.4)		古墳時代	6C	10YR7.2	褐色	褐色系
	88	B-X-30Y35木カラソン	土師器	壺		15.0	(3.4)		古墳時代	6C	30YR7.3	褐色	褐色系
	89	B-X-35Y35木カラソン	土師器	壺		9.6	(4.9)		古墳時代	6C?	30YR7.4	褐色	褐色系
	90	A-X-15Y38木カラソン	土師器	壺		12.8	5.5		古墳時代	6C後半~7C	30YR7.2	褐色	褐色系
	91	A-X-18Y35木カラソン	土師器	壺		12.5	5.5		古墳時代	6C後半~7C	30YR7.2	褐色	褐色系
	92	A-SD9-X-30Y38	土師器	壺		17.6	31.8		古墳時代	6C~7C	3.5YR7.3	褐色	褐色系
	93	A-X-16Y21木壺	土師器	壺		19.4	(5.6)		古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	94	B-X-16Y21木壺	土師器	壺		19.6	(5.6)		古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	95	A-X-22Y27木水漬	土師器	壺		19.6	(5.6)		古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	96	B-X-41Y34木壺	土師器	壺		16.7			古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	97	A-X-16Y23木カラソン	土師器	壺		23.8	(12.5)		古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	98	B-X-30Y43木壺	土師器	壺		20.4	(7.0)		古墳時代	6C~7C	30YR8.4	浅黄色	調査不明期
	99	B-X-30Y43木壺	土師器	壺		20.0	(5.0)		古墳時代	6C~7C	10YR7.4	褐色	褐色系
	100	B-X-37Y43木壺	土師器	壺		14.4	(6.7)		古墳時代	6C~7C	30YR8.4	浅黄色	褐色系
	101	A-X-17Y18木カラソン	土師器	壺		17.0	(5.0)		古墳時代	6C~7C	30YR7.2	褐色	褐色系
	102	B-X-38Y42木壺	土師器	壺		25.8	(4.1)		古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	103	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.8	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	104	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	105	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	106	B-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	107	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	108	B-X-17Y23木壺	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	109	A-X-17Y23木壺	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	110	B-X-17Y23木壺	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	111	A-SD9-X-30Y14	土師器	壺		20.6	(12.0)		古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	112	A-SD1-X-30Y35	土師器	壺		37.0	(6.3)		古墳時代	6C~7C	30YR8.4	褐色	褐色系
	113	A-X-16Y10木カラソン	土師器	壺		21.1	3.0		古墳時代	6C~7C	30YR7.2	褐色	褐色系
	114	B-X-17Y21木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	115	A-X-16Y21木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	116	B-X-16Y21木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	117	A-X-18Y17木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	118	B-X-17Y21木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	119	A-SD9-X-30Y34	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	120	A-X-18Y25-19世紀	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	121	B-X-30Y43木壺	土師器	壺		20.4	(7.0)		古墳時代	6C~7C	30YR8.4	浅黄色	調査不明期
	122	B-X-30Y43木壺	土師器	壺		20.0	(5.0)		古墳時代	6C~7C	10YR7.4	褐色	褐色系
	123	B-X-37Y43木壺	土師器	壺		14.4	(6.7)		古墳時代	6C~7C	30YR8.4	浅黄色	褐色系
	124	A-X-17Y17木カラソン	土師器	壺		17.0	(5.0)		古墳時代	6C~7C	30YR7.2	褐色	褐色系
	125	B-X-38Y42木壺	土師器	壺		25.8	(4.1)		古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	126	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.8	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	127	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		20.4	26.6	5.0	古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	128	B-X-17Y21木壺	土師器	壺		20.4	(7.0)		古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	129	A-SD9-X-30Y34	土師器	壺		20.4	(7.0)		古墳時代	6C~7C	2.5YR2.3	褐色	褐色系
	130	A-X-18Y25-19世紀	土師器	壺		21.0	2.8		古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	131	B-X-30Y35木壺	土師器	壺		20.6	(12.0)		古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	132	A-SD1-X-30Y35	土師器	壺		37.0	(6.3)		古墳時代	6C~7C	30YR8.4	褐色	褐色系
	133	A-X-16Y10木カラソン	土師器	壺		21.1	3.0		古墳時代	6C~7C	30YR7.2	褐色	褐色系
	134	B-X-17Y21木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	135	B-X-17Y21木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	136	A-X-16Y21木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	137	A-X-17Y22木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	138	A-X-17Y22木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	139	A-X-17Y22木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	140	B-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	141	A-X-16Y31木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	142	B-X-17Y21木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	143	A-X-19Y38木壺	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	144	A-X-19Y46木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.4	褐色	褐色系
	145	A-SD9-X-30Y34	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	146	A-X-21Y28木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	147	A-X-21Y28木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	148	A-X-18Y28木カラソン	土師器	壺		6.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	149	A-X-10Y30木壺	土師器	壺		20.6	(5.0)		古墳時代	6C~7C	30YR8.3	褐色	褐色系
	150	A-SD9-X-30Y16	土師器	壺		21.9	2.80		古墳時代	6C~7C	2.5YR7.2	褐色	褐色系
	151	A-SD10-X-30Y13	土師器	壺		11.5	(3.45)	7.6	古墳時代	6C~7C	2.5YR7.2	褐色	褐色系
	152	A-SD10-X-30Y13	土師器	壺		14.0	(3.0)		古墳時代	6C~7C	10YR7.2	褐色	褐色系
	153	A-X-16Y13木カラソン	土師器	壺		18.4	(3.0)		古墳時代	6C~7C	10YR7.3	褐色	褐色系
	154	A-X-20Y25木壺	土師器	壺		3.0	13.8		古墳時代	6C~7C	30YR8.2	褐色	褐色系
	155	A-X-20Y25木壺	土師器	壺		3.0			古墳時代	6C~7C	30YR8.2	褐色	褐色系
	156	A-X-20Y25木壺	土師器	壺		3.0			古墳時代	6C~7C	2.5YR7.4	褐色	褐色系
	157	A-X-21Y28木カラソン	土師器	壺		3.0			古墳時代	6C~7C	2.5YR7.4	褐色	褐色系
	158	A-X-21Y28木カラソン	土師器	壺		3.0			古墳時代	6C~7C	2.5YR7.4	褐色	褐色系
	159	A-X-16Y21木カラソン	土師器	壺		3.0			古墳時代	6C~7C	2.5YR7.4	褐色	褐色系
	160	A-X-16Y21木カラソン	土師器	壺		3.0			古墳時代	6C~7C	2.5YR7.4	褐色	褐色系
	161	B-2-T-4から6.3m	土師器	壺		14.0			古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	162	A-X-10Y20木カラソン	土師器	壺		6.8	(2.0)		古墳時代	6C~7C	2.5YR6.6	褐色	褐色系
	163	A-X-10Y30木壺	土師器	壺		10.2	5.0	4.2	古墳時代	6C~7C	2.5YR8.2	褐色	褐色系
	164	B-X-30Y45木壺	土師器	壺		5.0	3.0	3.60	古墳時代	6C~7C	2.5YR7.3	褐色	褐色系
	165	A-X-21Y28木壺	土師器	壺		11.4	3.6	11.6	古墳時代	6C~7C	30YR7.3	褐色	褐色系
	166	A-X-10Y30-31木壺	土師器	壺		(2.4)	47.8		古				

第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧(3)

项目	地区	分布点	植被	特征	湿度(%)			时期	耕作时间	黏土色调	黏土色	参考	
					干燥	湿润	高湿度						
169	20	S09 X12Y20	荒地带	砾石带	12.6	2.85		古代	9 C	2.5Y6/2	灰或土灰色	灰化层	
170	22	S09 X9Y16	荒地带	砾石带	(1.9)			古代	9 C	7.0Y6/1	褐色	褐化	
170	23	S09 X12Y17	荒地带	砾石带	11.2	3.2	7.9	古代	9 C	5Y6/1	褐色		
170	23	S09 X13Y13	荒地带	砾石带	0.975			古代	8 C	2.5Y7/1	深白色	褐化	
171	23	S09 X12Y18	荒地带	砾石带 B	14.4	7.0		古代	9 C	2.5Y5/1	深黄色		
172	23	S09 X11Y20	荒地带	砾石带				古代	8 C	2.5Y6/1	黄褐色		
173	23	S09 X11Y20	荒地带	砾石带	12.0	(3.4)		古代	8 C	2.5Y7/1	白褐色		
174	23	S09 X10Y21	荒地带	砾石带	(4.9)			古代	9 C	2.5Y6/1	黄褐色	内部铁锈斑带	
175	23	S09 X13Y28	荒地带	砾石带	(7.0)	10.6		古代	9 C	10Y6/6/1	暗褐色	外侧铁锈带	
176	23	S09 X10Y23	土耕带	陶 A	14.8	5.0	5.2	古代	9 C - 10C	2.5Y7/2	深褐色	褐化带切口	
177	23	S09 X11Y20	土耕带	陶 A	(2.7)	5.7		古代	10Y6/2	2.5Y6/2	黄褐色	褐化带切口被热	
178	23	S09 X11Y24	土耕带	陶 A	12.7	2.2	5.8	古代	9 C - 10C	2.5Y1/1	白褐色	褐化带切口	
179	23	S09 X13Y17	土耕带	陶 A	12.1	(3.5)		古代	9 C - 10C	10Y7/2	2.5Y6/1	灰褐色带土层	
180	23	S09 X13Y16 - 17	土耕带	陶 A	(3.1)	7.6		古代	10Y7/3	(3.5)	灰褐色带		
181	23	S09 X13Y27	土耕带	陶 A	23.6	(4.3)		古代	8 C	10Y7/3	(3.5)	灰褐色带	
182	23	S09 X11Y25	土耕带	陶 A	21.3	(5.4)		古代	9 C - 10C	10Y7/3	2.5Y6/2	深褐色	
183	20	S10 X12Y36	荒地带	砾石带	12.0	2.85		古代	9 C	5Y5/1	褐色	褐化	
184	24	S10 X10Y12	荒地带	砾石带	14.4	(2.0)		古代	9 C	5Y6/1	褐色		
185	24	S10 X12Y28	荒地带	砾石带	12.2	2.6		古代	9 C	2.5Y6/1	深黄色	褐化带水锈	
186	24	S10 X12Y26	荒地带	砾石带	15.8	(2.0)		古代	9 C	5Y5/1	褐色	褐化带水锈	
187	21	S10 X13Y36	荒地带	砾石带	12.8	4.3	11.0	古代	8 C	2.5Y6/1	深黄色		
188	24	S10 X15Y13	荒地带	砾石带	11.4	3.9	7.4	古代	9 C	2.5Y7/1	白褐色		
189	20	S10 X13Y36	荒地带	砾石带	12.4	3.4	9.75	古代	8 C	2.5Y6/1	深黄色		
190	24	S10 X13Y13	荒地带	砾石带	12.6	3.8	9.4	古代	9 C	5Y7/1	白褐色		
191	24	S10 X13Y12	荒地带	砾石带	12.0	3.5	7.0	古代	7 C	5Y5/1	褐色		
192	24	S10 X13Y12	荒地带	砾石带	11.8	4.0		古代	9 C	5Y7/1	白褐色		
193	24	S10 X15Y12	荒地带	砾石带	12.4	3.0		古代	10Y8/1	2.5Y6/1	白褐色	褐化带风化	
194	24	S10 X13Y36	荒地带	砾石带	11.0	3.9		古代	9 C	5Y5/1	褐色	褐化带风化	
195	20	S10 X13Y36	荒地带	砾石带	11.6	3.7	8.1	古代	8 C	5Y6/1	褐色	褐化带风化	
196	20	S10 X13Y36	荒地带	砾石带 B	15.5	5.2	9.8	古代	9 C	2.5Y3/3 四干四湿	2.5Y6/1	褐色	无风化带风化带+7%风化带+10%
197	24	S10 X13Y12	荒地带	砾石带 B	20.8	3.95	8.4	古代	9 C	N6	褐色	褐化带风化	
198	24	S10 X12Y17	荒地带	砾石带 B	11.0	3.7	6.45	古代	9 C	N6	褐色	褐化带风化	
199	25	S10 X11-13' 15'	荒地带	砾石带 B	14.8	5.1	9.2	古代	8 C	2.5Y6/1	深黄色		
200	25	S10 X15Y17	荒地带	砾石带 B	12.6	4.30	6.8	古代	9 C	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化	
201	25	S10 X13Y13	荒地带	砾石带 B	10.5	4.60	7.2	古代	9 C	5Y2/2	褐或土灰色		
202	25	S10 X13Y13	荒地带	砾石带 B	14.6	4.3	9.7	古代	8 C	N7	褐色		
203	25	S10 X13Y13	荒地带	砾石带 B	12.7	3.9	7.6	古代	7 C	N6	褐色		
204	25	S10 X13Y12	荒地带	砾石带	9.2	(6.0)		古代	8 C	2.5Y7/1	白褐色		
205	25	S10 X13Y18	荒地带	砾石带	(7.4)			古代	6 C	5Y5/1	褐色	微缩进风化	
206	25	S10 X13Y12	荒地带	砾石带	(22.1)			古代	8 C	5Y5/1	褐色	微缩进风化	
207	25	S10 X15Y28	荒地带	砾石带	(9.9)			古代	8 C	N7	白褐色		
208	25	S10 X10Y13	荒地带	砾石带	9.8	(3.10)		古代	8 C	2.5Y7/2	深黄色		
209	25	S10 X12Y28	荒地带	砾石带	(7.1)			古代	8 C	2.5Y7/1	白褐色	外侧缩进风化	
210	25	S10 X13Y13	荒地带	砾石带	22.0	(9.1)		古代	8 C	2.5Y7/1	白褐色		
211	26	S10 X14Y28	土耕带	陶 A	(2.2)	5.6		古代	7 C	5Y6/6	褐色	褐化带风化	
212	26	S10 X14Y28	土耕带	陶 A	(2.1)	6.0		古代	7 C	5Y6/6	褐色	褐化带风化	
213	26	S10 X15Y28	土耕带	陶 A	(2.0)	4.9		古代	10Y8/2	2.5Y6/1	白褐色	褐化带风化	
214	26	S10 X15Y28	土耕带	陶 A	(1.8)	5.6		古代	7 C	5Y6/6	褐色	褐化带风化	
215	26	S10 X15Y28	土耕带	陶 A	(1.55)	5.6		古代	10Y8/2	2.5Y6/1	白褐色	褐化带风化	
216	26	S10 X13Y17	土耕带	陶 A	16.2	2.90	3.8	古代	9 C - 10C	10Y8/2	2.5Y6/1	白褐色	褐化带风化
217	26	S10 X15Y28	土耕带	陶 A	(1.1)	6.7		古代	5Y6/6	褐色	褐化带风化		
218	21	S10 X13Y34	土耕带	陶 A	12.6	2.5	8.1	古代	8 C	2.5Y7/2	深黄色		
219	24	S10 X13Y13	土耕带	陶 A	13.0	2.0		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	土层带风化
220	26	S10 X15Y28	黑化土带	陶 A	11.7	4.0	3.7	古代	9 C - 10C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
221	26	S10 X15Y23	土耕带	陶 A	7.4	6.1	4.8	古代	8 C	2.5Y5/6	深黄色		
222	22	S10 X13' - 23' 黑化土带	土耕带	陶 A	27.2	12.3	14.0	古代	8 C 中	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	外侧风化带风化带
223	26	S10 X15Y30	土耕带	陶 A	10.5	(9.8)		古代	7 C	7.5 Y 2/2	深褐色		
224	26	S10 X15Y13	土耕带	陶 A	14.8	(6.0)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
225	26	S10 X13Y12	土耕带	陶 A	19.6	(16.7)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
226	27	S10 X13Y14	土耕带	陶 A	24.8	(7.8)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
227	27	S10 X15Y23	土耕带	陶 A	20.7	(18.9)		古代	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化	
228	27	S10 X15Y13	土耕带	陶 A	21.6	(22.0)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
229	27	S10 X15Y13	土耕带	陶 A	21.3	(18.0)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
230	27	S10 X13Y13	土耕带	陶 A	29.0	(18.4)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
231	28	S10 X15Y30	土耕带	陶 A	20.0	(16.0)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
232	22	S10 X15Y13	土耕带	陶 A	20.7	(22.0)		古代	8 C 7	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化
233	28	S10 X15Y24	土耕带	陶 A	19.2	(9.8)		古代	8 C	10Y7/2	2.5Y6/1	深黄色	褐化带风化

第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧(4)

件名	遺物 写真 図版	地層	出土地点	種類	形状	寸法(cm)			時代	焼成	詳細な時期	出土色調	出土地	備考
						上径	底径	高さ						
234 72 SD010 X-15 Y-13		土器部	便			23.4	(25.2)		古代	±C	30YR 8.3	灰黃褐色		
235 72 SD010 X-15 Y-13・34		土器部	便			21.7	31.1		古代	±C	30YR 7.3	灰黃褐色		
236 28 SD010 X-15 Y-13		土器部	便			25.2	(31.2)		古代	±C	30YR 6.2	灰黃褐色		
237 28 SD010 X-15・16 Y-13		土器部	便			31.3	(4.4)		古代	±C?	30YR 8.3	灰黃褐色		
238 28 SD010 X-15 Y-18		土器部	便			29.2	(3.4)		古代	±C	30YR 8.4	灰黃褐色		
239 72 SD010 X-15・16 Y-13・34		土器部	便			36.0	(15.9)		古代	±C	30YR 7.2	±C?・灰黃褐色	復付縫	
240 28 SD010 X-16 Y-11		土器部	便			33.0	(4.5)		古代	±C	30YR 7.4	±C?・灰黃褐色		
241 78 SD010 X-12 Y-13		土器部	鉢	直壁	丸底	厚	±C	古代			30YR 7.2	±C?・灰黃褐色		
242 78 SD010 X-13 Y-17		土器部	鉢	直壁	丸底	厚	±C	古代			30YR 7.2	±C?・灰黃褐色	ガラス質表面	
243 29 A-X-16 Y-15 1号		土器部	杯			28.6	(1.9)		古代	±C	2.5YR 2.1	灰白色		
244 29 B-X-16 Y-15 1号		土器部	杯			12.8	2.7		古代	±C	5YR 1	灰白色		
245 29 A-X-12 Y-15 1号		土器部	杯			12.8	2.4		古代	±C	30YR 6.3	±C?・灰黃褐色		
246 29 A-X-13 Y-17 1号		土器部	杯			13.9	3.5		古代	±C	5YR 1	灰白色		
247 29 A-X-10 Y-13 1号		土器部	杯			16.4	(2.9)		古代	±C	2.5YR 2.1	灰黃褐色		
248 29 A-X-18 Y-24 1号		土器部	杯			18.8	(1.8)		古代	±C	2.5YR 2.1	灰白色		
249 29 B-X-18 Y-24 1号		土器部	杯			15.0	(2.3)		古代	±C	2.5YR 1	灰白色		
250 29 A-X-15 Y-13 1号		土器部	杯			16.4	(2.3)		古代	±C	2.5YR 2	灰黃褐色	内部織紋	
251 29 A-X-10 Y-20 1号		土器部	杯			15.9	(2.1)		古代	±C	2.5YR 2.1	灰白色		
252 29 A-X-13 Y-17 1号		土器部	杯			14.0	(1.2)		古代	±C	5YR 1	灰白色		
253 29 A-X-11 Y-20 1号		土器部	杯			12.0	(1.0)		古代	±C	2.5YR 1	内部織紋		
254 29 A-X-14 Y-17 1号		土器部	杯			15.0	(1.7)		古代	±C	2.5YR 1	灰黃褐色		
255 80 A-X-18 Y-21 1号		土器部	杯			16.4	(1.8)		古代	±C	5YR 1	灰白色		
256 29 A-X-15 Y-20 1号		土器部	杯			11.8	1.8		古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色		
257 29 A-X-16 Y-21 1号		土器部	杯			11.0	1.0		古代	±C	3YR 1	±C?・灰白色	墨書き(+)	
258 29 A-X-18 Y-21 1号		土器部	杯			12.5	1.0		古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色		
259 70 B-X-18 Y-22 1号		土器部	杯			11.4	3.6	7.8	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
260 80 A-X-15 Y-13		土器部	杯			12.2	3.5		古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰黃褐色		
261 80 A-X-15 Y-13 カラクン		土器部	杯	A		12.6	3.6		古代	±C	5YR 1	灰白色		
262 70 A-X-14 Y-15 サツル		土器部	杯	A		11.0	3.6		古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰黃褐色		
263 80 A-X-15 Y-13 カラクン		土器部	杯	A		10.7	3.4		古代	±C	2.5YR 1	灰白色		
264 80 A-X-10 Y-12 Y-13 カラクン		土器部	杯	A		12.3	3.1	7.6	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
265 80 A-X-10 Y-13 36.1 1号		土器部	杯	A		12.2	2.9	7.7	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
266 80 B-X-12 Y-31 1号		土器部	杯	A		12.0	2.9	10.10	古代	±C	30YR 7.3	±C?・灰黃褐色		
267 80 B-X-18 Y-43 1号		土器部	杯	A		13.9	3.1	8.0	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
268 80 B-X-10 Y-44 1号		土器部	杯	A		12.0	3.2	8.1	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
269 80 A-X-14 Y-15 サツル		土器部	杯	A		12.0	3.0	8.0	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色		
270 80 A-X-18 Y-21 1号		土器部	杯	A		12.5	2.9	8.2	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
271 80 A-X-16 Y-17 2号		土器部	杯	A		12.6	2.1	7.0	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
272 80 A-X-13 Y-18 2号		土器部	杯	A		15.0	2.7	7.6	古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰白色	復付縫	
273 80 B-X-18 Y-42 1号		土器部	杯	A		12.4	3.5	7.2	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色		
274 80 B-X-18 Y-44 1号		土器部	杯	A		12.0	3.2	6.0	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色		
275 80 A-		土器部	杯	A		12.6	3.1	7.8	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色	新土分類No.20	
276 80 A-紳士		土器部	杯	A		11.4	3.3	7.9	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色	底部燒成度の強い紳士分類No.19	
277 80 A-X-16 Y-4 1号		土器部	杯	A		12.8	3.2	8.0	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
278 80 A-X-15 Y-16 2号		土器部	杯	A		11.7	3.0	6.2	古代	±C	30YR 5	±C?・灰白色	墨書き	
279 80 A-X-10 Y-12 Y-13 カラクン		土器部	杯	A		11.2	6.5		古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰黃褐色		
280 82 B-X-10 Y-28 1号		土器部	杯	A		11.6			古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色		
281 82 B-X-10 Y-30 1号		土器部	杯	A		13.3	3.2	6.7	古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰黃褐色	底部焼成度	
282 82 A-X-15 Y-24 1号		土器部	杯	A		13.2	4.5		古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
283 82 B-X-10 Y-44 1号		土器部	杯	A		12.7	8.4		古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
284 82 A-X-13 Y-20 1号		土器部	杯	A		12.5	3.9	8.0	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
285 82 A-X-13 Y-19 2号		土器部	杯	A		12.3	3.2	9.2	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
286 82 A-X-15 Y-20 1号		土器部	杯	A		11.6	6.5		古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰黃褐色	漆板	
287 81 A-X-14 Y-15 4号		土器部	杯	A		11.4	3.35		古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
288 81 A-X-13 Y-20 2号		土器部	杯	A		12.0	3.6		古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
289 81 A-X-16 Y-31 1号		土器部	杯	A		13.8	4.0		古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
290 81 B-S01 1号		土器部	杯	B		10.4	4.1	7.9	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
291 82 A-X-13 Y-13 3号		土器部	杯	B		12.9	4.5	7.8	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色	新土分類No.23	
292 82 A-X-16 Y-11 2号		土器部	杯	B		15.2	5.9	10.0	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色		
293 82 A-X-15 Y-12 2号		土器部	杯	B		15.5	4.4	9.8	古代	±C	30YR 7.3	±C?・灰黃褐色		
294 82 A-X-15 Y-26 1号		土器部	杯	B		11.8	3.75	6.6	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色		
295 82 A-X-13-15 Y-17-19 セカラク		土器部	杯	B		12.0	3.6	6.8	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色	新土分類No.14	
296 82 B-X-10 Y-20 2号		土器部	杯	B		11.5	4.2	7.0	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
297 82 A-X-13 Y-19		土器部	杯	B		11.2	4.45		古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
298 82 A-X-10-16 Y-13 3号		土器部	杯	B		14.3	3.9	8.2	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色		
299 82 A-X-13 Y-12 2号		土器部	杯	B		12.3	4.0	7.8	古代	±C	5YR 1	±C?・灰白色		
300 83 B-X-10-16 Y-39-41 1号		土器部	杯	B		15.2		10.0	古代	±C	2.5YR 2	±C?・灰黃褐色		
301 83 A-X-16 Y-27 1号		土器部	杯	B		10.4	4.1	6.4	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色		
302 83 A-X-13 Y-16 2号		土器部	杯	B		13.0		6.0	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰黃褐色		
303 83 B-X-10 Y-41 2号		土器部	杯	B		13.8		6.4	古代	±C	2.5YR 1	±C?・灰白色	墨書き	
304 83 A-X-11 Y-18 1号		土器部	杯	B		13.1		7.8	古代	±C	2.5YR 4	±C?・灰黃褐色	墨書き 剥離 復付縫	

第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧(5)

編目	登録 名義	遺物 名義	出土地点	種類	基盤	法量(cm)			時期	詳細時期	胎土色調	胎土色	備考
						口径	高さ	底径					
206 71	A-X33Y17	黒色器	新B	11.1	4.45	6.5	古代	8C	Nd	褐色	墨書き	胎土分析No.2	
206 80	B-X42Y34 1号	黒色器	新B	12.2	9.6	8.0	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き		
207 80	A-X38Y26 1号	黒色器	新B	13.0	6.7	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
208 80	B-X38Y40 2号	黒色器	新B	14.0	9.3	古代	8C	2.5TY 2	褐色黃色	墨書き			
209 80	B-X43Y34 1号	黒色器	新B	10.0	6.1	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
210 80	A-X38Y29 1号	黒色器	新B	11.7	14.1	古代	9C	DTY 1	褐色	墨書き			
211 80	A-X38Y25 1号	黒色器	新B	8.1	4.4	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
212 80	B-X36Y40 1号	黒色器	新B	10.8	12.0	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
213 80	A-X39Y6 1号	黒色器	新B	18.6	7.3	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
214 80	A-X17-18Y26-27 1号	黒色器	新B	13.0	5.0	古代	8C	2.5TY 1	褐色白化	墨書き			
215 80	A-X34-15Y 25	黒色器	新B	6.2	4.8	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
216 80	A-X15Y36 2号	黒色器	新B	11.0	6.0	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き	胎土分析No.16		
217 73	A-X33-Y19-20-21	黒色器	新B	10.4	—	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き	胎土分析No.17		
218 80	A-X16Y10カクラン	黒色器	新B	11.2	—	古代	9C	2.5TY 2	褐色	墨書き			
219 80	B-X38Y42 1号	黒色器	新B	9.0	—	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
220 80	A-X36Y31 1号	黒色器	新B	10.9	—	古代	9C	Nd	褐色	墨書き			
221 80	A-X33Y30 1号	黒色器	新B	9.0	—	古代	9C	Nd	褐色	墨書き			
222 80	B-X35Y31 1号	黒色器	新B	12.0	—	古代	9C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
223 80	A-X30Y26カクラン	黒色器	新B	6.1	8.2	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
224 80	A-X37Y20 1号	黒色器	新B	10.4	—	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
225 80	A-X16Y25 1号	黒色器	新B	10.0	—	古代	8C	10TY 2	褐色	墨書き			
226 80	A-X11Y26カクラン	黒色器	新B	14.0	11.0	古代	9C	2.5TY 1	褐色	墨書き	墨書き付		
227 80	A-X15Y26カクラン	黒色器	新B	10.0	13.0	古代	9C	Nd	褐色	墨書き			
228 80	A-X18Y21 1号	黒色器	新B	12.0	—	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
229 73	A-X14-16Y17-22-23 1号	黒色器	新B	12.0	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
230 80	A-X37Y25カクラン	黒色器	新B	7.5	9.0	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
231 80	A-X15Y31 1号	黒色器	新B	11.0	29.1	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き	胎土分析No.15		
232 80	B-X33Y51 1号	黒色器	新B	10.0	—	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
233 80	A-X16Y19カクラン	黒色器	新B	11.0	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
234 80	B-X36Y31 1号	黒色器	新B	4.0	—	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
235 80	A-X39Y30カクラン	黒色器	新B	20.0	7.1	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
236 80	A-X10Y36 1号	黒色器	新B	6.0	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
237 80	A-X10Y36	黒色器	新B	6.0	—	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
238 80	B-X15Y27	黒色器	新B	7.0	—	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
239 80	A-X15Y29 1号	黒色器	新B	—	—	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
240 80	A-X18Y20 1号	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
241 80	A-X18Y21 1号	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
242 80	A-X16Y21 1号	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
243 80	A-X13Y19カクラン	黒色器	新B	—	—	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
244 80	A-X15Y36カクラン	黒色器	新B	—	—	古代	8C	Nd	褐色	墨書き			
245 80	A-表記	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き	他成層に織田作		
246 80	A-X18Y19カクラン	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き			
247 80	A-X14Y19カクラン	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	内面埋付			
248 73	A-X15Y19カクラン	黒色器	新B	—	—	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き	胎土分析No.18		
249 80	B-X38Y30カクラン	黒色器	新B	48.0	72.0	古代	8C	2.5TY 1	褐色	墨書き	胎土分析No.9		
250 80	A-X15Y19カクラン	黒色器	新B	—	—	古代	8C	DTY 1	褐色	墨書き			
251 73	X30Y4V3 1号	土器	新A	10.6	6.0	6.0	古代	8C	7.5TY 8	褐色	泥質物		
252 80	A-X10-11Y27-28カクラン	黒色器	新B	12.6	4.0	5.4	古代	9C	7.5TY 8	褐色	泥質物		
253 80	A-X13Y18カクラン	土器	新B	12.0	7.0	—	古代	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付		
254 80	A-X15Y20カクラン	土器	新B	11.0	5.0	5.4	古代	9C	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
255 80	B-X40Y30カクラン	土器	新B	12.0	3.0	—	古代	7.5TY 8	褐色	泥質物			
256 80	A-X15Y35 1号	黒色土器	新B	2.1	—	6.0	古代	10C-11C	10TY 7/4	褐色	泥質物		
257 80	A-X8731H30 1号	黒色土器	新B	2.0	—	—	古代	10YR 7/3	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付		
258 80	A-X15Y35 1号	黒色土器	新B	1.8	—	6.0	古代	10C-11C	7.5TY 7/4	褐色	泥質物	赤壁付	
259 80	A-X15Y20カクラン	黒色土器	新B	2.0	4.2	—	古代	9C	2.5TY 2	褐色	泥質物	赤壁付	
260 80	A-X10Y30 1号	黒色土器	新B	2.2	7.6	—	古代	8C 極手	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
261 73	A-X12Y11カクラン	黒色土器	新B	16.8	6.5	8.2	古代	9C	10YR 7/4	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
262 80	A-X10Y31 1号	黒色土器	新B	9.0	—	7.4	古代	9C 極手	7.5TY 6	褐色	泥質物	赤壁付	
263 80	A-X10Y19カクラン	土器	新B	13.0	—	5.7	古代	7C	10YR 7/4	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
264 80	A-X14Y19カクラン	土器	新B	14.0	12.0	6.0	古代	8C	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
265 80	A-X21Y8 1号	土器	新B	14.2	12.0	6.0	古代	9C	10YR 7/3	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
266 80	A-X15Y19カクラン	土器	新B	12.4	—	—	古代	8C 極手	10YR 6/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
267 80	A-X13Y29 1号	土器	新B	12.1	—	—	古代	9C	10YR 7/4	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
268 80	A-X16Y19カクラン	土器	新B	13.0	15.4	—	古代	8C	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
269 80	A-X18Y10カクラン	土器	新B	15.8	16.1	—	古代	9C	10YR 6/3	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
270 80	A-X15Y19カクラン	土器	新B	16.5	14.5	—	古代	8C	10YR 6/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
271 80	A-X13Y17	土器	新B	18.4	14.7	—	古代	9C	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
272 80	A-X16Y19カクラン	土器	新B	20.3	7.0	—	古代	9C-C	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
273 80	A-X16Y9カクラン	土器	新B	18.7	8.0	—	古代	8C 極手	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
274 80	A-X16Y25 1号	土器	新B	17.8	8.2	—	古代	9C	10YR 6/4	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	
275 80	A-X7Y32井水	土器	新B	20.0	10.0	—	古代	8C 極手	10YR 7/2	12.45-青褐色	泥質物	赤壁付	

第37表 下川原遺跡 土器・土製品一覧(6)

件名	写真 図版	遺構	出土点	種類	断面	法量(cm)			焼締	詳細時期	鉄色調	鉄色	備考
						上径	下径	高さ					
326 87		A-X10Y30I 墓	土師器	甕		22.4	(20.6)		古代?	8°C?	30Y R8.2	灰白色	復元品
327 87		A-X10Y33II 墓	土師器	甕		22.5	(6.7)		古代?	8°C	30Y R8.3	浅黄色	
328 88		B-X38-Y39IV-1 墓	土師器	甕		22.2	(29.0)		古代?	8°C	30Y R7.3	にふく青褐色	表面復元
329 72		A-X15Y13II 墓	土師器	甕		18.9	34.2		古代?	8°C~9°C	30Y R7.3	にふく青褐色	
380 88		A-X16Y33I 墓	土師器	甕		22.0	(5.7)		古代?	9°C	30Y R6.3	にふく青褐色	内部復元
381 88		A-X17-Y18Y23-32I 墓	土師器	甕		20.6	(28.7)		古代?	8°C~9°C	7.5Y R8.4	浅黄色	復元品
382 88		A-X15Y12~13	土師器	甕		21.9	(24.9)		古代?	8°C	30Y R8.2	灰白色	
383 88		A-X23Y17II 木座	土師器	甕		(9.2)			古代?	8°C~9°C	30Y R7.3	にふく青褐色	底部墨跡、外側復元
384 89		A-X15Y13II 壺	土師器	壺		26.2	(10.0)		古代?	8°C~9°C	2.5Y R2.3	灰白色	
385 89		A-X15Y13II 壺	土師器	壺		27.9	(8.6)		古代?	8°C~9°C	2.5Y R2.3	灰白色	
386 89		A-X16Y13II 壺	土師器	壺		26.4	(11.1)		古代?	8°C	30Y R8.3	にふく青褐色	復元品
387 89		B-X25Y13II 壺	土師器	壺		34.6	(34.9)		古代?	8°C	30Y R7.4	にふく青褐色	
388 89		A-X16Y13II 壺	土師器	壺		14.9	(5.7)		古代?	8°C?	30Y R7.3	にふく青褐色	
389 89		B-X37Y45II 壺	土師器	把手					古代?		30Y R8.4	浅黄色	
390 89		B-X37Y44II 壺	土師器	把手					古代?		30Y R8.3	浅黄色	
391 89		B-X36Y45II 壺	土師器	把手					古代?		2.5Y R7.4	にふく青褐色	
392 89		B-X37Y44II 壺	土師器	把手					古代?		2.5Y R8.4	浅黄色	
393 89		A-X16Y33II 壺	土師器	把手					古代?		30Y R8.3	浅黄色	
394 89		A-X16Y23II 壺	土師器	把手					古代?		30Y R7.3	にふく青褐色	
395 89		A-X17Y23II 壺	土師器	把手					古代?		2.5Y R8.3	灰白色	
396 89		A-X17Y23II 壺	土師器	把手					古代?		2.5Y R8.3	灰白色	
397 89		A-X17Y26II 壺	土師器	把手					古代?		30Y R8.2	灰白色	
398 89		A-X18Y25II 壺	土師器	把手					古代?		2.5Y R8.3	浅黄色	
399 89		A-X16Y25II 壺	土師器	—		24.0	(6.5)		古代?		2.5Y R8.4	浅黄色	平底型?
400 89		B-X42Y33II 壺	土師器	把手		5.5	38.2	1.5	古代?		30Y R7.4	にふく青褐色	瓶形?
401 89		B-X40Y39II 壺	土師器	把手		5.3	4.1	1.5	古代?		30Y R7.3	にふく青褐色	素盞G.48g
402 89		A-X16Y28II 壺	土師器	把手		5.3	4.2	1.5	古代?		30Y R8.2	灰白色	素盞G.21g
403 89		A-X18Y27II 壺	土師器	把手		5.3	3.9	1.5	古代?		2.5Y R7.4	にふく青褐色	素盞G.27g
404 89		A-X16Y29II 壺	土師器	土瓶		5	32.1	3.6	古代?		30Y R8.3	浅黄色	素盞G.30g
405 89		A-X16Y27II 壺	土師器	壺		5	4.9	4.4	古代?		20Y R8.2	灰白色	瓶形?
406 90		A-X16Y27II 壺	土師器	壺		8.8	4	3.5	中世?	2.5C前~中	20Y R8.3	灰白色	復元品、瓶形?
407 90		A-X17Y27II 壺	土師器	壺		7.5	3.5	4.5	中世?	2.5C前~中	20Y R8.3	灰白色	復元品
408 90		A-X14Y23II 壺	土師器	壺		7	4.5	4.5	中世?	2.5C前~中	20Y R8.3	灰白色	復元品
409 90		A-X17Y30II 壺	土師器	壺		7	4.5	4.5	中世?	2.5C前~中	20Y R8.3	灰白色	復元品
410 90		A-X14Y32II 壺	土師器	壺		7	4.5	4.5	中世?	2.5C前~中	20Y R8.3	灰白色	復元品

◆法量の( ) 内は埋形数値を示す。

第38表 下川原遺跡 石製品一覧

件名	遺物	写真図版	遺構	出土点	種類	材質	法量(cm・g)				備考
							長さ	幅	厚さ	重さ	
1	91	SD9	X10Y21	砾石	凝灰岩		76.4	41.0	36.5	147.0	
2	91	SD10	X15Y18	砾石	凝灰岩		95.8	41.4	29.7	137.0	
3	91	SD10	X15Y16	砾石	凝灰岩		76.1	55.5	40.0	163.0	
4	91		X14Y32II 壺	砾石	凝灰岩		55.3	27.8	20.7	43.0	
5	91		X18Y21I 壺	砾石	凝灰岩質砂岩		68.9	51.0	42.5	298.0	
6	90		X37Y47II 壺	磨製石斧	凝灰岩(岩片混じり)		11.0	5.8	2.4	298.6	
7	90		X38Y40II 壺	石核	凝灰岩(緑色)		11.0	9.0	7.0	501.77	

## 第Ⅷ章 自然科学分析

開辟大溝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡では、遺物整理期間（平成22年度）に自然科学分析の手法によって、より広い分野からの遺跡の評価を行う目的で、以下の自然科学分析を実施した。

花粉分析と植物珪酸体分析については、遺構の性格や古植生や農耕の復元を検討するために、五社遺跡、五社条里遺跡、水牧遺跡の3遺跡について実施した。また、五社遺跡では古墳時代から飛鳥時代の遺構から種実遺体が確認されたため、種実遺体分析もあわせて行った。リン酸分析は埋設された土器の性格を検討するために五社遺跡で行った。樹種同定は当時の木材利用や選材を検討する目的で開辟大溝遺跡、五社遺跡、水牧遺跡の3遺跡で実施した。石材鑑定は石材利用の検討を目的として、開辟大溝遺跡を除く4遺跡で実施した。漆膜分析では遺構から出土した漆器4点について、材料と塗装工程の情報を得る目的で実施した。放射性炭素年代測定は遺構の実年代を得るために五社遺跡と下川原遺跡で実施した。胎土分析は水牧遺跡と下川原遺跡の5世紀後半から8世紀の須恵器の産地推定を目的に実施した。

第39表 自然科学分析一覧

分析種類	分析名	分析者名	分析年度	対象
放射性炭素年代測定	下川原遺跡・五社遺跡における放射性炭素年代（AMS）	株式会社加速器分析研究所	平成22年度	下川原遺跡 灰化物1点 五社遺跡 灰化物1点
胎土分析	下川原遺跡出土須恵器の産地問題 水牧遺跡出土須恵器の産地問題	胎土分析研究会	平成22年度	水牧遺跡 須恵器10点 下川原遺跡 須恵器20点
樹種同定	開辟大溝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡 出土木製品の樹種同定	株式会社パレオ・ラボ	平成22年度	開辟大溝遺跡 木製品2点 五社遺跡 木製品3点 水牧遺跡 木製品12点
石材鑑定	五社遺跡他出土石製造物の石材鑑定	株式会社パレオ・ラボ	平成22年度	五社遺跡 石製品4点 五社条里遺跡 石製品1点 水牧遺跡 石製品6点 下川原遺跡 石製品7点
漆膜分析	開辟大溝遺跡他出土漆器の漆膜分析	株式会社パレオ・ラボ	平成22年度	開辟大溝遺跡 漆器1点 五社遺跡 漆器2点 水牧遺跡 漆器1点
花粉分析・植物珪酸体分析	五社遺跡における自然科学分析 五社条里遺跡における自然科学分析 水牧遺跡における自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	平成22年度	五社遺跡 垂穀植物各34点 五社条里遺跡 垂穀植物各15点 水牧遺跡 垂穀植物各7点
種実同定	五社遺跡における自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	平成22年度	五社遺跡 種実6式
リン酸分析	五社遺跡における自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	平成22年度	五社遺跡 垂穀植物12点

# 1 下川原遺跡・五社遺跡における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

## 1 測定対象試料

下川原遺跡は、富山県小矢部市野端（北緯 $36^{\circ} 40' 17''$ 、東經 $136^{\circ} 51' 32''$ ）に所在する。測定対象試料は、土坑（SK13）出土木炭（No 39：I AAA-100394）1点である（第40表）。

五社遺跡は、富山県小矢部市五社338-3（北緯 $36^{\circ} 41' 17''$ 、東經 $136^{\circ} 55' 5''$ ）に所在する。測定対象試料は、落ち込み（SX1）出土木炭（No 40：I AAA-100395）1点である（第40表）。

## 2 測定の意義

下川原遺跡SK13では弥生時代中期の土器が出土しているが、遺構の時期を確定するために年代測定をあわせて実施する。

五社遺跡では、富山県内で検出例の少ない飛鳥時代の集落遺跡が検出されている。しかし全体に須恵器の出土が少ないとから、より詳細な時期を明らかにするために年代測定を行う。

## 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/l (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

## 4 測定方法

3 MV タンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$ 濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

## 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (%) で表した値である（第40表）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、

1950年を基準年（0 yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第40表に、補正していない値を参考値として第41表に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、<sup>14</sup>C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) p MC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。p MCが小さい（<sup>14</sup>Cが少ない）ほど古い年代を示し、p MCが100以上（<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を第40表に、補正していない値を参考値として第41表に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma=68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma=95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によつても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として第41表に示した。历年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

## 6 測定結果

下川原遺跡S K13出土試料No39の<sup>14</sup>C年代は $2190 \pm 20$ yrBPである。历年較正年代は、 $1\sigma$ 历年年代範囲 $354 \sim 291$ ,  $231 \sim 199$ cal BCで確率が高く、 $2\sigma$ でも大きく変わらない。おおむね弥生時代中期頃に相当し、出土土器に矛盾しない結果と見られる。

五社遺跡S X 1出土試料No40の<sup>14</sup>C年代は $1600 \pm 30$ yrBPである。历年較正年代は $2\sigma$ で $415 \sim 538$ cal ADの範囲となり、 $1\sigma$ で見ると $484 \sim 533$ cal ADの範囲で比較的確率が高い。古墳時代中期から後期頃に相当する年代で、飛鳥時代よりも先行する。

炭素含有率はいずれも70%程度の十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

第40表 測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	p MC (%)
IAAA-100394	No39	下川原遺跡 土坑（SK13）	木炭	AAA	$-27.92 \pm 0.48$	$2,190 \pm 20$	$76.17 \pm 0.23$
IAAA-100395	No40	五社遺跡 落ち込み（SX1） 層位：②	木炭	AAA	$-27.54 \pm 0.59$	$1,600 \pm 30$	$81.99 \pm 0.26$

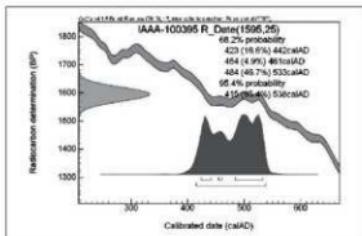
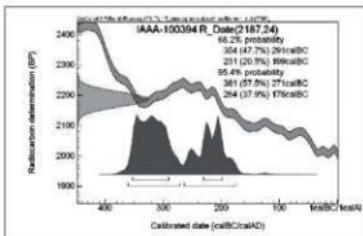
[#3645, 3646]

第41表 参考値

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		曆年校正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 曆年代範囲	2 $\sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-100394	2,240±20	75.71±0.21	2,187±24	354calBC - 291calBC (47.7%) 231calBC - 199calBC (20.5%)	361calBC - 271calBC (57.5%) 264calBC - 176calBC (37.9%)
IAAA-100395	1,640±20	81.56±0.24	1,595±25	423calAD - 442calAD (16.6%) 451calAD - 461calAD ( 4.9%) 484calAD - 533calAD (46.7%)	415calAD - 538calAD (95.4%)

[参考値]

## 文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

[参考] 曆年校正年代グラフ

## 2 下川原遺跡出土須恵器の産地問題

胎土分析研究会 三辻利一

### 1 はじめに

土器の蛍光X線スペクトルではKとCa, RbとSrはそれぞれ並んで観測されるので、ピークの高さの比は比較しやすい。全国各地の窯跡出土須恵器の蛍光X線スペクトルを比較した結果、これら4元素は地域差を有効に表す元素であることが発見された。地域差をさらに明確に示すために、各元素のピーク面積を計算し、K-Ca, Rb-Srの両分布図上にプロットした。その結果、各地の窯跡出土須恵器は窯（窯群）ごとにまとまり、かつ、窯が設置されている地域によって、地域差があることが実証された。さらに、日本列島の地質の基盤を構成する花崗岩類も両分布図上で地域差を示すことが実証された。この地域差の原因は花崗岩類を構成する最も重要な主成分鉱物である長石類に原因があることも分かった。花崗岩類や窯跡出土須恵器の地域差は長石類が支配していた訳である。

窯跡群の試料集団も両分布図上でまとまって分布することも示されている。この星雲状の母集団の相互識別には2群間判別分析法が適用されている。とくに、窯跡数が少ない5世紀代の須恵器の産地問題の研究では地元産か陶邑からの搬入品かをとう2群間判別分析法が有効であることも示されている。しかし、律令体制下の8世紀代では各地に多数の窯跡群があり、2群間判別の母集団の選択には慎重さが必要となる。そのため、律令体制下の須恵器の産地問題の研究ではまず、消費地遺跡出土須恵器の分析データを両分布図上にプロットし、集団がいくつかのグループに分かれるかどうかを定性的に検討した。その上で、地元すでに須恵器の大量生産が始まっているのであるから、同時期の、どの地元窯群の分布領域に対応するかを検討した。対応すれば、土器型式でもその推論が妥当かどうかを検討できる。その上で、判別分析にかけることにした。このような方法は律令体制下の須恵器の産地問題の研究法として、目下、その妥当性を検討中である。このような考え方で、下川原遺跡出土の古墳時代の須恵器と奈良・平安時代の須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

### 2 分析法

須恵器小破片（1cm四方程度以下）はタンゲステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの鋸剤試料を作成し、蛍光X線分析用試料とした。

使用した蛍光X線分析装置は理学電機製RIX2100（波長分散型）である。この装置にはTAP, Ge, LiFの3枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器が装填されており、コンピューターの制御によって自動的に交換された。この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換器も連結されており、試料の交換、データの打ち出しを含めて、完全自動分析ができる分析装置である。1日に50試料程度の試料が分析される。その中の1個は必ず、岩石標準試料JG-1であり、定量分析のための標準試料とした。

X線管球はRh管球（出力3.0kW）であり、50kV, 50mAの条件で使用された。Na, K, Ca, Fe, Rb, Srの6元素が測定された。1試料の測定時間は6～7分程度である。

### 3 分析結果

分析値は第42表にまとめられている。全分析値は同じ日に測定された岩石標準試料J G-1の各元素の蛍光X線強度で標準化した値で示されている。J G-1による標準化法は種々の点で胎土分析の研究では有効である。もし、%やppm表示が必要であれば、標準化値に日本地質調査所が公表しているJ G-1の分析値を乗すればよい。しかし、岩石学や「やきものの科学」の研究とは違い、地域差を比較する土器の胎土研究では%やppm表示は必要ではない。主成分元素と微量元素を同等に取り扱う上でも、マハラノビスの汎距離を計算する上でも、J G-1による標準化法がはるかに便利である。

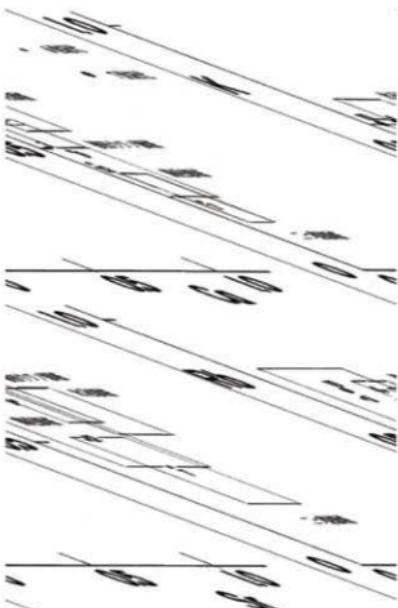
第42表に基づいて描いた、古墳時代の須恵器の両分布図を第101図に示す。比較のために、古墳時代の地元窯である水見市の圓カンデ窯、石川県羽咋市の柳田ウワノ1号窯、小松市の二つ梨殿様窯、さらに、古墳時代に須恵器を大量に生産した陶邑窯群の領域を長方形で示してある。この領域は定性的にしか領域を示さないが、消費地遺跡出土須恵器の産地をおおまかに推定する上に、手がかりが得られるので便利である。第101図をみると、両分布図で地元水見領域に分布する試料はないことがわかる。したがって、今回分析した古墳時代の須恵器の中には、地元産の須恵器はないことが分かる。No 4, 9の2点の試料は柳田領域の端に分布しており、6世紀代の須恵器窯跡である羽咋市の柳田ウワノ1号窯の製品である可能性はあるが、陶邑領域にも対応しており、陶邑産の須恵器である可能性もある。これに対して、No 3, 12の2点は柳田ウワノ領域にも対応せず、陶邑からの搬入品である可能性が高い。また、No 7は両分布図で二つ梨領域に対応しており、小松市の二つ梨殿様窯の製品である可能性が高い。このように、6世紀代の須恵器は柳田ウワノ窯、二つ梨殿様窯、陶邑窯群の、3ヶ所の産地からの製品が混ざっている可能性が出てきた。この段階で、土器型式からもこの推定結果が妥当であるかどうか吟味することが必要である。

7世紀代と推定されるNo10の須恵器は両分布図で陶邑領域にも対応するが、Kが比較的高く、また、Fe, Naが少ないという特徴から、この領域に対応する地元の窯の製品である可能性も残されている。もし、県内産の須恵器であれば、射水下条川右岸窯群、射水東端窯群、婦負窯群のある地域内の7世紀代の窯の製品に対応する可能性がある。

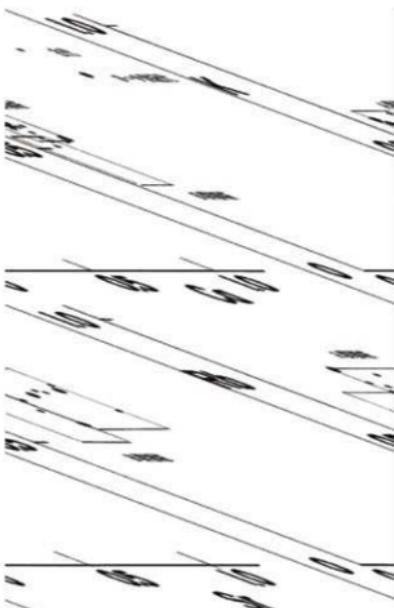
8～9世紀代の須恵器の分析結果は第102図に示されている。K-Ca分布図をみると、A群領域とした領域にまとまって分布することが分かる。同様に、Rb-Sr分布図でも一つの窯群の試料集団が広がる程度の領域の中にまとまって分布することが分かる。この領域をA群領域としてある。したがって、下川原遺跡の8～9世紀代の須恵器は同じ窯群の製品である可能性が高い。問題はこの領域に分布する須恵器の窯群は県内のどの窯群なのか、これまでに得られているデータから探ってみることにした。下川原遺跡の時期に対応する窯群の中でA群領域に対応するのは安居・岩木窯群、松永窯群、射水川左岸窯群、東端窯群などの下川原遺跡に近い窯群である。これらの地元窯群が下川原遺跡の8～9世紀代の須恵器の産地と推定される。また、Ca, Srが多くても上末窯群、滑川窯群の須恵器に対応する製品は検出されなかった。Ca, Srが少ない古沢窯群などの水牧遺跡のB群領域に対応する須恵器も検出されなかった。

第42表 下川原遺跡 出土須恵器堂光X線分析データ

分析 No.	遺物 番号	回収 番号	地区・出土地点	種類	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
1	196	88	A-S D10 X13Y16	須恵器	杯B	S C 第3四半期	0.537	0.221	1.49	0.714	0.674	0.310	「天平」の墨書き・縦刻
2	305	93	A-S D9 X13Y17	須恵器	杯B	S C	0.623	0.084	2.29	0.788	0.413	0.139	墨書き・縦刻
3	77	84	B-X35-Y36-Y50-51 II層	須恵器	杯H	MT15(6 C前半)	0.500	0.036	2.13	0.681	0.210	0.101	
4	78	84	B-X35Y51 II層	須恵器	杯H	MT15(6 C前半)	0.607	0.134	2.20	0.708	0.381	0.234	
5	349	95	B-X38Y39 II層	須恵器	壺	S C	0.508	0.097	1.36	0.628	0.369	0.147	彫描波状文
6	183	88	A-S D10 X13Y16	須恵器	杯壺	9 C	0.591	0.152	1.71	0.705	0.565	0.278	
7	71	84	A-	須恵器	杯壺	MT15(6 C前半)	0.284	0.066	1.28	0.395	0.278	0.080	
8	250	91	A-X15Y13 カクラン	須恵器	杯壺	S C	0.541	0.125	1.40	0.707	0.409	0.171	縦刻?
9	81	84	A-X17Y27 I層	須恵器	杯H	TK10(6 C中)	0.490	0.084	2.20	0.671	0.358	0.158	
10	88	84	A-X16Y25 I層	須恵器	高杯	T K209(7 C前半)	0.598	0.060	2.45	0.709	0.228	0.173	
11	186	88	A-S D10 X12Y16	須恵器	杯壺	9 C	0.584	0.112	1.64	0.744	0.414	0.235	墨痕
12	69	84	A-X6Y31	須恵器	杯壺	TK47(5 C後半)	0.443	0.035	2.54	0.514	0.239	0.165	縦刻
13	291	92	A-X15Y13 III層	須恵器	杯B	S C	0.573	0.153	1.24	0.775	0.531	0.314	
14	295	92	A-X13-15Y17~19 カクラン	須恵器	杯B	S C	0.528	0.178	1.25	0.625	0.692	0.329	
15	331	94	A-X18Y23 I層	須恵器	横瓶	S C	0.600	0.147	1.62	0.699	0.592	0.226	
16	316	93	A-X15Y36 II層	須恵器	長颈瓶	S C	0.640	0.206	1.43	0.728	0.689	0.271	
17	317	93	A-X13~15Y10~12 カクラン	須恵器	長颈瓶	S C	0.588	0.175	1.57	0.726	0.449	0.182	
18	348	95	A-X15Y16 カクラン	須恵器	壺	S C	0.527	0.126	1.40	0.672	0.412	0.188	
19	276	92	A-搏土	須恵器	杯A	S C	0.590	0.128	2.34	0.686	0.508	0.217	底部焼成前の傷?
20	275	92	A-	須恵器	杯A	S C	0.601	0.111	2.05	0.573	0.406	0.241	



第101図 下川原遺跡出土須恵器(6, 7世紀代)の両分布図



第102図 下川原遺跡出土須恵器(8, 9世紀代)の両分布図

### 3 水牧遺跡出土須恵器の産地問題

胎土分析研究会 三辻利一

#### 1 はじめに

日本列島の地質の基盤を構成する花崗岩類や、全国各地の窯跡出土須恵器がK-Ca, Rb-Sr分布図で地域差を示すことから、母岩の長石類が地域差を支配していることが分かった。窯間の相互識別には長石系4因子を使った2群間判別分析法が有効であることも実証されている。ただ、二つの母集団をどのように選択するかの問題はまだ、十分には解決されていない。窯跡数の少ない5世紀代については、地元産の製品か、陶邑からの搬入品かをとう2群間判別分析法が有効であることはすでに実証されている。6世紀代に入ると、地方窯が少し増え、さらに、大阪府北部の吹田丘陵に100基近い窯跡群があるところから、母集団の選択はやや複雑になる。8世紀代では須恵器生産は古代最大の窯業生産となり、各地に大規模な窯跡群がみつけられている。当然、8世紀代の消費地遺跡から出土する須恵器の生産地は地元窯群である可能性が高くなる。ただ、地元の、どの窯群の製品であるかが問題となる。2群間判別分析の二つの母集団をどのようにして選択するかの問題はまだ、未解決の問題である。現在、消費地遺跡から出土する須恵器の胎土が単色なのか、それとも、複数なのかを両分布図を使って定性的に探査している段階である。このような状況を反映して、水牧遺跡出土須恵器の蛍光X線分析の結果について報告する。

#### 2 分析法

1cm四方程度以下の須恵器小破片試料をタンクスチレンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料は塩化ビニル製リングを枠にして、高圧をかけてプレスし、内径20mm、厚さ5mmの錠剤試料を作成し、蛍光X線分析用試料とした。

理学電機製RIX2100（波長分散型）の装置で分析した。この装置にはTAP, Ge, LiFの3枚の分光結晶と、ガスフロー比例計数管、シンチレーションカウンターの二つの検出器が装填されている。これらはコンピューターの制御によって自動的に交換された。Na, K, Ca, Fe, Rb, Srの6元素を測定した。X線管球はRh管球（3.0kW）である。50kV, 50mAの条件で使用した。さらに、この装置には50試料が同時に搭載できる自動試料交換器が連結されており、完全自動分析ができる装置である。1試料の測定時間は6～7分である。バックグラウンドを差し引いて、正味のカウント数を求めた。定量分析の標準試料として日本地質調査所が配布している岩石標準試料J G-1が使用された。

#### 3 分析結果

分析データは第43表にまとめられている。全分析値は同じ日に測定した岩石標準試料J G-1による標準化値で表示されている。この表示法のほうが大量の土器試料を分析し、データ解析する上に便利であるからである。もし、%やppm表示が必要であれば、標準化値に日本地質調査所が公表しているJ G-1の各元素の分析値を乗すればよい。ただ、土器の生産・供給関係を再現し、その背後にある社会体制を考察する胎土研究では岩石学や「やきもの」の科学のように、主成分元素を酸化物形で%表示する必要性はない。微量元素を含めて地域差を有効に示す元素を主成分元素と同等に取り扱いでいる表示法のほうが便利である。それがJ G-1による標準化法である。

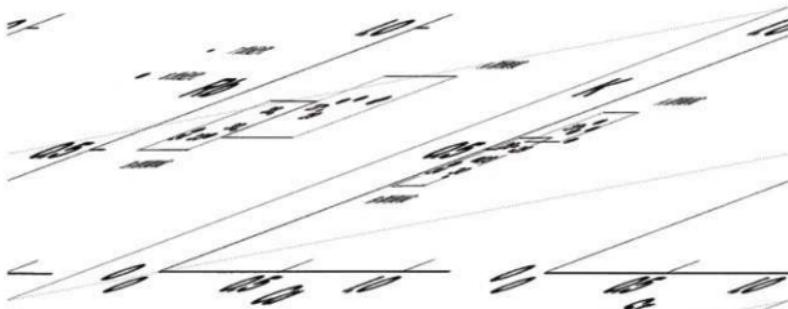
第43表の結果に基づいて作成した両分布図を第103図に示す。明らかに、二つの集団があることが

分かる。A群領域は下川原遺跡の8～9世紀代の須恵器が分布する領域と同じ領域であり、これをA群領域とした。第103図から、A群領域に対応する須恵器が数点あることが分かる。これらは下川原遺跡の須恵器と同じ生産地の須恵器である可能性が高い。これに対して、明らかに、もう一つの集團があることが分かる。これらの試料集團を包含するようにして、B群領域を描いてある。No 23, 24, 28, 30の4点の須恵器がB群に相当する。A, B群の須恵器に共通するのはFe量が少ない点である。この特性は富山県内の窯群出土須恵器の共通の特徴である。8世紀代の須恵器についてみると、No 21, 22, 25, 26の4点はA群領域に対応するが、Na因子でも類似しており、Naがやや少ないNo 23, 24の須恵器胎土とは異なる。No 23, 24はB群に分類された須恵器である。これら4点の須恵器は、A群に分類された下川原遺跡の8～9世紀代の須恵器や古代の須恵器と同じ生産地の製品である可能性が高い。

問題はA群領域、B群領域が富山県内の、同時期のどの窯群に対応するかである。水牧遺跡に時期的に対応するA群は松永窯群、安居窯群などであり、Ca, Srが比較的少ないB群領域に対応する須恵器は射水下条川右岸群、古沢・センガリ窯などの婦負窯群の製品である。これらの窯群の中に産地候補があると推定される。

第43表 水牧遺跡 出土須恵器蛍光X線分析データ

分析 No	遺物 番号	図版 番号	地区・出土地点	種類	器種	時期	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	備考
21	58	67	A-X50Y80Ⅲ層	須恵器	杯壺	8C	0.576	0.165	1.51	0.704	0.652	0.266	
22	54	67	A-X41-X46Y85Ⅱ～Ⅲ層	須恵器	杯壺	8C	0.607	0.166	1.56	0.701	0.642	0.262	
23	75	68	A-X43Y78Ⅱ層	須恵器	杯A	8C後半	0.461	0.079	1.73	0.564	0.338	0.143	
24	77	68	A-X44-X45Y82-Y85 Ⅱ-Ⅲ層	須恵器	杯A	8C後半	0.444	0.034	1.96	0.584	0.231	0.051	
25	92	68	A-X43-X50Y87-Y85 Ⅱ-Ⅲ層	須恵器	短腹壺	8C後半	0.579	0.224	1.27	0.713	0.549	0.239	
26	7	66	B-SI2 No1 SIIID区	須恵器	瓢	7C後半	0.531	0.261	1.65	0.699	0.497	0.335	
27	41	67	B-X40Y57Ⅰ層	須恵器	杯H	TK209～TK217 (7C前半)	0.589	0.148	1.65	0.682	0.487	0.181	
28	16	66	C-SI4 No21 A区	須恵器	杯壺	7C後半	0.523	0.089	1.38	0.652	0.343	0.132	
29	17	66	C-SI4 No3	須恵器	高杯	7C後半	0.497	0.126	1.16	0.665	0.506	0.216	
30	44	67	C-X18Y30Ⅰ層	須恵器	碗	TK209～TK217 (7C前半)	0.390	0.135	1.40	0.580	0.368	0.118	



第103図 水牧遺跡出土須恵器の両分布図

## 4 開跡大滝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡出土木製品の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

### 1はじめに

開跡大滝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡はいずれも小矢部市に所在する遺跡である。開跡大滝遺跡では近世以降、五社遺跡では主に飛鳥時代・平安時代・中世、水牧遺跡では古代と中世の遺構が検出されている。各遺跡から出土した木製品および加工木27点の樹種同定を行なった。

### 2 試料と方法

試料は、開跡大滝遺跡から2点（No1, 2）、五社遺跡から13点（No3～15）、水牧遺跡から12点（No16～27）の合計27点で、内容はいずれも漆器・下駄・板材などの木製品や加工木である。

方法は、本取りの確認後、剃刀を用いて試料の3断面（横断面・接線断面・放射断面）から切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。

### 3 結果

樹種同定の結果、針葉樹はスギ、ヒノキ、アスナロの3分類群、広葉樹はブナ属、ケヤキ、モクレン属の3分類群、合計6分類群が確認された。遺跡別に樹種を集計したものを第44表に、結果の一覧を第45表に示す。

第44表 遺跡別集計結果

樹種／器種	開跡大滝遺跡						五社遺跡						水牧遺跡							
	下駄		漆器皿		円形板	加工木	漆器椀	折敷	折敷？	栓	板材	棒材	下駄		加工木		漆器皿		板材	棒材
スギ					1			1	1	1	3	2	1				3	6	19	
ヒノキ									1							1			2	
アスナロ	1																		1	
ブナ属		1																	1	
ケヤキ							2												3	
モクレン属							1												1	
総計	1	1	1	1	2	2	1	1	3	2	1	1	1	1	1	3	6	27		

以下に、同定された分類群の木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

- (1) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don スギ科 図版1 1a-1c (No10)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急である。樹脂細胞は主に晩材部に接線状に配列する。分野壁孔は大型のスギ型で、1分野に通常2個並ぶ。

スギは暖帯・温帯下部に生育する。材は比較的軽軟で切削加工は容易、保存性は中庸で割裂性は大きい。

- (2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版1  
2a-2c (No13)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は主に晩材部に散在する。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個存在する。

ヒノキは温帯から暖帯に分布する。材は加工容易で割裂性は大きく、耐朽性・耐湿性は著しく高く、

狂いが少ない。

(3) アスナロ *Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図版1 3a-3c (No.2)

仮道管、樹脂細胞、放射組織からなる針葉樹である。早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、樹脂細胞が豊富である。分野壁孔は小型のスギ型～ヒノキ型で、1分野に不揃いに3～4個存在する。

アスナロは温帯に分布する常緑高木である。材は、加工性・割裂性は中庸だが、耐朽性・保存性が高い。

(4) ブナ属 *Fagus* ブナ科 図版2 4a-4c (No.1)

小型で単独の道管が密に散在し、晩材部ではやや径を減する散孔材である。道管の穿孔は單一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、單列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬・緻密・韌性があるが、保存性は低い。

(5) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版2 5a-5c (No.4)

大型の道管が年輪界のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集團をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は單一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は異性で上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や溪畔によく生育する。材は重硬で狂いが出ない。

(6) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 図版2 6a-6c (No.7)

小型の道管が単独もしくは3～4個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は單一でやや縦に長く、道管相互壁孔は対列～階段状である。放射組織は1～2細胞幅で上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

モクレン属は温帯から暖帯上部に分布する常緑または落葉の低木・高木で、タイサンボク、ホオノキ、モクレン、コブシなどがある。材は一般にやや軽軟または中庸程度、緻密で狂いが少なく、加工が容易である。

#### 4 まとめ

針葉樹3分類群、広葉樹3分類群、合計6分類群が確認されたが、全体としてスギが過半数を占めていた。また、木取りについては円形板や折敷で柾目取りがみられたが、棒材や板材では板目取りが多い傾向にあった。開跡大滝遺跡ではブナ属とアスナロの2分類群が確認され、漆器皿がブナ属、下駄(歯)がアスナロであった。五社遺跡ではスギ、ヒノキ、ケヤキ、モクレン属の4分類群が確認され、広葉樹では漆器類にケヤキ、加工木にモクレン属が使用されているが、その他の折敷・栓?・円形板・板材・棒材は、折敷で1点ヒノキが検出されている他はすべてスギであった。水牧遺跡ではスギ、ヒノキ、ケヤキの3分類群が検出され、漆器はケヤキ、加工木はヒノキ、下駄・棒材・板材はすべてスギであった。

スギの利用が多い傾向は、日本海側の遺跡出土木材の樹種構成と一致すると言える(山田, 1993)。スギ材は生長が早い大径直材の割に、比重が軽い、割裂性が高い、人為的に乾燥させることができという利点がある。保存性はやや低いが、分割しやすく製材しやすい材であるといえる。スギ以外の樹種では、漆器類を除くと、水牧遺跡出土の加工木と五社遺跡の折敷でヒノキ、開跡大滝遺跡の下駄(歯)でアスナロ、五社遺跡の加工木でモクレン属が検出されている。漆器類については、開跡大滝遺跡で

はブナ属、五社遺跡と水牧遺跡ではともにケヤキが利用されていた。木取りはすべて横木取りである。漆器木地は全国的にブナ属、ケヤキ、トチノキが多く用いられ、使用される樹種は限定される傾向にある（山田, 1993）。

### 引用文献

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史－、  
植生史研究特別第1号、242p、日本植生史学会。

第45表 樹種同定結果一覧

No	遺跡名・地区名	遺構番号	出土地点	遺物番号	種類	樹種	木取り
1	開辟大滝	S D 4	X37 Y 48	2	漆器皿	ブナ属	横木取り
2	開辟大滝	S D 3	X20 Y 23	1	下駄(歯)	アスナロ	追柾目
3	五社-A	S D 5	X21 Y 211	1	円形板	スギ	柾目
4	五社-A	S D 6	X155 Y 195	5	漆器椀	ケヤキ	横木取り
5	五社-A	S D 6	X155 Y 195	3	折敷?	スギ	柾目
6	五社-A	S D 6	X155 Y 195	4	板材	スギ	柾目
7	五社-A	S D 6	X155 Y 195	6	加工木	モクレン属	角材
8	五社-A	S D 6	X155 Y 195	2	折敷	スギ	柾目
9	五社-A		X196 Y 154 III層	8	漆器椀	ケヤキ	横木取り
10	五社-A		X153 Y 193 III層	11	板材	スギ	板目
11	五社-B	B-S D 9	X175 Y 228	7	板材	スギ	板目
12	五社-B		X181 Y 228 III層	9	栓	スギ	芯無削出
13	五社-C		X204 Y 254 I 層	10	折敷	ヒノキ	追柾目
14	五社-C		X195 Y 252 V 層	12	棒材	スギ	角材(板目)
15	五社-C		X197 Y 252 V 層	13	棒材	スギ	角材(板目)
16	水牧-A		X46 Y 81 I 層	11	板材	スギ	板目
17	水牧-A		X53 Y 100 II層	10	板材	スギ	板目
18	水牧-B	S K 10		2	加工木	ヒノキ	角材
19	水牧-B	S K 9		1	板材	スギ	柾目
20	水牧-B	S D 14-A	X31 Y 38	8	棒材	スギ	角材
21	水牧-B	S D 14-A	X31 Y 38	7	棒材	スギ	角材(板目)
22	水牧-B	S D 13-A	X30 Y 42	6	棒材	スギ	芯無削出
23	水牧-B	S D 13-A	X30 Y 42	4	棒材	スギ	角材(板目)
24	水牧-B	S D 13-A	X30 Y 42	5	棒材	スギ	角材(板目)
25	水牧-B	S D 13-A	X30 Y 42	3	棒材	スギ	角材(板目)
26	水牧-C	S D 16	X20 Y 29	9	漆器皿	ケヤキ	横木取り
27	水牧-C		X18 Y 18 I 層	12	下駄	スギ	板目

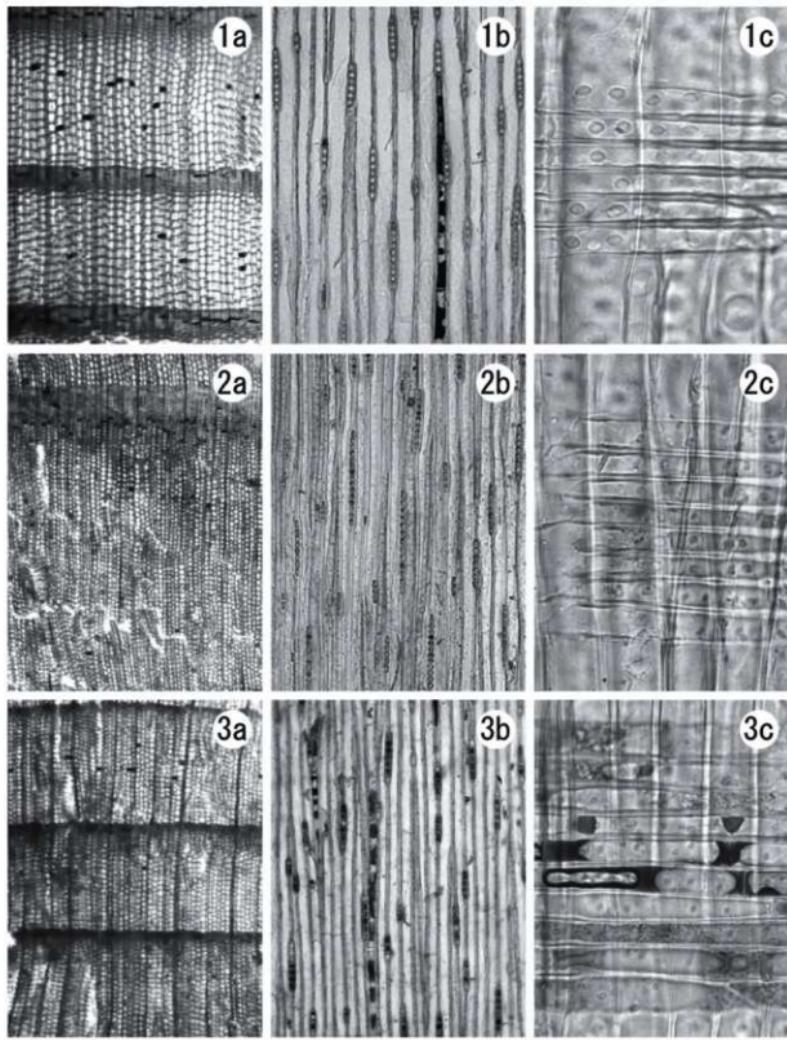


写真1 出土材の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c, スギ(No10), 2a-2c, ヒノキ(No13), 3a-3c, アスナロ(No2),

a : 横断面(スケール=500μm), b : 接縫断面(スケール=200μm), c : 放射断面(スケール=50μm)

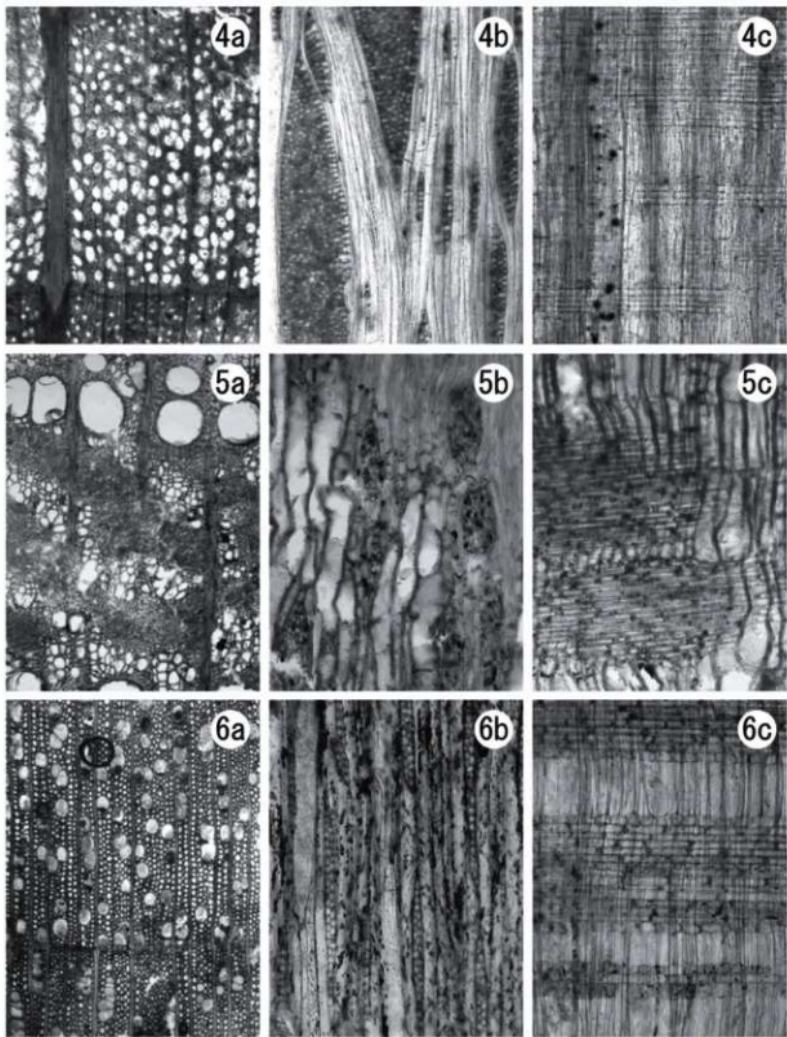


写真2 出土材の光学顕微鏡写真(2)

4a-4c. ブナ属(No.1), 5a-5c. ケヤキ(No.4), 6a-6c. モクレン属(No.7)

a:横断面(スケール=500μm), b:接線断面(スケール=200μm), c:放射断面(スケール=200μm)

# 5 五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡出土石製遺物の石材鑑定

藤根 久・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

## 1 はじめに

五社遺跡は、富山県小矢部市五社地内の小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地の扇端部に立地し、飛鳥時代、平安時代、中世～近世などの遺物が出土している遺跡である。五社条里遺跡は、五社遺跡に隣接する近世の遺跡である。水牧遺跡は、小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地の扇端部付近の微高地に立地し、古墳時代、古代～近世の遺物が出土している遺跡である。下川原遺跡は、弥生時代中期～終末および古代の遺跡である。ここでは、五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡から出土した石製遺物の石材鑑定を行った。

## 2 試料と方法

石製遺物は、五社遺跡から4点、五社条里遺跡から1点、水牧遺跡から6点、下川原遺跡から7点である（第46表）。石製遺物の石材鑑定は、主に肉眼により行った。なお、USBマイクロスコープを用いて代表的な石材の表面組織を撮影した（写真1）。

## 3 結果

肉眼による石製遺物の石材鑑定を行った結果を、第46表に示す。

以下に、鑑定した石製遺物にみられる岩石のうち、典型的な岩石の特徴について記載した。岩石の記載は、表面観察による色調や構成鉱物、岩石組織あるいは断口の特徴等について行った。なお、岩石名？は、付した岩石名の可能性が高いが、風化が著しいなど岩石組織が明瞭でなく十分鑑定できなかつた岩石である。

### 1) 頁岩（写真1-1）

白色～淡黒色、緻密な岩石である。

### 2) 砂岩（写真1-2）

灰色～黒灰色、細粒質の粒子から構成される。

### 3) 凝灰岩類（写真1-3）

緑灰色～白色～灰色、泥質～砂岩質の緻密な岩石である。岩片を含む場合がある。

### 4) 流紋岩（写真1-4）

黄白色～乳白色、斑晶質の岩石もある。

### 5) 蛇紋岩（写真1-5）

黒色～淡黄色、不均質岩石、表面は脂肪のような光沢を呈し滑らかである。

### 6) 滑石類（写真1-6）

淡黄色、手触り感において滑らかで軟質の岩石である。

## 4 考察

第47表に、各石製遺物と岩石種について集計した表を示す。なお、石製遺物名および岩石名における

る？付きは、相当する遺物名および岩石名に含めて示した。

以下では、遺跡ごとに、主な石製造物について、使用石材の特徴について述べる。

#### 〔五社遺跡〕

飛鳥時代の敲石は砂岩であった。平安時代の砥石は凝灰岩類であった。中世～近世の砥石は凝灰岩類と流紋岩であった。

#### 〔五社条里遺跡〕

近世の棒状製品は滑石であった。

#### 〔水牧遺跡〕

古墳時代の紡錘車は蛇紋岩であった。中世の地輪は凝灰岩類であった。中世～近世の砥石は砂岩と頁岩と凝灰岩類および流紋岩であった。

#### 〔下川原遺跡〕

弥生時代中期～終末の磨製石斧は凝灰岩類、石核も凝灰岩類であった。古代の砥石は凝灰岩類であった。

**第46表 各遺跡出土土器とその石材**

No	遺跡名・地区名	遺構番号	出土地点	遺物番号	種類	材質
1	五社-B	S D 2	No18	2	砥石	凝灰質砂岩
2	五社-B		X178Y229Ⅲ層	3	砥石	流紋岩
3	五社-C	S I 1	No 1	1	敲石	砂岩
4	五社-C		X197Y255 I層	4	砥石	凝灰岩(緑色)
5	五社条里	S D 5		1	棒状製品	滑石
6	水牧-A		X48Y90 II層	3	砥石	流紋岩
7	水牧-A		X55Y90 II層	4	砥石	頁岩
8	水牧-B		X26Y53 I層	6	地輪	凝灰質砂岩
9	水牧-B	S D13-A	X27Y51	1	砥石?	砂岩
10	水牧-B		X41Y58 I層	5	紡錘車	蛇紋岩
11	水牧-C		X23Y35 I層	2	砥石	凝灰岩
12	下川原-A	S D-9	X10Y21	1	砥石	凝灰岩
13	下川原-A	S D-10	X15Y16	3	砥石	凝灰岩
14	下川原-A	S D-10	X15Y18	2	砥石	凝灰岩
15	下川原-A		X14Y32 I層	4	砥石	凝灰岩
16	下川原-A		X18Y21 I層	5	砥石	凝灰質砂岩
17	下川原-B		X38Y40 II層	7	石核	凝灰岩(緑色)
18	下川原-B		X37Y47 II層	6	磨製石斧	凝灰岩(岩片混じり)

第47表 器種と石材

大分類	中分類	材質	五社		五社 条里	水牧			下川原			総 計
			敲 石	砥 石		棒 状 製 品	砥 石	紡 錘 車	地 輪	磨 製 石 斧	砥 石	
堆積岩類	碎屑岩	頁岩				1						1
		砂岩	1			1						2
	凝灰岩					1			1	4		6
	火山碎屑岩	凝灰岩(緑色)		1							1	2
		凝灰質砂岩		1				1		1		3
火成岩類	火 山 岩	流紋岩		1		1						2
変成岩類		蛇紋岩					1					1
鉱物類		滑石			1							1
総 計			1	3	1	4	1	1	1	5	1	18

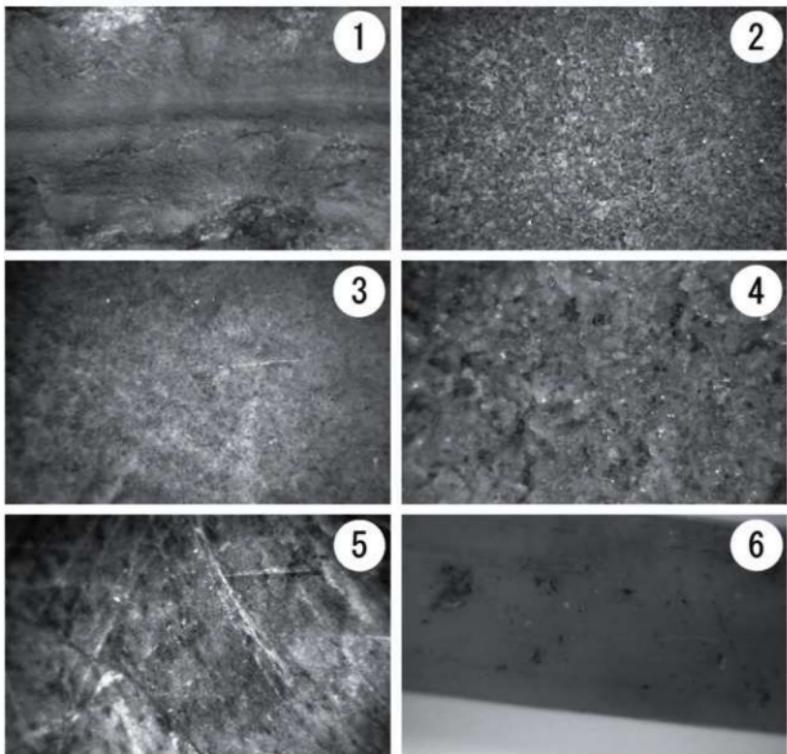


写真1 石製品石材のマイクロスコープ写真

1. 頁岩(水牧, №7) 2. 砂岩(水牧, №9) 3. 蒸灰岩(水牧, №11)  
4. 流紋岩(水牧, №6) 5. 蛇紋岩(水牧, №10) 6. 滑石(五社条里, №5)

# 6 開辟大滝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡出土漆器の塗膜分析

藤根久・竹原弘展（パレオ・ラボ）

## 1 はじめに

開辟大滝遺跡・五社遺跡・水牧遺跡は、富山県小矢部市小矢部川と庄川によって形成された複合扇状地の扇端部に立地する遺跡である。開辟大滝遺跡では中・近世、五社遺跡では主に飛鳥時代・平安時代・中近世、水牧遺跡では古代と中近世の遺構が検出されている。

ここでは、各遺跡から出土した漆器試料について、それぞれ塗膜薄片を作成し、顕微鏡観察、X線分析および赤外分光分析を行い、塗膜の構造および材料を検討した。なお、塗膜の顕微鏡観察と赤外分光分析は藤根が担当し、X線分析は竹原が担当し、本文は藤根がまとめた。

## 2 試料と方法

分析試料は、開辟大滝遺跡の漆器皿1点、五社遺跡の漆器椀2点、水牧遺跡の漆器皿1点である（第48表）。

各塗膜試料は、第48表に示す塗膜層を本胎とともに極少量採取した。塗膜試料は、高透明エポキシ樹脂を使用して試料を包埋した後、薄片作製機を用いて断面の薄片を作製した。

第48表 各漆器の塗膜分析試料とその詳細

試料No	遺跡	出土地点	種類	時期	塗膜分析面	特徴	分析法
1	開辟大滝	S D 4	漆器皿	中世～近世	内面	黒漆、赤色絵付け	塗膜分析・赤外分光分析
2	五社	A-S D 6	漆器椀	近世	外面	黒漆	塗膜分析・赤外分光分析
3		A-	漆器椀	近世	内面	黒漆	塗膜分析・赤外分光分析
4	水牧	C-S D 16	漆器皿	中世～近世	内面	黒漆	塗膜分析・赤外分光分析

各塗膜薄片は、予め塗膜構造を調べるために光学顕微鏡で観察した。

無機成分を調べるためにエネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡で調べた。観察および測定は、走査型電子顕微鏡（日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM）による反射電子像の観察および付属するエネルギー分散型X線分析装置（同JED-2200）による定性・簡易定量分析を行った。

また、漆成分を調べるために、赤外分光分析を行った。試料は、各塗膜の表面部分において手術用メスなどを用いて2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンドで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光㈱製FT/IR-410、IRT-30）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

## 3 結果および考察

塗膜薄片の光学顕微鏡観察および分析の結果は、以下の通りである。

なお、各試料の塗膜についてのX線分析は、測定位置を各写真に示し、測定結果を第49表に示した。また、各試料の表面部分の赤外吸収スペクトル図についても第105・106図に示した。縦軸が透過率

(% R), 横軸が波数 (Wavenumber ( $\text{cm}^{-1}$ ) ; カイザー) である。各スペクトル図は、ノーマライズしてあり、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す (第50表)。

第49表 各塗膜試料の塗膜層の分析結果

試料No	点分析	C	MgO	$\text{Al}_2\text{O}_3$	$\text{SiO}_2$	$\text{SO}_3$	Cl	$\text{K}_2\text{O}$	$\text{CaO}$	FeO	HgO	Total
1	1	66.76	—	0.22	1.29	8.93	—	—	—	—	22.80	100.00
	2	94.63	—	0.18	0.56	1.61	—	—	0.42	2.60	—	100.00
	3	61.89	—	0.48	0.06	2.65	0.18	0.30	0.74	33.68	—	99.98
	4	89.36	—	0.07	0.61	3.20	0.69	—	0.51	5.57	—	100.01
2	1	74.87	—	0.18	0.73	2.75	—	—	2.78	18.69	—	100.00
	2	74.15	—	0.68	0.43	1.92	0.45	—	2.69	19.68	—	100.00
3	1	59.30	0.15	0.76	1.32	3.19	0.25	—	1.40	33.64	—	100.01
	2	89.97	—	0.51	0.63	2.53	—	—	1.14	5.22	—	100.00
	3	86.82	0.14	0.54	0.58	1.72	0.33	—	1.63	8.23	—	99.99
4	1	84.82	—	1.53	1.49	3.05	0.61	—	4.22	4.28	—	100.00
	2	95.54	—	0.37	0.89	1.72	—	—	1.48	—	—	100.00

## 開口大淹遺跡、漆器皿 (試料No 1)

この漆器皿は、外面には黒色漆が塗布され、内面には黒色漆に赤色の絵付けが施されている。

内面絵付け部分の塗膜観察では、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1 ~ c 3 層からなる (写真 1-1 a)。下地層 b 層は微細な炭粉からなり、X線分析では鉄 (FeO) が 5.57% 含まれていた。塗膜層 c 1 層は不透明の黒色層からなり、X線分析では鉄 (FeO) が 33.68% 含まれていたことから、鉄粉が混入されていると考えられる。塗膜層 c 2 層は、透明の淡褐色層からなる。塗膜層 c 3 層は、やや不透明の褐色層からなり、水銀朱の粒子が含まれ、X線分析では水銀 (HgO) が 22.80% 含まれていた。表面塗膜層の赤外分光分析では、漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク (No 6 ~ No 8) とほぼ一致したことから、漆塗膜層と判断される。

## 五社遺跡、漆器碗 (試料No 2)

この漆器碗は、内外面とも黒色漆が塗布されている。

外面の塗膜観察では、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1 ~ c 2 層からなる (写真 1-2 a)。下地層 b 層は微細な炭粉からなり、X線分析では鉄 (FeO) が 19.68% 含まれていた。塗膜層 c 1 層は透明の淡褐色層である。塗膜層 c 2 層はやや不透明の黒褐色層で、X線分析では鉄 (FeO) が 18.69% 含まれていた。表面塗膜層の赤外分光分析では、漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク (No 6 ~ No 8) とほぼ一致したことから、漆塗膜層と判断される。

## 五社遺跡、漆器碗 (試料No 3)

この漆器碗は、内外面とも黒色漆が塗布されている。

## 第50表 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No	生漆		ウルシ成分
	位置	強度	
1	2925.48	28.5337	
2	2854.13	36.2174	
3	1710.55	42.0346	
4	1633.41	48.8327	
5	1454.06	47.1946	
6	1351.86	50.8030	ウルシオール
7	1270.86	46.3336	ウルシオール
8	1218.79	47.5362	ウルシオール
9	1087.66	53.8428	
10	727.03	75.3890	

内面の塗膜観察では、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1・c 2 層からなる（写真 2-1 a）。下地層 b 層は微細な炭粉からなり、X 線分析では鉄（FeO）が 8.23% 含まれていた。塗膜層 c 1 層は透明の淡褐色層である。塗膜層 c 2 層は、やや不透明の黒褐色層からなり、X 線分析では鉄（FeO）が 33.64% 含まれていたことから、鉄粉が混入されていると考えられる。表面塗膜層の赤外分光分析では、漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク（No. 6～No. 8）と一致したことから、漆塗膜層と判断される。

#### 水牧遺跡、漆器皿（試料 No. 4）

この漆器皿は、内外面とも黒色漆が塗布されている。

内面の塗膜観察では、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1・c 2 層からなる（写真 2-2 a）。下地層 b 層は微細な炭粉からなり、塗膜層 c 1 層は透明の淡褐色層である。塗膜層 c 2 層は、やや不透明の褐色層からなり、X 線分析では鉄（FeO）が 4.28% 含まれていた。表面塗膜層の赤外分光分析では、漆の成分であるウルシオールの吸収ピーク（No. 6～No. 8）と一致したことから、漆塗膜層と判断される。

第51表 各漆器試料と塗膜分析結果

試料No	遺跡	出土地点	種類	塗膜面	塗膜構造			
					下地層	塗膜 c 1 層	塗膜 c 2 層	塗膜 c 3 層
1	開跡大淹	S D 4	漆器皿	内面	炭粉	黒色層（鉄粉）	透明の淡褐色層	褐色層（絵付け、水銀）
2	五社	A-S D 6	漆器椀	外面	炭粉	透明の淡褐色層	やや不透明の黒褐色層	-
3		A-	漆器椀	内面	炭粉	透明の淡褐色層	やや不透明の黒褐色層（鉄粉）	-
4	水牧	C-S D 16	漆器皿	内面	炭粉	透明の淡褐色層	やや不透明の褐色層	-

#### 4 おわりに

開跡大淹遺跡の漆器皿 1 点、五社遺跡の漆器椀 2 点、水牧遺跡の漆器皿 1 点について塗膜分析を行った。

開跡大淹遺跡の絵付け漆器皿（内面絵付け部分）は、下地層 b 層、塗膜層 c 1～c 3 層からなり、c 1 層が鉄粉混じりの黒色塗膜層、c 3 層が水銀朱混じり絵付け赤色漆であった。五社遺跡の黒色漆器椀 No. 2（外面）は、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1・c 2 層からなり、c 2 層が黒色漆であった。また、黒色漆器椀 No. 3（内面）は、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1・c 2 層からなり、c 2 層が鉄粉混じり黒色漆であった。

水牧遺跡の黒色漆器皿（内面）は、木胎、下地層 b 層、塗膜層 c 1・c 2 層からなり、c 2 層が黒色漆であった。

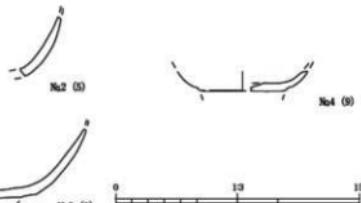
開跡大淹遺跡



五社遺跡



水牧遺跡



第104図 分析漆器実測図

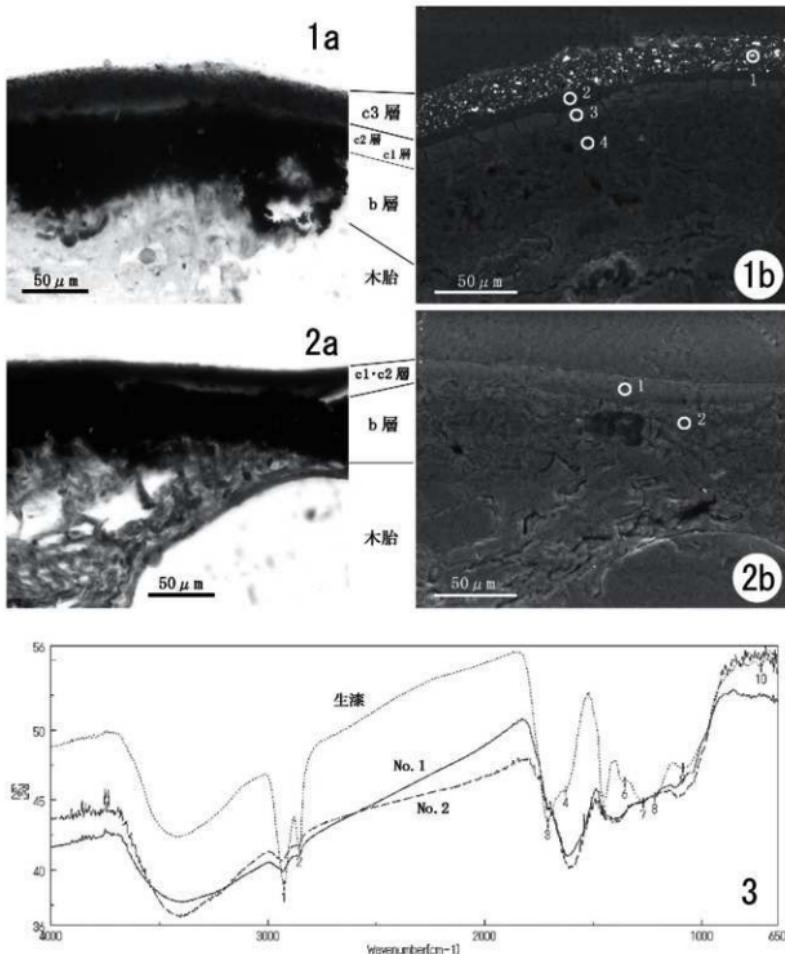


写真1 漆器の塗膜構造と点分析位置 第105図 塗膜の赤外分光スペクトル図

1 a. 漆器皿（開墾大漁遺跡、試料No 1）断面の顕微鏡写真 1 b. 同反射電子像（番号は点分析No）

2 a. 漆器碗（五社遺跡、試料No 2）断面の顕微鏡写真 2 b. 同反射電子像（番号は点分析No）

3. 赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

実線：No 1 塗膜層、破線：No 2 塗膜層、点線：生漆（Noは主な吸収位置）

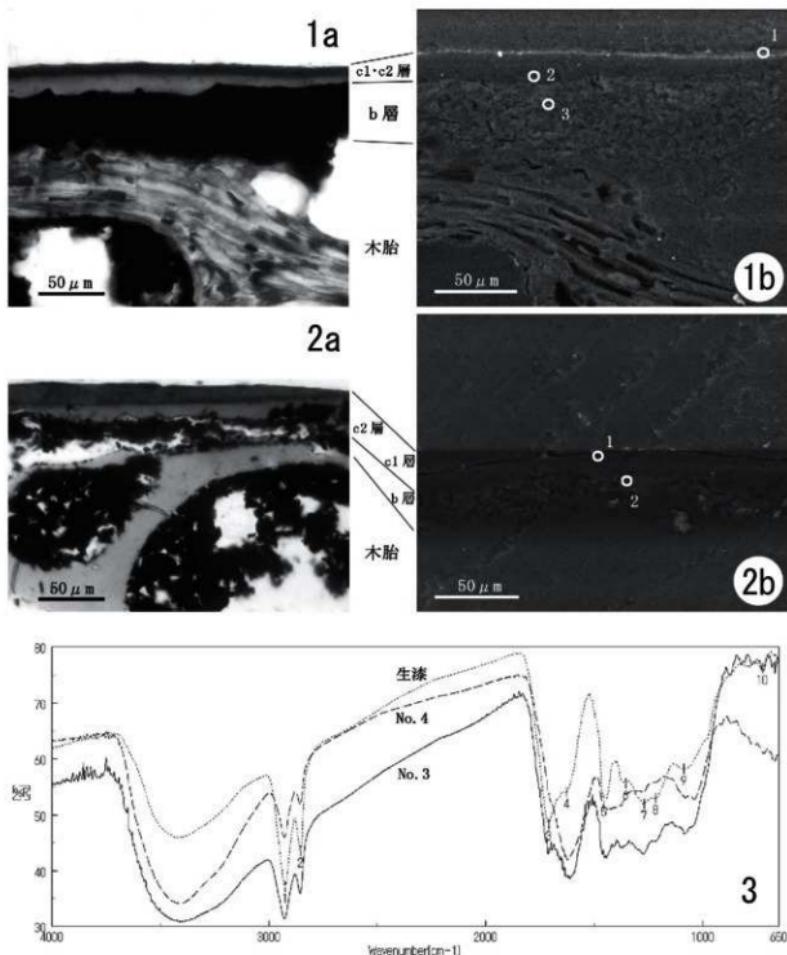


写真2 漆器の塗膜構造と点分析位置 第106図 塗膜の赤外分光スペクトル図

1 a. 漆器桿（五社遺跡、試料No.3）断面の顕微鏡写真 1 b. 同反射電子像（番号は点分析No）  
 2 a. 漆器皿（水牧遺跡、試料No.4）断面の顕微鏡写真 2 b. 同反射電子像（番号は点分析No）  
 3. 赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率、横軸が波数を示す）

実線：No.3 塗膜層、破線：No.4 塗膜層、点線：生漆（No.3は主な吸収位置）

# 7 五社遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1 試料

試料は、五社遺跡（09G）のA～C区より検出された住居跡、溝跡、土坑、および調査区壁より採取された土壤、種実遺体（水洗選別済）からなる。試料の詳細および分析項目を第52表に示す。

本報告では、古植生や農耕等を含む植物利用、さらに土坑から出土した土器内の埋積物（土壤）の化学性の検討を目的として、自然科学分析を実施する。

## 2 分析方法

### （1）花粉分析

試料約10 gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顯微鏡下でプレパラート全面を走査し、出

第52表 五社遺跡 分析試料一覧

遺跡地区	出土地点	出土層位	試料 (種別)	時期	花粉 分析	植物組 成分析	種実遺 体同定	リン酸 分析
09G-A	A-SD5	(2)	土	中・近世	●	●	●	
	A-SD5	(4)	土		●	●	●	
	A-SD5	(5)	土		●	●	●	
	A-SD5	(6)	土		●	●	●	
	B-SD2	(1)	土		●	●	●	
	B-SD2	(2)	土		●	●	●	
09G-B	B-SD2	(3)	土	古代(10~11世紀)	●	●	●	
	B-SD2	(4)	種実遺体		●	●	●	●
	柱状分析試料採取地点3	No 1	I層 表土		●	●	●	
	柱状分析試料採取地点3	No 2	Ⅲ層 土		●	●	●	
	柱状分析試料採取地点3	No 3	Ⅲ層 土		●	●	●	
09G-C	柱状分析試料採取地点3	No 4	IV層 土		●	●	●	
	SX1	asec(1)	土	古墳時代	●	●	●	
	SX1	asec(2)	土		●	●	●	
	SX1		種実遺体		●	●	●	
	SX2	asec(1)	土		●	●	●	
	SX2	asec(2)	土		●	●	●	
	SX2	bsec(1)	土	古墳時代	●	●	●	
	SX2	bsec(2)	土		●	●	●	
	SX2		種実遺体		●	●	●	
	S11	取り上げ(土器)No 4	土		●	●	●	
	S11		種実遺体		●	●	●	
	SK18		土		●	●	●	
09G-C	SK18		種実遺体	古墳時代	●	●	●	
	SK19		土		●	●	●	
	SK19		種実遺体		●	●	●	
	SK20		土		●	●	●	
	SK21		土		●	●	●	
	比較分析試料	No 1	VI層 土		●	●	●	
09G-C	比較分析試料	No 2	VI層 土	古墳時代・飛鳥時代の遺物検出面 (地山)	●	●	●	
	比較分析試料	No 3	VI層 土		●	●	●	
	比較分析試料	No 4	VI層 土		●	●	●	
	柱状分析試料採取地点1	No 1	I層 土		表土	●	●	
	柱状分析試料採取地点1	No 2	II層 土		無遺物層	●	●	
09G-C	柱状分析試料採取地点1	No 3	III層 土	古墳・中世遺物包含層 (地山)	古代・中世遺物包含層	●	●	
	柱状分析試料採取地点1	No 4	IV層 土		無遺物層	●	●	
	柱状分析試料採取地点1	No 5	V層 土		古墳時代・飛鳥時代通物包含層	●	●	
	柱状分析試料採取地点1	No 6	VI層 土		地山	●	●	
	柱状分析試料採取地点2	No 1	I層 土		表土	●	●	
	柱状分析試料採取地点2	No 2	II層 土		無遺物層	●	●	
09G-C	柱状分析試料採取地点2	No 3	III層 土		古代・中世遺物包含層	●	●	
	柱状分析試料採取地点2	No 4	IV層 土		無遺物層	●	●	
	柱状分析試料採取地点2	No 5	V層 土		古墳時代・飛鳥時代遺物包含層	●	●	
	柱状分析試料採取地点2	No 6	VI層 土		地山	●	●	

現する全ての種類について同定・計数する。また、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示する。

#### （2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1 gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1 gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表および図で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。合計は、各分類群の丸めない数字を合計した後に、100単位とする。

#### （3）種実遺体分析

試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて同定が可能な種実を抽出する。抽出された種実遺体を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等の図鑑との対照から、種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、「-」で結んで表示する。分析後は、種実遺体を種類毎に容器に移し、70%程度のエタノール溶液を入れて保管する。

#### （4）リン酸分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法（土壤標準分析・測定法委員会、1986）で行う。以下に操作工程を示す。

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2 mmの篩であるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5 mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。風乾細土試料については、105°Cで4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

粉碎土試料1.00 gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）約5 mlを加えて加热分解する。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）約10 mlを加えて再び加热分解を行う。分解終了後、水で100 mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/g）を求める。

### 3 結果

#### (1) 花粉分析 (第53表, 第107図)

全体的に花粉化石の保存状態は悪く、花粉外膜が破損・溶解している試料が多い。以下、調査区毎に産状を述べる。

##### 1) A区

A区 S D 5 ②および④～⑤は、いずれの試料も花粉化石が豊富に産出し、花粉群集組成も類似する。木本花粉ではスギ属が多く産出し、ハンノキ属、ブナ属などを伴う。②はマツ属の割合が高い。その他では、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クマシデ属-アサダ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属なども産出する。草本花粉ではイネ科が最も多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属等を伴うほか、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、コウホネ属、ツリフネソウ属などの水湿地に生育する分類群も認められる。イネ科花粉中には栽培種のイネ属も認められるが、その割合は約1～3%である。

##### 2) B区

B区 S D 2 および柱状分析試料採取地点3 No 3, 4は、花粉化石の産出状況は不良である。木本花粉ではスギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、栽培種のソバ属がわずかに認められるのみである。

柱状分析試料採取地点3 No 1, 2は、花粉化石が産出し、いずれも草本花粉の割合が高い。木本花粉ではスギ属が多産し、マツ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属などを伴う。なお、No 2では、イネ属花粉が認められ、イネ科花粉における割合は1%未満である。

##### 3) C区

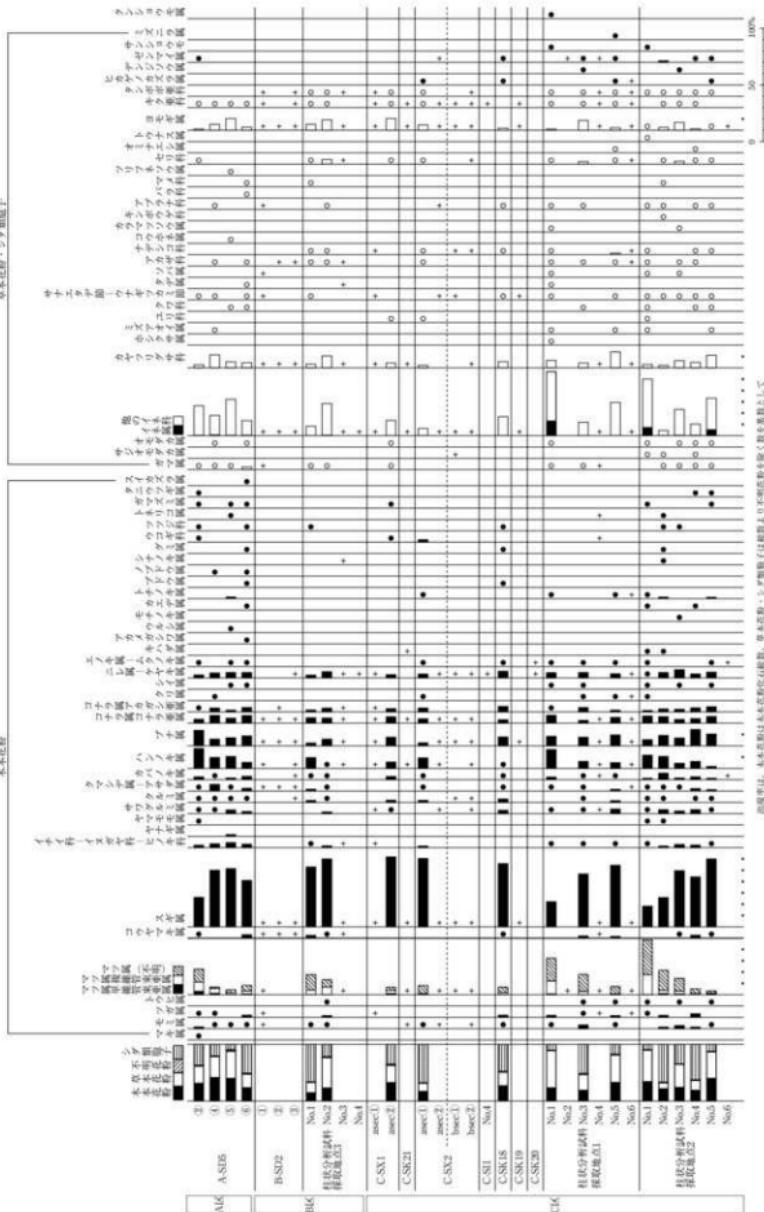
C区 S X 1 asec①, C区 S X 2 asec②およびbsec①, ②, C区 S I 1 No 4, C区 S K 19, C区 S K 20, C区 S K 21の8試料は、いずれも花粉化石の産出状況は不良である。これらの試料は、木本花粉ではマツ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などが、草本花粉ではイネ科、ヨモギ属等がわずかに認められるのみである。

C区 S X 1 asec②, C区 S X 2 asec①, C区 S K 18の3試料からは、花粉化石が産出し、花粉群集組成が類似する。木本花粉ではスギ属が多産し、マツ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属-ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などを伴い、水湿地生のガマ属、オモダカ属なども産出する。

柱状分析試料採取地点1 および柱状分析試料採取地点2は、試料によって産状は異なるが、遺構覆土試料と比較すると良好である。木本花粉では、スギ属およびマツ属が多産する。スギ属は、上位の試料で減少する一方、マツ属は増加する傾向にある。この他、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属などが産出する。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、セリ科、ヨモギ属などを伴う。また、水湿地生草本のガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、シダ類のデンジソウ属、サンショウウモ、ミズニラ属、水生藻類のクンショウウモ属などがわずかに産出する。栽培植物は、イネ属、ソバ属、トウナス属が認められる。イネ属は、柱状分析試料採取地点1のNo 1が23.2%，柱状分析試料採取地点2は約1～16%である。

#### (2) 植物珪酸体分析 (第54表, 第108図)

植物珪酸体は、各試料より検出されるが、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるなど、保存状態は不良である。以下、地区毎に産状を述べる。



第107図 五社遺跡 花粉化石群集

第53表 五社遺跡 花粉分析結果(1)

分類群	09G-A				09G-B				09G-C			
	SD 5		SD 2		柱状分析試料採取地点 3		S X 1		S K21			
	(2)	(3)	(5)	(6)	(1)	(2)	(3)	No. 4	sec. 1	sec. 2		
木本花粉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツ属	3	1	1	1	3	—	—	1	2	—	—	1
クスノキ属	2	1	—	4	1	—	—	—	3	—	—	1
クルミ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
トクチ属	6	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
マツ属混生樹木花粉	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
マツ属混生樹木花粉	17	9	3	6	—	—	—	5	15	—	—	3
マツ属(不明)	23	3	6	10	4	—	—	17	14	4	—	3
コウヤマキ属	1	—	—	6	1	1	1	3	1	1	—	1
スギ属	53	103	106	85	15	3	11	66	132	18	—	11
イネ科イヌクサガ科ヒノキ科	4	7	9	6	—	—	—	1	3	1	—	—
ヤナギ属	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヤマモモ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サワグルミ属	1	2	7	4	—	—	—	—	3	—	—	1
クルミ属	2	1	1	2	—	—	—	2	1	—	—	2
クマシデ属アサガ属	1	12	1	5	—	—	—	1	1	—	—	—
カバノキ属	5	1	3	6	—	—	—	1	1	—	—	3
ハンノキ属	36	20	22	11	3	—	—	12	3	13	—	2
ブナ属	28	12	15	19	14	—	—	3	5	—	2	8
コナラ属コナラ属	7	14	9	14	2	—	—	6	10	1	—	6
コナラ属アカガシ属	2	7	3	8	—	—	—	2	7	1	—	3
シリカ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ニレ属トケヤキ属	5	9	10	10	—	—	—	3	12	1	1	1
エノキ属ムクノキ属	1	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	2
カハダ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アカメガシワ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウルシ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
モチノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カエデ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
トナノキ属	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—
ブドウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シナノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
グミ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ科	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
ツツジ科	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
トネリコ属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
ガマズミ属	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
カーネラ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シカクシ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズアオイ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ユリ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クワ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
サナエタケ属トナギカクミ属	3	1	—	1	3	—	—	2	—	—	—	1
タケ属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
シハ属	2	3	—	—	1	—	—	—	3	—	—	1
アカザ科	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	1
イケ属	1	3	1	4	1	—	—	—	3	—	—	1
他のイネ科	171	86	165	114	84	14	24	74	270	37	1	13
カヤツリグサ科	17	57	27	41	13	5	16	29	162	15	—	1
ホシカラ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズアオイ科	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	3
ユリ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クワ科	—	—	—	3	3	—	—	—	—	—	—	—
サナエタケ属トナギカクミ属	3	1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1
タケ属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
シハ属	—	—	—	—	1	—	—	—	8	—	—	3
アカザ科	—	—	2	—	4	—	—	—	8	—	—	1
シナシゴ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
コウモリト属	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
ホウロウソク属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キンボウゲ科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アブランバ科	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハウ科	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
マメ科	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
シリカネ科シキミ科	2	—	—	1	—	—	—	—	3	40	9	—
ミミズク属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
トナナス属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヨモギ属	8	26	34	25	15	6	7	47	88	33	—	5
ギク属	1	3	2	1	1	—	1	1	3	—	2	1
カシワボク科	—	—	—	—	—	—	—	1	3	2	—	2
カシワボク科	239	101	50	460	628	109	95	588	208	53	7	31
不明花粉	7	6	12	14	8	1	2	7	16	8	—	7
シダ類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ヒカゲノカズラ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
デンジソウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ゼンマイ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シナシゴ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズナラ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
他のシダ類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
シダ類子	239	101	50	460	628	109	95	588	208	53	7	31
不明花粉	204	206	210	208	30	9	23	125	220	32	1	22
草本花粉	205	186	255	218	131	26	50	166	530	100	1	24
不明花粉	7	5	12	14	8	1	2	7	16	8	0	7
シダ類子	240	101	50	460	628	109	95	588	208	53	7	31
計(不明を除く)	649	493	515	886	792	144	168	879	958	185	9	77
その他	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
クンシヨウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第53表 五社遺跡 花粉分析結果(2)

分類群	09 G - C										性状分析試料採取地点 1										
	S X 2			S I 1		S K 18		S K 19		S K 20		No. 1		No. 2		No. 3		No. 4		No. 5	
	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9	No. 10	No. 11	No. 12	No. 13	No. 14	No. 15	No. 16	No. 17	No. 18	No. 19	No. 20	
木本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マキ属	1	1	-	1	-	1	-	-	-	1	-	2	-	2	-	2	-	2	-	-	
セイヨウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	1	-	1	-	3	-	3	-	1	
ツバキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツノサルガモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツノサルガモ属	2	-	-	1	-	2	-	-	-	25	-	6	-	1	-	15	-	15	-	1	
マツノサルガモ属(不明)	17	2	5	2	-	5	-	-	44	2	32	-	5	-	15	-	15	-	15	-	
コウモリモチ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	4	-	2	-	3	-	-	-	-	-	
スギ属	143	26	8	12	-	56	6	-	48	-	99	-	15	119	-	29	-	-	-	-	
イチイ科イガヤ科ヒノキ科	3	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	-	
ヤナギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サワグルミ属	-	1	-	1	-	3	-	-	1	-	2	-	1	-	9	-	-	-	-	-	
クルミ属	4	-	-	2	-	3	-	-	-	2	-	1	-	3	-	3	-	3	-	-	
クランベリー属	2	-	-	-	-	1	-	-	5	-	1	-	4	-	1	-	-	-	-	-	
カバノキ属	2	-	-	-	-	1	-	-	36	-	13	3	11	-	5	-	5	-	-	-	
ハシバミ属	22	2	-	1	-	1	-	-	18	-	16	5	21	-	1	-	-	-	-	-	
ブナ属	6	1	3	1	-	8	1	-	-	15	-	5	5	11	-	4	-	-	-	-	
コナラ属コナラ属	9	1	1	1	-	3	-	-	15	-	5	5	11	-	4	-	-	-	-	-	
コジロウアカシヤ属	8	-	-	-	-	5	-	-	2	-	8	-	3	-	2	-	2	-	1	-	
クマノヒ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
シイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ニレ属ニレ属	6	3	1	1	1	6	-	1	39	-	10	-	1	-	8	-	8	-	1	-	
エノキ属エノキ属	2	-	-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キハダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウツクシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トナカイ属	32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	
ブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シナノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
グミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ツブリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
トキワコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガシスイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タニワツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サジノモダカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オモカキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イヌクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
植物の花粉	93	21	11	9	-	66	5	-	-	123	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カヤダリグサ科	33	-	-	4	-	22	-	-	-	407	-	134	14	197	21	-	-	-	-	-	
ホシノササ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	63	-	48	26	94	16	-	-	-	-	-	
ミズガオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ユリ科	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クワ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サルナタデ節-ウナギカミ節	-	1	1	-	-	1	1	-	-	1	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	
ダケ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカツキ科	32	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	22	-	1	-	3	-	3	-	-	
ナシ科	4	-	2	2	-	1	-	-	-	1	-	1	-	9	-	1	-	1	-	-	
コフノコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カラマツツツクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キシラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アブリナ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	4	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
バウム	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マメ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ワラキモサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	3	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	25	-	3	-	2	-	-	-	-	
オモエシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トカゲス属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	67	14	7	19	19	7	1	-	-	10	-	98	8	15	10	-	-	-	-	-	
キク科	14	7	1	2	1	-	-	-	-	1	-	5	2	4	1	-	-	-	-	-	
タングボ酢酸	2	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	4	3	5	2	-	-	-	-	-	
木本花粉	10	2	-	1	1	26	-	-	-	5	-	13	7	6	5	-	-	-	-	-	
シダ類孢子	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒカツノカズラ属	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	
デンジンソウ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ゼンマイ属	-	2	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2	2	4	1	-	-	-	-	-	
サシヨウモチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズヌイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒメクサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヒメクサ属(不明)	969	297	76	44	5	184	48	21	96	6	385	1654	112	196	-	-	-	-	-	-	
合計	237	37	19	23	1	104	7	2	217	2	212	44	219	46	-	-	-	-	-	-	
草本花粉	219	44	22	37	1	98	8	0	623	0	325	54	332	54	-	-	-	-	-	-	
不明花粉	10	2	0	1	1	2	0	0	5	0	13	7	6	5	-	-	-	-	-	-	
シダ類孢子	970	299	76	44	5	188	48	21	97	8	568	1658	115	108	-	-	-	-	-	-	
総計(不明を除く)	1426	380	117	104	7	390	63	23	937	10	1125	1756	666	208	-	-	-	-	-	-	
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クシヨウモチ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第53表 五社遺跡 花粉分析結果(3)

分類群	09G-C					
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6
木本花粉	-	-	-	-	-	-
マキ属	-	3	6	3	1	-
サルスベリ属	1	4	-	7	-	-
ヨリヅツ属	2	-	1	-	1	-
トケイ属	-	2	1	-	1	-
マツ属同管束葉束属	-	-	-	-	-	-
マツ属管束葉束属	43	7	6	3	2	-
マツ属(不明)	74	40	25	9	5	-
コウヤマキ属	-	-	1	6	2	-
スギ属	44	59	110	101	145	-
イネ科・イヌガヤ科・ヒノキ科	1	3	6	5	2	-
ナナギ属	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	1	2	-	-	-	-
サワグルミ属	2	8	5	8	2	-
クルミ属	1	1	-	2	1	-
クマシダ属・アサガ属	2	2	2	5	3	-
カバノキ属	3	13	3	6	3	1
ハンノキ属	28	24	19	14	4	-
ブナ属	13	21	15	33	25	-
コナラ属・コラ葉属	15	13	7	9	14	-
コナラ属・アカガシ葉属	3	3	5	8	11	-
シリカ属	1	-	-	-	-	-
シメ属	1	-	1	-	1	-
ニレ属・タケキ属	2	11	16	8	12	-
エノキ属・ムクノキ属	1	-	-	-	2	1
カハダ属	1	2	-	-	-	-
アカメガシ属	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	-	-	-	-	-	-
モチノキ属	-	-	1	-	-	-
カエデ属	1	-	-	1	-	-
トナノキ属	1	3	-	-	3	-
ブドウ属	-	-	-	-	-	-
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-
シナノキ属	-	1	-	-	-	-
グミ属	-	1	-	-	-	-
ウコギ科	-	-	-	-	-	-
ツツジ科	-	2	2	1	-	-
トベリコ属	-	1	-	-	-	-
ヤマツツジ属	-	-	-	-	1	-
タニウツギ属	-	-	-	1	1	-
スイカズラ属	-	-	-	-	-	-
草本植物	-	-	-	-	-	-
ガマ属	-	2	2	2	1	-
サジョモガマ属	1	1	-	1	-	-
サキダカ属	2	-	1	1	3	-
イヌ属	51	1	2	2	32	-
他のイヌ科	303	50	212	122	169	-
カヤツリグサ科	21	25	58	58	68	-
ホシカラ属	-	-	-	-	-	-
ミズアオイ属	1	-	-	-	1	-
ユリ科	1	-	-	2	2	-
クワ科	-	-	-	-	-	-
サナエタデ属・ウナギカミ属	1	1	2	6	2	-
タデ属	-	-	-	-	-	-
ツバ属	1	-	1	-	-	-
アカザ科	3	-	3	1	-	-
サクシソ科	3	-	-	1	1	-
コウモリト属	-	-	-	-	-	-
カラマツノ属	-	-	1	-	-	-
キンボウゲ科	-	1	-	-	-	-
アブナナ科	3	1	-	1	1	-
バラ科	-	-	-	-	-	-
メタ科	-	1	-	-	-	-
フリネネシ科	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	2	23	2	2	-
オミエニシ属	-	-	-	1	-	-
トウナス属	1	-	-	-	-	-
ヨモギ属	6	27	64	16	6	1
ギク属	-	3	8	1	-	-
カンボボゴサ科	1	1	6	2	1	-
不明花粉	4	11	8	13	4	1
シダ類孢子	-	-	-	-	-	-
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	1	-
デンジソウ属	-	-	2	-	-	-
ゼンマイ属	-	15	-	3	1	-
クレシソウ属	1	-	-	-	-	-
ミスラ属	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子	64	707	316	261	73	4
その他	クンショウ属	-	-	-	-	-

## 1) A区

A区 S D 5 ②~⑥の植物珪酸体含量は約200~3.3万個/gであり、④で最も含量が高い。A区 S D 5 ④は、ヨシ属の含量が極めて高い。スキ属やタケア科も産出するが、含量はヨシ属と比較すると低い。⑤・⑥は、植物珪酸体含量が約5,100~5,900個/gと同程度であり、ヨシ属の含量が高く、スキ属、タケア科などが検出される。

## 2) B区

B区 S D 2 ①~③の植物珪酸体含量は約2,600~2,2万個/gであり、①で最も含量が高い。タケア科、ヨシ属、スキ属を含むウシクサ族、栽培植物のイネ属が検出される。イネ属は、穀（穀）に形成される穎珪酸体、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体、珪化組織片が認められる。植物珪酸体含量が最も高い①は、イネ属の含量が高く、短細胞珪酸体が約3,700個/g、機動細胞珪酸体が約5,500個/gであり、珪化組織片も多く産出する。

柱状分析試料採取地点3 No.1~4の植物珪酸体含量は約1,600~2.5万個/gであり、上位の試料で含量が高い。ヨシ属、コブナグサ属、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギア科、栽培種のイネ属が検出される。イネ属は珪化組織片も検出される。イネ属の含量は、No.2で最も高く、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体がいずれも約5,200個/gである。

## 3) C区

植物珪酸体含量は、柱状分析試料採取地点1 No.1およびサンプル採取地点2 No.1を除く試料が約500~2,200個/gと全体的に含量が低い。これらの試料では、クマザサ属を含むタケア科、ヨシ属、スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ

第54表 五社遺跡 植物珪酸体含量(1)

分類群	09G-A				09G-B				09G-C			
	S D 5		S D 2		柱状分析試料採取地点3		柱状分析試料採取地点4					
	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	No.1	No.2	No.3	No.4	sec(1)	sec(2)
イネ科葉部細胞壁珪酸体	-	-	-	-	3,700	<100	200	2,300	5,200	2,000	300	-
イネ科イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ科タマゴサ属	-	200	-	<100	<100	<100	<100	-	-	-	-	-
ヨシ属	<100	10,900	1,500	2,000	1,500	500	900	2,400	2,800	1,700	300	<100
ウシガサ族コブナガサ属	-	-	-	-	-	-	-	200	500	100	200	-
ウシガサ族ススキ属	-	1,500	-	400	900	<100	<100	700	1,100	500	-	<100
イネ科アキバ属	-	-	-	-	<100	-	-	<100	-	-	-	-
不明セリ型	-	9,200	1,200	1,100	6,400	1,100	500	6,000	6,000	2,500	400	200
不明セリ型	-	2,100	500	400	<100	<100	-	300	<100	<100	<100	-
不明ランチク属	-	1,300	200	600	300	<100	100	800	<100	100	<100	100
イネ科身代役植物珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科イネ属	-	-	-	-	5,500	200	<100	2,400	5,200	1,000	200	-
タケ科タマゴサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨシ属	-	200	-	100	<100	<100	<100	-	-	-	-	-
ウシガサ族	-	4,500	500	900	1,200	100	500	900	1,300	300	100	-
不明	-	-	-	-	<100	<100	<100	200	200	<100	-	-
合 计	<100	2,800	1,200	400	2,200	200	400	2,600	2,000	500	<100	100
イネ科葉部細胞壁珪酸体	<100	25,300	3,400	4,500	12,700	2,000	1,800	12,600	15,800	7,100	1,200	700
イネ科身代役植物珪酸体	<100	7,500	1,700	1,400	9,300	600	1,000	6,200	8,700	1,900	400	100
總 計	200	32,800	5,100	5,900	22,000	2,600	2,800	18,700	24,500	8,900	1,600	800
珪化組織片*	-	-	-	-	**	*	**	**	**	**	*	-
イネ科珪酸体	-	-	-	-	***	*	***	***	***	***	*	-
イネ科細胞壁	-	-	-	-	*	-	-	***	***	***	-	-
イネ科根茎组织物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

\* [-]：未検出, [+]：検出, [\*\*]：多い。

第54表 五社遺跡 植物珪酸体含量(2)

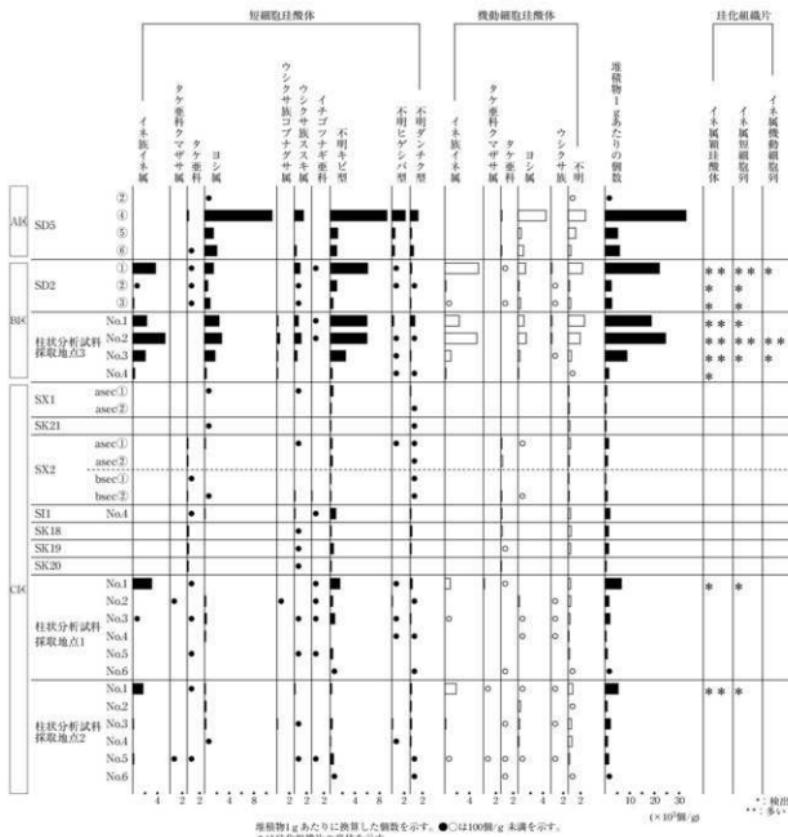
分類群	09G-C				柱状分析試料採取地点1							
	S K 2.1		S X 2		S 1.1		S K 18		S K 19		S K 20	
	ass(1)	ass(2)	ass(1)	ass(2)	No.4	No.4	No.1	No.2	No.3	No.4	No.1	No.2
イネ科葉部細胞壁珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3,100	-	<100
イネ科イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-
タケ科タマゴサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	-	-
タケ科	-	100	100	<100	100	<100	200	200	200	<100	-	<100
ヨシ属	<100	100	-	-	<100	100	-	-	-	-	200	300
ウシガサ族コブナガサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	-
ウシガサ族ススキ属	-	<100	-	-	200	200	<100	<100	<100	<100	-	<100
イネ科アキバ属	-	<100	-	-	100	<100	-	-	-	-	<100	<100
不明セリ型	-	200	300	-	200	200	200	<100	100	<100	-	-
不明ランチク型	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	<100
不明ランチク属	-	<100	-	-	<100	200	300	200	200	-	300	<100
イネ科身代役植物珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	900	-	<100
イネ科イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100	-	-
タケ科タマゴサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	-	-
タケ科	-	200	300	-	200	200	200	<100	100	<100	-	-
ヨシ属	-	<100	-	-	<100	-	-	-	-	-	<100	<100
ウシガサ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	<100
不明	-	300	400	100	200	400	500	400	400	-	400	400
合 计	300	800	600	300	600	1,400	700	1,000	500	5,200	1,000	1,500
イネ科葉部細胞壁珪酸体	300	700	500	100	400	600	700	500	100	1,500	700	500
イネ科身代役植物珪酸体	300	1,300	1,100	400	1,000	2,000	1,400	1,500	600	6,200	1,600	2,000
總 計	500	1,500	1,100	400	1,000	2,000	1,400	1,500	600	6,200	1,600	2,000
珪化組織片*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*	-	-
イネ科珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*	-	-
イネ科細胞壁	-	-	-	-	-	-	-	-	-	*	-	-
イネ科根茎组织物	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

\* [-]：未検出, [+]：検出, [\*\*]：多い。

第54表 五社遺跡 植物珪酸体含量(3)

分類群	09G-C						柱状分析試料採取地点2					
	No.5 No.6			No.1 No.2			No.3 No.4			No.5 No.6		
	No.5	No.6	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.1	No.2	No.3	No.4
イネ科葉部細胞壁珪酸体	-	-	1,700	-	100	-	100	-	-	-	-	-
イネ科イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ科タマゴサ属	-	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ科	-	-	100	200	200	<100	-	-	-	-	-	-
ヨシ属	-	-	-	-	100	-	-	-	-	-	-	-
ウシガサ族コブナガサ属	-	-	-	-	-	100	-	-	-	-	-	-
ウシガサ族ススキ属	-	-	<100	-	100	-	<100	-	-	-	-	-
イネ科アキバ属	-	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明セリ型	-	-	400	<100	200	-	300	100	500	<100	-	-
不明ランチク型	-	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明ランチク属	-	-	<100	-	200	200	200	200	<100	<100	-	-
イネ科身代役植物珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ科タマゴサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ科	-	-	<100	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨシ属	-	-	<100	-	400	200	100	<100	-	-	-	-
ウシガサ族	-	-	<100	-	-	<100	-	-	-	-	-	-
不明	-	-	200	<100	200	500	600	200	<100	-	-	-
合 计	700	100	2,500	400	1,200	400	900	100	-	-	-	-
イネ科葉部細胞壁珪酸体	200	100	2,800	400	1,000	700	600	100	-	-	-	-
イネ科身代役植物珪酸体	900	200	5,300	900	2,200	1,100	1,600	200	-	-	-	-
總 計	900	200	5,300	900	2,200	1,100	1,600	200	-	-	-	-
珪化組織片*	-	-	**	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科珪酸体	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科細胞壁	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科根茎组织物	-	-	*	-	-	-	-	-	-	-	-	-

\* [-]：未検出, [+]：検出, [\*\*]：多い。



第108図 五社遺跡 植物珪酸体含量と珪化組織片の産状

亜科がわずかに検出される程度である。

柱状分析試料採取地点1 No.1 および柱状分析試料採取地点2 No.1 の植物珪酸体含量は約5,300～6,700個/gであり、イネ属の含量が高く、珪化組織片も検出される。イネ属の含量は、柱状分析試料採取地点1 No.1 の短細胞珪酸体が約3,100個/g、機動細胞珪酸体が約900個/g、柱状分析試料採取地点2 No.1 の短細胞珪酸体が約1,700個/g、機動細胞珪酸体が約1,900個/gである。

### (3) 種実遺体分析

結果を第55表に示す。分析対象の6試料からは、木本12分類群（落葉広葉樹のカジノキ、サルナシ近似種、マタビ近似種、マタビ属、キイチゴ属、イヌザンショウ、キハダ、ミツバウツギ、ブドウ属、ブドウ科、タラノキ、ニワトコ）216個、草本22分類群（イボクサ、イネ、アワ近似種、エノコログサ属、イネ科、ウキヤガラ近似種、アゼスケ節、ホタルイ属、カヤツリグサ科、カラムシ属、

第55表 五社遺跡 種実遺体分析結果

分類群	部位	状態	09G-B			09G-C			S I I
			S D 2	S X 1	S X 2	S K 18	S K 19		
木本									
カジノキ	核	完形	—	—	2	—	—	—	—
サルナシ近似種	種子	完形	—	—	28	—	—	—	—
		破片	—	2	4	—	—	—	—
マタタビ近似種	種子	完形	1	10	9	1	3	1	1
		破片	—	—	2	2	2	1	1
マタタビ属	種子	完形	—	—	34	—	—	—	—
キイチゴ属	核	完形	—	2	—	—	—	—	—
イヌザンショウ	種子	完形	—	—	—	—	—	—	1
		破片	—	—	—	—	—	—	2
キハダ	種子	破片	—	—	1	—	—	—	—
ミツバウフギ	種子	破片	—	—	5	—	—	—	—
ブドウ属	種子	完形	—	—	1	—	—	—	—
ブドウ科	種子	破片	—	—	3	—	—	—	1
タラノキ	核	完形	—	18	56	—	1	2	—
		破片	—	1	8	—	—	—	—
ニワトコ	核	完形	—	1	5	—	—	3	—
		破片	—	—	2	—	—	—	—
草本									
イボクサ	種子	破片	—	—	1	—	—	—	—
イネ	胚乳	完形	1	—	—	—	—	—	—
		破片	2	—	—	—	—	—	—
アワ近似種	胚乳	完形	1	—	—	—	—	—	—
エノコログサ属	果実	完形	—	—	1	—	—	—	—
イネ科	果実	完形	—	—	1	—	—	—	—
		破片	—	—	1	—	—	—	—
ウキヤガラ近似種	果実	完形	8	—	—	—	—	—	—
		破片	5	—	—	—	—	—	—
アゼスケ節	果実	完形	3	1	2	—	—	—	1
		破片	—	—	1	—	—	—	—
ホタルイ属	果実	完形	1	6	581	39	—	—	2
		破片	1	3	140	6	—	—	2
カヤツリグサ科	果実	完形	6	4	4	—	—	—	—
カラムシ属	果実	完形	—	6	1	—	—	—	—
イヌタデ近似種	果実	完形	—	—	—	—	—	—	4
		破片	—	—	1	—	—	—	1
サナエタデ近似種	果実	完形	—	—	—	—	—	—	—
		破片	—	—	1	—	—	—	—
タデ属	果実	完形	—	—	—	5	—	—	—
		破片	—	—	2	—	—	—	35
タデ属	果実	完形	1	—	—	—	—	—	21
タデ属?	果実	完形	—	—	—	—	—	—	14
アカザ科	種子	完形	—	3	2	—	—	—	—
		破片	—	1	—	—	—	—	2
キジムシロ類*	核	完形	1	2	2	—	—	—	—
エノキグサ	種子	完形	2	2	—	2	—	—	—
スミレ属	種子	完形	—	—	1	—	—	—	—
		破片	—	—	2	—	—	—	—
キランソウ属	果実	完形	—	32	27	—	—	—	2
		破片	—	6	—	—	—	—	—
アカネ科	核	完形	—	3	1	—	—	—	—
		破片	—	—	1	—	—	—	—
オミナエシ属	果実	完形	—	5	9	—	—	—	—
		破片	—	1	2	—	—	—	—
不明			6	1	4	—	—	—	—
その他									
植物片			—	—	—	—	—	—	+
炭化物			2	11	29	1	—	—	2
不明炭化物			—	20	36	3	—	—	4
菌核			5	66	2	—	—	—	8
昆虫類			1	2	5	—	—	—	—
二枚貝の殻皮			—	—	—	—	—	—	1

\* : キジムシロ類：キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属

イヌタデ近似種、サナエタデ近似種、タデ属、アカザ科、キジムシロ属一ヘビイチゴ属一オランダイチゴ属、エノキグサ、スミレ属、キランソウ属、アカネ科、オミナエシ属) 1033個、不明11個の種実、植物片、炭化物、不明炭化物、菌類の菌核、昆虫類、二枚貝の殻皮などが検出された。

栽培種は、B区SD2から炭化したイネの胚乳3個、アワ(近似種)の胚乳1個が確認された。栽培種を除く種実遺体群は、草本主体の種類構成を示し、水湿地生植物のホタルイ属が全体の約76%を占める。

木本種実は、C区SX2で159個と最も多く検出され、次いでC区SX1が35個と多い。検出された分類群は、高木のカジノキ、キハダ、低木のキイチゴ属、イヌザンショウ、ミツバウツギ、タラノキ、ニワトコ、藤本のサルナシ近似種、マタタビ近似種、マタタビ属、ブドウ属、ブドウ科などの林縁などの明るく開けた場所に先駆的に侵入する樹種からなる。一方、草本種実は、いわゆる人里植物に属する分類群からなり、水湿地生植物のホタルイ属、ウキヤガラ(近似種)、イボクサ、アゼスゲ節などが確認された。なお、C区SX2から検出されたイネ科とキランソウ属、C区SI1より検出されたタデ属には炭化が認められた。以下に、各分類群の形態的特徴等を記す。

#### <木本>

##### ・カジノキ (*Broussonetia papyrifera* (L.) Vent.) クワ科カジノキ属

核は灰黄褐色、長さ2.3mm、幅2.1mm、厚さ1.3mm程度のやや偏平な直方体状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は棱になり薄い。基部一端に突起がある。表面には疣状の微細な隆起が散在する。

##### ・サルナシ近似種 (*Actinidia* cf. *arguta* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Miq.) マタタビ科マタタビ属

種子は黒褐色、長さ2.3mm、幅1.7mm程度の両凸レンズ状楕円体。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には円～楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。

##### ・マタタビ近似種 (*Actinidia* cf. *polygama* (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim.)

##### マタタビ科マタタビ属

種子は茶～黒褐色、長さ1.5-1.8mm、幅1.0-1.2mm程度の両凸レンズ状楕円体。サルナシよりも小型である。基部は斜切形でやや突出する。種皮は硬く、表面には円～楕円形の凹点が密布し網目模様をなす。なお、サルナシとの判別が困難な破片をマタタビ属としている。

##### ・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)は灰黄褐色、長さ1.4mm、幅0.8mm程度の偏平な半倒卵体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

##### ・イヌザンショウ (*Zanthoxylum schinifolium* Sieb. et Zucc.) ミカン科サンショウ属

種子は黒褐色、長さ3.9mm、幅3.0mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な非対称広倒卵体。腹面正中線上に広線形の臍がある。種皮は厚く硬く、表面にはカラスザンショウよりも細かくサンショウ (*Z. piperitum* (L.) DC.) よりも粗い網目模様がある。

##### ・キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.) ミカン科キハダ属

種子は黒褐色、長さ4.0mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度のやや偏平な半横広卵体。破片は1端を欠損する。種皮は硬く、表面には浅く微細な縱長の網目模様が配列する。

##### ・ミツバウツギ (*Staphylea bumalda* (Thunb.) DC.) ミツバウツギ科ミツバウツギ属

種子は黄灰褐色、長さ4.5mm、幅4.1mm、厚さ3mm程度のやや偏平な倒卵体。基部は斜切形で、横楕円形の臍が深く凹む。臍の上縁は嘴状。表面は平滑で光沢がある。破片は大きさ4.3mm程度。

・ブドウ属 (*Vitis*) ブドウ科

種子は灰褐色、長さ4.0mm、径3.5mm程度の広倒卵体、側面觀は半広倒卵形。基部は細く嘴状に尖る核嘴がある。背面は、正中線上の頂部から長さ0.5mm程度の部分に灰褐色、長さ1.5mm、幅1.0mm程度の卵形の合点があり、細く浅い溝に囲まれる。腹面は正中線上に（鈍）稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、各1個の長さ1.8mm、幅0.5mm程度の倒皮針形で深く窪む核窪がある。種皮は薄く硬く、断面は柵状。なお、種の同定根拠を欠損する破片を、ブドウ科 (Vitaceae) としている。

・タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）は灰褐色、長さ2.5mm、幅1.5mm程度のやや偏平な半月形。腹面はほぼ直線状で、片端に突出がある。背面には数本の浅い溝が走る。表面は小さな凹凸が多く粗面。

・ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）は灰褐色、長さ2.7mm、幅1.4mm程度のやや偏平な広倒卵体。背面は丸みがあり、腹面の正中線上は鈍稜をなす。基部はやや尖り、腹面正中線上に小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

&lt;草本&gt;

・イボクサ (*Murdannia keisak* (Hassk.) Hand.-Mazz.) ツユクサ科イボクサ属

種子は灰褐色、長さ0.8mm、径1.5mm程度の歪な半横長楕円体。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は薄く柔らかく透き通り、表面は円形の小孔が散在する。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ4-5mm、幅2-3mm、厚さ1-1.5mm程度のやや偏平な長楕円体。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縱列する。

・アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P.Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ1.3mm、幅1.5mm、厚さ0.7mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中線上に径0.5mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面は粗面。

・エノコログサ属 (*Setaria*) イネ科

果実は灰黄褐色、長さ2.7mm、径1.0mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり腹面は偏平。果皮表面には横方向に目立つ網目模様が配列する。

## ・イネ科 (Gramineae)

果実は灰褐色、長さ1.2mm、径1.0mm程度の半偏球体。炭化個体は黒色、長さ1.5mm、径0.7mm程度の半狭卵体。背面は丸みがあり腹面はやや平ら。基部正中線上に、胚乳の長さの2/3以上を占める縱長で馬蹄形の胚の凹みがある。胚乳表面は粗面で、穎（果）の破片が付着する。果皮表面には縱長の網目模様が縱列する。

・ウキヤガラ近似種 (*Bolboschoenus cf. fluvialis* (Torr.) T.Koyama subsp. *yagara* (Ohwi) T.Koyama カヤツリグサ科ウキヤガラ属

果実は黒褐色、長さ2.6mm、径1.7mm程度の三稜状狭倒卵体。頂部の柱頭部分は伸び、基部は切形。両端の断面は三角形。果皮はやや厚く、表面は粗面または平滑で光沢がある。

・アゼスゲ節 (*Carex Sect. Carex*) カヤツリグサ科スゲ属

果実は灰黒褐色、長さ1.8-2.0mm、径1.8mm程度のレンズ状球～広倒卵体。頂部の柱頭部分がわずかに伸び、基部は切形。果皮表面には微細な網目模様があり、ざらつく。

・ホタルイ属 (*Scirpus*) カヤツリグサ科

果実は灰～黒褐色、長さ2.1mm、径1.8mm程度の片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片が伸びる個体がみられる。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横縞状模様が発達する。

・カヤツリグサ科 (Cyperaceae)

上記したカヤツリグサ科以外の形態上差異のある複数の種を一括している。果実は淡～黒褐色、径1.5～2.1mm程度のレンズ状または三稜状倒卵体。頂部の柱頭部分はやや伸び、基部は切形。果皮表面は平滑～微細な網目模様がある。

・カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、径1.2mm程度のやや偏平な非対称広倒卵体。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

・イヌタデ近似種 (*Polygonum cf. longisetum* De Bruyn) タデ科タデ属

果実は黒色、長さ1.7mm、径1.4mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形。果皮表面は平滑で光沢がある。

・サンエタデ近似種 (*Polygonum cf. lapathifolium* L.) タデ科タデ属

果実は黒褐色、長さ2.2mm、幅1.9mm程度の偏平な広卵状二面体。頂部はやや尖り、2花柱を欠損する。基部は切形で、花被脈を欠損する。両面中央はやや凹む。果皮表面は平滑で光沢がある。

・タデ属 (*Polygonum*) タデ科

上記タデ属以外の形態上差異のある複数の種を一括している。果実は黒褐色、炭化個体は黒色。長さ2.2-2.8mm、径1.5-1.9mm程度の丸みのある三稜状卵体。頂部は尖り、基部は切形で萼が残る個体もみられる。果皮表面には微細な網目模様がある。

・アカザ科 (Chenopodiaceae)

種子は黒色、径1.0mm程度のやや偏平な円盤状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が放射状に配列し、光沢がある。

・キジムシロ属-ヘビイチゴ属-オランダイチゴ属 (*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*) バラ科

核(内果皮)は淡灰褐色、長さ1.2mm、幅0.7mm、厚さ0.3mm程度のやや偏平な腎体。内果皮は厚く硬く、表面は粗面。

・エノキグサ (*Acalypha australis* L.) トウダイグサ科エノキグサ属

種子は黒灰褐色、長さ1.7mm、径1.2mm程度の倒卵体。基部はやや尖り、Y字状の棱がある。種皮は薄く硬く、表面には細粒状凹点が密布する。

・スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子は灰褐色、長さ1.4mm、径1.0mm程度の広倒卵体。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

・キランソウ属 (*Ajuga*) シソ科

果実は淡～灰褐色、長さ1.8mm、径1.1mm程度の楕円体。腹面基部には、長さ1.2mm程度の楕円形で表面に小突起が寄生する着点痕がある。果皮表面には深い凹みによる網目模様が分布する。

・アカネ科 (Rubiaceae)

核は黒褐色、長さ1.1mm、径1.3mm程度の偏球体。腹面中央に径0.5mm程度の楕円体の深い孔がある。

表面には微細な網目模様がある。

・オミナエシ属 (*Patrinia*) オミナエシ科

果実は灰褐色、長さ2.0mm、幅1.3mm程度のやや偏平な卵～広楕円体。縁は翼状。腹面正中線は稜状で、頂部より0.3mm程度の部分が突起し小さい孔がある。腹面を覆う黄褐色、へら形の萼片を欠損する。背面はやや平ら。果皮表面は粗面で微細な網目模様がある。

(4) リン酸分析

結果を第56表に示す。C区SK18, SK19, SK20, SK21のリン酸含量は、0.85～1.03P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gの範囲で概ね一定である。一方、C区比較分析試料No 1, 2, 3, 4のリン酸含量は、1.02～1.18P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gの範囲で概ね一定である。C区SX2 asec①・②およびbsec①・②は1.06～1.13P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> mg/gの範囲にあり、asec①・bsec①で僅かにリン酸が多い傾向はあるが、比較分析試料と同程度の範囲にある。

第56表 五社遺跡 リン酸分析結果

遺跡/地区	遺構/地点	層位/試料名	土性	土色	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (mg/g)
09G-C	SX 2	asec①	SiCL	2.5Y4/1 黄灰	1.13
		asec②	SiCL	2.5Y4/1 黄灰	1.06
		bsec①	SiCL	2.5Y4/1 黄灰	1.13
		bsec②	SIL	5Y4/2 灰オリーブ	1.08
	SK18		SIL	2.5Y5/2 暗灰黄	0.91
	SK19		SIL	2.5Y5/2 暗灰黄	0.95
	SK20		SIL	2.5Y5/2 暗灰黄	1.03
	SK21		SIL	2.5Y5/2 暗灰黄	0.85
	比較分析試料	No 1	SiCL	2.5Y5/2 暗灰黄	1.18
		No 2	SIL	5Y4/1 灰	1.05
		No 3	SIL	2.5Y5/2 暗灰黄	1.02
		No 4	SIL	2.5Y4/2 暗灰黄	1.03

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）による。

土性：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性による。

SIL：シルト質壤土（粘土0～15%，シルト45～100%，砂0～55%）

SiCL：シルト質埴土（粘土15～25%，シルト45～85%，砂0～40%）

#### 4 考察

##### (1) 古植生および植物利用

本遺跡では、花粉化石の産状が悪く、堆積環境や堆積後の経年変化の影響を受けていると考えられる試料が多く認められた。したがって、各時期の古植生およびその変遷については、花粉化石の産状が比較的良好であったC区柱状分析試料採取地点1および柱状分析試料採取地点2（以下、C区層位試料）の花粉群集の変遷および各時期の地点、遺構の微化石や種実遺体群の産状に基づき検討した。

古墳時代・飛鳥時代のC区層位試料（柱状分析試料採取地点1 No 5, 柱状分析試料採取地点2 No 5）の花粉化石群集は、マツ属が低率であり、スギ属が優占することで特徴付けられる。同様の群集組成は、古墳時代の遺構であるC区SX1 asec①, C区SX2 asec①, C区SK18にも確認できる。

当該期の後背の山地や周辺の丘陵には、ブナ属やコナラ亜属などを主要構成種とする冷温帶性落葉広葉樹林が成立しており、丘陵および微高地などにはマツ属、スギ属、イチイ科・イスガヤ科・ヒノキ科などの針葉樹、常緑広葉樹のアカガシ亜属が分布したと考えられる。渓谷や沢沿いなどにはサワグルミ属、クルミ属、クマシテ属・アサダ属などが生育し、河畔や低地などにはハンノキ属、ニレ属・ケヤキ属、トチノキ属などが生育したと考えられる。調査地付近は、イネ科やカヤツリグサ科などの明るく開けた場所を好む人里植物が草地を形成しており、湿潤な場所にはイネ科（ヨシ属など）、ホタルイ属などの水湿地生植物が生育したと考えられる。近傍の林縁にはサルナシ（近似種）やマタタビ属、タラノキなどの低木類や藤本類が生育したと考えられる。

また、当該期の試料からは、栽培植物のイネに由来する花粉および植物珪酸体が検出された。イネ科花粉中におけるイネ属の割合は、柱状分析試料採取地点2 No 5で約15.9%と比較的高い値を示したが、植物珪酸体は未検出ないし100個/g未満であった。このことから、調査地付近で稲作が行われていた可能性は低く、本遺跡周辺の稲作を反映していると考えられる。

古代および古代・中世は、マツ属の増加、優占したスギ属の減少という漸移的な変化を特徴とし、中～近世および表土は、古代・中世の試料で認められた変化がさらに顕著となり、マツ属とスギ属が同程度、あるいはマツ属が優占するという特徴を示した。これらの時期の木本花粉群集は、マツ属とスギ属を除くと群集組成に大きな変化は認められないことから、周辺の山地・丘陵の森林植生はほぼ同様であったと考えられる。一方、古代以降のマツ属とスギ属花粉の消長は、周辺に分布したと考えられるスギ林が減少し、マツ属の二次林が増加したことが推定される。調査地付近は、スキ属などを含むイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などの人里植物からなる草地が分布し、湿潤な場所にはイネ科（ヨシ属）やアゼスゲ節、ウキヤガラ近似種、ホタルイ属などの水湿地生植物が生育したと考えられる。また、表土試料では、イネ科が極めて高率となるという特徴を示した。同様の特徴は、隣接する五社条里遺跡の近世の溝状遺構（畝状遺構）埋積物の花粉化石群集にも認められることから、近世段階において遺跡周辺で草地が拡大したと考えられる。

栽培植物は、古代および古代～中世ではイネ属の微化石や種実、ソバ属花粉が検出された。表土試料ではイネ属の微化石、ソバ属およびトウナス属の花粉が検出された。本遺跡周辺では、古代頃よりソバの栽培が行われたと考えられ、近世以降にはトウナス属の栽培も示唆される。稲作については、古代および古代・中世では、B区S D 2 ①、B区柱状分析試料採取地点No 5でイネ属の含量が高いことから、調査地周辺における稲作が推定される。ただし、B区S D 2 試料では炭化したイネの胚乳が検出されたことや、穎（穂）や葉部に由来する珪化組織が多く検出されたこと、イネ属花粉の割合が数%程度であることを考慮すると、当該期のイネ属の植物珪酸体含量は植物質食糧としての利用および溝内へのイネの植物体の廃棄を反映している可能性もある。表土試料は、植物珪酸体含量が古代および古代～中世試料と比べ低いが、イネ属花粉の割合は約14～23%と高率であることから、本遺跡周辺で稲作が行われていた可能性がある。

庄川扇状地扇端付近および小矢部川流域では、本遺跡以外にも古植生や農耕の検討を目的とした自然科学分析調査が実施されている。このうち、本遺跡の北東に位置する下老子笹川遺跡（高岡市）の調査結果では、弥生～古墳時代以降のスギ、ハンノキ属の森林の拡大、古代～近世および近世以降のマツ属複維管束亜属の増加が示唆されている（株式会社古環境研究所、2006）。本分析結果は、下老子笹川遺跡で確認された傾向と調和しており、本地域一帯の古植生の変化として捉えられる。

## (2) 遺構の用途推定

リンは生物にとって主要な構成元素であり、動植物中に普遍的に含まれる元素であるが、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成する。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壤ではリンの保持能力が高いため、遺跡での生物起源残留物の痕跡確認などに有効とされている。

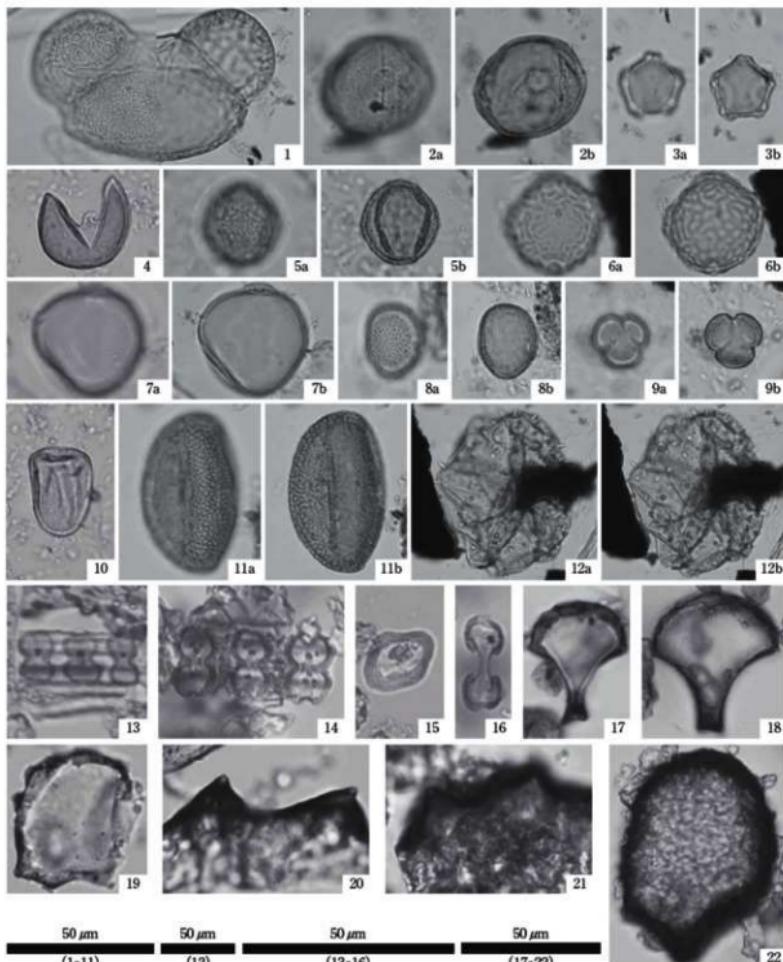
土壤中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量については、いくつかの報告事例 (Bowen, 1983; Bolt・Bruggenwert, 1980; 川崎ほか, 1991; 天野ほか, 1991) があり、これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約3.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g程度である。また、人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では5.5P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g（川崎ほか, 1991）という報告例があるほか、当社で行った調査事例では、骨片などの痕跡が認められる土壤では6.0P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gを越える場合が多い。

分析対象とされたC区 S X 2, 同 S K18~S K21のリン酸含量は、上述した天然賦存量を超えるものではなく、また比較分析試料のリン酸含量を上回る値も検出されなかった。このことから、遺構覆土および土器内埋植物と比較試料との間に外的要因による土壤の特性（リン酸の富化など）を見出すことは困難である。

## 引用文献

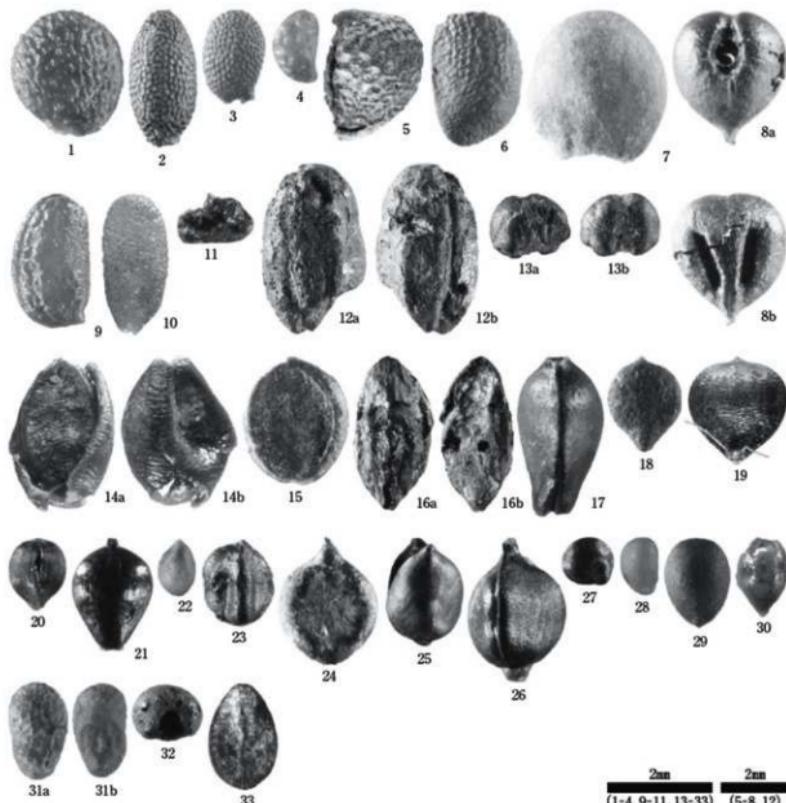
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信, 1991, 中部日本以北の土壤型別蓄積リンの形態別計量.  
土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発, 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 28-36.
- Bolt, G.H. & Bruggenwert, M.G.M., 1976, SOILCHEMISTRY, [岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・  
陽 捷行(訳), 1980, 土壤の化学, 学会出版センター, 309 p.]
- Bowen, H.J.M., 1979, Environmental Chemistry of Elements, [浅見輝男・茅野充男(訳), 1983, 環境  
無機化学, 元素の循環と生化学, 博友社, 297 p.]
- 土壤標準分析・測定法委員会編, 1986, 土壤標準分析・測定法, 博友社, 354 p.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328 p.
- 株式会社古環境研究所, 2006, 花粉分析, 富山県文化振興財团埋蔵文化財発掘調査報告第31集 下巻  
子笛川遺跡発掘調査報告—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V—第五分冊 自然  
科学・考察編, 財團法人 富山県文化振興財團・埋蔵文化財調査事務所, 72-88.
- 川崎 弘・吉田 澄・井上恒久, 1991, 九州地域の土壤型別蓄積リンの形態別計量, 土壤蓄積リンの  
再生循環利用技術の開発, 農林水産省農林水産技術会議事務局編, 23-27.
- 近藤鍊三, 2004, 植物ケイ酸体研究, ベドロジスト, 48, 46-64.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として, 第四紀研究,  
13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稻作史の研究, 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究  
—総括報告書一, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大出版会, 642 p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- ベドロジスト懇談会, 1984, 土壌調査ハンドブック, 156 p.

写真1 五社遺跡 花粉化石・植物珪酸体



1. マツ属(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 2. ハンノキ属(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 3. コナラ属コナラ属(09G-A; SD5 ⑤)  
 4. イネ科(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 5. ヨモギ属(09G-A; SD5 ⑤)  
 6. ソバ属(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 7. イネ属短細胞列(09G-B; SD2 ①)  
 8. ヨシ属短細胞列體(09G-A; SD5 ④)  
 9. イネ属微動細胞列體(09G-B; B-SD1 ①)  
 10. クマザサ属短細胞硅酸体(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 11. イネ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 12. ヒウナス属(09G-C; 柱状分析試料採取地点2 №1)  
 13. イネ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点2 №1)  
 14. ススキ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点5 №3)  
 15. イネ属微動細胞列體(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 16. イネ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点2 №1)  
 17. シシカ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点2 №1)  
 18. イネ属微動細胞列體(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 19. イネ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 20. イネ属短細胞列體(09G-C; 柱状分析試料採取地点1 №1)  
 21. イネ属短細胞列(09G-C; 柱状分析試料採取地点2 №1)  
 22. ヨシ属微動細胞列體(09G-C; 柱状分析試料採取地点4 №1)

写真2 五社遺跡 種実遺体



1. カジノキ 核(09G-C; SX 2)  
 3. マタタビ近似種 種子(09G-C; SX 2)  
 5. イメザンショウ 種子(09G-C; S I 1)  
 7. ミツガシワフサギ 種子(09G-C; SX 2)  
 9. タラノキ 核(09G-C; SX 2)  
 11. イボクサ 種子(09G-C; SX 2)  
 13. アワ近似種 肥乳(09G-C; SD 2)  
 15. イネ科 果実(09G-C; SX 2)  
 17. ウカヤガラ近似種 果実(09G-B; SD 2)  
 19. ホタルイ属 果実(09G-C; SX 2)  
 21. カヤフリグサ科 B 果実(09G-C; SX 2)  
 23. イヌタデ近似種 果実(09G-C; S I 1)  
 25. タデ科 果実(09G-C; S I 1)  
 27. アカゲ科 種子(09G-C; SX 2)  
 28. キジムシロ属-ヘビチゴ属-オランダイナゴ属 核(09G-C; SX 1)  
 29. エノキグサ 種子(09G-C; S I 1)  
 31. キンソウソク属 果実(09G-C; S X 1)  
 33. オミナエシ属 果実(09G-C; SX 2)
2. サルナシ近似種 種子(09G-C; S X 2)  
 4. キイチゴ属 核(09G-C; SX 1)  
 6. キハダ 種子(09G-C; S I 1)  
 8. ブドウ属 種子(09G-C; SX 2)  
 10. ニワトコ 核(09G-C; SX 2)  
 12. イネ 肥乳(09G-C; SD 2)  
 14. エノコログサ属 果実(09G-C; SX 2)  
 16. イネ科 果実(09G-C; SX 2)  
 18. アゼビクズ属 果実(09G-B; SD 2)  
 20. カヤフリグサ科 A 果実(09G-C; SX 2)  
 22. カラムシ属 果実(09G-C; SX 1)  
 24. サナエタデ近似種 果実(09G-C; SX 1)  
 26. タデ属 果実(09G-C; SX 2)
30. スミレ属 種子(09G-C; SX 1)  
 32. アカネ科 核(09G-C; SX 1)

## 8 五社条里遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### 1 試料

試料は、五社条里遺跡の調査区北東より検出された近世の溝状遺構群より採取された土壌15点である。土壤試料の内訳は、溝状遺構埋土試料10点と、および溝状遺構の検出面に相当する地山（Ⅲ層）試料5点からなる。

本報告では、近世の古植生および溝状遺構群における栽培植物の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

### 2 分析方法

#### (1) 花粉分析

試料約10 gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。また、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示する。

#### (2) 植物珪酸体分析

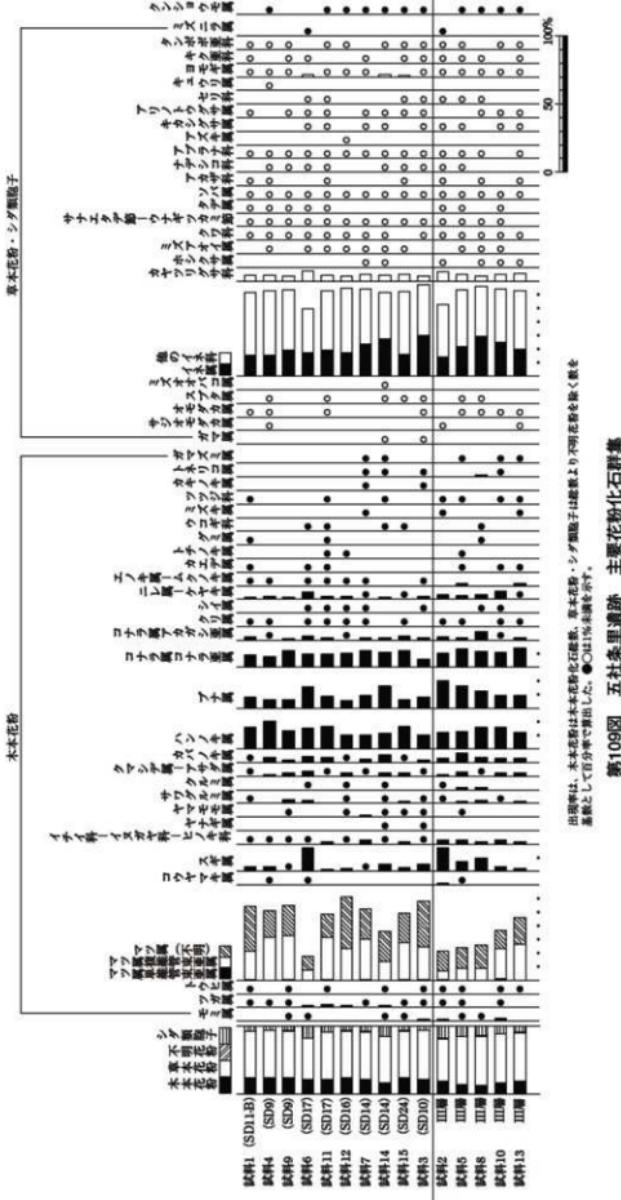
各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残流量を正確に計量し、堆積物1 gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1 gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表および図で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。合計は、各分類群の丸めない数字を合計した後に、100単位とする。

### 3 結果

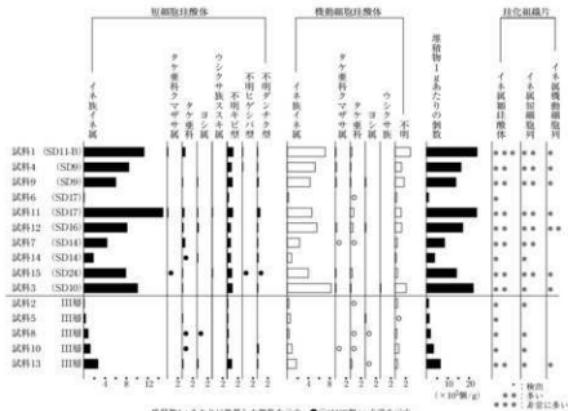
#### (1) 花粉分析（第57表、第109図）

溝状遺構および地山（Ⅲ層）試料は、いずれも花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好で



第57表 五社条理遺跡 花粉分析結果(1)

分類群	(9G)															
	(SD10-I)Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	Ⅼ	Ⅽ	Ⅾ	
	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7	試料8	試料9	試料10	試料11	試料12	試料13	試料14	試料15	
木本花粉	-	3	3	-	1	2	-	2	1	4	-	-	-	-	1	2
モミ属	-	2	1	2	2	3	-	1	-	1	1	1	-	3	2	
ツガ属	-	1	1	1	-	-	1	-	1	1	1	-	1	1	-	
トウヒ属	-	1	1	1	-	-	1	-	1	2	1	-	-	1	1	
マツ属单被管束葉風	50	16	61	74	18	22	17	62	18	26	46	87	50	55	28	
マツ属複被管束葉風	80	36	84	47	32	22	47	35	53	58	47	80	41	45	47	
マツ属(不明)	-	3	-	1	1	38	2	20	2	7	4	4	4	10	6	
コウヤマキ属	-	8	43	13	8	15	1	6	3	2	6	4	1	3	3	
ギンモリ属	1	7	2	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イヌトイースガヤ科ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サザンカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サワグルミ属	1	2	1	-	3	4	-	4	2	-	-	1	3	2	3	
クルミ属	-	1	-	-	3	6	8	1	5	5	2	5	5	5	5	
クマシデ属アサガ科	1	3	2	3	6	9	5	8	5	7	10	2	7	11	2	
カバノキ属	2	8	4	9	15	33	21	33	32	33	26	21	25	23	36	
ブナ属	39	30	26	48	27	35	20	26	29	23	27	22	30	22	26	
コナラ属コナラ属	19	50	20	15	34	21	21	24	20	24	11	19	33	13	-	
コナラ属アカシヤ属	22	26	14	18	29	21	26	24	29	23	27	22	20	22	26	
クヌギ属	5	6	4	2	3	7	3	12	3	2	5	2	4	4	7	
シダ属	1	1	-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
ニレ属ケヤキ属	4	8	5	6	6	11	7	3	12	5	5	1	3	2	1	
エノキ属ムクノキ属	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウルシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
グリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウコギ科	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミズキ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カキノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イボタノコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ガマズミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タニウツジ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スズラン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サザンカ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サモダカラ属	3	-	1	2	1	-	-	3	-	2	1	-	1	1	1	
スプル属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	
ミズオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イチゴ属	145	180	343	159	321	175	226	437	182	308	236	154	214	336	143	
他のイチゴ	447	483	431	467	621	323	369	561	416	479	554	412	459	423	404	
カヤフリヅサ科	39	81	40	38	75	74	43	53	33	37	53	32	61	48	40	
ガシラ属	-	2	-	-	2	5	1	2	1	-	3	1	1	3	2	
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ユリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タブ科	1	1	5	4	5	2	1	8	1	2	2	1	2	2	1	
ギンギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サナエタガ属ウナギツカ属	5	1	3	3	3	2	1	2	1	1	3	3	2	-	2	
タデ属	1	1	3	1	1	1	1	2	1	1	3	3	1	3	2	
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカザ科	1	4	3	1	2	2	3	1	1	2	1	1	1	1	1	
ナデシコ属	1	4	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	
カクドリソク属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キンポウゲ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キンポウゲ科	1	1	1	1	3	5	1	1	5	2	2	1	1	4	2	
アブラン科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
バラ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アズキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
メタ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ミソハギ属	-	-	2	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
キカシガサ属	-	-	4	2	1	-	1	-	-	-	-	-	-	5	2	
アリノウタガサ属	3	-	8	3	1	-	4	9	-	1	1	1	2	1	1	
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤエムグラ属アカネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
オナエニア属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	5	12	6	5	9	15	3	10	3	7	8	1	10	32	9	
キク科	1	1	2	-	3	1	1	2	1	-	-	1	-	1	-	
シングボロ科	1	1	4	-	4	-	-	-	-	2	2	1	1	3	6	
不育系	3	16	1	2	7	7	5	16	6	2	9	3	11	3	6	
シダ類	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科カズラ属	1	-	1	1	1	-	1	6	1	2	1	1	4	4	-	
ビスマイア属	-	4	1	1	2	-	1	-	-	-	-	1	4	-	-	
1エニシア属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	
他のシダ類	67	208	60	59	209	169	70	207	55	132	98	54	88	172	54	
その他	-	-	2	2	1	-	2	2	-	2	1	2	1	7	3	
クンショウモ属	-	-	2	2	1	-	2	2	-	2	1	2	1	7	3	
合計	241	249	252	236	212	220	209	204	237	208	278	213	209	202	216	
木本花粉	654	797	842	685	1061	611	685	1091	646	883	877	610	773	852	612	
草本花粉	3	16	4	2	7	7	5	16	6	7	9	3	11	4	6	
不明花粉	68	213	62	60	212	170	72	213	56	134	99	55	92	179	54	
シダ類	963	1259	1156	981	1485	1001	966	1508	939	1225	1254	878	1074	1233	882	
不明(不明を除く)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	



第110図 五社条里遺跡 植物珪酸体含量

第58表 五社条里遺跡 植物珪酸体含量(1)

分類群	09G 1										(個/g)
	SD11-B	SD10	SD9	SD17	SD14	SD17	SD9	SD10	SD11	(個/g)	
イネ科葉部短胞壁珪酸体											
イネ科イネ属	11,300	100	10,100	8,400	300	100	4,300	800	6,000	1,200	14,900
タケ科タケムツマザサ属	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100
タケ科	500	—	100	—	100	—	500	<100	100	<100	400
ヨシ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100
ウシモチ族ススキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100
不明レジナ型	1,100	100	900	700	100	200	600	200	900	100	1,000
不明レジナ型	100	—	—	100	—	—	—	—	—	—	—
不明ダニチカ型	100	—	100	100	—	—	100	—	200	200	500
イネ科葉部短胞壁珪酸体											
イネ科イネ属	7,100	300	8,200	5,200	600	300	2,300	400	4,300	900	4,700
タケ科タケムツマザサ属	100	—	100	200	—	—	<100	—	200	<100	—
タケ科	300	<100	100	100	—	<100	<100	—	100	<100	600
ヨシ属	—	—	—	—	100	—	—	—	<500	100	—
ウシモチ族	—	—	100	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	2,900	400	2,100	1,200	<100	300	400	400	1,700	700	1,100
合計	13,200	300	11,300	9,400	600	300	5,600	1,300	7,300	1,600	17,100
イネ科葉部短胞壁珪酸体											
イネ科葉部短胞壁珪酸体	10,300	800	10,700	6,700	800	400	2,300	800	6,300	1,700	6,400
不明	25,700	1,000	22,000	10,100	1,300	1,300	8,300	1,300	13,300	3,300	23,300
珪酸化組成物*	★★★	*	★★★	★★★	*	*	★★	★★	★★	★★	★★
イネ科珪酸体	★★★	*	★★★	★★★	—	—	★★	★★	★★	★★	★★
イネ科珪酸物質	★★	*	★★	★★	—	—	—	—	★★	★★	★★
イネ科微生物組成物	—	*	—	—	—	—	—	—	★★	★★	★★

\*[-]: 未検出, [\*]: 検出, [\*\*]: 多い, [\*\*\*]: 非常に多い

第58表 五社条里遺跡 植物珪酸体含量(2) (個/g)

分類群	09G 1										(個/g)
	SD16	SD17	SD14	SD14	SD16	SD17	SD14	SD14	SD16	SD17	
イネ科葉部短胞壁珪酸体											
イネ科イネ属	8,100	—	2,700	1,800	7,900	—	—	<100	—	—	
タケ科タケムツマザサ属	200	200	<100	100	100	—	—	—	—	—	
タケ科	200	200	100	100	—	—	—	—	—	—	
ヨシ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ウシモチ族ススキ属	—	—	—	—	100	—	—	—	—	—	
不明レジナ型	600	800	600	800	—	—	—	—	—	—	
不明レジナ型	—	—	—	—	<100	—	—	—	—	—	
不明ダニチカ型	100	100	200	200	<100	—	—	—	—	—	
イネ科葉部短胞壁珪酸体											
イネ科イネ属	5,600	—	1,700	800	4,000	—	—	100	—	—	
タケ科タケムツマザサ属	200	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
タケ科	300	300	—	—	—	—	—	—	—	—	
ヨシ属	100	<100	—	—	—	—	—	—	—	—	
ウシモチ族	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
不明	1,200	500	200	500	—	—	—	—	—	—	
合計	9,300	3,900	2,800	9,100	—	—	—	—	—	—	
イネ科葉部短胞壁珪酸体	7,600	2,500	1,100	5,000	—	—	—	—	—	—	
不明	17,000	6,500	3,800	14,100	—	—	—	—	—	—	
珪酸化組成物*	★★★	★★★	★★★	★★★	—	—	★★	★★	★★	★★	★★
イネ科珪酸体	★★★	★★★	★★★	★★★	—	—	★★	★★	★★	★★	★★
イネ科珪酸物質	★★	★★	★★	★★	—	—	—	—	★★	★★	★★
イネ科微生物組成物	—	*	—	—	—	—	—	—	★★	★★	★★

\*[-]: 未検出, [\*]: 検出, [\*\*]: 多い, [\*\*\*]: 非常に多い

ある。花粉群集組成は、いずれも草本花粉が優占する。木本花粉では、マツ属が多産し、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属が次いで多い。この他に、スギ属、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属ーケヤキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科が多産し、カヤツリグサ科、クワ科、サナエタデ属ーウナギツカミ属、ヨモギ属などを伴う。この他、ガマ属、サジョモダカ属、オモダカ属、スプタ属、ミズオオバコ属、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水湿地生草本や水生シダ類（ミズニラ属）、水生藻類（クンショウモ属）なども検出される。

栽培種あるいは栽培の可能性がある分類群は、イネ属とソバ属がすべての試料から検出され、カキノキ属（SD14：試料7、SD10：試料3）、アズキ属（SD16：試料12）、キュウリ属（SD9：試料4）なども認められる。イネ科花粉中におけるイネ属花粉の占める割合は、約24.3～44.3%である。

#### （2）植物珪酸体分析（第58表、第110図）

植物珪酸体含量は、溝状遺構および地山（Ⅲ層）試料で産状が異なり、溝状遺構試料のうち試料6と試料14を除く8試料は約8,500～2.4万個/gである。これらの試料は、栽培植物のイネ属の含量が高く、短細胞珪酸体が約4,300～1.5万個/g、機動細胞珪酸体が約2,300～8,200個/gである。また、イネの穀（穎）に形成される穎珪酸体、葉部の短細胞列や機動細胞列も検出される。一方、試料6および試料14の植物珪酸体含量は、約1,000～3800個/gである。栽培植物のイネ属の含量は、他の覆土試料と比べて低く、珪化組織片もわずかに検出されるのみである。

地山（Ⅲ層）試料の植物珪酸体含量は約1,000～6,500個/gであり、溝状遺構試料と比較して全体的に低い。栽培植物のイネ属の植物珪酸体や珪化組織片が検出されるが、短細胞珪酸体が100～2,700個/g、機動細胞珪酸体が300～1,700個/gと概して低い。

栽培植物を除く分類群では、クマザサ属を含むタケ亞科、ヨシ属、スキ属を含むウシクサ族が検出されるが、その含量は極めて低い。

## 4 考察

五社条里遺跡の近世の溝状遺構および地山（Ⅲ層）は、ほぼ同様の花粉群集組成を示したことから、Ⅲ層形成から溝状遺構機能～埋没段階の古植生に大きな変化はなかったと推定される。当該期の後背の山地や丘陵にはブナ属、コナラ亜属を主要構成種とする冷温帶性落葉広葉樹林が成立しており、丘陵縁辺や微高地などにはマツ属、スギ属、イチイ科ーイスガヤ科ーヒノキ科などの針葉樹、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属などの落葉広葉樹、アカガシ亜属など常緑広葉樹が分布していたと考えられる。また、渓谷や沢沿いにはサワグルミ属、クルミ属が、河畔などにはハンノキ属、ニレ属ーケヤキ属などが生育したと考えられる。調査地周辺は、草本花粉が優勢であることから草地の環境が卓越していたと推定され、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの人里植物が生育し、湿潤な場所にはオモダカ属、スプタ属、ミズアオイ属、水生藻類のクンショウモ属などが生育したと考えられる。

溝状遺構および地山（Ⅲ層）試料で多産したイネ科花粉中イネ属の割合は、近世の溝状遺構および地山（Ⅲ層）との間で有意差は認められず、全体で約24～44%であった。一方、イネ属の機動細胞珪酸体含量は、地山（Ⅲ層）試料が300～1,700個/g、溝状遺構試料が300～8,200個/gであった。

中村（1980）によれば、現在の水田耕土に含まれるイネ属花粉の割合は30%以上の比率であることから、その割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稲作が行われていたとみなせるとしている。また、稲作跡の検証や探査を行う場合、イネの植物珪酸体（機動細胞由来）が5,000個/g以上検出された場合、そこで稲作が行われていた可能性が高い（杉山、2000）とされて

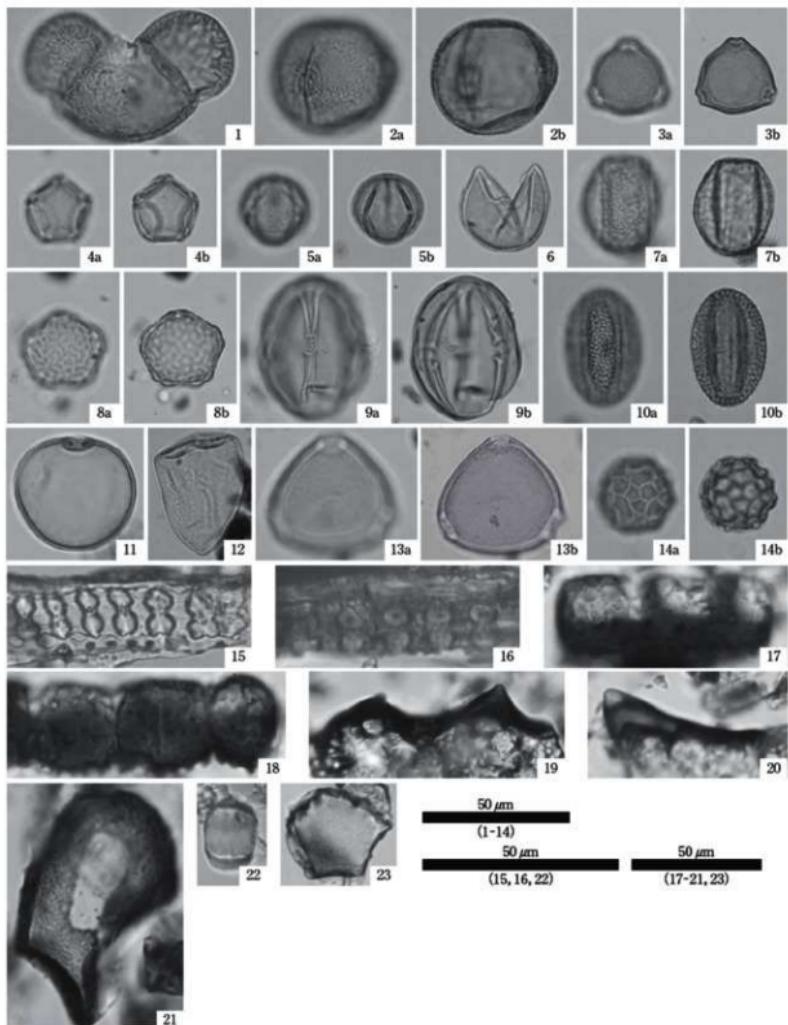
いる。

Ⅲ層は、イネ属花粉の割合が高いものの、イネ属の植物珪酸体含量が低いことから、近傍で稲作が行われていたことが推定される。一方、溝状遺構機能～埋積段階では、イネ属の割合が高く、イネ属の含量が判断基準とされる5,000個/gと同程度、あるいは上回る試料が多いことから、調査地および周辺で集約度の高い稲作が行われていたと考えられる。また、イネ属（イネ）以外では、Ⅲ層からソバ属、溝状遺構よりカキノキ属やソバ属、キュウリ属、アズキ属などの栽培種や栽培種を含む花粉化石も検出されたことから、調査地周辺では、これらの分類群の栽培も推定される。

#### 引用文献

- 近藤錬三, 2004, 植物ケイ酸体研究, ベドロジスト, 48, 46-64.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として, 第四紀研究, 13, 187-193.
- 中村 純, 1980, 花粉分析による稲作史の研究, 「自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究－総括報告書一」, 文部省科研費特定研究「古文化財」総括班, 187-204.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体（プラント・オバール）, 辻 誠一郎（編著）考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

写真1 五社条里遺跡 花粉化石・植物珪酸体



1. マツ属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
2. プナ属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
3. カバノキ属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
4. ハンノキ属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
5. コナラ属アカガシ亜属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
6. スギ属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
7. コナラ属コナラ亜属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
8. ニレ属—ケヤキ属(09G J ; 試料4 (SD 9))
9. カキノキ属(09G J ; 試料3 (SD 10))
10. ソバ属(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
11. イネ科(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
12. カヤツリグサ科(09G J ; 試料2 Ⅲ層)
13. キュウリ属(09G J ; 試料4 (SD 9))
14. アズキ属(09G J ; 試料12 (SD 16))
15. イネ属規細胞列(09G J ; 試料1 (SD 11-B))
16. イネ属規細胞列(09G J ; 試料5 (SD 11))
17. イネ属機動細胞列(09G J ; 試料1 (SD 11-B))
18. イネ属機動細胞列(09G J ; 試料4 (SD 9))
19. イネ属網状硅酸体(09G J ; 試料1 (SD 11-B))
20. イネ属網状硅酸体(09G J ; 試料15 (SD 24))
21. ヨシ属機動细胞硅酸体(09G J ; 試料13 Ⅲ層)
22. クマザサ属規細胞硅酸体(09G J ; 試料11 (SD 17))
23. クマザサ属機動细胞硅酸体(09G J ; 試料1 (SD 11-B))

50 μm  
(1-14)  
50 μm  
(15, 16, 22)  
50 μm  
(17-21, 23)

# 9 水牧遺跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1 試料

試料は、水牧遺跡（09M）の古代（7世紀後半）のA区SD1（3層と最下位）より採取された土壤2点、B区S13カマドから採取された土壤1点、C区北壁の堆積層より層位別に採取された土壤4点である。C区の層位別試料は、I層が表土、谷埋土が古代・中世包含層、III層が地山とされている。

本報告では、本遺跡の古植生および植物利用の検討を目的として、自然科学分析調査を実施する。

## 2 分析方法

### （1）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。また、検出されるイネ科花粉の表面微細構造・発芽孔の肥厚状況・粒径などを考慮し、中村（1974）を参考にしてイネ属と他のイネ科に分類する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の散布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基準として、百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類を「-」で結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため、出現した種類を「+」で表示する。

### （2）植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体）を、近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表および図で示す。その際、各分類群の含量は100単位として表示し、100個/g未満は「<100」で表示する。合計は、各分類群の丸めない数字を合計した後に、100単位とする。

## 3 結果

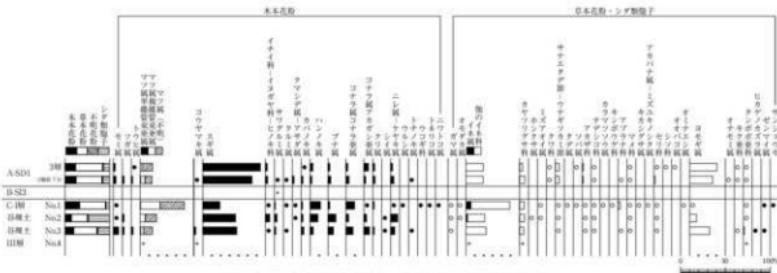
### （1）花粉分析（第59表、第111図）

#### 1) A区

SD1（3層と最下位）の花粉群集組成は、いずれも類似し、草本花粉が優占する。木本花粉では

第59表 水牧遺跡 花粉分析結果

分類群	09M-A		09M-B		09M-C		
	SD 1		S 1 3		I層	谷埋土	谷埋土
	3層	3層最下位	No 1	No 2	No 3	No 4	
木本花粉							
モミ属	2	6	—	1	1	12	—
ツガ属	—	4	—	—	2	4	—
トウヒ属	1	3	—	—	—	4	—
マツ属 単球管束亞属	—	1	—	1	—	1	—
マツ属 多球管束亞属	2	10	—	63	6	7	—
マツ属 (不明)	12	16	—	78	13	20	1
コウヤマキ属	—	1	—	—	—	4	2
スギ属	65	113	—	55	38	78	—
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	2	5	—	2	5	2	—
サワグルミ属	—	2	1	3	3	3	—
クルミ属	—	2	—	1	—	1	—
クマシテ属-アサダ属	—	4	—	2	1	—	—
カバノキ属	1	4	—	4	2	6	—
ハンノキ属	3	4	—	33	9	7	—
ブナ属	2	6	—	5	9	12	—
コナラ属コナラ属	2	7	—	28	3	16	—
コナラ属アガシ属	5	4	—	2	3	13	—
クリ属	2	5	—	4	—	3	—
シイ属	—	—	—	—	1	2	—
ニレ属-ケヤキ属	2	7	—	2	8	9	—
ウルシ属	—	—	—	1	—	—	—
トチノキ属	—	2	—	—	—	1	—
ウコギ科	—	—	—	1	—	—	—
トネリコ属	—	—	—	1	—	—	—
ニワトコ属	—	—	—	1	—	—	—
草本花粉							
ガマ属	—	—	—	1	1	2	—
オモダカ属	—	—	—	1	3	—	—
イネ属	—	—	—	51	12	—	—
他のイネ科	84	161	—	385	144	234	4
カヤツリグサ科	15	48	—	45	41	48	5
ホシクサ属	—	—	—	—	3	—	—
ミズアオイ属	—	—	—	2	1	—	—
クワ科	1	1	—	—	—	—	—
サナエタデ節-ウナギヅカミ節	18	35	—	1	1	4	—
タデ属	—	—	—	1	—	—	—
ソバ属	1	—	—	1	—	—	—
アカザ科	5	10	—	1	2	1	—
ナデシコ科	3	2	—	4	1	3	—
カラマツソウ属	—	—	—	1	—	—	—
キンポウゲ科	—	—	—	1	—	—	—
アブラナ科	—	1	—	23	—	4	—
マメ科	2	1	—	1	3	3	—
キカシグサ属	—	—	—	1	—	—	—
アカバナ属-ミズユキノシタ属	—	—	—	1	—	—	—
セリ科	4	15	—	1	1	2	—
ジンコ科	1	—	—	—	—	—	—
オオバコ属	1	—	—	—	—	—	—
オミナエシ属	—	—	—	1	—	—	—
ヨモギ属	131	215	—	1	58	233	—
オナモミ属	—	1	—	—	—	—	—
キク亞科	1	2	—	—	—	2	—
タンポポ属	1	2	—	1	4	14	1
不明花粉	6	12	—	3	6	20	—
シダ類胞子							
ヒカゲノカズラ属	—	—	—	—	—	1	—
ゼンマイ属	—	—	—	1	—	3	—
サンショウウモ	—	—	—	1	—	—	—
他のシダ類胞子	62	132	4	74	361	276	25
合計	101	206	1	288	104	205	3
木本花粉	268	494	0	525	277	550	10
草本花粉	6	12	0	3	6	20	0
不明花粉	62	132	4	76	361	280	25
シダ類胞子	431	832	5	889	742	1035	38



第111図 水牧遺跡 花粉化石群集

スギ属が多産し、モミ属、マツ属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多く産出し、カヤツリグサ科、サンエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科、セリ科などを伴うほか、栽培種のソバ属も検出される。

## 2) B区

S I 3は、花粉化石がほとんど検出されず、サワグルミ属が1個体検出されるのみである。

## 3) C区

Ⅲ層(No.4)は、花粉化石の産出状況が悪い。木本花粉ではマツ属、コウヤマキ属が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、タンボボ亞科が、それぞれ1~5個体検出されるのみである。

谷埋土(No.2, 3)の花粉群集組成は類似する。木本花粉ではスギ属が最も多く産出し、マツ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属が多産し、カヤツリグサ科、タンボボ亞科などを伴うほか、ガマ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水湿地生植物に由来する花粉も検出される。谷埋土(No.2)では栽培種のイネ属が認められ、その割合は約7.7%である。

I層(No.1)は、木本花粉ではマツ属が多産し、スギ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、アブラナ科などを伴う。この他に、栽培種のイネ属やソバ属、水湿地生植物のガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、サンショウモなど検出される。イネ科花粉中におけるイネ属の割合は、約11.7%である。

## (2) 植物珪酸体分析 (第60表、第112図)

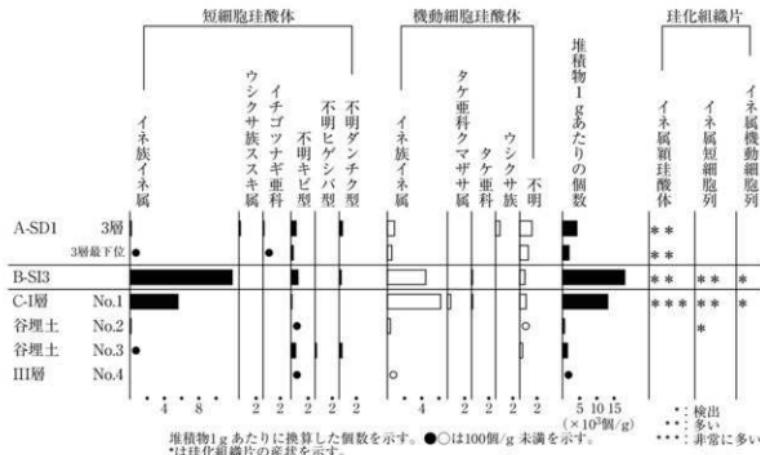
各試料からは植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められるなど、保存状態は不良である。

## 1) A区

S D 1最下層の植物珪酸体含量は、約1,900~4,200個/gである。スキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科のほか、栽培植物のイネ属の葉部に由来する植物珪酸体や穂(穎)に形成される顆粒珪酸体が検出される。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が100個未満~200個/g、機動細胞珪酸体が約500~800個/gである。

## 2) B区

S I 3カマド埋植物の植物珪酸体含量は約1.8万個/gと高く、その大部分が栽培植物のイネ属であ



第112図 水牧遺跡 植物珪酸体含量と珪化組織片の産状

第60表 水牧遺跡 植物珪酸体含量

分類群	09M-A		09M-B		09M-C		
	S D 1 3層	S I 3 3層最下位	I 層 No 1	谷埋土 No 2	谷埋土 No 3	III層 No 4	
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族イネ属	200	<100	11,900	5,600	100	<100	—
ウシクサ族ススキ属	200	—	—	—	—	—	—
イチゴノツガキ亞科	100	<100	—	—	—	—	—
不明キビ型	600	300	800	100	<100	600	<100
不明ヒゲシバ型	—	—	—	—	—	200	—
不明ダンチク型	400	—	200	—	—	300	—
イネ科葉部機動細胞珪酸体							
イネ族イネ属	800	500	4,500	6,200	400	—	<100
タケ亜科クマザサ属	—	—	—	400	—	—	—
タケ亜科	—	—	100	100	—	—	—
ウシクサ族	500	—	—	—	—	—	—
不明	1,400	1,000	600	700	<100	300	—
合計	1,400	400	12,900	5,700	200	1,100	<100
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,700	1,500	5,200	7,400	400	300	<100
イネ科葉部機動細胞珪酸体	4,200	1,900	18,100	13,100	600	1,400	100
珪化組織片							
イネ属顆粒体	**	**	**	***	—	—	—
イネ属短細胞列	—	—	**	**	*	—	—
イネ属機動細胞列	—	—	*	*	—	—	—

\*「-」: 未検出, 「\*」: 検出, 「\*\*」: 多い, 「\*\*\*」: 非常に多い。

る。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が約1.2万個/g、機動細胞珪酸体が4,500個/gであり、顆粒体、短細胞列、機動細胞列などの珪化組織片も認められる。

## 3) C区

植物珪酸体含量は、III層 (No 4) ~ 谷埋土 (No 2, 3) と I 層 (No 1) とで異なる。III層 (No 4)

～谷埋土（No 2, 3）の植物珪酸体含量は約100～1,400個/gであり、栽培植物のイネ属と不明キビ型がわずかに認められる程度である。I層（No 1）は、植物珪酸体含量が約1.3万個/gであり、イネ属の含量が多く、珪化組織片（穎珪酸体、短細胞列、機動細胞列）も多く検出される。イネ属の含量は、短細胞珪酸体が約5,600個/g、機動細胞珪酸体が約6,200個/gである。

#### 4 考察

##### （1）古植生

古代のA区SD1の花粉群集は、草本花粉の割合が高く、木本類のスギ属の多産、草本類のイネ科とヨモギ属の産出で特徴付けられた。また、古代・中世の遺物包含層とされるC区谷埋土（No 3, 2）は、スギ属の割合が漸減するが、群集組成は概ね類似する。したがって、古代～中世頃の山地および周辺の丘陵には、ブナ属、コナラ属コナラ亜属を主要構成種とする冷温帶性落葉広葉樹林が形成されており、丘陵縁辺や微高地上には、モミ属、マツ属、スギ属、イチイ科一ヌガヤ科ヒノキ科などの針葉樹、カバノキ属などの落葉広葉樹、アカガシ亜属、シイ属等の常緑広葉樹などが分布していたと考えられる。また、沢沿いや河畔にはサワグルミ属、ハンノキ属、ニレ属一ケヤキ属などが生育していたと考えられる。調査地周辺は、イネ科やヨモギ属をはじめとして、カヤツリグサ科、サンエタデ節一ウナギツカミ節、アカザ科、セリ科、タンボボ科などの人里植物が生育し、谷内の湿润な場所には、ガマ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水湿地生草本も生育したと考えられる。

表土のC区I層（No 1）の花粉群集は、古代～中世試料で多産したスギ属が減少し、マツ属の多産とイネ科の多産によって特徴付けられた。この他の群集組成は、古代～中世試料と概ね類似する状況から、同様の植生が継続したとみられる。

なお、水牧遺跡の古代～中世および表土の花粉群集に認められたマツ属とスギ属、イネ科の消長は、五社遺跡、下老子笹川遺跡の分析結果（株式会社古環境研究所、2006）にも確認されており、本地域の植生変遷と調和する結果と言える。また、これらの分析結果を踏まえると、周辺に分布したスギ林が古代以降次第に減少し、マツ属の二次林が増加したことが推定される。

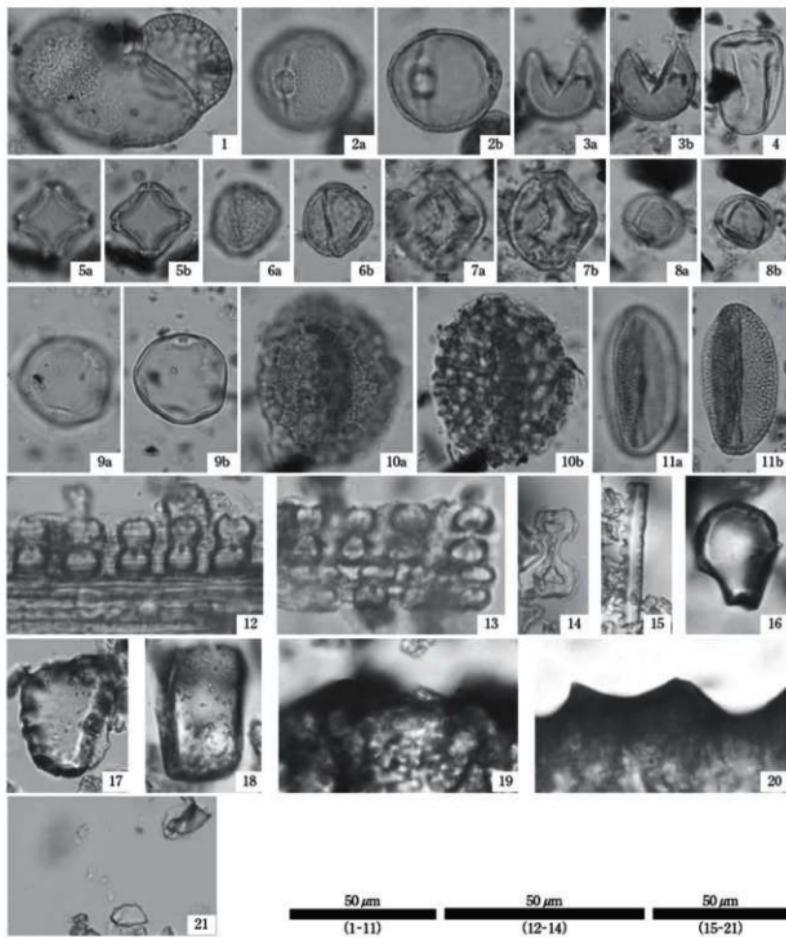
##### （2）植物利用

水牧遺跡の栽培植物についてみると、古代（7世紀末～8世紀）のA区SD1からは、イネ属およびソバ属が検出された。このことから、当該期におけるソバ栽培の可能性が示唆される。イネ属は、機動細胞珪酸体の含量が低いことから、調査地付近での稲作の可能性は低いと考えられる。一方、B区SI3のカマド埋植物では、イネ属の植物珪酸体が高い密度で確認されたほか、珪化組織片が多く検出された。この産状は、遺構の性格および試料の由来を考慮すると、イネの植物体（穎殼や稻藁など）が燃料材として利用された痕跡と考えられる。古代・中世は、C区谷埋土よりイネ属の花粉、植物珪酸体が検出された。イネ属花粉の割合は低率であり、植物珪酸体含量も極めて低いことから、調査地付近での稲作の可能性は低い。一方、表土とされるC区I層においても、イネ属の花粉、植物珪酸体が検出された。イネ属花粉はC区谷埋土と同様に低率であるが、植物珪酸体含量は短細胞珪酸体が約5,600個/g、機動細胞珪酸体含量が約6,200個/gであった。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高い（杉山、2000）とされている。この基準を参考すると、調査地および付近で稲作が行われた可能性が示唆される。

### 引用文献

- 株式会社古環境研究所, 2006, 花粉分析, 富山県文化振興財團埋蔵文化財発掘調査報告第31集「下老子 笹川遺跡発掘調査報告—能越自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V—第五分冊 自然科学・考察編」, 財團法人 富山県文化振興財團・埋蔵文化財調査事務所, 72-88.
- 近藤 錬三, 2004, 植物ケイ酸体研究, ベドロジスト, 48, 46-64.
- 中村 純, 1974, イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として, 第四紀研究, 13, 187-193.
- 杉山 真二, 2000, 植物珪酸体 (プラント・オバール), 辻 誠一郎 (編著) 考古学と自然科学3 考古学と植物学, 同成社, 189-213.

## 写真1 水牧遺跡 花粉化石・植物珪酸体



1. マツ属(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 2. ブナ属(09M-C; C-I層 No1)  
 3. スギ属(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 4. カヤツリグサ科(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 5. ハンノキ属(09M-C; C-I層 No1)  
 6. コナラ属コナラ属(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 7. レーレ属-ケヤキ属(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 8. ヨモギ属(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 9. イネ科(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 10. ソバ属(09M-C; C-I層 No1)  
 11. サナエクテ属-クナギフカモ属(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 12. イネ属短細胞列(09M-B; SD 3)  
 13. イネ属短細胞列(09M-C; C-I層 No1)  
 14. ススキ属短細胞珪酸体(09M-A; SD 1 3層)  
 15. イチゴナギ科短細胞珪酸体(09M-A; SD 1 3層)  
 16. イキモチ属短細胞珪酸体(09M-C; C-I層 No1)  
 17. クマザサ属微動細胞珪酸体(09M-C; C-I層 No1)  
 18. ウシクサ族微動細胞珪酸体(09M-A; SD 1 3層最下位)  
 19. イネ属短珪酸体(09M-B; S I 3)  
 20. イネ属短珪酸体(09M-C; C-I層 No1)  
 21. 状況(植物粒子が散在)(09M-C; II層 No4)

# 写 真 図 版





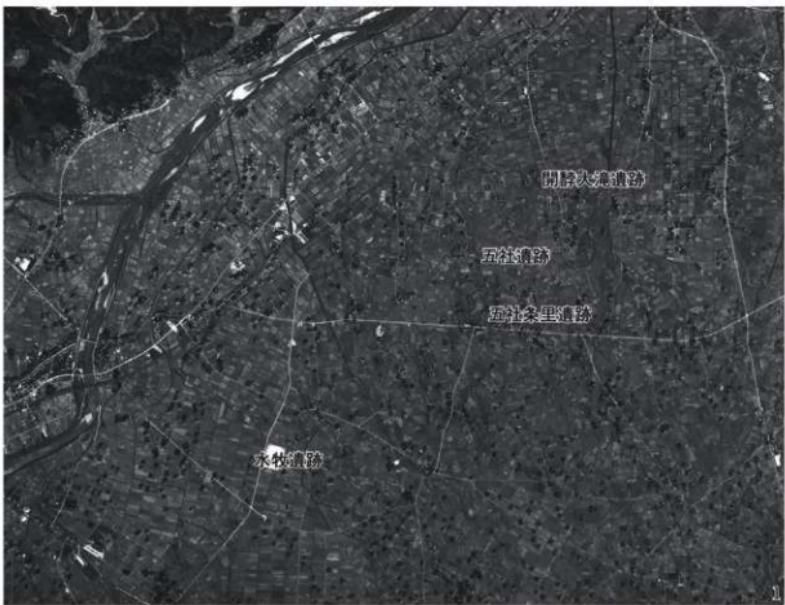
上：五社遺跡遠景(東から)

下：下川原遺跡B地区遠景(西から)

図版 2



五社遺跡 SI 1 出土遺物



1



2

1. 開辟大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡航空写真(1967年)
2. 開辟大滝遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡航空写真(2002年)

図版 4



1. 下川原遺跡航空写真(1947年)

2. 下川原遺跡航空写真(2003年)



1



2

開辟大滝遺跡（中近世）

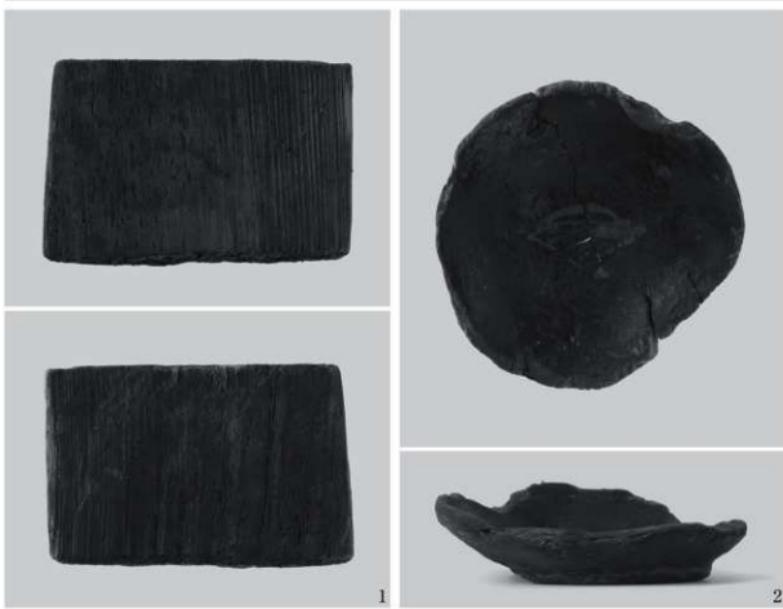
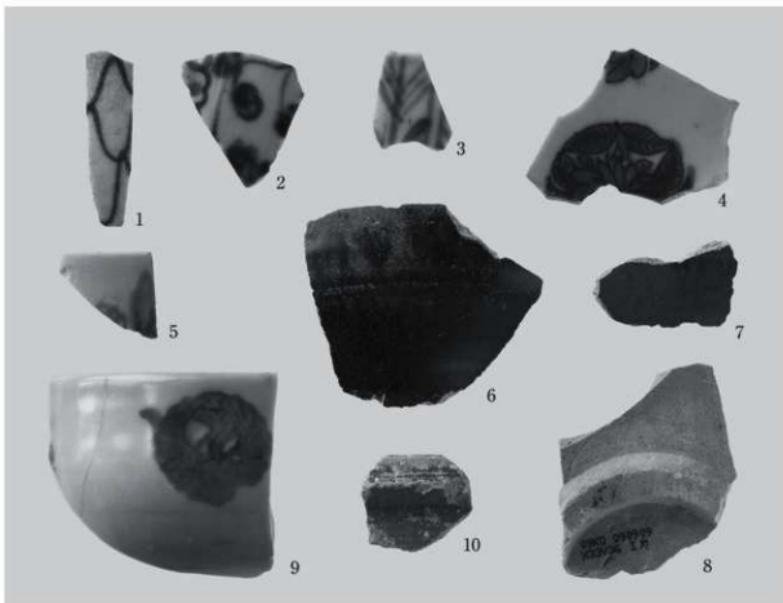
1. 全景(南西から) 2. 全景(真上から)

図版 6



開辟大溝遺跡（中近世）

1. 全景(北東から) 2. SD 1(北から) 3. SD 3(北から) 4. SD 4(北から) 5. SD 4漆器出土状況(北から)



開酈大窯遺跡 陶磁器・木製品（中近世）

SD 1 SD 3 SD 4 包含層

図版 8



五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代）

1. C地区遠景(東から) 2. C地区全景(東から)



1



2

五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代）

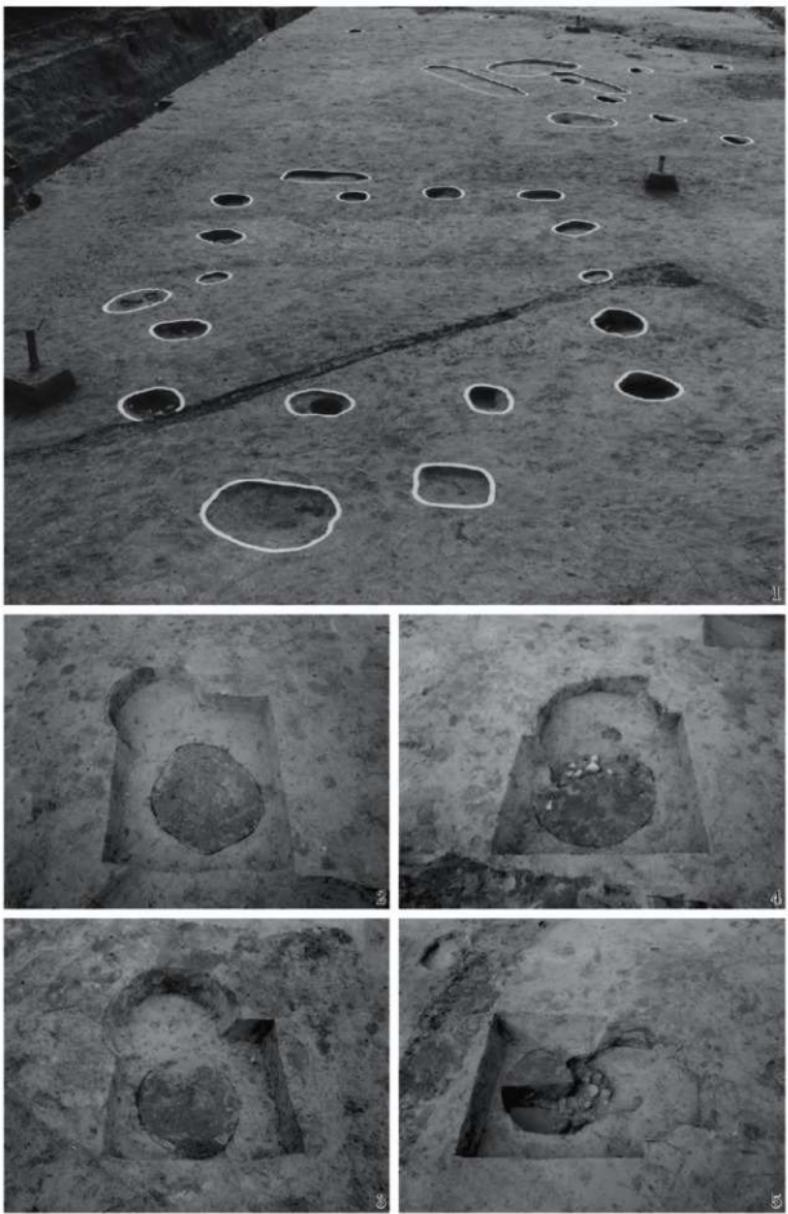
1. 建物群(東から) 2. 建物群(西から)

図版 10



五社遺跡（飛鳥時代）

1. SB 1 (南西から) 2. SP 3 断割(東から) 3. SP 4 断割(東から) 4. SP 5 断割(東から) 5. SP 6 断割(東から)



五社遺跡（飛鳥時代）

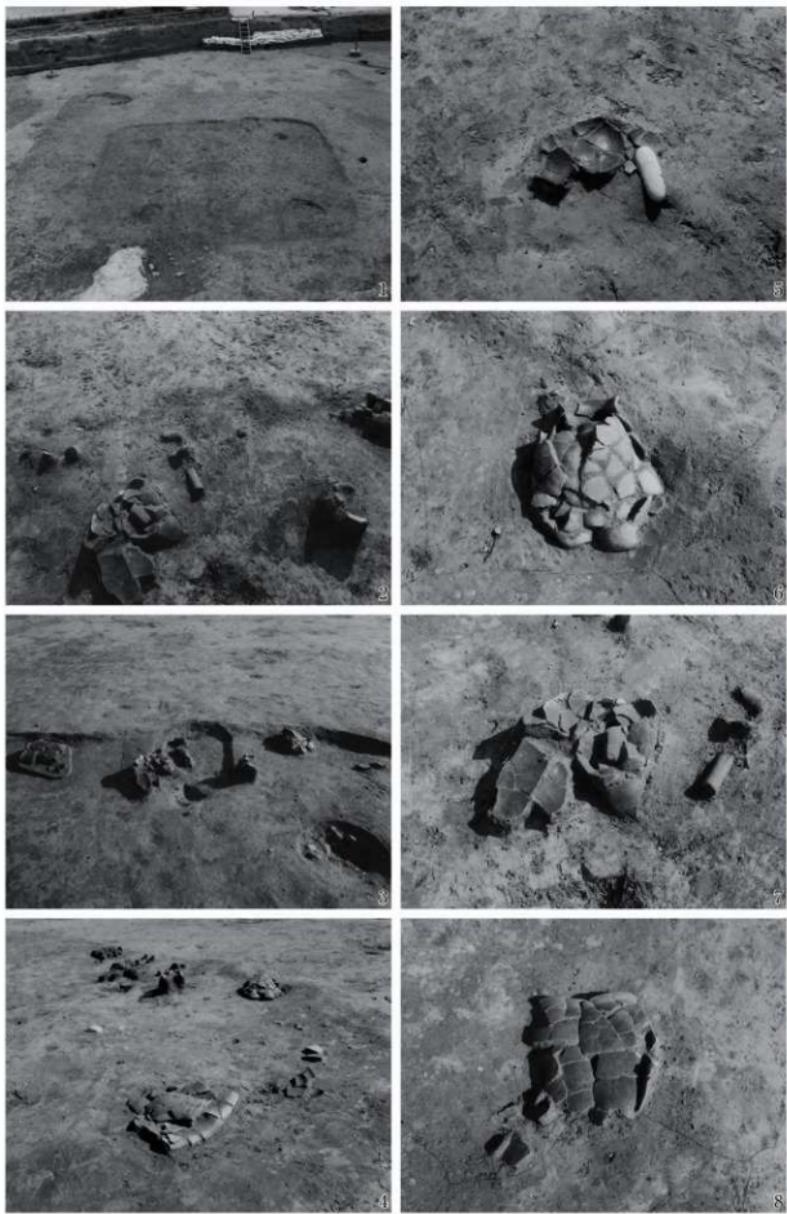
1. SB 2 (南西から)
2. SP17横ずれ検出状況(南から)
3. SP18横ずれ検出状況(南から)
4. SP21横ずれ検出状況(南から)
5. SP22断面(東から)

図版 12



五社遺跡（飛鳥時代）

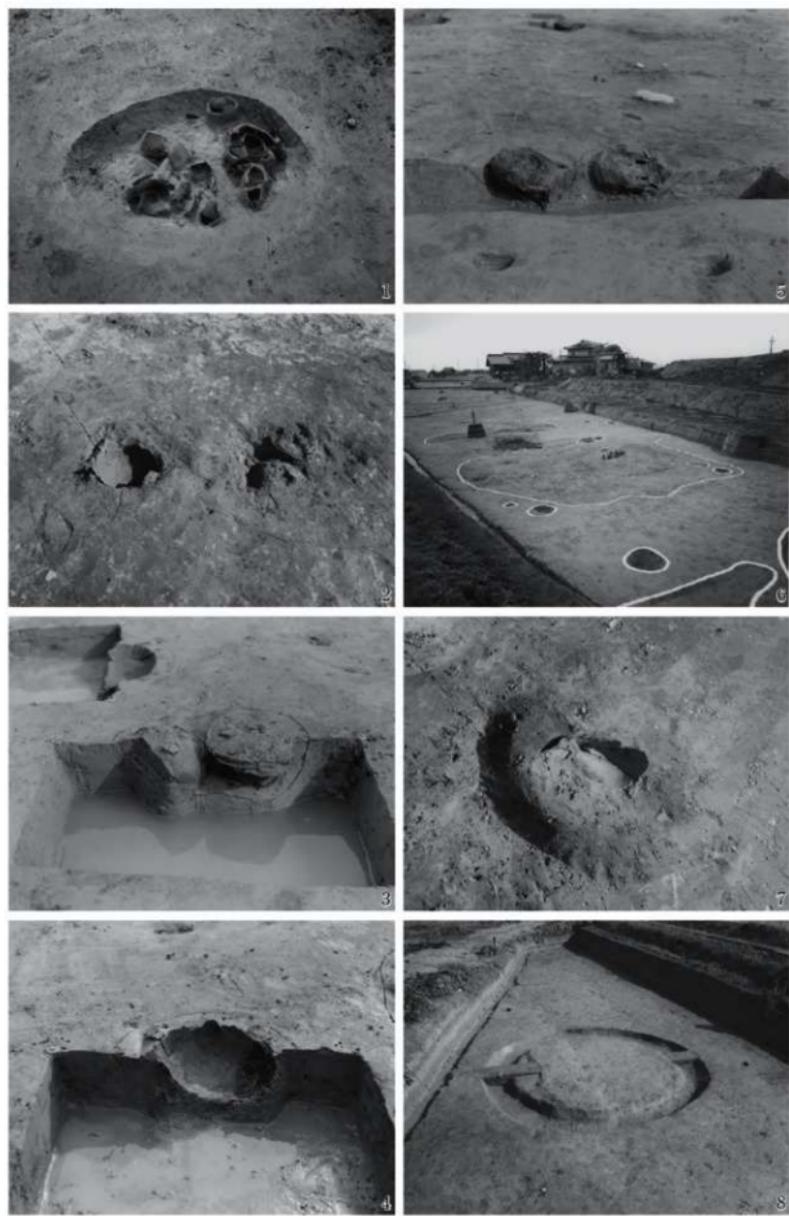
1. SB3 (西から) 2. SI 1 (北から)



五社遺跡（飛鳥時代）

1. SI1(北から)
2. SI1 カマド(北から)
3. SI1 カマド(北から)
4. SI1 遺物出土状況(西から)
5. SI1 遺物出土状況(北西から)
6. SI1 遺物出土状況(西から)
7. SI1 遺物出土状況(北西から)
8. SI1 遺物出土状況(南西から)

図版 14



五社遺跡（古墳時代・飛鳥時代）

1. SK14遺物出土状況(北から)
2. SK20・SK21(北から)
3. SK20断面(南西から)
4. SK21断面(北から)
5. SK18・SK19断面(南西から)
6. SX 1(東から)
7. SX 1 遺物出土状況(東から)
8. SX 2(南西から)



五社遺跡（平安時代・中世）

1. B地区遠景(北から) 2. B地区全景(北西から) 3. SD 2 (南東から) 4. SD 2 遺物出土状況(南から)  
5. SK 30 遺物出土状況(西から)

図版 16



五社遺跡（中近世）

1. A地区遠景(西から) 2. SD 5 (東から)



五社遺跡 土器（古墳時代・飛鳥時代）

SI1 SK8 SK14

図版 18



15



18



19



16



24



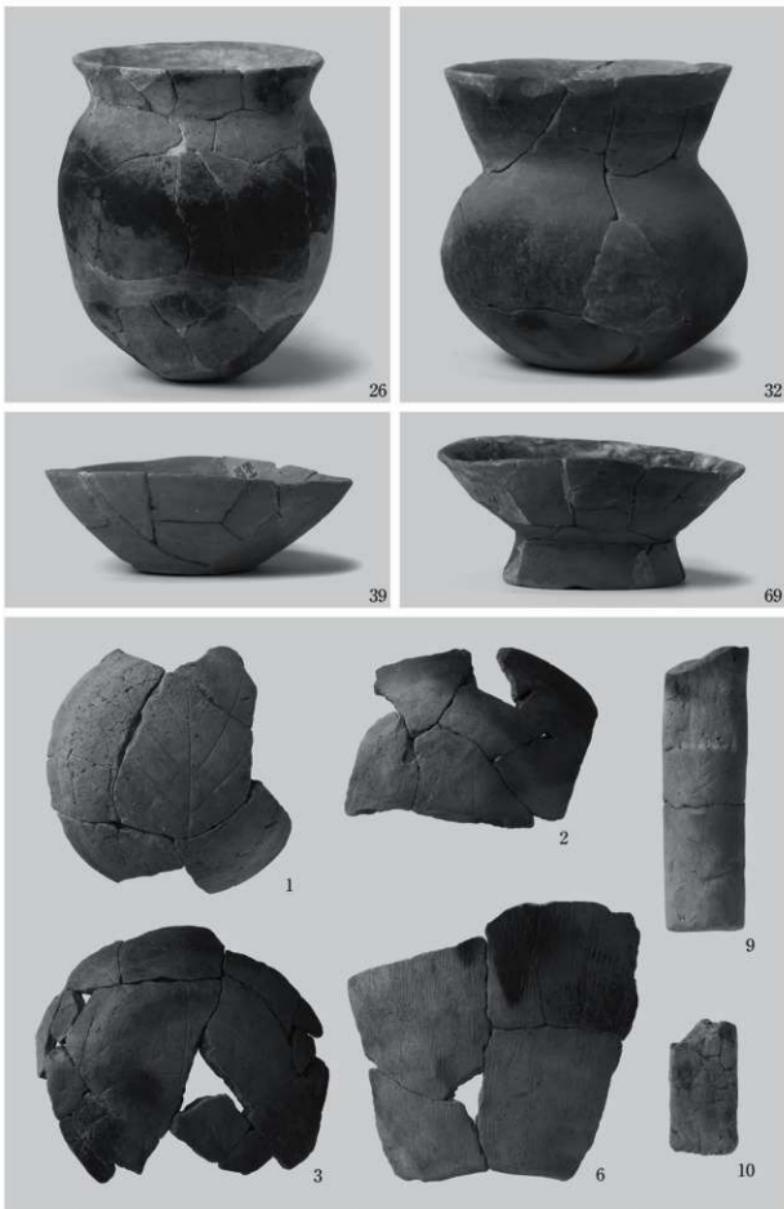
17



28

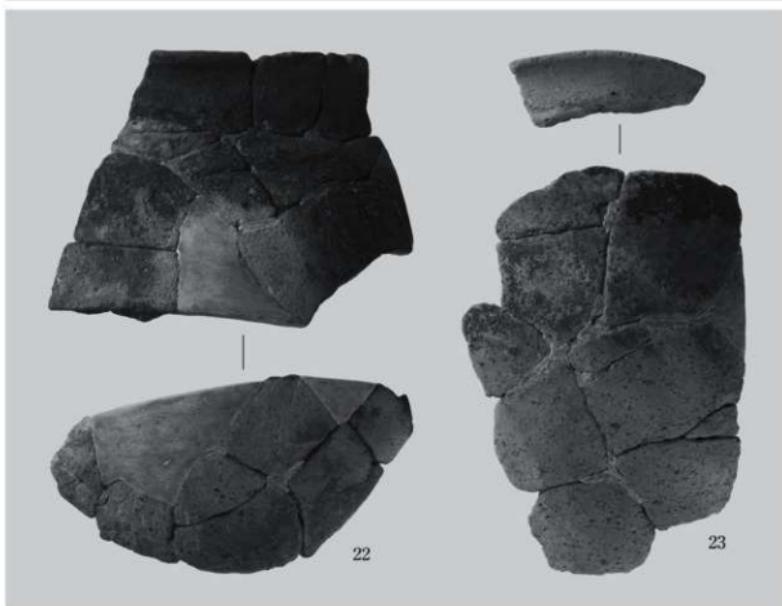
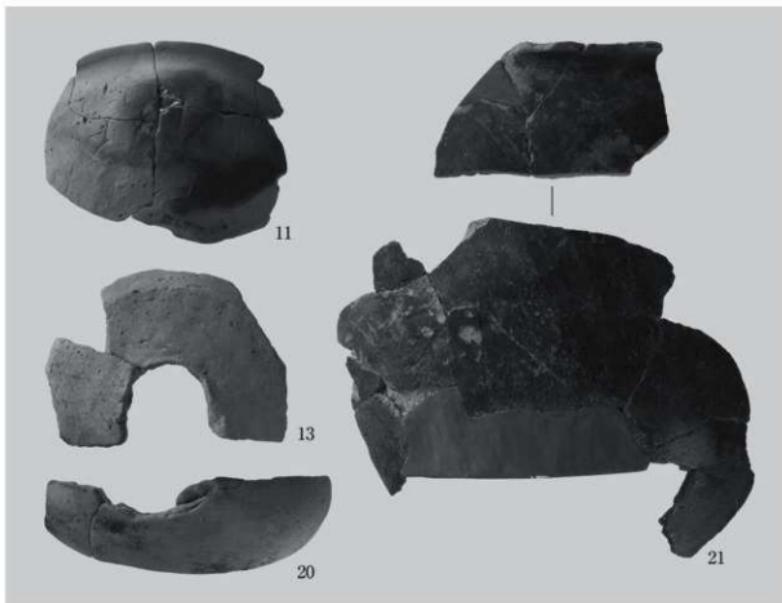
五社遺跡 土器（古墳時代・飛鳥時代）

SK18～SK21 土器群



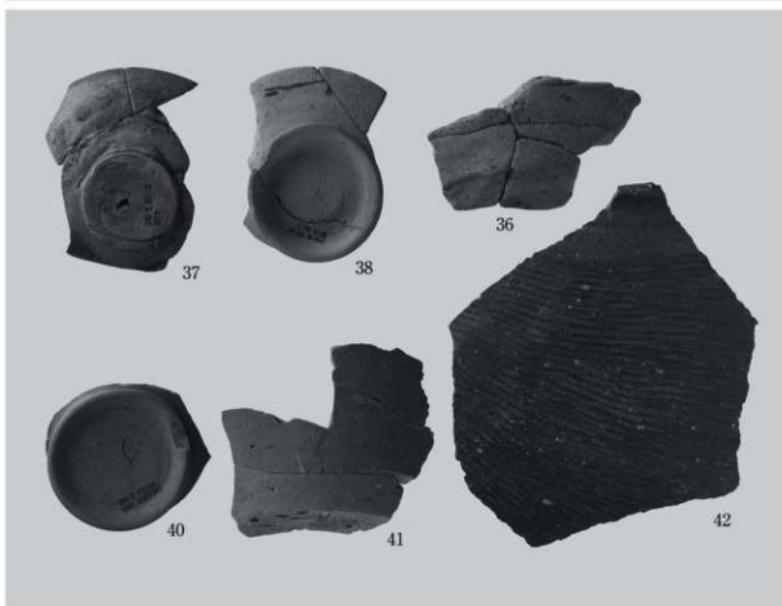
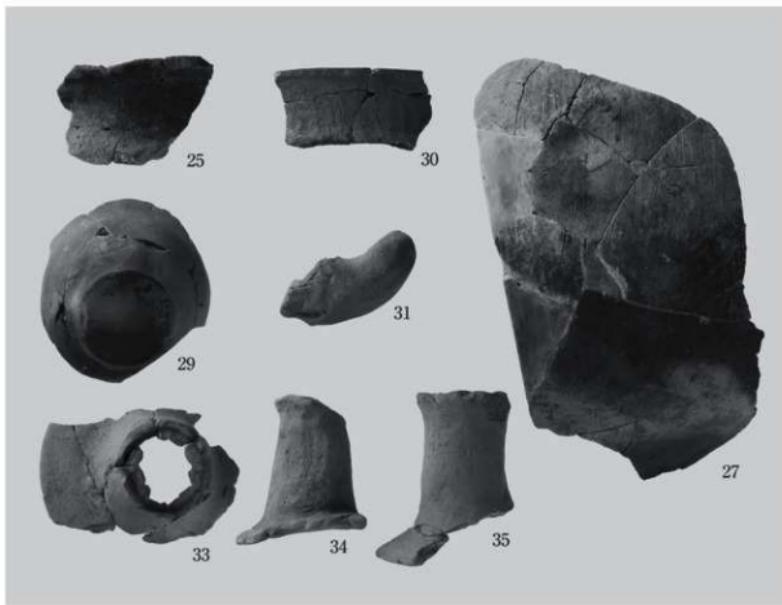
五社遺跡 土器・土製品（古墳時代・飛鳥時代・平安時代）

SI 1 SK33 土器群 包含層



五社遺跡 土器（古墳時代・飛鳥時代）

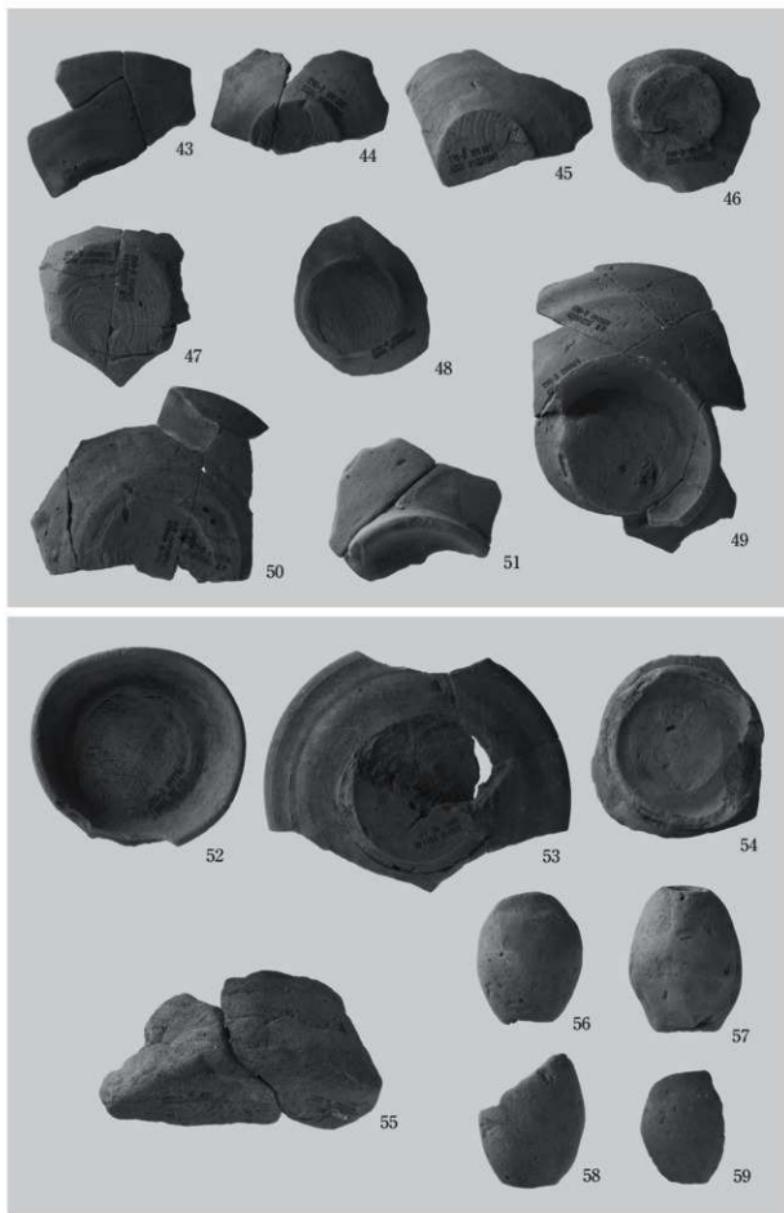
SK 7 SK 9 SX 1 土器群 包含層



五社遺跡 土器（古墳時代・飛鳥時代・平安時代）

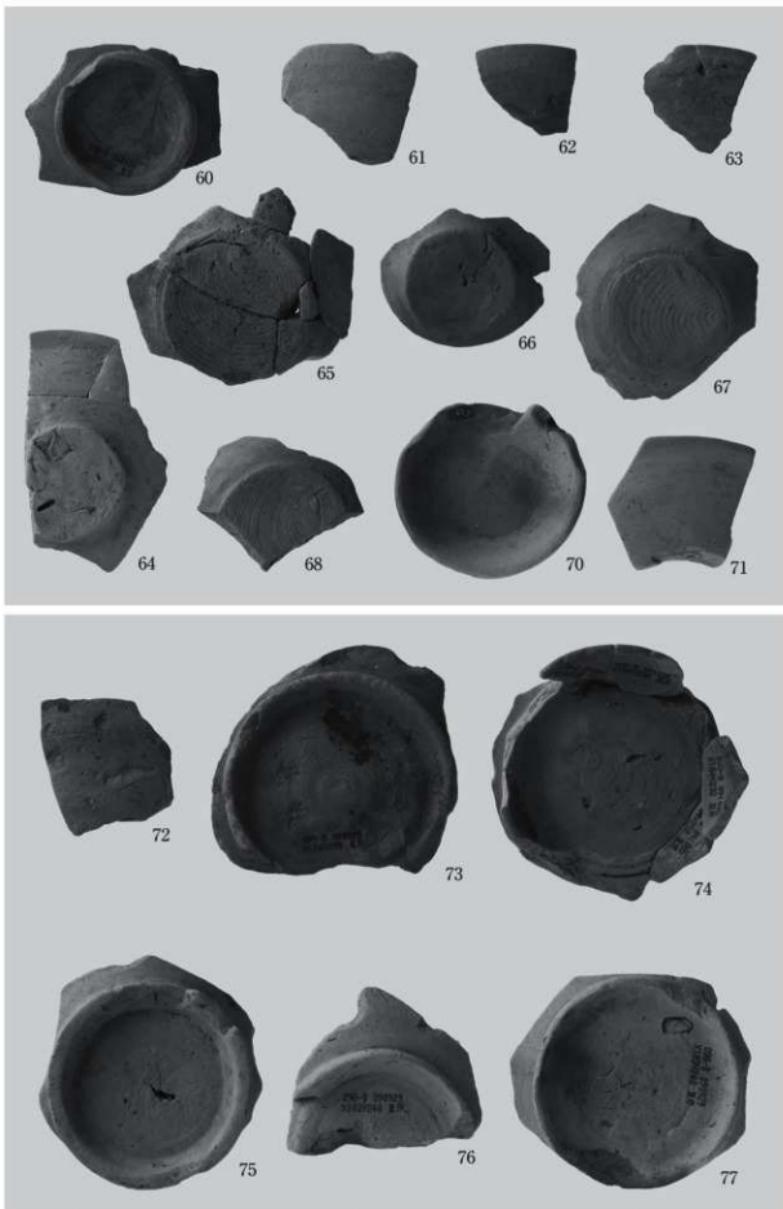
SK22 SK30 SD 2 土器群 包含層

図版 22



五社遺跡 土器・土製品（平安時代）

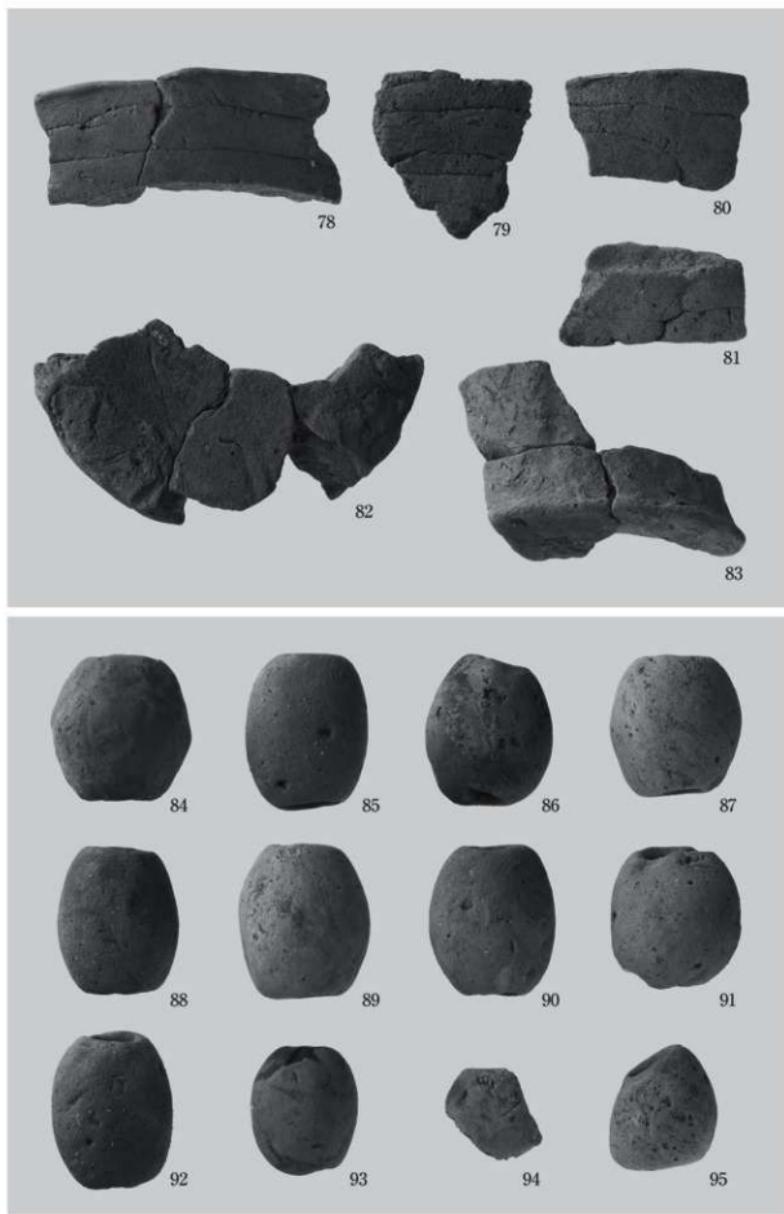
SD 2



五社遺跡 土器（平安時代）

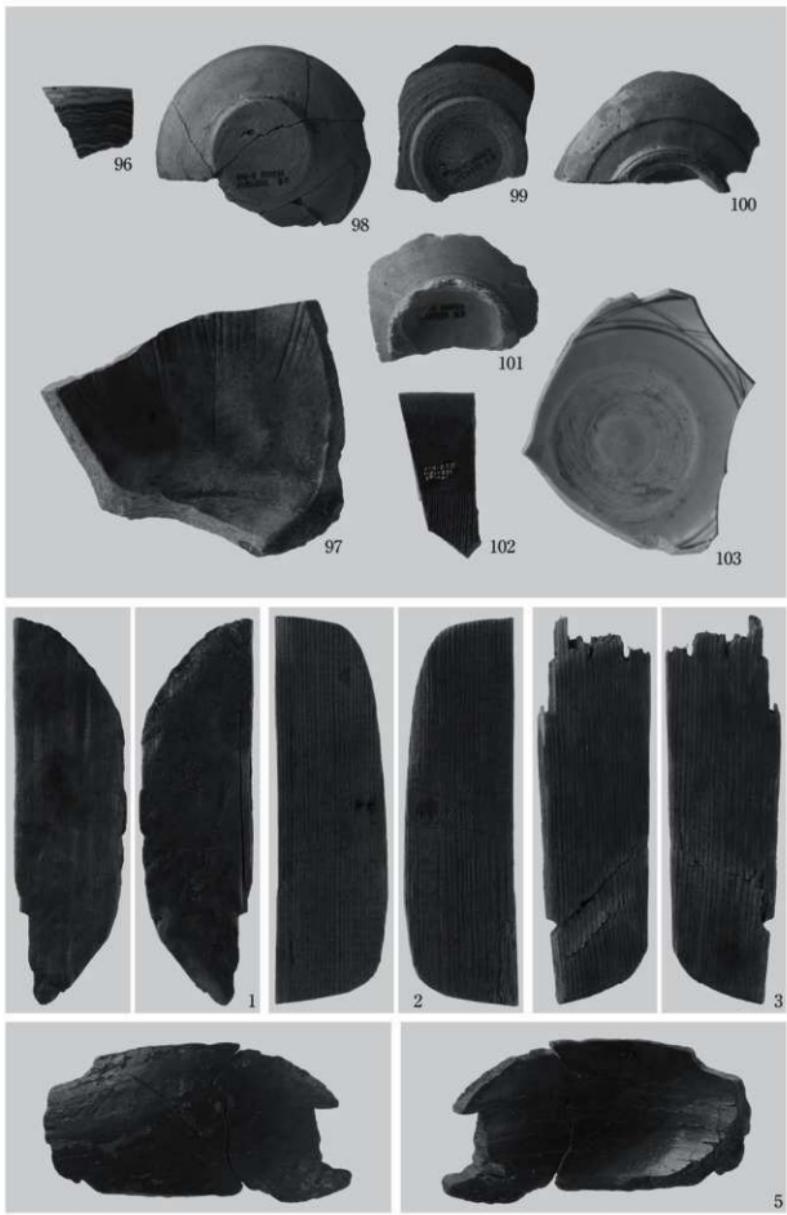
包含層

図版 24



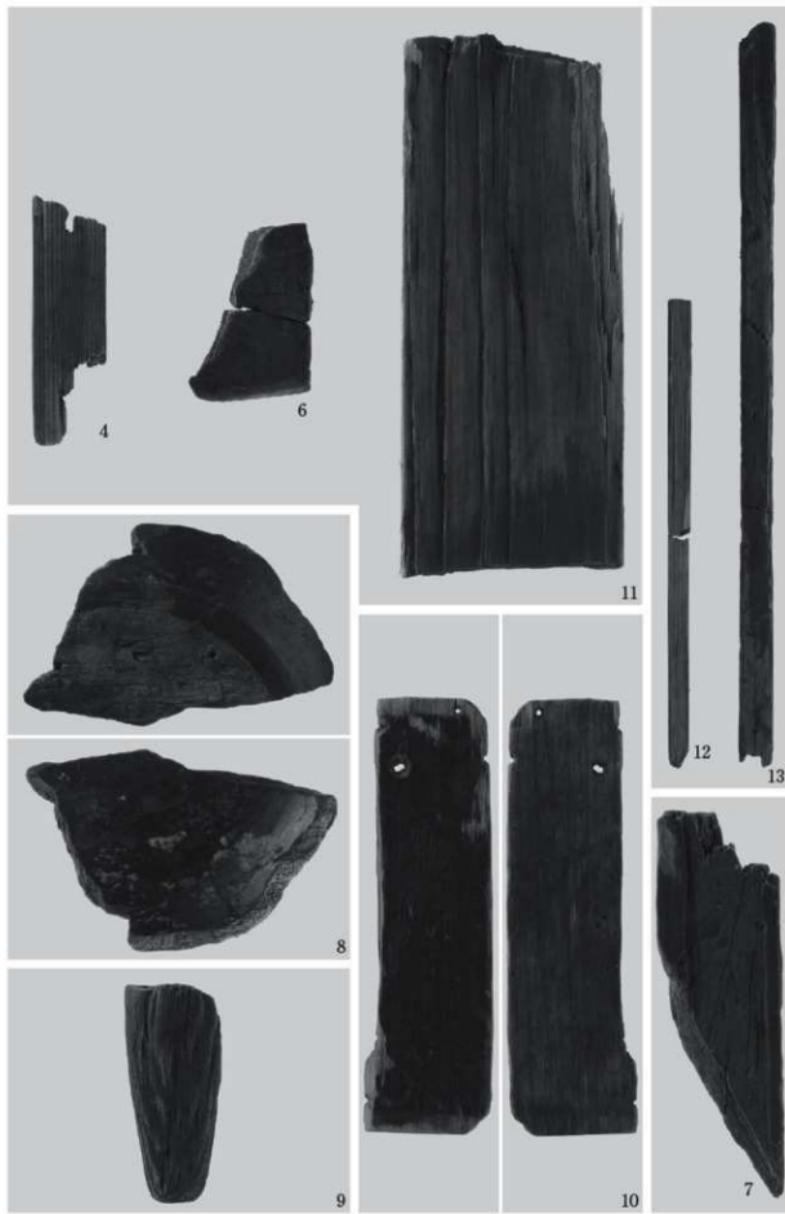
五社遺跡 土器・土製品（平安時代）

包含層



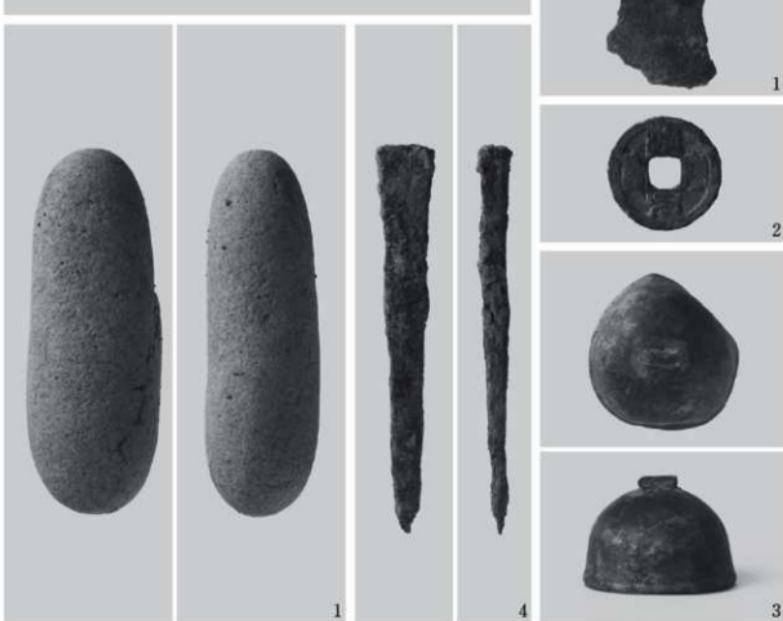
五社遺跡 土器・陶磁器・木製品（中近世）

SD 5 SD 6 包含層



五社遺跡 木製品（中近世）

SD 6 SD 9 包含層



五社遺跡 石製品・金属製品（飛鳥時代～近世）

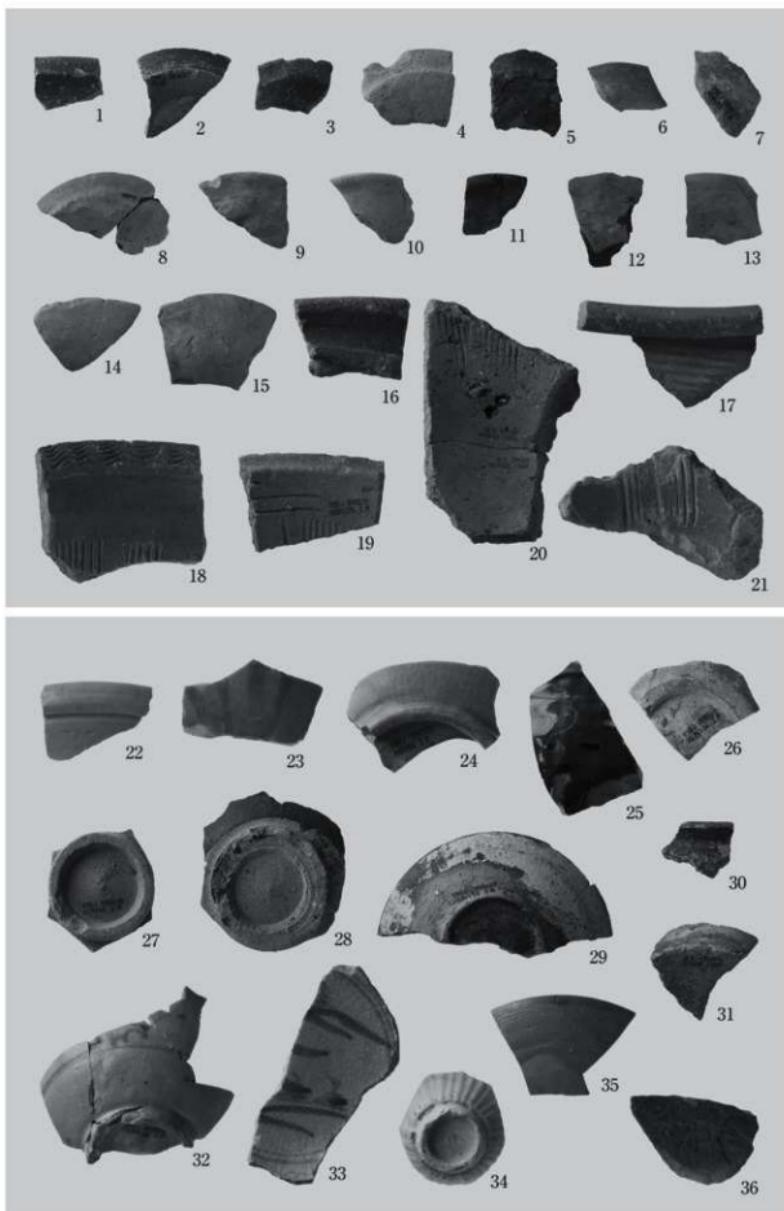
SI1 SD2 包含層

図版 28



五社条里遺跡（近世）

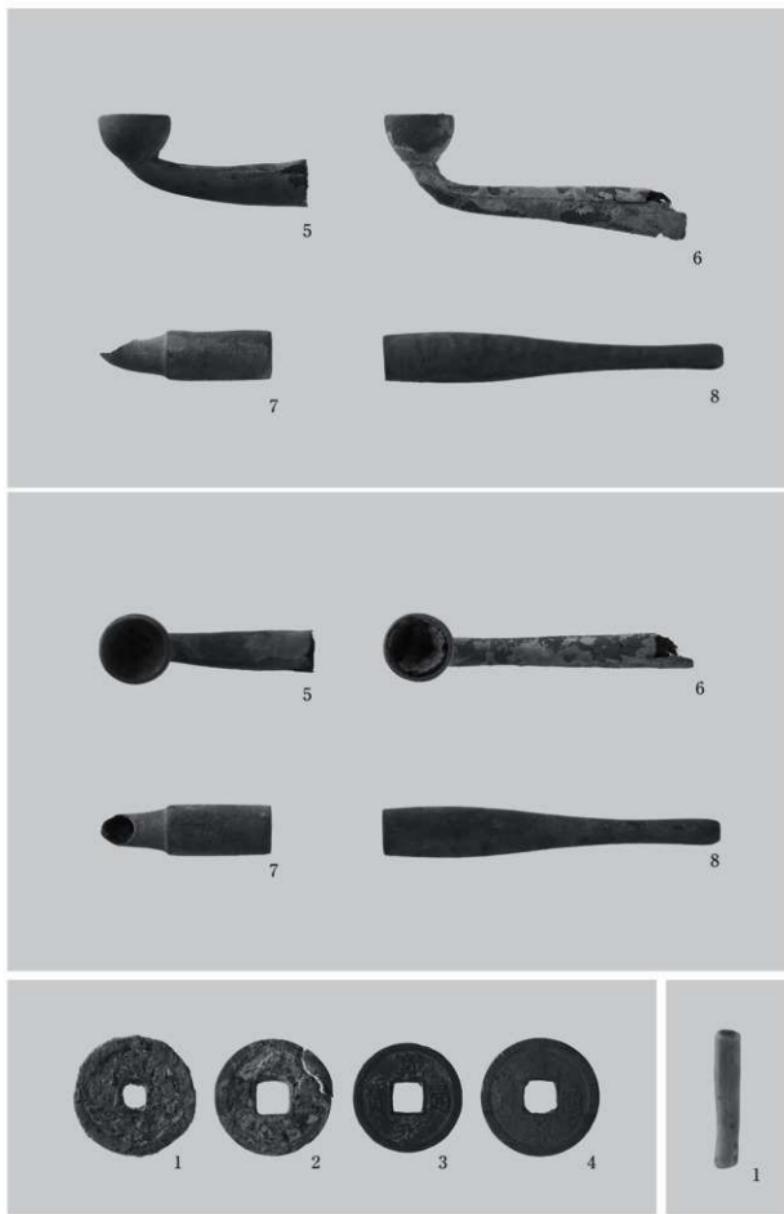
1. 遠景(南東から) 2. 全景(東から) 3. 溝群(南西から) 4. 溝群(東から) 5. SD 9(東から)



五社条里遺跡 土器・陶磁器（中近世）

SK 3 SD24 包含層

図版 30



五社条里遺跡 石製品・金属製品（中近世）

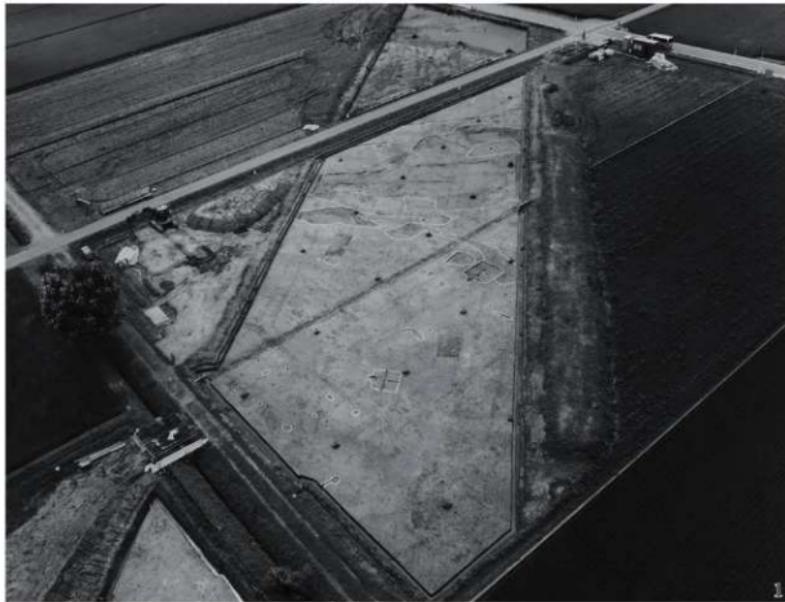
SD13 SD46 包含層



水牧遺跡（古代・中近世）

1. A地区全景(南東から) 2. SD 1・SD 2・SD 8～SD11(南から) 3. SK 1(北から)  
4. SD 1・SD 2・SD 8～SD11(南東から) 5. SDI2(南東から)

図版 32



1



2

水牧遺跡（古代・中世）

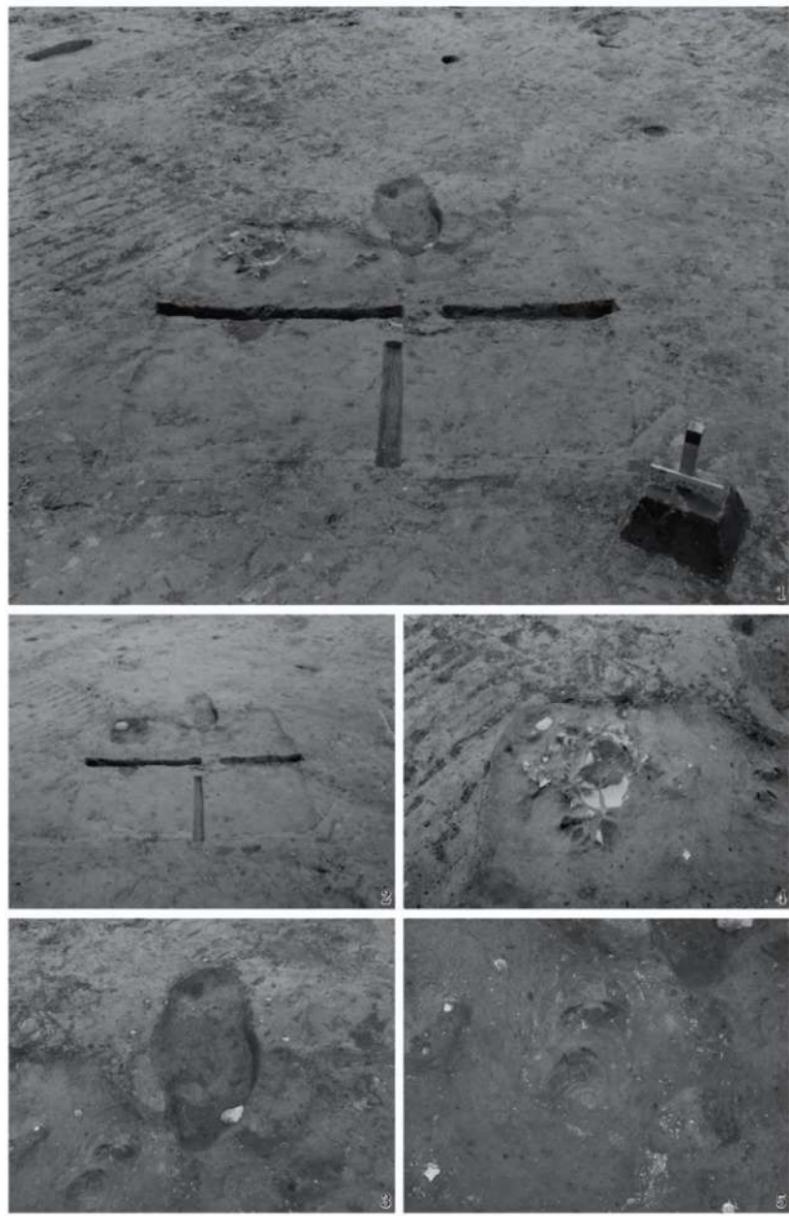
1. B地区全景(東から) 2. B地区全景(北から)



水牧遺跡（古代）

1. SI1・SI2(北西から)
2. SI1・SI2(西から)
3. SI1 カマド(西から)
4. SI2 遺物出土状況(西から)
5. SI2 遺物出土状況(西から)

図版 34



水牧遺跡（古代）

1. SI 3 (北から)
2. SI 3 (北から)
3. SI 3 カマド(北から)
4. SI 3 遺物出土状況(北から)
5. SI 3 遺物出土状況(北から)



2.



4.



3.



5.

### 水牧遺跡（中近世）

1. SD13(南東から) 2. SK 9(南から) 3. SD14(北西から) 4. SD20(南東から) 5. SX 1(北から)

図版 36



水牧遺跡（古代・中近世）

1. C地区遠景(北西から) 2. C地区全景(東から)



1



2



3



4



5

### 水牧遺跡（古代）

1. SI4 (西から)
2. SI4 (西から)
3. SI4 カマド付近(西から)
4. SI4 遺物出土状況(西から)
5. SI4 遺物出土状況(西から)

図版 38



水牧遺跡（古代）

1. SI5（西から） 2. SI5（西から） 3. SI5 炭化物集中範囲（西から） 4. SI5 遺物出土状況（西から）  
5. SD5（南から）



水牧遺跡（中近世）

1. C地区東側ブロック(西から) 2. SD16(北から) 3. SD18・SD19(南東)  
4. SK 5(西より)  
5. SD17(北から)

図版 40



17



48



23



90



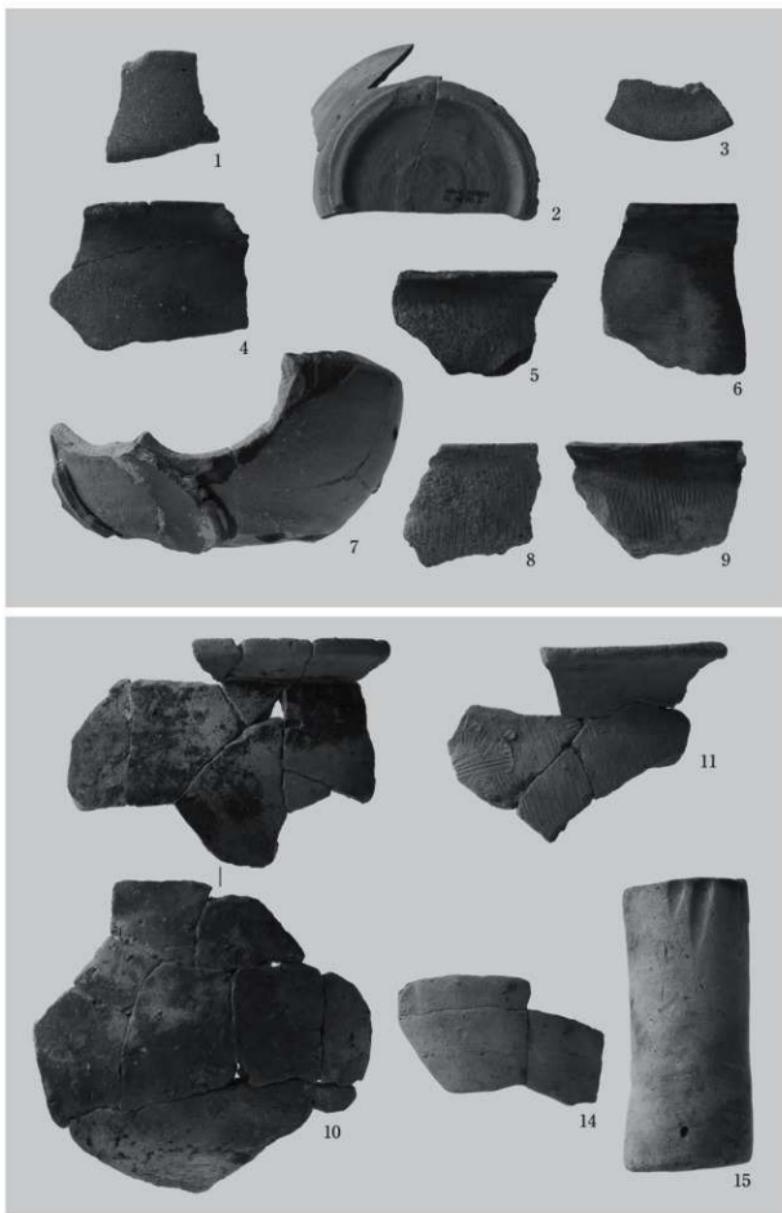
41



117

水牧遺跡 土器（古墳時代・古代・中世）

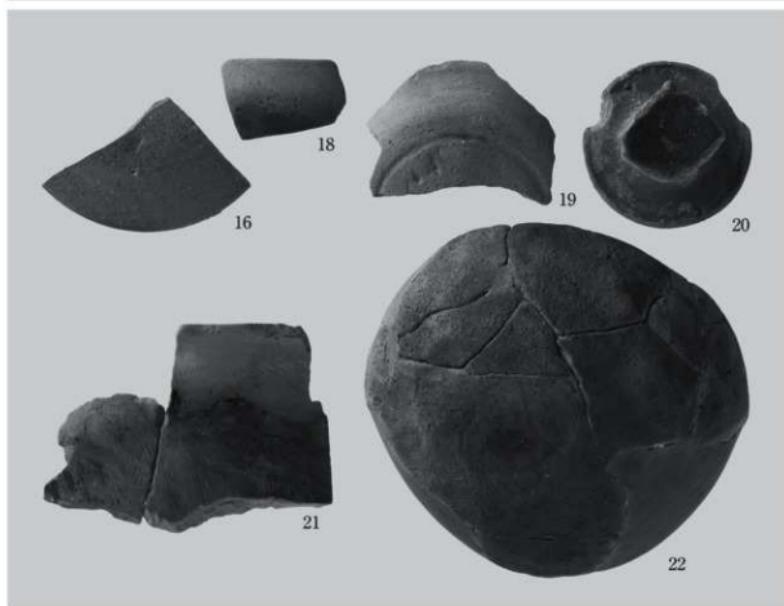
SI 4 SK12 包含層



水牧遺跡 土器（古代）

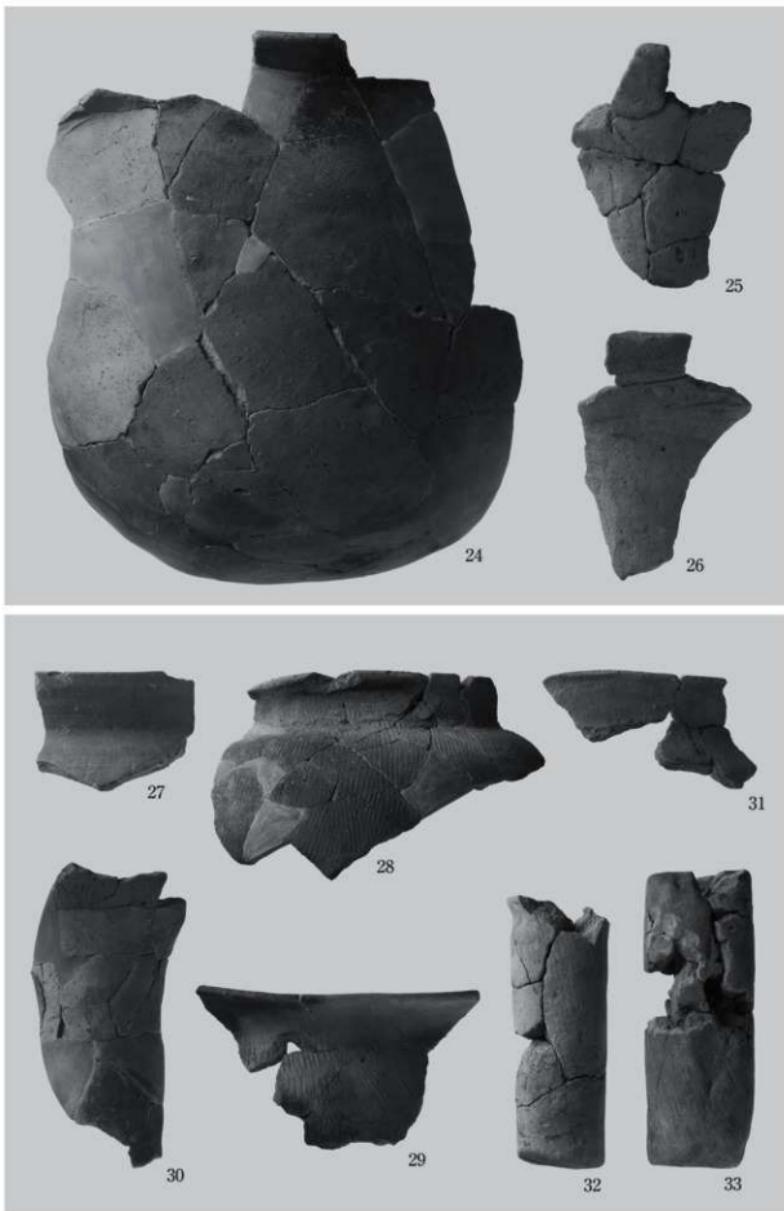
SI 1 ~ SI 3

图版 42



水牧遺跡 土器（古代）

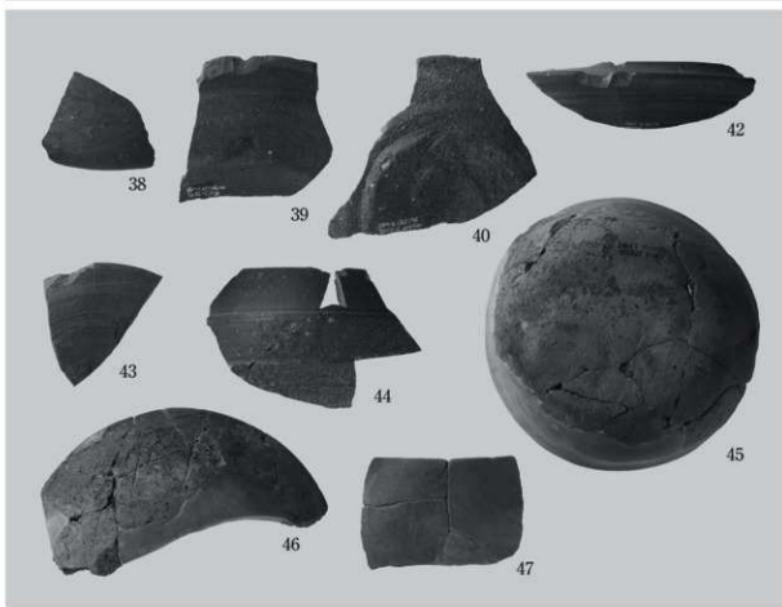
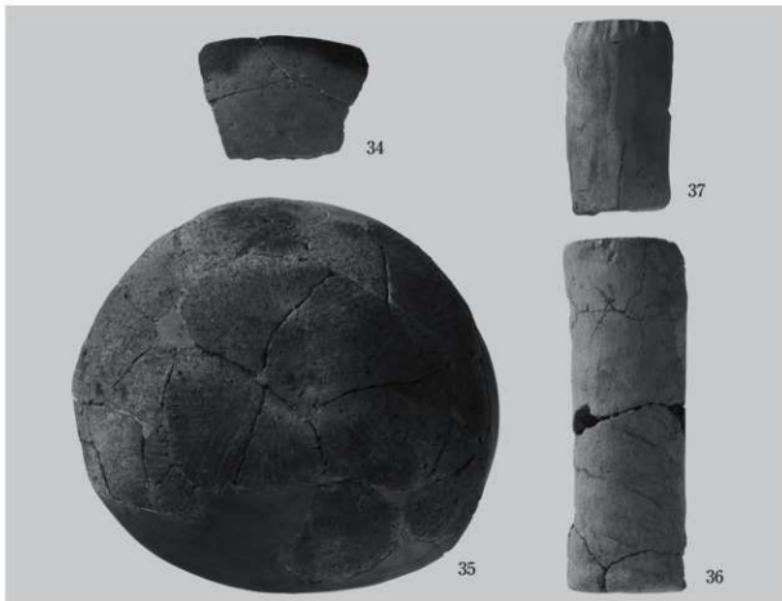
SI 3 SI 4



水牧遺跡 土器・土製品（古代）

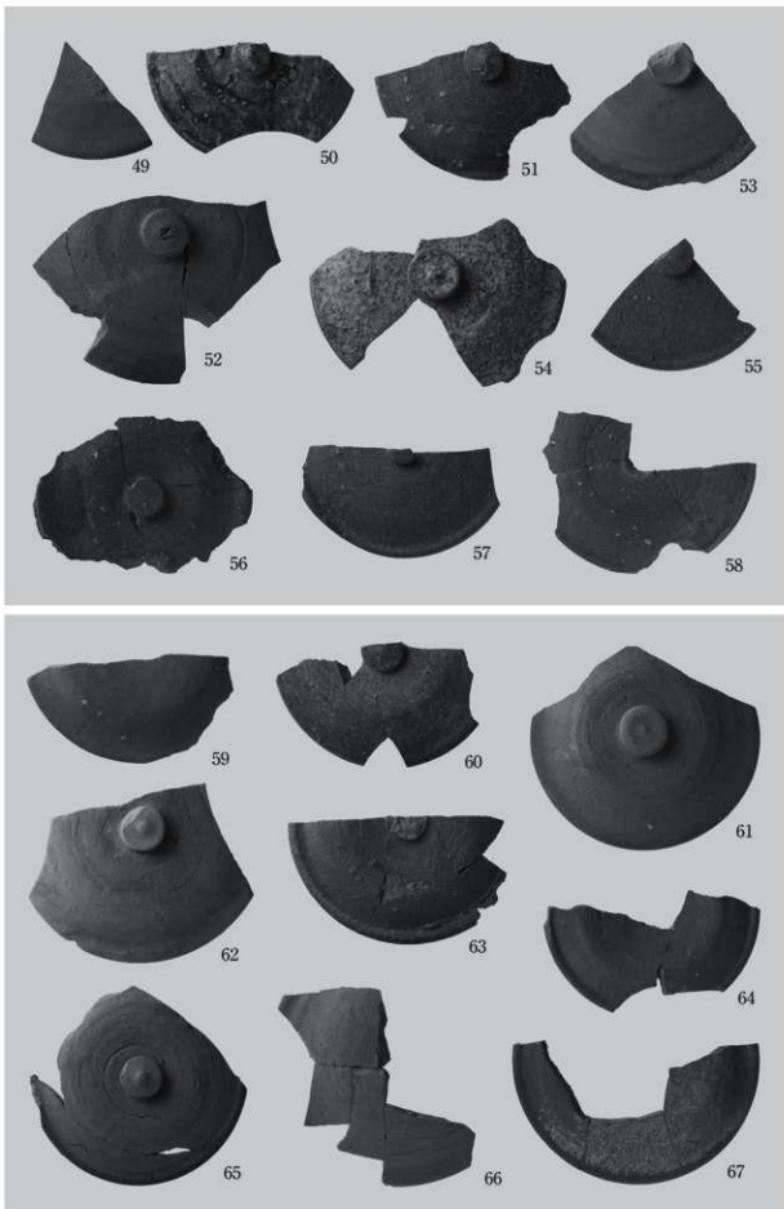
SI 4 SI 5 SK 1

图版 44



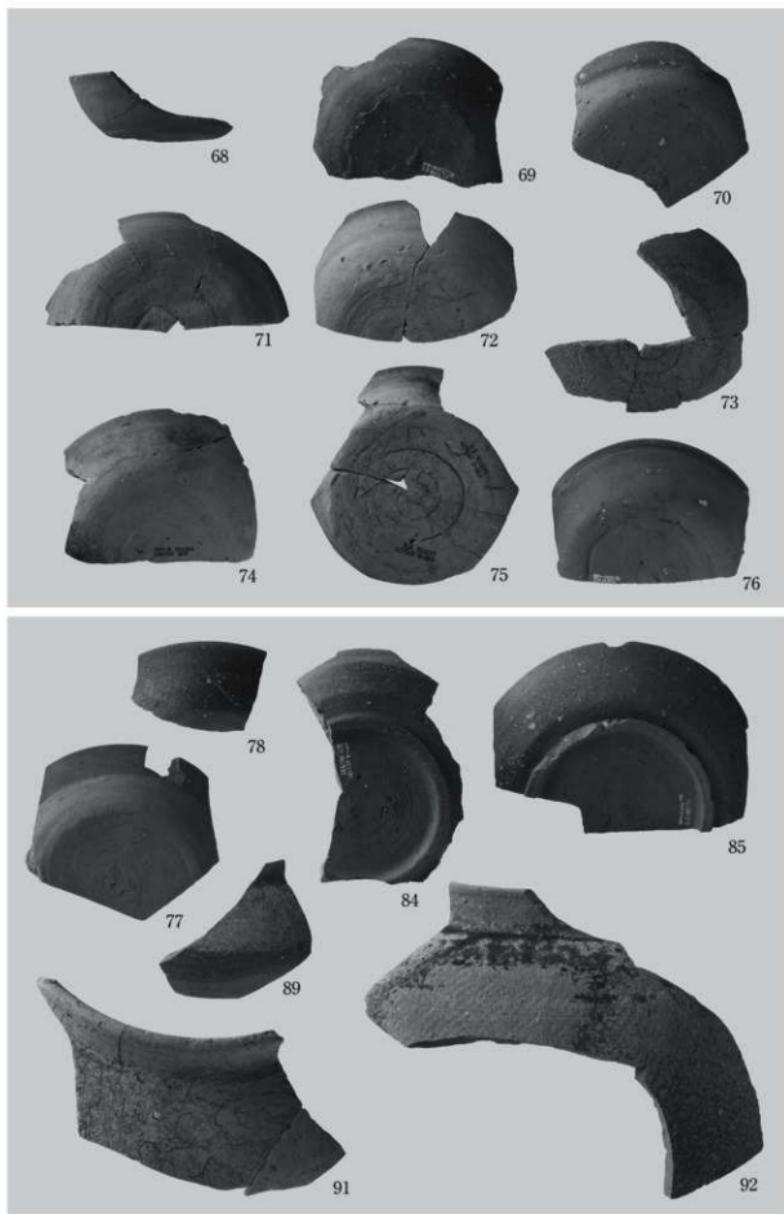
水牧遺跡 土器・土製品（古墳時代・古代）

SK 4 SD 2 包含層



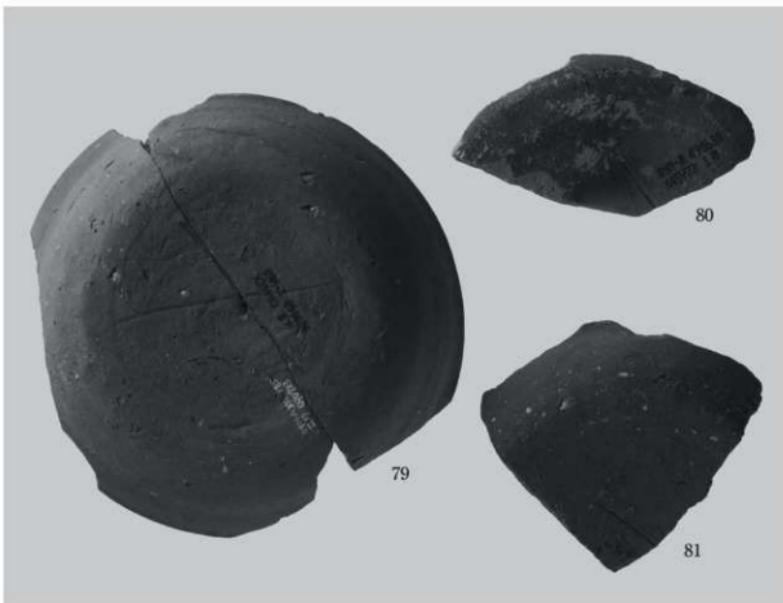
水牧遺跡 土器（古代）

包含層



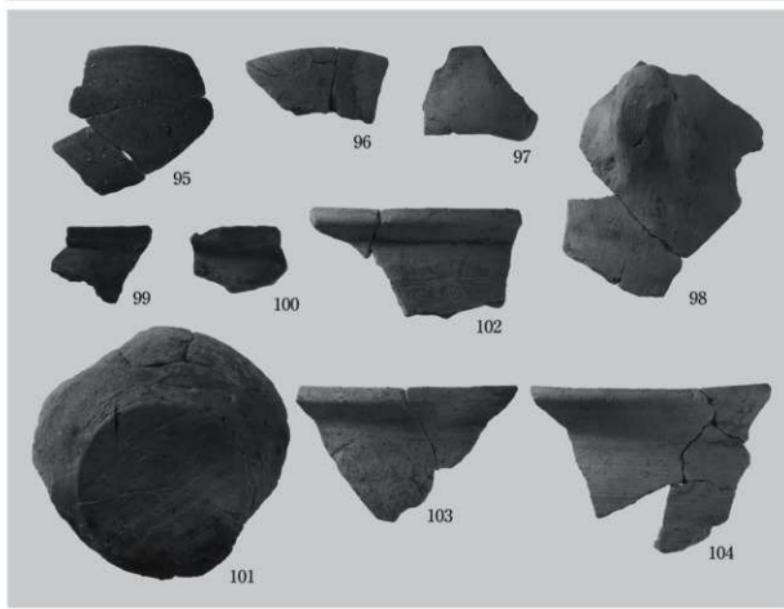
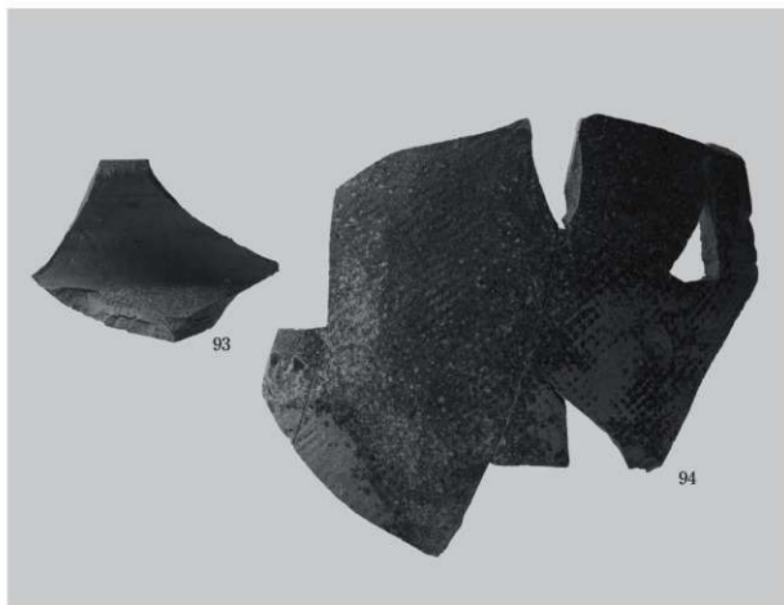
水牧遺跡 土器（古代）

包含層



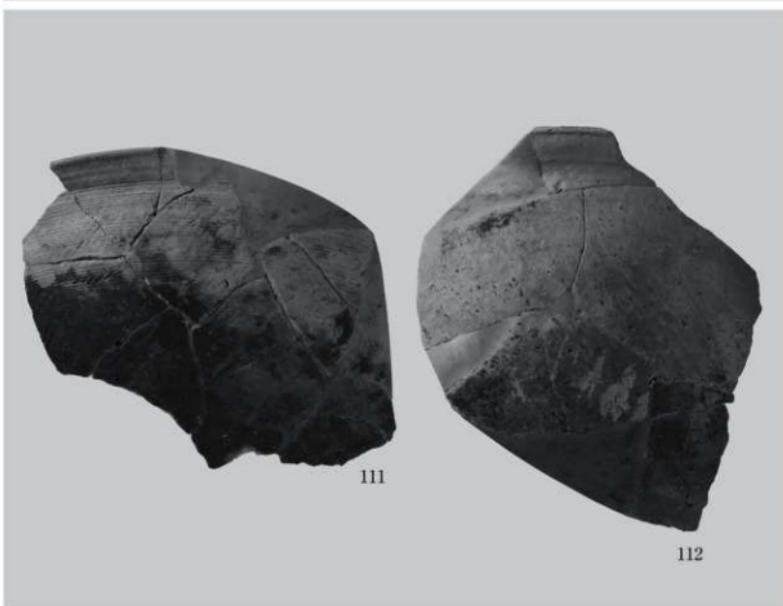
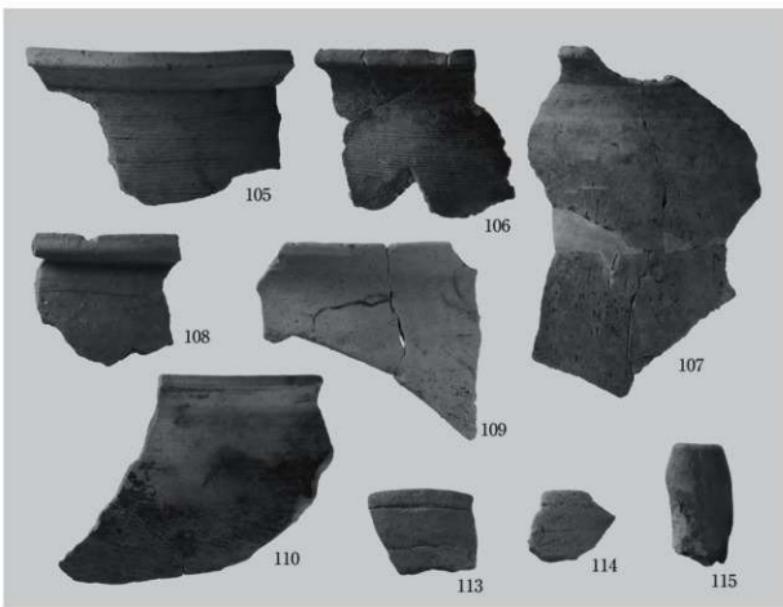
水牧遺跡 土器（古代）

包含層



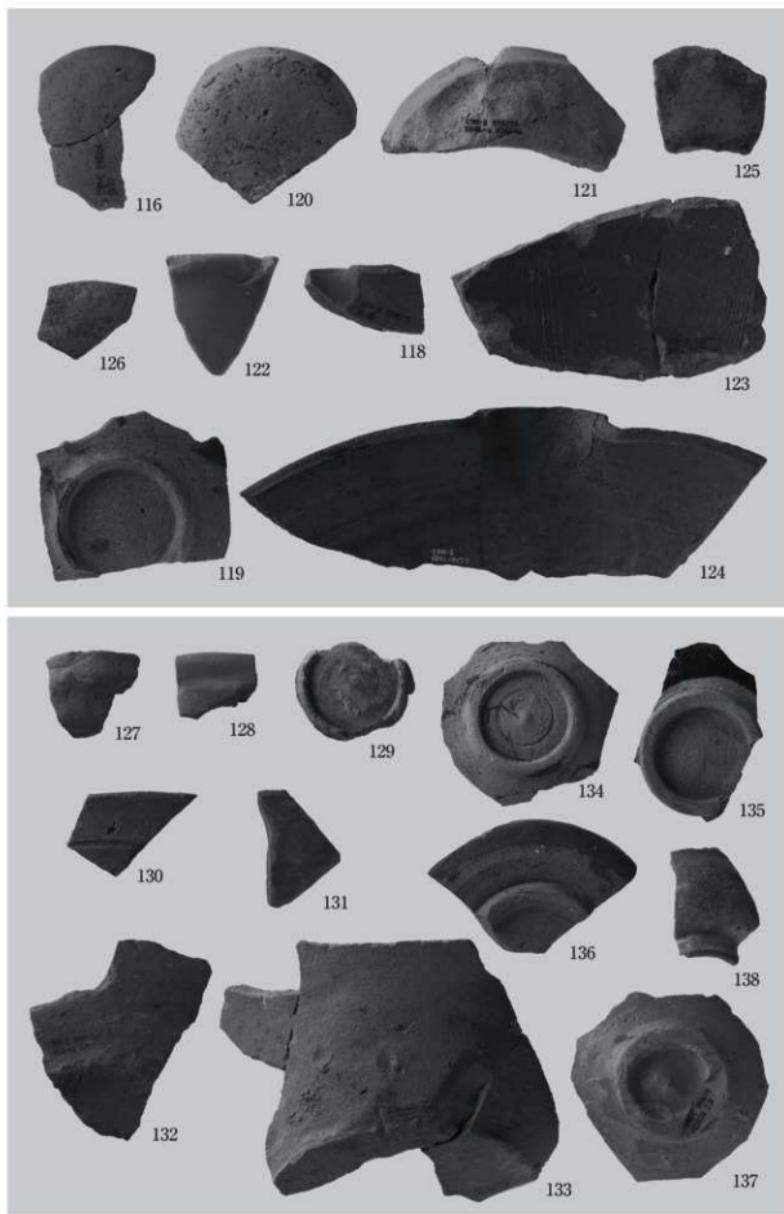
水牧遺跡 土器（古代）

包含層



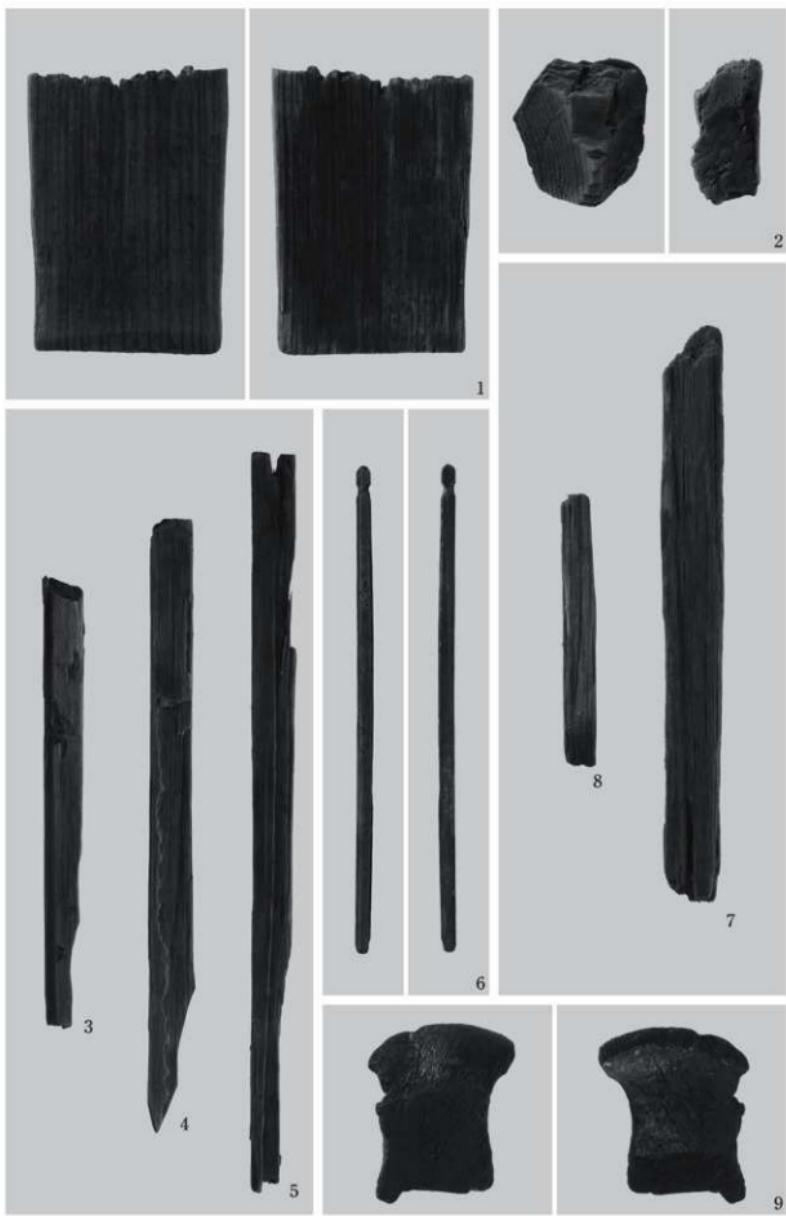
水牧遺跡 土器・土製品（古代）  
包含層

图版 50



水牧遺跡 土器・陶磁器（中近世）

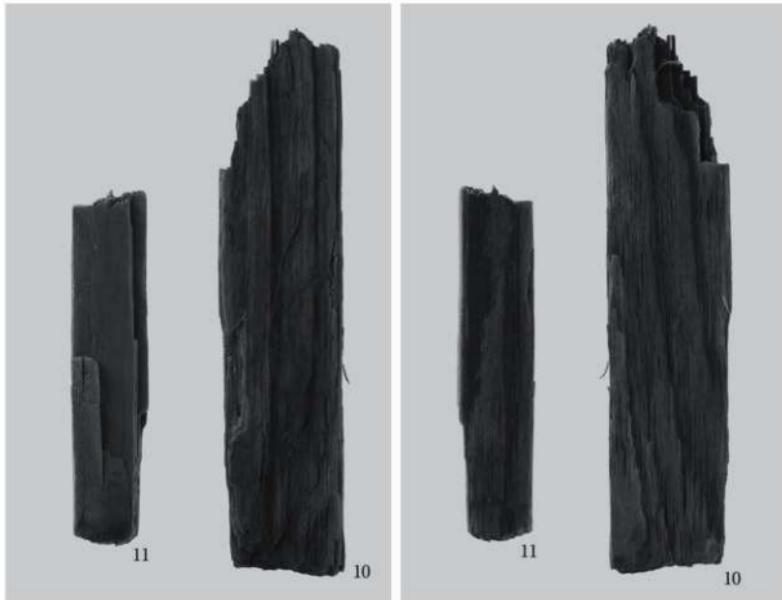
SK11 SD8 SD11 SD13~SD15 SX1 包含層



水牧遺跡 木製品（中世）

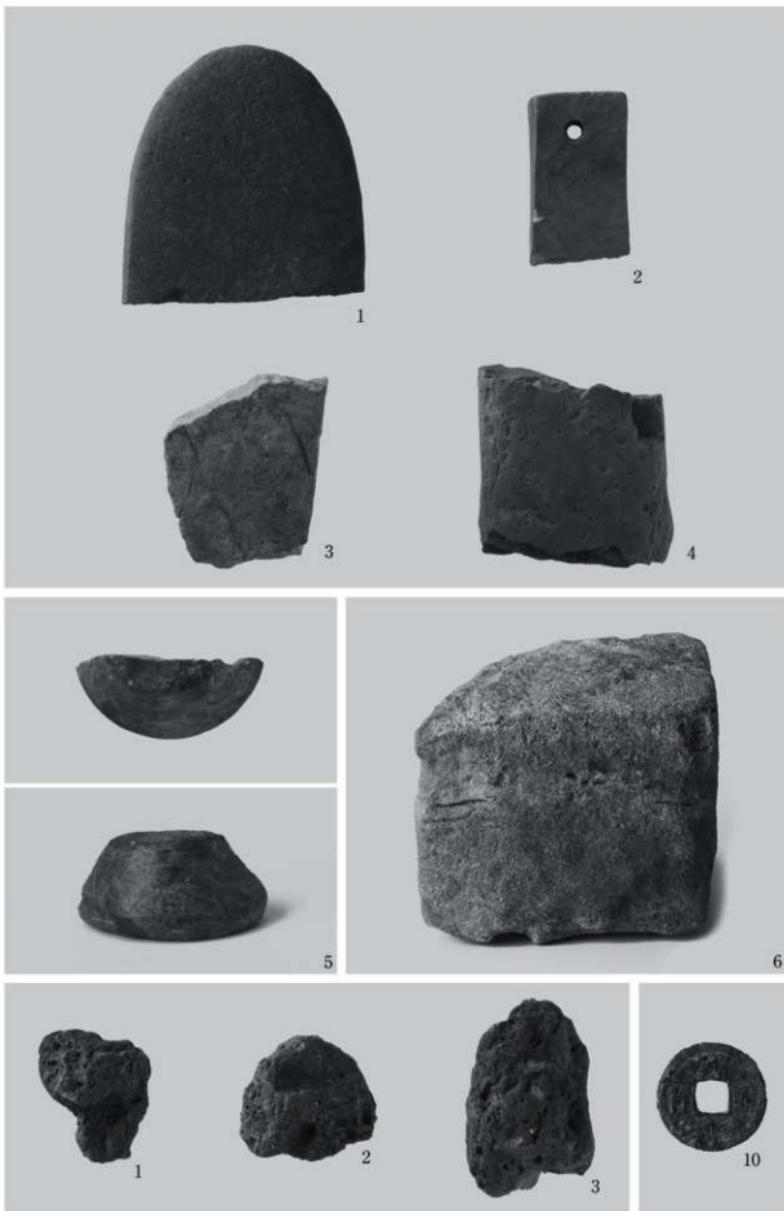
SK9 SK10 SD13 SD14 SD16

図版 52



水牧遺跡 木製品（中近世）

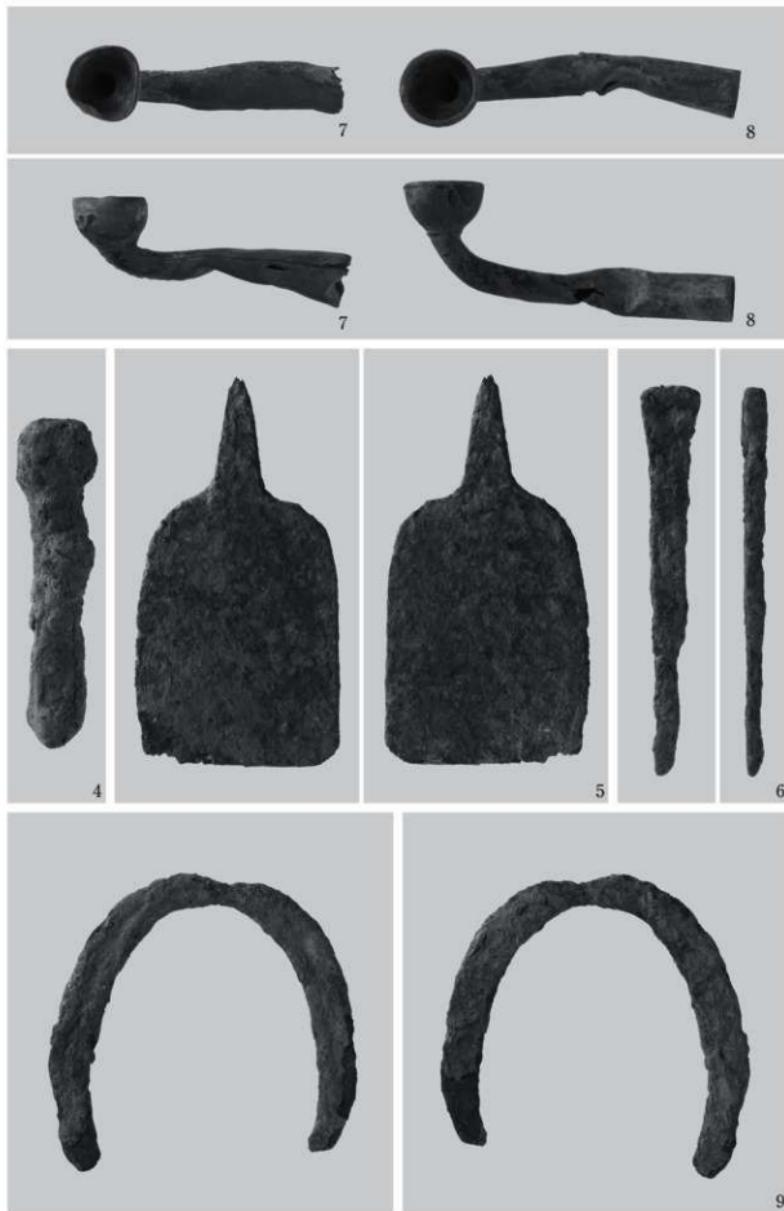
包含層



水牧遺跡 石製品・金属製品（古墳時代～近世）

SI1 SD13 SD15 包含層

図版 54



水牧遺跡 金属製品（中近世～近代）

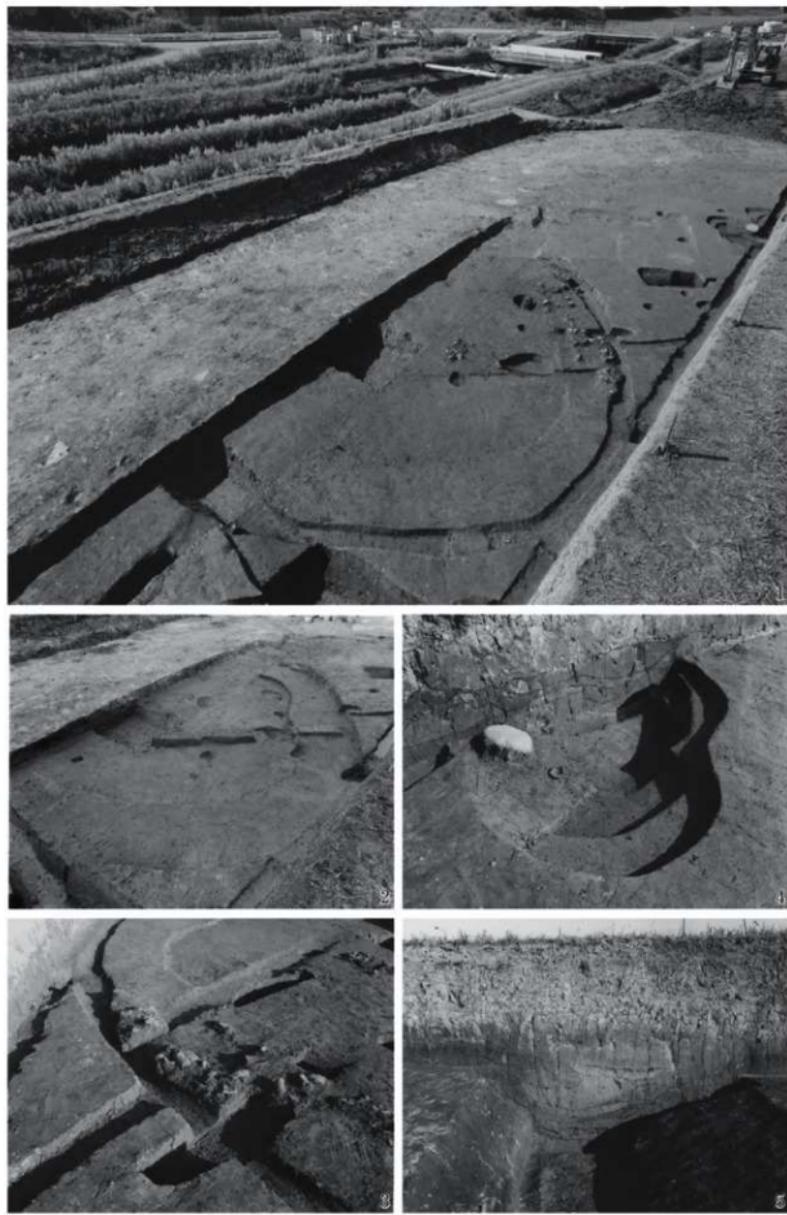
包含層



下川原遺跡（弥生時代・古墳時代）

1. B地区遠景(東から) 2. B地区全景(真上から)

図版 56



下川原遺跡（弥生時代・古墳時代）

1. SI 1 (東から) 2. SI 1 (東から) 3. SI 1 遺物出土状況(北西から) 4. SK 4 (南西から) 5. SD 1 断面(西から)



下川原遺跡（古代）

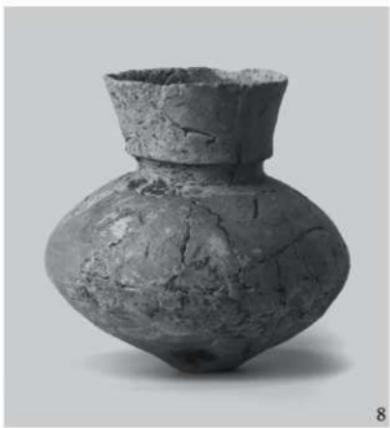
1. A地区遠景(北西から) 2. A地区全景(南東から)

図版 58



下川原遺跡（古代）

1. SB1(北から) 2. SP9(南から) 3. SD9(南から) 4. SD9 遺物出土状況(東から) 5. SD10(西から)



8

30



49



56



57

78

下川原遺跡 土器（弥生時代・古墳時代）

SI1 包含層



69



126



92



124



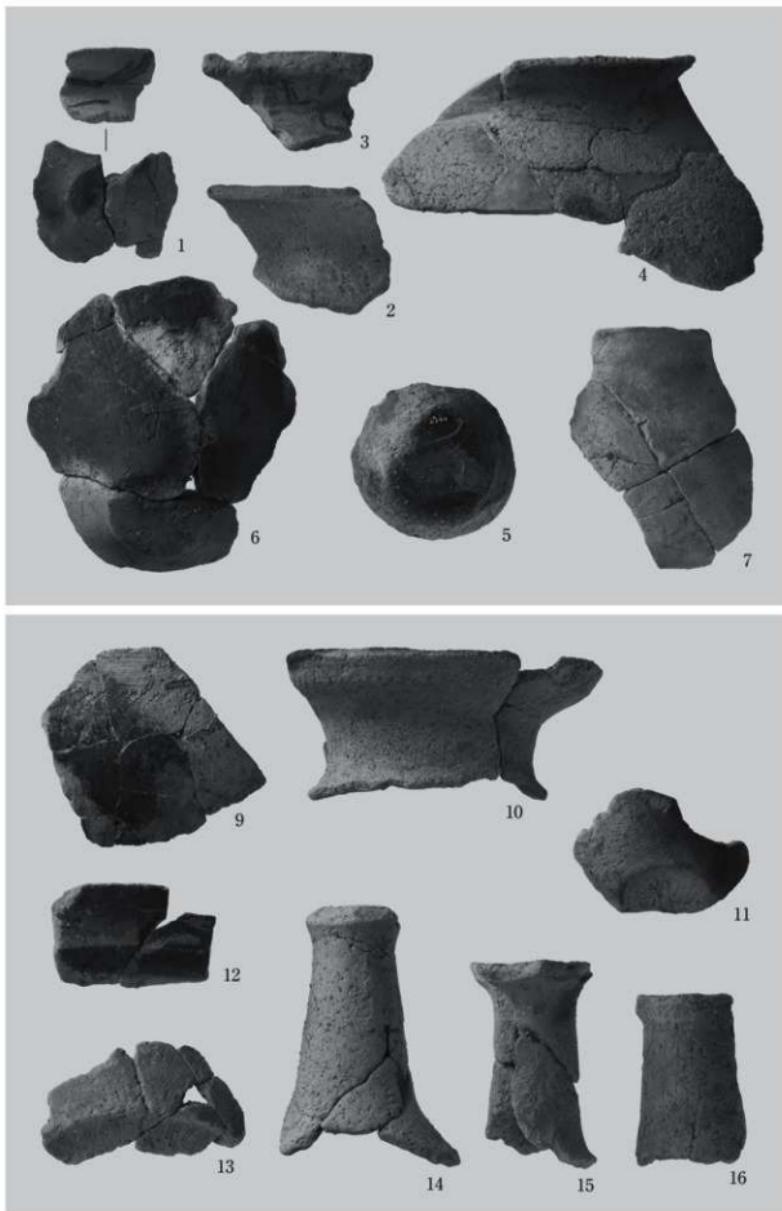
93



114



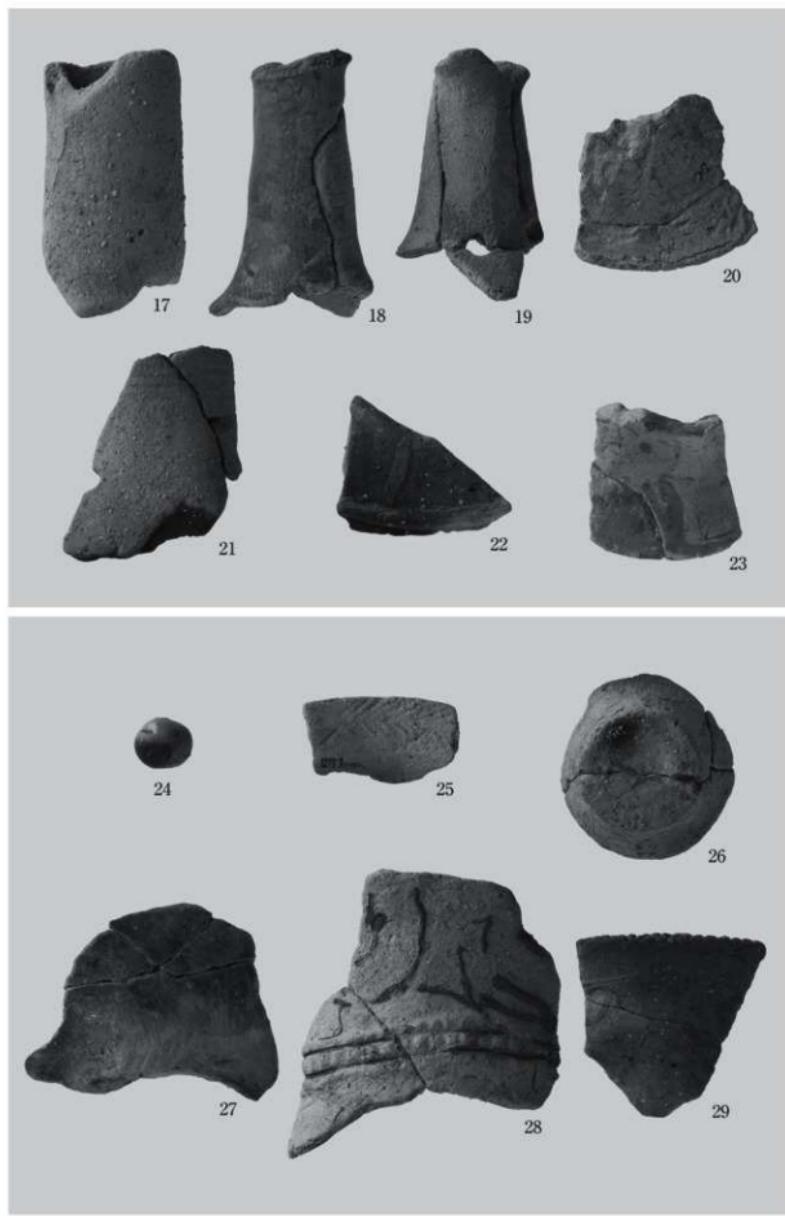
159



下川原遺跡 土器（弥生時代）

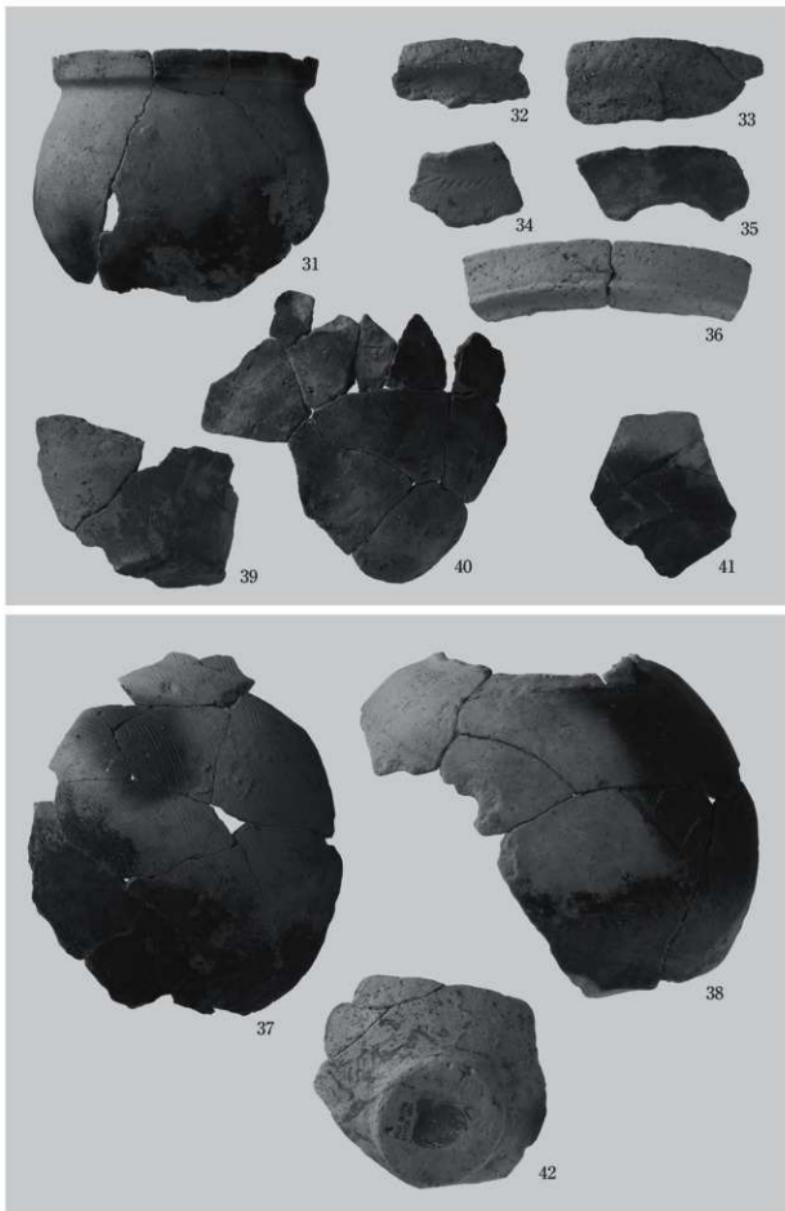
SI 1

図版 62



下川原遺跡 土器・土製品（弥生時代）

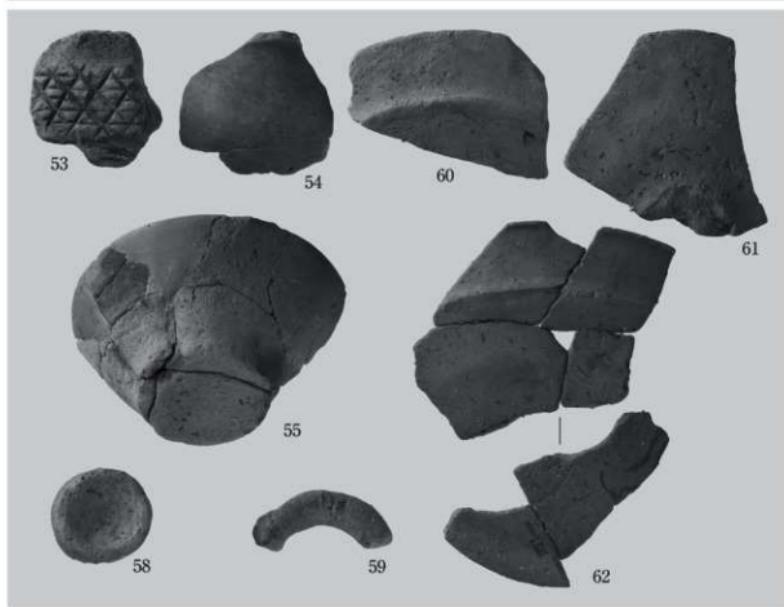
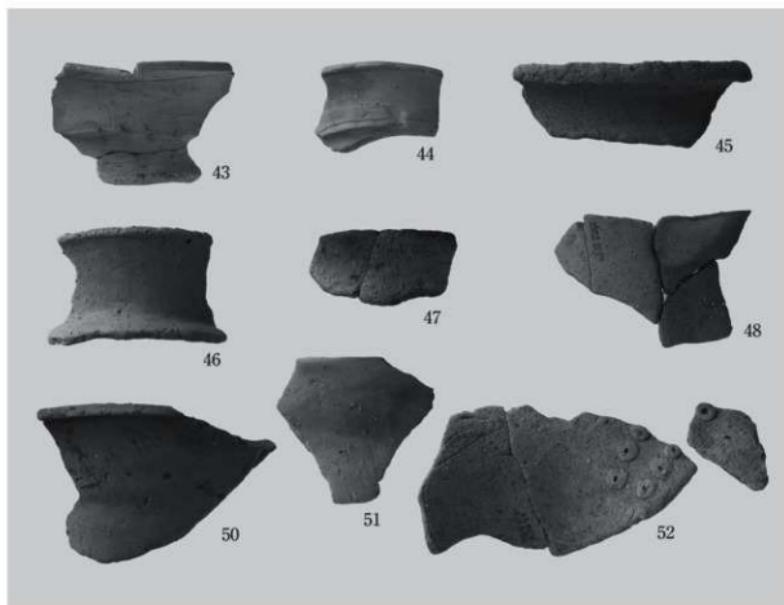
SI 1 SK 4 SK 5 SD 3



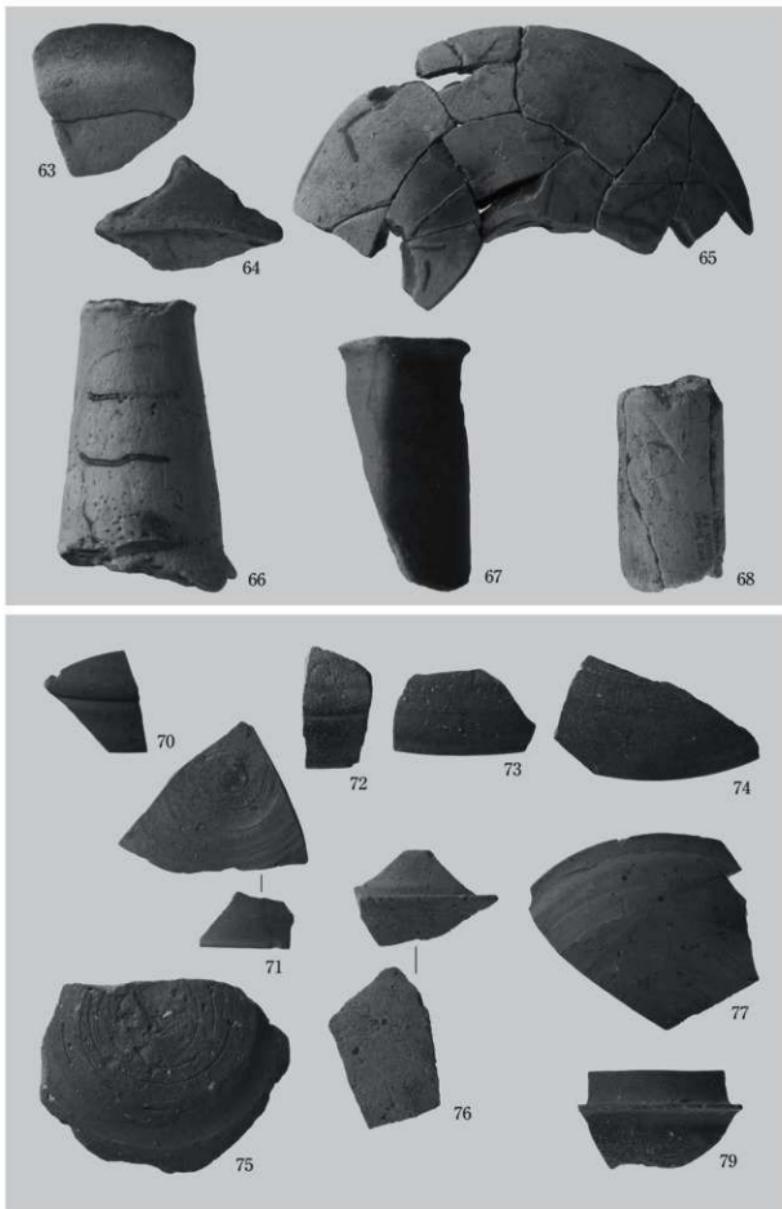
下川原遺跡 土器（弥生時代）

包含層

図版 64



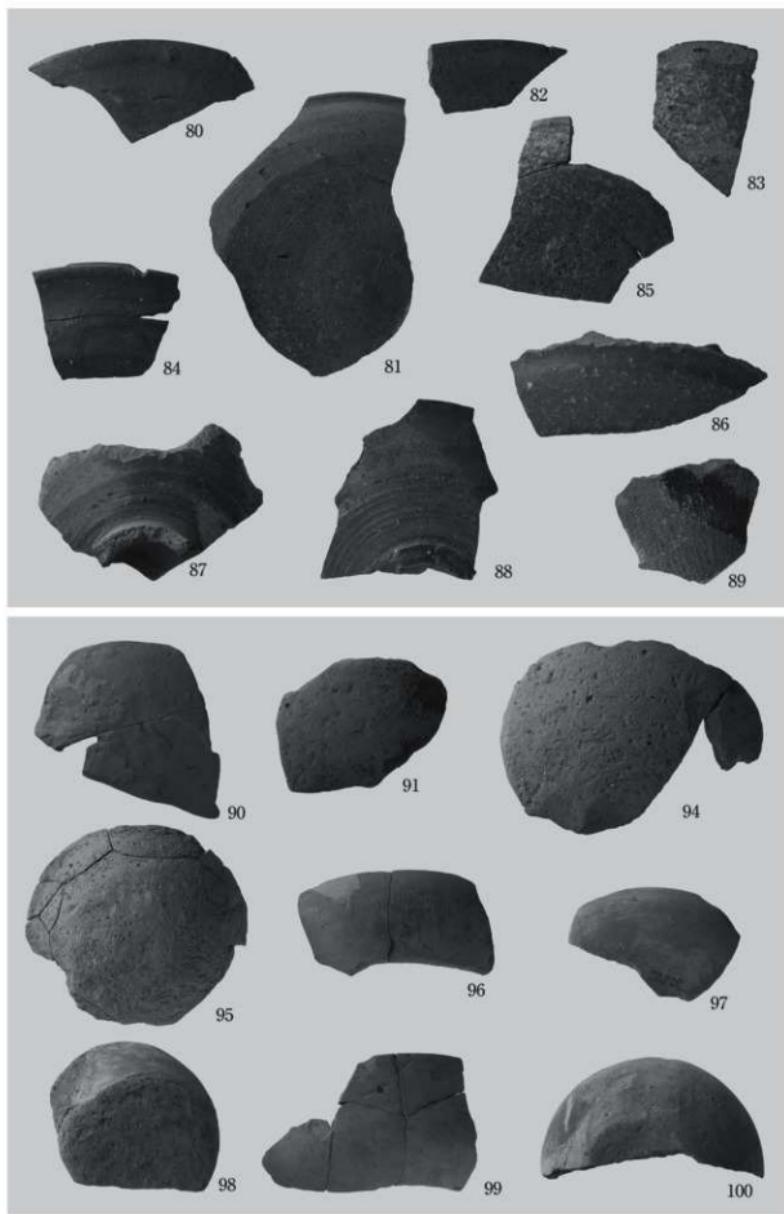
下川原遺跡 土器（弥生時代）  
包含層



下川原遺跡 土器（弥生時代・古墳時代）

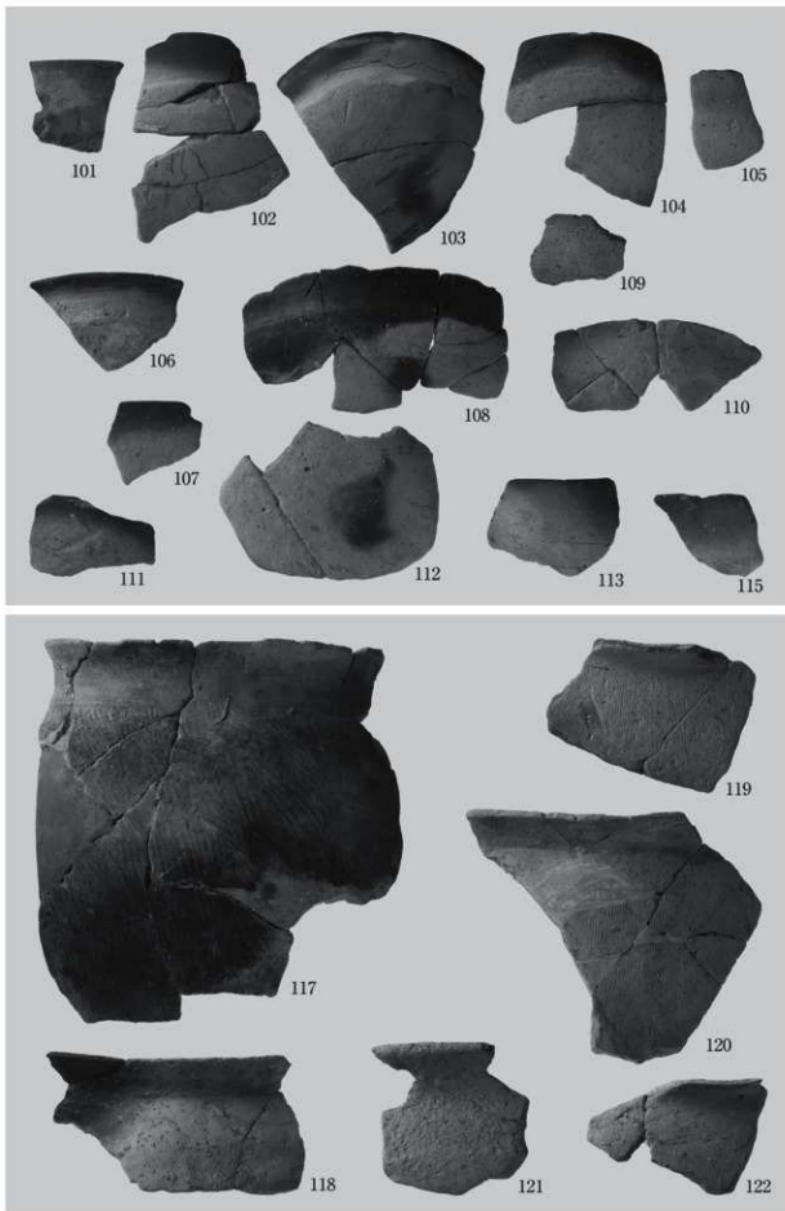
包含層

図版 66



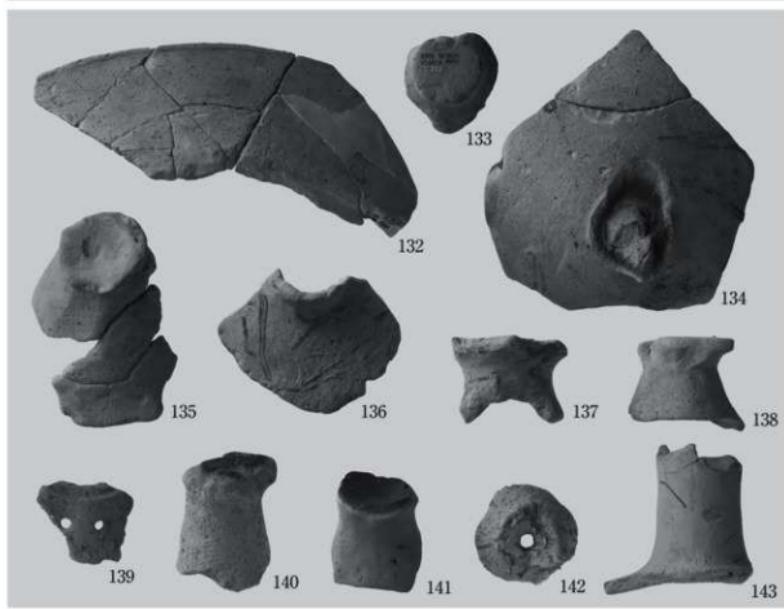
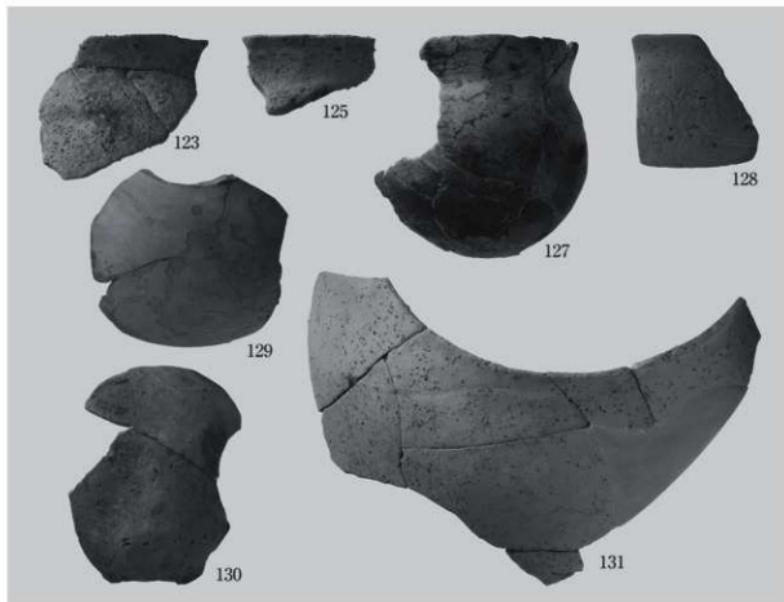
下川原遺跡 土器（古墳時代・古代）

包含層



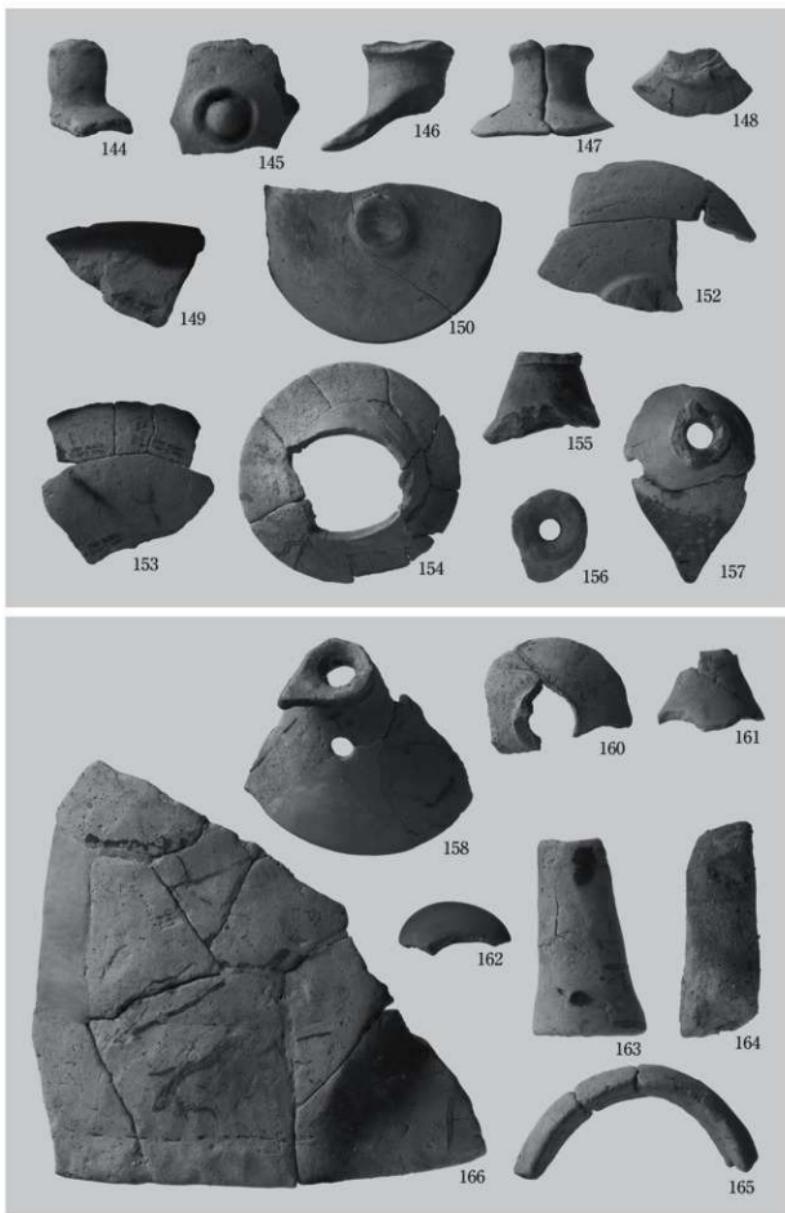
下川原遺跡 土器（古墳時代）

包含層



下川原遺跡 土器（古墳時代）

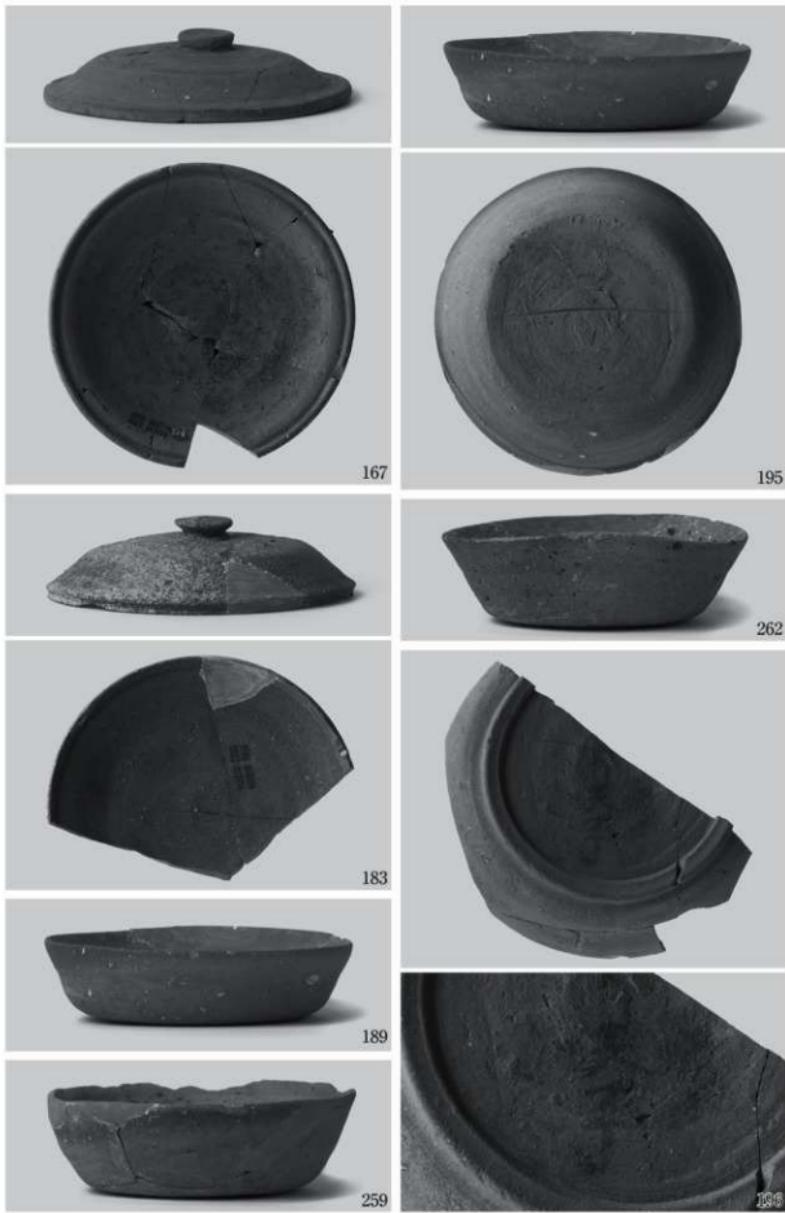
包含層



下川原遺跡 土器・土製品（弥生時代・古墳時代・古代）

包含層

図版 70



下川原遺跡 土器（古代）

SD9 SD10 包含層



下川原遺跡 土器（古代）

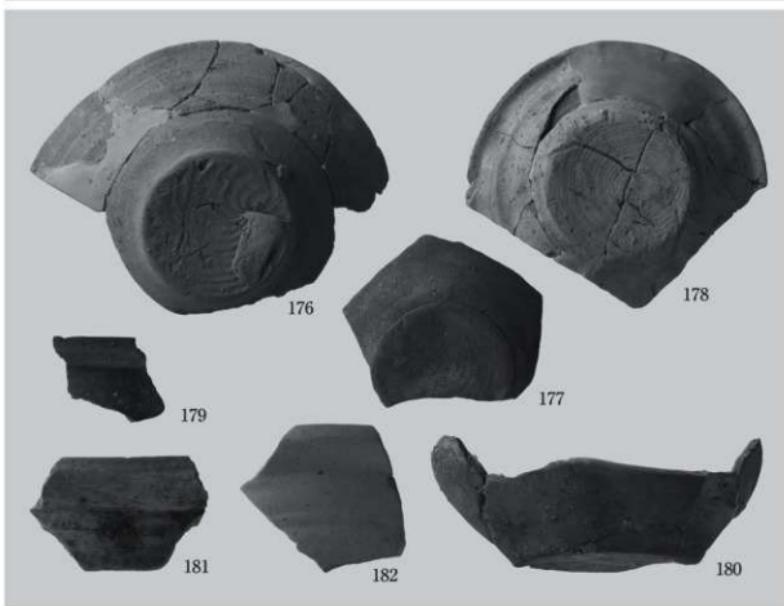
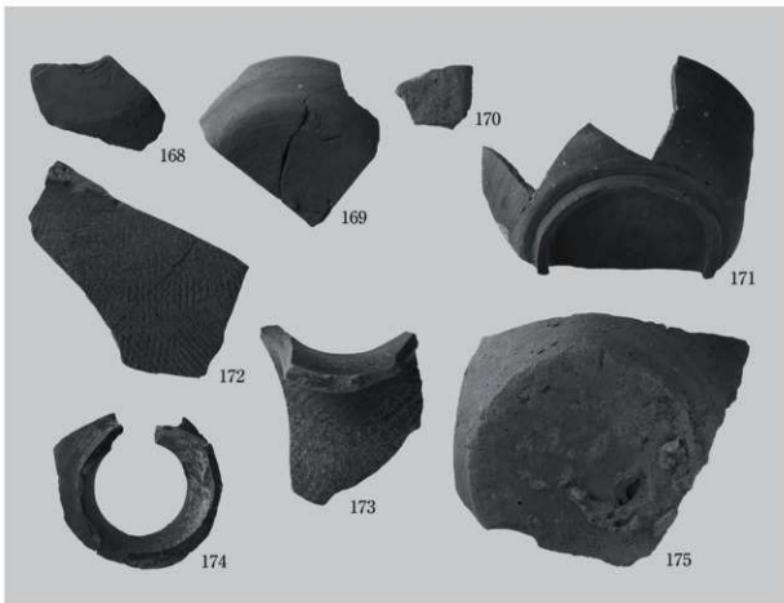
SD10(187- 218) 包含層

図版 72



下川原遺跡 土器（古代）

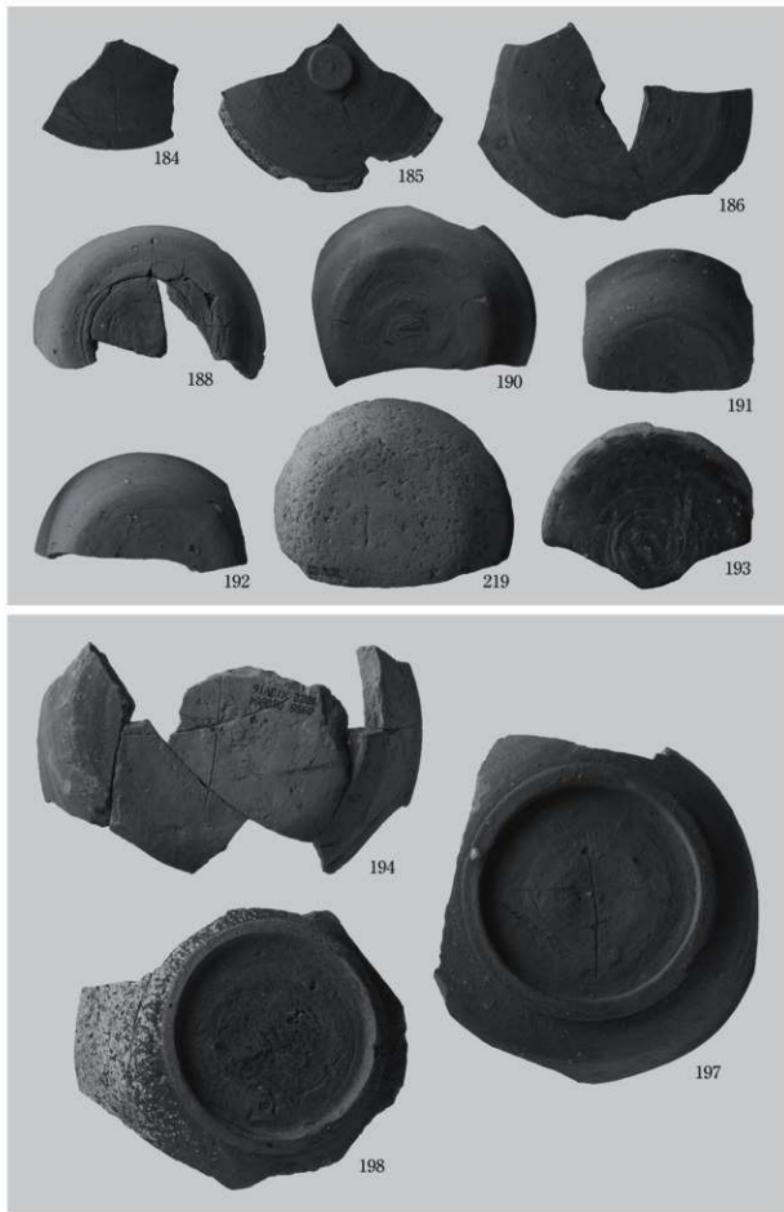
SD10(222・232・234・235・239) 包含層



下川原遺跡 土器（古代）

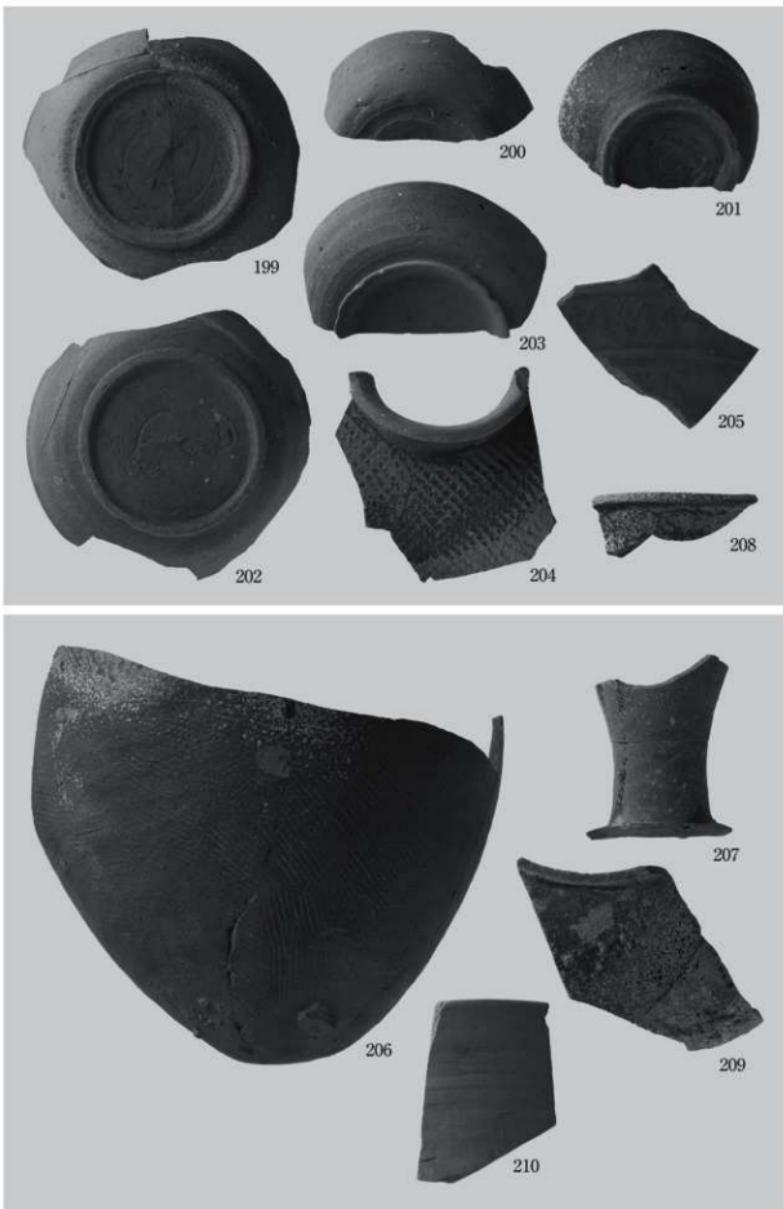
SD 9

図版 74



下川原遺跡 土器（古代）

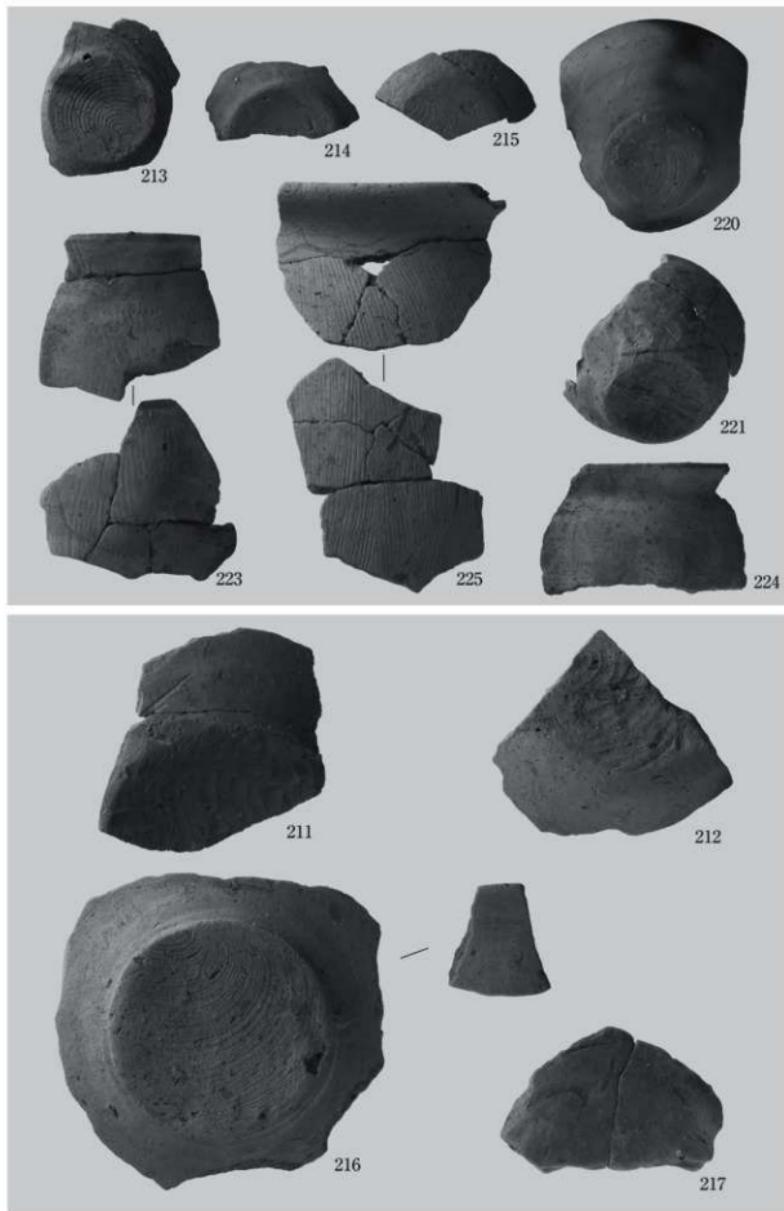
SD10



下川原遺跡 土器（古墳時代・古代）

SD10

図版 76



下川原遺跡 土器（古代）

SD10



226

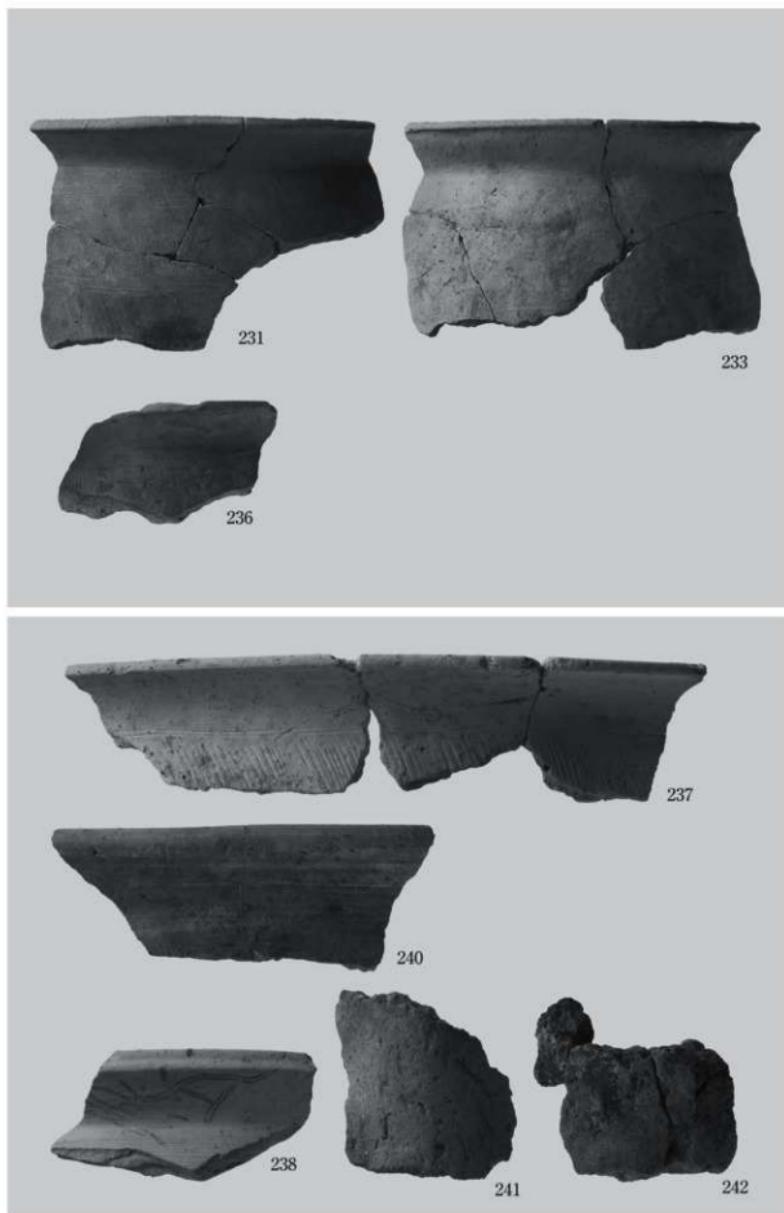
227

228



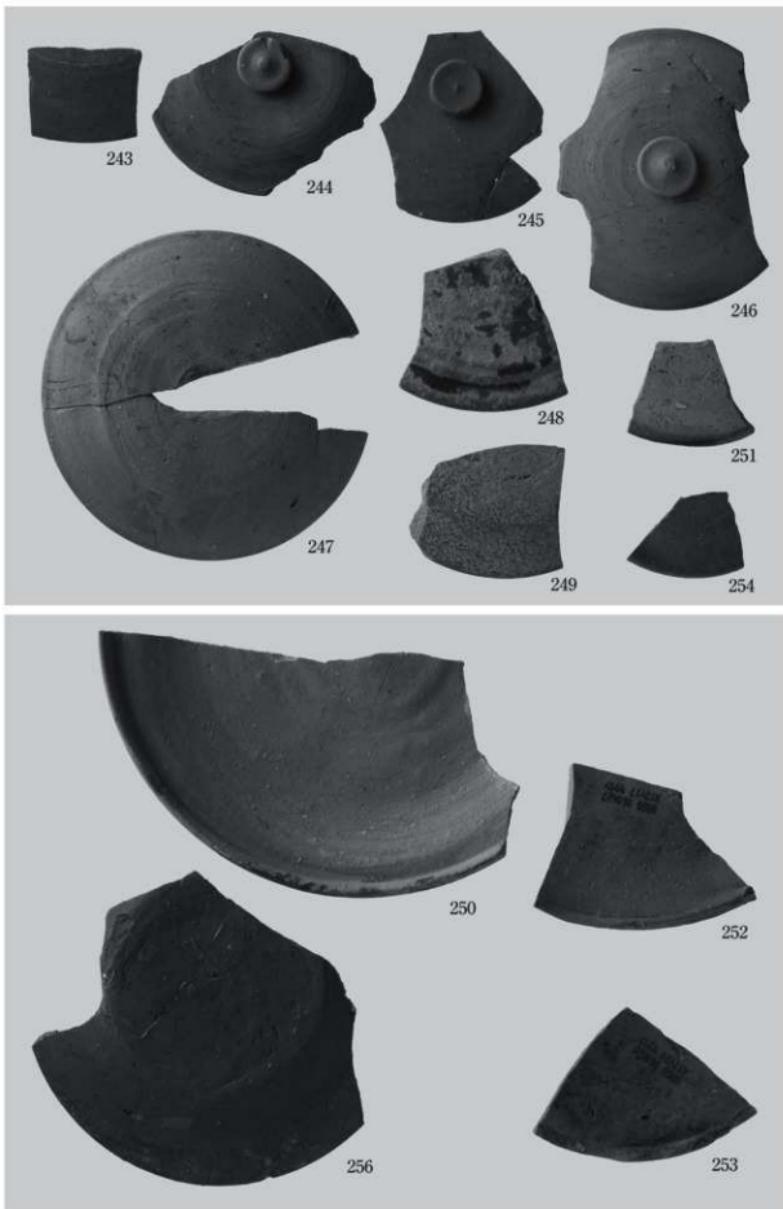
229

230



下川原遺跡 土器・土製品（古代）

SD10



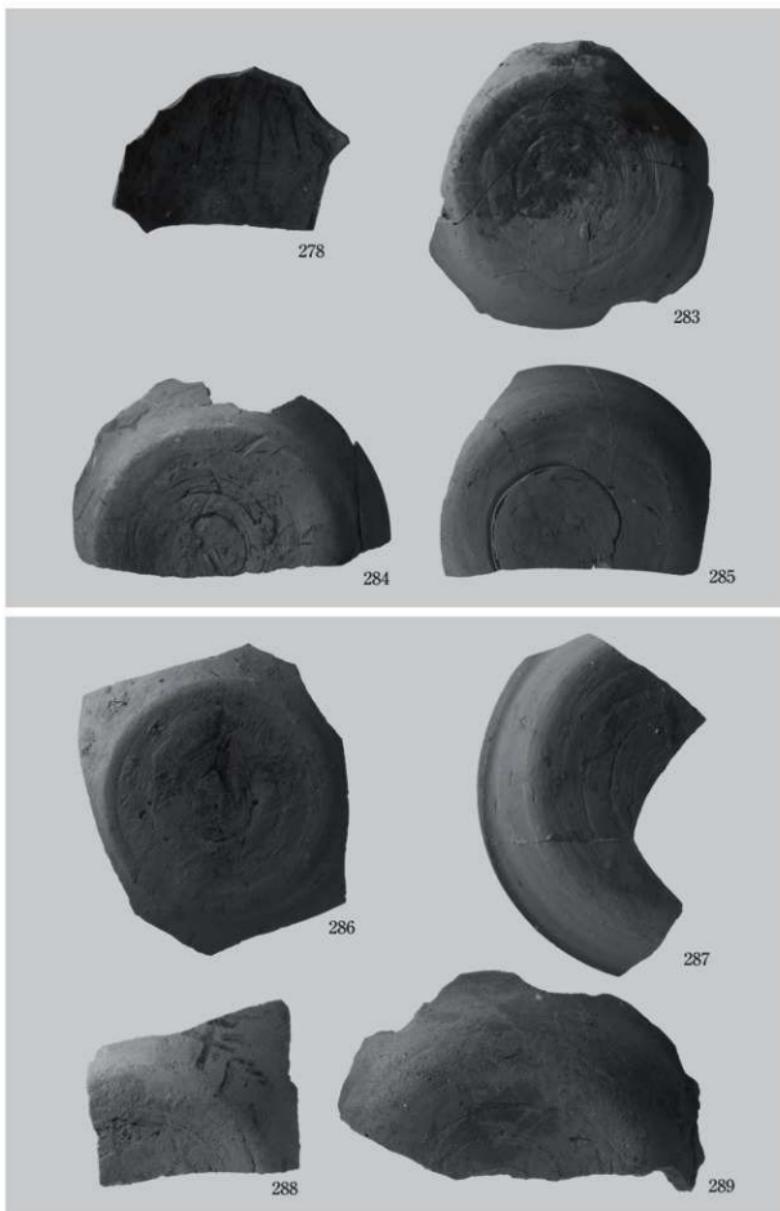
下川原遺跡 土器（古代）

包含層



下川原遺跡 土器（古代）

包含層



下川原遺跡 土器（古代）

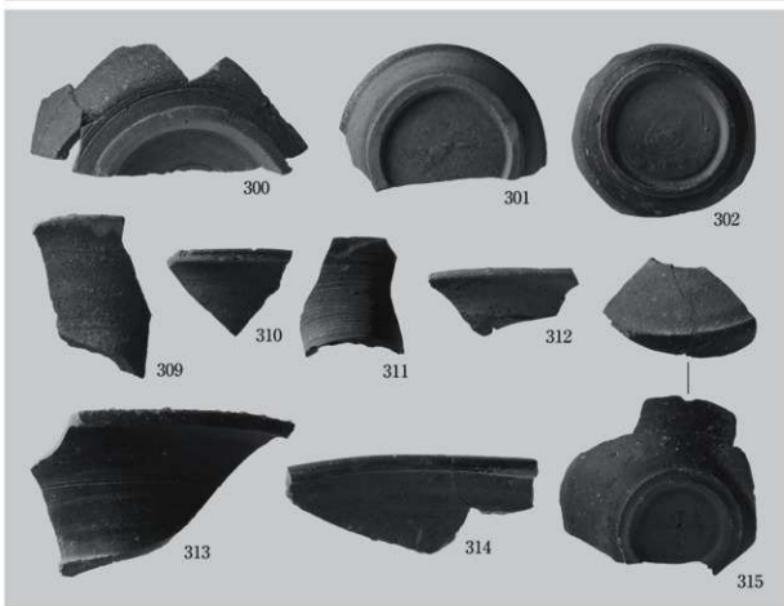
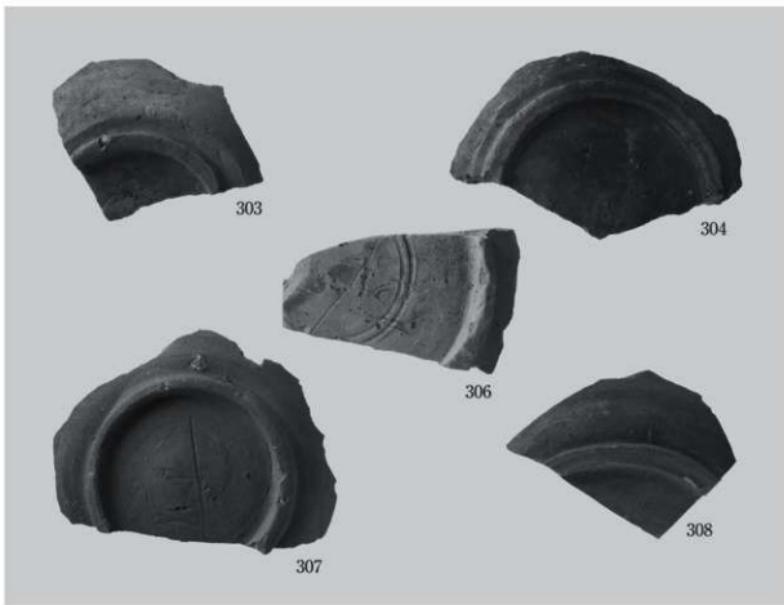
包含層

図版 82



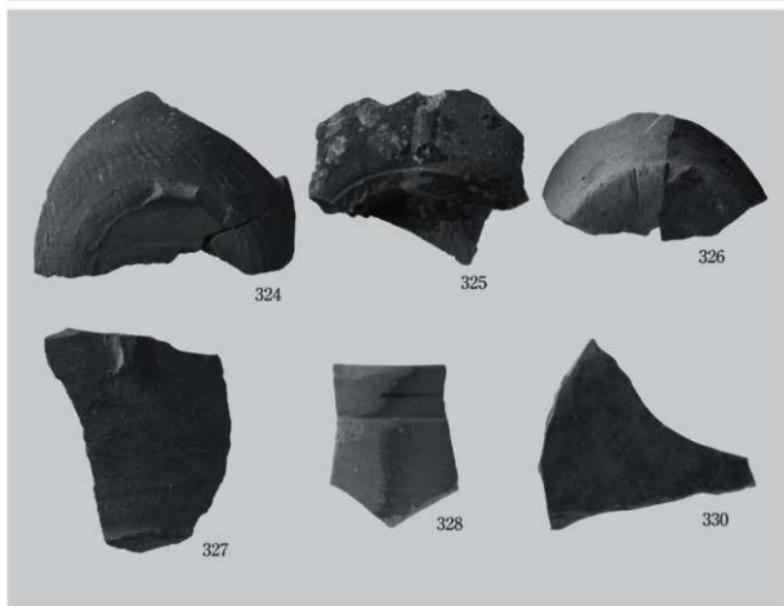
下川原遺跡 土器（古代）

包含層



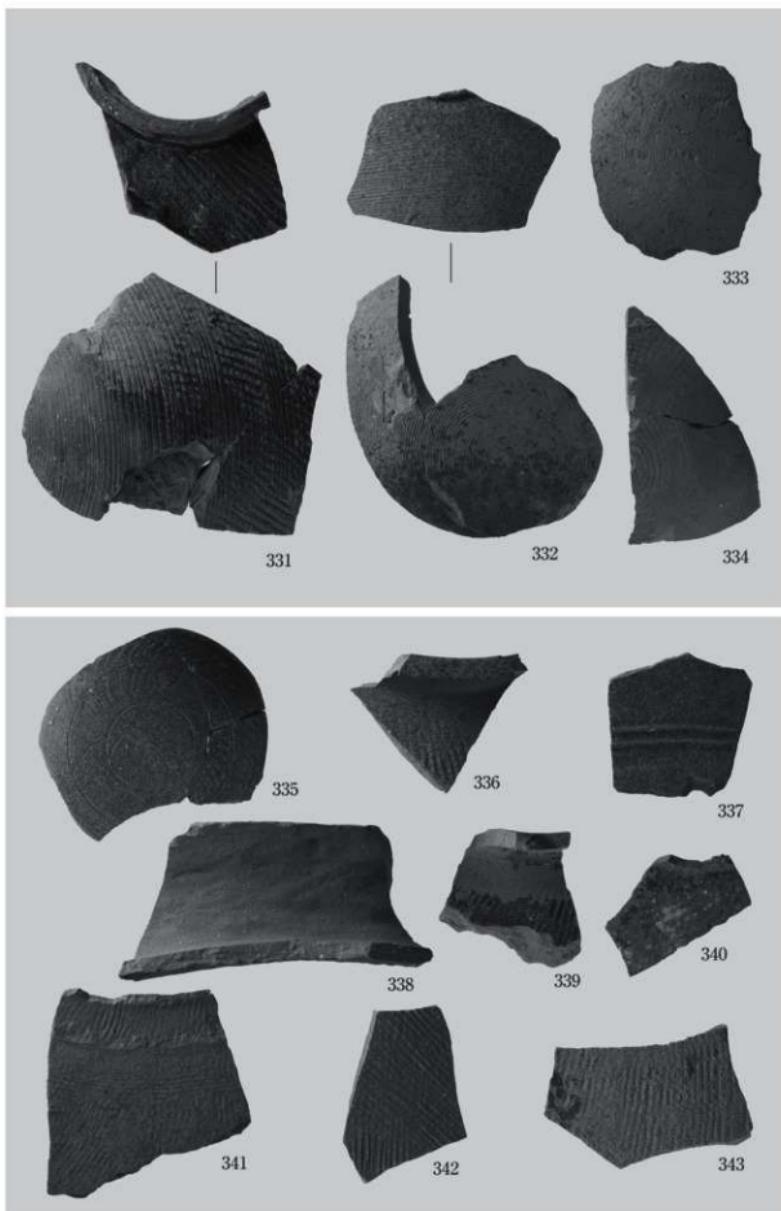
下川原遺跡 土器（古代）

包含層

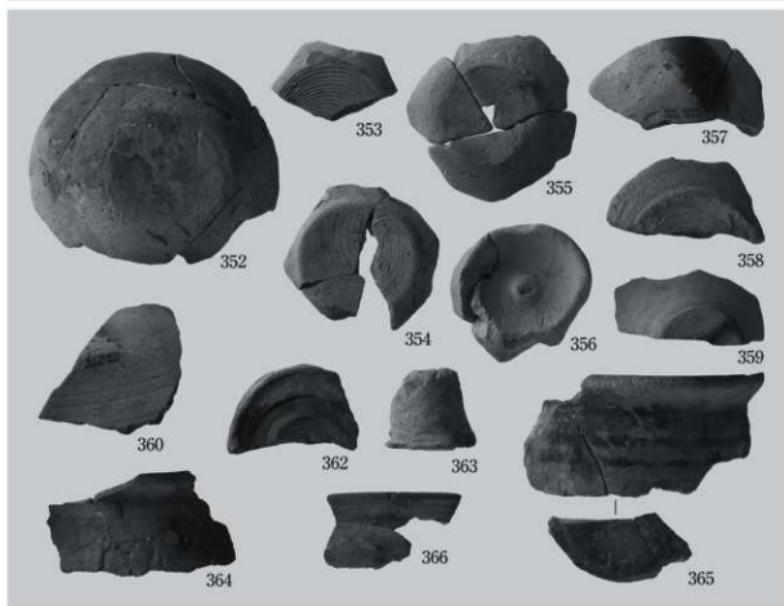


下川原遺跡 土器（古代）

包含層

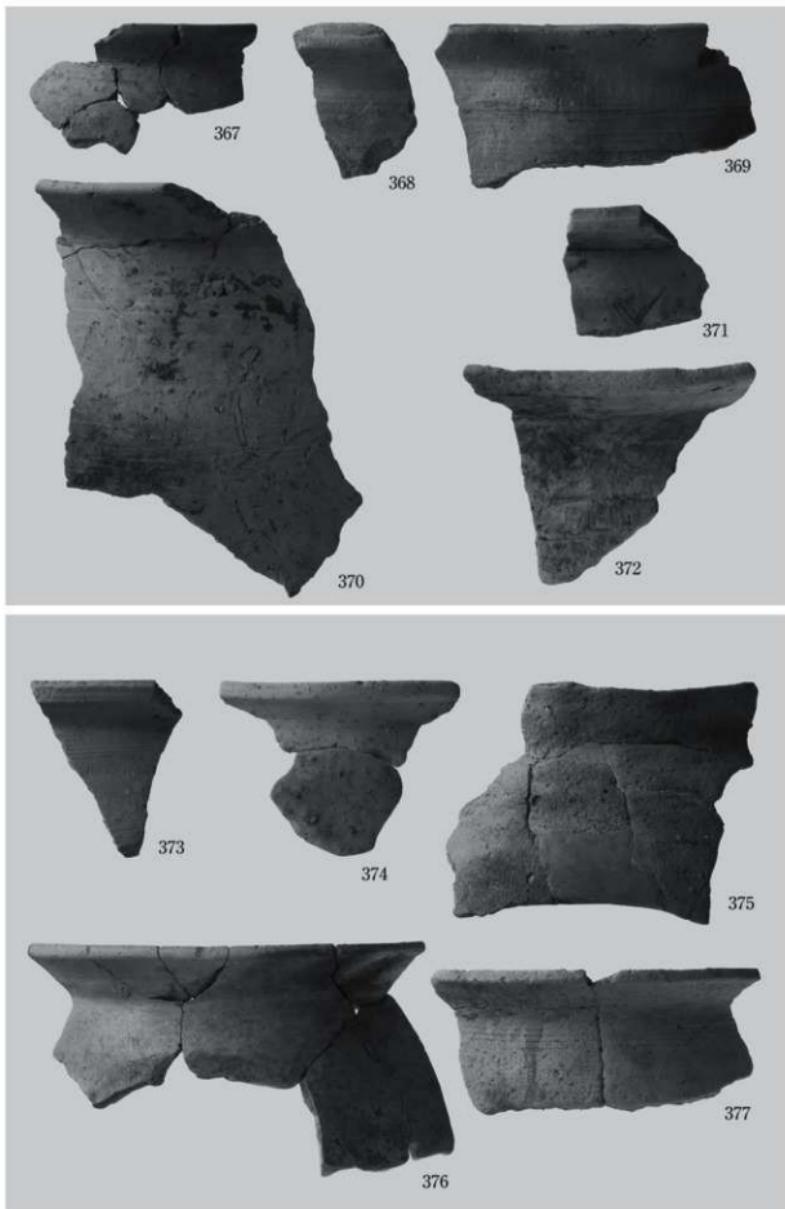


下川原遺跡 土器（古墳時代・古代）  
包含層



下川原遺跡 土器（古代）

包含層



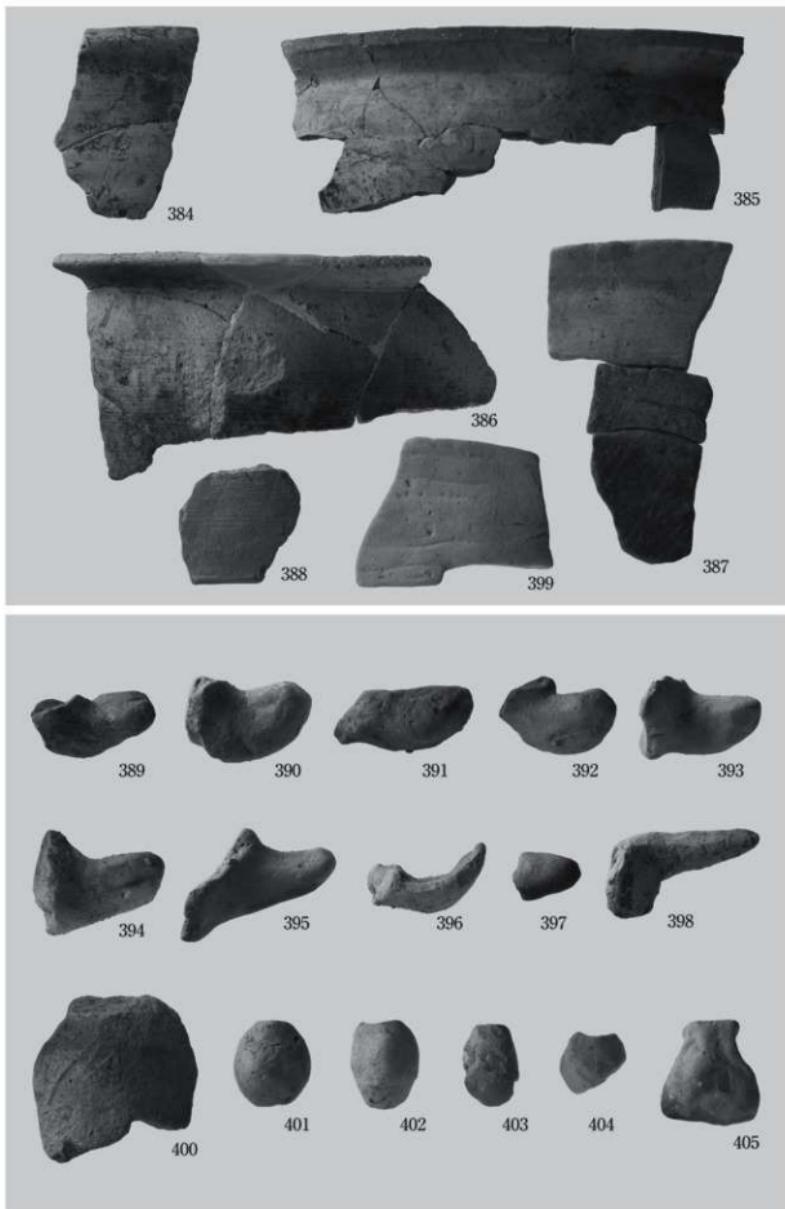
下川原遺跡 土器（古代）

包含層



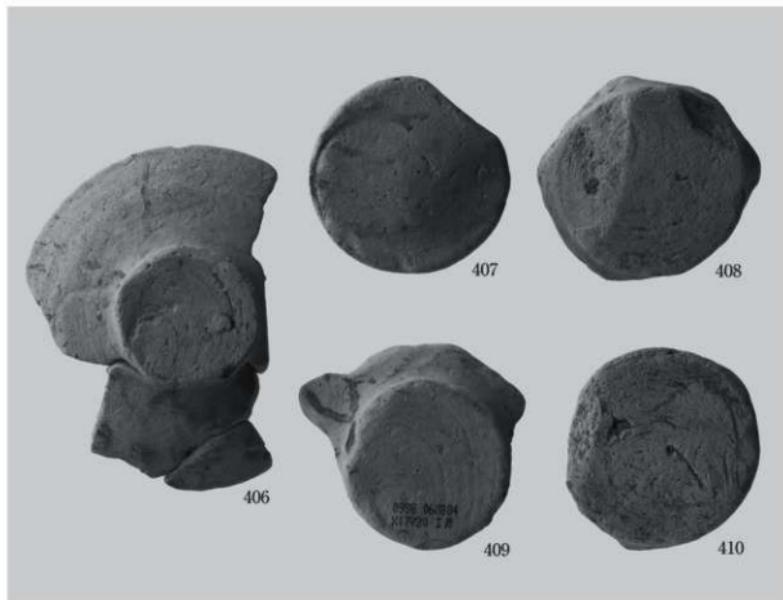
下川原遺跡 土器（古代）

包含層



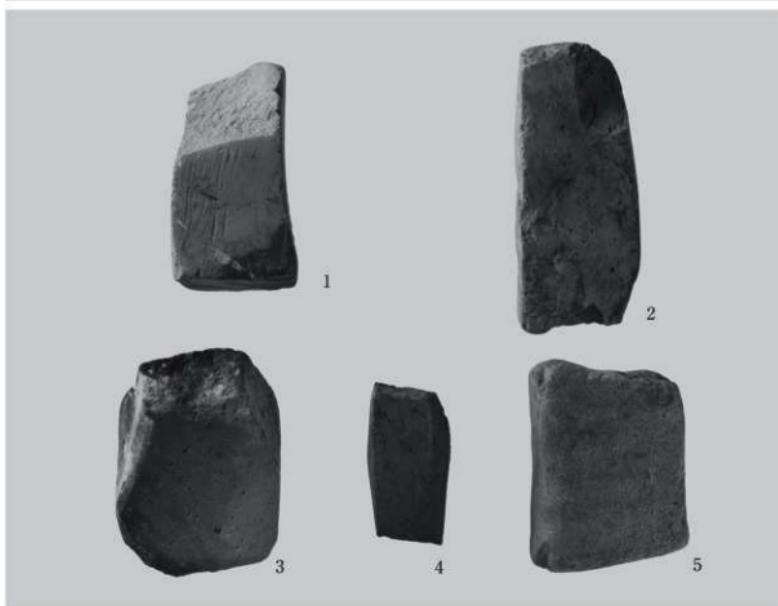
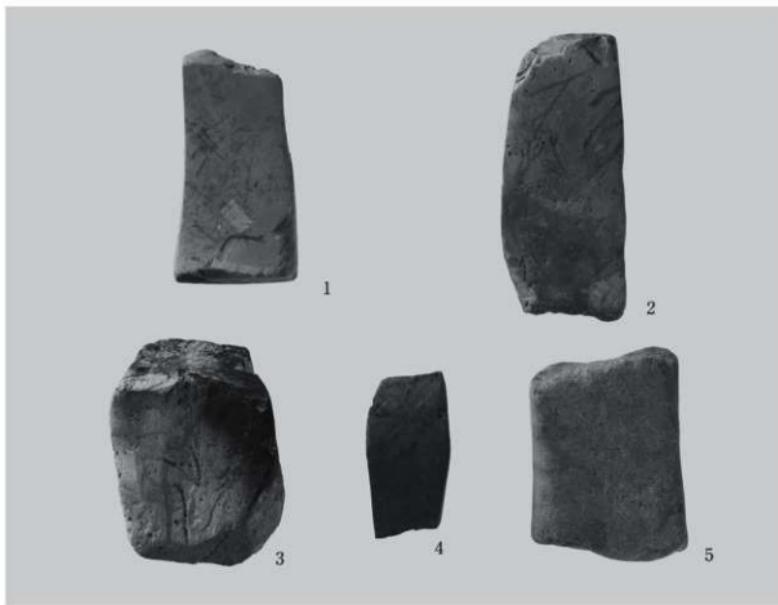
下川原遺跡 土器・土製品（古墳時代・古代）  
包含層

図版 90



下川原遺跡 土器・石製品（弥生時代～中世）

包含層



下川原遺跡 石製品（弥生時代～中世）

SD9 SD10 包含層



## 報告書抄録

ふりがな	かいはつおおたきいせき・ごしゃいせき・ごしゃじょうりいせき・みずまきいせき・しもがわらいせきはつくつちょうさはうこく						
書名	開跡大淹遺跡・五社遺跡・五社条里遺跡・水牧遺跡・下川原遺跡発掘調査報告						
副書名	北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅲ						
シリーズ名	富山県文化振興財団理蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第49集						
編著者名	青山晃、島田亮仁、郷辻真澄						
編集機関	財團法人富山県文化振興財団理蔵文化財調査事務所						
所在地	〒930-0887 富山県富山市五福4384番1号 TEL 076-442-4229						
発行年月日	西暦2012年2月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° ° 36度 41分 13秒	東経 ° ° ° 136度 55分 34秒	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
開跡大淹	小矢部市 五社	16209 209195	36度 41分 13秒	136度 55分 34秒	20090714~ 20090917	2,157	北陸新幹線 建設に伴う 事前調査
五社	小矢部市 五社	16209 209170	36度 40分 58秒	136度 54分 58秒	20090707~ 20091120	4,132	
五社条里	小矢部市 五社	16209 209183	36度 40分 53秒	136度 55分 10秒	20090427~ 0090623	5,338	
水牧	小矢部市 水牧	16209 209203	36度 40分 20秒	136度 53分 32秒	20090603~ 20090904	4,539	
下川原	小矢部市 野端	16209 209036	36度 40分 16秒	136度 51分 33秒	20060524~ 20060804 20071001~ 20071031	1,791	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
開跡大淹	集落	中近世	溝10条、土坑2基	須恵器、中世土師器、越前、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、唐津、陶器、木製品			
五社遺跡	集落	古墳時代・飛鳥時代	掘立柱建物3棟、堅穴建物1棟、溝3条、土坑46基、環状溝遺構1基	土師器、須恵器、黑色土器、石製品	7世紀前半の集落跡		
		平安時代	溝4条、土坑27基	土師器、須恵器、黑色土器、製陶器、土製品、石製品、金属製品	10世紀から11世紀の集落跡		
		中近世	溝5条、土坑2基	中世土師器、珠洲、越前、越中瀬戸、唐津、伊万里、木製品、石製品、金属製品			
五社条里遺跡	条里	近世	溝73条、土坑26基	土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、中国製白磁、中国製青磁、瓦質土器、越中瀬戸、唐津、近世陶磁器、金屬製品、石製品	近世の小溝群を確認		
水牧遺跡	集落	古代	堅穴建物5棟、溝7条、土坑10基	土師器、須恵器、黑色土器、製陶器、土製品	7世紀後半の集落跡		
		中近世	溝25条、土坑98基。水溜め状遺構1基	中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、中国製青磁、越中瀬戸、伊万里、唐津、近世陶磁器、木製品、石製品、金属製品			
下川原遺跡	集落	弥生時代・古墳時代	堅穴建物1棟、溝4条、土坑21基	弥生土器、石製品	弥生時代終末期の堅穴建物を検出		
		古代	掘立柱建物1棟、溝7条、土坑10基	土師器、須恵器、黑色土器、墨書き土器、土製品、石製品	8世紀から9世紀の集落「天平」の墨書き土器出土		
要 約			小矢部川右岸の扇状地扇端部から西山丘陵にかけて、小矢部市を横断しつづつ遺跡の調査を行った。開跡大淹遺跡は、舟本城に開通する16世紀後半の城下町の縁辺部にあたり、自然流路などが確認された。五社遺跡では飛鳥時代の集落跡が確認されたことにより、古墳時代、飛鳥時代、古代前期、古代後期、中世、近世と各時期の集落が営まれていたことが判明した。五社条里遺跡は古代、中世までの栗のぼる条里遺構は確認されず、近世の耕作によって多く破壊された。水牧遺跡は7世紀後半を主体とする集落が確認された。下川原遺跡では弥生時代終末期の堅穴建物が検出された。また、古代の掘立柱建物が確認され、「天平」と墨書きされた土器が出土した。				

2012(平成24)年1月17日 印刷  
2012(平成24)年2月10日 発行

富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第49集

開館大滝遺跡

五社遺跡

五社条里遺跡 発掘調査報告

水牧遺跡

下川原遺跡

—北陸新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅲ—

編集・発行 財團法人富山県文化振興財団  
埋藏文化財調査事務所  
〒930-0887 富山市五福4384番1号  
TEL 076-442-4229

印 刷 北日本印刷株式会社  
〒930-2201 富山市草島134-10  
TEL 076-435-9224